

東京大学東アジア藝文書院2020年度報告書

のぞみを灯す

2020

The Annual Report of
East Asian Academy for New Liberal Arts



東京大学東アジア藝文書院2020年度報告書

のぞみを灯す

2020

The Annual Report of
East Asian Academy for New Liberal Arts



EAA

東京大学東アジア藝文書院
EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL ARTS, UTokyo

目次

ご挨拶	3
EAA オフィススタッフ座談会	4
歳時記	29
時系列INDEX	30
活動報告 春 (4月～6月)	35
活動報告 夏 (7月～9月)	91
活動報告 秋 (10月～12月)	149
活動報告 冬 (1月～3月)	261
資料編	329
2020年度EAA 開講科目リスト	330
2020年度「東アジア教養学」プログラム生リスト	331
2020年度EAAメンバーおよび連携教員リスト	333
EAA刊行物リスト	334
EAAラジオリスト	336
EAAメディア関連リスト	337
RESEARCH UNIT別INDEX	338
TOPIC別INDEX	340

ご挨拶



中島隆博

東アジア藝文書院院長

2020年度は新型コロナウイルスに翻弄された一年として、多くの人々の記憶に刻まれることかと思えます。そのなかで、東アジア藝文書院はこの危機を転機にそして好機に変えるべく、力を合わせて努力してまいりました。その記録をこのように皆さまにお届けできることを、院長として心より感謝申し上げます。

新型コロナウイルスのパンデミックが突きつけたのは、これまで知られてはいたにもかかわらず手をつけることのできていない問題群でした。それは、21世紀型の資本主義を支える非倫理的な消費、富が一部の限られた層に集中し、それが投資もされず死蔵される非資本主義的現実、その構造のなかで加速する格差、地球環境問題の深刻化、人間以外の生物を収奪する仕組みが人間に折り返される必然、工学化されることで価値を考えることを放棄した知のあり方、デモクラシーの洗練を怠ったことによる意志決定の貧困化と疎外、デジタル全体主義を許すような社会の風潮といったものです。

東アジア藝文書院では、せめてこうした問題群を貫く問いを鍛えようと努めてまいりました。プログラム生を中心とした若い学生たちと協働した諸活動をはじめとして、数多くの座談会やシンポジウム、ワークショップ、ダイアログ等々を行ってきました。また、ダイキン工業の若い社員の方々や責任ある役職にある方々とも、さまざまなチャンネルを通じて、議論を深めることができました。こうした経験を共有することで、パンデミックの後にくる新しい社会において、より有意義な貢献ができることを期待しております。

わたしたちが灯したのぞみを、是非多くの方々にもご覧いただきまして、ご意見を賜ることができましたら実に幸いです。

2021年2月7日

【EAAオフィススタッフ座談会】

明日の学問を試みる

——2020年度の活動を振り返って

はじめに

2021年1月22日、EAA本郷・駒場両オフィスメンバーが集まって、2020年度の活動を振り返る座談会を開催しました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行というかつて経験したことのない事態のもとで、わたしたちは、次の時代への道を切り開くための活動を研究・教育の両面から行ってきました。危機の時代だからこそ、そこで行われる営みは必然的に、新たなチャンスを呼び寄せるためのものとなります。この年次報告書のタイトルである「のぞみを灯す」が示すように、わたしたちは自らの手で明日の光を灯すべく日々の仕事を続けてきました。この座談会ではそれを支えてきたわたしたちの「のぞみ」の在処を明らかにしたいと思います。

（東アジア藝文書院副院長 石井剛）

社会的想像力を問い直す

石井剛(EAA副院長)： 今日、わたしたちEAAが2020年度にいったい何をやってきたのかについて、みなで振り返ってみたいと思います。この一年は言うまでもなく、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行という状況下で、わたしたちの生活すべてのあり方が大きな変更を迫られた常ならぬ年でした。EAAもその中で対応を迫られたのですが、それはただ単に機械的に感染予防対策をしたというような話では全くありません。この状況、この条件の中から新しい学問を開くための準備を一年かけておこなってきたのです。年次報告書のタイトルを「のぞみを灯す」と題したのは、まさにそうした取り組みの背景にある思いを表現したものです。学問はつねに希望を指し示すものでなければなりません。暗い時代においてこそそうです。わたしたちは「東アジアからのリベラル・アーツ」という趣旨から出発して、この困難な時代の先にある未来に進むべき方向を具体的に示すべきです。それは暗闇のなかのろうそくの灯火のようにわたしたち一人一人にとっての希望になるはずで、その意味で、この一年は、実は希望の一年であったとわたしは思っております。

中島隆博院長は、パンデミックによって明らかになったのは、「既にあった問題」であると強調しています。なぜそれが顕在化してきたのかと言えば、それは必要な「手当て」をわたしたち人間が怠ってきたからではないか、行っていたとしても不十分だったからではないか、というのです。ですからいままらでもそれをやり直さなければならないと。そして、そのための導きのひとつとして「生の形式」(ジョルジョ・アガンベン)について考えるべきだと仰っています。この中島さんの問題提起は、今日の座談会の中できつと通奏低音として反響し続けるだろうと予想しています。

中島隆博(EAA院長)： 一年を振り返るというのは非常に大事なことだと思いますし、どう振り返るかということ自体が問われるべきでしょう。つまり、今までのように一年を振り返るのでは済まない、全く新しい事態が今年度には生じてしまったわけですね。ですから振り返り方自体も考えなきゃいけないなと思っております。COVID-19のパンデミックが全世界を覆う中で、わたしたちの社会的想像力が繰り返し問われてきました。これまでの社会を作り上げてきたものは、もちろん非常に物質的なものとか、制度的なものもありますが、やはりわたしたちの想像力というのも重要な一つです。その全てがこのパンデミックで問い直されてきたと思います。これは、EAAにとっては非常に重要な課題を出されたなと。それに対してどのように応答し、挑戦するのか。EAAの存在理由に関わるようなものとして、わたしたちは今回のパンデミックを受け止めました。

石井さんがおっしゃったように、やはり「既にあった問題」——格差



石井剛
[EAA副院長]

学問はつねに希望を指し示すものでなければなりません



ジョルジョ・アガンベン著
『いと高さ貧しさー修道院規則と生の形式』



中島隆博
[EAA院長]

前進することで、わたしたちが大学、あるいは社会に貢献する手掛かりというのが出てくる

の問題や非倫理的な消費など——があらためて浮上したわけです。それらは待ったなしの課題としてあったわけですが、それに対して手当てができていなかった。そのことを後悔しながら、しかし、後悔したままではしょうがないので、対応していかなければいけないと思います。わたしたちの社会に対してどのように関与していくのか、参画していくのか、それが問われているのです。われわれは学問を新しくつくるプラットフォームとしてEAAを機能させようと考えているわけですから、こうした課題に対してどう立ち向かうかというのは非常に重要なことだったと思うんですね。

石井さんが、「できることは全てやる」と言って、オンラインを使いながらいろんな可能性を模索したのですが、それは単にオンラインの可能性を広げるというだけではなくて、やっぱりわたしたちの言説をどう鍛えていくのか、概念をどう変えていくのか、それが最終的には社会的想像力、変容につながっていく、そういう希望をEAAが導き出そうとしたと言えるかと思っています。そういう一年だったなという気がいたします。

幸いに、EAAは前の年から始まっていますので、ある程度準備ができていました。そのおかげで、この一年もそれなりに前に進むことができたと思います。それはひとえに、EAAのメンバー、そして、EAAに関わってくださった多くの方々のおかげだと思っています。この歩みをこれからも緩めずに、さらに強くしていきたい。それによって、わたしたちが大学、あるいは社会に貢献する手掛かりというのが出てくるんじゃないかと思っています。ですので、今日のこの振り返り自体が一つの出来事だとわたしは思っています。

オンライン・コミュニケーションの可能性と不可能性

石井: まず時系列に沿って話をしていきたいと思います。

わたしたちの COVID-19 パンデミックとの関わりは、ちょうどいまから—



「一高中国人留学生と101号館の歴史シンポジウム」
2020年3月21日に開催予定だったが延期され2021年3月17日に開催

EAA 国際シンポジウム 「一高中国人留学生と101号館の歴史」
日時 2021年3月17日(水) 13:00~17:30 場所 Zoom ウェビナーにて開催

13:00~ 開会の辞：丸岡雅夫（東京大学大学院総合文化研究科長）
挨拶：中島隆博（東京大学東アジア研究センター長）
開会挨拶：宇野浩平（東京大学東アジア研究センター長）
司会：石井朋（東京大学東アジア研究センター長）

13:20~ 基調講演
大塚洋枝（神奈川大学名誉教授）「中国人日本留学の歴史について」

14:00~ 基調講演
2基調（北京语言大学国際戦略研究院理事・東京大学グローバル・アドバイザー、ポード委員）
「駒場での留学経験——東大は開かれている」

15:00~ パネル「特設学科・高等科及び当時の中国人留學生について」
司会：石井朋
特別講演 藤本史（北京語言大學漢語國際學院教授）
「一高の中国人留學生教育の制度変遷」

15:30~ 研究発表1 藤村隆（東京大学大学院総合文化研究科准教授）
「特設学科の国際留學生教育」
研究発表2 藤田博（上海交通大學科学史・科学文化研究教授）
「留學生と東大の留學生会」
研究発表3 高野聖也（北京語言大學総合文化研究科博士後課程、東アジア研究センター）
「留學生と中国人留學生」
研究発表4 山本史（神戸大学国際言語学専攻）
「清末から民国初期の日本留學生内務の基礎——津安井「日本通商指南」を中心に」

16:50~ ディスカッション・全体討論
司会：宇野浩平
ディスカッション：石井朋
ディスカッション：藤本史（東京大学大学院総合文化研究科教授）

17:30 閉会の辞：石井朋

東京大学駒場キャンパスの101号館は、1936年に第一高等中学校にて中国人留學生が学ぶ「特設高等科」専用の講義棟として建てられました。おととしの2019年4月に竣工した東京大学と北京大学の共同教育研究プロジェクトである東アジア研究センター（EAA）では、この101号館にオフィスを構えることを機軸とし、この貴重な建物を中心に、駒場に對した日中教育史を積極的に展示を企画しました。これを記念して、このたび一高を中心とした中国人留學生の歴史に関する国際シンポジウムを開催する運びとなりました。本シンポジウムにおける歴史からの学びが、東大への記憶の継承と新しい学問の礎となればと願っております。

東京大学東アジア研究センター
EAA 国際シンポジウム「一高中国人留學生と101号館の歴史」
https://t02.webt.comics/webinar/register/161_18_2346175161/16175161
協賛機関
東京大学東アジア研究センター

年ぐらい前に始まっています。記録を振り返ってみると、北京大学側から、2月9日から14日に予定されていた冬の集中講義への学生の派遣を中止したいという連絡が1月26日にありました。翌27日に中国政府が団体旅行の海外渡航全面禁止を打ち出すことになったので、それを受けて大学としてすべての海外派遣プログラムをストップするということでした。また、3月21日に企画されていた「一高中国人留学生と101号館の歴史」シンポジウムも延期を余儀なくされましたね。

その間、わたしは副学部長として、北京のみならず、海外の様子、そして本学における対策については見聞しておりました。実は、EAAがこれまでずっと培ってきた国際交流が本学の授業オンライン化に向けて、大切な役割を果たしたと、五神真総長、福田裕穂理事、太田邦史総合文化研究科長の鼎談の中で紹介されています¹⁾。というのは、わたしが北京大学に電話をして、あちらで始まっていたオンライン授業のやりかたを詳細に聞いて、太田研究科長に報告したのです。これが、教養学部がオンライン化に大きく舵を切った転換点だったと認識しています。

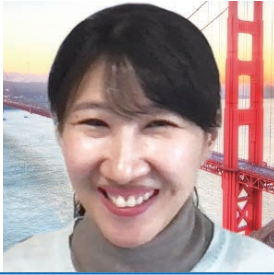
EAAでは、予定されていたイベントをオンラインに切り替える作業を3月中に行いました。4月1日の「世界教養学」座談会もそうですが、東京大学における2020年度最初のオンライン学術イベントはEAAがやったと言って間違いのないと思います。さらに、4月22日には「感染症の哲学」をZoom Webinarを使って実施しました。ソウルから金杭さん(延世大学)、香港から張政遠さん(EAA教員、当時は香港中文大学)をお招きしました。これに続いて8月26日に行われた「感染症と文学」では、ウェリントンのデンニツァ・ガブラコヴァさん(ヴィクトリア大学ウェリントン)もお招きしたのですが、オンライン国際会議は時差が近接していれば簡単に参加できるのが大きなメリットですね。

その後、5月後半になると、今度はどうやって対面とオンラインのハイブリッドな環境を作っていくのかが問われ始めます。そこで101号館のセ

1) 「総長・理事・教養学部長鼎談 COVID 19を越えて」、『淡青』vol.41、2020年9月、57ページ。



2020年4月1日開催「世界教養学」座談会
東京大学における2020年度最初のオンライン学術イベント



具裕珍
[EAA特任助教]

不慣れななかいち早くオンライン・イベントを運営することでノウハウを蓄積できた



高山花子
[EAA特任助教]

本来あった余白を、何とか取り戻せなにかと考えてみたEAAラジオ

ミナー室にハイブリッド用の機材を導入しました。座談会シリーズのひとつ「テクノロジーの時代における人間の学問」（7月14日）をハイブリッドで開催したのが、EAAで行った最初の事例ですね。

北京大学との交換留学も、EAAが始まったときから一つの大きな目玉でしたが、2020年に初めて実現することができました。オンライン留学というかたちでA Semesterに北京大学から4名の留学生が、東アジア教養学の授業に参加しました。全学交換留学がストップしていますから、東大全体で見ても稀少なケースであったはずですよ。

具裕珍(EAA特任助教): EAAは初動がすごく早かったと思います。「世界教養学」座談会ですが、3月19日の日付のメールではまだ101号館の11号室で開催と書いてありました。みんなまだZoomとかに不慣れで、わたしも、大学で提供する説明会などをちょっと聞いただけで、もう学術イベントをセッティングすることになったのでたいへんでした。その上さらにWebinarにも挑戦してみようということで、「感染症の哲学」オンラインワークショップを開きました。國分功一郎さん(総合文化研究科)がTwitterで情報を流してくださったおかげで、200名の参加者が集まって大盛況だったのですが、準備の時はみんなドキドキしていたので、一緒にリハーサルやシミュレーションをしました。結果的には、いち早くこういうオンライン・イベントを運営してノウハウもそれなりに蓄積できたと思います。

石井: オフィスワークもオンラインを使った在宅勤務に切り替わりましたね。しかし、そういうことを続けていくうちに課題になったのは、オンラインによって明らかになったある種の不可能性です。ですので、初夏以降はむしろオンラインの限界のほうにこそ、学問として重要なポイントがあるだろうというふうな焦点がシフトしていきます。その初歩的な試みとして、EAAラジオは大事な契機になったと思っています。高山さんのアイデアで第1回が5月13日に行われているんですよ。

高山花子(EAA特任助教): EAAは、実質的に2月の半ばから在宅勤務が続いていたんですね。それで、4月の後半になった時点で、われわ



2020年7月14日開催 第4回EAA座談会「テクノロジーの時代における人間の学問」
対面とオンラインのハイブリッドな環境で開催されたEAAで初めての学術イベント

れの間で、メールや Zoom で共有されてきたことへの疲れが顕著になってきました。身体的な疲労が非常に蓄積するのです。パソコン画面の前に長時間固定されて、視覚的な負担が多くなりました。もう一つは、授業や会議はオンラインである程度できるんだけど、その間の時間がほぼ失われてしまった。例えば、雑談をするとか、休憩をするとか、お茶を飲むということができなくなってしまったのが、これは結構ストレスになっている。われわれの生活に、本来はそういった余白というのが非常に多くあったんじゃないか、それを何とか取り戻せないかと考えてみました。

前野清太郎 (EAA特任助教)： リモートワークは、意外と心と心の距離というのは非常に近過ぎるようにも思いました。

高山： そういうことがあって、EAA ラジオの最初の企画文書には、「緩やかな距離のあるつながりを」というコンセプトが示されています。こういうタイトルをわたしが作ったのがその文書に残っています。他愛のないお話をラジオを通じて試してみようということで、週1回15分（現在は10分）で始めました。

始めていくと、意外と聞いてくださる方がいて、スタッフの間でおしゃべりの代替のような役割を果たせるだけでなく、外の人たちも、実は、そういったどうでもいいような、聞き流せるような話に飢えていたということがしみじみと感じられました。EAA ラジオはいまでも続けていますが、新しいリベラル・アーツを音声メディアとして発信していくきっかけや実験にもできるのかなと考えています。

張政遠 (EAA教員)： わたしは10月に日本に入国したのですが、当初は14日間の自宅待機も経験しました。その中で、いちばん貴重だったのは読書をしたことです。つまり、わたしたちの今の仕事は、研究や教育現場で使う目的で、ただ人に伝えるためだけに本を読んでいます。しかし、自己隔離中には、いろいろな本を読むことができました。その中でいちばん印象にあるのは、「コロナ時代を生きるための60冊」の一つとして取り上げられた森裕治の『山の上ホテルの流儀』（2011年）という本です。その本の中で、こういうふうに言っています。つまり、このホテルでは、家庭に準ずる生活を重視するのだと。ふつう、家庭は家庭、ホテルはホテルという分け方があるんですけど、そうじゃなくて、本来、家庭で行われてきたことが何らかの事情で家庭の外で行われるのだと書かれています。非常に印象深いです。これは、大学のあり方について考える場合にもヒントになるとわたしは考えています。まさに大学も、本来、キャンパスで行われてきたことが、いま事情によって大学外で行われていますね。オンラインによって自分のそれぞれの家で大学の仕事をすることで、家庭と大学の境があいまいになってきたということをあらためて考えないといけない



前野清太郎
[EAA特任助教]

オンライン上は、意外と心と心の間の距離が非常に近過ぎるようにも思いました



張政遠
[EAA教員]

家庭と大学の境があいまいになってきたということを改めて考えないといけないと思います



森裕治著
『山の上のホテルの流儀』



マーク・ロバーツ
[EAA特任研究員]

コロナ後わたしたちが活動を
進めていくための空間がどのよ
うにあるべきかを考える

いなと思います。

マーク・ロバーツ (EAA特任研究員): これは結局、わたしたちが活動する空間をどう構築するかという問題になりますね。1980年代のころ、カリフォルニアでメディア空間の探究として、物理的には同じ場所にいるわけではないけれど遠隔的に存在しあって、共同作業をするという技術がすでに模索されていたのを思い出します。それを教育に活かそうという試みもそこにはありました。その中では、いまのiPadにもつながるような機械も発明されたりします。これらについても多くの研究がありますので、関心があれば調べてみるとおもしろいでしょう。これからわたしたちが研究と教育を進めていくための空間がどのようにあるべきかを考えるためにも有効だと思います。



王欽
[EAA特任講師]

EAAにおいてプラットフォームの
技術と正義の問題について探
究していくのが望ましい

オンライン国際会議の課題と展望

石井: オンラインによって、国際的につながることが簡単にできることは最初からわかっていたのですが、一方で、オンライン・テクノロジーはかなり脆弱だとも感じます。

つまり、どのプラットフォームを使うかがある種の国際的な政治構造の中にはめ込まれてしまうという現実があります。学問はインフラとしてのテクノロジーの政治から自由であるべきです。それで、実は Tencent Meeting (VooV Meeting) もかなり積極的に活用しました。それを使って、中国を中心とする他の国々との関係も何とか拡大していきたいと思ったわけです。

王欽 (EAA特任講師): 華東師範大学との最初のシンポジウムが5月25日に VooV Meeting で行われました。第2回 (12月21日) もそうです。

田中有紀 (EAA教員): わたしが担当している日中韓オンライン朱子学読書会でも Tencent Meeting (海外版は VooV Meeting) を使ってやっております。一つの手段だけだと不安定になったときにちょっと怖いので、Tencent だったら WeChat と併用するなど、他のアプリと併用して、いかにバランスよくやっていくかということにけっこう気にしていました。WeChat を使って、読書会の前後にいろいろな討論をしたり、気になったことを聞けたり、個人的に連絡が来たりとか、特に中国では、WeChat でどんどん人がつながって行って、今まで知らなかったような先生と知り合えたりとか、そういうところがすごく面白いです。新しい出会いがあったり、何か懐かしい出会いがあります。

しかし、ある日、台湾大学とやりとりをしたときに、台湾のほうでは Google Meet を使って、いざというときは LINE でやりましょうということな

ので、全然違うなと。Google MeetもLINEも、中国大陸では使えないものなので、何か、全然違うなと思いました。

石井: 台湾ではZoomが使えず、中国ではGoogleが使えませんので、両方とつながるためにCisco Webexを使ったりもしますね。

王: EAAがさまざまなサイトやプラットフォームを活用していくことは大事だと思います。つまり、日本で活用されているサイトとかソフトだけではなくて、世界中のどのサイト、どのソフト、どのプラットフォームが注目されているかを知り、同時に、技術的な面の背後に潜んでいる政治性についても考え、EAAにおいて技術と正義の問題について探究していくのが望ましいでしょう。

EAAは使っていませんが、中国のbilibiliというサイトはニコニコ動画によく似ていて、実に面白いサイトだと思います。ライブ配信はもちろんのこと、国際政治、歴史、さらには、日本の歴史についての動画も含めて、たくさんの学術的なコンテンツがアップされていて大人気です。

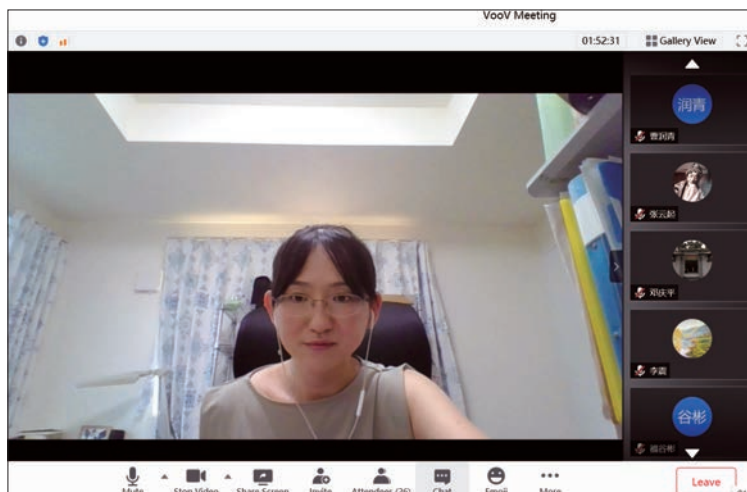
石井: 重要な指摘ですね。単にそれぞれのプラットフォームの背後にどのようなイデオロギーがあるのかということ以上に、オンライン・プラットフォームを使った、ある種の新しい公共空間の開き方には、これまでとは違う意思の表明のしかた、もしくは、意志の形成のされ方が関わってくるので、それを考えるべきだということですね。

田中: 日中韓オンライン朱子学読書会は、夏ごろに始めて、ほぼ毎月、中国、韓国、台湾の研究者と読書会を行う試みです。この研究会は、わたしが留学中に知り合った趙金剛さん（清華大学）が、朱子学関係のシンポジウムとか研究会を日本の学者を呼んでやりたいので若手研究者



田中有紀
[EAA教員]

日中韓オンライン朱子学読書会を始めました。オンラインで集まれるのはとてもいいと思います



日中韓オンライン朱子学読書会
ビザや距離の問題なく、オンラインで気軽に集まれるようになった



若澤佑典
[EAA特任研究員]

研究の「共時性」を実感した
一年間でした

を紹介してほしいと頼んできたのが始まりです。そこで博論を出版したばかりの方を集めて、自分の著書で何を論じているかということ結構長い時間をかけてしゃべってもらおうという形でやっております。コロナが終わった後は、ここから対面のコミュニケーションが始まっていくのかもしれませんが、今まではビザの問題や距離の問題で難しかったことが、いまはオンラインで話し足りなかつたら、「じゃ、また来月やりましょう」という感じで気楽に集まれるのはとてもいいと思っています。

若澤佑典 (EAA特任研究員) : わたしは英語圏を研究対象・研究活動の場としていますので、異種混交的なことができるプラットフォーム作りをあれこれ試してみました。ウェブサイト上にレビューページを立ち上げ、希望するスタッフが順に英語で書評を書いてアップロードしたり、国外の研究者をオンラインで呼んで英語で討議する場を準備しました。また、海外のカンファレンスやセミナーに参加するだけでなく、「日本ではこんなことやってるよ」という紹介記事を英語で書いてみたりしました。

わたしはずっとヒュームを読んできたのですが、同時代の中国や日本に目を転じて、18世紀の世界を一つの広い「面」として探検していくこともできました。同じ時代に別々の地域で生きていた人たちが、なぜか似たような問題と格闘しているという思考の「共時性」は、今日にも言えると思います。どこかまったく違った場に同じようなことを考えている人たちがきつといるはずで、そういった人たちと遭遇する驚きや喜びには、単なる比較とは異なる学問的な意味があると感じます。

石井: こうした国際的な交流においては、だいたい30代半ばぐらいの人たちが中心になって活発なコミュニティーが形成されていますね。これは今後、皆さんの活躍なさる長い学者生涯の中で貴重な財産になっていくと思います。その始まりがCOVID-19の年だったということは、しっかり記憶しておくべきでしょうね。

教育プログラムの発足

石井: 2020年度は、教育プログラムとして「東アジア教養学」が発足した年でもありました。学部生向けの全く新しいプログラムですね。

王: わたしは2つのコア科目である「東アジア教養学理論」と「東アジア教養学演習」をSセメスターに担当しました。

まず、全体的に言えば、「理論」と「演習」には共にTAセッションが付いていますが、今まで東大で行われてきた学部生向けの教育においては、とても斬新な実践ではないかと思います²⁾。

2) 学融合プログラム「東アジア教養学」には「東アジア教養学理論Ⅰ」「東アジア教養学理論Ⅱ」「東アジア教養学演習Ⅰ」「東アジア教養学演習Ⅱ」という必修科目(通称「コア科目」)がある。これらのうち「Ⅱ」は、大学院生をティーチング・アシスタントとする文献講読演習で通称「TAセッション」と呼ばれている。

TAセッションでは、博士課程に属している3人のリサーチ・アシスタント(RA)が中心的な役割を果たしています。彼らが学生のディスカッションを導いて、テーマに沿った議論を展開していくのは、なかなか興味深いと思います。言うまでもなく、アメリカの大学、例えば、わたしが以前所属したニューヨーク大学ではMAP courseと呼ばれるいわゆるコア科目は、レクチャーとTAセッションのセットで行われます。しかし、EAAのTAセッションは、アメリカの大学のやり方とは異なっています。というのも、EAAのTAセッションにおいては、多言語の環境が避けるべきものであるどころか、むしろ、不可欠な条件になっているからです。つまり、日本語と英語と中国語、この3つの言語の間を絶えず行き来しながら、言語と思想のコミュニケーション、あるいは、ディスコミュニケーションが可視化されるのです。もちろんこれはRAさんにとっても、学生さんにとっても、なかなかハードルの高い練習かもしれませんが、いや、むしろ、だからこそ、避けられないディスコミュニケーションやミスコミュニケーションこそがEAAの中心的な理念——教員自身が、自分自身がわからないものを学生に教えるという——にぴったり当てはまっていると思いますね。つまり、実証的な知識、疑いのない知識、あるいは、概念的に安定している知識を何か宅配便のように学生の所へ運ぶのではなく、常に不穏な思考、言語という物質にぶつかっている思考のアポリア(難問)に陥りかねない思考を学生に共有していくというのは、EAAで実践されている教育の特徴だと思えます。

「理論」と「演習」のちがいについて、まず、「理論」の授業には、必ず2人の先生が教室にいて、あるテーマについて対話しながら、学生に考えさせます。ここではあるテーマに関する学問上の議論の幅広さを学生さんに示すことがポイントだと思います。例えば、モダニティをテーマとして出します。1週間どころか、1年間をかけても、このテーマに関する基本的な文献を読み尽くすことはできないかもしれません。「近代とは何か」と題されている本やエッセーには枚挙にいとまがないですね。そこで、この授業でわたしたちがやるべきことは、無理やり学生に多くの文献を飲み込ませるより、むしろ文献を思考の手掛かりとすることです。そして、教員による対話という生々しい形で学生にヒントを提示して、例えば「モダニティ」に関する学術的言説の可能性や問題点を彼らに示すことが大事だと思います。

これに対して、「演習」のポイントは、一つのテキストを徹底的に精読する方法を教えることにあると思います。EAAは研究者と学生と一緒にテキストを読んで、一緒に新しい問いを問う場所であるべきです。新しい問い方をするためには、やはり正しい読み方を身につけないといけません。言い換えれば、日常生活において、われわれが当たり前だと思うこと、自然だと思うことを疑問視して、初めて新しい問いを問うことが可能になります。われわれは日常生活でさまざまな文脈のなかでさまざまなテキストを

読まされています。「演習」の授業で読まれているテキストはクラシック、あるいはモダンクラシックですが、「演習」の狙いは、それらのテキストを精読することによって、その中に潜んでいるたくさんの可能性を探ることです。是非を問うのではなく、読む方法を身につけさせるのです。端的に言えば、「演習」で選ばれているテキストは、いろんな意味で、今われわれが生きているこの世界をもたらしてきたものである一方で、別の世界の可能性を常にわれわれに提示しています。したがって、あるテキストを読むことは、われわれの生き方、あるいは、「生の形式」に関わっているとわたしは思います。

総じて言えば、「理論」も「演習」も答えを出す授業ではありません。逆です。自分の生活に対して、または目下大いに議論されている社会的問題に対して、いろんな角度から疑問を呈することを促し、自分自身の生き方の根拠やアイデンティティーの基礎まで反省することを促し、時々、ディスコミュニケーションやミスコミュニケーションも起こす場です。コア科目だけでなく、EAA 全体がそういう場所を提供できるとわたしは信じています。

石井: 先日（2021年1月19日）、TAセッションを支えてくれたRAの皆さんと一緒に1年間を振り返りました。その中でも、多言語性に関して、たいへんよかったという意見がたくさん出てきました。もちろん多言語性は、運営上においては大きな困難があるとも同時に言っていました。しかし、その困難を簡単に技術的に解消するようでは意味が失われますね。

特に、Aセメスター以降は、北京大学から、オンラインですけれども、留学生を4名迎えています。多言語性やバックグラウンドの多様性がより高まりました。

張: わたしは、Aセメスターにコア科目を担当しました。対面とオンラインを併用するいわゆる「ハイブリッド方式」によってです。

このハイブリッド方式には、まだ試行錯誤が必要で、これからも考えないといけないと思います。しかし、101号館のセミナー室に新しい機材が導入されていたので、僕は、非常によかったと思います。場合によっては、オンラインにもオンラインの良さがあります。でも、少人数になると、できるだけハイブリッド、あるいは対面のほうに移行するというのを、これからは柔軟に対応していくことが、今後必要になるでしょう。

石井: ハイブリッド方式ということで思い出されるのは、やはり北京大学と行ったサマー・インスティテュート（9月7、8日）ですね。前日のアイス・ブレイクも含めて、3日間は東大の参加者がほぼ全員会場に集合しました。教養学部ではAセメスターになって一部の授業がハイブリッドで行われましたが、わたしたちはそれに先んじて実施したわけですが、その中でとても印象的だったのは、前期課程1年生からの唯一の参加者が、「これが東



大なんですね」と言ったことですね。Sセメスターは完全オンライン授業で、クラスのメンバー全員と対面で会うこともないままだった新入生にとって、このイベントが「生の東大生」に初めて本格的に遭遇する場になったのです。彼女がそう言ったときのうれしそうな顔は忘れることができせんね。

オンラインによる授業が可能だと示されたことは、たしかにパンデミック下で大学教育が学んだ大きな収穫でしたが、それよりも大きな収穫は、オンラインでは、人間の文化を育むという大学にとってより根本的なミッションが達成できないのだと思い知らされたことでした。このサマー・インスティテュートでは、アガンベンのテキストを扱いながら、動物的な生とは異なる人間的な生について活発な議論が展開されましたが、まさに後者の意味において、人と人が直に触れ合うことが文化の決定的に不可欠な要素であることを、大学が、とりわけ「文系」と称されている学問が実践的に示すことがたいへん重要です。

このパンデミックの経験自体は、誰にとっても全く新しいものだと言っていいと思います。ですから、経験自体の意味を問い直す必要があります。そのためにはまた、歴史を振り返る必要があるでしょう。全く新しい経験という点では、誰も答えを持っていない課題に直面している以上、教員も学生もなくいっしょに考えていくべきです。そこでサマー・インスティテュートにおいては、「感染症流行の見聞と経験」というテーマを設定しました。また、Aセメスターには、北京大学とオンライン・ジョイント・コース「East Asia and the World under the Pandemic」を開講したのですが、そこでは、今日起こっている現象をアカデミックに相対化すると共に歴史的な意味を捉え直そうとしました。そこには北京大学と東京大学の学生のみならず、ニューヨーク大学、オーストラリア国立大学、ソウル国立大学や国際研究型大学連合（IARU）の大学からも聴講生を募りました³⁾。

この授業ではまた、Panoptoというオンデマンド教材の作成と配布にすぐれたプラットフォームも導入して、反転授業を行いましたね。オンデマン

サマー・インスティテュート
ハイブリット形式の授業の先駆けとして「感染症流行の見聞と経験」をテーマに東大と北京大の学生が議論

3) 実際に参加したのはソウル大学、コペンハーゲン大学、イエール大学、カリフォルニア大学バークレー校で、このうち、ソウル大学とコペンハーゲン大学の学生に修了証を発行した。

ドの講義ビデオを Panopto を使って見てもらうと同時に、必ず1週間に1時間、Zoom もしくは Tencent を使ってみなが集まって相互に議論をするという試みです。これも国境を越えて、わたしたちにとって喫緊の学問的課題を相互に議論するプラットフォームを構築する取り組みとしては、それなりに意味があったのではないかなと思いますね。

張: この Panopto に関しては、EAA が東大で真っ先に導入してきたことをたいへんよかったと思います。前任校でも Panopto を経験したことがありました。Zoom に依存することはやはりよくないとわたしは思います。Panopto を導入することによって、新しいやり方をこれから積極的に導入して、柔軟に新しいことを試すべきだと思います。

災害の文学と東アジア

石井: ここで感染症シリーズの話に戻したいと思います。「感染症の哲学」ワークショップのあとに、文学、歴史学など人文学の角度から感染症という現象に対して考察を加えていったほうがいいとおっしゃったのは、張政遠さんでしたね。

張: もともと「感染症の哲学」の話は、石井さんのアイデアだったと思います。最初は「コロナウイルスと哲学」という、コロナ限定の考察というアイデアだったと思うんですけども、そうじゃなくて、もっとより広い立場、広い観点からいろいろ考え直すということで、「感染症」に変更しました。それが非常に重要だと思います。つまり、今回のコロナウイルスについてはまだわかっていないところがいっぱいあるので、目の前にある現象をそ



EAA オンラインワークショップ「感染症の哲学」
Zoom Webinar を使って実施

の場に沿って考察することも重要だと思うんですけども、そうじゃなくて、かつてあったさまざまな感染症の経験をやはり検討しないといけないと思います。

香港の場合、2003年のSARSに関する記憶があります。その後、MERSもありました。感染症は国境を簡単に超えますし、やはりいろんな政治的な側面もあります。そこで、感染症という経験は、結局、哲学だけじゃなくて、文学という側面もたいへん重要だろうというふうに思いまして、わたしは、「感染症の哲学」では「疫災後文学論」という発表をしました。狭い分野の哲学だけではなくて、文学や批評という相において考えないといけないと思ったからです。ところが、「感染症の哲学」は男性だけの研究会だったので、「感染症と文学」（8月26日）は、女性による発表をそろえました。

12月26日のワークショップ「感染症——歴史と物語のはざままで」で話になりますが、だいじなのはやはり物語だと思います。つまり、コロナの現象とともに、いろんな忘れられている物語があるかと思しますので、その天災と人患を忘れないために何をすべきか。それもEAAのこれからの仕事のひとつだとわたしは考えています。

石井: 感染症関連のイベントからは、災害そのものの経験がもつ人文学的な意味を問い直す方向へ関心が発展していきます。これは、張さんの「疫災後」というキーワードが重要なきっかけとなったと思います。こうした関心からスピニアウトするように始まったのが、石牟礼道子のワークショップですね。これはオンライン型の連続読書会として企画されました。

高山: ワークショップを2回開き、現在、論集を編集しているところですが、振り返ると、ここまで広がりが出るとは予想していませんでした。もともとは、過去から何か学びたいという思いから、古今東西の文学テキストで感染症や疫病がどのように描かれてきたのかという問いをめぐる読書会ができないかということで始まりました。そこからもっと広く「災害」という視点から、前代未聞の出来事に人々がどうやって対応し、何を考えてきたのかということを見てみたいというのが最初のアイデアだったんです。

石牟礼道子が浮かんできたのは本当に偶然で、まさに思い浮かんだというかたちです。水俣病事件という前代未聞の病であり、公害であり、環境問題である出来事に向き合った文学ですが、じゃあ、水俣病は感染症なのかというと、そういうわさが流れていた時期もあるけれども、感染症ではないし、じゃあ、災害という言葉で片づけられるのかもわかりません。読書会を立ち上げたときにいろいろな疑問やわからないことが出てきました。読書会には、EAAだけではなくて、UTCPやそれ以外のところで強い関心を持っている方々にもシェアされて、月2回集まりを持って現在に至ります。ワークショップも9月4日と11月21日の2回



EAA Online WS

「感染症——歴史と物語のはざままで」野家啓一氏による基調講演「コロナ時代における〈生政治〉の行方」が行われた



宇野瑞木
[EAA特任研究員]

それまでの自分のやり方を変えなければ本当に議論したいことを分かち合えないのではないかという懸念が生まれていました

開きましたが、続けてきて強く思うのは、われわれは、何かが読みたいという思いを強く持っていたと同時に、誰かと読んで、実際に声で意見を交わしたいという希望を持っていたということです。ひとつの節目としてワークショップを開くことによって、これまで小さなところで交わしてきた声を外に開きながら交換させていくことが実現できたことにすごく大きな意義があった。だからこそ2回できたのだと思っております。

宇野瑞木 (EAA特任研究員)： 災害文学をめぐる、「書く」とはどういう営為なのかということを考える読書会としてスタートさせたいという思いもありました。東日本大震災以降、災害文学という視点で前近代の日本文学をまとめる企画にわたし自身が複数関わってきましたから。しかしその一方で、コロナ禍によってわたしたちはこれまでとは全然違う局面を迎えているという感覚もあって、それまでの自分のやり方を変えなければ届かないんじゃないか、本当に議論したいことを分かち合えないのではないかという懸念が生まれていました。専門性の中ではどうしても具体的な作業に向かいがちです。何かを考えるための理論や知識を学ぶことも大事ですが、何が起きているかわからない状況の中で、あえてEAAで読むのであれば、さまざまな人々が専門を超えてより根源的なことを共に考えられるテキストを探したいという思いが強くありました。

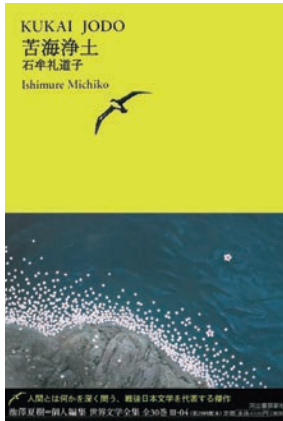
そこで、『苦海浄土』が浮上したんですけれども、あらためて読んでみると、人間の身体が脅かされて、そして、社会が分断される厳しい状況にあって、それでも命の尊厳——石牟礼の言葉だと「いのちの賑い」と言ったりもするんですけれども——への深い思い、強い希望が込められていることがわかりました。ことばで語ることを諦めることなく、語ることの意味と難しさを共に問い続けたテキストだと感じています。

わたしたちもソーシャル・ディスタンスの中で、語り合うことを渴望していましたね。読み尽くせないテキストを介して、オンラインであっても、お互いの気持ちを響かせ合うことがかなりできたという実感があります。それは読むことへの喜びや感動につながります。そういう感触を得られたのは大きかったですし、物語からは、何かが復活するような、治癒するような力を感じました。

張： 石牟礼道子のテキストは、以前、前任校の香港中文大学で「日本環境問題」や「日本文学」という授業でも取り上げました。EAAでは授業でもぜひ学生たちと一緒に読みたいと思っていましたから、ちょうどいいタイミングでしたので僕も参加することになりました。

僕は個人的には、これが2020年のいちばん大きな、恵まれたことだと思います。そして、9月のワークショップでは、「道の研究——わき道、被災した道、巡礼の道」というテーマで発表しました⁴⁾。「道子」の「道」は、東アジアにおいて非常に重要なキーワードだとわたしは思っています。

4) EAA オンラインワークショップ「石牟礼道子の世界をひらく」、2020年9月4日。



石牟礼道子著
『苦海浄土』



土本典昭監督
『水俣——患者さんとその世界』
1971年に公開されたドキュメンタリーで『苦海浄土』と重なるモチーフも多い

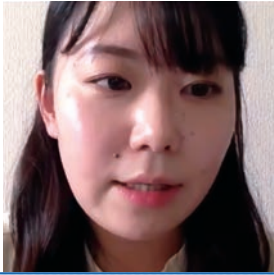
これを発表して、さまざまな意見やコメントを頂戴しました。その結果、今までその関係性がよくわからなかったこと、例えば、和辻哲郎や柳田國男と石牟礼道子の関係などははっきりしなかったんですけども、初めて何かが見えたという感触を持つことができました。

この読書会では、『水俣——患者さんとその世界』（1971年）というドキュメンタリー映画の上映会を2回ほど行いましたね。僕も参加しましたが、これもまた大きなことだったと思います。今はコロナ禍の中、みんな自分の家で映画を何本でも見られるんですけども、やはり一緒に同じ部屋の中で、同じ空気の中で見ることによって、また新しい議論が生まれてくるというのが、とても新鮮に感じられました。

この読書会では、ほかに巡礼ということも計画されたんですけども、残念ながら、まだ実現できていません。近いうちにぜひ水俣へ巡礼し、本には書かれていない、忘却された記憶をよみがえらせてみたいと思っています。

石井: 石牟礼道子の「道子」という名前の由来が、日本が近代的に文明化されていくプロセスの中で、新しい技術を使って道を建設していくことと、実は一致しているということもわたしたちはそこで学んで、はっとさせられましたね。

福沢諭吉が『脱亜論』の中で、「文明は猶、麻疹の流行の如し」と言っています。彼は文明がある種の感染症であるかのように捉えているんですね。脱亜するということは、彼にとっては、文明に入っていくということだったのですが、それは同時に、ある種、感染を引き受けていくという意味にもなっているのです。福沢と石牟礼の立ち位置はまったく異なるものだと思うんですけども、実は、わたしたちがどのように文明に対峙するのかという問題は、福沢においてすらもそれほど単純なものではなかったわけ



崎濱紗奈
[EAA特任研究員]

いま一度、「東アジア」がどのような空間・概念であるかをEAAにおいて問い直していきたい

です。特に、感染をただ避けるのではなくて、何らかの形でわたしたちがそれを引き受けていかなければいけないという認識は、いまの状況下ではアレゴリー以上のリアリティを持って迫ってきます。石牟礼の文明批判にもこうした側面があると思います。そして、同時にこのことは、アジアとの横のつながりという意味でも、非常に大きな示唆を持っていると思います。

崎濱紗奈 (EAA特任研究員): その意味では、いま一度、「東アジア」がどのような空間であるかを EAA において問い直していきたいです。やはり一つのヘゲモニー空間、つまり、権力空間として作られてきた来歴が東アジアにはあると思います。発端としての大日本帝国による大東亜共栄圏、そして、その後続いた東西冷戦、アメリカ軍によって構成される空間としての東アジア、その上に現在の東アジアがあるといったことを踏まえた上で、東アジアから学問することの意義を皆さんと一緒に考えていきたいです。

高山: 会が続いている理由の一つは、みんながやっぱり読みたかったということと同時に、読み尽くせないくらい、やはりわからない、全然歯が立たないと言ったら変ですけども、テキストがそれほど深い海のようなというのがやはり大きいと思います。われわれのなかで考えていることも全く異なっているからこそ、毎回の議論が活発に続いてきたんだと感じます。先ほど、巡礼が実現できないという話がありました。やっぱりこのテキストを読むという以上、実際にどうであったのかというのを見ていく必要があると強く感じます。今、実際に旅をすることができなくなっています。それは、アクセスできる情報が制約を受けている中で、なかなか聞こえない声や残された記憶にどうやってわれわれがアクセスできるのか、完全に到達することができないにしても、どうやって迫っていけるんだろうかという問題をつきつけているわけです。そして、この読書会は、参加者それぞれの立場からそれを切実な問題として考える場になっています。

石井: 沖縄に関する研究も張さんや崎濱さんによって始まるようですから、「道」はこれからもさまざまに広がっていきそうですね。

一高と101号館

石井: 駒場オフィスの入っている101号館のエントランスには、2月の上旬から、「一高中国人留学生と101号館の歴史展」と称して、一高留学生の歴史をたどる展示が始まっておりましてけれども、4月以降はキャンパスのロックダウンによって誰も訪れることができなくなりました。もともとは、コミュニケーションプラザ南館の2階とか、駒場図書館等を使って、かなり大がかりな展示を6月ごろまで断続的に行う予定だったのです



一高中国人留学と101号館の歴史展
101号館エントランスには駒場博物館
館蔵資料のパネル展示がされて
いる

が、それが全てストップしてしまいます。にもかかわらず、101号館には訪れる人もないままに展示のパネルがひっそりと残されていました。それを何とかしたいということで、バーチャル・エキシビションを考えたのですが、その後、少しずつ議論を重ね、田村隆さん（総合文化研究科）とか折茂克哉さん（駒場博物館）のご助言を仰ぎながら、101号館の建築そのものところにまつわる歴史の双方を一つの物語として映像作品にするというワークショップが始まります。リモート・コミュニケーションが主体になっている中で、手作業をする空間としてのワークショップを何らかのかたちでわたしたちなりに新しく開き、そして、新たな作品を作っていくという試みです。

高山: エントランスの展示は、去年の2月に予定されていた北京大学との集中講義に間に合わせようということで、なんとか始めることができましたが、結果的に、本来であれば見てもらえるはずだった新入生など若い人たちに、駒場キャンパスにかつてあった歴史を示す資料をお披露目する機会が失われたまま、ほとんど見られることがなく、現在に至っています。これまで眠っていた新しい資料もあるのですが。それで、その展示会場だけでもオンラインで映像で公開できないかというのが最初のアイデアでした。もともと101号館は、中国からの留学生が勉強する特設高等科のために作られた校舎ですから、その歴史が刻まれた古い建物の手触りや空気感の魅力を探ることが面白いのではないかということになりました。過去の歴史を振り返ることによって、未来につないでいくきっかけをつくることにもなります。

そこで、バーチャル・エキシビションではなく、むしろ、デジタル化されることで抜け落ちてしまうような「ノイズ」のほうに目を向けて、これを映像として残すことにしたのです。そういう取り組み自体は、単に論文を書いたり、書籍を残したりするというとは別のかたちの学術表現のあり方です。

今、若い院生が3人で取り組んでいます、いろいろ調べてアイデアを練る中で、みんながすごく関心を持つようになったのは、1930年代当時にはここに学んでいた若者たちがいて、その日常生活がこの建物を介して営まれていたという、それ自体はありきたりな事実です。寮の歌とか日誌とかが残っているんですけども、そういったものがものすごく面白いのです。この企画は、世代を超えて変遷してきた駒場そのものを捉え返す機会にもなっているんじゃないかなと、運営をしながら思っています。この取り組みの中から、大学のキャンパスが本来持っている役割は、勉強をするとか、テキストを読んだりすることもちろん大切ですが、学生同士が空間を共にする場としての役割であることがわかってきました。そのようなキャンパスが歴史的にずっとあり続けたことを、いま振り返ることの意義を痛切に感じます。

5) 1943年から1945年ごろに一高の留学生課長であった藤木邦彦氏が所持していたと思わしき駒場に眠っていた資料。戦時下の一高での留学生教育の実態を解明する手がかりになると考えられる。

宇野: 2019年度に調査を進めてきた藤木文書⁵⁾も、今後生かしていきたいです。それこそただならぬ空気があったはずの時代の資料です。極限状態での一高の空気や留学生たちの空気を読み取れる資料であると思いますし、あるいは、教育という場で、まさに人と人とのあり方が際立つような貴重な資料です。一高の教育理念であるリベラル・アーツがどう生かされ、またどこに限界があったかを学ぶ意義があるだろうと思っています。

石井: 101号館の歴史は1930年代半ばに始まっています。それは宇野さんの言うとおりの、たいへん危機的な時代だったのですよね。建物に響いていたであろう当時の学生たちの声や、そこから立ち上がってくるある種の匂いのようなものの背後には、さらにその時代の無意識がどこかにあるんですね。わたしたちも時代の無意識に何らかの支配を受けています。それは事後において歴史を振り返りながら明らかになっていくものでしょうが、いかにしてそれをつかまえるのかは非常に大きな課題です。そして、それを捉えてみることは、今のわたしたちがこのパンデミックの中でこのプロジェクトをやっていることの意味づけにもなることでしょう。

産学協創と「空気の価値化」

石井: 夏ぐらいから秋以降になると、新しい産学協創モデルをいかに構築していくのかという課題について、かなりさまざまな模索と取り組みが行われました。

とりわけ、ダイキンと東大の産学協創における一つの大きな目標に、「空気の価値化」がありますけれども、それを一つの思想としていったいどのように具体化していくのか。中島さんが「花する空気」という言葉を生み出したのはその一つの答えですね。また、ダイキンの方々と産学協創の

新しいかたちを模索する具体的な取り組みも行われていきました。

中島: きっかけは「Look 東大」⁶⁾の中で「EAA デー」が設定されたことですね。それまでダイキンの「Look 東大」は、理系の共同研究に向けて東大の研究室を訪問するということだったのですが、それだけでは、産学協創の大きな方向性を表現するには不十分だという思いがあったようです。ダイキンの方々からもEAAに対する期待がたいへん大きいと感じるのですが、単に共通の課題を設定して、それをシェアすれば済むかという、そうじゃないと思ったわけです。そうじゃなくて、学問のあり方自体を考えなおそうとしているEAAらしく、一歩踏み込んで、企業との協創関係自体も新しいやり方でやってみようとしたわけです。

8月にまず若いダイキンの社員の方々やEAAのプログラム生を集めて、東文研でマルクス・ガブリエルさんとわたしが出した本（『全体主義の克服』、集英社、2020年）を手がかりにやってみました。でも、単にその本を読むというのではなく、その本を通じて皆さんそれぞれがどのような問いを持って時代と切り結んでいこうとしているのかを問うてみたわけです。その後、EAAのリサーチユニットの伊達聖伸さん、國分功一郎さん、武田将明さん（いずれも総合文化研究科）という3名の方々にも徹底的に新しいかたちで議論を積み重ねていただきました。

そういった背景の下、「空気の価値化」という大課題をやはり私たちなりに受け止めなければいけないと思ったわけです。

価値の問題というのは、本当は学問が真正面から問わなければいけないのですが、中立性、あるいは科学性を強調することによって、価値に対しては、ある距離を取るというのがやはり主流だと思うんですね。案外、価値は脇に置かれてしまっているわけです。もちろん、特定の価値を振りかざして、この価値が素晴らしいんだと言うだけでは、学問として成り立たないわけですが、価値自体の概念化はやはりやっていかなければ

6)「Look 東大」はダイキンと東京大学の産学協創協定における取り組みの一つで、ダイキン社員が東大の研究者を訪問して、新しい研究協力の種子を共同で探ろうとする試み。



マルクス・ガブリエル
中島隆博著
『全体主義の克服』

LOOK東大 EAAデー【第2回/全3回シリーズ】
**「コロナ禍で変わってしまったこと、
 変わってはいけないこと」**



● 11月 5日(木) 13:00~14:30

● 國分 功一郎 准教授

「生存すること」「人間らしく生きること」は必ずしもイコールではない。「生存」にフォーカスしがちなコロナ禍だからこそ、「人間らしい生き方とは何か」を、立ち止まって考えることがとても重要である、と哲学者である國分先生は言っています。今回は、コロナ危機で「変わってしまったこと」「変わってはいけないこと」が何か、そしてそれはなぜか、についてお話いただけます。Withコロナにおけるビジネスの進め方、働き方を考える良い機会になれば、と考えています。

國分先生のご講義へ参加を希望される方は、こちらのリンクから申し込みフォームへアクセスしてお申し込みください。

【申し込み切/0中】

[お申し込みフォームリンク](#)

東大協創についての問い合わせ先:東大協創推進テーマ企画担当窓口



【国と東洋の倫理学】
 「国ではないか遠征だ」という現代の労働者から始まる倫理的、哲学的議論。ここでは「人徳論」を軸とした倫理観を、特定の視点から探求、論議し紹介していきます。

Look 東大 EAA デー
EAA 教員、EAA プログラム生、ダイキンの社員の方々を交え、価値の問題を真正面から問うた



井筒俊彦著
『イスラーム哲学の原像』
井筒は『イスラーム哲学
の原像』や『意識と本質』
でイブン・アラビーに依拠
して花の存在論を語って
いる

ばいけないだろうと思います。しかも、価値ではなくて、「価値化」と言っているわけです。価値はいったいどういふプロセスをたどって登場するのか。これはきわめて哲学的な問いでもあろうかと思ひます。しかも、そこに空気という、これは古来、西洋でも東洋でも、世界の最も基本的なエレメントの一つとして数えられてきたものですが、それを「価値化」していくというテーマが与えられているわけです。

空気のある種のコモディティー化、商品化によって、良い空気、質のいい空気を生み出せばいいのかというと、そんな単純なことではありません。ある場所の空気をきれいにするということは、別の場所に汚いものを放出するということであり、あるいは、熱を生み出してしまいます。そうすると、地球温暖化という大きな文脈では、やればやるほどマイナスになるわけです。そのことをダイキンの中心にいる方々は痛いほど分かっているわけです。ですから、一緒に議論していく中で、わたしたちが本当に考えなきゃいけないのは何なんだろうという話になりました。ヒューマン・コンディショニング、つまり、人間の条件に関与して、それを豊かにするような試みが空気を通じてできないだろうか、それこそがまさに新しい価値を生み出すのではないだろうかと思ひます。わたしはあえて「花する空気」という、日本語としてはあまりに耳になじみがない言葉を使ってみました。井筒俊彦がイランの研究をしていく中で、「存在が花する」という、非常に示唆的な表現をわれわれに届けてくれました。何か flowering、flourishing していくという表現は、単に可能性が実現するというだけでなく、わたしたちのそれぞれのありようが、自分たちだけではなく、その周りの条件も豊かにしながら、「花し」ていくことを意味します。こういう状況をつくるのができないだろうかと思ひたわけです。空気に焦点を当てるといふことは、空気を商品化することではなくて、それをわれわれのcommonsとして共有していくことだろうと思ひます。それによって環境問題にも貢献できるような、そういう道筋を作る。それが、ひいてはヒューマン・コンディショニングにもつながっていくだろうという提案をしました。ダイキン-東大産学協創協定の枠組みの中でも、ある程度のインパクトを持って迎えられるのではないかと思ひます。

大学も単に企業の資金を利用するのではなく、大学と企業が一緒になって社会をよましなものにしていく。その足場をつくるためにも、こういう概念化というのはたいへん必要だと思ひます。

わたしたちは、この秋学期に、この産学協創関係の中核のみならず、現場の教員や社員、そして学生までも巻き込みながら、パフォーマンスがなしかたでEAAの運動を共有していただきました。これこそは新たな産学協創のモデルの一つになるのではないかと思ひております。

張: 空気の話で言うと、空気の温度ではなくて、空気の爽やかさということが重要だと思ひます。これについては、和辻哲郎が『風土』の中で、

「我々は空気の爽やかさにおいて我々自身を了解している。爽やかなのは己れの心的状態ではなくして空気なのである」と言っています⁷⁾。だからこそ「いいお天気で、いい陽気になりました」というあいさつをするんですよね。これはきっとヒューマン・コンディションということにつながっていると思います。

王: 空気についてわたしが考えたのは、カール・シュミットが昔、『大地のノモス』の中で定義した3つのエレメントのことです。シュミットにとって、陸（ロシアを代表とする）と海（イギリスを代表とする）は、それぞれ今までの世界の中で別々の国民国家が代表してきた2つのエレメント的な政治的構造です。そこから戦争と平和の枠組みや、普遍性の概念、人間性についての多くの規定などが生まれました。それに関連して、価値と見なされているものは、海を代表的なエレメントとする国民国家と陸を代表的なエレメントと見なされている国民国家とは別のかたちで規定されていたと思います。

ところが面白いことに、シュミットは、空気という第三のエレメントについてあまり話していません。シュミットにとって、20世紀に空気というエレメントがもたらしたのは、単に戦争、あるいは国際的内戦に等しいものでした。なぜならば、空気は彼にとって、境界がないことに等しいものでしたから。したがって、空気を基本的な枠組みとしてどうやって線引きすべきかということが今後問題になるかもしれません。

これは新しい世界を創造することに通じています。EAAはただ東アジアに限定して思考するのではなく、東アジアから発する想像力に寄与しようとしているわけですから、この問題にも当然関わってきますね。国家のリミットとか、近代の想像力のリミットなど、多くのリミット（境界）を取り払いながら、しかも空気というエレメントを基本的な手がかりとして新しい世界を創造していくことがこれからの課題になっていくかもしれません。

明日の大学像を目指して

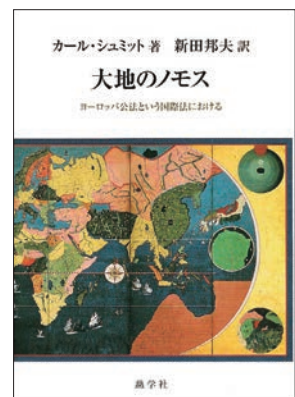
石井: 総じて、この一年の間、わたしたちはパンデミックという共通の経験を受け身でとらえるのではなく、その中から、その次の時代を見据えた新しい学問を模索すべきだと考えながら、文字どおりパフォーマンスにやってきたと言えますね。

その次の時代にはさまざま世界的な課題が山積しています。気候変動、テクノロジーと人間の関係などなど。その中で人間の条件を問い直す、ひいては、人間そのものを再定義する必要があるだろうということですし、そのプロセスにおいては、やはり価値という問題にどこかでぶつからざるを得ない。価値という概念をもう一度つくっていくべきだろうということですね。

7) 和辻哲郎『風土』岩波文庫版、1979年、26ページ



和辻哲郎著
『風土』



カール・シュミット著
『大地のノモス』



田村正資
[EAA特任研究員]

すべてが工学化されていくこと
では回収できないアクチュアル
な課題はたくさんある

2020年度のEAAの活動のひとつひとつが、こうした未来に備えた動きに直結していたとわたしは考えています。

そして、EAAが存在することができているのはこの大学という場においてですね。しかし、大学という場それ自体が新しい変化を迫られた1年でした。冒頭に中島さんから「社会的想像力」という言葉を出していただきましたけれども、大学自体が新しい変化を可能にしていくための社会的想像力を鍛える場であるという基本的な位置づけを再確認しつつ、EAAは大学の中で独自の役割を果たしていくべきであるとずっと考えながら、わたし自身はこの一年をがむしやりに過ごしてきました。

来年度以降はもう少し違ったフェーズに入らなければいけないと思います。経験をさらにより明確な理念のほうに昇華していく必要もあるでしょうし、同時に新しい具体的なチャレンジもさまざまなかたちで出てくるでしょう。その中で、いったいわたしたちはどこへ向かっていくのか、新しい課題はどこにあるのかを、中島院長にお聞きしたいと思います。

中島: この秋学期は、石井さんと一緒に、大学についてももう一度考え直してみるプロジェクトにも参画していました。その中で本当にいろんなことを考えさせられたのですが、その一つの中心にある問いは、知性の問題だという気がします。わたしたちはいったいいかなる知性を大学において花開かせようとしていくのか。今の大学のあり方は工学化しているという気がしています。ある種の計算と実験によって、評価がそこに浸透していくような、そういった知性のあり方で本当にいいんだろうかと大きな疑いを持っております。

工学的な知のあり方において、自分たちが世界を工学的な見方で埋め尽くしたこと自体に対する反省が実はあまりないですよね。それは知性のあり方として不十分ではないでしょうか。工学的な知のあり方自身がヒューマン・コンディショニングに多大な影響を与えているにもかかわらず、自己反省の契機が非常に乏しいこと自体がわたしは大問題だと感じます。そうじゃなくて、知性というのをもう1回考え直してもいいんじゃないか。知性という概念の歴史をたどっていくといろいろ出てくるわけですが、わたしたちが知性の下にどういう概念をもう1回問い直していくのかをくり返し考える必要があると思います。

田村正資 (EAA特任研究員): すべてが工学化されていくことでは回収できないアクチュアルな課題はたくさんあるとわたしも感じます。コロナに関しても、正直、大学は対応がすごいまくいった側の場所です。一方で、実際にコロナの影響を人生の一大事として受け止めざるを得なかった人たちがどう考えていたかについて、情報はたくさん入ってくるけれども、それを学問としてどのように受けとめるべきでしょうか。これは人工知能とかをどう考えるかということにもつながっていくと思います。

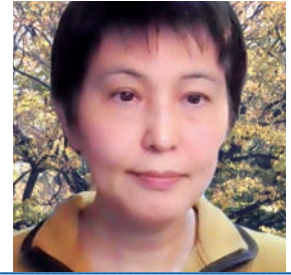
石井: これは、工学に対する批判ではないし、拒絶でもっとないですね。わたしたちは、工学的にもたらされたテクノロジーの恩恵を受けることによってこの一年を過ごしてきたわけですし、工学的な知の重要性はもとより強調するまでもないことです。わたしたちが、とりわけ「文系」と一般に称されている学問に従事しているわたしたちが取り組むべきなのは、工学的な知とそうではない知性とをどのように有機的に結びつけるのかを真剣に、そして、実践的に考えることです。そこで重要になるのは、総合的な知性の基礎に位置づけられるべきものとして、哲学を再定義することだと思います。そして、そうした有機的な結びつきが可能になるのは、ある種のスペース、「場」としての大学の役割を考えなおすことです。産学連携においても、そうした「場」を大学と企業が両面で支えていくような仕組みがあつていいと思いますし、先ほどの「Look 東大」と「空気の価値化」はそのための試みの第一歩だと言えます。

中島: 求められるべき知性について考える場合、今日もくり返し参照された、ジョルジョ・アガンベンの「生の形式」というのは、たいへん重要な概念だと思います。彼は、「いと高き貧しさ」とも言っています。これは今日的なある種の価値でもありますが、同時に古い概念でもあります。そういったものを捉え直す知性をEAAが前面に出していくことが改めて必要でしょう。そのためには、古い概念の徹底的な読み直しが必要だと思うんですね。古いものをただ持ってきてもしょうがなく、それをアクチュアルなしかたで読み直していかなければいけないと思います。そういうことを来年度以降、少しでも意識できれば、EAAの活動がさらに花開いていくんじゃないかと思っております。

おわりに

石井: そろそろ終わりの時間です。オフィスを支える立石さんと伊野さんからもぜひ一言いただけますか。

立石はな(EAA特任研究員): オンライン化された今年は皆さんの写真を撮らせていただく機会がすごく減りました。その中で、若手の方たちが企画したブックトークは屋外で行われると聞いて、写真を撮らせていただきました。でも屋外でも皆さんマスクをしていらっしゃるんです。それでも皆さんが活動している姿を少しでも撮りたいと思って、ちょっと粘って撮り続けてみると、マスクをしていても、表情は伝えられるんだなとわかってきました。こうしてマスクをして、折り畳み椅子を屋外に持ち出してでも対話を続けていたことも、大切な歴史になるはずですよ。そういう記録を残すこ



立石はな
[EAA特任研究員]

マスクをして、折り畳み椅子を屋外に持ち出してでも対話を続けていたことも、大切な歴史になるはずですよ



ブックトーク
若手研究者が分野・時代を越えて好きな本を持ち寄り野外で対話を続けた



伊野恭子
[EAA学術支援職員]

この経験をしたからこそ得られたものが、リベラル・アーツとしての東アジア学の構築に今後どのように活かされていくか楽しみ

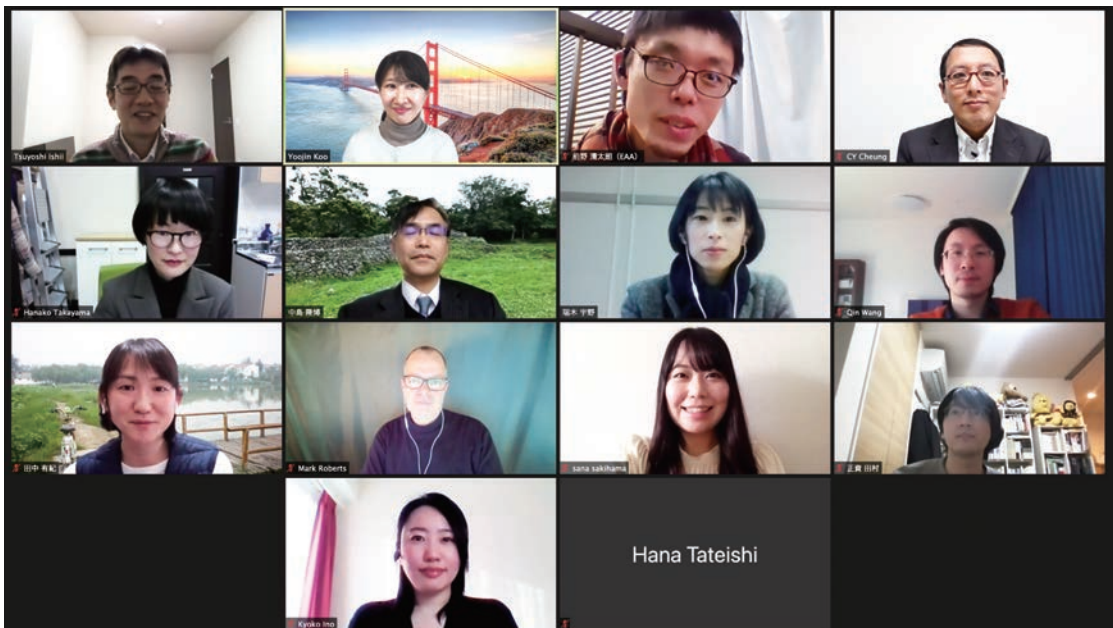
とも EAA の魅力を増すものになると思います。


伊野恭子 (EAA学術支援職員): EAA にコロナの第一報が届いてから一年、この間に私たちは教育・研究活動をいかにできるか挑戦し続けてきました。これはウィズ・コロナにおいても、ポスト・コロナを考える上でも、大きな希望になったと思います。この経験をしたからこそ得られたものが、リベラル・アーツとしての東アジア学の構築に今後どのように活かされていくか楽しみです。

石井: では、最後に院長からメッセージを頂戴できますか。

中島: 一年を振り返るということですが、単なる振り返りじゃなくて、皆さん自身が、自分たちが関わったことをもう一回文脈化して位置付け直していく、これ自体が学問のあり方ですね。そこにやっぱり意味があると思います。このようなプラットフォームを維持し続けることが今後、コロナの時代における EAA の重要な役割だと思います。

ただ、皆さん、肩に力を入れるだけでなく、ぜひ肩の力を抜くこともやってください。しばらくこのパンデミックは続くと思いますし、人生にはどうにもならないときというのはあるものです。そのときはやり過ごすことも大事です。だから、何かを前へ前へやるだけじゃなくて、引いてみるとか、スペースを空けてみることもとても大事です。そういう臨機応変さもぜひわれわれは身に付けて、しなやかにやっていければと思います。今日は本当にありがとうございました。





2020年度活動報告

歳時記

さいじき

時系列 ● INDEX

活動報告 ● 春 (4月～6月)

活動報告 ● 夏 (7月～9月)

活動報告 ● 秋 (10月～12月)

活動報告 ● 冬 (1月～3月)

時系列 INDEX

日時	活動内容	該当頁
活動報告書 ● 春(4~6月)		
2020.4.01	EAA 座談会「World Kyōyō-gaku (世界教養学) and Future Liberal Arts」	36
2020.4.10	第1回 学術フロンティア講義	39
2020.4.17	第2回 学術フロンティア講義	41
2020.4.22	EAA オンラインワークショップ「感染症の哲学」	43
2020.4.23	第1回「文学と共同体の思想」読書会	49
2020.4.24	第3回 学術フロンティア講義	51
2020.5.01	第4回 学術フロンティア講義	54
2020.5.02	第6回 中国近現代文学研究会	58
2020.5.08	第5回 学術フロンティア講義	59
2020.5.15	EAA 座談会「アーツの再定義」	62
2020.5.19	ヨーク大学 18 世紀研究セミナー参加報告	65
2020.5.22	第6回 学術フロンティア講義	67
2020.5.25	EAA・華東師範大学批評理論中心共催ワークショップ「伝染病と危機時代の文学と思想」	70
2020.5.29	第7回 学術フロンティア講義	73
2020.6.05	第8回 学術フロンティア講義	75
2020.6.06	第2回「文学と共同体の思想」読書会	78
2020.6.12	第9回 学術フロンティア講義	79
2020.6.19	第10回 学術フロンティア講義	82
2020.6.22	第1回 石牟礼道子を読む会	85
2020.6.26	第11回 学術フロンティア講義	86
活動報告書 ● 夏(7~9月)		
2020.7.03	第12回 学術フロンティア講義	92
2020.7.04	第3回「文学と共同体の思想」読書会	94
2020.7.06	第2回 石牟礼道子を読む会	95
2020.7.10	第13回 学術フロンティア講義	96
2020.7.14	EAA 座談会「テクノロジーの時代における人間の学問」	100
2020.7.15	東京学派ワークショップ「江湖・無縁・アゴラ——松方冬子『普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー』によせて、もういちど『自由』の在処を探す」	103
2020.7.20	第3回 石牟礼道子を読む会	106
2020.7.26	第3回「ジャーナリズム研究会」公開研究会	107
2020.7.30	EAA ウェビナー「コロナ危機と医療・介護政策過程」	110
2020.8.03	第4回 石牟礼道子を読む会	112
2020.8.15	第1回 日中韓オンライン朱子学読書会	114

日時	活動内容	該当頁
2020.8.17	第5回 石牟礼道子を読む会	115
2020.8.26	「哲学する」ためのレッスン：ダイキンの皆さんと試みる協働ことはじめ	117
2020.8.26	EAA オンラインワークショップ「感染症と文学」	120
2020.8.31	EAA ダイアログ 小林康夫氏×中島隆博氏	122
2020.9.03	羽根次郎『物的中国論』合評会	124
2020.9.04	EAA オンラインワークショップ「石牟礼道子の世界をひらく」	125
2020.9.05	研究発表/田村正資「空間の実存的特徴」(日本メルロ = ポンティサークル第26回研究大会)	130
2020.9.06	EAA Summer Institute 2020 Ice-breaking Session	130
2020.9.07	EAA Summer Institute 2020 (Day 1)	131
2020.9.08	EAA Summer Institute 2020 (Day 2)	133
2020.9.12	第4回「文学と共同体の思想」読書会	135
2020.9.14	第1回「東アジア音楽思想と術数」研究会	137
2020.9.14	第6回 石牟礼道子を読む会	138
2020.9.18	UTokyo-PKU EAA「東アジア教養学」プログラム生交流会	139
2020.9.19	第2回 日中韓 オンライン朱子学読書会	140
2020.9.20	第4回「ジャーナリズム研究会」公開研究会/国際ワークショップ	141
2020.9.25	第1回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	145
2020.9.28	第7回 石牟礼道子を読む会	146

活動報告書 ● 秋(10~12月)

2020.10.02-10.09	全学自由研究ゼミ「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」セッション1	150
2020.10.04	許紀霖『普遍的価値を求める——中国現代思想の新潮流』書評会	151
2020.10.06	オンラインカンファレンス「感染症に覆われた世界と18世紀研究の今」参加報告	152
2020.10.06	IAGS・EAA 共催セミナー「コロナ危機と自民党政権」	155
2020.10.09	第2回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	156
2020.10.12	第8回 石牟礼道子を読む会	157
2020.10.14	第1回 EAA ブックトーク	158
2020.10.16	第3回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	160
2020.10.16-10.17	成功人文講座「東アジア儒学の近代的転換」シンポジウム	161
2020.10.16-10.23	全学自由研究ゼミ「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」セッション2	162
2020.10.17	第5回「文学と共同体の思想」読書会	163
2020.10.23	第4回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	165
2020.10.26	「Look 東大・EAA デー」第1回参加記	165
2020.10.26	第9回 石牟礼道子を読む会	167
2020.10.28	第1回『天下的当代性』を読む会	169
2020.10.28	EAIHN Online Seminar Series (1)	170
2020.10.30	第5回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	171

日時	活動内容	該当頁
2020.10.30	「空間プロジェクト」キックオフ座談会	172
2020.10.30-11.06	全学自由研究ゼミ「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」セッション3	174
2020.10.31	第3回 日中韓オンライン朱子学読書会	175
2020.11.03	話す / 離す / 花す (1)	176
2020.11.06	第6回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	177
2020.11.09	「Look 東大・EAA デー」第2回参加記	178
2020.11.10	第2回 EAA ブックトーク	180
2020.11.10	話す / 離す / 花す (2)	182
2020.11.13	第7回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	183
2020.11.13	「Look 東大・EAA デー」第3回参加記	184
2020.11.14	中国社会文化学会・EAA 共催座談会 「天災と人禍——思想と宗教、そして文学と歴史から考える」	187
2020.11.14	EAA シンポジウム「東アジア音楽思想における和」	191
2020.11.21	EAA オンラインワークショップ「石牟礼道子と世界を漂浪(され)く」	192
2020.11.24	EAA Online Workshop “Identity, History, and Legal Mobilization: Focusing on Japanese War Orphans from China”	197
2020.11.24	第1回 101号館映像制作ワークショップ	198
2020.11.24	話す / 離す / 花す (3)	200
2020.11.25	EAIHN Online Seminar Series (2)	202
2020.11.27	第8回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	202
2020.11.27-12.04	全学自由研究ゼミ「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」セッション4	203
2020.11.28	第6回「文学と共同体の思想」読書会	205
2020.11.29	第2回『天地的当代性』を読む会	208
2020.12.01	「Look 東大・EAA デー」ラップアップセッション	209
2020.12.01	話す / 離す / 花す (4)	212
2020.12.02	[EAA Review-01] Gorai Shigeru, <i>Buddhism and Folklore: An Introduction to Buddhist Folklore</i>	213
2020.12.04	第2回 101号館映像制作ワークショップ	215
2020.12.04	第9回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	216
2020.12.05	第4回 日中韓オンライン朱子学読書会	217
2020.12.05	インターネット学術対談「サイノフォン文学からサイノフォン哲学へ」	218
2020.12.07	中国社会文化学会・EAA 共催座談会「中国の近代と疫病」	220
2020.12.09	[EAA Review-02] Hiroshi Watanabe, <i>A History of Japanese Political Thought 1600-1901</i>	222
2020.12.11	第10回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	223
2020.12.11	国際シンポジウム「ライシテから「分離主義」へ ——1905年12月9日法問題からみるフランス社会と共和主義」	224
2020.12.11-12.18	全学自由研究ゼミ「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」セッション5	226
2020.12.12	研究発表/宇野瑞木『嶺南摭怪』と洞天思想——北ベトナムの山岳信仰の変遷 (説話学会シンポジウム「ベトナムの漢文説話を読む——『嶺南摭怪列伝』を中心に」)	228

日時	活動内容	該当頁
2020.12.14	第10回 石牟礼道子を読む会	229
2020.12.16	ヒューム『自然宗教をめぐる対話』(1779) 新訳刊行記念ワークショップ 「18世紀の対話篇を読む／論じる／翻訳する」	230
2020.12.16	EAIHN Online Seminar Series (3)	234
2020.12.17	話す／離す／花す (5)	235
2020.12.18	第3回 101号館映像制作ワークショップ	237
2020.12.18	第11回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	238
2020.12.19	[EAA Review-03] Tadashi Yanai, <i>An Anthropology of Images</i>	239
2020.12.20	GSI キャラバン研究プロジェクト公開シンポジウム “Questioning the Idea of a “Small Nation” in East Asian Contexts”	240
2020.12.21	EAA・華東師範大学批評理論中心共催シンポジウム 「歴史、社会、文学批評：中国現代文学研究の方法及び射程」	242
2020.12.21	第11回 石牟礼道子を読む会	244
2020.12.22	EAA ダイアログ 張政遠氏×石井剛氏	246
2020.12.22	第3回 EAA ブックトーク	247
2020.12.22	東京大学経済学部資料室 アダム・スミス文庫見学会	249
2020.12.25	第12回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	251
2020.12.25- 2021.1.8	全学自由研究ゼミ「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」セッション6	252
2020.12.26	EAA オンラインワークショップ「感染症——歴史と物語とのはざままで」	254
2020.12.28	[EAA Review-04] Riko Imahashi, <i>Japanese Bird-and-Flower Paintings: The Intersection between Natural History and Visual Culture in the Edo Period</i>	256
2020.12.30	話す／離す／花す (6)	258

活動報告書 ● 冬(1月～3月)

2021.1.04	話す／離す／花す (7)	262
2021.1.05	話す／離す／花す (8)	263
2021.1.08	第13回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	264
2021.1.09	王璞氏講演会「団結於遠方——革命世紀和中国作家的旅行書写」	265
2021.1.10	第8回「痛みの研究会」	266
2021.1.12	話す／離す／花す (9)	268
2021.1.13	第4回 101号館映像制作ワークショップ	270
2021.1.18	第12回 石牟礼道子を読む会	271
2021.1.20	姜涛氏講演会「“新的抒情”——何其芳『夜歌』中の“心境”与“工作”」	273
2021.1.26	話す／離す／花す (10)	274
2021.1.29	倪文尖氏講演会「風格・文気・体式——如何着手研読散文」	276
2021.2.01	第13回 石牟礼道子を読む会	276
2021.2.05	第5回 101号館映像制作ワークショップ	278
2021.2.06	国際シンポジウム「朱子学の過去と未来」	280
2021.2.08	EAA Art History Seminar in English	283
2021.2.10	EAIHN Online Seminar Series (4)	284

日時	活動内容	該当頁
2021.2.14	鵬程万里 01: RA 任期を終えて—高原智史	286
2021.2.14	鵬程万里 02: RA 任期を終えて—胡藤	287
2021.2.14	鵬程万里 03: RA 任期を終えて—張瀛子	288
2021.2.14	鵬程万里 04: RA 任期を終えて—建部良平	290
2021.2.15	EAA オンラインワークショップ「コロナ危機と規制・財政政策」	291
2021.2.15	第14回 石牟礼道子を読む会	293
2021.2.17	第4回 EAA ブックトーク	295
2021.2.20	EAA シンポジウム「哲学としての書院」	297
2021.2.22	文運日新 01: 離任にあたって—若澤佑典	301
2021.2.26	第6回 101号館映像制作ワークショップ	303
2021.3.09	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第1回 世界哲学史の可能性：中国とヨーロッパを付き合わせる	305
2021.3.09	話す / 離す / 花す (11)	310
2021.3.09	ソウル大学日本研究所セミナーに参加して	312
2021.3.10	EAA オンラインシンポジウム「30年後の被災地」	313
2021.3.12	第7回 101号館映像制作ワークショップ	316
2021.3.14	第5回「ジャーナリズム研究会」公開研究会	317
2021.3.16	第1回 EAA 修了式	319
2021.3.16	第1回 部屋研究会	
2021.3.16	第2回 単著ブックレットミーティング	
2021.3.17	EAA 国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」	321
2021.3.20	第5回 日中韓オンライン朱子学読書会	
2021.3.21	第9回「痛みの研究会」	
2021.3.22	EAA Online Workshop “Identity and Movements”	
2021.3.24	第5回 EAA ブックトーク	
2021.3.25	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」第2回 世界における日本哲学を再考する	
2021.3.31	EAA ダイアログ 宮本久雄氏×中島隆博氏	
2021.3.31	EAIHN Online Seminar Series (5)	

2020年度活動報告



春 ● 4月～6月

World Kyōyō-gaku (世界教養学) and Future Liberal Arts

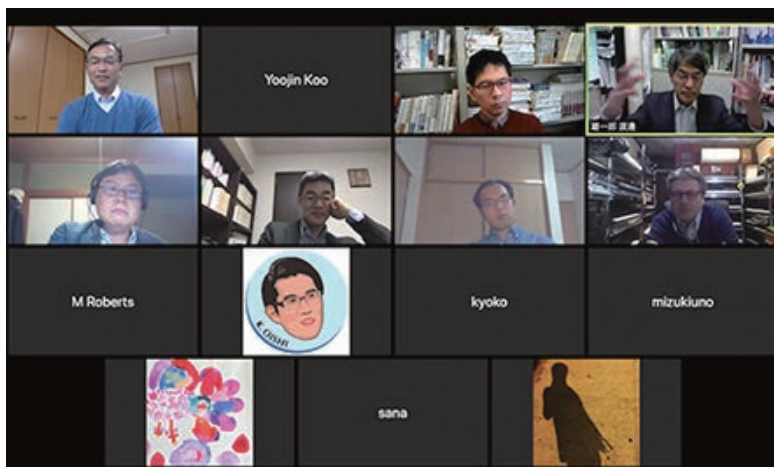
2020年4月1日

2020年4月1日、本年度第1回目となるEAA座談会——Roundtable Discussion “World Kyōyō-gaku (世界教養学) and Future Liberal Arts” が開催された。COVID-19流行に伴い東アジア藝文書院(EAA)にとって初の試みとなる、Web会議サービス「Zoom」を使用したオンラインでの開催となった。

実験的な試みということもあって本イベントはクロードで行われた。7名の登壇者とEAAスタッフ8名の合計15名がディスカッションに参加した。冒頭で、この4月より新たにEAA院長に就任した中島隆博氏(EAA院長)より、本イベントの趣旨についての説明がなされた。「世界教養学」とは、EAAが昨年度より模索してきた新しい学問の形——「世界哲学」「世界文学」「世界人間学」——の変奏形である。「世界」と「教養」、そして「学」という概念を複合(compound)することによって、わたしたちはどのように既存の近代的な学問の枠組みから脱出し、ともに自由に思考することができるようになるか。ラウンドテーブルでは、専門分野の異なる6人の発表者(石井剛氏、大石和欣氏、渡邊雄一郎氏、ジョナサン・ウッドワード氏、岡田

泰平氏、井上彰氏)がこの挑戦的な問いに対して、各々の見地から応答した。分野横断的な会議がオンライン上で可能なかどうかという不安をそれぞれ抱えてはいたが、結果として画面越しの関係性は思った以上にフラットかつオープンなものであった。

まず、石井剛氏(EAA副院長)が“A Place for Promoting Hope: Redefining Komaba’s Kyōyō”と題した発表を行った。日本の敗戦後、1949年に東京大学教養学部が設置された。戦前の第一高等学校の「教養」精神を引き継いだこの学部は、「駒場」の愛称で親しまれ、1990年代に全国各地の大学で教養課程が廃止されたのちも、個別の専門領域を横断するリベラル・アーツの在り方を模索する最先端の現場たることを目指してきた。1949年の設置当時、教養学部はCollege of General Educationと英訳された。その後1983年にはCollege of Arts and Sciencesと名称を変えたが、日本語名である「教養学部」は変更されずに現在まで維持されている。石井氏は、このことを受けて「教養」という概念によって意味されるものは固定されておらず、それ自身が“develop”(展開)す



Web会議サービス「Zoom」上に集った参加者たち



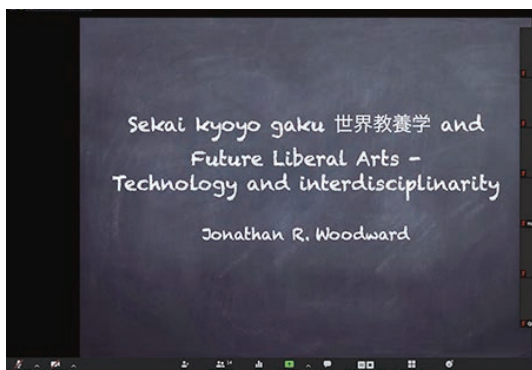
登壇者7名によって、画面越しに活発なディスカッションが繰り広げられた。

るものであると述べた。同氏は中国哲学で議論されている「野」から「文」へ、あるいは「人」から「仁」へ、という変容のプロセスについて触れながら、「教養」もある状態から別の状態への変容を可能にする場として捉えることができるのではないかと提言した。この変容は、ジャック・デリダによる“professor”の定義に見られるように、世界に向けて発信する (profess) という意思こそが重要であり、その意味において、変容とは決して独りきりで成し遂げうるものではなく必ず他者を必要とする (co-becoming) と石井氏は述べた。

続いて発表した大石和欣氏 (総合文化研究科) も日本における「教養」概念の変遷に言及しつつ、その新たな展開の可能性を探った。「教養」とは1900年代、主に高等教育の現場で西洋から輸入された概念である。しかし、駒場の教養教育で追求されている「教養」とは、決して西洋における「教養」概念 (例えばドイツ語における“Bildung”) を無批判に前提としているわけではない。グローバル化する社会において、わたしたちは複数の困難な課題に晒されている。このような状況下で「教養」を考える際、従来の人間中心主義は再考される必要がある。しかし、このことは人文学 (humanities) の遺棄を決して意味しない。より重要なのは、社会科学や自然科学といった、他領域の学問との組み合わせである。これについて中島氏は、“personal”という概念の重要性を主張した。中島氏によれば“personal”とは、public (公) と private (私) という二項対立に属しない領域のことを指す。そして「今ここにある」という「このもの性」

に立脚しつつ、世界と関わる在り方を模索することこそが、「世界教養学」に求められているのではないかと述べた。

次に渡邊雄一郎氏 (総合文化研究科) が、自身の専門分野である植物分子生物学の見地から、「世界教養学」の展開とその可能性について述べた。渡邊氏は人間と自然界という二項対立に疑問を投げかけた上で、生物学における還元主義 (複雑な構造を、分解可能なレベルにまで還元して考える態度) の限界を指摘した。例えば、ヒトは約2万個の遺伝子を持つことが明らかにされたが、そのことによって、人間はなぜこのような構造を持っているのかという問いに答えることはできない。より重要なのは、得られた膨大なデータを用いて何をどのように考えるかということであり、そのためには、分子・個体・生態系という、別の階層とされるもの同士をまたぐ視点が必要であると渡邊氏は論じた。こうした視点の獲得は、人間と自然界を二項対立的に捉える西洋近代的な発想からの脱出を伴う。これに関して中島氏は、哲学者のトマス・カスリス氏による“detached knowledge” (観察者が観察対象を自らと切り離し、客観的な分析を試みることによって得られる知識) と、“engaged knowledge” (観察者と観察対象という二項対立ではなく、事象そのものの中に自ら飛び込み、巻き込まれることによって得られる知識) という概念を紹介した。中島氏は渡邊氏の目指すものは、カスリス氏が言うところの“engaged knowledge”であり、自然科学と人文学を同時に考えるような試みであると指摘した。



発表者のスライドを画面共有しながら議論するシーンも。画像はウッドワード氏の発表スライドから。

コーヒープレークのあと、まずジョナサン・ウッドワード氏（総合文化研究科）が技術（technology）と領野横断性（interdisciplinarity）をキーワードとした発表をした。自分自身が Ph.D. を取得するまでに化学を中心に受けた高等教育の経験を語ったあとで、ウッドワード氏はイギリスでの分野横断型プログラム（i-science）の取り組み、そして現在 PEAK で、化学を通して様々な学生の研究指導をしている状況を説明した。質疑では、科学技術の時代に、未来の可能性ではなく希望をどう豊かにできるのか、といった問いや、方法論に基礎を置いた教育とどのような学生を育てたいのか、といった事柄についてやりとりがなされた。

それから岡田泰平氏（総合文化研究科）が発表を行った。エドワード・ハレットの『歴史とは何か』（1961年）の引用からはじまり、「近代の超克」とは違う形での「普遍」の可能性を探る中島氏の姿勢にも言及しつつ、「普遍」を考えるために、まず実際の現場や具体的な事例に目を向けることの意義と、様々な差異に目を向ける重要性を、地域研究を専門とする歴史学者の立場から主張した。これについては、現実の複雑さに具体的にどう対応するのかといった問いや、AI のシンギュラリティが到来した後に誰が歴史を書くのか、といった議論が交わされた。

最後は井上彰氏（総合文化研究科）の発表であった。井上氏は新しい教養学のために必要な視点として、個人中心ではなく、チームのためのリベラル・アー

ツ教育の必要性と、人文学でも共同研究をととして共同論文を執筆する形を提案し、知識中心の教育からの転換と、異なる人たちとの共同が求められていることを述べた。これに対しては、具体的な組織の実現可能性や、人文学におけるチーム型研究の前例について質問があがり、関西人のノリのよさや、イギリスでのティータイム、パブ文化といったものの果たす役割が言及された。

登壇者7名によって、画面越しに活発なディスカッションが繰り広げられた

おおよそ定刻になったあと、参加者が一言ずつコメントを述べ、閉会した。全体として、「世界教養学」というよりも「教養学」をめぐる議論になっていたことが印象的であり、それは駒場の現在の状況を反映していたからではないかと思う。

EAA ではじめて Zoom を用いたイベントだったが、発言者以外はミュート機能を用いるといったこともスムーズに準備された。終始画面に自分自身を映している人もいれば、発言するときだけ顔を出す人、終始顔を出さない人もいた。途中で中座する人もいた。機材的に大きなトラブルはなかったように感じたが、画像や音声から判断するかぎり、それぞれの機材動作環境はそれなりに異なっていたようだ。物理的におなじ空間に一緒にいないため、自分の声が相手にどのように伝わっているのかわからず、また相手の声の聴取に集中する必要があり、かぎられた情報から相手の気配を読み解くために、独特の緊張感や疲労感もあった。休憩がもう少しあってもよかったかもしれない。Zoom にかぎらず、遠隔でのコミュニケーションについては、試行錯誤を繰り返し、よりよいかたちを手探りすることになりそうである。しめくりの中島氏が言ったように、生のかたち（form of life）を変える次元から、こうした探求をするための（ときにはお茶を飲みながらゆっくりと語る）プラットフォームは今後いつそう必要となるだろう。

報告者: 崎濱紗奈 (EAA 特任研究員)
高山花子 (EAA 特任研究員)

第1回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

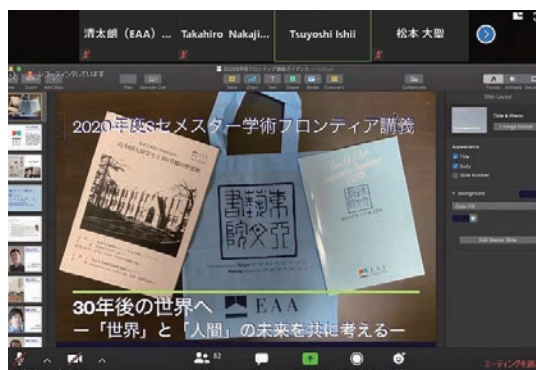
2020年4月10日

2020年4月10日、今年度第1回の学術フロンティア講義「30年後の世界へ——「世界」と「人間」の未来を共に考える」がオンライン会議アプリ「Zoom」上で開かれた。初回となる今回は参加学生に向けてのオリエンテーションである。

本講義コーディネーターでもある石井剛氏（EAA 副院長）からの簡単なあいさつに続けて、今年度から新しく東アジア藝文書院（EAA）院長へ就任した中島隆博氏（EAA 院長）からのメッセージが伝えられた。中島氏は、西洋近代中心の学術には、光とともに影があったとし、その潮流の中で進められた初期のグローバル化は、第1次世界大戦やスペイン風邪に応じて変化し、ついには日本も含め全体主義化した国が現れ、世界は分断されてしまったとした。それを繰り返さないためには、若い人と新しい言葉、新しい概念を作るしかない、それを通じて西洋近代の限界を乗り越える。EAAは北京大の他、オーストラリア国立大学、ソウル国立大学、ニューヨーク大学、ボン大学と協定を結び、世界共通の課題に対応しようとしている。本講義の主な対象は学部生、とくに1年生だが、そのような若い人が30年後を切り開くはずで、その知のプラットフォームになりたい。何ができるかよ

りも、何を望むか。可能性を広げるだけでなく、それを超えて、どういう社会を望むかが問題であるとし、最後に「ようこそいらっしゃいました」との言葉で話を結んだ。

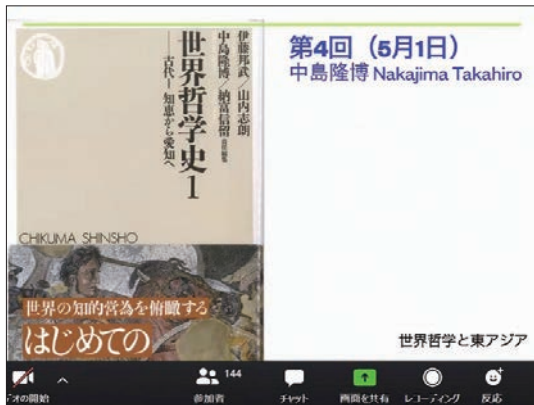
続いて石井氏から本講義の開講主体であるEAAのロゴについて説明があった。まず、ロゴのパーツが「何に見えますか」との問いに、学生からは「家に見える」、「翼では」、「のれん」、「本」、「栞」という意見が出た。学生の答えに対して石井氏は「原稿用紙の真ん中」や「本のページの折り目」にある「魚尾」とよばれる部分について触れ、東アジアでは、「魚尾」で本を綴じるといふ共通点があったことにちなんだデザインであると説明した。「魚尾」の下には、開かれた家があり、またその下には土がある。「魚尾」が赤と青でできていること、それは北京大と東大のカラーであると共に、火と水をあらわしており「火と水の不可能な結婚」を示すものと中島氏から更なる説明があった。中島氏は、火と水とは、世界を構成する根源的なエレメントだとし、その2つがぶつつかると何が起きるか、ということから世界を考えようとするものだとした。根本的なエレメントを考えるとき、思考は解き放たれる。ここでもう1つのエレメントとしての「花」と、世阿弥の『風



講義スライドより抜粋 (1)



講義スライドより抜粋 (2)



『世界哲学史』（全8巻、ちくま新書）

娑花伝』に言及があった。そして石井氏から改めて古典『淮南子』のテキストを引いて、エレメントとしての火と水について説明がなされた。

「東アジア発の新しいリベラル・アーツ」に話は移り、これから先の人類社会の変化につき、どういう世界に「なる」のかではなく、どういう世界を「つくる」のかが問われると述べられた。そもそも「世界」とはなんだろうか。地球、宇宙、その外にも「世界」はあるだろう。どこからどこまでが「世界」であるのか。「人間」と「自然」、「機械」の区別はどうか。「技術」により、「人間」が「生まれる」、「死ぬ」ことの境界線があいまいになっている。いままさに、こうしてネット回線を通じて授業が行われているが、「人と人との間」としての「人間存在」はどう変わるだろうか、コミュニケーションはどうなるだろうか。食物を食べて、生きている人間は不可避免的に「自然破壊」をしなければ生きていけないが、そのことは変わらないだろうか。周囲の自然、環境との間にあって、成り立っている「人間」だが、そこにはハーモニーだけでなく、衝突もある。

最後は講義全体のスケジュールについての説明である。第3回（4月24日）は田辺明生氏（総合文化研究科）。インドをフィールドとする文化人類学者で、「人新世時代の人間を問う——滅びゆく世界で生きるということ」という題。題目の提示は今年1月頃だったというが、奇しくもタイムリーな話題になってしまった。第4回（5月1日）は中島隆博氏。「世界哲学と東アジア」という題。関連して、中島氏から刊行中

の『世界哲学史』（全8巻、ちくま新書）について、西洋近代にばかり閉じた学問としてではない「世界哲学」が構想されているとの説明があり、石井氏からも今の状況において哲学、そして人文学が求められているとの言葉があった。

第5回（5月8日）は武田将明氏（総合文化研究科）。「小説と人間——Gulliver's Travelsを読む」という題。現在カミュの『ペスト』がトレンドとなっているが、武田氏はデフォー『ペストの記憶』の訳者でもあり、「世界文学」について論が展開される。第6回（5月22日）は羽田正氏（東京カレッジ長）。羽田氏は昨年度までEAA 院長であった。「30年後のための世界史」という題。「世界史」をグローバルヒストリーとするか、ワールドヒストリーとするかが問題となるという。第7回（5月29日）は四本裕子氏（総合文化研究科）。「脳科学の過去・現在・未来」という題。第8回（6月5日）は張政遠氏（香港中文大学）。「30年後の被災地、そして香港」という題。張氏は日本哲学が専門。東日本大震災の被災地と香港をつなげて論じる。第9回（6月12日）は橋本英樹氏（医学系研究科）。「医療・介護の未来」という題。人口減少社会となることで、社会はどう変わるか。「死ぬ」のが難しくなる時代になってどうなるか。中島氏から、「テンミニッツTV」（<https://10mtv.jp/covid-19/>）で、橋本氏が「新型コロナウイルスの克服」という講義をしていることが示された。第10回（6月19日）は伊達聖伸氏（総合文化研究科）。「宗教的／世俗的 ディストピアとユマニズム」という題。「世界宗教学」についての話が聞けるとされたところで、中島氏からそれは「民族宗教」と対比される場所の「世界宗教」とは別なものとの補足があった。第11回（6月26日）は石井剛氏。「中国」と「世界」：どこにあるのか?という題。第12回（7月3日）は王欽氏（総合文化研究科）。「Potentiality and Literature in the Era of Artificial Intelligence」という題。最近刊行された王氏の *Configurations of the Individual in Modern Chinese Literature* (Palgrave Macmillan, 2019) についても言及された。第13回（7月10日）は國分功一郎氏（総合文化研究科）と熊谷晋一郎氏（先端科学技術研究センター）。「中動態と当事者研究：仲間と責任の哲学」

という題。対談形式で行われる予定という。

最後に石井氏から、このようなストレスフルな毎日、肩肘張らずにこの授業の中で気晴らしを、続けて中島氏からは、一日一回でも自分をゆるませる、リラックス

させる時間をもつこと、とのアドバイスがあり、この日の講義は終えられた。

報告者:高原智史(EAAリサーチ・アシスタント)

第2回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年4月17日

2020年4月17日、今年度の学術フロンティア講義「30年後の世界へ——「世界」と「人間」の未来を共に考える」の第2回として、学生との「インタラクティブ・セッション」がオンライン授業で開かれた。当日の講義では前回紹介した東アジア藝文書院(EAA)の主旨と活動について参加者から受けた様々なリアクションに対し、EAAスタッフが応答する形をとった。

なぜ「友情」か？

石井剛氏(EAA副院長)がコーディネーターとなりEAAスタッフ一同の自己紹介が終わった後、第1の問いが挙げられた。前回の講義で言及され、かつ『日本を解き放つ』(小林康夫・中島隆博、2019年)でも語られていた「友情」の意味について、更なる説明を求めるものだった。

若澤佑典氏(EAA特任研究員)は、すぐに答えられない質問は人を狼狽させるものだが、それは良い問いであり、積極的に問いを続けることを呼びかけた。そして質問者の問いを「30年後の世界」の文脈に置き、自分の世界に入り込まず、全体像と他人の考えを知ってこそ人は進化する、そのための「友情」だと答えた。前野清太郎氏(EAA特任助教)は、自分の海外フィールドワークにおける世話と孤独を語り、海外に行くこと自体ができなくなっている現状だが、若い世代には他者と関わる機会を掴んで欲しいと願った。

中島隆博氏(EAA院長)によれば、友情には人間に起こった変化を良い方向へ導く力がある。人間は誰かと一緒にないと変化は起きず、若者はあらゆる方向に変化している。しかしその方向には良いものも悪いものもあり、単なるコンフリクトに終わってしまう恐れもある。EAAは互いを良い方向へ変容させる技術を皆に身につけて欲しいのであって、そのプラットフォームを提供するのだとした。

価値判断はするべきか？

変容に良いものと悪いものがあるなら、その判断基準は何だろうか？ 続いてのリアクションは経済学部の学生からのもので、「科学は価値判断を持たないが、価値観の面では人文学が強い。その価値判断の力を持ちたい」と講義参加の思いを述べた。すると別の学生からも質問があげられた。「価値判断は人それぞれである。人文学、例えば歴史学は、具体的な例を取り上げることはできても、普遍的な価値へ踏み込むことはできるのだろうか」と。

石井氏はこの問いをオープン・クエスチョンとした。価値中立は近代において「科学」の条件となったが、グローバリゼーションのもと生じる人々の衝突状況にあって、善と悪とは何であるのか、何が求められているのか、参加者全員に思考を求めた。

中島氏は、ここで古代ギリシア哲学の研究者である納富信留氏の議論をヒントに挙げた。ギリシア哲学にあっては2種類の『よい／よく』が語られる、「人生



中島隆博氏 (EAA 院長)



石井剛氏 (EAA 副院長)



若澤佑典氏 (EAA 特任研究員)

を『よく』生きる』に使われる「よく」は名詞というより副詞的である。「『よい』と『悪い』を名詞的に区別すると、他文化と交流する出口がなくなってしまう。しかし価値相対主義に陥っては、例えば子供を虐待することを我々は到底『価値』として認められない。科学の価値中立性については議論がある。副詞としての『よく』は、これらの局面を打開するヒントになるのではないか」。

人文学は役に立たないのか？

副詞としての『よく』を考えること。それは生きることにとって実際は欠かせない価値判断と向き合うことであり、人間にとっての人文学の存在意義を問うことであろう。「自分の専門である農業は人の活動。そのために人文学を知っておきたい」と言うリアクションに対し、前野氏は技術導入におけるコミュニケーションと人文知的な価値観の意義を肯定した。

次に石井氏が取り上げたのは、古代ローマ史に感心する学生からの歴史学に対する問いであった。例えば歴史家は100年前のスペイン風邪を研究するが、それは今回のパンデミックにとって何の意味があるのか。子供に歴史の意味を問われたらどう答えればいいのか。これによって人文学的学問全体の存在意義を考えた。

崎濱紗奈氏 (EAA 特任研究員) は、進学の道を選んだ頃の自分の心境を切り口にこの問いに答えた。自分が一番知りたいことは何か、それは社会にとって何の役に立つのか。「1つ言うのであれば、人文学という視点は少なくとも100年のスパンを心の中に持っている。自分がやっていることはすぐ役に立つことでは

ないが、より長い時間の視野に立ってこの世界を俯瞰する、それが人文学の強みだ」と語った。

誰のための学なのか？

前の質問について、ある学生から次のような体験があげられた。彼によると、かつて中国の北京大学の学生と交流したことがあるが、深く印象に残った事が1つあるという。それは「目の前の瀕死のホームレスに歴史を教えるべきか」という命題に対し、北京大学の学生は教えるべきだと答え、歴史は「社会で生きていくために必須」なものと主張していたという。

これには3つの解釈が学生たちから示された。1つ目は社会の構成員にとっての歴史であり、社会を知るために歴史は必要だとする。例えば日本の場合ならば、憲法制定についての歴史は知っておくべきではないのか。2つ目は、中国の歴史書に見られる自国と世界の区分を例に、国や社会のあり方と歴史の関係を指摘すること。そこで生じるまたは生じてしまう国ごと社会ごとの違いの中に歴史学の価値があるのではないか。

第3の解釈は、社会にとっての有用性を人文学の存在意義にすること自体に対しての疑問であった。全てのものが社会にとって必要であるべきだと思わないし、有用性という基準から外れた人や物の「ポケット」となり、必要でなくとも個人を豊かにしてくれるもの、そのようなものとしての人文学があってもいいのではないか。

石井氏は一連の議論に対して、人文学は人間が生きていく中で重要な場面に現れるのではないかと、自分の考えを示した。何かを想像して進まなければなら

ない時、きっかけとして役に立つのが人文学であり、この点では友情とも似ている。見知らぬ人びとと友情が出来た時、私たちは生きていく方法をも知るのだと。

これからの読書と人文学

講義の終わりには、大学時代における読書についての質問があった。とくに「小説を読むこと」へ意見を求められたのは中島氏であった。中島氏は、概念が分かれば読める専門書と違い、作家が概念を構想していく小説を読むのは難しいと答えた。その上で、情報としての知識はもちろん重要だが、大学生活では異なる概念の作り方を経験してみてもどうか、様々なタイプの本を読むだけでなく、文字に限られない読書、映像や感覚による変容も重要であって、「学部時代にどこまで触れられるか、色々試して欲しい」と結んだ。

最後の質問は、今年の学術フロンティア講義に登壇の講師陣の中で、脳科学を専門とする四本裕子氏（総合文化研究科）は若干異色に感じるというものだった。石井氏によれば、これはEAAの主旨を示すもので、「脳科学は人文学と関係ない」と言われるような従来の人文学を続けるのではないこと、私たちの知的基礎およびディシプリン自体を考え直す理念を示している。さらにいえばEAAが冠する「東アジア」さえも言語や思考の出発点に過ぎない。「皆さんはディシプリンが形成される前、すなわち最先端にいる」のであって、本講義を通じ、人文学には何の意味があるのか、根本的な問いに揺さぶられ、たじろぐ経験をし、分かち合いたいのである。「来週から正規の授業、是非聴きにきてください」と告げて講義は締めくくられた。

報告者：張瀛子 (EAAリサーチ・アシスタント)

EAAオンラインワークショップ

感染症の哲学

2020年4月22日

2020年4月22日、EAA オンラインワークショップ「感染症の哲学」がZoomのウェビナーを通して開催された。本ワークショップは、今まさに世界中が直面している新型コロナウイルスのパンデミック的な事態について、日本・韓国・香港に身を置く6名の哲学研究者が論じ合うという刺激的な試みであった。時宜を得たテーマということもあり、多くの参加者がウェビナー上に集い、Q&Aの掲示板も含め闊達な議論が交わされた。

最初に、司会の石井剛氏（EAA 副院長）からパネリストの紹介があり、それぞれが自宅や大学の研究室などから顔を映し出し、簡単な挨拶をする形で始まった。

続いて、中島隆博氏（EAA 院長）による開催趣旨では、まず東京大学と北京大学の共同教育研究プロジェクトである「東アジア藝文書院（EAA）」の名前の由来について、漢代の学問の枠組みを示す「藝文」

という古い言葉には、東アジアから新しい学問の在り方を構想したいという熱意が込められていることが説明された。その上で、今このパンデミックというわたしたちの社会的想像力がまさに根底から問われる事態において、学問、とりわけ哲学がいかに貢献し得るのかという問題を議論し合う場として、本ワークショップが企画されたことが示された。

その後、3パネルに分かれ、およそ3時間にわたる白熱したディスカッションが繰り広げられた。全体としては、感染症と政治、国家権力、共同体の在り方が議論の中核を成した印象であるが、各パネルにおいて、大まかに（1）ウイルスのもたらす共同性にまつわる諸問題、（2）身体性の阻害と人間の条件を中心とした議論、（3）「書く」という人間の行為を中心とした議論が特に前景化したように思われる。以下に各発表について簡略ながら紹介したい。



Zoom のウェビナー画面：上段右から左に、中島隆博氏、石井剛氏、王欽氏。
下段右から左に、張政遠氏、金杭氏、國分功一郎氏。

—— パネル1 ——

中島隆博（EAA院長）

「Democracy in Pandemic：パンデミックの中のデモクラシー／パンデミックになったデモクラシー」

最初の発表者である中島隆博氏は、昨年の秋から対話を交わしてきたというドイツの哲学者マルクス・ガブリエルの「形而上学的なパンデミー [すべての人々] としての地球市民・世界市民」という考え方から出発した。そこから、中島氏は、今のこの事態は「パンデミック」というあらゆる人々に関わる状況においてデモクラシーを考え直していく機会になり得るのではないかと提起する。

しかし実際に何が起きているかといえば、世界は国際的連帯によるデモクラシーよりも国家的な統制の強化であることは明らかである。それは3.11以降、特に露呈してきていた現行システムの様々な弊害（格差・差別・非倫理的な大量消費、制度疲労、神話化された科学主義など）の1つ1つに対して、結局真剣な「手当」がなされてこなかったことに起因すると中島氏は指摘した。

その上で、100年前のスペイン風邪のパンデミックな流行の前後の出来事を振り返った。初のグローバル経済の発展がもたらした社会主義とナショナリズムの高揚、第一次大戦への突入、そして1918年から19年にかけてのスペイン風邪の大流行、その後世界

は全体主義から分断へと突き進んだ。中島氏は、今わたしたちが直面している状況は100年前と重なるとしながらも、別の社会的想像力をもって、決して同じ轍を踏まないようにしなくてはならないと強く訴えた。

そのためには、先人の深い思索から学ぶことも重要となるはずである。最後に中島氏が取り上げたのは、関東大震災の後に書かれた寺田寅彦の「災難雑考」（1935年）における、災害が人為的であるがために人間を支配するという示唆深い一文であった。

王欽（EAA特任講師）

「“Une euphoric fragile”：共同的なものとしてのウィルス？」

王欽氏の発表は、新型コロナウイルスをめぐるアガンベンやナンシーの論考を中心的に取り上げながら、ここ数か月の中国での状況について「共同性」の問題に着目して論じたものであった。アガンベンは、2月26日にIl Manifesto紙に発表した論考（「根拠薄弱な緊急事態によって引き起こされた例外状態」）の中で、イタリア政府に対し「根拠薄弱な緊急事態」によって「伝染病の発明」をしたという強い言葉で糾弾したが、ナンシーをはじめとした知識人たちが反論を受けた。王氏のタイトルにおける「Une euphorie fragile（脆弱的な陶醉）」は、そのナンシーの論文「ウィルスの例外」に出てくる言葉で、ウィルスが私たちの

一体性や連帯を想起させ、また技術的資本主義を打倒できるものと喜び期待するような態度を指す。しかし、これに対して王氏は懐疑的な見方を示す。さらに王氏は、アガンベン（アガンベン）の2番目の論考（國分氏発表参照）も参照しながら、アガンベンが批判したかったのは、イタリア政府というより、現代の政治の枠組みそのものであったと述べる。つまり国家が非常事態の名目の下に、個人の非政治化された生活を正当化し、科学的言説を根拠に「安全か自由か」の二者択一という偽の構図を強要している点を問題視したのである。ただし、このような個人を剥き出しの生に還元させる国家の措置自体は、今回特有の事態ではないとも王氏は述べる。

むしろ今回の新しい事態として王氏が着目したのは、人々が自宅に引き籠りながら、ネット上で武漢の人々や自他国の感染者への「同情」を非常に増幅させていった現象であった。これについて、王氏は興味深い逆転現象を指摘する。すなわち、ネットで「人間的に」生きながらも、身体のレベルでは他者の他者性を排するわたしたちの生活に対し、武漢の臨時医療施設でウィルスを分有する人々の間でのみ他者の身体を伴う「ふつうの生活」が保持されていたというのである。さらに王氏は、このネット生活と病院生活という隔離された異質な2つの共同性に対し、無理に統合し予定調和しようとする、ナショナリズム的な追悼という、もう1つの強力な共同性があることを強調した。

その上で、最後に王氏が喚起したのは、中国において、これらのどの共同性にも所属することのない人々、スマートフォンやPCなどの最新機器を持たず、技術に不慣れな、安全と自由を犠牲にさせられた無言の人々がいたということである。共同性の探求は、彼らから始められなければならない、と王氏は結んだ。

パネル1の質疑では、中島氏に対して、「手当」という言葉の意味や妥当性、またパンデミックな状況下で望まれるデモクラシーのベースにはどのような共同体或いは個人が想定されるか、という点について質問があった。中島氏は、科学技術などの現場に哲学が介入しながら、その都度、誤りに対処し、より良い方向に向かわせるような「手当」（メンテナンス）を地道にしていくことで、少しずつ「生の形式 form of

life」（アガンベン）を変えていくことが必要だと改めて訴えた。また王氏に寄せられた、自由と安全の二者択一という偽の構図に対しどのようなオルタナティブがあり得るのか、という質問に対しては、今のところオルタナティブはないが、この構図に従うことができない何か、すなわち余剰が許容される場所が確保されているべきであるという考えが示された。

———— パネル2 ————

國分功一郎（東京大学）

「新型コロナウイルスと哲学者たち Covid-19 and Philosophers」

國分功一郎氏は、先のパネルで王氏も言及したアガンベンやナンシー、さらにバトラーやジジェクといった哲学者たちの新型コロナウイルスに関する反応を整理した上で、特にアガンベンに着目して論じた。とりわけ國分氏が重視したのが、アガンベンが3月17日に発表した2番目の論考（「補足説明」）である。そこでアガンベンは、死者（遺体）が何者にも弔いの声もかけられず、ただ抹消されていく現状をどう考えるのか、そして人間が苦勞して勝ち取った自由の核心である「移動の自由」を、安全のために簡単に犠牲にしてしまつてよいのかと、と訴えた。

さらに、アガンベンの4月15日の最新の論考（「質問」）では、「殉教」という宗教者の在り方に触れながら、教会（church）に対して、病者を見舞い、死者を弔うことを諦めている状況を「科学の小間使い」といった厳しい口調で問い質してもいる。加えて非常事態における権限という名目で、立法権力が行政権力に乗り越えられている現状にも批判の矛先を向けた。最後の点について、國分氏は、日本の場合、今回のコロナウィルス騒動以前から、行政権力による立法権力の乗り越えが半ば常態化してしまっており、現状はより深刻であるという見解を示した。

以上のように、アガンベンの突き付けた問いは、一貫して「死者の権利」や「移動の自由」といった人間であるための条件を生存のために簡単に捨て去ってもよいのか、そうした生存だけに価値を置く社会に生きるということは一体どういうことなのか、というもの



『リヴァイアサン』（1651）の口絵。カルロ・ギンズブルグ『政治的イコノグラフィーについて』（2017/2019）の解釈によれば、臣民の身体の集合体として表現された主権者の身体、そして衛兵とペストを予防する医師しかいない城内は、国家の中には身体を持った人間は誰もいないということを暗示する。Library of Congress ウェブサイトより転載：https://www.loc.gov/exhibits/world/nature.html#obj37

であった。勿論、生存が何よりも大事であることは言うまでもない。しかし國分氏は、そこに対して立ち止まって考えるということ、いかに困難であっても簡単に諦めてはいけないと述べ、改めて哲学が果たすべき役割というものを浮き彫りにした。

金杭（延世大学）

「今一度、人間の条件について」

続いて、金杭氏（延世大学）の発表は、藤田省三の「「安楽」への全体主義」（『全体主義の時代経験』（1995年）。初出は『思想の科学』（1985年））への言及から始められた。金氏は、目に見えないウィルスに対し、国家が先頭に立って全社会的に防衛しようとする今の構図は、まさに藤田がいう「安楽」への全体主義が前景化した状況と重なりと指摘する。

その上で、次に金氏が取り上げたのは、ハンナ・アーレントの『人間の条件』（1958年）であった。よく知られるように、アーレントは、人間の活動を労働、仕事、行為の3つに区分したが、むしろ強調したかったのは、地球上という有限的な環境の中で生きる人間として、これらの活動がどのような関係において構成されるの

かという点であった。すなわち、それは自然との代謝、身体を持った存在として他者と出会う世界の構成、身体性に根差した対応性からなる政治的な行為の関係である。これら身体性からなる世界が全て失われた点にこそ、アーレントは近代の最も重大な問題点を見たのだと金氏は指摘する。

また金氏は、今わたしたちが置かれている「Zoom 漬け」の生活における身体性の欠如（下半身を見ない状態でのコミュニケーションが象徴的）に言及し、そこからホップズの『リヴァイアサン』（1651年）の有名な口絵（左の図を参照）について絵解きした。この絵で表現されるのは、主権国家とは、死への恐怖から身体を主権者に委ね、公の場から身体に根差した個別性（singularity）、そしてそこから可能な複数性（plurality）からなる政治を抹消する巨大な機械装置かつ有機体であるということであった。

「コロナは誰も差別しない」という言説は、身体の差異を見ないで、国民に所属した抽象度の高い身体として語られていることを意味する。ここにおいて、金氏は、現在の社会的距離・隔離と国家による身体の全体化と独占化の状況は、近代主権国家の生成の原風景が前景化した状態といえと指摘する。近代国家は、そもそも例外状態において始まったものであったのである。

ここにおいて、今一度、人間の条件という問いを発するべきではないか、と金氏は主張した。それは、身体に根差す個性性をどう取り戻すか、という問いに関わるものであり、他者の身体なしには不可能であろうことが最後に示された。

パネル2の質疑では、まず「移動の自由」に関して、中国において孫文以降「衣食住」に「行」が加えられたことから、「移動の自由」は東アジアにおいて革命の中で勝ち取られた新しい人間性を意味するのではないか、という興味深いコメントがあった。さらに國分氏は、今のわたしたちはデモクラシーの基盤となる集合してデモをする権利をも剥奪されてしまっているという言説に言及し、最近イスラエルで敢行された一定の距離を保った上でのデモの様子を紹介した。その上で、こうしたデモにしろ、カンファレンスにしろ、大学の授業にしろ、Zoom が常態化していったときに、

やはり「身体」を伴って集まるということの価値とは何だったのかがもう一度問われるのではないかと述べた。この他に、アーレントの哲学における「「安楽」に感じないこと (Don't feel at home)」の位置づけに関する議論が交わされた。

———— パネル3 ————

石井剛 (EAA副院長)

「感染症の歴史——2月だ、インクを取って泣け」

石井剛氏の発表のサブタイトルになっている一節は、ソ連及びロシアの詩人パステルナーク (1890年-1960年) の「2月」という詩からの引用である。

「2月。インクは泣きじゃくるにはじゅうぶんだ。」

2月7日、この詩が中国のウィーチャットを席卷した。この日、武漢で初めて新しいウィルスのことを告発し処罰を受けた医師8人の内の1人が、武漢の治療の最前線で亡くなったのである。

この衝撃的な出来事をめぐり、ウィーチャット上では、評論が次々と発表されていくことになる。中でも特に印象的だったものとして石井氏が取り上げたのが、「私たち1人1人の1つ1つの言動は、まさに今歴史を書いている」という一文で締め括られる匿名の評論であった。その中では、「恐れ、怒り、感動、悲しみ、絶望」といった「情」がネット上に渦巻く現状について、今のこの惨禍に「情」が突き動かされるのはわたしたちが「生身の人間」だからであり、「情」そのものが力となり、言動が「歴史」となるのだと力強く宣言されていた。

この「情」と「歴史」の固有の関係について、石井氏は、中国における歴史叙述が「憤」という感情のもとになされてきたことに結び付ける。憂国の詩人・屈原の「発憤して以て情を抒べる」(「九章」)という一節は「抒情」の由来となったことでも知られるが、「情」には「事実」という意味もあり、屈原は詩を書くという形で歴史を書いたのだという。司馬遷も憤りから自分の歴史を書いたように、憤りが世界を構成する力になるのである。但し、ここでの怒りは、何かに対



イスラエル・テルアビブで行われたベンヤミン・ネタニヤフ首相への抗議デモ(2020年4月19日撮影) (c)JACK GUEZ / AFP

する直接的な怒りではなく、人間として生きていることの不条理さに対する憤りであったはずだと石井氏は主張する。

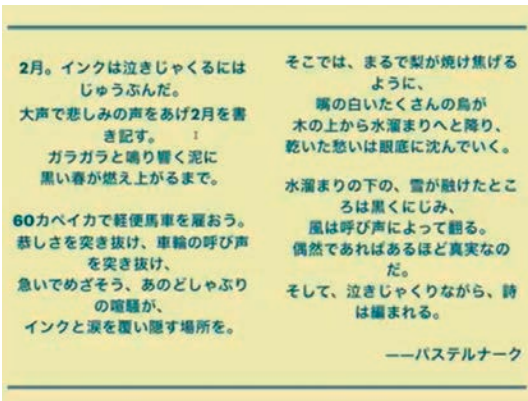
最後に取り上げたのは、このコロナ禍のもと話題を集めているカミュの小説『ペスト』(1947年)であった。ペストにより封鎖されたアルジェリアのオラン市を舞台としたこの小説には、主人公の医師リウーとよそ者のタルーの2人の記録者がいる。タルーは保健隊となってペストと戦うことになるが、その長い年月の間、自身がペスト患者でなかったことは一度もなかった、ということを知る。すなわち人間として生きている限り、何者かを殺すことにコミットしているかもしれない、ということに気が付いたのだと石井氏は読み解く。

「怒り」をもって「情」を書くという人間の営為の根底には、私たちが人間として生きていること自体に対する不条理さへの怒りがあり、だからこそ、それを鎮めるために書かなければならないのではないかと。石井氏は、自分たちの歴史を書くこと、死者のために書くことによって、はじめて別の仕方生きることが可能になるのではないかと、と問いを投げかけた。

張政遠 (香港中文大学)

「疫災後文学論の可能性」

最後の発表者・張政遠氏は、東日本大震災後、被災地の巡礼を行い、また震災後に文学作品を「書く」という行為について考えてきた。今回の発表は、そうした経験を踏まえながら、このコロナウイルス以後の



パステルナーク「2月」
石井氏による中国語訳からの日本語訳

世界において文学作品がどのように書かれていくのかを予測するというものであった。「疫災後文学論」という耳慣れない言葉は、震災後の日本文学界の動向をまとめた木村朗子氏の『震災後文学論』（青土社、2013年）に倣い、「疫災」という語を作って命名したものであるという。張氏は、木村氏の震災後の日本文学界での反応が3つに分かれるとの説にそって議論をすすめた。

今後予測される第1の傾向は、「何かをしなければならぬ」という焦燥に突き動かされるように創作・表現に向かう動きである。第2が、「現実逃避」、すなわち大きなショックと苦痛を和らげるために詩や小説、場合によっては新聞などの活字世界に没頭することである。しかし張氏は、詩も小説も新聞も読まない今の時代に、考えないために人々はソーシャルメディアに釘付けになって共感疲労に陥っていると指摘する。また、現在、考えたり本を読んだりする時間がたっぷりあるという言説がある一方で、子供が休校であるため、在宅勤務でもじっくり思考したり本を読んだりする時間を持ってないという実感を抱く人もいる。勿論、労働者にとって本を読む時間を確保するのは難しく、そこには当然格差やジェンダーの問題も横たわっていると張氏は付け加えた。

第3が「自粛」、すなわち自己検閲である。3.11の後も、原発のメルトダウンや放射能汚染の問題、死者を利用することはとりわけタブー視され文学作品でも活発に語られてこなかった。しかし、「書くことの

困難のなかで書かれた作品こそが、震災後文学である」（木村）とすれば、「疫災後文学」も様々なタブーがある困難な中で書かれる作品であるはずである、と張氏は述べる。そして、震災と同様、疫災による死者（有名人だけではなく、医療現場や一般市民など）の声を聞き続ける必要があると強調した。

パネル3の質疑では、まず張氏の発表について、死者を弔うこともできない、という3.11から続いている問題が再び問われるであろうこと、文学の今の可能性ではなく可欲性として考える態度が必要ではないかというコメントがあった。石井氏の発表については、屈原は「抒情」したが結局自殺した問題があるとして、個人の身体ではなく、共同体的な或いは多元的な身体に基づいて書くということが求められるのではないかと、という考えが寄せられた。また、石井氏がいう「書くこと」は、「発言すること」とは異なる行為なのか、という質問も上がった。これに対し、石井氏は、発言することができない中で書く、という状況を想定しており、身体性から離れたところで自らの身体性を獲得していく、或いは身体を放棄することで別の生き方を求めることであるかもしれないと答えた。また怒りというのは、存在の拘束性への怒りでもあり、それが敵を作らずに他者と共にあるという在り方を考えるきっかけになり得るのではないかと、と応答した。

——— 総合討論 ———

最後の総合討論では、まずアーレントにおける「身体」をめぐって、「Who」の位置づけや「安楽」の問題など様々な角度から議論がなされた。また中国のネット上で、病院のなかにいる人に対して「同情」が増幅していった現象について、日本では、医療現場が大変だから政治が悪いという言い方はされても、共感・同情ということが中国を含む諸外国ほど見られないのはなぜか、といった点も議題に上がった。

脱政治化という言葉もキーワードであったが、このようなZoomという身体的移動を代替するような形での集まりが（不完全な身体であっても）、いかに国家体制と距離を取りながら批判的な存在意義を示せるかが大事であることが確認された。それと同時に、こういう場合にも、Q&Aにも意見が寄せられたように、オンライン

授業に出られない学生も含め様々な事情から参加できない人がいるということも忘れてはいけないであろう。

そして、3.11 から積み残されてきた課題に言及する場面も多く、共に考えていく契機になることが予測されたと同時に、今回の出来事において何か決定的な変化を迎えているのではないかと、という予感も共有され

たように思われる。それは一体何を意味するのか、すぐにはわからないが、今回のイベントに参加した一人一人が、これから考えていく出発点となったのではないだろうか。

報告者:宇野瑞木(EAA特任研究員)

第1回 「文学と共同体の思想」読書会

2020年4月23日

2020年4月23日、新年度1回目の「文学と共同体の思想」読書会がZoomを通してオンラインで開かれた。今回はEAAの講師や研究員、RAのほか、本年度のプログラム生も加わり、ジョルジョ・アガンベン (Giorgio Agamben) の *The Coming Community* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1993. 日本語訳は『到来する共同体』上村忠男訳、月曜社、2012年) をめぐり、様々な議論を交わした。

読書会は王欽氏 (EAA 特任講師) によるテキストの読解から始まった。“Whatever singularity (なんであれかまわない存在)” という本書のコアなコンセプトについて、これは一人ひとりに対するより形而上学的な言い方で、アントニオ・ネグリ (Antonio Negri) などが提唱するマルチチュード (multitude、多数性) とは単数と複数の差があってもかなり近いと王氏が指摘した。これは両者とも単純な共同性として見るができないからである。さらに、アガンベンが政治権力へと立ち向かうときこそ Whatever singularity が成り立ち得る、もしくはそれしか存立しえないとラディカルに措定する。以上の理由から、最終章で政治闘争を通して展開される議論を中心に読解を進めることにした。

では、アガンベンが実際の政治に対して無政府主義的な立場の持ち主であるか。彼が目にした政治的運動は、特定の訴求が欠如している特徴が目立つ。一例のみならず、リーマン・ショック後の「ウォール街を占拠せよ」から、コロナショックの中で外出禁止令に対するデモ (anti-Covid19) まで、その傾向が広く見受けられる。ある意味で、デモ自体が抗議の目的

となり、訴えなどはなんでもよく、デモの内容は二次的になる。これを踏まえて、同じ目的を持つ政治的主体 (individual) が結束し、ともに闘うという旧来の見方と異なる政治運動の仕組みが見えてくる。参加者はデモで個人の「性質」を捨て、その場その場の抗議で新たな連帯を作っていると王氏は解説した。

その新しい人と人とのコネクションについて、王氏はさらにジュディス・バトラー (Judith Butler) の「ウォール街を占拠せよ」に対する分析を援用して説明した。ある理念に賛同し行動に移すという従来の抗議は言語による回路で表現されるのに対して、ウォール街を占拠した人々は街に出てデモの進行の一員になるという身体の行動で表現しているという。政策や法案の制定と執行で特定の要求を満たすことができる現代国民国家は、こうした訴えのない、ただ継続している抗議にたいして自らの統治が機能不全に陥りかねないと、深く警戒している。だから国民の絶対的服従を取り戻すため、戦車が街中心部に現れたとしてもおかしくないだろう。同時に、アガンベンが謳歌するような口調で描いたデモのやり方は純粋な暴力であるか、彼の政治的立場をどう理解すべきかと王氏は問うた。ここの暴力は未来や正義のための革命の暴力ではなく、価値判断のない単なる行動として存立する。そして彼のアナキズムは国家を壊滅させるより、寧ろタイトルで示される通り、新たな人間のつながり方を模索しているのだとして見てよいのではないかと締めくくった。

討論に入り、佐藤麻貴氏 (ヒューマニティーズセンター) は anti-COVID-19 における人間の権利 (前に

anti-COVID-19をアガンベンという訴えのないデモの例にも合致するとコメントしたのも佐藤氏である)に言及し、理性の在り方について問題を提起した。もし個々人の存在(entity)を理性(rationale)のためのものとして見た場合、理性へと到達するのに何かの實在の感覚を捨象したとしてもやむを得ないということになる。こうして到達したのは真の普遍的「理性」であろうか。佐藤氏は柄谷行人の議論では singularity、個人的なものこそが universality、普遍性につながれることに触れ、アガンベンとの類似性を指摘した。王氏は柄谷の議論では移動の自由に関して「身体」の問題がじゅうぶん注意されていないことが両者の相違であると補足した。建部良平氏(EAAリサーチ・アシスタント)は第8章におけるヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin)の引用を取り上げ、「理想と現実とは紙一重にすぎない」という発想は井筒俊彦の華嚴哲学理解と通じているとした。井筒は華嚴哲学の神髄は「事実無碍」とし、善とは現実存在を空とするのではなく、もう一度現実にもどることになり、さらに新しい哲学を作り出すことであると唱える。佐藤氏は華嚴哲学において、「空一有」の連環でこそ意味を生み出すことができると確認した。

円光門氏(学部生・EAAユース)はアガンベンのもう1つの愛用語“irreparable”についての説明を求め、王氏はアガンベンの哲学に沿って答えた。人間は言語によって存在を把握するが、言語そのものがいったん形成したら、かえって存在を制限してしまう。こうした言語哲学のテーマからアガンベンが捉えようとしたのは、存在と言語との間の「何か」である。そのため彼は irreparable や limbo など多様な事例と比喩を使ってその「間にあるもの」を表現している。熊文茜氏(学部生・EAAユース)は individuality と singularity との違い、そして「到来する共同体」にある「一時的身分」とその共同体の様態との関連性などについて質問した。王氏は主に後者に対して答えた。「一時的身分」はデモの現場にいるたび

に変化しているからである。いわゆる“the coming community”は、明日とか来年とか現実になる何かの特定のものではなく、参加することで共同体がその時、その情勢に応じて変化していく、つまり「つねにきている」共同体と見てよい。アガンベンも具体策などはまったく用意していないともいえよう。国家権力が訴えのないデモに対して警戒感をもつ理由について、報告者の胡藤(EAAリサーチ・アシスタント)はデモが国家の根本的機能である「統治力」を壊すきっかけとなるとして、そこでアガンベンにとってその統治力に代わるものがあるか、あるいはこうしたデモがつねに抵抗の力として存在するかを尋ねた。王氏は、アガンベンは実際の行政などの統治力より、国家理性というものを近代国民国家の核とみていると答えた。確かにアガンベンが想像する“the coming community”の在り方には国家理性の位置がない。ただそこから彼の思想のラディカルな色彩も見えてくる。今回のテキストをめぐる議論はここで終わった。

ヨーロッパで始めて新型コロナウイルスによる感染爆発が起こったイタリア在住のアガンベンは、政府が非常事態の建て前で人間の自由の核心である「移動の自由」を恣意的に取り消してしまうと批判した。また世界的な範囲でも感染の長期化を見据えてこれを常態化しようとする傾向は人間の存在を大きく脅かしている。その一方、アガンベンの一連の論考は大きな反響を呼んだ。人文学は今の時世にどんな役割をはたせるか、パンデミック後の世界はどうすべきか。中国のある歴史家は「一生学び、ことのすべてを現在に捧げ」と力強く宣言したが、その行き先は明るいとはどうしてもいえなからう。The Coming Communityを読むことを通じて、少しでも我々の苦悶を解消し、未来への想像力を開き、思考によって新しい世界を作る第一歩になったらいいと、今回報告を書きながら願っている。

報告者:胡藤(EAAリサーチ・アシスタント)

第3回 学術フロンティア 講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年4月24日

2020年4月24日、第3回学術フロンティア講義が行われた。第3回目の担当は人類学、特にインド研究を専門とする田辺明生氏（総合文化研究科）で、テーマは「人新世時代の人間を問う——滅びゆく世界で生きるということ」である。

講義はまず、新海誠監督による映画『天気の子』（2019年）の話から始まった。田辺氏によると、『天気の子』は「〈リアルな地球〉を提示する物語」だと言う。作中には、「晴れ女」と呼ばれる「世界をコントロールできる存在」が登場する。田辺氏は、この描写こそ現代社会における、「自然をコントロールしたい」という欲望を如実に表している、とした。

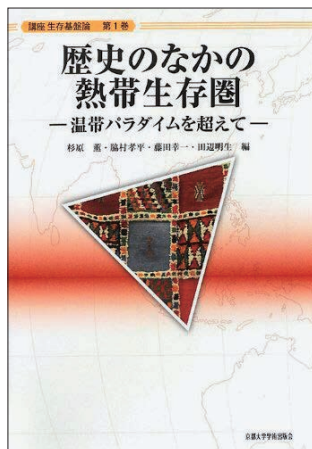
現在、世界ではコロナウイルスの発現をはじめ、気候変動、地震など、世界の「不気味さ unthinkable」があちこちで噴出している。世界の「不気味さ unthinkable」は、世界と人間の間に深淵を見せている。

こうした深淵をより分かりやすく表すのが「人新世 Anthropocene」というキーワードである。人新世は、オランダの化学者、パウル・ヨーゼフ・クルツェンにより提唱された概念である。大気化学を専門とする

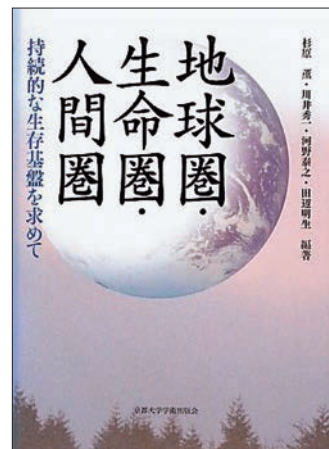
クルツェンは、近年の地球温暖化を考える上で「人新世」という語を使用した上で、ジオ・エンジニアリング、すなわち、科学技術によって環境問題を解決するという対策を提示した。具体的には、成層圏にエアロゾルを注入することで地球温暖化を防ぐ、といったものである。こうしたクルツェンの姿勢に、田辺氏は『天気の子』で描写された「自然をコントロールしたい」という欲望を見出している。では、一方でこうした欲望を、人文学はいかに論じているだろうか。

田辺氏によると、特に、1950-1960年代以降、人文学では、人間存在の多数性、また「人間ならざるもの」が幅広く議論され、「人間存在の問い直し」が行われてきた。例を挙げれば、ポスト・コロニアリズム、ポスト・セキュラー研究、レイチェル・カーソン『沈黙の春』やマルチスピーシーズ人類学に見られるように環境破壊、公害を取り上げる議論や、科学技術の急速な発展による生活様式の文明化を批判する議論も登場した。これらの潮流は、人間存在自体が揺らいできていることを示唆している。

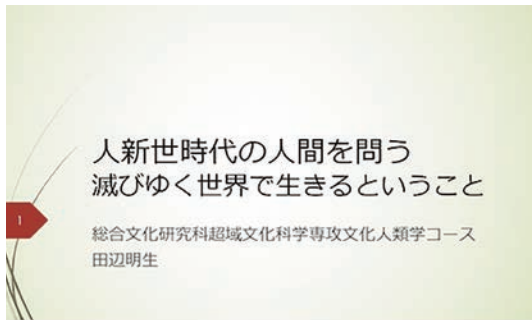
では、あらためて、人新世という時代において、「人



杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生 編『歴史の中の熱帯生存圏—温帯パラダイムを超えて』京都大学出版会、2012年



杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺明生 編『地球圏・生命圏・人間圏—持続的な生存基盤を求めて』京都大学出版会、2010年



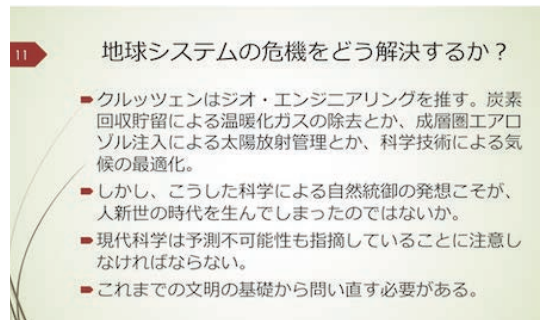
講義スライドより抜粋 (1)

間」はどのように語ることができるだろうか。これに対し、田辺氏は「human co-becoming」という解答を提示した。

田辺氏によると、人新世において、人間とは、自然を含める他者や霊的な存在、機械など人間ならざるものとの絡み合い、つまり〈あいだ〉〈つながり〉の中で再定義されてゆくものである。そこにおいて問い直されている「人間存在」とは、もはや「human being」ではなく「human co-becoming」である。例えば、人は体内にウイルスや腸内細菌を持ち、自然から採取してきたものを食べ、家畜による産物から身体をつくっている。人間存在は他者と完全に分け隔てられているのではなく、身体の内部にも自然を抱えている。こうした点を捉え直し、「human being」ではない、「human co-becoming」という人間のあり方を考えることが、人新世において新しい可能性の探究になる。

これまで、人々は「人間は自然によって束縛されている」といった「『自由』が阻害されている」との意識を持ってきた。人新世は、この点を再定義し、自然という他者の存在によって人間自体も変わっていく契機である。ここで求められる変化とは、自然といった他者との「響き合い」、つまり、他者との関わりの中にある「感じられる心」を通して、単一的ではなく、多数的な世界を認識することである。

ただし、多数的な世界を認識することとは、一方で「不確実性」、言い換えれば、世界のコントロールできない「不気味さ」への想像力が要求されることでもある。実際に、現在のコロナウイルスという新しいウイルスとの世界的な「出会い」は、人々の生活を大き



講義スライドより抜粋 (2)

く変えている。ウイルスの「統御」よりもウイルスとの「共存」のあり方が求められている。

多数的な世界を認識するとは、「異他の潜在性」に触れ、それを考えることである。そのためには、人間自体がこれまでとは別のものへと生成変化してゆく営みが必要である。田辺氏はこれを「芸術的な営み」と表現する。

いかなる生命体も世界に対し、自らが出会う範囲、つまり「部分的なつながり」でしか世界を知ることができない。だが、実際には世界は様々な存在が、様々な側面から世界を感じている。言い換えれば、地球ないしは宇宙の長い歴史の中で、一人ひとりの人間は一時的な存在であるという認識を持つことが「human co-becoming」への転換を導出する。他者とともに「心」、エートスを共有し、ともに変化していくこと、あるいは、今ある世界の言葉・装置の外側でありながら、今ある世界の内部における「不気味さ」という「永遠的な何か」に触れることが「human co-becoming」のあり方である。人新世という時代を前に「滅びゆく世界の中で人間として生きること」とは、こうした「human co-becoming」のあり方に、「芸術的な営み」によってアプローチしてゆくことである。こうした田辺氏の示唆により、講義は締め括られた。


その後、田辺氏とファシリテーターの石井剛氏（EAA 副院長）、また学生とのディスカッションが行われ、前回（第2回）での「友情」という話題とのつながりなどが指摘された。

報告者:二井彬緒(EAAリサーチ・アシスタント)

17

5. 人間とは？

- 人間とは、「人間のようなもの」である。(船曳建夫、「序 人間とは何か／人間のようなもの」船曳建夫編『岩波講座文化人類学第1巻 新たな人間の発見』)
- つまり人間とは、人間が自分と同じようなものとして共感できる範囲にあるものたちである。
- 人類史上のなかで、この範囲はどんどんゆらぎ変化してきた。
- 人間とは「人間とは何か」を探索するものである。
- 「人間ならざるもの」(他者、霊、機械、他種など)とのからみあいのなかで「人間なるもの」が再定義されている時代。
- 人間と非人間の〈あいだ〉や〈つながり〉から生まれる人間と世界の新たな潜在的可能性。



講義スライドより抜粋 (3)

リアクション・ペーパーからの抜粋

- 人間は、他者との関わり、感情の共有の中で、自身を形成していくという考え方が非常に興味深かったです。人との関わりを通して刺激を受け、文化や芸術に触れることで、心の持ち方が変化することは、身を持って感じてきましたが、物質やものとの関わりについて考えたことはありませんでした。でも、立ち止まって考えてみると、私たちは身の回りの生き物、物体などつながりながら、情報社会という装置の中で、進化と変化をどんなに小さくても日々続けているのかもしれない。なぜ、オンライン授業では対面授業より皆が積極的に質問するのでしょうか？ これも、テクノロジーが私たちに何かしらの影響を及ぼしている証拠なのかもしれない、今日思いました。他者（この定義も曖昧ですが）と影響を与え合いながら、自分をより望ましい方向へ前進させていくにはなにが必要なのか、今後日々の行動や心の動きと向き合って自問し続けていきたいです。そして、周囲のあらゆるものに対して、感謝しながら生きていければ良いと思います。(文科一類～三類)
- 田辺先生は、不確実性の中で、human co-becomingとして環境と相互作用しながら生きるということを提起していたと思います。不確実性の大きい時代と言われる今日にあって、これからどう考えて生きていくのでしょうか。人間は主体的であるべき、という観念は、現代日本で耳にタコができるほど耳にします。しかし、実際には人は環境の中で生き、制約を受けている存在です。そして、むしろ制約を受けているからこそ、幸福を感じることができるものでもあります。もし本当に何をしても良くて、なんでも実現できるのならば、何かを望むことに何の意味があるのでしょうか。人は与えられた環境の中で、自分のできる精一杯を尽くしていくことでこそ幸せを感じられるのだらうと思います。主体的であることの意味は、自分が自分と前に出ていくのではなくて、他者（人間に限らず、周りの自然や人工物も含めて）のおかげで自分が今ここに存在しているということに感謝しながら、自分もその繋がりの一員として、淡々と自分のできることを行っていくということなのかもしれないと思いました。今回のコロナウイルス禍は、マスクの供給がなくなったりなど、普段は意識しづらい、自分が依拠している社会の網目が目につきやすい状態になったことで、世界のシステムの中で様々な人や自然の恵みに助けられて、自分の存在があるということを見つめ直す良い契機になっていると思います。(理科一類～三類)
- 人間がこれまで依拠してきた科学や哲学が際限なき欲望追求を善としてきた中、人新世以降では何が行動指針となるべきなのだろう。わたしたちが欲望してきたものは物質にとどまらず、社会的地位や文化的素養、あるいは喜びや心の安寧といったものにまで及んでいるわけだが、講義の中で提示されていた、〈私〉を見つめなおすというプロセスは、そういった際限なき欲望を生み出すメカニズムそのものにメタ的視点に向けることが求められているように感じた。また、人間は科学の名の下に、枠にはめられたような正義や善を環境にはめ込むことでそれらを客体化していった結果、かえって自らが周縁化されているかもしれない。それは自己内省

の欠如、すなわち科学や個人主義による新たな絶対的の神話が生み出した弊害であり、人新世においてはそのようなある種の超越的立場はもはや認められないのだと思う。だからこそ「学問」のみにとらわれない、様々な領域を横断するコミュニケーションが求められているのであり、先生がおっしゃっていたように「人文学と世界がこれほどリンクしている時代はない」のだと思った。(文科一類～三類)

第4回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年5月1日

2020年5月1日にオンラインで開催された学術フロンティア講義「30年後の世界へ——「世界」と「人間」の未来を共に考える」は、中島隆博氏 (EAA 院長) による「世界哲学と東アジア」がテーマであった。近代以降に一般的となった「哲学」のあり方を問い直し、歴史の中で新しいチャンスと出会い、そこから「世界哲学」を開いていこうと、私たちの基本概念を反省しながら、これからの若い世代に向けて問いを立てた。

世界哲学とは何か

中島氏はまず、自ら編集に参加している刊行書『世界哲学史』シリーズを紹介した。納富信留氏よりあてられた序文を引き、「世界哲学」とは何かを説明する。

「それは、『世界』という名を冠することで、世界に生きる私たちすべてに共有されるべき、本来の『哲学』を再生させる試みである」。すなわち、これまでの西洋を中心とする哲学の限界を認識し、乗り越えることによって、「哲学」をより普遍的なものへと昇華させるのである。このような刷新の動きは文学や歴史学ではすでに進められているが、哲学は遅れているのだ。それを日本から発信しようと考え、企画されたのが『世界哲学史』シリーズであった。

ところで、歴史に還元できないものを問うのが哲学であるならば、どうして『世界哲学史』なのか。中島氏は、世界哲学の方法論から説明をした。

——— 哲学と歴史の問題 ———



『世界哲学史』(全8巻、ちくま新書)

従来一般的に知られていた哲学とは西洋哲学であり、哲学史と言えば西洋哲学史であった。ヘーゲルの『哲学史講義』は序論の末尾に「東洋哲学」という部分を設けて、西洋以外の伝統への顧慮を示しているものの、東洋への言及は基本的には原始的な思考形態という偏見から抜け出していない。このような西洋中心主義は20世紀後半の脱植民地化で後退したが、一方、哲学史を西洋に限定して終わらせないためには、どのようなアプローチが考えられるだろうか?

世界哲学史は、それ自身のアプローチを考える時点ですでに極めて哲学的なチャレンジなのである。

世界各地の「ユニークな哲学」を羅列することが、



講義スライドより抜粋 (1)

「哲学の歴史」を描き出すことだと言えるだろうか？例えば日本哲学を西洋と比較しながら叙述し、その中で日本の特殊性を示す方法がある。しかし、日本哲学を「翻訳不可能なエクセントリックさ」において評価するのは、日本を普遍から遠ざけるに等しい。わび・さび・もののあはれ・いきの概念は、世界的文脈においてこそ可能性を発揮する。中島氏によれば、真の世界哲学を樹立するためには、普遍に向かって開いていく努力が必要であり、概念の「鍛え直し」が求められる。そのチャンスを提供してくれるのが歴史なのである。

—— 哲学を命名する ——

2016年5月、アメリカのニューヨーク・タイムズ紙に1つの挑発的な記事が載せられた。もっぱら英語圏で営まれる分析哲学が主流となり、中国哲学や日本哲学がますます周辺化していくアメリカ大学の哲学制度に一石を投じたこの記事 (If Philosophy Won't Diversify, Let's Call It What It Really Is) は、作者の一人であるブレット・デービス (Bret Davis) 氏によれば、意外にも熱烈な非難を浴びたのである。

ブレット・デービス氏は日本哲学を専門としているが、彼は自分自身の経験を通じて、西洋を揺さぶれる何か普遍的なものを日本から提示しなければ、両者の対話は成り立たないことに気付いたと言う。デービス氏がEAAを訪れた際の言葉を引きながら、中島

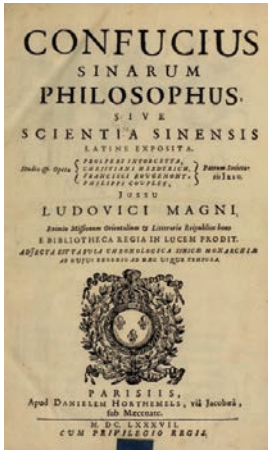
氏は自身が比較哲学に感じていた難しさと不安を語った。文学や歴史の比較は可能だとしても、哲学の比較においては、そもそも「日本に哲学はあるか」という問題に私たちは絶えず晒されることになる。しかし、中島氏はこのような不安を肯定的に受け取り、「日本に哲学はあるか」という問いは、哲学のあり方自体を問い直すチャンスだと捉えた。そして、小林康夫氏との共著『日本を解き放つ』(2019年)の一節を引き、「つなげること」と「実践」をヒントとして示した。

—— 概念を鍛え直す ——

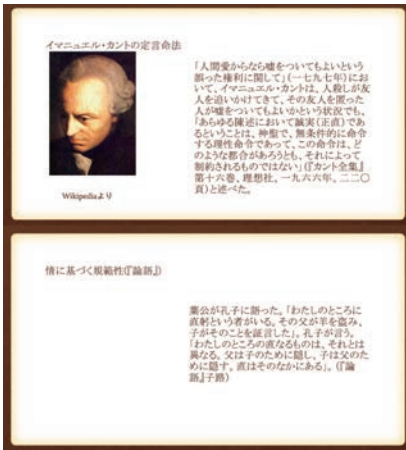
つなげることの実践として中島氏が紹介したのは、ハーバード大学のマイケル・ピュエット氏の中国哲学



2016年5月11日、ニューヨーク・タイムズ紙、If Philosophy Won't Diversify, Let's Call It What It Really Is (<https://www.nytimes.com/2016/05/11/opinion/if-philosophy-wont-diversify-lets-call-it-what-it-really-is.html>)



フィリップ・クプレ『中国の哲学者孔子』(1687年)
Internet Archive ウェブサイトより：<https://archive.org/details/confuciusinarum00conf>



講義スライドより抜粋 (2)

研究だった。文化人類学という「文化戦争」(クリフォード・ギアツ)が生じている分野から出た彼は、古代中国を1つのフィールドと見なし、「中国的な概念を洗練し、それを現代の学問的文脈でも通用するように鍛え上げる道」を選んだ。彼によれば、古代中国は未開の地でもなければ、調和のとれた理想世界でもない。我々と同様に分断・分裂に苦しむ世界であり、



クプレに従いヨーロッパを訪れた中国人沈福宗 (Michael Shen Fu-Tsung) https://en.wikipedia.org/wiki/Philippe_Couplet#/media/File:Shen_Fo-tsung.jpg

そこから近代西洋の概念を問いただした。

例えば、カントの定言命法は理性に基づいた無条件な規範性であるのに対し、『論語』で語られる孔子の「礼」は感情に基づく規範であった。礼は近代中国では封建的な思想だと批判されるが、ピュエツト氏は、19世紀以降の戦災にある仕方に関与してしまった西洋の理性の概念を、礼によって反省するのである。他にも近代世界の基礎をなすプロテスタンティズムを古代中国の墨家になぞらえ、鍛え直された古代中国の概念で西洋哲学のあり方を批判した。

—— 世界哲学への「道」 ——

カントを「ケーニヒスベルクの偉大な中国人」(『善悪の彼岸』)だと茶化したニーチェは、もしかしたら、ヨーロッパと中国は「道徳の基礎づけ」という共通課題を抱えているのに気付いたのではないか。中国の思想がヨーロッパに初めて紹介された時代を振り返り、中島氏は、「概念の世界的循環」が歴史上に起こっていることを示した。

フィリップ・クプレが『中国の哲学者孔子』(1687年)をヨーロッパで出版した時、中国に「哲学」があることは自明のことだった。聖書より古い歴史を持ち、超越的な神という概念がなくとも秩序を成り立たせている中国の存在は、神学を哲学に凌駕させていた当時の

キリスト教の権威を根底から揺さぶった。キリスト教の世界は、複数ある世界のあり方の中の一つに過ぎないかもしれない。中島氏が語るに、ライプニッツの思想の核にある「可能世界論」は、このように中国という他者に遭遇してから登場したのであった。それから百年ほどたった後、ヘーゲルは再び西洋の優位性に立ち戻ったように思われるが、今度はヨーロッパの思想が近代文明と伴い、東アジアを揺さぶる番だった。

このような概念の世界的循環の歴史を参照し、中島氏は東アジアから再出発して「philosophy」の概念を翻訳し直してみてもどうかと問いかけた。ただ、ここで注意しなければならないのは、東アジア自身も一種の複雑系であり、観察の仕方、語り方によって変わることである。明確な内容を持つ実体より、仮設・

仮の名と言うべきだろう。従って、我々は不安定な足場から世界哲学に関与することとなるのだが、関与するプロセスこそが実践であり、「世界哲学」なのだ。古代中国の「道」という概念のように、東アジアと世界哲学は何らかの実態ではなく、関与しなければ見えてこない一種のプロセスであると、中島氏は結論した。

講義の後、学生から多くの質問が寄せられた。比較哲学の限界、帝国主義の影、普遍性と複数性、地域研究および東アジアの哲学研究者のあり方などについて活発な議論応答が交わされる中、時間はあっという間に終わってしまった。

報告者:張瀛子(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

●我々は他者を他者として尊重し、真の対話に歩み寄ろうとする時、逆に相手との違い、距離を自覚するというジレンマを抱えている。この溝が深淵であるからこそ、私達は動的なアクションに賭けてみるしかないのだろう。しかし世界哲学は脱西洋哲学的な文脈にあるとはいえ、依然として哲学の文脈の内部にいる。その時、世界哲学は今まで思想と呼ばれてこなかった諸文化に対して焦点を向けることはできるのだろうか。これは既存哲学からのスリリングな越境、哲学と非哲学の間の綱渡りを要求するだろう。また、このようにして哲学概念を刷新したとき、既存の哲学的な語り、思考法は通用するのだろうか。もはや西洋哲学がその中心から外れたところでお、従来の手法に固執するのは暴力的ではないだろうか。この時、私たちはアカデミズムの地平を超えた、新たな創造的言語を発見することを求められるのではないだろうか。(文科一～三類)

●初めは、西洋というフィルターを外して、中国哲学、日本哲学、東洋哲学を捉えるにはどうしたら良いか、ということに落ち着くのかと思っていましたが、講義の終盤や質疑応答を通して、「捉える」のではなく、「哲学する」(-ing) ことが肝要だと感じました。そこで、今回の講義を通して僕が立てた問いは、「日々、哲学するために、まず始めるべきことは?」ということです。世界に生きる私たち全てに共有されるべき、本来の哲学を再生させる試みである世界哲学は、個人に不安を掻き立て、ともしれば分析哲学や比較哲学に陥る可能性が大いにあると思います。また、講義では、世界哲学には実戦が伴わなければならないとありました。僕自身のこの問いへのアプローチは、「複雑系としての複数性に出会い、思考を止めない」ということです。世界の複数性を正面から見据え、前回の講義にもあった「異他」を歓迎した上で、まずは自分の属する文化の本質を思考し続けることが、世界を哲学するきっかけになると思います。(文科一～三類)

●カントと孔子の、何が真の正直であるかという問いについて、孔子が「その都度具体的な状況をきちんと判断することが大切」と述べたことを、この講義全体を通して考えた。カントのように特定の正しさや軸のようなものを定めてしまえば、その軸が間違っていた場合、あるいはその軸が正しいのかどうかさえ疑わなくなった時、非常に大きな危険に陥る可能性がある。その意味で、西欧的概念が軸として存在していた哲学に、その軸の正しさを疑い、それ以外の概念を持ち込もうとしている世界哲学の意義の大きさに気付かされたように思う。また同時に、どのように自分の今見えている世界に疑いの目を向けられるのか、また見ている世界が実は思い込

みの概念からほぼすべて成り立っているのではないかと、少し怖くもなった。(後期課程所属の学部生)

●既に存在する自明のものとしてではなく、実践の過程で練り上げられるものとして世界哲学を考えるというアプローチは興味深い議論だった。未来志向の学問形態を考察するにあたり、従来の静的かつ理論的な学問から、動的で実践的な学問へと移行しようとする試みは、「友情」として語られる他者との交流を重視する傾向と密接に関連するものであった。専ら西欧を中心とする姿勢から世界へと射程を広げようとする動向は、哲学においてだけではなく、文学においても見られるものである。近年その重要性を増す世界文学という概念も、世界哲学と同様に、実践の学問として認識することで、従来の文学が積み残してきた要素を補完することができるかもしれない。(後期課程所属の学部生)

第6回 中国近現代文学研究会

2020年5月2日

2020年度春学期 EAA 中国近現代文学研究会（第6回）が、2020年5月2日にオンラインで行われた。今回は魯迅『阿Q正伝』に対する汪暉の論文「阿Qの生命における6つの瞬間——始まりとしての辛亥革命を記念して」（『現代中文学刊』2011年第3期）を中心としてディスカッションした。

まず、王欽氏（EAA 特任講師）は近年の魯迅研究における当論文の位置づけを紹介し、その問題意識を指摘した。汪暉氏は「精神的勝利法」と近似性のある国民性批判を起点とし、“『阿Q正伝』に含まれる2つの国民性の対話”、つまり魯迅の叙述自身が呈する国民性と反省的行為、再現する対象としての国民性は、必ずしも閉鎖的な体系とは限らなく、そこには転化させる動力が存在すると論じている。明瞭な構造に見えるが、魯迅研究と解釈の歴史においては十分に検討されてこなかった。王氏は劉禾『言語横断的实践』（原題：跨语际实践）における魯迅と「支那人気質」をめぐる論議を挙げ、『阿Q正伝』の理論化の矛盾を説明した。たとえば、劉氏はポストコロニアル理論を用いて国民性を「見られる方」に置き、西洋人を「見る方」にしているが、そうすると魯迅の国民性批判は自ら瓦解するものになってしまう。一方、汪氏は国民性の「批判する者」と「批判される者」両方を中国人の中に内包させ、解答の手がかりを提示している。

汪氏の手がかりは密閉性の割れ目を探し出すことにある、と王氏は言った。6つの瞬間をめぐる鋭いテキストの発見を肯定したうえで、阿Qが自分のことを知らないかのような興味深い瞬間は、汪氏が全体として論じたい革命の可能性と必ずしも一致していない。

具体的には、本論文は「革命とは始まりに対する反省である」といったアーレントの革命論を引用し、阿Qの本能や直感には、「精神的勝利法」では説明できない瞬間があり、その瞬間が革命的であると指摘している。しかし、阿Qを原点に立ち返らせる「なんで俺はここにいるんだ、町を出ていくんだ」という瞬間から革命の可能性を引き出すには、阿Qのような「もやもや」ではなく、これらの瞬間に言語と表現を与えることが必要である。汪氏は単に「外的条件と内的力学と同時に共鳴するエネルギーで満たされる必要がある」と言うだけで、汪氏自身はこのようないわゆる革命的な瞬間を表現できる方法を見いだせなかったのである、と王氏は指摘した。

次に、本論文の「鬼」をめぐる論議を中心に、建設的なところと不十分な点を挙げた。汪氏は「鬼」を2層構造として分析しようとしている。第1層の「鬼」は直感として、「登場人物の自己制御不能の直感や本能を叩き込む」、すなわち阿Qの覚醒の瞬間である。「鬼」は、自分の中に含まれながら、自己制御を超えたところに存在している。王氏はデリダの幽霊に関

する言説に論及し、第1層の「鬼」は自己批判の機会を提供しているのである、と指摘した。第2層の「鬼」は実体が崩壊した後に残る封建的な構造物である。2つの「鬼」は具体的にどのような関係にあるのか？なぜ自己批判的な「鬼」は、隔たり・社会秩序としての「鬼」を変容させ、崩壊させることができるのだろうか？それは汪氏が議論しなかった部分である。

最後に、汪氏は「下向きの超越」が必要だと締めくくっている。論文では、「直感や本能は、本当のニーズや本当の関係性を明らかにするだけでなく、それを変えたいという欲求も表現している」とし、本当のニーズや本当の関係性は、セックスや食べ物がないことへ阿Qの身体的な反応に還元されたが、それ自体が社会秩序に結びついていることに、王氏は言及した。社会秩序の外部とは何か？阿Qの名無しと身元不明などといった「コレクションにおける指定できないアイテム」である。下を向いて超越することで、汪氏はそれを突破しようとした。しかし、それは非常に問題のあるアプローチである。もし成仿吾、蔣光慈などいわば「貧すれば貧するほど革命的」という結論に至るならば、身体主義的な阿Q解釈に立ち返ることになってしまい、社会の複雑さや全体性を把握することは不可能である。

鈴木将久氏（人文社会系研究科）は、初めてこの論文を読んだ時の気持ちを語った。当時の読みがスムーズだったのは、汪暉氏は竹内好、丸山昇、丸尾常喜など日本の研究者のフレームを多く取り入れたからである。たとえば、丸尾氏は「鬼」を中国の伝統文化と融合させたもので、汪氏はそれを少し前に進め

ている。

明示はされていないが、汪氏は丸山昇の魯迅研究を受容している、と鈴木氏は指摘した。丸山氏は竹内好の研究を継承し、「革命」の問題を加えた。『阿Q正伝』が論じている革命は辛亥革命に限らず、循環的なものである。いかに循環を断ち切るのかが魯迅の目標である。丸山氏は魯迅が直面した環境を大切に、実証的な論証をしていたが、汪氏は日本人研究者の問題意識の核心を捉え、それを現在の時空において再検討して新たな問いを探っている。

今回再読して、基本的には同じような感じではあるが、汪氏が良い問いを提示しているわりに答えが見つからないという感じもした、と鈴木氏は述べた。結論を書き換えるのであれば、どのように書けばいいのだろうか、と鈴木氏は問いかけた。

王欽氏は、テキストの詳細を捉えることが必ずしも決定的な結論につながるわけではない、と語った。汪氏が分析したいのは形式的なレベルであり、阿Qの人生を内容とし、1つ目の形式的なレベルは阿Qの人生に具現化された緊張と葛藤であり、二つ目は魯迅の文章である。魯迅の文章力の歴史的・政治的意味合いの議論は、魯迅の悟りだけでなく、晩年の魯迅の『故事新編』にも響いている。『阿Q正伝』にこだわる必要はなく、魯迅の創作の歴史的脈絡という観点から拡大して理解することができれば、解釈の豊かさの扉を開けるかもしれない。

報告者:王柳(東京大学大学院博士課程)

第5回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年5月8日

2020年5月8日、第5回学術フロンティア講義が18世紀イギリス小説を専門とする武田将明氏（総合文化研究科）を講師に迎えて行われた。講義タイトルは

「小説と人間——Gulliver's Travelsを読む」である。

武田氏はまず、シリーズ講義の共通テーマである「30年後の世界」について、科学技術や世界情勢

の変化は個人の願望より大きく外れるのは普通であるため、未来を予測することは困難であり、むしろ不可能であるとした。続けて参加学生に対し、300年前の世界を顧みて考えてみようとおびかけた。

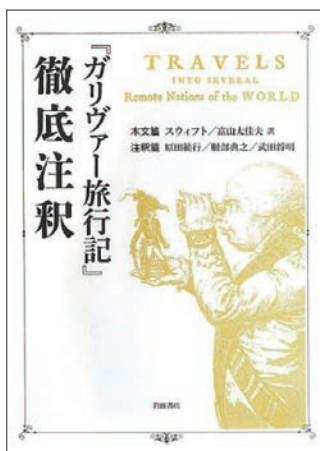
300年前のイギリスの人々は、現在のわれわれと同じように感染症に襲われていた。政府の情報隠蔽で民衆の間に恐怖感が広がり、人々は自発的に人と人との接触を減らして（ソーシャルディスタンスを取るか?）、先行きが見えず、不安と絶望と闘う日々が続いた。これはイギリスの小説家デフォーの『ペストの記憶』に記された記述である。これを読むと、人間が感染症に直面する時の行動は時代・地域を超えて共通していることが自ずと感じられる。こうした人間の共通なもの、普遍的なものを研究するのは、文学を含む人文学（humanity）という学問の根本とも言えると武田氏は述べた。

今回の講義本題は、18世紀イギリス小説を通して「人間」とは何かについて考察することであった。17世紀後半～18世紀前半はイギリスの激しい変動期であり、文学の分野においては小説という新たな文学形態が確立された。バフチン『叙事詩と小説』（1941年）によると、いわゆる「近代化」のダイナミズムで生まれた小説は、新しい時間感覚を提供することによって現実への見方を大きく変化させ、「個人的な体験と自由で創造的な想像力」で人々を魅了した。その代表こそ、『ペストの記憶』の作者デフォーの『ロビンソン・

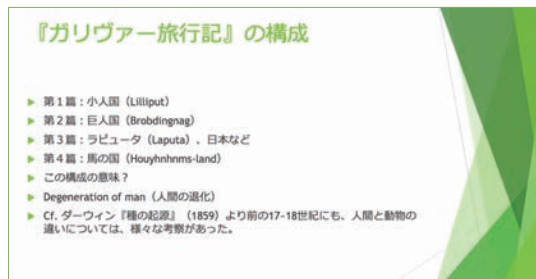
クルーソー』である。小説の主人公ロビンソンはロンドンに住む新興階級としてデフォーが仮託的に作った人間の理想像とも言える。

『ロビンソン・クルーソー』と比べると、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』は同じ奇抜な想像力をもって都市部の新興階級が夢中となっている政治、経済、社会生活ないしその基礎となる個人主義な立場を辛辣に批判するものであった。

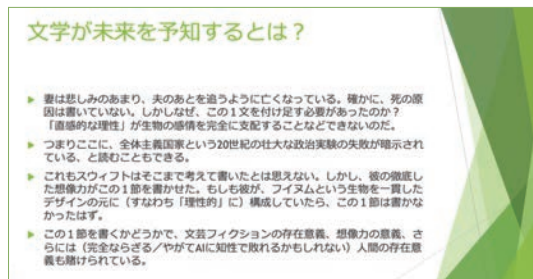
医師ガリヴァーの海外の遍歴を「如実」に記した4篇からなる『ガリヴァー旅行記』。その構成は人間の退化の様のように見えると武田氏は述べた。前の3篇ではイギリスの政治、科学の進展、啓蒙主義の考え方などを一通り風刺した上で、最終篇の「馬の国」では、批判の対象が「人間」そのものへと高まる。近代の人間は自分に理性があることを信じ、そこで動物と一線を画した誇りを持つが、ヤファー（退化した人間）とフィヌム（理性を持った馬）という組み合わせで、スウィフトは理性主義の人間観に対して批判の矛先を向けた。人間は理性より私利私欲のほうに走らせ、互いに意見の対立や利益の衝突が絶えない。一方、動物であるフィヌムこそは完全な理性を持っており、感情や欲望に惑わず、口論など一切なしで平和な生活を送っている。スウィフトは、近代は人間の欲望が爆発した時代でもあり、それが人間の退化をもたらしという。続いて、武田氏は『ガリヴァー旅行記』に対する見方について話を進めた。文学者・批評家のコールリッジは、ヤファーは人間の一面のみを抽出したもので、デフォーのロビンソンの方はより普遍的な人間像であると論じた。さらにスウィフトが高く評価するフィヌムに対しても、かれらが意思決定に際して議論を経ず、いわゆる直感で理性に訴える姿勢はオーウェル『一九八四』のような全体主義につながるのではとの意見もある。ここで、何か具体的な社会的現象を「予言」するより、スウィフトはむしろ自分の想像力を駆使して常識におもねることなく、徹底的に「人間」の限界を問いかけてこの小説を完成したのだと武田氏は論じた。同じく『ガリヴァー旅行記』ではすべてを「理性」に委ね、感情を徹底的に排除することと相反するように、夫を亡くした妻のフィヌムは（悲しくて）死んでしまうというような場面もある。



（画像：『ガリヴァー旅行記』徹底注釈（本文篇・注釈篇）、富山太佳夫訳、原田範行・服部典之・武田将明注釈、岩波書店、2013年）



講義スライドより抜粋 (1)



講義スライドより抜粋 (2)

文学を読むときに重要となるのは想像力である。300年前のデフォーもスウィフトも、現在のコロナショックのわれわれも、常識に囚われず大胆に「妄想」して、人間の限界を想像してよい。その想像力が人間の未来、人間の存在意義を賭けているのである、と武田氏は講義を締め括った。その後の質疑では『ガ

リヴァー旅行記』の当時の影響や、作品における悲観的態度、そして文学の読み方、想像力の可能性などについて意見交換が行われた。

報告者:胡藤(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

●文学という営みについて、短時間ですが、深く知ることができたように思います。普遍的な人間の振る舞いを考えるのが人文学であり、科学的な予想や、予言にはならないかもしれないが、未来を結果的には想像している、そんな営みなのだとわかりました。より一層、人文学に惹かれました。(文科一類～三類)

●武田先生のお話を通して、小説は、その小説を書いた本人が想像力を駆使して考えた賜物であるに限らず、それを読んだ読者にさらに想像力を駆使して考える機会を与えるものであると感じさせられました。ガリヴァー旅行記の解釈についても、時代を通して様々なものがあり、しかし、その解釈がスウィフトの意図していたものかどうかに関わらず、その解釈を想像して考えることに意味があるのだと理解しました。お話の中で、スウィフトのガリヴァー旅行記の影響を直接的に受けて、引き継いだ作家はあまりいないとおっしゃっていました。このことは、小説がダイナミックに変化する時代に適応した文学形式であったのに対して、スウィフトの作品がかなり保守的なものであったことと関係があるのではないかと考えましたが、実際はどうなのでしょう。コロナウイルスに対する現代の人間の振る舞いと、ペストの流行時の人間の振る舞いに共通性があるように、想像力を駆使して考えるという行為も、時代を超えて共通する人間の振る舞いであり、これは人間と動物を分ける違いのひとつなのではないかと考えさせられました。ガリヴァー旅行記をこれまでにない視点から捉えるきっかけを与えていただきました。ありがとうございました。(文科一類～三類)

●ガリヴァー旅行記に関する興味深いご講演ありがとうございました。この物語の中で、ガリヴァーは自分と異なる存在との関わりの中で「人間」を客観視する機会を持ち、結果、人間のどうしようもない愚かさに気づいて人間を憎悪するようになりました。しかし、私達人間は「人間」という、感情とは切り離せないものとしてすでに存在してしまっている以上、自らを憎悪するのみではなく、こういった存在としてこの世界をどのように生きていくかを模索していく必要があると感じました。それでは、私達人間は感情を持った存在として生きつつも、いかに自分たちを客観視してその愚かさに気づいていくのでしょうか? 私はこの問いに対し、今回の授業のように過去の文学作品に多く触れ、先人たちの人間模様を知ることアプローチできるのではないかと思います。

文学作品からは過去に生きた人々の経験や思考が伺えるので、過去の文学作品を読むことを通じて、一人の人間としての生き方を模索していきたいなと感じました。(理科一類～三類)

EAA座談会

「アーツの再定義」

2020年5月15日

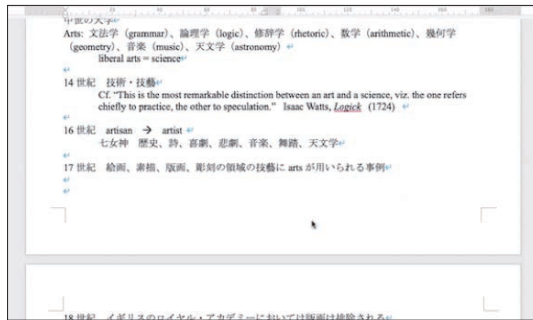
2020年5月15日、EAA座談会「アーツの再定義」が開催された。新型コロナウイルスの流行に伴い、Web会議サービス「Zoom」を使用したオンラインでの開催となった。

本イベントは5名の報告者に中島隆博氏（EAA院長）が加わるかたちでディスカッションが行われた。中島氏による挨拶のあと、発起人である石井剛氏（EAA副院長）から本イベントの趣旨が説明された。EAAではこれまで、「世界人間学宣言」「世界教養学」といった座談会を開催してきたが、そこで問題となっていたのは、学問分野を人文社会科学と自然科学といったかたちで分けてしまうことの妥当性であった。こうした区分のなかには、人間と自然をあらかじめ異なった領域とみなすある種の「人間中心主義」があるのではないか。このような人間中心主義に陥らないような仕方で「人間」を再定義することが求められている。「人間の再定義」に向けたひとつのステップとして、この座談会では、従来の人間観を形作ってきた「リ

ベラル・アーツ」「アーツ・アンド・サイエンス」といった学問的なカテゴリーを主題とする。これらのカテゴリーを様々な角度から検討することで、「アーツ」あるいは「藝」といった概念の今日的な状況における見直しを行う。石井氏のこのような展望を踏まえ、各登壇者の報告が始まった。

最初に、納富信留氏（人文社会研究科）から報告が行われた。納富氏は、自らの専門である古代ギリシアの文献を紐解きながら、現代の「アート」という言葉の語源と「リベラル・アーツ」という教育モデルの由来について語った。私たちがふだん用いる「アート」にあたるギリシア語は「テクネー」である。アリストテレス『ニコマコス倫理学』のような文献にも表れているように、「テクネー」はとりわけ、事物を生成させる制作の技術や知識に対して用いられた言葉であった。次に、納富氏は「自由学芸（リベラル・アーツ）」という考え方の由来について次のように述べた。すなわち、「自由学芸」という教育理念が成立したの





は、プラトン、アリストテレスが生きた時代のギリシアではなく、ヘレニズム時代のアレクサンドリアかそれよりもあとのローマであると考えられる。さらに納富氏は、「自由七科」と呼ばれるリベラル・アーツの要件が四科（算術・幾何学・天文学・音楽）と三学（文法学・修辞学・論理学）の組み合わせになったことに対して、はっきりとした歴史的根拠が見つからないわけではないこと、それらがしばしば後の時代に「ギリシアの理想的な教育モデル」として、実態とは異なっているにもかかわらず広められてきたことにも言及した。こうした研究状況を踏まえ、現代の「アーツ」をめぐる議論に対して「自由学芸」的な理想を持ち出して安易な回答を与えるべきではない、そのように納富氏は結論付けた。

次の報告者は、大石和欣氏（総合文化研究科）であった。大石氏は、イギリス研究の蓄積を活かして、「アート」「サイエンス」といった言葉の用法の変化をたどった。現代の英語圏において「アート」という言葉は「芸術」を指すためにしばしば用いられる。しかしながら、16世紀頃に“artist”といった場合には、まだ芸術家ではなく自由学芸に習熟した人を指していた。17世紀頃から、絵画や版画、彫刻といった技芸に対して“arts”という言葉が用いられるようになる。これが18世紀に入ると、ロイヤル・アカデミーによって絵画を描く人は“artist”であり、版画や彫刻を制作する人は“artisan”である、という区別が行われ、現在に通じる用法が見られるようになってくる。対して「サイエンス」はどうかといえば、18世紀頃の「サイエンス」は、普遍的な知を扱う哲学よりも下位の個人的な知の営みとして位置づけられていた。しかしなが

人新世 (anthropocene): 地球を人間が管理 (management) する必要性

「環境経済学」の視点

- 個々人が自然(例えば、野生動物)や環境質(例えば、大気質)に関する需要を有しているという考え方
 - サイエンスとして、このような需要を計測・推定(経済学的手法)
- 例えば不動産価格は環境に対する人々の需要(良い景観や大気質)を既に反映している
- しかし一般には市場経済はこのような環境に対する需要を十分反映していない、例えば気候変動による自然災害増大のコストは石油価格には反映されていない → 政策介入が必要

ら、産業革命へとつながっていくこの時代に科学を発展させていった人々は、こうした大学的な知のヒエラルキーをよく理解していたわけではなかった。そうした大学の外での営みのなかで、「サイエンス」はテクノロジーを指すものとしても使われていくようになる。そして、現代的な「サイエンス」の用法は19世紀の前半に確立したとされる。しかしながら、大石氏もつと早い段階で「自然科学」を指す「サイエンス」の用法を見出すことができるのではないか、という仮説を述べた。

3番目の登壇者は田辺明生氏（総合文化研究科）であった。田辺氏はまず、「知識と技術の拡大によって自然を克服し、人間の自由を拡大すべし」として自然の客体化を推し進める近代的な世界観が限界を迎えている、という認識を共有しよう、という提案から報告を始めた。自然の影響を受けない自由な人間を目指した人類の営みは、人間と自然を分断するのではなく、かえって人間と自然がより緊密に結びついた、誰もが地球環境と無関係ではいられない世界をもたらすことになった。「人新世」(Anthropocene)という概念は、そうした時代の人間と自然の在り方を再考するきっかけを与えるものである。田辺氏がこうした前提をもとに提案するのは、近代的な世界観と結びついた知の概念を問い直し、人やモノを操作するための知(knowing what, knowing how)ではなく、人やモノとのつながりをより豊かにしていくための知(knowing from within)を蓄積していくような総合的アーツを打ち立てることである。このような総合的アーツを考えるうえで、田辺氏は私たちの価値観の中心を「知能から意識へ」と変更することが重要であると語る。「なにができるか」

ではなく「いかに生きるか」という問いに答えられるような知、それがこれからの時代に必要であると田辺氏は結論付けている。

田辺氏による人類学的な見地からの報告のあとには、成田大樹氏（総合文化研究科）によって、環境経済学の見地からの報告が行われた。田辺氏と同じく、人類の活動が、意識的であるかどうかに関わりなく地球の在り方に介入してしまう「人新世」の問題意識を引き受けながら、成田氏は私たちが経済活動を行う際の価値評価の基準にうまく介入しようとする環境経済学の試みを紹介している。環境経済学では、環境に対する個々人の需要を適切に計算し、市場への介入を通して地球環境の保全を実現していく方策を考えていく。その際に用いられるのが「生態系サービス」といった概念である。こうした概念を用いながら、人間の需要をどこまで計算して、どのように市場に介入していくかを考える際に、私たちににとっての「望ましい社会」の指標は不可欠となる。しかしながら、「望ましい社会」がどんなものであるか、地球環境の保護だけを目的として決定することはできない。自由と平等、個人と集団など、人類が人類として活動を続けるうえで重視すべき価値と、人類種の存続を維持するために重視すべき価値をどのように比較衡量していくべきなのだろうか。おそらくこの問いは簡単に答えられるものではない。そのため、あらゆる活動とその帰結を経済的な価値に置き換えて論じるだけではなく、さらに拡張された視野を持って環境経済学はこの問題に取り組まなければならない。現在の環境経済学の課題と取り組みを、成田氏はこのように紹介した。

最後の報告者は、本座談会の発起人でもある石井氏が務めた。石井氏は、単純に「アート」といったときには考察の射程から漏れてしまいそうな、漢字文化圏における「藝」の概念の説明から「中国哲学に

おける「アート」の問題」を提起した。元来、「藝」とは植物を植え、栽培することを意味する言葉であったとされている。その適用範囲は、「六藝」という言葉に表れているように、様々な教えを取り込みながら拡張していくことになる。やがて、「藝」は人間の身体的諸活動へと結びついて学問的なレベルまで抽象化されていくことになる。こうした由来を踏まえれば、「藝」とは自然と人間の関わりを広くその射程に収めるような概念であることが分かる。そうした前提を確認したうえで、石井氏は20世紀の中国における「自然」と「人間」の関わりについて、いくつかの文献を扱いながら考察している。たとえば李沢厚はマルクス主義を美学的に解釈し直すことによって、「自然の人間化」と「人間の自然化」が周期的に繰り返されるなかで、中国独自の文化的・心理的な構造が醸成されていったと論じている。とはいえ、決してそのような認識ばかりが受け容れられているわけではなく、一枚岩ではなかった。そうした変化のなかに石井氏は、既存の欲望を危機に対してそのつど調整・適応させ、あわよくば転換していこうとする中国的な傾向を指摘している。

すべての報告者が発表を終えたあとは、登壇者全員によるディスカッションと、聴講していたEAAスタッフからの質疑応答が行われた。報告者のさらに深い思考を誘発するような質問も向けられ、非常に有意義な対話の場になっていたと思われる。これまでの座談会で提起された問いが「アーツの再定義」という問いかけになって今回のような対話の場を切り拓いたように、本座談会の登壇者や聴講者のそれぞれに新たな問いが芽生え、次のイベントへと継承されていくことが望まれる。

報告者:田村正資(EAA特任研究員)

ヨーク大学18世紀研究セミナー参加報告

“Hannah Greg in the Age of Manufactures: Gender, Politics, and Class”

2020年5月19日

コロナウイルスという災禍の中、我々の日常生活はさまざまところで、否応なしに変化していく。大学における研究・教育もその例外ではなく、オンラインでの知的交流の在り方が、日々模索されている。オンライン授業になって、自らの意見をメッセージやテキストを用い、言いやすくなったという声、非リアルタイム配信型の場合、自分のペースでファイルを開いて受講できる、というような学生からの意見も耳にする。ウェブ上では今までになかったタイプの、コミュニケーション空間が成立している。留意すべきは、オンラインの「半身なき」知的交流は、実際に対面し、場を共有した討議や会話とは、別物であるということだ。例えばミーティング参加者が、何となく隣の人と会話を交わす、1つの場が複数の会話の輪になる、というよう

な教室では当たり前の状況が、オンラインでは起こりにくい。対面でしかできないこと、オンラインで代替できること、オンラインの方が優れていることなど、媒体ごとでそれぞれ、交流の在り方を検討する必要がある。私はこれまでポストドク研究において、「会話」(conversation) や「社交性」(sociability) をテーマとしてきたが、それが日々の実際的な問題として立ち上がった、という実感がある。

そんなことを考えていた際、自身の学問的故郷(の1つ)であるヨーク大学18世紀研究センターから、オンライン研究会に参加しないかというお誘いを受けた。さまざまな人が言っているように、イギリスの大学における研究会は活気があって、参加するととても楽しい。帰国後は現地のリサーチ・コミュニティと離れてしまいうかな、と思っていた。しかしオンライン化によって、かつての面々と話す機会が生まれた。時差の関係で、日本時間で24時半スタートという、かなりハードな状況だったが、討議の内容や熱気は眠気を圧倒するものであった。18世紀研究センターのセミナーは、これまで2週間おきに開催され、外部から発表者を招く形式をとっていた。オンライン化以降は研究所のスタッフがスピーカーとなり、自身のプロジェクトを同僚や院生に紹介する、というフォーマットになっている。今回はジョン・ミー氏(ヨーク大学)が提題者となっていた。

ミー氏はウィリアム・ブレイク研究から出発し、宗教的熱狂とその制御に関する歴史・文学・思想的検討から、アダム・スミスをはじめとするスコットランド啓蒙の道徳感情論にも、注意を払っている。ロマン主義研究者としてデビューした後、長い18世紀におけるおしゃべりの文化から、ジョセフ・アディソンやジェイン・オースティン、あるいはウィリアム・ハズリットなどを幅広く論じている。近年ではおしゃべりの文化に対する関心を、啓蒙の「ネットワーク」に関するプロジェ

Hannah Greg in the Age of Manufactures: Gender, Politics, and Class

Tuesday 19 May 2020, 4.30pm

Speaker(s): Jon Mee (York)

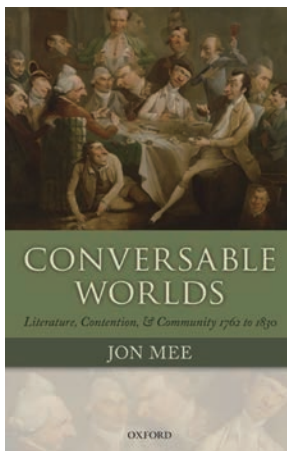
We are running a series of talks and discussions on approaches to research methodologies and issues that will introduce the graduate student community to the work of staff in CECS who were not directly involved in the teaching programme in the autumn and spring terms. We hope that the seminars will be broadly relevant to MA and PhD research by introducing you to how scholars in CECS have approached questions of methodology and interpretation in their own sub-fields within Eighteenth-Century Studies. Academic staff are of course also welcome to participate!



今回のイベント告知 (ヨーク大学18世紀研究センター)
<https://www.york.ac.uk/eighteenth-century-studies/events/all/events-archive/2020/mee/>

クトへと接続させている。18世紀中頃から19世紀初頭にかけて、エジンバラやグラスゴーで教育を受けた医師たち（あるいはエンジニアたち）が、北部イングランドで開業した。この結果、マンチェスターやリヴァプール、ヨークなどの都市で、エジンバラを模して医学協会・文芸クラブが創設された。スコットランドで花開いた会話の文化が、彼らのような実務家たちによって、イギリスの地方へと広がっていく、その知のネットワーク形成と作用が、ミー氏による本プロジェクトでは焦点となっている。

今回のオンラインセミナーでは、上述した最新のプロジェクト「文学・身体・機械——改良のネットワーク1780-1840年」の概要が紹介された。その出発点となるのは、女性の文芸協会加入権をめぐる、1790年代前後の論争である。例えばマンチェスター文芸・哲学協会においては、ハナ・グレッグ——彼女の伴侶であるサミュエル・グレッグは繊維工場の経営者であった——が、「心の科学」に対する見解を披露し、協会のメンバーと知的に交歓していた。従来、こうした協会やクラブの加入者は男性に限られていたのだが、女性をメンバーに入れるかどうかで、会員同士の意見が衝突したのである。女性が正式な会員として承認されることは困難であったが、非公式な形で、こうした協会の知的交流に参加していた様子が、アーカイブ調査から見て取れるようだ。メンバーシップ論争は、実際の・社会的な問題であったと同時に、人



ミー氏の著作物（オックスフォード大学出版会より）

<https://global.oup.com/academic/product/conversable-worlds-9780199591749?cc=jp&lang=en&#>

Professor Jon Mee awarded British Academy Senior Research Fellowship

Posted on 12 April 2019

Professor Jon Mee has been awarded one of only eight Senior Research Fellowships granted by The British Academy this year.



The fellowship will fund the completion of his research project 'Literature, Bodies, and Machines: Networks of Improvement, 1780-1840'. The project concerns the writing of the early period of the British 'industrial revolution', usually ignored by literary historians, and develops the idea of the region around Manchester as part of 'a transpennine enlightenment' that valued technological, scientific, and literary innovation, but increasingly divided over its unintended consequences.

ミー氏の最新プロジェクトに関するアナウンスメント（ヨーク大学18世紀研究センターのサイトより）<https://www.york.ac.uk/english/news-events/news/professorjonmeeawardedbritishacademyseniorresearchfellowship/>

間が自らの心をどう陶冶していくのかを問う、ヒューム以後のスコットランド哲学に関わる、理論的問いでもあった。女性の教育や知的能力が議論されるなかで、ハナ・グレッグは、トマス・リードやドウガルド・スチュアートの「心の科学」について、熱心にその著作を読みふけていたという。心をめぐる認識の学は、社会やネットワークをどう構想し運営していくかという、きわめて実際的な次元と接続していたのである。

心の科学と（会話の）世界を結びつけるものとして、18世紀スコットランドの医学者、ウィリアム・カレンの病理学も、オンラインセミナーで紹介された。カレンはエジンバラ大学で教鞭をとっていたため、その弟子たちが、医療の知識とエジンバラの文化を、開業先の土地へと広めていったのである。その舞台の1つが、文芸・哲学協会が設立されたマンチェスターであった。病理学者としてのカレンは、心が外部環境と相互応答し、モノを自らの内に取り込んでいく中で、個々人の特性や人柄が形成されることを論じたそうである。私自身はこの理論について、心とモノをめぐる運動によって、ネットワークが組みあがり、会話の世界と知の循環が発生する様子、これらを描いたもの

として理解した。ミー氏はカレンを論じるにあたって、ブルーノ・ラトゥールのアクター・ネットワーク理論やグレアム・ハーマンのオブジェクト論といった、現代の理論や哲学をぶつけていた。またネットワークや環境から、個人の形成を語るカレンの病理論は、隔絶した世界で一人思索するロマン主義的な人間像と衝突するため、文学史の理解にも重要であるようだ。長い18世紀の世界において、ネットワークをめぐる心の理論と実践は、垂直的な貴族社会の構造と対比され、同時代人たちから称揚される一方、個々人のありようを平板化するものとして、トマス・ド・クインシーなどから非難されることもあった。これが私の理解する限り、オンラインセミナーで提示された、まとめの1つであったように思われる。

今回提示されたトピックは、日本で（あるいは日本語で）研究をしている人にとっても、さまざまな形で接続が可能であろう。コロナウィルスの災禍において、ダニエル・デフォー『ペストの記憶』（1722年）の邦訳が、スポットライトを浴びたのは記憶に新しい。18世紀の言語・文化・社会の在り方は、現代で右往左往する我々とさまざまな形で結びつき、考えるヒントとなってくれる。また、スコットランド啓蒙と心の科学に興味があれば、例えば長尾伸一『トマス・リード：実在論・幾何学・ユートピア』（名古屋大学出版会、2004年）のような邦語研究書もある。さらに、松永

澄夫責任編集『哲学の歴史6：知識・啓蒙・経験18世紀』（中央公論新社、2007年）で概要をつかむこともできる。翻って、ハーマンのオブジェクト論など、研究会で参照された現代思想は、日本でも若手研究者を中心に翻訳・検討が進んでいる。一見すれば無関係に見えるものを混ぜ合わせた先に、18世紀研究のフロンティアもあるのだろう。

オンライン研究会に参加した後、東アジア藝文書院内のミーティングでは、こうした18世紀におけるネットワークと会話の世界について、地域を超えた形で検討することが盛り上がった。とりわけ、今回のテーマ（あるいは私自身の研究関心）から、高山大毅『近世日本の「礼楽」と「修辞」』（東京大学出版会、2016年）を読んでみたらどうか、という提案もあった。18世紀の世界において、異なる地域で同じような試みがなされたこと——感情に基づいた道徳論の構想、百科事典編纂、社交の称揚・実践とその理念化——この思想の「共時性」を追求していくことが、まさに私の研究課題である。オンライン研究会そのものも、そしてその知見をEAA内で共有する過程も、とても愉快的な試みであった。ヨーク大学18世紀研究センター、東京大学東アジア藝文書院、双方のスタッフのみなさまに感謝申し上げたい。

報告者：若澤佑典（EAA特任研究員）

第6回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年5月22日

2020年5月22日、第6回学術フロンティア講義が行われた。講師として世界史、比較歴史学を専門とする羽田正氏（東京カレッジ長）を迎え、「30年後を生きる人たちのための歴史」をテーマにした講義が展開された。

羽田氏はこれまで、「世界史」とは異なる視点で歴史を捉え直す「グローバル・ヒストリー」の枠組を提

唱してきた。今回の講義では、昨今のコロナ・ウィルス感染拡大を切り口に、パンデミックがグローバル・ヒストリーに対して何を提起するのか、についてお話をさせていただいた。

まず、これまでの歴史上のパンデミック、例えば黒死病、スペイン風邪とコロナ・ウィルスとを比較すると、コロナ・ウィルスの場合、感染者数・死者数はこれ

30年後に生きる人たちのための歴史

- 日本における従来の歴史理解は、20世紀半ばの世界の状態を背景に構想されており、現在の世界の状況を理解し、それに対応するためには十分ではない
- 中学や高校の生徒が学校で学ぶ歴史は、その人たちが社会で中心になって活躍する30年後に興味のあるものでなければならない
- 現在の歴史解釈の枠組みにとらわれず、30年後の未来を思い描き、その時に意味のあるポイントを過去から拾い出し、それらを組み合わせた歴史の叙述を考えることが、歴史研究者にとって重要

講義スライドより抜粋 (1)

までのパンデミックの中では目立って少ない。その要因として、現代における医学・疫学の進歩、衛生知識の普及、社会の衛生状態の向上などが挙げられる。特に今回のコロナ・ウイルスの場合、ロックダウンという強力な行政措置が取られたことも感染拡大の防止に繋がった。こうした措置が可能となった背景には、国・地方・街・家庭といった小刻みの単位でイニシアティブをとることができたことが大きい。

現代のグローバル世界においては、疫病、紛争、気候変動、経済危機は国境を超えて伝播する。しかしながら、今回のコロナ・ウイルスからも見て取れるように国境を超えた世界レベルでの協力、すなわちグローバルな協働は目に見えて少ない。その原因として、羽田氏は、各国のリーダーや影響力のある人々の間においてグローバル社会の相互依存関係が軽視されていることを指摘した。その上で、学術によって「地球」への帰属意識を喚起できないのか、と問いかける。

そこで、羽田氏は自身の専門である歴史学の「世界」という視点の問い直しを提起する。例えば、約30年前である1989年と現在2020年の状況を比較してみると、簡単に遠方の人々と会話できるほど科学技術は進歩を遂げるなど、世界情勢も環境も大きく変化してきている。一方で、この約30年間において、過去の見方・理解、すなわち歴史学は変化していない。どの国も一様に「歴史」を一つの主権的国民国家の今昔、といういわゆる「一国史」中心として解釈してきた。どの国家もその「起源」や定義は曖昧なものでありながら、人々は史実の提示に重点を置きつつ、諸外国との関係から一国の歴史をとらえてきた。また、

なぜグローバルな協働が進まないのか？

- 国際的な検査体制の構築、各国感染症対策の情報交換と協力、患者や治療者に関する情報交換、国境を越えた医療協力、ワクチン・薬剤などの共同開発、マスクや防護服の国際的な生産協力体制の構築、感染が重大な局面にある国・地域の支援、等々。課題はいくつもある
- コロナ危機だけではない。SDGs、気候変動、軍縮など
- 各国のリーダーや影響力のある人々に、同じ地球に帰属しているという意識が薄いのではないが、自国さえよければ他はどうでもよいという自己中心主義が蔓延
- 学術にその責任の一端はないだろうか。あるいは、学術によって地球への帰属意識を醸成できないだろうか？

講義スライドより抜粋 (2)

この一国史を複数束ねたものが「世界史」とされてきた。そしてこの現状の「世界史」は、地域的にヨーロッパが優位にあるヨーロッパ中心史観である。

したがって、世界史とは、「20世紀半ば以降のヨーロッパを中心とする、主権国民国家体制に即した一国史を複数束ねたもの」だと言える。こうした、自国と他国、ないしはヨーロッパの内部／外部の峻別を基本とした歴史解釈は、人々に日本をはじめ、自国に強い帰属意識を持たせ、同時に、西洋に対する強いコンプレックスを持たせている。

こうした一国史・ヨーロッパ中心の世界史の視点は、グローバル社会における協働の促進は不可能である。羽田氏は、現在において求められているのはむしろ、「『地球の住民』のための歴史を構想すること」である、とする。言い換えれば、世界がどのように形成され、自らの立ち位置はどこにあるのか、いかに世界と調和するのか、そうしたことを前提とした歴史が問われているのである。

そこで羽田氏が提示するのが、主権国家によって区分した歴史観から脱却した新しい歴史のあり方、すなわち縦軸のみではなく、横軸からも地球全体を見る「グローバル・ヒストリー」である（羽田正『新しい世界史へー地球市民のための構想』岩波新書、2011年。英語版は Toward Creation of a New World History, 出版文化産業振興財団、2018年）。グローバル・ヒストリーの視点は、世界という枠組から歴史を見直し、日本という帰属意識を持ちつつ、地球に帰属した意識を持つリーダーをつくることを目的とする。

グローバル・ヒストリーの構築を実現するため、現在羽田氏は精力的に国際共同研究を行なっている。



講義スライドより抜粋 (3)

活動を通して、羽田氏は次の3点に気がついたという。第1に、英語を中心化しない言語間交流の必要性である。なぜなら、世界には統一された「知」があるのではなく、言語によって複数の知の体系が存在するためである。第2に、歴史は、どこの、どの時代に立ち、誰のために歴史を書くのかで変化する。つまり、研究者の立ち位置 (positionality) によって歴史解釈は変化する、ゆえに歴史解釈に唯一の答えはない、という点である。最後に、歴史について語るときは徹底討論が必要だということである。言語によって異なる知を持ち、その人自身が持つ立ち位置があ

る。それゆえに歴史を語るには、相手のバックグラウンドを理解した上で解釈しなければならない。

だからこそ、国際協働には困難が付きまとう。だがそれは歴史それ自体が豊饒なものであることの証明である。20世紀半ば以降の主権国家により分類された歴史ではなく、30年後を思考し、自国の歴史だけではなく、地球の住民のための歴史という考え方を他国や他の集団と共有する、「歴史」の構築が必要である、というまとめによって講義は締め括られた。

報告者:二井彬緒 (EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

- 地球への帰属意識を育てるという考えは今まで講演してくださった先生の意見とも重なるものでしたが、紐帯として学術を用いるという点は斬新でした。(文科一類～三類)
- グローバル・ヒストリーの枠組みは、過度な自国中心主義からの脱却のみでなく、より豊かな国や影響力の強い国ばかりに注目しがちな歴史観に変化をもたらさうのではないかと、希望を持ちました。一方、この枠組みの中で、すべての国を平等に扱ったり、あらゆる外国語でその国の歴史を学ぶことには限界があるし、こうしたモーラ的に知識を得ようという姿勢は、グローバル・ヒストリーが求めているものとは少し異なる気もしています。自国への帰属意識と地球への帰属意識、個別の歴史観と地球規模の歴史観をどう統合していくこと

が可能なのか、これからさらに考えてみたいと思いました。そのために、私自身も外国語でその国の歴史を学ぶ経験をすると同時に、他国での歴史教育が、国のリーダーや民の歴史観、世界の見方にどのような影響を与えてきたのかについて、少しずつ理解を深めていきます。(文科一類～三類)

●先生がおっしゃったような地球への帰属意識の希薄さはこのコロナの状況下で改めて感じるところで、WHOの影響力やそれに対する人々の考え方に疑問がありました。この希薄さの原因を歴史に求めることは私にとって新鮮でしたが腑に落ちるものがありました。地域や言語圏によって、また人々がどのような時代を生きているかによっても歴史の解釈が変わってくることも今後歴史を学んでいく上で心に留めておくべきことだと思いました。日本独自の解釈があってもいいとは思いますが、その解釈が”独自の解釈”であると自覚されるような伝え方が必要になりそうだとも思いました。(文科一類～三類)

EAA・華東師範大学批評理論中心共催ワークショップ

伝染病と危機時代の文学と思想

2020年5月25日

華東師範大学批評理論中心・東京大学東アジア藝文書院(EAA)共催のオンラインワークショップ「伝染病と危機時代の文学と思想」が、2020年5月25日に開催された。まず、中島隆博氏(EAA院長)がワークショップの趣旨を述べた。中島氏によると、東京大学と北京大学の共同プロジェクトであるEAAは、これから日中間で様々に展開していく学術活動に新たな基礎を与え、共に人間の条件と社会に関する想像力を構想し直すプラットフォームを創ろうとするものである。以下、8つの発表について報告する。

—— パネル1 ——

最初の発表者である羅崗氏(華東師範大学)は、「国家と個人：自己隔離によつての感受と思考」と題した報告で、今回の伝染病事件と2008年に起こった中国四川省の地震を比較しながら、両事件において強調された表象の違いを述べた。2008年の事件で表象されたのが「社会」とするなら、今回の事件ではっきりしたのは「国家」であると、羅氏は見る。なぜなら、伝染病についての政策を支える技術的な発展と社会秩序の保障とネットワークの安定は、すべて国家の力によって実現された条件だからである。今までの十数年のうちに出来上がったインフラ設備といわゆる「ネッ

ト+」の発想は、今回中国の取った措置において不可欠な前提になっており、ある意味で「個人」を「国家」と関連させたのだ、と羅氏は述べた。

続いて、朱羽氏(上海大学)は「伝染病によって変わったものと変わらなかったもの：限られた自我による発想」という発表で、今回の事件に対する左翼知識人の発言を糾弾した。たしかに、左翼知識人の批判より、さらに有効性を持つものは、インフラ設備の生み出した「ニュートラル的」かつ非人間的な制度にはかならない。そうであるなら、制度の機械的な働きと人文学の言説はどのように関係しているのか、と朱氏は問うた。ここで、朱氏が引き合いに出したのは、アガンベンとByung-Chul Hanにおける生命概念の貧困化に対する批判である。「剥き出しの生」というレベルから見れば、ただ維持されるだけの人間生命と、ウイルスとを、区別することはできない。左翼知識人に今問われている重要な課題は、如何にして今回の事件を契機としてグローバル・資本主義を超克できるか、ということであろう。というのも、わたしたちはもとの秩序に「戻る」わけにはいかないからである。一方で、今回の事件は資本主義消費社会の「ノーマル」を中断させ、国家制度のメカニズムを露呈させることになった、と朱氏は指摘した。

倪文尖氏（華東師範大学）は、「なぜ私は言おうとするものがないのか：伝染病、輿論と心情」というタイトルで自身の感想を報告した。倪氏によると、われわれは中国での伝染病の流行とそのコントロールをいくつかの段階に分けていくべきである。そのためには、共和国への政治的アイデンティフィケーションが不可欠なものとなるが、中国国内ではこの問題がずっと解決されないままにいる、と倪氏は強調した。今回の事件において、医師と民衆の協同関係は、共和国としての中国がもっとも重視すべきポイントである一方で、この側面を含めて、左翼知識人が如何に今回の事件に対して発言すべきかがますます難問になっていくと氏は論じた。いまわれわれに必要なのは、魯迅がいう「横の姿勢で立つ」ことであり、普遍性を決して見捨ててはならないという態度である。また、倪氏はここで「普遍性」とは、闘争を通じて獲得されるべきものであると強調した。

———— パネル2 ————

次のパネルは発表者である石井剛氏（EAA 副院長）の発表から始まった。「伝染病の歴史的ナラティブと無情な“疫病抑制”」と題された発表で、石井氏は、伝染病のもたらした恐怖と焦燥を、個人的な気持ちとして他者と共有するためには、物を書くという仕方を取らねばならない、と主張した。「情」をもって物を書くことは、古代の詩人である屈原のいう「発憤以抒情」に関わる。屈原における「情」は、「感情」だけでなく「実情」、つまり現実の状況をも指している。「自己封鎖」の中にあって、われわれの「情」はどこにあるのか、と石井氏は問うた。さらに石井氏は、Alfred Crosby の *America's Forgotten Pandemic* などのテキストに触れ、奇妙なことに、国際的な伝染病は往々にして記録・記憶されていない、と指摘した。しかも、経済的に発展した国家は流行をある程度コントロールできるが、貧乏な国家は必ずしも同様の政策を取ることができるとは限らない。国家が弱ければ弱いほど、伝染病の実情に直面させられていることは、目下の事実であると石井氏は指摘した。

朱康氏（華東師範大学）の発表は、英語の「isolation」をめぐる言葉遊びとして、この語彙を「自

己、気体（ゾル）、孤独と団結」と独自に解釈して論を展開したものであった。自己隔離の期間に、朱氏は娘との「家庭団結」をむすんだ、と朱氏は述べた。伝染病の流行は事件と危機として、個人と経済と政治のレベルで緊急事態をもたらししたが、ルソーの『告白』を例にとりながら、朱氏は別の側面を強調した。それは、ルソーが検疫所を自分の「島」と見なしているように、しかも、「島（island）」がもともと「isolation」に関わっているように、近代政治においては、人々にとって「検疫」とは時間的装置である一方で、「隔離」は空間的装置である、ということである。「検疫」と「隔離」はともに14世紀に制度化されたものであり、モダニティーの現れである、と朱氏は述べた。この意味で、「isolation」は群れの隔離を指しながら、検疫の結果としての個人的隔離をも指している。つまり、実は「isolation」はわれわれの生活のありとあらゆる細部に滲透している。われわれは既に・常に個人として「島」化されたものであり、共有している「世界」など存在しない、と朱氏はジャック・デリダの論述を引用しながら唱えた。最後に、如何にして隔離からさらに自分を「隔離」させて、隔離に抵抗する術を身につけるかということが、「孤独」を「団結」に結びつける要だ、と彼はいった。

続いて、鈴木将久氏（東京大学）は「疫病の時期に魯迅を読み直す」と題された発表で、1927年の大革命の時期に魯迅の書いた『革命時代における文学』に触れた。鈴木氏は、魯迅は文学の無用さを論じているかのように見えるが、実は、竹内好が論じているように、魯迅が言わんとするのは、文学が自らの政治に対する無力さを自覚するとき、逆説的に「力」をもつようになるということだ、と強調した。また、魯迅の小説『祝福』のなかで、「祥林嫂」が知識人としての主人公に3つの問題を投げかけた場面は、魯迅の小説における最も面白い場面の1つである、と鈴木氏は述べた。なぜなら、一方で、魯迅はここで主人公の代表している啓蒙思想に対して批判を加えているが、他方で、語り手が自らの無力さを自覚するようになる契機もここに同時に存在しているからである。「祥林嫂」は自分の実世界を持つが、知識人の語り手はこの世界へ入ることもできないし、理解することも

できない。これに対して、2年後に書いた『無常』で魯迅は自分が実は「祥林嫂」の世界を子供の頃に共有したことを示唆している、と鈴木氏は指摘した。言い換えれば、魯迅は啓蒙や近代思想の限界を意識しているが、「祥林嫂」の世界への親しみを示している。魯迅の論じた「無常」と「科学」の関係なき関係は、われわれに思索の手掛かりを与えるかもしれない。

—— パネル3 ——

毛尖氏（華東師範大学）の発表「末端組織の管理と伝染病の政治：スローガンと罰をめぐって」は、各国の宣伝スローガンに着目した。毛氏によると、アメリカのスローガンは個人に、イギリスのそれは「隣人」にアピールしているのに対して、中国のそれは「疫病抑制のための人民戦争」という、敵友関係を強調した革命的文法を踏襲するものとなっている。結果として、国家と社会と個人のそれぞれのレベルで、中国は有効なスローガンを複数作り出し、民衆の医療に対する認識を深めることに役立った、と毛氏は指摘した。その上で、注意すべきは、これらのスローガンは必ずしも国家イデオロギーとして提出されたものではなく、むしろ末端組織の行った社会的管理の一部として作り出されたものだ、ということである。ただし、中国の社会主義的歴史経験なしには、それらのスローガンは想像しえないものであった、と毛氏は強調した。最後に毛氏は「このような敵友関係は普遍化され得るものであるのか」、「防疫の「人民戦争」は政党の代表性を立て直すことができるのか」、「左翼政治はまだ可能なのか」という以上3つの問いを提起して発表を終えた。

最後に、林凌氏（復旦大学）は「政治と輿論：伝染病を背景とした思考」と題して発表した。今回の伝染病は、われわれに政治について考え直す契機を与えた、と林氏は指摘した。氏は、これまで政治

概念と見なされてこなかった「規模」概念を、今後政治を考える際に不可欠な概念として導入すべきであると主張した。なぜなら、「規模」は、権力の集中や権威の確立、そして民衆の支持といった問題に密接に繋がっているからである。さらに、輿論と宣伝について、われわれも考え直さなければならない。なぜなら、本当の「宣伝」はスローガンが現れる前に、すでに感情や信仰に訴える言説として働いているからだ、と林氏は指摘した。

全体討議では、羅氏は、今回中国政府が出したスローガンが、実は「大国防疫」から「人民戦争」のようなレトリックへ転じたことを指摘した。この2つの原説が今回いかに機能したかという問いは、これから研究すべき課題であろう。それに関連して、今後の知識人の課題は、エコロジーのレベルで国民国家を超えて人間と環境の関係を考え直すことであり、他方では、新しいチャレンジに際して、人間社会の組織形態についての論述、とくに左翼理論を更新することである、と羅氏は述べた。また中島氏は、アガンベンの強調した「人民」概念を取り上げ、いま進行している生命の「健康化」と「脱政治化」における人民の欠席、つまりただ「代表」されているにすぎない人民を問題にした。いかにして「人民」を表象すべきか、あるいは「人民」の表象を想像することができるのか、と中島氏は問いを投げかけた。最後に、石井氏は、中国政府の取った措置に潜んでいるある種の「群衆路線」に触れた。世界全体が政治体制の更新・再考を迫られる中で、いかにして中国の「群衆路線」のもつ世界史的意味を叙述することができるか、という開かれた問いを提示し、本ワークショップを終えた。

報告者:王欽(EAA特任講師)

第7回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

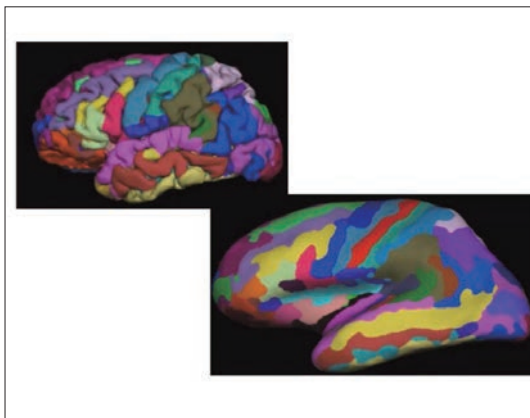
2020年5月29日

5月29日、学術フロンティア講義の第7回が行われた。今回の講師は脳科学研究者の四本裕子氏（総合文化研究科）である。石井剛氏（EAA 副院長）からの簡単な紹介と四本氏の自己紹介の後、すぐに講義が始められた。脳科学は、脳とそれが生み出す機能について研究する学問分野であるとし、脳科学研究の歴史は B.C.3500 ～ 1900 / 1900 ～ 2010 / 2010 ～ の3期に分けられるとした。第1期については、古代インカで、頭蓋骨内での出血に対して、血を抜いて脳の損傷を抑える手術の跡がある人骨が見つまっていることや、「医学の父」古代ギリシアのヒポクラテスが、人間の心の座は脳であるとしたことが紹介された。第2期には、脳機能測定法の進化もあり、脳の各部位によって異なる機能が担われていることが分かってきた。

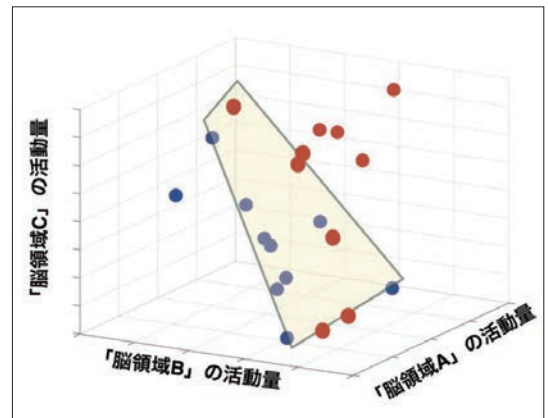
こうした歴史的概観の後、「平均値を考える」とのテーマで、グループの差と個人差を考える講義が進められた。「差」には一般化可能な差とそうでない差とがあり、グループに差があるからといって、それが個人の属性をあらわすとはいえないことが言われた。続けて脳の多次元性に関連して、多変量解析についての説明があった。脳の差はモザイク状であるので、

多変量解析でこそ分かるのだといい、84次元で計算をした結果が示され、3486次元の計算では計算に10日ほどかかるとの説明があった。いまや平均値の差で語るのには「非科学的」であって、それよりも多次元性に注目せねばならないという。第2期以前の脳科学は、脳の部位の特定と平均値で語り、その差から、「科学的」に性差を説明する言説などが紡がれていたが、いまや一般化可能な差が重要なだと四本氏は述べた。

そうして出てくる差が因果的に現象を説明するのにつぎ、原因と結果の向きの方向、他に共通する原因の存在、疑似相関について説明があった。さらに差が生まれる仕組みとして、脳、行動・思考、社会・教育の3者関係が挙げられて、それぞれの相互関係について説明がなされた。脳には可塑性があって、脳自体が変わり、また様々な要因がそれぞれ原因となり、結果となる。すなわち多次元の社会に我々は生きているのであって、そこから多様性の尊重、活用が求められるとした。単純なグループ化・平均化は情報量を減らす操作であり、そうした過少な情報量で社会を回そうとするのはコストパフォーマンスが悪いと講義が結ばれた。

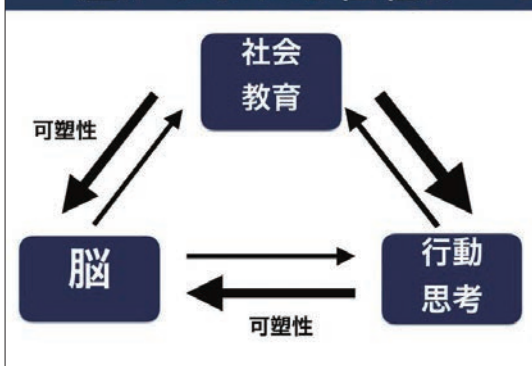


講義スライドより抜粋 (1)



講義スライドより抜粋 (2)

差がうまれる仕組み



講義スライドより抜粋 (3)

講義がいったん終わられた後、石井剛氏からまず質問があった。多元的な解析によっても、やはり男女のおおまかな違いは浮かび上がってくるが、それと多様性との関係はとの質問。四本氏はそれが、脳がつくりだした結果なのか、行動の蓄積や遺伝的なものとして発現しているものかは分からないとし、脳機能の差だけで説明はできないとした。

ついで、こころと脳について石井氏は質問した。脳ではなく、「こころ」が外界を認知し、考え、ふるまうという経験知もある。いつから脳に重きが置かれたのかという質問に対しては、ヒポクラテスの時代からこころは脳にということが言われているとした。四本氏は自ら「原理主義者」だと語り、こころ＝脳だと考えているとしながら、身体と脳のセットの身体性が大事であり、脳だけを取り出してそこにこころがあるとは思わないと述べ、統合としての脳がなければ、こころは働かないだろうとした。

石井氏はマルクス・ガブリエルの『私は脳ではない』を取り上げてニューロセントリズム、神経中心主義への反発に言及しながら精神の自由の確保の必要性が言われているとし、脳が感じることと「わたし」が体験しているということにはズレがあるのではないかと尋ねた。四本氏は、ズレにつき、本当にあるのか、解明されていないだけなのかを問題にし、これに対して石井氏は、解明が進んでいく中で、脳の規定性を強調していくのか、それには回収されない自由があるという方向へいくのかとした。四本氏は、脳の外に自

由が欲しいかとし、脳の中にはダメかとした。自由があったとしても、脳があって、感じられなければならないのではとし、自由であるということが、自分は自由だ、私であると感じられていることだとしたら、それは脳の働きで説明できるのではとした。

AIは自由意思を持つかとの石井氏の問いに対しては、身体性が重要であると考えているところから、AIで真の知能をというような流れには疑問を持っているとした。人間の内的思考とAIの働きが同じかどうかは検証できない問題だとした。そこから、人間が人間であることに及び、アンドロイドの人権については、内的なプロセスがそこにあるのなら、権利が必要になるのではとした。

ここで学生から質問を募り、多次元解析における変数は無限に増やす必要があるのか、どこかで打ち切って効率化する必要があるのかという方法的な質問がまず出た。四本氏は、分析の精度が頭打ちになるところで区切るべきとした。四本氏が講義の最後で社会運営の「コストパフォーマンス」という言葉を出したことについて質問が出た。四本氏は「コスパが悪い」というのは、個人差を考慮しない雑なグルーピングによる社会運営は人的リソースを十分に活用できていないとした。平均値の考え方は脳の単一の部位に注目し、多次元解析は脳の複雑性に着目しているのかという質問に四本氏はイエスと答え、ただし、1つの部位、脳のネットワークどちらを相手にする場合でも、多次元解析は使えるとした。

フロンティア講義第3回の田辺氏の講義で、人間の根本的な同一性としての「わたし」というものはないとされていたことに関連して、そのような同一性はああると思うかという問いに対し、四本氏は、記憶や、同一であると思っているところの意識は脳にあるとした。ただし、記憶は揺らぐし、アップデートされるものとしてあるとした。解き明かしきれない存在としての人間ということはないか、全てが分かってしまえば、それはもう人間ではないし、どこかキモチワルイのではないかという質問に対し、四本氏は、むしろすべてが明らかになれば、すぐキモチイイのであって、それを目指して研究をしていると答え、質問者との間での方向性の違いがみられた。

石井氏からのまとめとして、脳科学に侵犯されている（すぐ上のキモチワルイという発言に見られるように）と人文学の側で感じている向きもあるが、むしろ、脳科学の営みを良いものとして受け止められるような人文学としていかなければならぬとした。人間の意識は

まだよく分かっていないのであって、脳科学の進展によるディストピアをいうよりは、まずはもっと研究してみべきであるとして、本講義は閉じられた。

報告者:高原智史(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

- 四本先生が「全ては脳の発火だと思っている」ということをおっしゃったのは個人的に非常に衝撃だった。そして、自分も石井先生のように人間の選択や行動には一種の自由があるということ信じたいと思っている。ではそういう考え方をどう位置付けるかと考えたときに、先生がおっしゃった「意識をどう定義するか」という話が参考になると思った。つまりここでも「自由を、自由が何らかの形で存在すると志向する考え」と考えることで、自由のあり方を見出すことができるのではないか。仮に脳科学が、自由意志の存在を否定するとしても、人文科学的にそう考えてみたいと思う。(文科一類～三類)
- 科学で得られた知見は、社会に存在する偏見、臆見に基づく差別に対して、強い反論になりうるということに改めて認識した。その一方で、私は今回の講義で1つ引っかけがあったことがある。四本先生は、そういった一般化可能でない「脳の差」に基づいて様々な判断を下すことは「コスパ」が悪いとおっしゃった。しかし、(これは私の個人的な意見だが)「コスパ」で考えるのは少し危険ではないだろうか? というのも、これは裏を返せば、もし「コスパ」のいいような差別が存在するならば、その差別は許容されるという考えにつながりかねないと思ったからだ。もちろん先生には全くそういう意図はないだろうが、「コスパ」を(意図的に)曲解して差別に利用しようとする人間もおそらく出てくると思う。科学は差別への有効な反論になりうるが、ナチスが優生学を利用したように「科学」が悪用される危険については常に注意しなければならない。そういうわけで、私は「コスパ」に訴えるよりも他のアプローチを取りたい。(理科一類～三類)

第8回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年6月5日

2020年6月5日、張政遠氏(総合文化研究科)を講師に迎え、「30年後の被災地、そして香港」をテーマに第8回学術フロンティア講義が行われた。講義はハムレットの「We know what we are, but we know not what we may be.」との言葉よりはじめられた。未来は未知だが、未来を想像することは誰にでもできる。30年後の世界、具体的に2050年という時点には、被災地と香港はどのように物語られ、そして忘却される

か出席の学生たちとともに想像してみたいとの趣旨で論がすすめられていった。

張氏は仙台で留学生活を送り、仙台を「第2のふるさと」とするという。震災発生1年後の2012年3月には、東北大学が主催したシンポジウム「大震災と価値の創生」において「人はなぜ敢えて逃げないのか」というテーマで発表を行った。張氏は、動物的本能からすれば危険からの逃避は通常の行為だが、



講義スライドより抜粋 (1)



講義スライドより抜粋 (2)



講義スライドより抜粋 (3)



講義スライドより抜粋 (4)

そこには逃避を道徳的行為として成立させえなかった「敢えて逃げない」要因があったのだと述べた。

震災後に女川（七十七銀行支店）、仙台市若林区（浪分神社）などを回った張氏が特に注目しているのは、和辻哲郎『古寺巡礼』（1919年）で示される巡礼（Pilgrimage）という実践である。もともと宗教的に、すなわち「聖地巡礼」「霊場巡拝」といった用法で使われるこの言葉は、忘れかけていた記憶をよみがえらせる「実践」（praxis）行為であって、張氏は「巡礼」を通し西洋近代の価値観を相対化しながら、日本の純血性に回帰しない仕方での新たな価値創造に寄与することを試みている。

こうした考えを念頭に、張氏はその後数回にわたり被災地巡礼の旅に出た。2013年5月、陸前高田（記憶装置としての奇跡の一本松）、気仙沼（処分前の第十八共徳丸）、南三陸（語り部バスツアー）、仙台市若林区（浄土寺）、閑上（愛他行動の現場）などをめぐり、現地の人々と交流をおこなった。2014年5月には浄土寺を訪ね、2015年6月には東京大学 IHS 研修「香港中文大学と考える東日本大震災からの復

興と共生の市民社会」を実施した。一連の巡礼行を通じ、張氏は次のように痛感した、一から被災地の復興をやり直すことが必要であるその一方で、被災の証明である「残骸」を記憶装置として残すことも重要であり、なおかつ震災記憶の精神的な器、すなわち記憶の担い手のオーラル・ヒストリーなしには、震災遺構という物的な存在も決して機能しないのであると。

そこから話題は被災地より香港へとつながった。2015年、香港では「反核 不要再有下一個福島」（反核。第二の福島を出すな）というスローガンが掲げられ、広東省と台湾の原発への危惧が表明され、核・原子力問題は福島のみならず世界の問題でもあるとの現実が語られた。2015年3月12日～3月15日に行われた東京大学 IHS 研修「香港で考える日本哲学と東アジアの共生」は張氏同行のもと、東大学生と雨傘運動参加の学生3名が共に運動が占拠した市内中心部、そして新亜書院の香港中文大学への統合時に独立した新亜研究所を訪れた。実際に運動がおこった場所と、歴史を持ちながら深刻な経営状態に陥り忘却されていく研究所との接触は、ある種の「巡礼」な



講義スライドより抜粋 (5)

のだと張氏はいう。

一般に定式化される「香港」の簡史は以下のよう
なものである。

1. 1841 以前 伝統的海運の時代
2. 1841-1859 開港の最初期段階
3. 1860-1898 貿易活動の開始
4. 1899-1940 国際港湾
5. 1941-1947 占領と復興
6. 1948-1966 工業化と近代化(実際にはより早い)
7. 1967-1996 世界一の港湾都市
8. 1997- 現在 新しい挑戦と契機

しかし、植民地支配の視点からは、こうした歴史認識より遮断され忘却される部分が浮かびあがってくる。すなわち 1842 年～1941 年は「英治時代」、1941 年～1945 年の太平洋戦争の間は「日據時代」、戦後の 1945 年～1997 年は「英治時代」に戻ったが、それ以降は「ポストコロニアル時代」と見ることもできる。アヘン戦争以前の香港は「中心と周辺」の観点からすれば、中国大陸に対し周縁化される「不毛な島」とイメージされがちだが、実はかなり長い歴史を持ち、6000 年以上前へ遡る考古的な遺跡もある。

金子馬治、和辻哲郎などの学者は香港に関する語りを残している。そこでは「ジャンク」、「清国に無用」、「無政府」などと言及されるような、国家権力より遠く血縁団体に拠って成立した社会香港とのイメージが強かった。歴史の潮流に翻弄される香港は、支

配者が転々と変わり、宗教に関する記憶装置も東西の間で改ざん・回復を繰り返された。そして混乱時の避難先（1949 年の国共内戦から、1966 年の文化大革命、1979 年にはベトナム難民として）、から逃亡の派出元（1984 年の中英連合声明以降の移民、1989 年の天安門事件および 1997 年返還の「駆け込み」移民、2012 年以降の格差問題・雨傘運動・反送中運動・反国安法運動などに伴う移民など）となる時代を経験しつつある。

結論部では、学術フロンティア講義の共通テーマ「30 年後の世界」に回帰した。被災地にとって浄土寺はどうか（檀家減少問題）、新地町の漁師たちは漁を再開できるか（廃炉問題）などが課題となる一方で、香港が一国二制度・高度自治・港人治港などを約束通り「50 年不変」としうるかは考えなければならない問題である。両者が共通して直面している課題は、これまで語られてきた記憶をきちんと残しうるかということである。柳田国男『雪国の春』（1928 年）を引用しつつ、張氏は「忘却の抵抗」の重要性を力強く持ち出す。すなわち、私たちは巡礼する（記憶装置を巡り、人々と出会う）、物語る（物語ることは忘却への抵抗である）そして connect する（共生する。共に喜び、共に悲しみ、死者の声を聴く）ことによって抵抗できるのである、と張氏は忘却への対抗策を語った。

質疑応答ではたくさんの質問が出された。そのいくつかを拾うと、トラウマや傷つく記憶に対して再度語ることがつらいからこそ「抵抗」になり、自らのトラウマとの対決の可能性をはらむ、巡礼に際した物的記憶装置のみならず記憶につなぐ人々とのコネクトこそ重要である、「国家」という大きい物語に疎外される者は自分の経験より小さな物語を構築して記憶に付着するアイデンティティを作る必要があるなどの観点が述べられた。張氏は質疑を俯瞰して「記憶」および「忘却」の構造をいっそう明確に示したうえで、講義全体をしめくくった。

報告者:徐莎莎(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

●私も去年あるゼミのイベントで宮城や福島を訪れて関係者の方と議論する機会があったのですが、そこでも「お金ではなく元の生活を取り返したい」ということを強く主張されていたことが思い出されました。今回は忘却への抵抗が1つ大きなテーマだったと思いますが、どれだけ当事者意識に近づけるか、どれだけ周りの人を、未来の人をそこに巻き込むことが大事なのかなと思いました。(文科一類～三類)

●近年の世界では、ナショナリズムの高揚と、個人主義の台頭、そして短期的な利益に目を向ける人が多く、そういった自然災害や戦争、弾圧、制度によって生じた過去の悲しみや苦しみが忘れられていることにより、政治的、経済的、社会的、文化的な議論や衝突を簡略化してしまい、過去の過ちを排除しているように思えます。そんな記憶装置や巡礼の重要性も、今回再認識できてよかったです。今回問題に思ったのが、記憶装置にはある程度の情報を選択して、残している可能性があることです。もちろん、歴史の全ての側面を俯瞰し、全てを網羅した記憶装置を作ることは到底無理である一方で、質問にも出ていたように恣意的に情報を排除した、偏ったものを残してしまうのではないかと思います。(後期課程所属の学部生)

●被災地を記憶するために記念するものを設置することはとても大事だと思う。過去のつらかったことを思い出すから、トラウマになることを理由に被災地から残されたものを保存し、巡礼を招くことが必要だと思う。二度と同じような被害が起こらないように、次同じような災害があっても被害を最小化するように、事態をしっかりと覚えておき、改善点を探るために反省が求められる。(後期課程所属の学部生)

●歴史とは別の小さな物語りという表現が授業中にあったが、歴史もまた人間社会が過去をもとに現在を再確認する点では、忘却への対抗であり、その関連性は強いものだと思う。そうしたときに、歴史学の現在の主流である文献史学にとどまらず、オーラル・ヒストリーの要素を歴史学に取り入れていくことが、歴史の果たす忘却への対抗という点で不可欠なのだと感じた。実際、歴史で扱われる遠い過去は人々に親近感を持たれず、その点では「忘却」されているとすら言えるのだと感じた。(文科一類～三類)

●今回の授業一番印象的だったのは、張先生がおっしゃられた読谷村のエピソードで、国家の考え方などに捕われてしまうと言うより、むしろ現地に足を運び実際に現地で生きている人の言うことに耳を傾けることで、現地に実際に生きている人間が感じたことを感じることができる、ということでした。これまでこの授業では学問的に一般的なことが述べられるのが多かった中で、今回の話は個々の事例によった話であり、自然に考えることができました。復興についての話については、震災遺構、記憶装置が見えないところではもうすでに「ただの新しい街にいる」と感じると言われて、被災者の方々も前を向けばそのように感じているのだろうか、と疑問に思いました。(理科一類～三類)

第2回「文学と共同体の思想」読書会

2020年6月6日

2020年6月6日、今年度2回目の「文学と共同体の思想」読書会が行われた。課題図書は報告者の建部良平（EAAリサーチ・アシスタント）が選んだ吉川幸次郎『読書の学』（ちくま学芸文庫、2007年、

底本は『吉川幸次郎全集』第25巻）である。

読書会は本書を選択した報告者の発表から始まった。報告者は「読む」という行為に対する関心から本書に触れており、吉川の主張する「読書の学」は

思考を進める上での1つのヒントになると考えている。とりわけ吉川自身が、中国では段玉裁や王念孫、日本では荻生徂徠や本居宣長など18世紀の学者に敬意を示し、その方法論からの啓発を受ける中で「読書の学」なる学問を記述した点を重要視した。「読書の学」とは、書物の読解を通して人間を考える学問である。それはただ単に書物の言語が伝えようとする「事実」を理解・解釈しようというのではなく、古今の様々な書物と結び合わせながら、博学の上に基礎付けられたダイナミックな読解を試みるものである。また同時に、書物の言語それ自体にも注目し、その言語が持つリズムや構造への直感的な把握も重要視する。そして最も重要なのは、その読解を通して人間とは何か、などに代表される普遍的な問題へと思考を展開することである。もちろん、そこでの普通の語り方は、現在のわたしたちが考える形と完全に一致するわけではなく、時代や潮流ごとに異なるが、要するに1つの書物の読解を通して、そこに含まれる極めて多様な議論を呼び起こすことが「読書の学」の核心なのである。

出席者全員による議論も非常に活発に行われた。佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）は解釈のあり方に関心を示した。テキストや事実に対する解釈は、本来多様なあり方をするものであり、1つの権威的な解釈や思考法方法によって束縛されるものではない。しかしながら、そういった権威的な解釈に無批判に依存しようという動きは、いつの時代も常に存在している。それに対して如何に距離をとり、未来へとつながるものを考えていくのか。それが学問をする上で極めて重要になると佐藤氏は述べた。

王欽氏（EAA 特任講師）は、本書中で言語が事実の伝達を以って忘れられてしまうと述べた箇所に注目し、これが広く議論されている問題であると示した上で、小林秀雄の批評理論にも言及しながら語った。人間が発する言葉は1回限りのもので、全く同じ発話をすることは極めて困難である。言葉を忘れてしまうことや、他者の言葉を伝えることの難しさは正にこの点に起因しており、それを吉川の言語観に対して問いかけた。

張瀛子氏（EAA リサーチ・アシスタント）は、王氏の議論を引き受ける形で、引用のあり方について述べた。張氏は中国の経学を研究しており、そこに現れる引用の形、すなわち経書や経書の注釈書の文言が経学者の記述において、断章取義的に引用される点に注目した。これは中世の神学者トマス・アクィナスのテキストにも共通するもので、如何にして先行する他者の言葉を使いながら自説を展開していくかについてである。

報告者自身の読解は自身の関心に引きつけられている側面もあり、上に述べたことが吉川の真意であるかは、今一度考える必要がある。しかし、それ以上に報告者が重要だと考えているのは、18世紀の学者から啓発を受けた吉川の学問を考えた上で、今一度18世紀の学問を考察し、そこから現在のわたしたちにもつながる問いを見つけ出すことである。本読書会はその構想についての1つの発露の場として、そして様々な議論を展開できた点で、非常に有意義なものであった。

報告者:建部良平(EAAリサーチ・アシスタント)

第9回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年6月12日

2020年6月12日、第9回学術フロンティア講義が行われた。今回の講師は公衆衛生学を専門とする橋

本英樹氏（医学系研究科）である。「医療・介護の未来」と題された本講義の要点は「言説を読む力」「数

言説の背景を読み解く力

数字を見抜く力

有効な solution space (solutionではない!) を見つける力

2つの現象から考えてみましょう

「高齢化により医療介護費が増大し経済を圧迫するので医療介護費の削減が必要である」

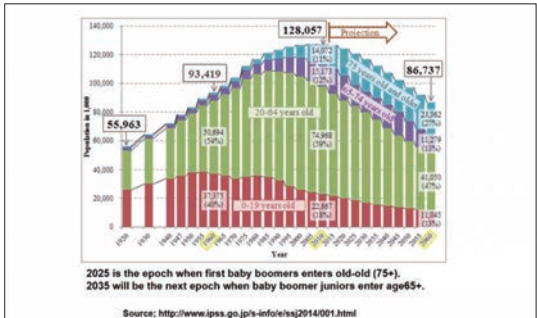
「新型コロナウイルスについて日本は独自の「日本モデル」で世界保健機関も認めるように死亡率を低く抑えることに成功した」

講義スライドより抜粋 (1)

字を見抜く力」「有効な solution space を見つける力」についてであった。

東京大学の教育で、前期過程にあたる1、2年生は高度な専門知識を深めるのではなく、多角的な視野から物事を眺め、批判的な思考能力を身に付けることに重点が置かれている。それはあらゆる知的生産の基礎であり、卒業後に様々な分野で活躍する上での基礎であり、そしてより良く生きるための力でもある。これらを説明するべく、橋本氏は高齢化をめぐる日本国内の言説と、昨今の重要課題であるCOVID-19をめぐる言説を具体例として挙げた。

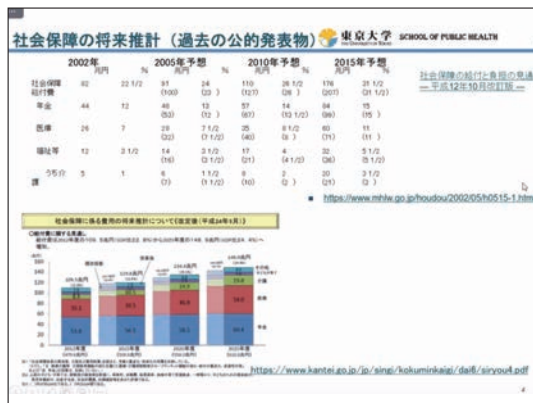
日本社会が高齢化していること、これは1つの「事実」として認識されている。しかしそれを推し進めて国全体の社会保障費、とりわけ医療費が増加し続けるという言説はどうか。高齢者が増えるのだから医療費は上がる。このように考えれば妥当かもしれない。しかしデータを詳しく考察するとその実態は異なってくる。第1に、2035年が高齢者人口のピークを迎えるというデータを踏まえるならば、「高齢者の増加によって医療費が増加し続ける」という言説は成り立たない。高齢者の数自体が増加し続けないからである。また政府が出す「社会保障の将来推計」は、医療への設備投資等が年率3%の割合で増加し続けるという見込みを前提としている。しかし実際のところ、設備費の増額は政府の見込みよりも下回ることが多く、毎年同率で増加し続ける状況には至っていない。高齢者はある一定の時期を境に増加しない、そして設備投資費は増加したとしても継続的に大きく増加するわけでもない。このような分析を踏まえるならば、「高齢者の増加によって医療費が増加し続ける」という「事実」



講義スライドより抜粋 (2)

は成り立たないのである。また環境や生活習慣の向上によって心臓病等による死者数が減少傾向にあること、後期高齢者に対しては体に負担のかかる高額医療を施さない傾向も強いことから、その「事実」は実際の数字から逸脱している。橋本氏はこの例によって、既存の言説に惑わされずその根拠となっているデータを分析し読み解く力の必要性を強調した。

続いて、昨今の重要問題であるCOVID-19をめぐる言説である。各国の対応等が様々な媒体で報道・考察される中、橋本氏は日本の状況に焦点を当て、日本が感染者を現時点においては低く抑えられている状況を、未だ誰も説明できていないことを強調した。日本と同じく感染者を比較的強く抑えられた東アジア地域の韓国や中国は、各政府による政策的な介入によってある程度説明できるのに対して、自粛要請を基本路線とした日本は、結局明確な対策を打つ前に第一波の収束に向かった。日本人の清潔な生活習慣や民度がこれを成さしめたという言説が時折姿をあらわすが、それが決定的な要因ならば、そもそも4月期の感染者の増大には至っていないと橋本氏は主張する。また、日本特有の保健所のシステムは有効な要素の1つではあったが、4月中旬の感染状況がもう1週間ほど続いていれば、保健所のシステムもパンクし、医療崩壊が起きていたという橋本氏の分析（氏自身が保健所の援助に携わった上での見解）から、これが決定的要因になったとも言えない。医療崩壊を起こさなかったのはある意味で奇跡であり、日本が〇〇によって感染を防いだという「事実」は未だ掴み取られていないのである。「事実」というのはこういった数字を読み解く中でわたしたちが掴み出して初めて現れる



講義スライドより抜粋 (4)

ものなのだ」と橋本氏は主張する。

高齢者の医療費、そして COVID-19 をめぐる言説を例としながら語られたのは、初めに示した「言説を読む力」、「数字を見抜く力」、「有効な solution space を見つける力」という3つの力を持つことの重要性である。情報化社会が進み、日々様々な状況に触れる中で如何にその情報と共存していくか。「言説を読む力」と「数字を見抜く力」は、上に示したように情報を受け取り活用する主体として、それに惑わされず自身の知性で判断していくことの必要性を示している。そしてその上で強調されたのが「有効な solution space を見つける力」である。「solution」と言った場合、そこで喚起されるのは問題に対する1つの解決策というイメージである。しかし上で見られたように、数字は様々な方面から解釈できるものである以上、その数字が示す問題に対する解決策も多様なものとなる。COVID-19 の問題が疫学上のものだけではなく、人間関係や社会システムにまで波及しているように、問題自体が本来複雑なものであり、唯一の解決策はありえない。「solution space を見つける力」という言葉で橋本氏が強調したのは、様々な問題に対して幾つもの解決策が考えられうという思考方法や姿勢を持つことであった。

授業内の質疑や授業後のリアクション・ペーパーでは、学生からの多数の声が寄せられた。まず多かったのは、自身がこれまで情報を鵜呑みしがちだったことに対する反省であった。批判的思考が重要であることを知ってはいたが、1つの実践として落とし込めていなかったという率直な思いである。また、物事を考えるときに論理を常に意識する必要があること、これについても今後の大学生活の中で身につけたいという意見が多かった。この議論を踏まえた上で、橋本氏は科学的な語りというものは、ある意味で民主主義を成立たせる根本にあると語った。Aがあり、Bがあり、Cがある。ABC間の因果関係は様々な形がありうるが、ある主体が自身の解釈や判断を他者に説明する上で必要な語りは、科学や理系という枠組みにのみ囚われるものではなく、民主主義において他者に主張を伝える方法と極めて近い関係にある。つまり橋本氏が強調した3つの力は、物事を多角的に批判的に捉える能力であり、そして民主主義というシステムを根底から支える力でもあるのだ。今後の大学生活において如何に学んでいくか。その意義や展望について、本講義は非常に心打つものがあった。

報告者:建部良平(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

- 私も今日まで、公的機関が発出する統計数値が the fact だと思い込み、疑いを持ったり、前提情報を意識することはほとんどありませんでした。また、医学、特に公衆衛生の分野は文理融合であるというお話がとても

心に響きました。私は、途上国の教育格差に関心があり、健康と教育の関係に注目しながら、今後学びを深めたいと考えています。そのためには、統計数値を用いて、事象を客観的に判断することが不可欠だと思います。しかし、統計数値を読み取る際にも、その背後にどのような前提条件があるのかに注意する必要があることに気づかされました。私のソリューションスペースをどのようにして広げていけるのか、情報を自ら認定する作業を繰り返して、探求していきたいです。さらに、文理の枠で解決策の可能性を決めるのではなく、幅広い知識の連関を通して、教育に対する課題意識を掘り下げていきます。(文科一類～三類)

●今回の講義を通して私が問いとして考えたことは、「社会の中にいる個人には、どのような役割があるか」だ。これを個人の目線からアプローチすると、先生も触れられていた「存在論的不安」という話にたどり着くが、私自身は社会全体の目線からもまたアプローチする必要があると考えている。情報の発信者に対して多数の情報の受け手がある、という社会の基本構造の中で、「情報の受け手がどのような態度で情報と接するか」は常に1つの課題として社会に突き付けられてきたように思える。政府は、情報を渡さないことによる独裁も可能だが、情報を渡すことによる独裁もまた可能である、と私自身は考えた。だからこそ、情報と正しく向き合い事実を掴みだしていく手法としての「科学」を情報の受け手である個人が身に付けていくことで、「民主主義社会」を維持することができるのであろう。しかし、その動きは情報の価値を低下させ、社会全体として決して効率的とは言えない。実際、各個人が事実を掴みだす過程をそれぞれ行う社会では、個人の行動は遅く、社会の進展も緊急事態対策も遅れていくだろう。しかし、だからといって「全てを信じろ」とは言ってしまつては独裁に陥ることは確かだ。そこで、この問いへのアプローチにおいては、「情報の発信者には意図がある」こと、「人間は相互に信頼と疑念を抱き合っている」こと、「現代はインターネットが普及した時代である」ことを念頭に置く必要があると考えた。(文科一類～三類)

第10回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年6月19日

2020年6月19日、講師として宗教学(宗教社会学)を専門とする伊達聖伸氏(総合文化研究科)を迎え、「宗教的/世俗的ディストピアとユマニズム」をテーマに、第10回学術フロンティア講義が行われた。

伊達氏はまず、宗教と世俗の関係に関して、近代以降、宗教の時代から世俗の時代へと移行するという趨勢が見られ、それは西洋に端を発したと指摘した。その中で、14世紀のルネサンス、16世紀の宗教改革、17世紀の主権国家の成立、及び18世紀の啓蒙主義など、いくつかの重要なエポックが出現したが、「近代化=世俗化」という図式が現在のわれわれに強く刻印され、そこから逃れるのがなかなか難しいという問

題を提示した。

しかし20世紀以降、こうした流れに反する宗教復興の潮流も生じた。西洋では宗教復興は良くない傾向とされ、たとえばアメリカのハンチントン『文明の衝突』(1996年)において、西洋文明対イスラム文明という図式を描き出した。一方で数百年にわたって進行していた世俗化の行き詰まりが表出し、それに伴う近代化に対する批判も盛んになっていった。例として挙げられるのは、ホルクハイマーとアドルノの『啓蒙の弁証法』(1947年)で、「啓蒙」は、人間を開発するはずが自己崩壊する、神話を壊すはずが神話へ逆行していく、進歩するはずが新しい野蛮状態へ落



講義スライドより抜粋 (1)

ち込んでいくとして、新たな啓蒙像が提供された。

続いて、「ディストピア」と「ユマニズム」という本講義における重要概念が提示された。「ユートピア」の対義語として、「ディストピア」(dystopia)は「ディス」(悪い)と「トピア」(場所)からなる言葉である。「ユマニズム」はフランス語で、英語の「ヒューマンイズム」に当たる言葉であるが、「文明化」の名の下で実質的に野蛮な行為を行う名目になってしまう危険性も伴う。ハクスリー『美しき新世界』(1932年)、バージェス『時仕掛けのオレンジ』(1962年)などのディストピアの名作は20世紀にすでに数多く出現したが、今回のフロンティア講義で主に紹介されたのは、アルジェリア人作家サンサル(Boualem Sansal)の『2084』(2015年)という小説である。この作品は宗教的ディストピアとして世に新鮮味をもって迎えられ、世俗的ディストピアの『1984』とあわせて読んでみると、人間的な生き方は何かという問いに導き、30年後の世界をいかに生きるべきかという問題を考えさせる作品である。

『2084』を読む際、まずフランス(ヨーロッパ)とアルジェリア、植民地と非植民地、また西洋とイスラム世界との複雑な関係を看過できない。現在総人口6000万超のフランスにおいて、ムスリム人口は500～700万と推測されるが、フランス(ヨーロッパ)とムスリムが互いに影響を与えつつあるなかで、互いに転化しあう状況が発生すると同時に、「ムスリム」であるかどうかに対し、自他認識の間に溝が見られ、「ムスリム」というアイデンティティが引き裂かれることもしばしばであった。



講義スライドより抜粋 (2)

一方で、アルジェリアの状況は一層複雑である。132年間(1830年-1962年)フランスの植民地支配の下に置かれ、8年間に亘った独立戦争(1954年-1962年)によって独立を達成したが、その後、冷戦期のFLN(民族解放戦線という武装集団)長期政権と腐敗、暴動、軍のクーデターなどを経験し、さまざまな混乱と葛藤を抱え込まれた。独立戦争中の両国の対立、戦争中にフランスに引き上げた元アルジェリア住民(カミュ、デリダなど)の複雑なアイデンティティ、アルジェリアにおけるフランス語話者とアルジェリア語話者との分断(経済的・知識的)など、近代アルジェリアの歴史およびイスラム世界にフランスは常に深く影を落としているとも言えよう。

こうした状況に種々の懸念を抱きながら、サンサルは執筆活動を続けた。現代社会においてイスラム主義が世界的問題になったことは創作のきっかけだったが、この問題をフランスと共に考えなければならないとの考えから『2084』が誕生した。『2084』と『1984』とを比較しながら読み進めると、登場人物やストーリーの骨格、とくに全体主義・監視社会に関する思考など、数多くの類似性が見られる。また、神・信仰の名前や人名など、明らかにイスラム教を意識していることがわかる。サンサルはイスラムにもとづいてイスラム主義を批判しているが、それはイスラム批判ではない、換言すれば、宗教が人間を押しつぶすことを批判しているが、宗教そのものを批判しているわけではないと伊達氏は指摘した。

伊達氏が特に取り上げたのは、言語の問題であつ

イスラーム批判？イスラームのパロディ

- ・「ヨラー」:「アラール」
- ・「アビ」:「ムハンマド」
- ・「アビスタン」:「信使の国」の意味(アフガニスタンなどを連想)
- ・「アビグーヴ」:アビの政治の中核
- ・「アビスタン人」:「ムスリム」
- ・「ブルニ burni」:男性が着用する衣服
- ・「ブルニカブ burniqab」:女性が着用する衣服(「ブルカ burqa」「ニカブ niqab」を連想)
- ・「グカビュル Gkabil」:「アビの聖典」「クルアーン Coran」→「宗教」
- ・「モクバ mockba」:「モスク mosqué」
- ・「モクビ mockbi」:「イマーム imam」
- ・「コツツアバッド Quodsbad」:聖都(アラビア語でal-Qodsはエルサレム)
- ・「キイバ Kiiba」(130):「カーバ」
- ・「マクーフ Makoufs」(12):Koufards(アラビア語で「不信仰者」)
- ・「シャム」:断食の聖週間(ラマダーン)
- ・「正義の同胞団」:「ムスリム同胞団」を連想
- ・「アビラング Abilang」:「アビ語」:アラビア語を連想。「ニュースピーク Newspeak, novlang」→後述

講義スライドより抜粋 (3)

た。『2084』において人民が「アビ語」という「聖なる言語」で話すことを強いられ、思想や嗜好、小さな習慣のみならず、肉体、眼差し、呼吸の仕方まで変えられてしまうのに対し、『1984』においては、「自由」「平等」「正義」「民主主義」などの語彙が姿を消す「ニュースピーク」というオセアニアの公用語が、その使用者がイングソック以外の思考様式で思考することを不可能にしている。言語が貧しくなると、思考もまずくなるのかという問題に伊達氏は着目するのである。

最後に、ルソーやヘーゲルに淵源し、サンサルやカミュ(『ペスト』『反抗の人間』など)に受け継がれた「反抗・抵抗」というテーゼについて話が及んだ。

すなわち、自分が主人であると思う者ほど奴隷である一方、自分が奴隷だと自覚している奴隷は、逆に主人より自由で偉大になるという二律背反に面する人間は、「人間というのは反抗を通してしか、反抗によってしか、存在することも、おのれを知ることもできない」と意識してはじめて人間らしく生きられる、という問題である。

小説の終わりに、主人公は禁止された境界線(＝フロンティア)を越え、世界の向こう側まで冒険をしようと思うが、そこで描かれるディストピアは、結局現在私たちが生きる社会と隔たっているのか、私たちの現状をくつきりと浮かび上がらせる「境界」はどこにあるか、また「境界」を踏み越えることは必要か、もしくはまどろみのままにいてよいのかといった問いが学生に投げかけられた。

質疑で数多くの質問に答える際、冒険に伴う絶望などをおそれず、境界の向こう側へと越えていく意欲と、境界の向こう側の原理を考えるのが大事であるとし、また、ディストピアに位置するかもしれないわれわれにとって、越境という行動が、失った歴史に関する記憶を取り戻す思考の補助線にもなりうるということを伊達氏は強調し、授業を結んだ。

報告者:徐莎莎(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクションペーパー抜粋

●今回『2084』と『1984』の話聞いて、私も似たような設定の物語を読んだことがあることを思いだした。貴志祐介さんの『新世界より』という本である。「神の力」とよばれる念動力を手にした人間が、そのあまりにも強大な力を制御するために、子どもたちを洗脳し、少しでも異常が見られた者は処分し、人間が神の力を手に入れた歴史は封印されているという設定は、今回取り上げられた2作品と共通点も多いのではないだろうか。私は、自分が長いものには巻かれる主義に陥りやすいと自覚している。だからこそ、「今自分は自分の頭で考えることを放棄していないか」ということを常に自分に問いかけていたい。(文科一類～三類)

●「生きにくい世界でも自分で考えてよく生きること」という意味で、どういった行動をとるのがベストか、そしてその行動をとるのはなぜなのか、を考えることを学んだ。私は国際関係論コースで主に難民問題を専攻しているが、難民のキャンプ運営のジレンマにおいて通じるものを感じた。難民の生活レベルを上げるために難民キャンプにおいてNGOなどがいい暮らしを提供するが、その暮らしの水準が高すぎて難民が外に出て自立するインセンティブがそがれてしまう。しかしレベルを落とすと感染症の拡大や最低限の健康レベルを維持できない。今回の内容に関連させると、難民の状況をディストピアと固定的に認識して、その状況を西洋的水準とい

うユートピアに近づけることをベストとして選択してしまっている。果たしてこの方法に疑問を呈することはできないのか。今の自分たちが生きている水準に少しも疑う余地はないのか。私の専攻と関連して、そういった問いをもたらす講義であった。(後期課程所属の学部生)

● 奇しくもアサダの『世俗の形成』を読んでいる最中の自分にとっては非常に示唆的な授業でした。授業中の「なぜ全体主義国家は歴史を修正・消去するのか」ですが、個人的な答えとして歴史は常に現在の別の可能性を提示するからだと思います。その点は僕が「声なきものたちの声を拾い上げようとする」ベンヤミンの思想に共感を覚える所以です。ただ、ディストピア的未来に関して『1984』『2084』で提示された全体主義的社会よりは微細な権力ネットワークに取り込まれるドゥルーズの管理社会の方に現実味を感じます。(学部後期課程)

● 享楽に耽ることは現在の社会の中にも存在しているのではないだろうかと思いました。例えば昨今の香港の危機や北朝鮮の危機など日本の周りには目を覆いたくなるような状況があると思います。ただ危険を察知してそれに対処するのは面倒くさく、享楽にふけてもなんの問題もないような感じがします。無視をすれば自分にはなんの問題もないのです。ただ本当にそれでいいのか。自分には影響はないかもしれないけど後の世代には問題があるのかもしれない。そう考えるのならば飛び出す、関わる勇気が大事になるように思いました。また内部の中にもディストピアはあるように感じました。メディアで表されているイメージなどは自分たちに都合のいいことだけなのかもしれません。大事なのは自分をルールに則った有能で快適な機械だと捉えるのではなく、世界に佇む1匹のアリと捉えることだと思いました。(後期課程所属の学部生)

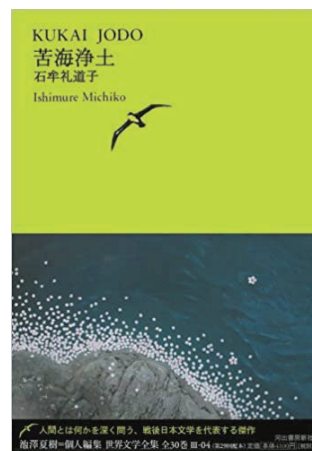
第1回 石牟礼道子を読む会

2020年6月22日

2020年6月22日、第1回「石牟礼道子を読む会」がZoomを用いて開催された。これは、世界文学ユニットの宇野瑞木氏(EAA特任研究員)と報告者の高山花子(EAA特任研究員)がともに企画したものである。当日は、張政遠氏(東京大学)、鈴木将久氏(東京大学)、前島志保氏(東京大学)、山田悠介氏(大東文化大学)、宮田晃碩氏(東京大学大学院博士課程)、建部良平氏(EAAリサーチ・アシスタント)の計8名が参加した。

このパンデミック下において、過去の災厄に対し、人々がどのように向き合い、考え、また学びを得てきたのか——日中古典文学と説話表象を専門とする宇野氏によって、『方丈記』に描かれる五大災厄への関心を端緒に、世界の災害文学を読んでゆく発案がなされたあと、企画を練り上げるなかで具体的なテキストとして浮かんだのが、石牟礼道子の作品であっ

た。水俣病を主題として書かれた『苦海浄土』をはじめとする彼女の作品を、参加者の専門や関心と繋げながら読むことは、いまここで、「災害」や「疫病」



石牟礼道子『苦海浄土』(池澤夏樹=個人編集『世界文学全集』第3集-04、河出書房新社、2011年)の表紙。世界文学として『苦海浄土』3部作が収録されている。(河出書房新社のHPより <http://www.kawade.co.jp/np/special/3677774465/>)

を学ぶための新しい足がかりになるのではないか。また、石牟礼については、近年「世界文学」としても注目が集まっており、インタビュー集をはじめとする貴重なアーカイブ資料も残されている。さらに、石牟礼が熊本方言を中心とする土地の人々の言葉を記す背後には、口承や口伝集への関心がある。合唱曲の作詞や新作能の台本も手がけた石牟礼が、音楽や図画イメージも含めた、いわゆる「小説」以外の文学のかたちを用いて、他者の言葉を伝える姿を追うことは、現代の「世界文学」そのものを考え直すヒントにもなるのではないかと考えたのである。

上記のような趣旨のもと、立ち上げミーティングを経て、石牟礼道子のテキストを読み進めてゆく軸を定めて開かれたこの第1回は宇野氏が発表を行った。山田悠介『反復のレトリック——梨木香歩と石牟礼道子と』（水声社、2018年）の第4章「石牟礼道子の反復」と、日本古典文学へ環境の視座を導入したハルオ・シラネ『四季の創造——日本文化と自然観の系譜』序論、第4章「田舎の風景——社会的差異と葛藤」

（北村結花訳、KADOKAWA、2020年。原書は、Haruo Shirane, *Japan and the Culture of the Four Seasons: Nature, and the Arts*, Columbia University Press, 2012.）を導きの糸として、『苦海浄土』第1部に描かれる他者の言葉を反復するコミュニケーションのありかた、自然の描かれ方や、仏教的なモチーフをめぐって、途中、山田悠介氏による解説も挟みつつ、綿密な発表が行われた。質疑応答の時間が限られたことが惜しまれるが、「聞き書き」の文体や、「人ならざるものとのコミュニケーション」について、質問やコメントが相次ぎ、また、わたしたち自身もまたどのように石牟礼の言葉を繰り返すのかが問われるのではないかと、水俣病と災害・疫病は一義的に結びつけられるものではないのではないか、といった課題も浮上した。自分たちのスタンスを絶えず探りながら、今後もテキストに寄り添って読み進めてゆきたい。

報告者:高山花子(EAA特任研究員)

第11回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年6月26日

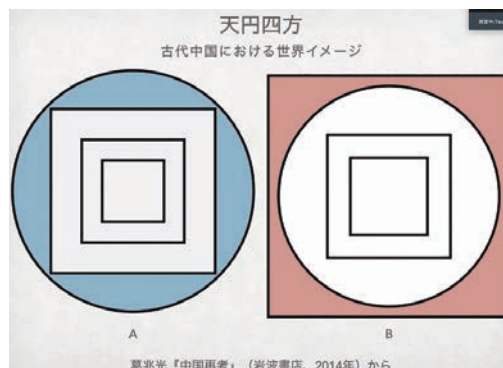
2020年6月26日の第11回学術フロンティア講義は石井剛氏（EAA 副院長）が講師を務めた。タイトルは「『中国』と『世界』:どこにあるのか?」である。講義冒頭、石井氏は駒場キャンパスにある「新墾之碑」に触れ、一連のオムニバス講義がもつ意義について学生へ語った。一高移転の際に、駒場の地で未知との遭遇を恐れず、絶えず向き合って未来を切り開こうという一高の精神が碑文に刻まれている。これ以来駒場はずっと「フロンティア」に立っている（昨年の「30年後の世界へ」講義第12回において、張旭東氏（ニューヨーク大学）もフロンティア状況から翻訳を通じて人文学の意義を考察した、と振り返り、駒場での教育活動も学生との対話を通じて自己刷新

する貴重な経験だと述べた。

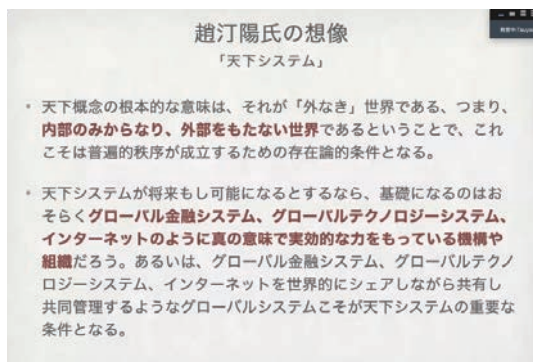
それから講義の本題に入り、石井氏は自らの専門である「中国研究」の観点から、「中国」はどこにあるのか、と問いかけた。清王朝が栄えた土地で近代国民国家を作り上げようとする近代の知識人たちも頭を悩ませた問題である。梁啓超（1873年-1929年）は、日本に亡命した時、日本を近代国民国家のモデルとして照らし合わせてみると、一番喫緊の課題は清王朝の代替としての新しい国家に「国名」がないことだと痛感した。躊躇いながらも彼は、「中国」という名前を提案した。排満革命を掲げ、漢民族による国家の樹立を唱える章太炎は「中華民国」成立の前に書いた文章「中華民国解」では、将来の漢民族の



講義スライドより抜粋 (1)



講義スライドより抜粋 (2)



講義スライドより抜粋 (3)

国家に朝鮮やベトナムなどの「漢族」地域を回復すべきだと主張すると同時に、モンゴルやチベットなどの去留は任せても良いと説いた。しかしその後の中華民国政府は、「五族共和」の原則で懸命に清王朝の領域を維持しようとし、その領域は現在の中華人民共和国まで引き継がれた。時間的にはやや遅るが、梁啓超の師・康有為は儒教の経典『礼記』に描かれたユートピア的な「天下為公」の社会像から啓発を受け、単一の国家のみならず、全世界つまり「天下」のあり方に関する「大同」論を打ち出した。康有為のいう「大同世界」においても、王朝が交代しながらも何かの一貫してきたものが長らく存在し、「中国人」の文化や性格などを大きく規定している。

このあたりから、問題がだんだんと浮き彫りになる。中国では長らく世界の全体をカバーする「天下」という概念との関係のなかで自分たちの位置づけが考えられてきたことが明らかになった。現代の研究者である葛兆光氏によると、「天下」とはいわゆる中国文化の

中核的地域から四方へと広がっていく世界イメージであり、その中心から遠いほど文明のレベルが低くなるという価値的構造でもある。このような「天下」が近代の世界秩序に直面した時生じた問題は未だ解決されていないと石井氏は言う。さらにこの「天下」の見方を現代社会で考え直そうとする人物も現れている。趙汀陽氏は今後の世界システムを「天下システム」として考えるべきだと提言する。これはすべての土地、すべての人間そしてすべての政治主体を包括的に収めるシステムである。このようなシステムの前提となっているのは、中国の歴史から抽出された「渦巻きモデル」である。つまり、中国周辺の地域や文化は、みな中国から発した天下というシステムに組み込まれつつあるプロセスとして生じており、その結果として天下システムが完成する。趙氏のこうした発想の背後には、近代的国民国家によって整えられた世界秩序に対する批判があると石井氏は指摘した。趙氏から見ると、国民国家を単位とした国際組織は結局大国の覇権争いの道具になり、あらゆる国と人にとってのものにはなっていない。全てを内に包含する「天下システム」は、そんな状況を打開するための1つの選択肢になるかもしれない。天下システムはグローバルな金融システムやテクノロジーシステムによって支えられ、世界のすべての人を「平等」にカバーすることで、人間が共有し共同管理するシステムとなる。

さらに、「天下システム」について、新しい技術に基づいた未来世界のコネクションを築く点では「Society 5.0」の発想とかなり近いと石井氏は述べた。一方で、旧来の一国中心や人間中心的な考え方と決

別する機会を「天下システム」がわれわれに与えてくれているが、他方で、その「外のない」世界観が多くの異質のものを見捨てているのも事実である。そこで、「世界」というのはあくまで人間精神の産物であり、人間精神の限界と包括的「世界」を把握しようとする意欲との間の齟齬を見逃してはいけぬ。そういう意味で「世界」はどうすべきなのか、「世界」にはどのような可能性が含まれているのか、「天下システム」はそれらのものを考えるチャンスと予期せぬ危険性の両方を含意している。石井氏はふたたび「中

国とは何か」という話題に立ち戻り、「中国」というのは現代のシステムにおいて把握しきれないものがある場なのではないかと、明確な結論を出すよりは聴衆に自分なりの思考を促す問題提起によって講義を締めくくった。質疑応答では、新しい「世界」像における「日本」に対する見方や、「天下システム」の政治的危険性とその根源などについて聴講者と講師との意見交換を行った。

報告者:胡藤(EAIリサーチ・アシスタント)

リアクションペーパー抜粋

●今回の講義は、「中国とは何か」という存在論的な問いから出発し、30年後の世界に向けて、新たな世界のあり方を考える機会となりました。その中で、趙汀陽の「天下システム論」に新たに触れました。外無き世界、内部のみからなる世界という概念が、カントの「永遠平和のために」と通ずる部分があるのは非常に示唆的であるとも思いました。というのも、即決してはいけませんが、時代も文化的背景も異なる両者が、世界を全体として包括する国際システムを考えたことは、地球に生きる人間の究極的な理想であるかもしれない、と感じたからです。そして、この包括的な世界が、テクノロジーを利用して実現されようとしていることも実感しています。ただ、本質的に内外の区別をつけてしまう人間が、外なき世界を実現することは理想的すぎるように感じました。私が今回の講義を通してたてた問いは、「フィジカル世界とサイバー世界が融合するこれからの時代において、世界の中心をどこに見出すか?」ということです。それに対するアプローチは、「中心という考えに縛られない」ということです。これはある意味矛盾した答えだと思えます。しかし、テクノロジーが発展する中、人間も存在論的な問いを投げかけられていると思えます。人間がつくった「国」が中心である必要も、さらに言えば「人間」が中心である必要もないように感じました。とすれば、従来の「人間の捉え方を相対化するアプローチとして、中心に「無」を置くという考えがあってもいいと考えました。これは人間の存在を否定的に見ているのではなく、人間に、「平凡であることの勇氣」を与えるものなのかな、と考えました。(文科一類～三類)

●どのような世界を想像すべきか?この問いは、まさにこの講義の主題をなす問いである一方で、一見して(一読して)すぐに意味がわかるような簡単な問いではないとも思えます。おそらく、この講義を受ける前の自分では、問いの意味すら理解できなかったでしょう。しかし、様々な分野での「新たな普遍」を構築する営みについてのお話を聞くうちに、この問いの持つ意味、そして重要性を少しずつ感じられるようになっていくことに今日の講義で気づきました。前提された「世界」が既にあるのではなく、いまここから新たな世界をデザインしていくのだという気概を忘れずに、この問いについて今後も考えていきたいと思えます。また、中国の古典や革命期の思想に立脚しつつ、それらを再定義し、未来に向けた実践の足がかりにする、という今日の講義の流れを見て、ガイダンス以来どこか引っかかっていた、普遍化のためにあえて「東アジア」という特定の地域を足がかりにするという一見逆説的な方法論についても、少し腑に落ちた感がありました。(文科一類～三類)

●新しい天下システムについて様々な議論があった。とりわけその中心がどうあるべきか、そして何をもちょう中心とすべきか、ということについては、天下システムの正統性に関わる重要な問題であると考えた。古典中国ではそれが皇帝だったが、現代のコンテキストで専制君主の君臨が了解を得られる可能性は極めて低い。そう考えると、やはりテクノロジーに中心を委ねるということになるのだろうか。だがテクノロジーはテクノロジーで

ある限り、価値中立的ではありえない。2045年にはAIが人間を超える「シンギュラリティ」が到来するということがまことしやかに語られるが、AIはあくまでも「複雑な関数」に過ぎないし、その機能は関係する人間に大きく左右される。では民主主義だろうか。そうかもしれない。だが、少なくとも現段階において、民主主義が普遍的に受け入れられる価値観ではないことを、我々はあまりにもよく知っている。ここまで様々な候補を除外しつつ思うことは、現状中心に一番近いのは市場ではないかということである。マーク・フィッシャーが『資本主義リアリズム』で語るように、資本主義は文字通りどこにでも現れる。我々は資本主義を非難し、新自由主義者を忌避し、可能な限り市場の魔の手から逃れようとするが、実は本心からではない。結局、万事競争なのだという鉄の論理から逃れられたことがあるだろうか。そうした意味で我々は市場というブラックホールに飲み込まれつつあるとすら言えるのではないか。だが、万物が商品に還元され、市場に持ち込まれるような世界が本当に意味あるものなのだろうか。私達のほとんどはもはや市場のない世界など想像すらできないが、それでもなお「市場のない世界」を構想し、構築し、その価値を広めることがなければ、市場中心主義は止まらないように思う。そして中心になるものが世界政府であるなら、その価値観は我々がこれからの世界でもっとも大事にしていきたい普遍的価値観を代弁するものでなければならない。そのように私は考えた。(後期課程所属の学部生)

2020年度活動報告



夏●7月～9月

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年7月3日

2020年7月3日の第12回学術フロンティア講義は王欽氏（EAA 特任講師）が講師を務めた。タイトルは「Potentiality and Literature in the Era of Artificial Intelligence」である。タイトルが示す如く、本講義のテーマはAIの開発が進む現代において、文学というものを如何にして考えるかという点にあった。中国の近代文学や近現代の様々な批評理論に通じた王氏は、その語りを昭和日本の代表的批評家・小林秀雄より始めた。

小林秀雄のエッセイ「常識」では、エドガー・アラン・ポーの小説に言及しながら人間と機械の問題を、AIによる将棋のあり様と結び付けて論じている。現在において、AIがチェス、将棋、そして碁を人間以上に上手く打ってしまうことは広く共有されている。その点で現在の技術的到達度それ自体が、小林の当時の見解に対する反論となっている。しかし、技術の止まることのない拡大に直面する中で、機械の持つ正確さや速さとは対称にあるような、文学という古いもの、そして文学を生み出す人間そのものに対する問いは現代においても重要性であると言える。この点を確認した上で、王氏はヒューバート・ドレイファス（1929年-2017年）へと話を進めた。

ドレイファスは1990年代にAI技術の発展に対する意見として、それが人間によって事前に指示されたプログラムの範囲内でしか動けない点を強調した。AIは事前に設定されたものによって、現時点で生じてい

る事象に対してしか反応できないのに対し、人間はその事象の文脈、過去に発生したこと、そして未来に発生しうることも考慮に入れながら活動することができる。AIが人間という存在に近づけない決定的要因としてこれを挙げるのである。

しかしこの主張も、現在の技術的観点から見れば反論することができてしまう。将棋や碁のAIにも使われた深層学習の技術。AIがまさに人間のように様々な状況を経験することで、事前に組み込まれていない新しいものを自身で獲得していく。ここにおいてドレイファスが論じた人間の能力をAIが習得しているのである。やがて訪れるとされている技術的特異点において、人間と機械の区別は消失してしまうのだろうか。人間の間たる所以の最後の、そして小さな砦は感情を有するというにしかないのだろうか。

王氏がここで考えたのは人間の生のあり方についてであった。AIが進化させていく能力は、問題を解決する能力である。問題解決能力は人間が生きていく上で当然のことながら重要なものである。しかし人間はその生において、その全てを問題解決に費やしているわけではない。むしろ殆ど場合は周囲の人間関係や生理現象に対する反応に終始する。それは問題解決をし続ける能力を持っていないのではなく、反応としての生をただ単に拡張していくことも可能であることを意味している。アガンベン『思考の潜勢力』において潜勢力と現勢力という2つの概念を取り上げた。これは単に顕在化しているか否かの違いにあるのではなく、潜勢力というものが、ある主体が特定の能力や行動を現勢化できる状態にありながら、敢えて現勢化させないことを指していることにポイントがある。つまり人間は問題解決のための能力を持ちながら、それを（意識的であるか否かを問わず）行使させないことができる一方、AIは問題解決をすることしかできない。人間は能力を現勢化させないという欠如を

Hubert L. Dreyfus, *What Computers Still Can't Do: A Critique of Artificial Reason* (1993)

- Our global familiarity...enables us to respond to what is relevant and ignore what is irrelevant without planning based on purpose-free representations of context-free facts.
- In all game-playing programs, early success is attained by working on those games or parts of games in which heuristically guided counting out is feasible; failure occurs at the point where complexity is such that global awareness would be necessary to avoid an overwhelming exponential growth of possibilities to be counted.

講義スライドより抜粋 (1)

ジョルジョ・アガンベン『思考の潜勢力』

一方は類型的な潜勢力であり、それにしたがえば、赤ん坊は智の潜勢力を持っているとか、赤ん坊は潜勢力という状態にあっては建築家や国家の長であるなどと私たちは言うことができる。もう一方は、これこれの知や能力に対応する「もちょう」をすでもっている者に属する潜勢力である。建築家が建築していないときにも建築する潜勢力をもっていると言われ、キタラの演奏家が演奏していないときにも演奏する潜勢力をもっていると言われるのは、この第二の意味においてである。(中略) 建築家が潜勢力をもっているのは建築しないことができるかぎりにおいてである。キタラの演奏家についても同様である。というのも、類型的な意味でのみ潜勢力をもっていると言われる者、つまりキタラを単に演奏できない者とは違い、キタラの演奏家は演奏しないということが出来るからである。

講義スライドより抜粋 (2)

有する点において、AIとは異なるのである。

AIによるバッハ風の作曲。現在の技術ではAIによってバッハが作曲したような音楽を実際に作り出せるようになってきている。音楽の創作という複雑な営為すらもAIは達成するようになった。しかし以上までの話を踏まえるならば、音楽を作り出すAIと作曲家の大きな違いは、その作曲能力の高低にあるのではなく、その能力を有しながらそれを行使しないことができるか否かにある。作曲家は、或いはバッハは、作曲することもできるが作曲しないこともできる。作曲することや問題を解決すること。人間はその様な特定の目的をもった行動もできるが、同時に目的化や命題化されていない事象に反応すること、命題化された事実の外で生きることもできる。AIを人間よりも優れているという考えは、問題解決能力を至上とする評価軸の中での判断であり、人間がAIとは異なり潜勢力を保持すること、つまり能力の行使においてその欠如を同時に有することに對する過小評価でもある。能力があることによって人間を解釈するのではなく、不能である点において人間を解釈する。これが、王氏が様々な思索家のテキストを横断しながら考えたことであった。

そして最後に文学。私たちが現在においても文学を読み続けようとすることは、AIが完成されればされるほど出来なくなること、即ち文学的な無為をそこに見出すからであると王氏は述べる。文学の言語は、日常的に使う言語を昇華したものではない。文学は言葉

Giorgio Agamben, *The Fire and the Tale*

Resistance acts as a critical instance that slows down the blind and immediate thrust of potentiality toward the act, and, in this way, prevents potentiality from being resolved and integrally exhausted in the act. [...] What stamps a seal of necessity on the work is thus precisely what might have not been or might have been different: its contingency.

講義スライドより抜粋 (3)

と現実の関係を一旦切断し、言葉の意味作用それ自体を露呈させることによって、言葉をコミュニケーションのためのもの以外であることを示す。文学の創造や音楽の創造。それらは論理的なつながりや歴史的なつながり、時々常識が規定する制約から離れ、そういったあらゆるものから解放された瞬間において、偶然的に生み出されるものである。人間によってプログラムされるのであれ、深層学習によって能力を身につけるのであれ、AIは保持している能力を行使し続ける。そこには能力の行使から離れたものは生じてこない。文学という古いものを現在もなお保持するのならば、そのような点においてしかあり得ないのである。様々なテキストに触れながら展開された本講義は中々に難しいものであったが、質疑に応答しながら王氏が締めくくりとして語ったのは、偶然性についてであった。上で述べた様に人間の創造は様々な既存の文脈から一度離れたその一瞬において偶然生じる。またこれは作曲や建築というある種の特殊な能力だけではなく、私たちの日常的な行動や他者との出会いも全てこうした偶然性に多くを依っている。COVID-19 流行の拡大によって移動の制限が大なり小なりなされる中で、如何に人間の偶然性を確保し続けるか。AIの問題はもちろんのこと、これからの人間社会を考える上で非常に重要な講義であった。

報告者:建部良平(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクションペーパー抜粋

- 今回の授業を聞いて、目的意識と日常生活の関わりに自由度が生まれたように感じました。何かに可能性があるとすることはそれに不可能性もあるということも見逃しがちではあったのですが、出来たことがある行為でも

その行為に不可能性が保留されているという考え方が興味深かったです。人の自由には目的を追求する自由と行為を選択しない自由があるのではないかと思います。(理科一類～三類)

●今回の講義は今までの講義と比べ物にならないほど難しく、しかし同時に面白いものでした。アガンベンの「潜勢力、現勢力、非の原勢力」の概念と、小林秀雄の、機械学習に対する詳細な分析をもとに、AIと共存するであろう30年後の未来と、文学の可能性を探求したことは非常に印象的でした。自分はこの講義の全てを理解したとは思えませんが、人間には「何かかけているものがあるからこそ人間でいられるのだ」ということを感じ取りました。それは、AIの急速な発展を目の前にする我々にとって、ある種の希望のようなものであるように感じました。AIは進み続けること「しかできない」と捉え直すと、止まったり、忘れたり、間違えたりする人間の「輝き」が見えてくると思います。今回の講義を通して自分が立てた問いは「どうすればこの講義をうまく自分のものにできるだろうか?」ということです。問いに対するアプローチは、「アガンベンの著作に触れてみる」ということです。実際にアガンベンの世界観に触れてみることで、この講義にある「潜勢力」をより深く体得し、AIの時代に希望を持って臨めるのではないかと、思います。(文科一類～三類)

●潜勢力が現前することができるということだけが能力ではなく、その欠如もまた非の潜勢力という能力にあるという話は新たな興味深い発見でした。AI時代に人間を定義する際に「する・できること」ではなく「しない・できないこと」に着目することができるのではないかとアイデアは漠然と持っていましたが、王欽先生のお話の一つのヒントになりました。ありがとうございました。(文科一類～三類)

第3回「文学と共同体の思想」読書会

2020年7月4日

2020年7月4日、第3回「文学と共同体の思想」読書会が行われた。今回はD.H. ローレンスの詩「snake」を扱った。1人の人間が水飲み場でヘビに出会った場面を描いた詩であるが、本読書会を通して大きく分けて2つの読み方ができると考えられた。1つは語り手とヘビ、語り手と水桶、ヘビと水桶という関係性を詩の中に読み込み、その関係性において前景化されている政治的含みを考察する読みである。そしてもう1つは、語り手とヘビの関係に中心点を置き、そこに人間と自然という対立軸に対するローレンスの思考を見出す読みである。

前者については発表者である王欽氏（EAA 特任講師）が始めに主張したものであった。この視点で読む場合、ヘビは語り手にとっての他者として現れており、語り手とヘビの関係は、国民国家における国民と外国人との関係などのように、様々な関係性に置き換えができる。詩の中では「黄金のヘビは毒を持って

おり発見し次第始末しなくてはならない」という意味の「education」がヘビに対する語り手の心理に浮かぶ。当初は先に水を飲んでいてヘビを単純に待っていた語り手であったが、次第にこの「education」が意識され、遂には木の枝によってこれを退散させてしまう。人間である語り手は動物であるヘビに対して、自分と異なる存在且つ害をなす存在であるが故にこれを退けた。ヘビは襲ってくるわけではなく、ただ単に水を飲んでいただけであるのに。詩の最後はヘビを退けてしまったことに対する語り手の後悔によって締め括られている。「And so, I missed my chance with one of the lords of life. And I have something to expiate: A pettiness」。自身の矮小さを恨む語り手の心情は、現代の政治的状況における人々の葛藤を、そして度々現れた「education」はそのような葛藤を人々に齎す理屈や理論を表しているのだろうか。

これに対して熊文茜氏（学部生・EAA ユース）は、

語り手とヘビの関係に人間と自然という対立軸を読み込めると考えた。人間は当然のことながら動物であるが、人間を犬や猫などと異なる存在とさせているのは、動物として生理現象に反応していく動物的な生の上に、文化活動等などを行う人間的な生を重ねている点にある。そしてとりわけ近代以降の人間は、自身の中にあつた動物的な生から距離を取り、「理性」の名の下に枠づけられた人間的な生を強化していった。詩に出てくるヘビは、語り手が、そして人間が捨て去ってしまった動物的な生であり、その出現に対して苦しむ語り手は、動物的な生と離れてしまった人間的な生そのものの苦しみでもある。切り捨てた性質に対する

憧れと恐れ、そして捨ててしまったことを再度反省し自信を改善するのである。佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）もこの筋で解釈しており、両者の主張によって議論が深まった。また本詩を読んだ上での1つの感想として、報告者は本詩においてヘビが登場する点に関心を持った。古今東西の伝承や創作において、ヘビが様々な事象の比喩的表象として活用されてきた点との結びつきからも本詩の読解の可能性があるのでないか。

報告者:建部良平(EAAリサーチ・アシスタント)

第2回 石牟礼道子を読む会

2020年7月6日

2020年7月6日、「石牟礼道子を読む会」の第2回がZoomにて開催された。当日の参加者は、本読書会の企画者である世界文学ユニットの高山花子氏(EAA特任研究員)と本ブログ報告者の宇野瑞木(EAA特任研究員)、張政遠氏(総合文化研究科)、鈴木将久氏(人文社会系研究科)、前島志保氏(総合文化研究科)、そして宮田晃碩氏(総合文化研究科博士課程)の6名であった。

第2回にあたる今回は、高山氏によって、『苦海浄土』第1部に関して、特に「音響」の描写に着目した発表が行われた。本読書会では、毎回、作品読解の助けになるサブテキストを紹介し、それを踏まえた上で担当者が読解を試みることになっている。今回、サブテキストとなったのは、ハーバード大学比較文学科の教授であるKaren Thornber氏の“*Ishimure Michiko and Global Ecocriticism*” (*The Asia-Pacific Journal*, Volume 14, Issue 13, Number 6, July, 2016, p. 1-23.)という論考であった。この論に導かれながら、高山氏は、まず石牟礼作品の「世界文学」としての可能性と翻訳の難しさについて指摘した。Thornber氏によれば、石牟礼作品は、比較的早くから環境文学としてレイチェル・カーソンなどと並で享受されてき

たように、特定の文化や国を越えて世界文学として読まれ得る一方で、「小説」以外にも「詩」、「戯曲」、「随筆」と広がりを持つこともあり、その多くが翻訳されていないという問題があるという。この翻訳の難しさに関連して、高山氏が着目したのは、石牟礼自身の俳句や短歌における「定型の崩れ」の傾向と、『綾蝶の記』(平凡社、2018年)で示された中世の『梁塵秘抄』などの歌謡や漁師の間で歌われる「歌／唄」への強い関心である。高山氏は、石牟礼のこうした「声」の次元、いわば文字以前の次元に耳を澄ます姿勢も翻訳の不可能性に繋がっていると指摘した。これに対し、質疑においては、翻訳ににくい(され得ない)文学は世界文学となり得るのか、という根本的な問題提起がなされた。また石牟礼が白川静に傾倒し「文字」のなりたちにも強い関心を寄せた点について、石牟礼の中で、声／文字はどのように位置づけられていたのか、「文字を書く」ということをどのように考えていたのか、という問いが浮上した。

次に高山氏は、Thornber氏の論で示された都市／田舎という構図と『天湖』の音響の描写の問題を踏まえ、『苦海浄土』における様々な音声・音響を抽出し分析した。具体的には、「自然音／人工音」、「う

たの引用、「水俣病患者の声」に分けて、テキストそのものが記憶を喚起する装置として働いている可能性を指摘した。さらに、証言しない人々の沈黙などにも読解を及ぼし、これらが渾然となった音響世界を舞台とした小説であると結論づけた。最後に、今後の展望として、発表者自身の専門であるモーリス・ブランショの文学論における叙事詩の問題、とりわけ「非人称的記憶」の視点からの石牟礼作品の読み解きの可能性を示唆した。

質疑応答においては、上記の議論の他に、都市／田舎の二項対立的な音響空間というよりも、むしろその「重ね合わせ」の技法によって地域だけに閉じない小説空間を生じさせている可能性が指摘された。これに関連して、患者の声が動物や機械に擬せられる医学的報告の引用と自ら語りだす「聞き書」部分が行ったり来たりする構造や、ラジオのようなメディアと土地の記憶を喚起する歌・唄の世界が重層的に現れる構造に注目することが重要であることも確認され

た。また小説の中で、「猫」の位置づけが他の動物と異なっているのではないかという興味深い視点が提示された。さらに「叙事詩」については、『平家物語』のような語りの文体についてなされるフォーミュラの多用、多声的構造における主体の曖昧化、声による集合的な記憶の喚起に関する議論が参考になるのではないか、という意見が寄せられた。

以上のように、『苦海浄土』の音響世界に着目することで、石牟礼文学の新しい読みの可能性に開かれた充実した発表であった。また今回は時間の関係上、十分に議論が展開されなかったが、高山氏の資料には御詠歌や念仏の声も取り上げられており、前回の仏教的モチーフの問題とともに、水俣の地における仏教・信仰の問題も重要と思われた。今後さらに読書会を通じて理解を深めていきたい。

報告者:宇野瑞木(EAA特任研究員)

第13回 学術フロンティア講義

30年後の世界へ

「世界」と「人間」の未来を共に考える

2020年7月10日

2020年7月10日、学術フロンティア講義「30年後の世界へ——「世界」と「人間」の未来を共に考える」最終回が開催された。講師は國分功一郎氏（総合文化研究科）と熊谷晋一郎氏（先端科学技術

研究センター）の2人で、題は「中動態と当事者研究——仲間と責任の哲学」である。

講義冒頭に、講師より1人でできることは限られている以上、人に教えてもらうことが大切であって、大学の授業も複数の教員が共担することがもつとなされるべきだとの話がなされた。続く講義においては人間の再定義の問題と、自閉症（近年では自閉スペクトラム症とも呼ぶが、以下、自閉症で統一する）の研究が人間観を大きく覆そうとしていることについて触れられた。すなわちハイデガー『存在と時間』的な「現存在」の分析は定型発達の人に当てはまる分析で、必ずしも人間そのものの分析ではないのではないかという仮説が示された。仲間について誰でもわかっているが、誰も厳密には定義できていない。友達や恋人、親兄



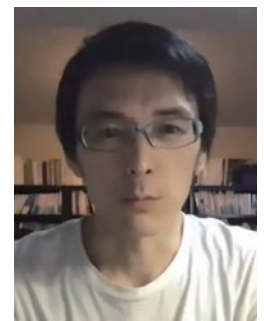
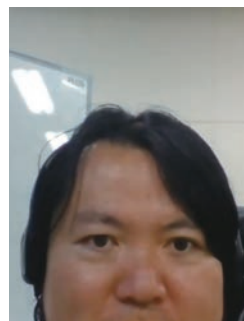
弟、同胞等とは何が違うのか。コミュニケーションについて、自閉症はコミュニケーション障害だといわれるが、例えば、日本人とアメリカ人との間でコミュニケーション不全があった場合、問題は両者の間にあるものであって、一方にだけ問題があるわけではないのに、自閉症の場合では、自閉症の人の側に一方的に責任が押し付けられる理不尽さがあるのではないかという。

当事者研究とは、障害者など研究や支援の対象、客体にされてきた人々について、その当事者自身が自らの困難について、自ら研究する側に回って探求するという営みである。統合失調症の患者によるものからスタートし、依存症や自閉症へと広がり、対象的な研究手法では見逃されてきた知見が現れてきた。講義によると、自閉症については当事者研究を通じた定義についてのプロテストがなされた。そこで提示されたのは、障害についての医学モデルと社会モデルの2つのモデルであった。医学モデルとは、本人の体の内に原因を求めるもので、英語では、impedimentに当たる。社会モデルとは、環境との相性の悪さに求めるもので、disabilityに当たる。例えば、車いすの人にはエレベーターのないところで障害が感じられるが、それは建物のデザインと体がフィットしていないことによる。ならばコミュニケーション障害とは、人的環境とのミスマッチであって1人の内にだけあるものではないのではないか、環境の側にも変わるべきところがあるはずだが、それが患者の内にある問題へすり替えられているのではないか、という。熊谷氏が綾屋紗月氏の共著『発達障害当事者研究』（医学書院、2008年）を著するにあたって、disabilityをimpedimentとしないよう気を付けたという。いわゆるimpedimentとは、環境が変わったとしてもなお残る不変項としてとらえられるが、それをそれとしてとらえられるのは、絶えず環境を生き続けている当事者を措いて他になく、外部の観察者にはできないのだという。

当事者研究においては、当事者ということに多く重点が置かれるが、研究ということにも重きを置きたいとの見解が述べられた。かつてパターナリスティックな研究に対する当事者主権が提唱されたが、一方で当事者が自分のことは自分が一番よく分かっていると自己決定するのも、自分のことが自分ではよくわからない

ということが十分にあることを考えれば、十全なものとは言い切れない。自分のことでも、研究をしてみなければ分からないということがあるのだから、当事者「研究」であることが重要であるという。当事者研究とは自己分析と異なる。精神分析は、一対一で、言葉を使って進められるが、研究は人に向けて成果を発表する形式を取り、それが言いっぱなし、聞きっぱなしであったとしても、発信と受信の双方に変化をもたらす。当事者研究は費用の面においても、精神分析の民主化された形態であるという。

これまでの哲学の他者理解には、他者の異質性が強調され、最終的な分かり合えなさや、理解のために必要な飛躍の強調がしばしばなされた。しかし、類似的な他者、自己と似ていると思われる他者について考えることも重要である。自閉症の知覚のあり方として、奥行きが見えない先に何かがあることが分からないということがあるといい、ドゥルーズの、人は見えないものが他者によって知覚されていると考えることでそれを自らの知覚に含み込むことができるという発想をふまえて、他者感覚を掴みづらい人はドゥルーズが言うように奥行きをつかめずにいるのだという。國分氏は、以前に行ったことのあるブラジルについては、見えなくてもあるのだろうという存在感があるが、行ったこともなければ、人もいないだろう月については存在感がないとの例をあげた。また留学先のフランスで、フランス語が全くできない知人が、現地の人とほとんどコミュニケーションが取れないゆえに世界が狭くなったと言っていた例をあげて、そのように、他者感覚が弱くなってくると、自分の見えるところにしか世界の広がりがなくなっていくといい、ロビンソン・クルーソー的な状態になるのだと述べた。人は生まれてきてすぐは口



ビンソンであり、次第に他者を経験して、それを通じて世界感覚が生じてくるのだという。

では、他者感覚はいかに養われるのだろうか。ドゥルーズが言うような、近くを預けられるような他者というのは、類似的他者であって、同じように世界を見ているだろうとは思われない鳥ではいけない。また、類似的他者は人によって異なりうる可変的な存在であり、異質な他者はむしろ一面的で定数的。類似的他者は人によって異なる変数的なものである。それゆえ、人によっては意外なものが他者になりうる。それはたとえば動物の言葉が分かる、動物の翻訳者というような存在である。その点、自閉症の人からすると、定型発達の人とは異質で、それを通じて世界を広げる他者とするのができないのではないかという。そこには、知覚のあり方がマイノリティであるがゆえに、類似的他者、仲間を見つけにくい構造があるとの指摘がなされた。

ここで自閉症の人同士では類似性があるものとして、コミュニケーションがうまくいくのではないかとの類似性仮説が提起されてくるが、実際に実践の場ではそうした状態が生じているという。環境によってはコミュニケーションがうまくいくというのだからそれはimpedimentとはいえない。他方、自閉症の人を複数集めたとして、impedimentについてはバラバラとなる可能性がある。同様にコミュニケーション障害があるとしても、その原因は別々でありえてimpedimentとdisabilityは一対一の対応関係にはない。つまりimpedimentが共通していれば類似ということになるが、同じdisabilityを抱えているからといってそれは類似であって共鳴することにはならない。

当事者研究には、当事者運動と依存症自助活動という先行した2つの活動があった。一方の当事者運動は、近代を貫徹しようとしたもので、典型的には白人男性に認められたメンバーシップを、マイノリティにも要求するものであったという。他方は、近代を補完しようとするもので、自立という近代的なあり方がエスカレートすると依存症に至るとし、依存症を近代にビルトインされた落とし穴として、近代を全否定はしないものの、それから距離を取ろうとする態度だという。ここでは自立が孤立にならないように、との言及もなされている。

例えば女性の薬物依存のケースでは、しばしば虐待経験があるとされたているが、虐待経験によって人への依存ができなくなる、他者にSOSを発しても、応えてもらえず、そういうところでは、むしろ依存はしないように「学習」するのが合理的となるのだという。しかし人に代わる薬物あるいは自身の様々な能力といった対象への依存が生じるとともに、人間関係については、対等の水平関係ではなく、自ら支配者になるか被支配者になるかの垂直的・支配的な関係に依存しがちであるとした。そこで精神科医は依存をやめさせようとするが、1つの要素だけを取り除こうとしても効果はない。そうではなく、水平的な人間関係に正しく依存できるようにすることが必要なのだという。また、虐待体験は思い出したくないトラウマとなり、その過去を遮断しようとして、過度に覚醒的な状態になるか、むしろ覚醒度を下げて眠るようにしてやり過ごすことがなされる。そこで、過去を仲間と共に分かち合うということが、2つの課題を一挙に果たすものとして有効な手立てとなるとされた。

近代的な人間主体、責任主体というのは、いわば自分依存の状態である。そこにおいてうまくやれている人というのは、うまく依存できている人であって、依存先が分散しているため、特定の事柄に殊更依存している状態にないのだという。言い換えれば依存症の人とは、うまく依存をすることができず限られたものしか依存ができない状態なのである。

意志とは自発的なものと考えられているが、もし純粋な自発というものがあつたとしたら、それは周りとの文脈を全く欠くも狂気として映るだろうという。意志には、文脈を切断し、行為者自身を出発点とするという機能があり、その切断に人は頼って生きている。これは現代の労働者のあり方ともリンクしていて、昨日今日で異なる要求に対し、まさにフレキシブルに対応することが求められており、意志により、過去を切り去っては、今の課題に対処させられているのだという。古代ギリシアには意志の概念はなかったことを考慮すると、おそらくキリスト教から生じてきて、アウグスティヌスが特に論じたものであるという。意志を否定すれば、責任も消え去るのかということについては、依存症の自助グループの取り組みの中で、過去の遮断の解除

を経たうえで、償いのためのステップがあるのだとし、そのような順序による責任の取り方が、中動的なあり方こそが、本来のあり方ではないかとされたところで、ひとまず講義が終えられた。

質疑応答へと移り、直接にはなく、第三者を介して、類似性をつなぐというのは可能かという質問に対し、類似性で結びつただけではなく、類似性の濃淡のある同心円的人間関係というものが取り上げられた。またハンナ・アーレントのいう私的なものと公的なもの両方の必要について言及がなされ、公的な関係には距離があり、距離を取り除く愛というのは政治には役立たないが、大衆社会の息苦しさはその距離のな

さに基づくと述べられた。信じることと依存することとの関係において、規則性のないものは信じることができないこと、自然法則でも、人の反応でも、同じである。物の秩序も人間関係の秩序も通じることがあって、次に何が起きるか分からない虐待の現場では、信頼、予測性のモデルが構築できないという。この他にも盛んに質問が出されて、いくらか時間の延長もありつつ、最終回にふさわしい盛り上がりを見せながら、今回の講義、そして今年度の学術フロンティア講義は幕を下ろした。

報告者:高原智史(EAAリサーチ・アシスタント)

リアクション・ペーパーからの抜粋

●前半の自閉スペクトラム症に係る議論では、自らのそれに対する認識をアップデートすることができたとともに、その後の「依存」を通じた「仲間」に関する思索・分析も大変明快で、終始爽やかな気持ちでお話を聞かせていただきました。特に、「自立」と社会において言われているような状態は「依存先が多いこと」であるような状態である、ということが印象的でありました。私が1点疑問に思ったのは、依存症の自助グループの方々にとり、彼らが自助グループとして活動をする際、その「水平的な人間関係のなかで」物質依存からの脱却や過去の遮断の解除を試みているという目的自体を直接認識することは利益になるのかということです。少しおっしゃっていたように、自助グループの活動自体は必ずしも平穩に進むということにはなっていないと思います。もし彼らが、自らが今取り組んでいる活動の目的を理解して行ったら、どのような反応になるのかということが気になっています(もし現在しているのであれば逆に認識しなければどうなるか)。これについて私が直接アプローチすることは難しいですが、何か臨床のお話などを見つけていけたらと思います。(後期課程所属の学部生)

●國分先生が冒頭におっしゃった「自閉症研究によって、今まで定型発達の人ばかりを対象にしていた人間観をより精緻化していくことができる」というのは、今まで無反省になされていた「一般」と「特殊」の区分を批判的に問い直すという意味で、ヨーロッパ中心主義的な見方を批判した中島先生の世界哲学の講義や羽田先生の世界史の講義にも通じる、「新たな普遍」の構築の営みの1つであると感じました。それと同時に、國分先生が導入された「類似的他者」の概念は、漠然とした「違い」の概念を変数的に扱うことができるという点で、単に哲学の一分野における道具立てに止まらず、学問の垣根を超えた多くの分野における「新たな普遍」の構築に応用、敷衍していける可能性を秘めた概念なのではないか、とも感じました。

(文科一類～三類)

●今回の授業を聞いて、学術のフロンティアがどんな物なのか分かった気がしました。國分先生と熊谷先生が違う立場から同じ研究課題に興味をもち、協力されていることがよく分かり、中島先生が先日おっしゃっていた「駒場の良さ」という物だったり、「友」と付き合い中での「良い変化」をする姿勢の一例が示された気がしました。また、人があるひとつの行動を自分の意志として、その責任に依存して生きていくといったことは、自分の実体験上当てはまっている気がして面白い考え方でした。と同時に、自分依存、独りよがりにならないことの難しさも感じました。他方で実際には行動力のある人間もカリスマ性があると言われることはやされることが多いので、どの程度の自己依存が社会的に好感をもたれるのかは知っていないといけないうんだなあと思いました。

コロナ禍の中でオンライン授業という特殊な時間でしたが、自分は確かに長続きする学びの姿を見ることが出来た気がします。これまで中学高校と試験的に必要がありかつやりたいことしかやってこなかった（正確には試験で点をとれば大学に受かる、ということも試験で点を取りたい、という意志に還元された、つまりやりたい事しかやっていないと言えるのかもしれないです）自分にも、ヒトについて問いと仮説をたてる過程をへて、より広い世界が広がった気がします。30年後この授業が役に立っていればいいなあと思いました。講義ありがとうございました。（理科一類～三類）

EAA座談会

テクノロジーの時代における人間の学問

2020年7月14日

2020年7月14日、第4回EAA座談会「テクノロジーの時代における人間の学問」が駒場キャンパス101号館11号室（EAAセミナー室）とZoomをつなぐ形で開催された。

はじめに司会の中島隆博氏（EAA院長）より、前半の発表者である石井剛氏（EAA副院長）、橋本撰子氏（総合文化研究科）、イザベル・ジロドウ氏（総合文化研究科）、続いて、後半の発表者である羽藤英二氏（工学系研究科）、開一夫氏（総合文化研究科）、さらにディスカッサントを含めた参加者について紹介がなされた。セミナールームの大きな卓上は透明のパネルで仕切りがなされてはいたものの、会場では久々の再会によって挨拶や雑談が交わされ、打ち解けた雰囲気がZoomを通して伝わってきた。

このような緩やかな雰囲気の中で、まずEAA院長として中島氏から本座談会の趣旨が説明された。昨年度に始動して以来、EAAでは、東アジア教養学、すなわち東アジアから新しい学問を発信するという理念

のもと、文理を乗り越えていくことを目指してきた。文化人類学では三点測量ということが唱えられたが、19世紀以来の比較の方法論ではなく、不安定でダイナミックな世界において、互いの地盤を揺るがしながら文理をまたいだ形で試みられる、もうひとつの三点測量が提唱された。その上で、今このパンデミック下において、東京大学からテクノロジー、そして人間という概念自体をどのように考え直すことができるのか、という大きな問いが投げかけられた。

——— 前半セッション ———

前半のセッションは、石井剛氏の「『江湖』的フロンティアとしての大学を想像する」と題された発表から始められた。石井氏は、ここ数ヶ月のオンライン授業を体験する中で、それまでわたしたちが、いかにノイズあるいは余剰というものに囲まれていたかということを感じたという。今後、テクノロジーを最大限に活かしながらも、いかにこの余剰、いかなれば人間らし



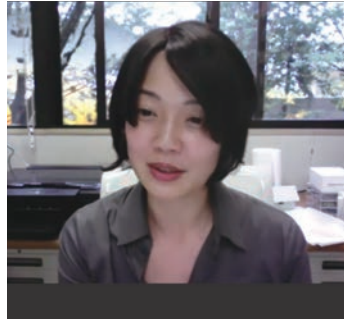


さの地盤をなすものを確保し学問として高めていくか、が問われていると石井氏は強調した。具体的に提案されたのは、オンラインによって徹底的に国際化を進め、「人間的な共感」の範囲を広げること、またそれと同時に、フィジカル・キャンパスの充実をこれまで以上に図ることであった。駒場キャンパスの前身である一高は「新墾（にいはり）の丘」と呼ばれ、フロンティア精神を育む場とみなされた伝統もある。そこから、石井氏は、中国で秩序ある社会から零れ落ちた人々の集団性を持たない集団を意味する「江湖」というキーワードに結び付け、大学を異なる人間が集まって「impairment」の体験を共有する場にする重要性を指摘した。

続いて、橋本摂子氏は、「文／理の境界：事実への視座をめぐって」と題して、主としてハンナ・アーレントを介して「事実」とサイエンスの問題について発表を行った。橋本氏は、まず自身が大学院時代に統計学から理論社会学へと文転したときのことを回想し、文理融合型の学科編成の限界を感じた経験から、文理融合の試みに対し懐疑的な立場を表明した。さらに橋本氏は、アーレントの「複数性 plurality」について、アーレントは「人権」の問題を「複数性」の問題として捉え直したのだと主張した。その上で議論されたのは、「事実」とサイエンスの問題である。ここで主張されたのは、「事実」はその産出過程で権力が介入し、改ざんがなされやすい一方で、だからと

いて「事実」の可能性はいささかも傷つけられるべきではない、という両義性である。また、この「事実」の性質は「データ・サイエンス」の分野と親和性が高いことが確認された。最後に、今回の新型コロナウイルスに関する「事実」の開示をめぐる問題に触れ、文理において共約可能な規範として、「事実」の不可侵性の重視が挙げられるのではないかと述べた。

前半の最後の発表者であるイザベル・ジロドウ氏は、英語にて「The law-science-technology-society (LSTS) nexus: Turning an academic challenging teaching & learning approach」という題で発表された。ジロドウ氏は現代における法とテクノロジーの関係について、自身が法学研究科から総合文化研究科 (arts and sciences) へと移り、双方の教育の現場に携わってきた経験も踏まえ、特に教育の問題に焦点化して発表を行った。氏によれば、従来、法学者とロースクールの教員は、法律とテクノロジーに関して、伝統的な知的財産といった話題からバイオテクノロジー法やサイバー法に至るまで、完全に区画化された異なるテーマ領域において取り組んできた。しかし、ここ数年、社会法律研究 (socio-legal studies, SLS) と科学技術社会論 (science technology and society, STS) との間の新しい相乗効果を高めるための試みが推進されることで、法律とテクノロジーへのアプローチが交差するような展開を見せているという。また、ジロドウ氏は「the law-science-technology-society (LSTS)」という学際的な



教育フレームワークが学際的に法律を教える上で有効となり得る可能性を強調し、LSTS 教育を通じて、学習コミュニティを形成するプラットフォームを構築していく展望を示した。

以上3名の発表が続けてなされ、休憩の後、前半の討議に入った。質疑では、3名の発表がいずれも、大学が新しい時代にどのようにかかわっていくのか、という問いに関わる発表であったことが確認された。また、ここ数年新しい学問領域の編成が進められてきたが、それが今のコロナ禍の状況も含めいかに機能し得ているか、といったことも改めて問われる形となった。個別の問題としては、「江湖」という人間の在り方を具体的にどのように大学に組み込んでいくことができるのか、といった質問が出た。また、テクノロジーによる「人間的な共感」の範囲の拡大の有効性が期待されると同時に、その「共感」がフィジカルな体験を伴わない「共感」であるということが何を意味するのか、といった議論もなされた。

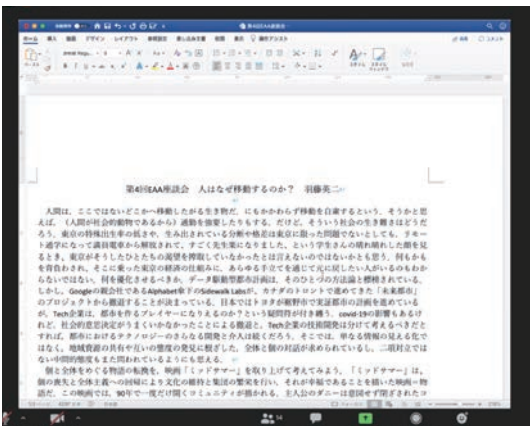
また文理の意見がかみ合いにくい原因として、「余剰」を認めるか否かという根本的態様の違いがあるの

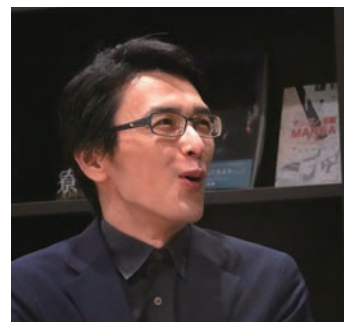
ではないか、という興味深い問題提起があった。一方で複雑系と呼ばれるような理系の分野も念頭に置くことにより、新しい次元が開かれている可能性も示唆された。また、「事実」という言葉に対して、その多義性や問題点が指摘された。これら前半で議論された幾つかのキーワードは、後半の議論にも引き継がれる形となった。

——— 後半セッション ———

休憩を挟んでの後半セッションは、羽藤氏の「人はなぜ移動するのか?」というタイトルの発表から始められた。羽藤氏の専門は都市計画であり、人間の移動である。羽藤氏は、東京という都市の特性について、リモートと非リモートの対立ではない中間的な構えもまた必要なのではないかと述べ、2000年以降、情報化が進みリモートによって移動が失われるという見立てが主流になり、PTAの集まりのあとのファミレスでの会話がLINEに代替されるようになった事例も挙げつつ、リアルからリモートへ向かう昨今の流れを整理した。そして、映画『ミッドサマー』を題材に、テクノロジーが都市に介入することから生じる全体主義の問題を提起した。ディスカッションでは、災害復興計画との関連や、都市計画のために現場を歩く必要性が話題にあがった。また、都市計画において倫理を教える重要性や、なにかに出会うための知の旅をつくってゆくことの意義、近傍概念の再考が提起された。

つづいて開氏の発表「EdTech with Cognitive Science: 未来の学び= AI × 認知脳科 × IoT?」で提起されたのは、テクノロジーによって現在の教育を変えることはできるのか、という根源的な問いである。認知脳科学を専門とする開氏は、大規模な実証実験





の経験にもとづき、とりわけ大学教育の現場での試験や採点において、AIがどのように機能しうなのか、その限界を指摘した上で、わたしたちが人を育てるために、どのような新しい選抜制度や評価制度がありうるのか、問いかけた。ディスカッションでは、PDS（パーソナルデータストア）の事例や、AIによる育児の可能性をめぐる問いが浮上し、それぞれの教育現場で遠隔授業に携わる参加者間できわめて闊達な意見交換がなされた。

討論者の國分功一郎氏（総合文化研究科）、四本裕子氏（総合文化研究科）、星岳雄氏（経済学研究科）、佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）の発言や質問によって、前半の議論が後半でもつなげられていたのが印象的であった。

休憩後の総合討論では、文献学を例に、定義できない部分が残るのではないかと、という余剰をめぐる議論

のつづきがなされ、記録される以前のモノの存在、パピルスや石板による記録、情報の強度の変化とアクセス可能性などをめぐって最後まで話題は尽きなかった。

報告者の高山は、セミナー室で運営補助をしていたため、2度の休憩中や、会の終了後に、挨拶をしたり、つづきの話をしたり、情報交換をしたり、Zoom越しではできないコミュニケーションがあることを実感した。誰かが話しているときに、無言で頷きあったり、笑い声が聞こえたりする場面もあった。チャットも活用され、対面とリモートのそれぞれのメリットを活かした部分もあったように思われるので、安全にいつそう気をつけつつ、このように双方を組み合わせたいイベント開催のよりよい形を模索してゆきたい。

報告者:宇野瑞木(EAA特任研究員)
高山花子(EAA特任研究員)

東京学派ワークショップ

江湖・無縁・アゴラ

松方冬子『普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー』によせて、
もういちど『自由』の在処を探す

2020年7月15日

2020年7月15日、ワークショップ「江湖・無縁・アゴラ——松方冬子『普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー』によせて、もういちど『自由』の在処を探す」が開催された。COVID-19の流行が続く中、当初予定されていた対面形式での開催は断念し、Zoomウェビナーでの開催となった。

本ワークショップは、中島隆博氏（EAA 院長）が代表者を務める科研費基盤研究B「東京学派の研究」主催（EAA 共催）のもと、松方冬子氏（史料編纂所）によって企画された。「京都学派」とは、中島氏によれば、哲学者・戸坂潤によって提唱された、西田幾多郎に代表される京都大学のグループに対する批判



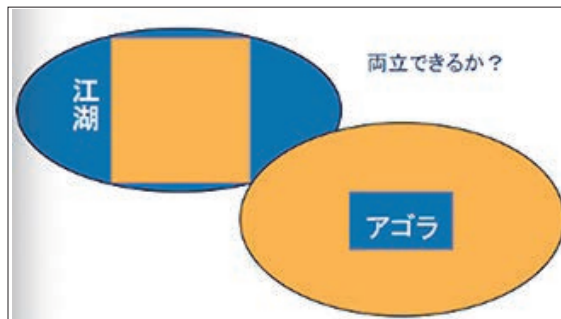
的な概念である。それに対して、「東京学派」とは耳慣れない概念であるし、西田のような中心を持ったグループとは言い難い。にもかかわらず、あえて「東京学派」を研究するのは、近代日本の学知を振り返る上で、東京大学を含む東京において展開された学知が一体何を為してきたのかということが、今一度批判的に問われる必要があるからである。

こうした文脈を踏まえて、企画者の松方氏は、連載エッセイ「普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー」（東京大学出版会月刊誌『UP』2020年2月号から5月号まで全4回掲載）に即して、次のように問題提起を行った。学問とは、議論のための公共空間を必要とするものである。しかし、この公共空間は、無意識のうちに「アゴラ」的なもの、つまり、古代ギリシアに淵源を持つ「西欧」的なものとして、極めて限定的なイメージのもと捉えられてきたのではなかったか。近代以降、「日本」における学問は、無意識のうちに「西欧」的なものを想定し、そこに自らをフィットさせていく態度に規定されてきたのではないか。松方氏は、こうした無意識の前提を批判的に考察することを通して、「危機」に晒されていると言われて久しい人文学のあり方を再考する重要性を説いた。「アゴラ」とい

う西欧由来の「自由」な討議空間の限界は、そこに入る資格を持つ者と、そうでない者を選別し、排除してしまう点にある。「民主主義」や「市民社会」という普遍的概念・理念は、「アゴラ」的な場所を基盤として成立してきた歴史を持つ。これらの理念をアップデートするために、松方氏は、オルタナティブとして参照し得る次の2つの概念について言及した。ひとつは、歴史家・網野善彦によって提唱された概念である「無縁」、いまひとつは、中国文学・哲学において議論されてきた「江湖」と呼ばれる空間である。

松方氏の提議に対して、内田力氏（東洋文化研究所）・大木康氏（東洋文化研究所）・石井剛氏（EAA 副院長）、以上3名の登壇者がコメントを寄せるという形式で、議論が行われた。内田氏は、網野が「無縁」という概念を提唱するに至った背景にある、「アジール」（*asyl*、あるいは *asylum*：避難所）という概念の系譜を辿った。内田氏によれば、近代日本、とりわけ東京帝国大学における「アジール」論は、人類学、法制史における議論を経由して、文学部系の歴史学に引き継がれたという来歴を持つ。言い換えれば、近代日本における「アジール」論は、人類学という、まさに対象を「客体」として観察・分析する態度と、過ぎ去った時代（ここでは特に中世、あるいは江戸時代が言及された）を「過去」として客体化・歴史化して語る態度が交錯する地点において浮かび上がるものであった。網野は、こうした「東京学派」的な言説を批判的に受け継ぎ、再構成することによって、「アジール」あるいは「無縁」という観点から、「日本史」を描き直すというプロジェクトを遂行した。

続いて大木氏は、中国における「江湖」という概念の系譜について検討した。「江湖」とは、『莊子』



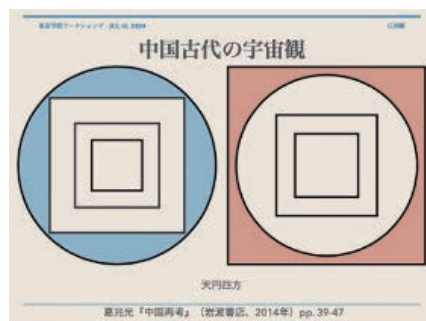


における次の一節に由来を持つ言葉である——「泉涸、魚相與處於陸，相向以涇，相濡以沫，不如相忘於江湖（泉の水が涸れると、魚たちは、土の上に身を寄せ合って、たがいにあぶくで身を濡らしかう。そんな状態より、「江湖（川や湖）」で相手のことなど忘れて泳ぎまわっている方が快い）。しかし現在「江湖」という概念によって想起されるのは、「黒社会」（裏社会）、あるいは易者、薬売り、手品師、大道芸人、ペテン師、旅芸人といった、「表社会」からはこぼれ落ちてしまう空間、あるいはそこに暮らす人々である。具体的には、『水滸伝』における好漢たちと「梁山泊」といったイメージである。

大木氏の議論を引き継いで、石井氏は、古代中国における宇宙観「天円地方」を参照しつつ、次のように議論を展開した。「天は円（まる）く、地は方形（四角）である」というこの宇宙観は、必然的に「余剰」、あるいは把握し得ない領域というものを内包している。なぜなら、円と方形は重なり得ず、必ず隙間が生じるからだ。このような中間的領域、つまり「文」あるいは「野」のいずれにも収まらない空隙こそが「江湖」なのである。このような、言ってみれば把握しがたい概念としての「江湖」を、今再び議論するため

の手がかりとして、石井氏は劇作家・詩人のブレヒトの詩「老子出関の途上における「道德経」成立の由来」の一節「あの水というのはいったい何なのですか、老師よ?」に言及し、次のように述べた。「江湖」とは、変化する「水」である。「江」（河川）も「湖」も、静的なものではなく、その姿を変え続ける動的なものである。思想家・ベンヤミンは上記のブレヒトの詩に言及する中で、その中心的なモチーフとなっている「水」を、人文学が扱う「テキスト」に重ね合わせた。それは、柔らかく弱いけれども、盤石な秩序を穿つ力を秘めるものである。テキストを読むという行為は、「江湖」のように、空隙・間隙に在って、なおかつ世界を根底から変え得る力を持つ。

4名の登壇者による発表ののち、白熱した全体討論が行われた。松方氏の発議は、西欧由来の価値基準に自らを「同化」させつつ、一方で「日本」という主体を立ち上げようとしてきた近代日本の学知の、複雑に入り組んだ来歴を再検討することであった。「アゴラ」からこぼれ落ちる場所としての「江湖」あるいは「アジュール」「無縁」といった場所を、どのように共存させていくか、という課題は、「西欧」対「日本」という図式をどのように克服するかという課題と重なる。中島氏は、「アゴラ」にせよ「江湖」にせよ、本質的に規定され得るものではなく、獲得される場所として想起されるべきであると述べた。より具体的に言えばそれは、「言葉」を獲得するための場所、すなわち新たな言論空間を創出しようとするプロセスそのものである。そこにおいて必要なのは、「西欧／日本」「中国／日本」といった二者間の比較ではない。必要なのは、二者間の比較に揺らぎを与える「三点測量」的観点である。それは決し



て静的なものではなく、いつ崩れ落ちるかもわからないものである。したがって、それは創出し続けようとする意志がなければ存在し得ない空間である。このような場所は、複数の言語が混淆することによってのみ創出可能である。参加者の資格を選別し、「内」と「外」を分けるような権威的な態度を葬り、全ての人

に学問を開く動的な言論空間を創出するという意志を、人文学は持つことができるか。人文学の覚悟が、今、「パンデミック：pandemic = pan+demos（すべてのひとびと）」の時代に問われている。

報告者:崎濱紗奈(EAA特任研究員)

第3回 石牟礼道子を読む会

2020年7月20日

2020年7月20日より、Zoom上で、第3回「石牟礼道子を読む会」が開催された。発表担当者は宮田晃碩氏（東京大学大学院博士課程）で、石井剛氏（東京大学）、鈴木将久氏（東京大学）、前島志保氏（東京大学）、張政遠氏（東京大学）、山田悠介氏（大東文化大学）、宇野瑞木氏（EAA特任研究員）、建部良平氏（EAAリサーチ・アシスタント）、報告者（高山花子、EAA特任研究員）の計9名が参加した。宮田氏の選んだサブテキストはつぎの3つである。

- ・ 佐藤泉（2013）『『苦海浄土』のさまざまな「栄耀栄華」：「聞き書」の主体とはだれであるのか』『叙説Ⅲ』09
- ・ 早川敦子（2019）「越境する「命」の神話：石牟礼道子と翻訳の不／可能性」『津田塾大学紀要』第51号

- ・ 水溜真由美（2005）「石牟礼道子と水俣：ゆらぐ〈共同体〉像」北田暁大、野上元、水溜真由美編『カルチュラル・ポリティクス 1960/70』せりか書房

まず、佐藤論文の丁寧な読解にもとづいて、『苦海浄土』が近代の経済成長の価値観になじまない筆致で描かれており、発表当時の文壇の政治と文学をめぐる議論から渡辺京二によって「私小説」と位置づけられると同時に個人的な「私」の概念の問い直しが生じており、『サークル村』の集団的な活動と「聞き書」自体が聞くことと語ることの単純に二分できない行為によって成り立っている、という論点整理がなされた。直後の質疑応答では、近代ジャーナリズムの成立以降の報道の文法と文学との分離との関連や、漢文学が排除されてゆくなかで「文学」と呼ばれるものが一

近代的な産業主義とはなじまない書きぶり

独占資本のあくなき搾取のひとつの形態といえば、こと足りてしまうかも知れぬが、私の故郷にいま立ちまわっている死霊や生霊の言葉は階級の原語と心得ている私は、私のアニミズムとプレアニミズムを調査して、近代への呪術師とならねばならぬ。(講74-5、全56、世44)

石牟礼は、近代産業を近代的な分析用語で批判するのではなく、「なまなましく歴史を生きた人格として、幾たびも立ち戻ってくる死霊生霊の側からとらえる」(27頁)。

さらに、「文学」と「政治」にまたがるようなテクストとして、「成長」以降の「政治を語る言葉と文学の言葉とは同時に存立できないという排他的一因式」に抗う——そのような意味で、きわめて「文学的」(かつ政治的)である(同)。

B) 「政治」と「文学」の分断、「私小説」として位置づけられる『苦海浄土』

「成長」の過程で文学は政治の言葉から切り離され、かつそれを文学界は文学の自律化と捉えてきた。そのなかで渡辺京二は、『苦海浄土』を「文学」に登録するために、それを「私小説」と位置付けることになる。しかしこの位置づけは、文学が「私事化」されてきた政治的な過程を暗黙裡に追認することになってしまう。『苦海浄土』は本来、そのような過程を問いただすようなテクストである。もし「私小説」と呼ぶのであれば、それは「私」という概念を脱構築するという高度な戦略でなければならない。

体どういったものを指すようになったのか、について文学史的な質問がなされた。さらに、報道におけるフィクションの登場と関連して、「わたしたち」という概念に包摂されている同質性の前提が指摘され、そういった「わたしたち」と思えるものを越えてゆくものはないのかと問いかけがなされた。また、当時のアジア・アフリカ文学への世界的な関心と同期していることや、必ずしも日本人としての集団ではない集団の問題が描かれていること、文学の脱政治化の不可能性、経済的共同体のようにグローバルな国家を越えるものとの関連が指摘された。その後、早川論文にもとづいて『苦海浄土』英訳における翻訳の問題が具体的な訳出例とともに整理され、水溜論文にもとづいて水俣の「共同体」の性格が必ずしも「中心/周辺」、「都市/自然」といった二分法では描き出せない流動的なものである

ことがコンパクトに確認された。

発表全体をとおして提出された大きな問いのひとつは、『苦海浄土』の語りの主体が一体誰なのか、ということだろう。宮田氏は哲学を専門とし、ハイデガーと和辻を主軸として研究をしているため、議論では最後まで、「主体性」や「間主体性」、「共同体」、「風土」といった概念についても問い直しがなされたのが印象的であった。

今回の第3回で、いったん『苦海浄土』第1部にもとづく集まりは一区切りとなるが、これまでたびたび話題にのぼってきた、「聞き書」の反復のレトリックや翻訳不可能性の議論にも深く立ち返る契機をあたえる充実の時間であった。

報告者:高山花子(EAA特任研究員)

第3回 「ジャーナリズム研究会」公開研究会

2020年7月26日

2020年7月26日、4月にコロナ禍で開催延期となっていた第3回「ジャーナリズム研究会」が、Zoomにて行われた。1人目の講師は佐藤至子氏（東京大学）であった。本発表「絵は出来事をどう語るか——近世後期の草双紙における視覚表現」は、講師

の単著『江戸の絵入小説——合巻の世界』（ベリかん社、2001年）に挙げた事例に基づき、18世紀と19世紀の草双紙における文と絵の関係を詳細に考察したもので、充実した内容であった。

氏は、草双紙の歴史的変遷について概観し、文章が主体である近代小説とは異なり、草双紙の場合は文が絵の余白に書き込まれるものであったと確認した上で、芝全交『大悲千祿本』（1785年）や山東京伝『八重霞かしくの仇討』（1808年）の例を挙げながら、「絵に密着する文」（「小がき」、または「書入」と言う）と「叙述する文」（「本文」と言う）の区別および時代とともに変化していったそれらの役割を細かく分析した。氏は、紙面上に交差している文字と図像を読み解く方法

The screenshot shows a Zoom meeting interface with several participants at the top. The main content is a presentation slide with the following text:

まとめ

- ・1つの絵が時間の経過を伴う複数の場面を表していることがある（異時同図法）。
- ・絵の余白にある文は、絵に密着する文と叙述する文（本文）に大別される。
- ・1つの場面を表す絵は、同時に発生している複数の出来事を表す。
- ・叙述する文（本文）は、特定の人物が見聞きする出来事を中心に記される。
- ・絵は原則として出来事を発生順に表してゆく。
- ・絵に表された出来事が、本文では説明されないことがある。
- ・絵に表された出来事が、その紙面（および前後の紙面）の本文では説明されず、後の本文で回想的に解き明かされることがある。

参考文献

佐藤至子『江戸の絵入小説——合巻の世界——』ベリかん社、2001年
 佐藤至子「草双紙における絵と文はどう関わるのか」松田修他編『古典文学の常識を疑うII』勉誠出版、2019年



について、江戸末期には「絵と書入とを先へ見て本文はあとにて読み給ふべし」（式亭三馬『昔唄花街始』（1809年））という順番が定着していたと指摘した。

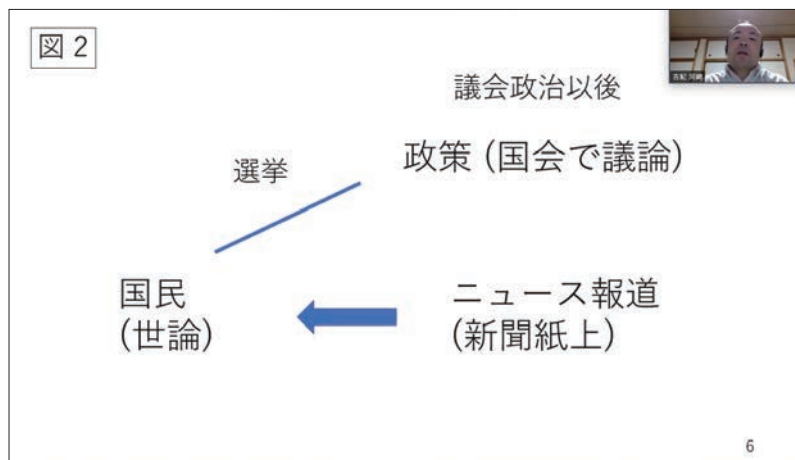
また、草双紙が多様化していくなかで、絵と文の〈ズレ〉も生じていった。初めは紙幅が限られていた関係もあり、絵が時間の経過を伴う複数の場面を表すことがあったが（中世の絵巻物にも見られる「異時同図法」）、丁数（現代でいうところのページ数）が増えると、絵は原則として出来事を発生順に表してゆくものの、絵に表された出来事が本文では必ずしも説明されないなど、絵の順序と本文における説明の順序が一致しない例が出てくる。なかでも実に興味深いのが、読者の関心をつなぐ「だんまり」という創作法だ。「だんまり」とは歌舞伎で登場人物が無言で探り合う場面を言うのだが、草双紙では絵で描かれている様子が同じ紙面の文によって説明されないことを指しており、「大きりにくわしくわかる」（山東京伝『石枕春宵抄』（1816年））とあるように、物語の最後にその意味が明かされるという表現法である。

佐藤氏が本発表で考察した江戸時代の草双紙の制作現場や作者が示していた「読則」を出発点として、質疑応答の時間では、明治期の草双紙や錦絵新聞などにおける継続性と断続性が活発に議論された。具体的には、東アジアをはじめ日本以外に存在していたであろう類似したジャンルとの比較を促すコメントが出され、また、作者が表示する読則にかかわらず読み手側においては多様な読書形式があった可能性、草双紙の読者が歌舞伎の観客とも重なっていたからこそ

「だんまり」の手法が草双紙でも読者の興味を引き付けるのに有効だった点などが、質疑応答を通して示された。さらに、本発表で示された江戸期の草双紙と江戸期の読売瓦版や明治期の錦絵新聞、小新聞との文と絵の関係性の相違や、明治期の新聞連載小説における挿絵と文章の読書との相違点について質問および指摘があった。

河崎吉紀氏（同志社大学）による本日2番目の報告「ジャーナリストと政治家の分岐」は、近代日本の議会政治の発展に伴う新聞ジャーナリズムと政治の関係性の変容を辿るものであった。河崎氏によれば、議会政治誕生前夜のジャーナリストと政治家の境界は曖昧であった。自由民権運動を経て1890年の帝国議会開設に至る過程で、新聞は政治の主たる舞台として活性化した。新聞記者は取材記者ではなく政治的議論の論客であり、紙上の政論を通して政府に直接的に圧力をかけることができた。記者としての筆力はそのま「政治力」を意味したのである。ところが帝国議会開設以降、政策をめぐる論争や利害調整の舞台は新聞紙上から議会へと移ってゆく。特筆すべき現象は、政論新聞の時代に筆の力で政治に取り組んできたジャーナリストの政治家への転身であった。『新潟新聞』の主筆であった尾崎行雄や『郵便報知新聞』の記者であった犬養毅に代表される、ジャーナリズム出身の「メディア議員」が台頭し、1920年代から1930年代にその数はピークを迎えた。

他方ジャーナリズムにおいては、日露戦争を境に、新聞の重心が政論から報道へと移っていった。日露



戦争は、戦況をいかに速く正確に報じるかをめぐる新聞社間の報道戦でもあった。競争が激化するなか、各新聞社は読者の需要が高く“売れる”速報の報道を重視し、それを可能にする海外特派員・電報・号外・夕刊といった制度を整備する経済的資本を必要とした。政治の舞台としての新聞の質的変容とともに、新聞記者の役割もまた変化した。かつて政府にむけて具体的な政策を主張していた新聞記者は、国民にむけてニュースを提供し、報道を通じてときに国民感情を煽る存在となった。20世紀初頭に増加を続けた「メディア議員」は、第2次世界大戦を通じて減少に転じる。河崎氏はその要因については仮説段階にあるとしながらも、第2次世界大戦の敗北が国政における記者と政治家の立場の違いを浮き彫りにした点を指摘した。

質疑応答では、ジャーナリストの政治との多様な関わり方に関心が寄せられた。例えば、政界進出せずにジャーナリズムに残留した記者たちは、どのように政治に関わろうとしたのか。出版（雑誌）ジャーナリズムは、新聞が手放しつつあった政論の新たな受け皿となりえたのか。これらの問いに対し河崎氏は、ジャーナリズムに残った記者たちが、新聞よりも雑誌に政論発表の活路を見出したり『萬朝報』の黒岩涙香のようにスクランダルリズムを通じて政治と屈折した関係を持ったりしていた点を指摘した。また、言論統制が新聞の報道への傾斜に及ぼした影響についての質問も出された。河崎氏は、1918年の白虹事件のような言論弾圧事件が紙面上での大々的な政治的議論を

困難にした点は認めつつ、新聞が報道を優先するようになった要因はどちらかといえば事業拡大を目論む新聞社の経営事情にあったのではないかと回答した。さらに、ジャーナリストと政治家の分化には明治期における議会政治の始まりと日本の第2次世界大戦敗戦後の二段階があることが河崎氏から補足説明されると、前者はジャーナリストと文学者、思想家の分化・専門化とも通底する傾向であることが参加者から指摘された。このほか、イギリスのジャーナリスト養成・資格化の制度史を追った河崎氏の単著『ジャーナリストの誕生』（岩波書店、2018年）に関連し、英米ジャーナリストの職業意識や記者教育との比較という観点からも興味深い議論がなされた。

日本の近世から近代における出版・読書・報道文化を見渡す研究会の後には、希望者とともに講師を囲んで遠隔懇談会も行われ、発表内容についての議論がさらに深められるとともに、コロナ禍の中、参加者が各地で苦勞しつつ研究・教育活動を行っている様子が語られ、互いに励みになる会となった。また、今回は本会初の遠隔研究会で、対面での開催とは勝手の違う不便さも感じられた一方で、関東近郊のみならず、関西のほか、韓国、台湾、イタリアのように遠方からの参加者もあり、オンライン開催の強みも感じられた。

報告者:イリナ・ホルカ(総合文化研究科)
尾崎永奈(東京大学大学院博士課程)

コロナ危機と医療・介護政策過程

2020年7月30日

2020年7月30日、EAA ウェビナー「コロナ危機と医療・介護政策過程」が開催された。未曾有の感染症拡大を受けて、数多くの意思決定が行われているなか、専門家会議が注目を集めてきた。感染症という非常に専門性の高い分野での政策決定はどのように行われるのか、その政策過程において専門家と政治家の関係はどのようなダイナミクスを持つのか。本ウェビナーでは医療政策をめぐる比較政治を専門とする石垣千秋氏（山梨県立大学）と党政間政策調整の日韓比較を専門とする朴志善氏（岡山大学）をお招きし、この問いに対する「知の蓄積」を模索した。

まず、石垣氏は政治学において「専門性」と「専門家」に注目した背景として、ベックが指摘した「新しいリスク」の発生と、それに伴う高度化・専門化した政策の必要性を指摘した。その上で、著書『医療制度改革の比較政治——1990-2000年代の日・米・英における診療ガイドライン政策』（春風社、2017年）で論じられた専門職政治の理論に依拠して、今日のコロナ危機を考える枠組みを提示した。

政策決定に影響を及ぼす3つのIのファクター（Interest, Institution, and Idea）のなか、通常の政治であれば過去の経験をもって多くの政策決定が行われるところ、今日のように不確実性が高い時期には、「ロー

ドマップ」を描ける「アイデア」が政策決定に重要になる、と石垣氏は語る。そうであれば一体、このアイデアはどこから来るのか、誰から学ぶのか。ここでいわゆる「専門家」の存在が重要になってくる。石垣氏はここで「誰が専門家なのか？」を問いかける。毎朝テレビをつけるとワイドショーでいわゆる「専門家」と言われる人々が多く登場しているのは周知の通りであろう。石垣氏はお互いがお互いを専門家と認識できる「小さな固く閉じた専門家集団」、つまり、「認識共同体（Epistemic Community、EC）」の中に固い専門家団体が含まれていることが政策決定の際、もしくはその政策の成功の結果に重要であると論じた。

これに照らし合わせた場合、今日のコロナ感染拡大防止対策はどう評価できるのか。石垣氏は、コロナ危機という前代未聞の時代に政策過程における「専門家」の役割が重要であるのは必然であると指摘した。その上で、日本の対策体制を時系列に沿って主なアクターを中心に概観し、日本版 CDC（疾病対策センター）の不在の中、ECとしての核心たる専門家集団の不在と専門家会議の法的根拠の不在が、石垣氏により指摘された。結論として、石垣氏は、専門家の役割が大きい政治には、政策の前提となる専門的知識を理解できるアクターが限定的であること、政

<本日の目的>

・専門職政治の理論で今日のコロナ危機について考えてみる！

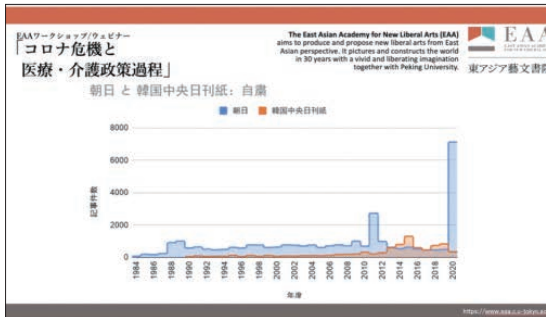
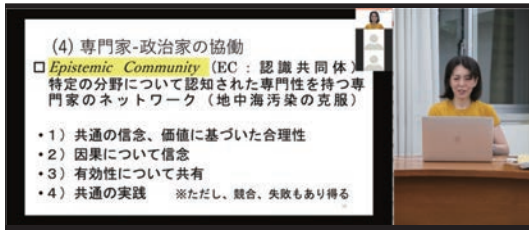


医療制度改革の比較政治
誰が医療をめぐる政治を左右するのか？
石垣 千秋 著
春風社・5400円

（日本経済新聞 2017年4月1日）

医療制度改革の比較政治
石垣 千秋 著
高齢化が進むなか、医療費の抑制は大きな課題。直接的な手法として、すぐ思いつくのは医療サービスの価格を下げることだ。しかしこれだと医療の質も低下しかねない。本書は質を確保し費用を抑える方法として、病気の治療手法を標準化することに注目する。今は医師によって治療法が異なり、無駄も多いためだ。標準化をめぐる日米英の違いはどこにあるのか。やや専門的だが、従来になく視点からの医療政策論だ。（春風社・5400円）

・前提：政策の成功／失敗を見極めるのが困難な状態。理論的な結論を到達点としない。



台湾	日本
<p>COVID-19 感染対策を強化し、換気システムを...</p> <p>2020年5月15日、台湾政府は、COVID-19 感染対策を強化し、換気システムを...</p> <p>2020年5月15日、台湾政府は、COVID-19 感染対策を強化し、換気システムを...</p>	<p>2020年5月15日、台湾政府は、COVID-19 感染対策を強化し、換気システムを...</p> <p>2020年5月15日、台湾政府は、COVID-19 感染対策を強化し、換気システムを...</p> <p>2020年5月15日、台湾政府は、COVID-19 感染対策を強化し、換気システムを...</p>

政治家の責任が曖昧化すること、それがゆえ、最後に民主主義と相容れないことで、問題が生じかねないとのことで、常に警戒すべきだとした。しかし今日の危機は関連制度を改革できる好機でもあるとした。

石垣氏の報告を受けて、朴氏は韓国の事例をもって政策過程を論じた。朴氏は相対的に感染拡大を抑えていると評価されている韓国において、その防疫政策をめぐる韓国政府の対応システムと様々なアクターを紹介した。韓国では、危機警報段階により、関係省庁や機関が対応をとり、その段階が最高レベルの「4. 深刻」になると国務総理が本部長と務める「中央災難安全対策本部」が設置される。今回も最高レベル4で「中央災難安全対策本部」が設置され、対応が行われている。その中で注目を集めるのが「疾病管理本部 (KCDC)」である。2004年に設置されたKCDCは過去の感染症対策をめぐる試行錯誤を重ね、法整備や政策立案、ガイドラインの策定を行ってきた。今現在もCOVID-19に関する検疫対応指針、医療機関のみならず政策防疫に関する指針が作成・発信されていることが朴氏により説明された。

朴氏は韓国防疫政策に関わる他のアクター（大韓医師会、民間企業、与党）の動きを合わせて分析した上で、関係アクターの初動の速さを指摘した。それが可能であったのは、朴氏によると、関連体制・法律の整備、官民協力のネットワーク、そして社会的

合意があったからである。朴氏は最後に日韓で防疫政策過程において専門家集団の異なる位置付けやアプローチがとられているのを指摘し、それを決定づける要因をめぐる議論を呼びかけた。

こうした2人の報告と討論を受け、参加者側からも様々な角度からの問題提起やコメントが上がった。まず、モデレーターを務めた報告者（具裕珍、EAA 特任助教）からは、日韓両国の政府の応答性 (responsiveness) の相違を、言説分析を通して概観することができないか、との指摘がなされた。特に「自粛」という言葉がどの頻度で使われるかを調べ、韓国社会より日本社会において、より使われていること、したがって政府としてはアクターのコンセンサスを形成するより、「自粛」を求める方が容易なのではないかとの推測がなされた。続けて、松本尚子氏（東京大学大学院研究生）により、ドイツの事例が紹介され、専門家集団の役割も重要であるが、それよりも政策決定を行う政治家の科学へのリテラシーが重要である点が指摘された。

さらに内山融氏（東京大学）からは政策の成功の有無を論じる際に、政策の output と outcome を区別するのが大事であるとの指摘がなされた。今日の防疫政策には政策 output を生み出すような input がなかったこと、しかし outcome がある程度得られている、すなわち、output と outcome の解離が生じており、それ



をどう理解するのが問われているとの指摘がなされた。また、前野清太郎氏（EAA 特任助教）により、防疫政策をめぐる台湾の事例が紹介された。前野氏は、台湾と日本の対応を比較した場合、過去の経験から学んだ台湾の水際対策はある程度成果を出しているが、韓国の K 防疫と言われるような、T 防疫といった政策モデルが構築され、今後活用されるかについては疑問であると指摘した。最後に、中島隆博氏（EAA 院長）からは、コロナ危機のなか、専門家と政治家の関係からより顕著になったように、民主主義の本質

が問われている、すなわち、わたしたちは「何ができるのか」以上に「何をのぞむのか」を問う新たな知が必要であり、専門家を育て、また預かっている大学としての役割を省察する時間であったとの締めくくりの言葉をいただいた。社会科学的知の蓄積を模索する将来的な機会を期待しつつ、本ウェビナーは終了した。

報告者:具裕珍(EAA特任助教)

第4回 石牟礼道子を読む会

2020年8月3日

2020年8月3日、Zoom上で、第4回「石牟礼道子を読む会」が開催された。発表担当者は高山花子氏（EAA 特任研究員）で、石井剛氏（東京大学）、鈴木将久氏（東京大学）、前島志保氏（東京大学）、張政遠氏（東京大学）、山田悠介氏（大東文化大学）、宮田晃碩氏（東京大学大学院博士課程）、田中雄大氏（東京大学大学院博士課程）、建部良平氏（EAA リサーチ・アシスタント）、報告者（宇野瑞木、EAA 特任研究員）の計10名が参加した。

第4回を迎え、これまで3回に亘り読んできた『苦海浄土』第1部に続いて、第2部「神々の村」の読解に入った。高山氏は、本読書会で「聞き書き」の文体を中心に、近代的主体とは異なる「私」の在り方や主体の複数性の問題が繰り返し議論されてきたことを踏まえ、特に主体の集団性という観点から石牟

礼の執筆活動の基盤となった共同体の問題を取り上げた。参考テキストとなったのは、以下の2本の論考である。

- ・竹沢尚一郎「人類学を開く——『文化を書く』から「サークル村」へ」（『文化人類学』第83巻第2号、2018年9月）
- ・金井景子「「償い」を問う——「水俣病」と石牟礼道子『苦海浄土』の半世紀」（『早稲田大学教育学部学術研究（国語・国文学編）』第58号、2010年2月）

まず高山氏は、人類学におけるエスノグラフィーへの関心から「サークル村」における集団創作の実践を論じた竹沢論文に基づき、1958年に筑豊で谷川雁



井上光晴編集『辺境』
第1次（1970年9月号）
の表紙（個人蔵）



井上光晴編集『辺境』
第2次（1974年）の表紙
（個人蔵）



井上光晴編集『辺境』
第3次（1986年10月号）
の表紙（個人蔵）

などが創刊した『サークル村』の活動において、社会の底辺の人びとの肉声を「翻訳＝纂奪」を経ずに書き記し、語り手／書き手が互いに変容しながら集団で創造するという「聞き書き」の手法が生み出されたこと、その中に人びとを抑圧する社会構造をも総体として書き込む態度が見られたこと、そうした土壌を経て『苦海浄土』が誕生し得たことが確認された。質疑では、石牟礼自身が筑豊の「聞き書き」からの影響を認めつつも、「フィクションとしての聞き書き」という手法を用いたと発言したことについて議論が集中した。すなわち石牟礼のいう「フィクション」を一般化して問うべきではなく、問われるべきは、サークル村における「聞き書き」の手法に石牟礼にとっての「フィクション」を繋げた意図であり、書き得ぬ出来事を「書く」ことにどう向きあおうとしたかということである。また『サークル村』（1960年1月）に初めて「聞き書き」の方法論を採り入れて水俣病について書かれた「ルポルタージュ」と冠された「奇病」と『苦海浄土』の「ゆき女さき書」との間に見られる文体等の変化の問題、患者について実名が使われていることの意味についても併せて議論が交わされた。さらに梁鴻の『中国はここにある——貧しき人々のむれ』（鈴木将久等訳、みすず書房、2018年）における中国の農村についてのルポルタージュと文学の狭間にあるような文学テキストとの共通性も指摘され、石牟礼

テキストを東アジア、あるいは世界に開いて読解し得る重要な視点も示された。

次に参照された金井論文は、2004年に第2部の終章が書き下ろされて3部作が完成した事情もあり、従来、第1部の「聞き書き」部分に研究が集中してきた点を踏まえ、石牟礼を思わせる語り手（「私」「わたし」「わたくし」）、そして患者及びその家族としての位置関係が3部を通じてどのように変容していくかを「償い」をキーコンセプトに跡付けたものであった。質疑では、「私」「わたし」「わたくし」などの様々な表記とその書き分けについて議論がなされたが、この一人称の問題は後にも詳しく取り上げられるように、第2部に至ってさらに複雑化・重層化を見せており、それが石牟礼の「書く」行為とも直接つながっている重要な問題であることが確認されることとなった。

以上を踏まえて、高山氏は、第2部の連載された雑誌『辺境』への掲載状況を時系列にそって丁寧に整理し、当時石牟礼の創作を取り巻いていた環境を編集意図や編集後記から明らかにした。特に、第2部の執筆開始から終了するまで実に20年近くもの開きがある点が確認され、石牟礼個人の体調等の問題とともに、『辺境』自体が第1次（1970年6月-1973年3月）、第2次（1973年10月-1976年5月）、第3次（1986年10月-1989年7月）と断続的な刊行であった状況も考慮すべきであると判明した。

さらに『辺境』の編者・井上光晴は当時『苦海浄土』を「小説」として認識していなかった事実も明らかとなり、この点をめぐって、質疑では70年代のルポルタージュ全盛期における石牟礼テキストの受容の状況について議論がなされた。また、石牟礼文学の記録一小説にまたがるような在り方自体が、従来の小説の定義を問い直すものであるという見方も示された。

最後に、高山氏は第2部における「私」の用例を抽出し分析を行った。第2部では、第1部では見られなかったような「〈わたくしごと〉にすぎない」、「わたし一人ならぬ〈私〉」といった複雑な「私」をめぐる表現が多出する。高山氏は、いわゆる「確約書」をめぐる一任派と訴訟派が分裂していく複雑な状況下で葛藤する中で生まれた特殊な用例でもあり、それでもなお理想の（エゴイズムのないという意味での）絶対無私の「共同体」をめざす石牟礼による通常の「わたし／私」への抗いを示していると読み解いた。質疑では、石牟礼にとって、運動の力学に巻き込まれてすり減っていく中であって、「書く」ことは私の世界を守るための砦であったであろうこと、しかし同時に「書く」ことは社会性を帯び、制約・責任が伴う状況

を生み出すという矛盾が、第2部の創作段階では第1部に増して生じていたことが指摘された。さらに絶対無私の集団といった際に、このような考え方が全体主義的な動きにたびたび利用されてきた歴史を石牟礼自身がどの程度意識し言語化していたか、という質問と共に、石牟礼の天皇制への態度についても議論された。

以上のように、今回は、集団での活動に実際に参画していく時期をあつかった第2部の読解へと入ったこともあり、共同体の中の石牟礼をどうとらえるか、また共同体を石牟礼がどう考えようとし描こうとしたのか、という問題が読み解きの鍵となった。また第2部の創作状況が整理されたことで、断続的かつ長期的な執筆状況ともに揺らぎを孕んだテキストとなっていることも確認された。第1部から既に見られた「私」の特殊な位置づけについても、第2部ではさらに私と集団、現代と過去・歴史が交錯して現れる場となっていることが明らかとなり、第1部での議論のさらなる深まりや多角的な視点が生まれた意義深い会であった。

報告者:宇野瑞木(EAA特任研究員)

第1回 日中韓オンライン朱子学読書会

2020年8月15日

2020年8月15日、日本時間16時より第1回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。この読書会は、日中韓の若手朱子学研究者が集い、日本語や中国語で刊行された代表的な論文や著作を、その著者自らが紹介し、自由に討論するものである。EAAのほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心、科研費基盤研究(B)「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」との共催である。

初めに司会の趙金剛氏(清華大学)より、読書会の趣旨について説明がなされた。朱子学に関してはこれまでも、様々な規模の国際学会が行われているが、若手研究者が企画し、積極的に研究交流を行う機会はあまりなかった。また、中国の研究者にとって、

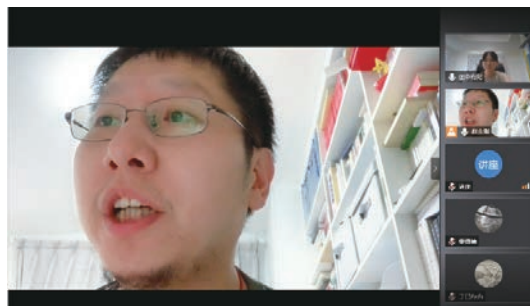
日本で出版された朱子学関連の研究書で、翻訳されていないものを知ることは難しかった。とりわけ、若手研究者が自身の博士論文をもとに刊行した著作には、最新の研究成果が含まれているはずだが、中国の研究者にとっては語学の壁があり、アクセスしにくい状況にある。このように、オンラインで月1回程度のペースで顔を合わせ、相互の研究成果を伝え議論する機会を持つことで、東アジアの朱子学研究のさらなる前進を期待することができるのではないか。

第1回の報告は田中有紀(東京大学)が担当し、「朱子学の音楽論」というタイトルで、2018年に刊行した『中国の音楽思想:朱載堉と十二平均律』の一部を紹介した。朱子学の音楽論への漢学の影響、度

量衡史の考証と音楽の正統性との関係、朱子学における音楽の道徳性、「理論」と「実践」の関係をどのように考えるか等、活発な議論が行われた。様々な立場で朱子学を研究している参加者からの質問は、報告者が今まで気づけなかった多様な視点をもたらしてくれた。

今回の参加者は、日本から5名、韓国から1名、中国からは20名以上であった。日本側の参加者も、普段は東京・京都・兵庫と様々な地域で研究活動をしており、初めて顔を合わせるメンバーもいた。司会者・報告者も含め、参加者の多くは、何らかのかたちで北京大学・哲学系で学んだことがある者である。現在、博士課程に所属している学生の参加者もいた。報告者個人としては、学生時代に机を並べて学んだ同学たちと再びこのような読書会を持てるのは大変嬉しく、また、同学たちの、博士課程修了後から現在に至るまでの進歩を感じられて、非常に頼もしく思った。8月15日という日に、日中韓の若手研究者が集い、忌憚のない意見を述べ合えるということも、大変意義深いことだったように思う。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)



第5回 石牟礼道子を読む会

2020年8月17日

2020年8月17日、第5回目の「石牟礼道子を読む会」が開催された。発表担当者は本ブログの報告者でもある建部良平(EAAリサーチ・アシスタント)で、石井剛氏(EAA副院長)、鈴木将久氏(人文社会系研究科)、前島志保氏(総合文化研究科)、張政遠氏(総合文化研究科)、佐藤麻貴氏(ヒューマニティーズセンター)、宇野瑞木氏(EAA特任研究員)、高山花子氏(EAA特任研究員)、宮田晃碩氏(総合文化研究科博士課程)、田中雄大氏(人文社会系研究科博士課程)、の計10名が参加した。前回に引き続き『苦海浄土』の第2部「神々の村」の読解を行なった。サブテキストは以下の通りである。

- ・渡辺京二「解説『苦海浄土』三部作で要の位置を占める作品」、『新版:神々の村』藤原書店、2014年、pp.395-404。
- ・「絶対負荷をになうひとびとに」、『石牟礼道子全集』第3巻、藤原書店、2004年、pp.431-444。
- ・「『苦海浄土』来し方行く末(上野英信との対談)」、同上、pp.511-531。
- ・「玄郷の世界(中村了権との対談)」、同上、pp.559-570。

発表では「神々の村」というテキストにおいて、「狂



い」と「救い」が重要概念になっている点が考察された。最終章である第6章では、1970年11月に大阪で行われた、新日本窒素肥料株式会社の株主総会での場面が際立っている。それは水俣病患者の方々と支援者たちが、壇上で話す社長に一齐に詰め寄り、それぞれの叫びを発するという場面であった。発表者(建部)はその場面において、人々が共に一心不乱に狂うという状況が発生し、それが患者の方々の内面における「救い」の様なものに繋がったのではないかと想像した。それは株主総会の翌日を描いた場面で、患者の方々が「思う存分、狂うた」(『神々の村(新版)』藤原書店、2014年、pp.388-389)と吐露しているその情景に、一種の清々しさを感じたからであった。また、第2章において子をなくした母が、葬儀において見せた振る舞いに対して、「今日どもは、狂え、あんたも」(同上、p.75)とそれを見た人々が内心で発したこと。さらには、石牟礼道子自身が後の対談で、株主総会是一种の晴れの場であった(『『苦海浄土』来し方行く末(上野英信との対談)』、『石牟礼道子全集』第3巻、p.527)と述べていることも、発表者の想像を支えている。そしてこの様な集団的な「狂い」とその後の「救い」の様なもの成り立たせたものとして歌の意義を考えた。

株主総会での詰めよりが始まる前、患者の方々によって歌が詠われた。「人のこの世はながくして…」と始まる歌は、株主総会に来る前に患者の方々が練習していたものであった。その練習は必ずしも順調に

進んだわけではないが、歌の旋律や歌詞が持つ力、患者の方々が心のそこに蓄えていた声、そして株主総会の会場というみやこの建物。この3つが複合的に組み合わさることによって、非常に大きな反響と効果をもたらした。書中において度々現れる歌について、発表者は以上の様な解釈を試みた。もちろん、これによって患者の方々が回復し、一切の問題が解決したわけではない。会社側から誠意ある謝罪を受けたわけでもない。その意味での「救い」は起こっていない。これは、「神々の村」というテキストにおいて示された僅かな希望を考えるとすれば、この小さな「救い」しかあり得ないのではないかという考えである。活発な質疑応答も繰り広げられ、株主総会の場面が持つ芝居的な側面についての指摘や、芝居に伴う人々の振る舞いの持つ力。石牟礼の患者に対する、或いはわたしたちの患者に対する、或いはわたしたちの石牟礼に対する「近さ」や「遠さ」。そして本読書会で度々議論となっている、石牟礼がこのテキストを書いたことそれ自体の意味など、様々な視点がもたらされた。

いずれにしても、『苦海浄土』を語ることは非常に困難な試みである。これまで十分に確認されてきた様に、石牟礼は極めて繊細且つ独特な手法で言葉を紡いだ。それを現在に生きるわたしたちが如何に語るのか。その挑戦にこそ目指すべきところがあると考える。

報告者:建部良平(EAAリサーチ・アシスタント)

「哲学する」ためのレッスン

ダイキンの皆さんと試みる協働ことはじめ

2020年8月26日

2020年8月26日の昼下がり、1日で最も気温が高くなる時間帯に、わたしたちは東洋文化研究所大会議室に集まった。もちろん、適切な社会的距離を保ち、感染予防のためのアルコール消毒なども徹底した中での開催である。集まった目的は、いつものEAAの研究イベントや教育プログラムとはちょっと別の趣であったので、わたしは開催前から不思議にワクワクしていた。

EAAは、東京大学とダイキン工業株式会社との産学協創プロジェクトの一環に位置づけられている。いや、それ以上に、EAAが北京大学との東アジア学ジョイントプログラムとして発足することができた直接の原動力はダイキンの力強いサポートにはかならなかった。今回は、東大の人文系学問との協働を強化したいというダイキン側からのありがたいご提案を受け、いったいどのような協働のあり方が望ましいかについて、中島さんとわたし、そしてダイキンの東大産学協創スタッフとの間で議論してきた。わたしたちいわゆる「人文系」の諸学は、一般的に産学協同という場合にイメージされる、技術開発を目的とした研究協力はできないだろう。しかし、大学が大学であることの強みは、専門研究だけではなく、さまざまな分野の専門研究が、未来社会に活躍するべき人を育てる教育

の場において束ねられていることにある。わたしたちは、ただ専門的な研究をし、そのための人材を育てるのではなく、人とは何か、人が人として生きる世界とは何かということ考える。それは、人と人、人と社会、人と技術、人と自然、人と世界などの諸関係について、さらには人とそれらを結びつける人を超えた何ものかについての、不断に答えのない問いを問いつづけることである。そして、こうした問いの中で共によりよき人になっていくために、大学という場を欲し、そこで研究と教育を行っている。これらの「人」をめぐる諸関係の問いのベースにこそ、人文学は存在し、その役割がある。

「科学」という近代的なことばは、「分科の学」という意味で言えば、個別の専門知とその体系を表している。人文学は、そのような専門知の体系の中でこそ「人文科学」と呼ばれるが、本来、人の学問は「分科の学」には収まりようがない。だから「人」とそれをめぐる諸関係に関する問いは「科学」の名にそぐわない。「人文科学」というより「人文学」とわたしが呼んでいる所以だ。そうすると実は、人文学はリベラル・アーツと言い換えてもいいものかも知れない。実際、中国語で「文学院」という場合、それは「リベラル・アーツ学部」を指す場合がある。





東大にも駒場のリベラル・アーツがある。わたしたちはそこで、問うことを学び、共に学ぶことで自分と周囲が変わっていく喜びを知る。それは、単に専門的な知識を消費する行為ではなく、共有の課題に共同で取り組む過程を通じて、自らが新しい価値を生産していく行為であるとも言える。これは「人」のあり方を示し、創造していくプロセスであり、とても人文学的な行為であり、同時に大学という場のほかに代えがたい魅力でもある。そうした共同行為をこの産学協創の中で実践していくことができれば、わたしたちは、大学と企業が社会に対して共同して追うべき責任の新しいかたちを世に示すことができるだろう。両者が協力の中で互いに変化し合いながら、人と社会に対して新しい価値のあり方を提示し、よりよい未来に向けた社会の変化を促していくのだ。

つまり、人の学としての人文学は変化を促すための智慧の実践（そう言えば『知の技法』というベストセラーが昔あった）をリードするものである。そこで、ダイキンと東大人文系研究のコラボレーションは、変化を促す学問の実践を参加者みなで実際に「やってみる」ことしかないということになった。やり方はシンプルだ。折しも院長の中島隆博さんがマルクス・ガブリエルと行った対談が書籍化されようとしていた。対話こそ哲学の原初形態であり、したがって人文学に共通する基礎であるが、世界でいま最も注目されている哲学者との対話がこんなに身近なところにあるのだから、これ以上の教材はない。そこで、参加者はこの『全体主義の克服』（集英社新書、2020年）を事前に読んで、半ページ程度の感想を事前に提出し、それ

を踏まえてディスカッションすることになった。

当日のディスカッションは、中島さんとダイキンからの参加者13名、それにEAA東アジア教養学プログラム生4名が集まって（一部はオンラインからのリモート参加）、対話を行うかたちで進められた。しかし、その対話はわたしたちがともすればふだん注意することなく使ってしまう言語や、あたりまえだと思ってしまう思考の回路が、実は当たり前ではないかも知れないということを感じさせるようなスリングなものだった。そのごく一部をかいつまんで紹介しよう。

参加者（以下P）「対話によってあたりまえだと思うことを疑うことが大切だと思います。」

中島（以下N）「では、対話って何ですか？対話によって何が開かれるんですか？」

N「実は哲学は対話的なものです。哲学者にあなたの思想はどんなものですかと聞いても気の利いた答えは返ってきません。なぜかという、哲学というのはさまざま異なる状況の中で対話することだからです。」

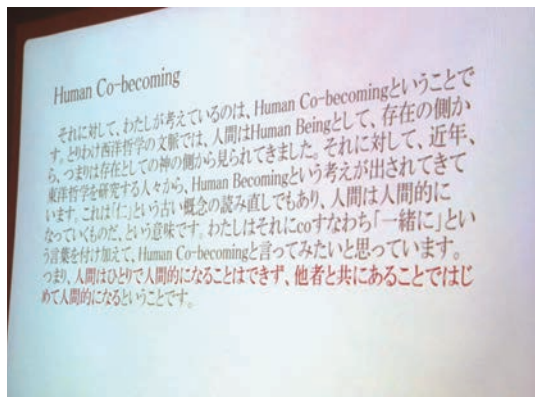
P「哲学を学ぶことで考え方の幅を広げることができそうです。哲学にはまるきっかけが生まれるといいです。」

P「哲学は距離が遠くて畏れおおいです。」

N「哲学にはいろいろなものがありそうですが、そうすると、哲学でないものはあるでしょうか？」

P「まったく哲学でないものはなさそうです。数式でしょうか。」

N「でも近代哲学は数学と切り離せませんね。」



- P 「そうするとやはりすべてのことが哲学ですね。」
- N 「歴史学は歴史を研究する、文学は文学作品を研究する、では哲学は何を研究するのでしょうか？」
- P 「哲学が哲学を研究するというのはおかしいと思います。」
- P 「わたしは工学専門ですが、それでも PhD、つまり哲学博士です。」
- N 「どうも哲学はほかの学問とちがってインチキな感じがしてきましたね。」
- P 「もしかすると、わたしも哲学をしているのかも知れません。」
- N 「そうすると、先ほど哲学にはまると言いましたが、ロックミュージックにはまるとか、源氏物語にはまるといったのはちょっとちがって、何か生活の態度とか、ものとの関わり方のことが哲学なのかも知れませんね。」
- P 「倫理的な価値を企業として訴えていくのは難しいと思います。」
- N 「では、倫理とは何かを考えてみましょう。みなさんはよりよく暮らせるような製品を提供したいと思っていますね。この〈よりよく〉というのが倫理です。倫理は名詞ではなく副詞で説明すべきものです。」
- N 「でも〈よりよく〉を説明するのは難しいことです。なぜならそれはものごとへの関わり方そのものだからです。それを経済的価値とどうやって結びつけましょうか？」
- P 「企業でも倫理的な価値を目指し始めていると思

います。」

- N 「そうですね。単によりよい製品を作る競争だけではもう限界ですからね。だから〈よりよく生きる〉ためにどうすればいいかを考えるのは当然ですし、そのためにはおカネとは何かということについても考えていく必要があります。」
- N 「民主主義とか価値と言われているものはいったい何種類のものがあるのでしょうか？ 来たるべき価値とは何でしょうか？ これも同様に〈よりよく〉のよに副詞的に考えられないのでしょうか。」
- P 「価値相対主義は困ると思います。子どもを虐待する自由はないので、その良し悪しを人に任せすることはできません。」
- N 「しかし、それをどうやって説得力を持って説明しますか？」
- P 「子どもの人格にも尊厳があるからというと思いますが……。」
- N 「しかし、人格とか尊厳という哲学的なことばはよくわかったようなわからないようなことばですので、口ごもってしまいますね。むしろ、直観に信頼を置いたほうが腑に落ちる感じがします。そして、直観こそはいまの哲学の話題です。」

思いがけない問いであり、答えのない対話ではある。だが1時間半の予定時間はあっという間に終わり、参加者各人はこのレッスンを受けて、再度コメントを提出することになった。それを中島さんは「あとがき」と呼んだ。「あとがき」という唐突なことばにみなが一瞬戸惑ったようだった。しかし、今回のレッスンはわたしたち参加者相互の哲学の実践であり、それ自体がある状況を背景に行われた豊かな対話のテキストだと考えると、「あとがき」という言い方も素敵な響きを持つようになる。「あとがき」は本の作者に与えられた特権である。だから、このように呼ぶことによって、わたしたちは、共同作業としての哲学の「テキスト」を共に編み上げた共著者になるのだ。しかも、そのプロセスでは、わたしたち自身のものごとに対するかまえ方が、何か別のものへと変わっていく感覚を味わったはずである。そういう経験を共有することが今回の目的だったのだと、中島さんと参加者一人一人との応酬

の中からは浮かび上がってくる。もちろん、このような協働の積み重ねこそが、スローガンでも知識でもなく、わたしたち一人一人が「全体主義の克服」を実現するための具体的な実践であることは言うまでもない。知識を消費するのではなく、世界の想像と創造に具体

的に関与すること、それは哲学のみならず人文学全体が本来もっているはずの尊い意味であろう。大学と社会との新しい協働のかたちをここから作っていきたい。

報告者:石井剛(EAA副院長)

EAAオンラインワークショップ

感染症と文学

2020年8月26日

今年4月中旬にEAA オンラインワークショップ「感染症の哲学」が緊急開催された。4ヶ月が経ってもコロナ禍あるいはパンデミックがまだ収束しておらず、今回の2020年8月26日に開催されたワークショップ「感染症と文学」もオンラインで開催せざるを得なかった。

開会の挨拶において、東京大学東アジア藝文書院(EAA)副院長の石井剛氏から、COVID-19によって世界全体が急速に変わっている中で、学問にどのように取り組むべきかという問題が提起された後、6人の研究者による発表が3つのパネルに分かれて行われた。

ウェビナーの画面越しで、懐かしい面々、初対面同士、ともに挨拶を交わしあう登壇者たち(上段左から、張政遠氏、木村朗子氏、デンニツァ・カブラコヴァ氏。中段左から、潘文慧氏、佐藤勢紀子氏、宇野瑞木氏。下段は高山花子氏。)



—— パネル1 ——

佐藤勢紀子氏(東北大学)

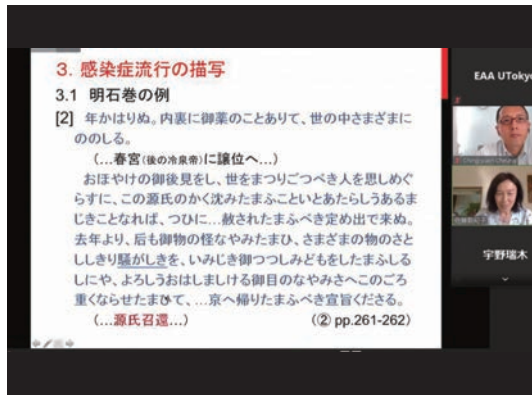
『源氏物語』が描いた感染症—「おほやけ」との関わりを中心に」

まず、佐藤勢紀子氏(東北大学)は「『源氏物語』が描いた感染症—「おほやけ」との関わりを中心に」と題して発表した。『源氏物語』には「しはぶきやみ」「わらはやみ」「世の中さわがし」という表現があるが、感染症の描写が少なく具体性を欠くのが特徴的である。感染症という病気は「おほやけ・わたくし」の病であって、その他の病気が「わたくし」の病気とされ、その背後にはジェンダー規範にもとづく物語叙述と物語作者の関心の所在にあることが指摘された。

宇野瑞木氏(EAA特任研究員)

「疫病と「書く」ということ—『方丈記』『日蓮聖人御遺文』」

次に、宇野瑞木氏(EAA特任研究員)は「疫病と「書く」ということ—『方丈記』と『日蓮聖人御遺文』」という題で発表をした。『方丈記』では、路上に「疫病」の流行により死者が溢れ、家に引き籠って留守と称して疫神から逃れようとする習俗があったことなど、都市災害の集合的な記憶や記録が載せられているのに対して、「松野殿御返事」(信者への手紙)



では、日蓮の表現の特徴は眺めるのではなく怒りをもって私自身の命をかけて現実に介入していくやり方だと論じた。

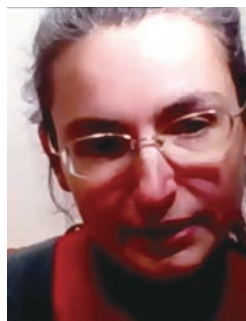
質疑では、佐藤氏に対し、紫式部の日記などには疫病の描写はあるのか、男の宿世はどういうことであるのか、などの質問があった。宇野氏に対しては、『方丈記』において「一人の被災者」という個人の視点をこえて、巨視的・映像的な描写を獲得できた要因はどこにあったのか、鴨長明は災害の現場についてルポルタージュのような文学的エクリチュールを書いたが、日蓮は災害をどのように記述したのか、などの質問があった。

———— パネル 2 ————

高山花子氏 (EAA特任研究員)

「壁越しのコミュニケーション——モーリス・ブランショと疫病」

高山花子氏 (EAA 特任研究員) は「壁越しのコミュニケーション——モーリス・ブランショと疫病」と題し



た発表であった。モーリス・ブランショの長編小説『至高者』(1948年)の中で、感染症予防による自宅待機の際に偶然に出来た壁越しのコミュニケーションについて記されており、その意味について報告された。

デンニツァ・ガブラコヴァ氏(ヴィクトリア大学ウェリントン)は「V. ソローキン『吹雪』(ロシア語、2010年)における予防接種とスケールの問題」という発表をした。大きい都会から小さい田舎へワクチンを運ぶという感染症を描く場面があるが、アナロジーの危険性と文学のもつ「繊細さ」についても検討された。なお、この小説の中国語訳があり、中国では評価されたことも紹介された。

質疑では、高山氏に対し、ブランショの小説とカミュの小説との差異はどこにあるのか。ガブラコヴァ氏に対しては、都会から田舎への道とは逆な方向で、永久凍土が解けて感染症の病原が辺境から中心へ持っていくのではないかというコメントがあった。

———— パネル 3 ————

潘文慧氏 (香港公開大学)

「マンガに見られる感染症」

潘文慧氏(香港公開大学)は「マンガに見られる感染症」と題した発表を行った。メディア研究・ジェンダー研究をしている潘氏は、サブカルチャーの視点から「漫画」もしくは「絵画」に描かれている感染症について紹介し、現在「アマビエ」が注目を浴びている中、庶民の知恵を改めて注意すべきだと強調された。



最後の木村朗子氏（津田塾大学）は、「コロナ禍と文学」という題で発表した。『震災後文学論』『その後の震災後文学論』などを書いた木村氏は、まだ「疫災後文学論」を書く予定はないとしたうえで、コロナ禍になって何が出版されたかについて紹介した。なお、コロナには終わりがあろうが、放射性物質の汚染にはまだ終わりが見えないという発言が非常に印象的だった。

質疑では、潘氏が取り上げた「漫画」は「お札」なのではないかという質問があり、また木村氏に対しては、コロナ禍を記憶するために、日記文学が多いという理由はどこにあるのか、などの疑問があった。

閉会の挨拶では、EAA 院長の中島隆博氏が、今、大学は閉ざされた場所になっているが、これからは、

開かれた大学すなわち無防備大学だけではなく、無防備哲学や無防備文学が必要となるのではないかと発言した。

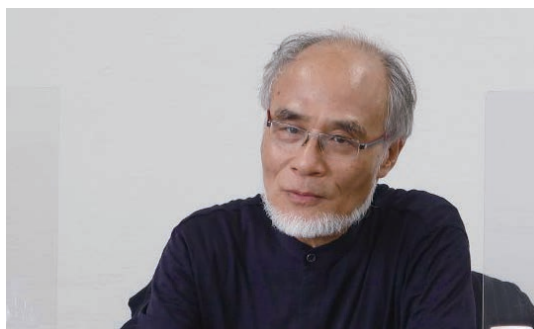
以上、オンラインワークショップについての短い報告だが、この研究会についてのブックレットが刊行されるので、ぜひ手に取っていただきたい。また、「哲学」と「文学」の次に、「歴史」というテーマでワークショップを開催する予定である。木村氏が指摘したとおり、私たちは、学者ではなくむしろ仕事の現場の人々の声に耳に傾けるべきだという考えから、「現場の人が語るコロナの歴史（仮）」という方向で調整している。

報告者:張政遠(総合文化研究科)

EAAダイアログ

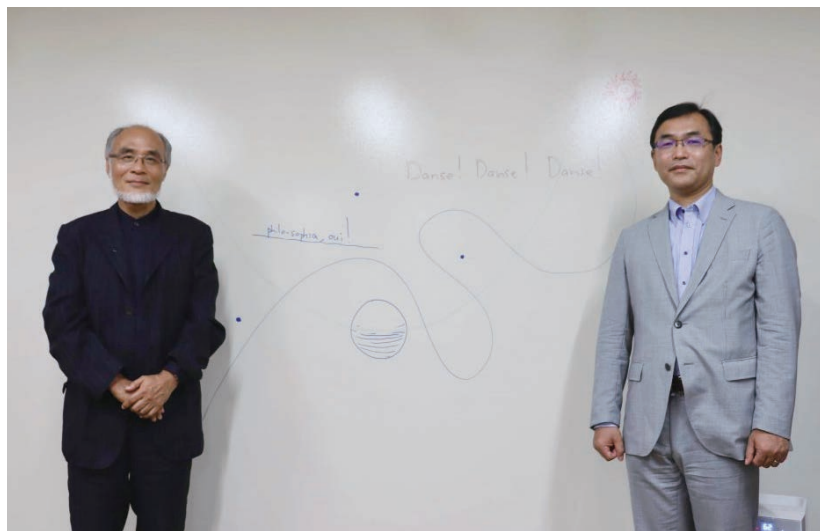
小林康夫氏 × 中島隆博氏

2020年8月31日



小林康夫氏

2020年8月31日、東洋文化研究所第1会議室にて、今年度は初めてとなる、第6回ダイアログが開催された。今回のゲストは小林康夫氏（東京大学名誉教授）で、EAA 院長の中島隆博氏と対談を行った。小林氏は東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻での「表象文化論コース」の創設に関わり、その全盛期を導いた主役で、2002年立ち上がった21世紀COEプログラム「共生のための国際哲学交流センター（UTCP）」のリーダーとして活躍さ



小林康夫氏（左）と
中島隆博氏（右）

れてきた。その情熱の動力は何であったのか。2015年東京大学を退官された小林氏をお招きし、研究と大学、人生について話を聞いた。ここではその内容を簡略に紹介したい。詳細は将来刊行予定であるEAAダイアログを参考にされたい。

本対談で中島氏は小林氏の幼年期の話を探った。これまでの研究テーマや今日我々が直面している危機・課題に関する話が主になるかと対談の内容を予想していた小林氏は驚く様子を隠さなかった。求められるのが「パーソナル」なものか「オフィシャル」なものかを確認してからは、「プライベート」な幼年期の話丁寧に語ってくれた。生まれた時の、敗戦直後の日本の状況や、貧しくて必ずしも幸せな家庭ではなかったが明るい子であったこと、小学生のころから理系に関心を持つ子供でありながら、絵を描き、図書委員として活動をしていた子ども時代の話が述べられた。

時代が全共闘で騒がしかったときに、東京大学に入学した小林氏は、当時の駒場についても淡々と語った。こうした激動のキャンパスを背後に、「遠くへ行く」ことへの渴望からフランス・パリへの留学を決心し、1977年3月にはじめてパリ訪問を果たし、1978年に留学に旅立った経緯を聞かせてくれた。そこで、小林氏はフランス哲学の中枢に触れることとなる。デリダやリオタールの授業を受講したこと、議論したこと、興味津々な話は続いた。その後、帰国し、電

気通信大学への着任が決まり、1986年には、しばらく離れていた駒場に戻る。そこから1990年代のnew academismのブームの中、アートと身体など中立的空間での学問の議論を展開するため、表象文化論を創設し、表象文化論の時代を導いたこと、そこから2002年に「哲学と国際化」を旗印にした「共生のための国際哲学交流センター（UTCP）」を立ち上げ、情熱が導いた楽しい研究活動を繰り広げたことを熱く語った。

時系列で区切りながら進められた対談の中では、大学のあり方や、科学テクノロジーの発展に伴う言語の課題（自然言語と数理言語を乗り越える言語の問題）、複合（語）というイシューなどの興味深い話が語られた。

時代にそった小林氏の話を見ると、「歴史」という言葉が自然に浮かぶ。その歴史は日本の戦後という時代、大学、とりわけ駒場という空間、そしてリベラル・アーツ、何より1人の人間が描かれたものであろう。最後に夢を語り、また「存在の冒険」を続けると述べた小林氏の話は大学に残っているものたちの希望にもつながるだろう。休憩なしの3時間を過ぎるダイアログであったが、その場にいた誰一人として時間の長さを感じなかった有意義な時間であった。

報告者:具裕珍(EAA特任助教)

羽根次郎『物的中国論』合評会

2020年9月3日

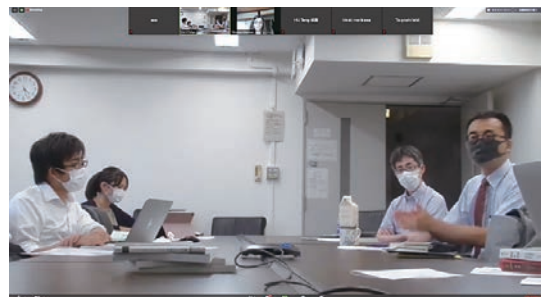
2020年9月3日、わたし（石井剛：EAA 副院長）が研究代表を務める科研費基盤研究（B）「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」との共催で、羽根次郎氏（明治大学）の新著『物的中国論——歴史と物質から見る「大国」』（青土社、2020年）の合評会を行った。

この科研費研究では、「中国がグローバル化する」という命題を「中国」と「世界（globe）」双方の変容プロセスであると理解した上で、今日わたしたちが経験しつつある現実にとって、その変容がどのような様相を呈しているのかについて、哲学的に問いつけている。2017年にスタートしたときには、この命題を「中国国内にグローバル化の影響が浸透する」という意味であると誤解されることのないよう、中国自体がグローバルな影響力を強め、それによって哲学のパースペクティブにも変化が生じていることを明らかにしたいのだと説く必要を感じていたが、現在のCOVID-19パンデミックが中国国内に流行の震源地を持っていたことが象徴的なように、中国という自明なようでいて実は捉えがたい、実体とイメージが渾然とした対象が、グローバルにその影響を浸透させて行っていることは、いまや多くの人にとって明らかになったように思う。感染者の隔離、ロックダウン、個人の行動履歴に対するテクノロジー管理など、中国政府が感染封じ込めのために行ったとされる対策が世界に知られた結果、「ヨーロッパの直面する課題は、中国の行ったことはより透明且つ民主的な方法で行われようと証明することである」（スラヴォイ・ジジック）という揶揄

すら登場したのだ。

しかし、わたしたちは「中国」について一体どれぐらいの事実を理解しているのだろうか。ジジックが言い、また多くの人もそうイメージしているであろう「中国の行ったこと」は、「中国の行ったこと」の現実をどこまでまともに捉えきれているだろうか？ そもそも、「中国とは何か？」という疑問に答えることすら難しいなかで「中国の行ったこと」という言表は、その主語が何を示しているのかすらも実はよくわからない。個々の主張に対してはさまざまな反論があるにちがいないし、反論が出てくるのが望まれるが、本書は、わたしたち読者に対して、「中国」なる対象へのアプローチのしかたを反省するように迫っている。「中国本」が数多ある中で、このような警告を発しているものは決して多くない。

会はず、わたしから本書全体に関する批評を提出した上で、著者の羽根氏に再応答していただくことに始まり、参加した全員が発言してディスカッションするかたちで行われた。参加人数は9名と少なかった分、2時間濃密な議論が繰り広げられたと感じている。詳細の紹介は省くが、書名に掲げられている「物」という漢字概念が含みこまざるをえない諸相の複雑な乱反射の一端もしくは数端にそれぞれの発言者がそれぞれのしかたで反応した。それらは、「人」であり、「文」であり、「音」であり、「数」であり、「科学」でもあった。『荘子』にある有名な「胡蝶の夢」が示すように、「物」はそれ自体「化」していくものだ。しかし「化」していくというのは単に「諸行無常」であり、したがっ



て畢竟するところ斉一であり、だから無に帰すものだ、ということにはならないだろう。たしかに「物」はある。「化」しながらあるのだ。そうした「物」として「中国」に近づこうとする試みは、同時に「我々自身の問題」（本書 295 ページ）を考えることにつながる。「普遍」とは外部にあるのではなく、同じ人間としての自分」（本書 16 ページ）から出発すべきだと述べる著者に共

鳴しつつ、前提を取り払って「中国がグローバル化する」ことについて考えるためにも、「物」は不可欠な媒介として機能するだろう。なお、イベントは対面とオンラインを併用するかたちで行われた。

報告者:石井剛(EAA副院長)

EAAオンラインワークショップ

石牟礼道子の世界をひらく

2020年9月4日

「石牟礼道子の世界をひらく」というイベントタイトルを見返したとき、言葉に素直であろうとすれば、いくつもの問いが浮かんでくる。「石牟礼道子の世界」とは、あらためてひらかれねばならないものなのか。それは閉ざされているのか。そもそも「石牟礼道子の世界」とは何か。いわゆる「作品世界」のことなのか、それとも別の意味があるのか。「世界」とは何を意味しているのか。私たちにとって「世界」とは何か——。こうした根本的な問いが問われるに至ったのが、今回の「石牟礼道子の世界をひらく」というオンラインワークショップであった。最後の問いは実のところ、総合討論においてEAA院長の中島隆博氏（EAA 院長）から発せられたものである。そしておそらく、こうした

問いも含め、あらためて言葉を交わし思索することが、「世界をひらく」ことになるのだ。ここで「ひらく」というのは、閉ざされたものを開放するというより、むしろ「世界」なるものを引き受けつつ、語り直し作っていくという、「開拓」のイメージに近いだろう。私たちの現在地点をそのようなレベルで確かめる、それほどの意義がこのワークショップにはあったと思う。

初めに中島氏から開会挨拶として、石牟礼道子の作品をどう読むかについては、これまで駒場で何度も取り組みがあったこと、そして今般のCOVID-19の流行に接して、水俣病事件という未曾有の事態を私たちにとっての根本的で普遍的な問題として捉え言葉にもたらした石牟礼の作品から学ぶことは、ますます必要



ウェビナー画面（上段右：張政遠氏、左：宇野瑞木氏、中段右：石井剛氏、中央：中島隆博氏、左：高山花子氏、下段：右・前島志保氏、中央：鈴木将久氏、左：山田悠介氏）

となっているのではないかということが語られた。

そもそも今回のオンラインワークショップは、突発的に開かれたものではなく、6月以来5回の研究会を経て開催されたものである。その研究会と今回のワークショップを中心となって企画・運営してこられたEAA特任研究員の宇野瑞木氏（EAA特任研究員）、高山花子氏（EAA特任研究員）からは、世界文学としての石牟礼の文学の普遍性と、同時にその翻訳の不可能性を引き受けながら、どのようにそれを読み広げていくことができるかという、一貫した関心の在り処が語られた。「石牟礼研究」として専門的に読み解くというより、様々な専門から寄り集まって、共に考えるということが主旨である。「ひらく」という語には手遊びのイメージも込められている、という説明が印象深かった。

——— 基調講演 ———

張政遠（東京大学）

「道の研究——わき道・被災した道・巡礼の道」

この「ひらく」ということに関して、また冒頭で触れた「世界」に関して、張政遠氏（東京大学）の基調講演は示唆的であった。「道の研究——わき道・被災した道・巡礼の道」と題された講演は、まさに交錯したいくつもの道を辿るように、様々な場所・話題に触れつつそれらをつなぐ道を示すものであった。これが、石牟礼の作品を単に分析するのではなく、私たち自身そのテキストを読んで思考するための導きになったと思う。

「わき道」に関しては、和辻哲郎の『古寺巡礼』から思索が展開された。和辻にとっては哲学が「本

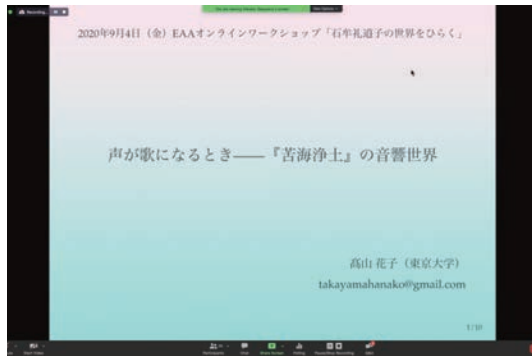
道」、文化研究や小説の創作などが「わき道」となるのかもしれないが、しかし一方が他方の上に位置づけられるといった序列化はおそらく不相当であって、重要なのは「精神」「感覚」などと明確に分けられる以前の、根源的な感覚のレベルを彫琢することなのだ。

道を歩み巡礼するということは、そうした次元での思索、そして実践に参与することである。ここで見逃すことができないのは、私たちは道において様々な他者と関わる、ということだ。そこには過去の他者も含まれる。巡礼には、土地に眠る記憶を繰り返しよみがえらせるという意義があるのだ。それがとりわけ、被災地を歩くときに際立ってくるということ、張氏のご自身の「巡礼」の体験から語られたのだった。

石牟礼にとって、あるいは石牟礼の作品を読む私たちにとって、この「道」の問題は非常に大きな意義を持つ。今日の私たちは道を、単なる交通経路としか見なさないかもしれない。実際、そのような道が整備されたことは、チツの隆盛とともに水俣の自然が破壊されていったことと軌を一にしている。だが石牟礼は、道の本来の姿を「花の道」という言葉のもとで見取ろうとする。石牟礼の生まれた家がそもそも石工であり、道路整備にたずさわっていたわけだが、かつては道が華やきの場だったのだ。そして、石牟礼にとっては文章を書くこともまた、様々な人が行き交い語り交わす「道」をつくることだったのではないか——そのような考察が展開された。

そうだとすれば、私たちが石牟礼の作品を読むということは、道を歩むことと類比的に考えられるだろう。張氏は、巡礼のパフォーマンス的側面に着目して“performance philosophy”の潮流を紹介されていた。その「パフォーマンス」は作品を読むことにも敷衍されうるだろう。ただし石牟礼の「道」は、単純に「花の道」なのではない。なぜなら石牟礼を含めて私たちはすでに、近代的な「道」と無縁ではいられないからだ。それは業のようなものですらある。だがおそらく、コメンテーターの前島志保氏（東京大学）が指摘されたように、様々な道が開かれている、ということが重要なのだ。1つの道ではなく、わき道を探りながら歩むということが、私たちにとって重要な意義を持つ。そうした可能性に開かれているということが「世界」





の豊かさを確保するのだと言えよう。

———— パネル発表 ————

続いての3名の発表は、いずれも特に「言葉」の成立条件ないし「言葉」の限界といった事態に注意を向けつつ、石牟礼のテキストを検討するものであった。ここでも、私たちはどのように石牟礼の記した言葉を読み、それに応答して語ることができるか、という反省的な問題意識が全体を貫いていることは、あらためて指摘しておくべきだろう。

高山花子 (EAA特任研究員)

「声が歌になるとき——『苦海浄土』の音響世界」

高山氏の発表では「声が歌になるとき——『苦海浄土』の音響世界」と題して、音・声・歌がどのように『苦海浄土』で言葉にもたらされているかが論じられた。石牟礼自身があるエッセイで人々の「歌う心」に関心を寄せ、それが失われつつあることを嘆いており、たしかに『苦海浄土』にもそうした「歌」に耳を傾ける姿勢が見て取れる。なかでも第2部のクライマックスでは、チッソの株主総会に患者たちと共に乗り込んで「ご詠歌」を唱和し、一種荘厳な舞台を現出させるのであるが、ここで私たちが気を付けねばならないのは、石牟礼が単に「歌う心」とその喪失とを対比しているのではなく、近代的な「騒音」も含めて、なにか新しい音の響き合いに対する聴覚を自ら持つようとしていることである。そこには、異他的な音声を重ね合わせる、仏教的な「声明」のような側面があると言えるかもしれない——これは総合討論を通じて展開



された点でもある。『苦海浄土』のなかにそうした多声性を見出すことが高山氏の読解方法であるわけだが、それはまさに、テキストによって可能になる音や声の響き合いに耳を澄ませる、という態度なのであると思われる。これは私の勝手な連想に過ぎないが、「反対するものが協調する、そして異なる(音)から最も美しい音調が生じ、万物は争いによって生まれる」という古いヘラクレイトスの箴言が予言のように思い起こされた。

山田悠介 (大東文化大学)

「「多重化」のレトリック——石牟礼道子『あやとりの記』から」

山田悠介氏(大東文化大学)には既にエコクリティシズムの観点から石牟礼の文学を取り上げ、特に「反復」のレトリックに着目して分析された著書があり(『反復のレトリック：梨木香歩と石牟礼道子と』水声社、2018年)、これまでの研究会でもそこから学ぶところが大きかった。今回の「「多重化」のレトリック——石牟礼道子『あやとりの記』から」と題された発表では、『あやとりの記』(幼少期の石牟礼の体験をもとにした物語であり「クリエイティヴ・ノンフィクション」とも呼ばれる)を題材に、その語りの構造と、場所の語られ方について綿密な分析を展開し、どのようにして物語が成立しているのかが論じられた。とりわけ興味深く思われたのは、自然の対象や場所についての表現が、テキスト上で様々な語り手の口をわたるように継承されているということ、そして自然ないし「場所」が、もはや単なる「背景」でも「客体」でもなく、むしろ物

語の中心を占めて語り手たちを従えているという構造である。私たちはここに、言葉を介して「世界」につながるという可能性を見出せるのではないか。その場合、「世界」とは空虚で形式的な容れものではなく、自然と人間との関わりが具体的な記憶として蓄積した、固有の場所として考えられねばならない。山田氏がさらに提起された、石牟礼文学において「むかし」を語るとはどういうことか、という問いは、創造的でありながら回顧的でもある、そのような「世界」との関わり方を示唆しているように思われる。

宇野瑞木 (EAA特任研究員)

『苦海浄土』における古代的形象の意味

宇野氏の発表は「『苦海浄土』における古代的形象の意味」と題して、その題の通りテキスト冒頭にあられる「椿の古樹」から末尾の「古代の巫女のように」と形容される女性の姿にいたるまで、『苦海浄土』においてどのように古代的なものがあらわれ、意義を担っているのか、それを考察するものである。ただし重要なのは、テキストの内在的な分析のみならずその成立史を踏まえて、どのように石牟礼の「古代的なもの」との関わりが成り立っているのかを検討している点であろう。たしかに石牟礼は自ら、水俣病患者の魂が「わたくしの中に移り住んだ」と記すように、巫女的な語りをもつ。ただ一方では、『苦海浄土』の成立以前に水俣病事件の発生と経過を年代的・論理的に記録した文章を書いており、また古老の話を聞いてそれを郷土史に練り上げるという主旨の連続座

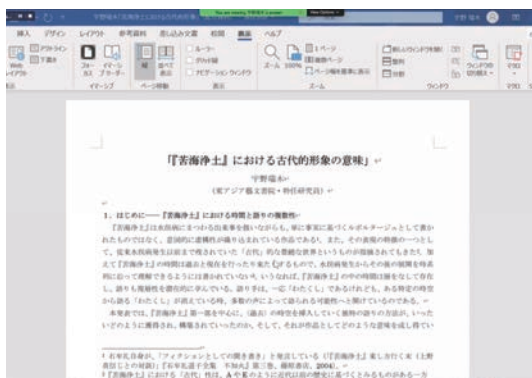
談会にも参与している。いわゆる巫女的な語りや石牟礼の特徴であったとしても、それは数あるなかから自覚的に選び取られた方法であると考えられるのだ。またそこには、中近世の「語り物」との親近性も見いだされる。それは石牟礼が『苦海浄土』という作品を、自らに語り聞かせる「浄瑠璃のごときもの」と述懐していることにも認められるが、同時に彼女の目指すところが、死者たちや言葉を奪われた者たちの声を生者の世界に響かせることであったことを顧みれば、それが琵琶法師の語りに非常に接近することは疑い得ない。これは高山氏が論じた「音」の問題にも関わる。石牟礼は、死者の声をよみがえらせつつも、決して生者の秩序に取り込むことなく、むしろ異他的なものとして響かせるのである。こうした「多声性」についての洞察は、テキストの分析にも絡んでくる。水俣病患者との最初の邂逅ともいえる場面において、作品冒頭で海や古樹に託して語られた風景が、「わたくし」の語りとして反復的に語り直されるのである。

多声性は、しかも最後に、読者である私たちに開かれる。『苦海浄土』第1部の最後は、両親を急性劇症型の水俣病でなくし、やはり水俣病による歩行失調を抱える弟を世話する女性が「草いきれのたつ古代の巫女のように、彼女はゆらりと立ちあがる」と形容され、遅ればせの見舞いに訪れたチツソ社長の手土産のようかんを切り分け「はい、どうぞ」と差し出す場面で終わる。その台詞のあとに地の文はなく、いかにも唐突に終わった感がある。しかしこれはおそらく、読者の私たちに「はい、どうぞ」と何かを託す言葉でもあるのだ。

—— コメントと質疑 ——

既に質疑の内容も踏まえた形でまとめてしまったが、コメントーターの鈴木将久氏（東京大学）、前島志保氏（東京大学）からのコメントをあらためて振り返り、そこから展開した話題を簡単に補っておきたい。

鈴木氏からはまず、石牟礼の表現の導きとして、谷川雁の存在が大きかったであろうことが補足された。しかし谷川の求める集団性と、石牟礼の考えるそれとの間にはおそらく差異がある。このあたりに注意を払わねばならない。そのうえで問いとして、第1





に言語以前の「音」の経験を、それでもなお言葉に（とりわけ文字に）するということはどのような意義をもつのか、第2に「むかしを語る」ことと、何らか人間の関係性をつくるあるいは取り戻すということにはどのような関わりがあるのか、第3に「古代」というとき、時間的な広がりのみならず、国境線をやすやすと超えるような空間的広がりをどのように考えるか、といったことが挙げられた。特に「古代」に関して宇野氏から、それが「古典」という権威的なものとは区別されているようだ、という応答があったが、この点も非常に興味深い。

前島氏からは、ご専門がジャーナリスティックな文章を扱うものであることを踏まえて、そうした言葉が扱いきれないような事態に面し、どのような伝え方が可能であるのかということが石牟礼の作品を読むなかで考えさせられることである、ということに加えて、次のようなことが指摘された。第1に、声や音の問題はまさに今日の私たちの生き方を見直す観点となりうる、例えばちょうど New York Public Library では、コロナ禍以前のサウンドスケープを公開するという企画を行っていたが、ひよっとすると私たちはまさに新たな聴覚の涵養を求められているのかもしれないということ、第2に『あやとりの記』における語りの主体の多重性の分析は、おそらく『苦海浄土』に関しては、患者の言葉になら

ぬ言葉を聞き取るという営みに通ずるものであろうということ、第3に石牟礼の語りの「語り物」的性格は、しかし一方で中世の語り物とは異なる点があるだろう、それはまさに多声性のあり方に関わっているのではないかと、といったことである。実のところ、『苦海浄土』第1部末尾の台詞については、前島氏の指摘から、私たちへの問いかけとしても受け止められるだろうという話が展開されたのだった。

コメントーターの先生方への再応答、その後のフロアとの質疑も含めて、報告しきれぬほど話題は広がり深まりを見せた。この報告の冒頭に「石牟礼道子の世界をひらく」とはいかなることであるのか、という問いに触れたが、これに関して、司会の石井剛氏（EAA 副院長）が会の最後にコメントされたことを紹介しておきたい。即ち、石牟礼は彼女の言葉によって、私たちに対してある世界を開いてくれている——それが『苦海浄土』第1部の「はい、どうぞ」という結びに示されている——のだが、私たちはここで、石牟礼から贈り届けられたものを受け止め、あらたに世界を開きつつある、道を作りつつあるのである。世界をひらくとは実に、道を歩むことに他ならない。それは単に定められた道に従うことではないが、しかし放縦に新奇なものを作ることもない。むしろ先蹤を認めながら、わき道を発見しつつ行き交い、そのような交流の道筋をつけることなのであろう。私としては石井氏の司会をはじめとする「導き」のおかげで、この会のあいだ複雑な道を歩みながらも、道に迷うことなく共に歩みおおせたように思う。ここでの報告もすでに、そうした導きのもとで追思考したことに他ならない。もちろん、同道しながら何を考えていたかということは、それぞれ別個に抱えるべきものであろう。

報告者:宮田晃碩(東京大学大学院博士課程)

田村正資「空間の実存的特徴」

日本メルロ=ポンティサークル第26回研究大会

2020年9月5日

2020年9月5日および6日にオンラインで開催された「日本メルロ=ポンティサークル」の第26回研究大会にて、EAA 特任研究員の田村正資が研究発表を行いました。フランスの哲学者・現象学者であるモーリス・メルロ=ポンティ（1908年-1961年）は、客観的に考えられた空間の特徴と私たちが実際に経験している空間の特徴を区別し、後者の現象学的な記述によって私たちの世界内存在としての在り方を解明しようとしていました。「空間の実存的特徴：1953年講義『感性的世界と表現の世界』から」と題された田村の研究発表では、モーリス・メルロ=ポンティの

『知覚の現象学』（1945年）および未邦訳の講義録『感性的世界と表現の世界』（1953年）における「興行き」と「運動」についての現象学的記述から、「対面」と「共存」という世界内存在の2つのアスペクトの剔出が試みられています。また、学会2日目には、酒井麻衣子氏（中央大学）がオーガナイザーを務める「メルロ=ポンティと発達心理学・教育学」というシンポジウムが開催され、盛況のうちに終了いたしました。

報告者:田村正資(EAA特任研究員)

EAA Summer Institute 2020

Ice-breaking Session

2020年9月6日



East Asian Academy for New Liberal Arts
Summer Institute 2020

Theme:
Personal Thoughts and Experience under the Pandemic
感染症流行の見聞と経験
疫情的見聞と経験

Time & Date:
Ice-Breaking Session:
15:00-16:30 JST/14:00-15:30 CST
September 6, 2020
Lectures & Group Work:
September 7-8, 2020

Place:
21KOMCEE
west K303
Komaba Campus, UT

Lectures & Texts:
"On Giorgio Agamben's Discourse on Covid-19"
Qin Wang, EAA Project Lecturer
"Ouyou xinying lu jielu"
欧遊心影録節録"
Yongjie Zhang, PKU Professor
Zhesheng Ouyang, PKU Professor

Language:
English
Chinese & Japanese, if necessary

EAA
東アジア新文書院

2020年9月6日、東京大学駒場キャンパス 21KOMCEE West K303 にて、北京大学と東京大学による2020年度の合同講義「EAA Summer Institute 2020」のためのIce-breaking Sessionが開催された。集中講義のいわば前夜祭として緊張をほぐし、翌日から行われる講義とグループワークにおける両校の学生の協同を促すため設けられた機会である。Sessionはまずはカジュアルな雰囲気での自己紹介から始められた。

東京大学側の参加学生には対面参加あるいはZoom経由でのオンライン参加を選択してもらった。スタッフにも予想外のことであったが、多くの学生が対面参加を希望し、久方ぶりにキャンパスに学生が会える機会となった。ある1年生の参加学生は、これが初めてのキャンパスでのイベント参加であるということであった。感染防止対策を念頭に緊張していた



スタッフも、集った学生たちの楽しげな交流のさまにとっても報われた思いがした。この Summer Institute が大学の大学的な知的交流のありかたを体験してもらえる機会となったならば、EAA スタッフの一員として非常に嬉しい。

北京大学側の参加学生たちはプロジェクトスクリーンに投影された Zoom 画面経由でやはり自己紹介をしてくれた。本来対面で席を共にする予定であった北

京大学の学生さんたちからも、オンラインでこのような機会がもてたことが非常にうれしい、とのコメントをもらうことができた。

両校の学生による一通りの自己紹介ののちは自由交流の時間となった。それぞれに交換した WeChat を通じ早速北京大学の学生さんとの連絡を取り始めるのを見て、非対面でつながりあう新しいライフ・フォームの一端を見たような気がして新鮮に感じられた。

翌日から始まる EAA Summer Institute 2020 がさらに楽しみになった時間であった。この日は自由交流後に解散となったが、まだキャンパスに慣れない1年生のために他の上級生たちが自主的に時間を割いてキャンパス・ツアーを行ってくれていた。大学なる場で人々がつながり・つなげあうサイクルが続いてくれることを切に願ってやまない。

報告者:具裕珍(EAA特任助教)
前野清太郎(EAA特任助教)

EAA Summer Institute 2020 (Day 1)

2020年9月7日

2020年9月7日、東京大学駒場キャンパス101号館のEAAセミナー室にて、東京大学と北京大学による2020年度のSummer Instituteが開催された。コロナウイルス感染予防に配慮しつつ、北京大学側参加者はオンライン経由で、東京大学側参加者はオンラインないし対面の2方式で参加した。折からの台風10

号で不安定な天気ではあったが、今年新入学の学部1年生を含む5名の学生が来場してくれた。これまで当たり前だった対面でのイベント実施が難しい現状の中、今回のような機会は誠に貴重であり、ソーシャルディスタンス対策をとりつつも中島隆博氏 (EAA 院長)、石井剛氏 (EAA 副院長) はじめスタッフ一同で



喜びを共有した。

互いに簡単な挨拶を行ってオンライン参加者も揃ったところで、まず、中島氏が英語による開幕スピーチを行った。20世紀初期に世界を大きく変えたスペイン風邪の100年後の世界を私たちは生きており、現在私たちは同じような歴史的变化を目撃している。この現状をふまえ中島氏は、今ここで「感染症流行の見聞と経験」をテーマに集まり、議論することの大きな意義を強調した。こうしたグローバルなレベルにおける再構築を、我々はどう生き抜けばよいのか？ 諸々の挑戦をどう乗り越えていけば良いのか？ 「パンデミック」とは、古代ギリシャ語で「全人類」を意味する“pan（すべての）” + “demos（人々）”に由来する言葉である。中島氏は今回の institute を通じ「全ての人」に寄り多い議論を行ってもらうことへの期待を語った。

講義の開始に先立って、オンラインの参加者を背後のスクリーンに映し、対面参加者の一同がスクリーンの前でポーズをとる興味深い記念撮影が行われた。続く講義は、欧陽哲生氏（北京大学）と章永樂氏（北京大学）による2講義であった。2人が共にテーマと

して選んだのは、近代中国の思想家・梁啓超（1873年-1929年）の『欧遊心影録』である。スペイン風邪が流行する中、第一次世界大戦がもたらした前代未聞の破壊と殺戮は、それまで自明であった近代ヨーロッパ文明の正義・正当性を強く揺さぶり、中国において、西洋に倣った近代化を支持していた梁啓超も、これにより思想的転換点を迎えることとなった。『欧遊心影録』は、大戦後のヨーロッパにおける彼の見聞と感想を記したものであり、出版後、大きな物議を引き起こすこととなった。東西文明の優劣や社会問題などをめぐる当時の論争は、コロナ危機への対応によって浮き彫りになった中国と欧米諸国の違いをめぐる現代の議論に通じるものがある。欧陽氏は、梁啓超の思想転換や微妙な立場について、学生達に詳しい歴史的解説を行った。続いて章氏は、梁啓超の経験をもとに戦後の世界秩序の再構築について論じた。科学主義と倫理の関係や、古代中国に由来する「天下」の世界観などについての検討は、コロナ前の我々の「常識」を問い直すような刺激的なものだった。

中国語・英語が交差する高密度な講義は、若い学生達にとって大きな刺激ではあったろうが、試練でも



あったろう。10分ほどの休憩時間、EAAのスタッフは学生達を2階の控え室に案内し、飲み物とお茶菓子で短い雑談を楽しんだ。

第3の講義は、王欽氏（EAA 特任講師）による「啓蒙」をテーマとするものだった。今回のコロナウイルスの被害を著しく蒙ったイタリア。そのイタリアが生み出した当代随一の哲学者ジョルジョ・アガンベン（Giorgio Agamben）による一連のコロナウイルス評論を紹介し、動物とは一線を画すはずの人間の「生のあり方」を問うた。感染による生物的な死に脅かされ、

自由をいとも簡単に手放す人は、果たして何なのだろうか？ ホブス、カール・シュミット、ジュディス・バトラーなど、近代から現代に至る多彩な議論を交差させ、王氏は聴衆の思考を促した。

全ての講義が終了した後、学生達による自由な質問と討論が行われた。民主主義とナチズムを比較するアガンベンのショッキングな発言を皮切りに、人間の「生き方」についてさらに掘り下げて対話を行い、現在の私たちが置かれている状況についての議論がなされた。インターネットにしがみついている人々は、自分たちの一挙一動をデジタルに記録している限り、自由からはほど遠いのである。

翌日は、東京大学と北京大学の参加者が5グループに分かれ、協力してそれぞれプレゼンテーションを行った。相当タフな日程ではあったが、体は遠く離れていながらも同じ課題をともに思考する作業は、この時期においては貴重な経験となったはずである。

報告者:張瀛子(EAAリサーチ・アシスタント)

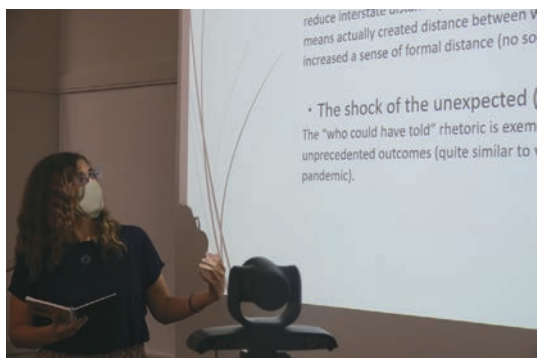
EAA Summer Institute 2020 (Day 2)

2020年9月8日

2020年9月8日のEAA Summer Institute 第2日目は、参加学生によるプレゼンテーションが行われた。参加者が日本と中国の隔たった場所にいるうえ、日本側も対面式とオンライン参加の2方式を併用していたことから、各グループは初日レクチャー後、チームご

とにオンラインで連絡をとりあってプレゼンテーション準備をすることになった。当日は20名の参加者が5つのグループに分かれ、パンデミック時代の見聞とその感想について、初日の講義と関連させて発表した。

1つ目のグループは「ディスタンスとは何か」につ



いて議論を行った。ハイデガーによると、ディスタンスとは人間がそこから抜け出そうとした時にこそ成り立つものである。これを踏まえると、現在のソーシャル・ディスタンスや梁啓超のヨーロッパ経験、アガンベンの言う緊急事態も乗り越えなければいけないディスタンスとなる。今回の Summer Institute で体験したような、具体的アピランス（出席）とプレゼンス（存在）の分離が可能となりうる状況は、今後のディスタンスを克服するためのヒントになりうるかもしれない。それをふまえると、手段としての知識・学問はどのような役割を担うことができるのか、という問題が提起された。コメントでは、ディスタンスに対する個人的経験の重要性、また知識に対する理解がわれわれの連帯の形に大きく影響することが指摘された。

2つ目のグループは、コロナの後の世界の展望をめぐって発表した。このチームは新型コロナウイルスにまつわる各種議論における「何なのか（What is it）」よりも「どうなるべきか（What should it be）」へ注目するとし、現在の国境封鎖によってもたらされた従来の国際秩序の危機を、いかに回復していくかを問題として取り上げた。プレゼンテーションでは中国の趙汀陽氏（Zhao Tingyang）が提唱している「天下システム」に言及がなされ、そのモデルがはらむ中国中心と「無外」の危険性にふれつつも、可能性のある解決策として注目するとの論が展開された。プレゼンテーション後の講評では「天下システム」の可能性とは別に、その現実性について考える必要があると指摘がなされた。

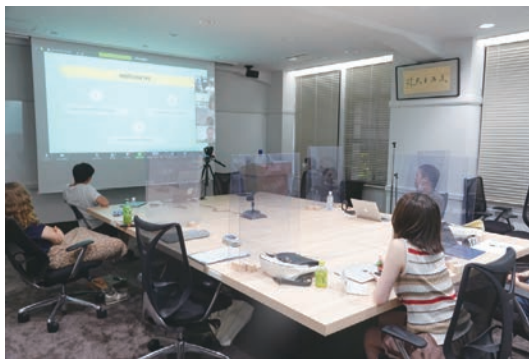
3つ目のグループ以降は、期せずして、個人の体験を語る内容がメインとなった。詳細は省くが、以下、

それぞれのグループのテーマについて紹介する。3つ目のグループはコロナ時代への反抗としてのサイバー旅行記を披露した。日本と中国の政府の対策、個人の体験を挙げて、大きな時代の変動の捉え方について各自の考えを述べた。プレゼンテーション後の講評では、自分の経験はときに事実より未来のために役に立つとのコメントがなされた。

4つ目のグループは中国の厳しい都市封鎖、日本の緩い対策、そしてアメリカでさらに浮き彫りとなった党派対立（partisanship）を取り上げた。本グループのメンバーは全員オンライン参加で、討論もかなり苦勞しであろうこのグループのように、今後オンラインでのコミュニケーションをどう活かすべきかが問われていくであろう。

5つ目のグループは、コロナ時代の技術をテーマにした。グループのメンバーからは SNS やビデオ通話があっても、一人暮らしの時間が辛く厳しいものであるという意見が挙がった。コロナ対策は技術と密接不可分のものであり、そこからは技術による全体主義の危惧が徐々に現実のものとなっているといっても過言ではない。これをふまえ、コロナ対策やライフスタイル、人間のコミュニケーションにおいて技術をどう利用していけば良いのかという問題が提起された。プレゼンテーション後の講評では、技術による媒介手段の変化は常に行われるものとの指摘がなされた。そして重要なのは、その表象を通して問題の本質をつかむ能力を培うこと、そして個人の経験に基づいて着実に思考することである、という。

全てのプレゼンテーション終了後、教授陣から全体に対しての講評がなされ、2020年 Summer Institute



は幕を閉じた。報告者個人の経験では、EAAでの対面での仕事は2月のEAA特別セミナー「わたしたちの三十年後——世界と学問」以来であった。その半年余りの時間は「自分のための時間」ではあると同時に、やはり他人と隔離されている状態でもあった。Zoomやほかのプラットフォームでも授業と会話ができるが、それは音声のみ、あるいは画面だけを通して行われるものであり、人を感じ取るにはまだ不十分

だと感じている。そうした中で、今回は久しぶりに人の顔を直接見て会話をすることができたのが楽しかった。コロナは未曾有の「ディスタンス」をわれわれにもたらしたが、それを乗り越えるすべての努力は未来の糧になると切に願っている。

報告者: 胡藤 (EAAリサーチ・アシスタント)

第4回 「文学と共同体の思想」読書会

2020年9月12日

2020年9月12日にZoomにて開催されたEAA「文学と共同体の思想」読書会は、今年2月に刊行されたばかりの山本聡美氏の『中世仏教絵画の図像誌——説経絵巻・六道絵・九相図』（吉川弘文館、2020年）を取り上げた。

これまでの読書会では近代以降を対象とした研究を

取り上げることが多かったようであるが、今回は日本中世の仏教美術という、メンバーに馴染みの薄い分野でもあったため、報告者（宇野瑞木：EAA特任研究員）から、まずは本書の「序文」にそった形でその研究対象と方法論、また全体の構成について確認を行った。本書は4部構成で、「経説絵巻論」「宝蔵

絵論」「六道絵論」「九相図論」となっている。そのうち今回わたしたちが中心的に議論したのは第4部にあたる「九相図論」であった。

「九相図」とは中近世日本で描かれた、死体が腐敗し白骨となるまでを9場面を表す仏典を典拠とする図像のことである。もともと仏典の中で説かれる「九相観」という肉体への執着を滅却するための死体が朽ちて骨になるまでを観相する修行に用いられる図像であった。山本氏の論考では、その仏典における九相観、敦煌本など中国で作られた九相詩に触れた上で、とくに日本での九相詩の出現からその絵画化、さらには世俗化の過程を現存する美術作品を中心に論じ、六道絵や餓鬼草紙、病草紙などの仏典にまつわる作品群の中に位置づけている。

日本における九相図の生成という点で重要なのは、いずれも鎌倉時代に作製された九州国立博物館蔵「九相図巻」と聖衆来迎寺蔵「六道絵」の「人道不浄相幅」である。山本氏は両者の比較をする中で、『摩訶止観』に基づく観想の補助具の絵画としての前者から、後者に至って四季の表現と結びつき無常観が付与され、六道絵に組みこまれ、生から死への移行を示す図像として新しい意味を担うようになった点について論じている。

特に注目されるのは、死体が女性として描き出される点である。従来この点について「男性出家者が女性の醜い屍体に思いを巡らすことで淫欲の心を抑える」という煩惱否定（女性否定）の経説を踏まえたイメージであるとの指摘がなされてきたが、山本氏は男性からのみならず、女性自身もその享受者となった側面に着目している。

すなわち九相図は高貴な女性の教化をも担い、女性はその絵を見て自身の不浄の身を懺悔したというのである。また、女性が不浄の肉体をさらけ出すことで他者の発心を導く聖性を帯びていく、という側面もあったという。室町から近世にかけては、九相詩絵巻がバリエーションを獲得しながら、小野小町や檀林皇后など特定の女性の名を冠した九相図が生まれていった。

議論においては、まず本書の方法論として示された「図像誌」と、「九相図論」（第4部）の末尾に

出てくる「生命誌」という表現との関係が問題となった。「九相図論」の末尾では、中近世の九相図の展開が近代にいたって途切れた後、今再び現代美術作家によって九相図がモチーフとして取り上げられ新たな命が吹き込まれている例が示されている。特に日本画家・松井冬子の「浄相の持続」が訴える問題は豊かであり、山本氏の筆もこの部分に来て一気に現代的な死を取り巻く私たちの状況というものを鋭く洞察するものとなっている。いわば、そこまで図像誌（あるイメージが、別の意味を孕んでいく歴史的過程を含めて記すということ）という枠組みで取り上げられてきた諸論は、ここにきて私たちの生命とは何か、肉体とは何か、死ぬということはどういうことか、という根本的な問題に向かうのである。そこにおいて飛び出す「生命誌」という「図像誌」のさらなる言い換えは、第1部から第3部までの美術史の基本的な方法論に則って、注意深く同時代的コンテクストの中でなされた図像読解から一步踏み出した次元をのぞかせている。そのような視座から見返すならば、本書で扱われた図像群は、餓鬼草紙、病草紙、放屁合戦絵巻にしても六道絵にしても、人間の肉体（それは老い衰え朽ち果てるものである）や死という側面から、生命を照らし出すものばかりである。報告者の宇野は、本書で設定された「図像誌」という枠組みは、イコノグラフィーとイコノロジーを踏まえた方法論で、図像の表の意味を超えた意味内容をも読みだす方法を内包しているが、近代美術の学術の対象から疎外され忘れられた九相図を、六道絵や他の経説絵巻などの系譜とともにその俎上に置くという意欲的試みであると共に、九相図から拓けた生命誌という視座からそれらを再度眺め直す可能性をも示した書といえるのではないかと指摘した。

さらに議論は本書における「文物」という側面から仏教の導入を見る視点に及んだ。佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）は、仏教導入時、激しい反発や政治闘争があったこと、土着の信仰・死生観との関係、また既に国際都市であった状況など日本の古代史を踏まえた上で、仏教が「文物として導入された」とは言い切れない点を指摘した。さらに佐藤氏の専門である南方熊楠の粘菌研究にも言及があった上で、

細菌の活性化というレベルから別の生命へと移行していくサイクルの視点との関連が示された。

また建部良平氏（EAA リサーチ・アシスタント）は、死という表象不可能な事態を表象するという特異な位相にある「九相詩」に着目し、死というものが今よりずっと身近であった古代に死というものがどのように見つめられ、捉えようとされているのか、という点に留まって思考することの必要性を喚起した。そこからインドの死生観の問題や災害が続いた中古中世の日本の状況なども議題に上がった。

他にも議論が活発になされたが、いずれにしても、九相図という近代以降の美術史における取捨選択において、一度は見捨てられたモチーフについて、経典絵巻や六道絵の系譜の上に置き、正当に評価し直すという基礎的な作業を行った点、その上で仏教教

説のみならず、文学における展開との交叉を視野に入れて論じている点において、本書は高い学術的意義を有するものといえるであろう。今回、報告者は日中を中心とした説話文学の専門であるが、その他のメンバーは、王欽先生をはじめとして東アジア近現代哲学、環境思想、認知科学など全く異なる分野の専門家であったにもかかわらず、議論が盛り上がり長丁場となった。このことは、本書のテーマ、とりわけ九相図というものが、美術史の枠組みや時代を超えて、死とは、肉体とは、美とは、生きるとは、といった根本的問いを現代のわたしたちに投げかけるものであることを物語っていると思われた。

報告者:宇野瑞木(EAA特任研究員)

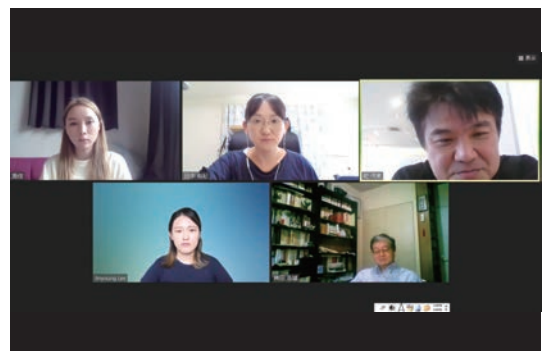
第1回 「東アジア音楽思想と術数」研究会

2020年9月14日

2020年9月14日、第1回「東アジア音楽思想と術数」研究会（オンライン）が行われた。この研究会は、日中韓の音楽史を知るための主要テキストを講読し、その音楽思想の背後にある数の調和思想について考察することを目的としている。東アジア藝文書院と科研費（挑戦的研究（開拓））「機械学習を用いた東アジア数理調和思想の実証的研究と共生倫理の検

討」との共同開催である。参加者は、伊東乾氏（情報学環）、稗田浩雄氏（未来工学研究所、東洋琴学研究所）、李珍咏氏（学際情報学府修士課程）、陳施佳氏（学際情報学府研究生）のほか、本ブログの報告者・田中有紀（東洋文化研究所）である。

今回の研究会では、『楽学軌範』をとりあげた。まず李珍咏氏が、韓国音楽史における『楽学軌範』



の位置付けについて紹介した。朝鮮時代前期になると、礼楽思想を基盤に、新しい君主や王朝をたたえる音楽が模索されるようになる。第9代成宗の時代には、成侃を中心に、韓国最初の音楽理論書である『楽学軌範』が編纂された。全9巻から成る『楽学軌範』は、音楽を雅楽・唐楽・郷楽に分け、音律論や制度、楽器の歴史や、楽を行う際に用いる衣装などを整理したものである。韓国音楽史を知るためには必須の文献であるといえよう。日本の蓬左文庫に所蔵されているテキストが現存する最も古い版本だと考えられ、影印本が出版されている。続いて田中有紀が、『楽学軌範』の構成について説明し、成宗期の国楽整理について簡単に紹介した。世宗8年以降、中国系雅楽と雅楽器の整理が行われ始め、成宗8年には、鄭麟

趾が『律呂新書』の学習を命じられ、朱子学の音楽理論書の本格的な受容が行われた。また、高麗以来の楽歌や楽器の数多くが改変され、『楽学軌範』が編纂された。

成宗期の音楽への取り組みは、中国伝来の音楽とどのように向き合い、いかにして「自分たちの音楽を作っていくか」という模索であると言える。本研究会では今後数回にわたり『楽学軌範』を講読する中で、中国雅楽の伝統を着実にふまえつつも、一方で自分たちの伝統と向き合い、彼らがどのようにして、新しい「国楽」を作ろうとしたのかについて、様々な角度から分析していきたいと考えている。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

第6回 石牟礼道子を読む会

2020年9月14日

2020年9月14日、Zoom上にて第6回「石牟礼道子を読む会」が開催された。参加者は、前島志保氏(東京大学)、張政遠氏(東京大学)、山田悠介氏(大東文化大学)、宇野瑞木氏(EAA特任研究員)、宮田晃碩氏(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)、それから報告者の高山花子(EAA特任研究員)の6名であった。発表は高山が担当し、サブテキストは以下を選んだ。

サブテキスト

1. 石牟礼道子「この世がみえるとは——谷川雁への手紙」(1964年9月執筆)、『石牟礼道子全集・不知火』第1巻、藤原書店、2004年、242-244頁。
2. 石牟礼道子「高群逸枝との対話のために——まだ覚え書の「最後の人・ノート」から」(『無名通信』3号、1967年9月、および『無名通信』5号、1968年3月)、同上、290-299頁。
3. 森元斎『国道3号線』第3章「炭鉱と村」、共和国、2020年、115-173頁。

引き続き第2部「神々の村」を読むにあたり、9月4日(金)のEAAオンラインワークショップ「石牟礼道子の世界をひらく」を経た上で、わたしが改めて確認し、再考したかったのは、1970年代の石牟礼の執筆状況である。過日のワークショップでは、鈴木将久氏(東京大学)より、谷川雁の「原点が存在する」を補助線とする形で、谷川主導のサークル村へ石牟礼が参加し、表現者としてのきっかけを得たことが改めて指摘された。じっさい、石牟礼自身も、詩人になりたいと思い、谷川の所属する共産党に入ったことを述べているが、いっぽう、『苦海浄土』第2部「神々の村」の成立過程は、第1部と比べると錯綜しており、端的にいうと、第2部で言及される具体的な雑誌媒体は、『サークル村』ではなく『熊本風土記』である。発表では、サブテキストの読解から、石牟礼も谷川も共産党の「残党」と呼ばれ、かつ石牟礼は共産党だけでなく、サークル村からも「異物」であると感じていた1960年代当時の様子を確認し、また、谷川自身もサークル村から離れて大正行動隊を組織するように、水俣病や、安保闘争、労働争議など、激しく



石牟礼道子句集『天』
(天籟俳句会、1986年)
表紙(個人蔵)



石牟礼道子句集『天』
(天籟俳句会、1986年)
扉(個人蔵)

移り変わる社会情勢にもなつて、石牟礼だけでなく、谷川もまた新たな共同体ないし集団をもとめて、試行錯誤を繰り返して、大きく変化をしていたことを確認した。そして、第2部が掲載されていた『辺境』には上野英信と森崎和江も頻繁に寄稿をしていたこともみたと、第2章「神々の村」に描かれる理想の共同体と個人のありようを探る石牟礼自身の葛藤が、当時の共産党と文学の関係から考察できるのではないか、と結んだ。

ブレインストーミング的な短い報告であったが、参加者からは、渡辺京二との出会いの大きさの指摘や、谷川との差異については「故郷」との関わり方に溝があったのではないか、というコメントがあった。そして、初期の文学活動の中心であった短歌創作につ

いては「詠嘆」の切り捨てを試みながらも、1970年代から1980年代にかけて天籟塾とのかかわりから俳句を作っていた状況が話題に上り、最終的に谷川が「村」と重ねる形で読解した宮沢賢治文学と石牟礼との関係が議論された。

単に複数の異なる性質のテキストが組み合わせられているという意味には全くとどまらない、石牟礼自身の文学テキストの「声」の多重性の根源に迫ることが、大きな課題として浮上したといえるだろう。また、石牟礼にとって「詩」を作ることがどのような文学的営為であったのかを、『苦海浄土』以外のテキストとともに考える必要性も明らかになったといえるだろう。

報告者:高山花子(EAA特任研究員)

UTokyo-PKU EAA

「東アジア教養学」プログラム生交流会

2020年9月18日

EAAが開講する「東アジア教養学」プログラムでは2020年度A Semesterより4名の学生を北京大学からオンラインで受け入れる。4名の学生は必修ゼミ授業「東アジア教養学理論」、「東アジア教養学演習」ほかプログラム科目を履修して、他の学生たちとともにテキストを読み、議論を行っていく。授業開講

を見据えたアイスブレイクとして、同時に学生間のネットワーキングの機会の提供のため、2020年9月18日、「学生交流会」の機会をセッティングした。キャンパスに対面が集った学生とオンラインでつながる学生が交流するハイブリッド方式のセッティングである。

冒頭、石井剛氏(EAA副院長)よりスタッフ側から



この機会を設けた背景について説明があった後、進行を学生へ引き継いで交流タイムとなった。「東アジア教養学」プログラムは日中英の3言語トライリンガルプログラムであるが、トライリンガルゆえに生じる出来事もそこにはある。どの言語を中心に話すか、に戸惑うのだ。会の進行を快く引き受けてくれた学生たちも戸惑いがあったようで、当初は英語での司会進行を行っていた。しかし10-20分もするうちにいくぶんと場の雰囲気も開けてきた。各々の自己紹介を交えながら、時に自主的なゼミナール、あるいはサロンのように自由闊達に人文的・社会的な議論が展開されるようになっていった。

突然にして開けたこの場の面白さは、いずれの学生も英語・中国語・日本語を適宜にスイッチングしながら意見を交わしていたことであろう。これをあるいはピジン的な過渡の状態、「中途半端な」(ダブル/トリプル・リミテッド)状態であると僂目に見る人もあ

るかもしれない。けれども自身立ち会っていた報告者はそのようには思われなかった。もとより3つの言語で語りあう行為そのものに、スイッチングによる絶え間ない翻訳を行う必然性が伴っている。たとえば「ポストコロナの建築(なるものの概念)はどうなっていくか」をめぐる議論では、日本語ではあまり用いられない漢語「営建」に関して「建築」「architecture」「construction」を交えながら、学生同士で丁寧な概念のすり合わせが行われていた。リベラルアーツの知的な土台あるがゆえに、3言語を交えた概念のすり合わせが可能となる。トライリンガル・リベラルアーツ教育の新たな試みには、新しい知的経験の機会がふんだんに秘められている。

交流会は当初の予定を超えて2時間にわたって続いたが、もちろん高度に学問的な議論だけをしていただけではない。お互いの旅の経験や趣味の話、各自のさまざまな思い入れについても話が弾んだ。とくにこの日は4年生の参加学生もいたため、ときに迷いを含んだ将来の展望もしばしば話題となった。卒業後一旦社会に出たうえで、いずれ大学院に戻り、ふたたび社会に出る、というような将来像を語ってくれた学生もいた。今はまだ小さいこの知のコミュニティが、やがて世代も国境も超えてつながりあう知のソサイエティへと成長していくことを願っている。

報告者:前野清太郎(EAA特任助教)

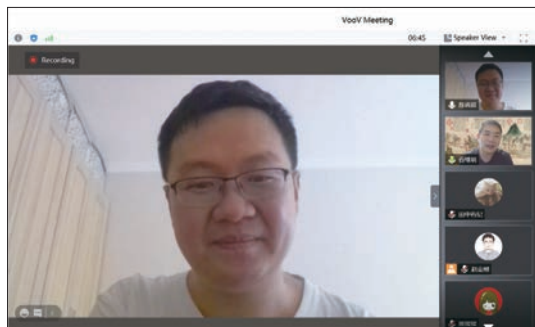
第2回 日中韓オンライン朱子学読書会

2020年9月19日

2020年9月19日の日本時間16時より、第2回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。第1回同様、EAAのほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心、科研費基盤研究(B)「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」との共催である。今回は谷継明氏(同済大学)が司会を務め、陳叡超氏(首都師範大学)が2020年5月に出版し

た『司馬光易学宇宙観研究:以『潜虚』為核心』(北京大学出版社)について報告を行った。

北宋の思想家である司馬光の『潜虚』は、楊雄『太玄』にならった易学著作である。未完だったためテキストは完全なかたちで残っておらず、後人が補った部分もある。『潜虚』には8つの易図(「気図」「体図」「性図」「名図」「行図」「変図」「解図」「命図」)



があり、読書会ではその構造や思想的な意味について詳細に説明がなされた。司馬光については数多くの研究があり、とりわけその歴史学については様々な角度から研究されているが、易学については基礎的な研究があるに過ぎない。陳氏は、正面から司馬光の易学研究に取り組み、複雑な象数易の数理的な構造を読み解いた。本書は、象数易の構造を把握するのみならず、易学思想史中にそれを位置付け、その背後にある「義理」を解き明かし、司馬光の思想全体、あるいは北宋思想史全体の中に位置付けた力作である。これまでの研究が乗り越えられなかった易学研究と哲学研究の間の溝を埋め、司馬光が解き明かそうとした「人世価値の天道における基礎」を、『潜虚』の易学構造の中から読み解き、これまでの研究の欠点を克服した。

今回の読書会は、およそ2時間半にわたり、最大で31名の参加者があった。質疑応答は、司馬光の「中和」概念の定義は何か、司馬光の易学は彼なりの簡



潔さ・自然さを追求した結果といえないか、日本や韓国での研究状況はどうかなど、多岐に渡った。通常国際学会等では、特に象数易のような数理的易学研究を扱う場合、易学の構造そのものについての説明は、時間がなくて省略されてしまうことが多い。今回は、複雑な象数易の解釈をじっくり聞くことができ、それによって、司馬光の易学の特徴をよりよく理解できたように思う。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

国際ワークショップ

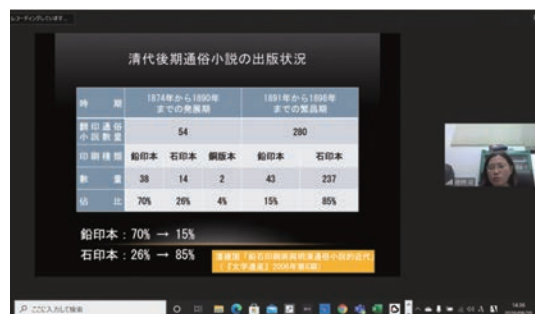
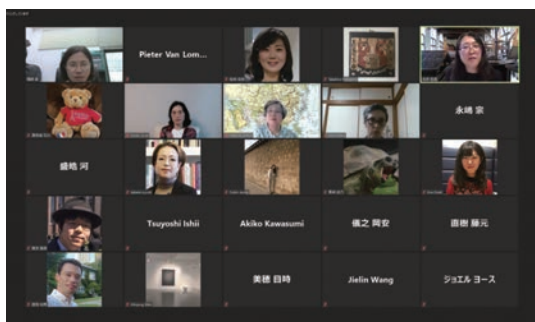
第4回「ジャーナリズム研究会」公開研究会

2020年9月20日

2020年9月20日、東アジア藝文書院およびジャーナリズム研究会による第4回公開研究会／国際ワークショップが開催された。本ワークショップは新型コロナウイルス感染拡大防止のためZoomミーティングを使ったオンラインで行われた。登壇者は梁蘊嫻氏(元

智大学)、趙寛子氏(ソウル国立大学)、そして土屋礼子氏(早稲田大学)である。司会は松枝佳奈氏(東京大学)、ディスカッサントは主宰の前島志保氏(東京大学)とイリナ・ホルカ氏(東京大学)が担当した。

研究会は、中島隆博氏(EAA 院長)の挨拶から始



まった。中島氏は領域・方法横断的な発表とその後の活発な議論に期待を示した。その後、前島氏による研究会の趣旨の説明、松枝氏による発表者各氏の紹介に続いて行われた発表内容は、本会の関心事「東アジアにおけるジャーナリズムの創造と展開」にまつわる、登壇者各氏が現在まさに取り組んでいる新しい研究であった。

最初の発表は梁蘊嫻氏による「『絵本通俗三国志』の出版——明治期日本と清朝の出版状況の比較」である。同一の主題を持つ出版物が、明治の日本と清朝の中国でどのように出版され、そのとき「版權」がどう問題になったかを比較することで、近代出版の特徴を明らかにしようとするものである。『三国志演義』は日中間わらず古くから人気を博し、江戸時代末期には『絵本通俗三国志』という絵入通俗小説が派生した。明治時代には本屋仲間の規制が緩み多くの版元が誕生、各々が活発に出版を行い、『絵本通俗三国志』にも多数のバージョンが生まれた。梁氏は挿絵の差異、テキストの頭注、活字のスタイルなどに注目しながら様々なバージョンを比較、各版元が先行版の大部分を踏襲しつつ様々な工夫を加え、オリジナリティある版を作ろうとしていたと結論付けた。

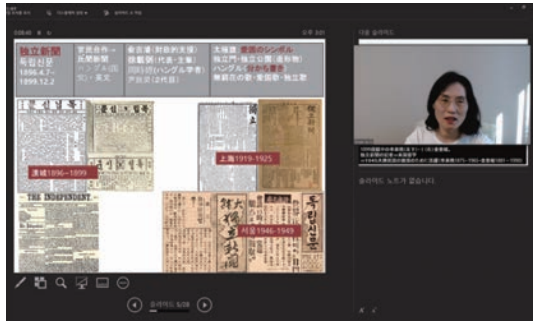
一方で清でも、特に上海で多くの出版社が立ち上げられ、通俗小説の出版が行われていた。見るべきものが少ないとされていたこの時代の清の絵入通俗小説には挿絵の質を高く評価されたものもあり、『三国志演義』の派生作品もそのうちに数えられる。梁氏は数々の事例を挙げつつ、日本明治期の絵入通俗小説が参照した先行版より挿絵の数を減らし、絵の質も粗くなる傾向があるのに対し、清では挿絵の数・質とも高い水準で維持されていたという相違点を指摘。その背景

には石印本（石版・リトグラフ）という、速度と品質に優れた複製術があった。石印本は後に清の印刷方法の主流となるが、一方で「版權」侵害が横行する弊害も生んだと指摘された。最後に梁氏は比較という手法の有効性を改めて強調し、研究を日中両国の出版の交流に広げていくとの展望を述べた。

次の登壇者・趙寛子氏の発表「独立新聞の徐載弼——ナショナル・シンボルを創設し、ナショナル・ヒストリーの外に立たされたジャーナリスト」は、徐載弼（ソ・ジェピル 1864年-1951年）を軸に、1880-90年代にかけての朝鮮半島におけるジャーナリズムの誕生、そしてメディアが採用したナショナル・シンボルの表現・表象の移り変わりをみるものである。

最初に徐載弼という人物について、次に彼が活躍した時代の政局について簡単な説明が加えられた。徐載弼は19世紀末の朝鮮半島（国の在り方を巡り守旧派と開化派が対立、さらに諸外国の思惑が入り乱れる激動の時代だった）にて開化派の団体・独立協会を創設、『独立新聞』を刊行し独立・開化を鼓吹した革命家である。趙氏は、朝鮮半島の先行メディアで列強の国旗やハングルがナショナル・シンボルとして扱われた例を示し、『独立新聞』がその流れを受け太極旗を愛国のシンボルとして提示、さらに多くの人々に読んでもらうため漢文ではなくハングルで紙面を構成したことを述べた。後に大韓帝国が国家儀礼で太極旗を活用するが、それに先駆けてナショナル・シンボルを広め、愛国心と連結させたのが『独立新聞』だった。

次いで趙氏は徐載弼の言説分析に移った。遺族の証言などから冷静・冷徹との評価を受けやすい徐載弼だが、彼の言論には独立・開化への情熱が表



れている。趙氏は独立協会が毎週開催した公開討論会である「万民共同会」が1898年以降の民間新聞の勃興を支えたとの考えも示した。朝鮮半島における大衆参加の政治運動の起源と評価される一方、トップダウン的で熟議民主主義との距離も感じられる万民共同会の歴史的評価は、今なお困難である。

趙氏は徐載弼の言論上の業績の背景に、甲申事変の失敗による米国への政治的亡命があったことも指摘した。米国の市民権は徐載弼の盾となった一方、常に母国のアウトサイダーとなることを運命づけていた。徐載弼の愛国心は、儒教的道徳や家族・宗族にとらわれない「非国民の愛国心」だったと趙氏は述べた。朝鮮半島の近代史の中で「独立の志士」と評価されてきた徐載弼だが、近年では近代主義の再検討や「反日民族主義」の神話化といった多分にセンシティブな状況もあり、彼の評価がさらに難しいものとなっていることが語られた。

第3登壇者の土屋礼子氏の発表「近代日本のジャーナリズムにおける大衆化/民衆化」は、大正・戦間期のジャーナリズム史から近現代メディア史を総体的に検討し捉えようと試みた。大正末年、ジャーナリスト・永代静雄（1866年-1922年）は自ら編集する新聞業界誌『新聞及新聞記者』で大正期のジャーナリズムを振り返る特集に寄せた小文「新聞を民衆に與へるまで」の中で、「民衆と共に新聞の城を経営」する新聞の理想を掲げた。永代にとっての新聞の民衆化の意味を問うことは、現代のジャーナリズム研究にも有益であると土屋氏は指摘する。

ジャーナリズム史における大正期は、新聞産業が拡張し、先の日露戦争や反講和運動で発揮された新聞の政治的発言力により、記者の社会的地位が向上

した時代である。紙面は大見出しや写真・漫画による視覚化が進み、読者大衆にとって平易な表現や口語化も推進された。同時に、村落や工場による新聞など、民衆の自立性を志向する新聞も登場した。土屋氏によれば、永代の「民衆と共に」歩む新聞の理念は、こうした新聞と民衆の関係性の変化への肯定的な応答であった。同時代のジャーナリズム市場では、雑誌が担う文芸の公共性と新聞が担う政治的公共性がそれぞれ形成された。前者には女性作家・読者が積極的に参加し、後者の参加者は男性が中心で、選挙やストライキと連動した。

最後に土屋氏は、ジャーナリズムの大衆化の理論的視座を2点提示した。ひとつは、日本および世界のジャーナリズムの展開を「高級紙」「一般紙」「専門紙」「通俗紙」という新聞の4類型から見た場合、「高級紙」である「英語を基盤としたグローバル知識層向け高級メディア」と、それに対置される地元言語ジャーナリズムの一層の大衆化（「一般紙」「専門紙」「通俗紙」の成立・発展）として考えることができるのではないかという視点である。もうひとつは、ジャーナリズムの大衆化/民主化を「知識人層による啓蒙・宣伝機関を目指す方向性（マス・コミ化）」と「知識人層からの分離・独立と自主を目指す方向性（ミニ・コミ化）」の両側面を含むものとして考える視点である。従来の大衆化研究は主に前者に注目してきたが、大正末期に永代が描いた新聞像は後者に着目する意義を示しているとの指摘がなされた。

3報告の終了後、討論者の前島志保氏とイリナ・ホルカ氏によるコメントが続いた。まず前島氏は梁氏の発表について、日中での石版印刷の普及の差は、既存の技術に依拠した社会システムと後続の技術との

齟齬を物語っており興味深いと述べ、中国における新技術導入に伴う出版状況の悪化には版權侵害以外にどのようなものがあったのか問うた。次に、趙氏が挙げた女性・子どもを交えた討論会やイベントに示唆される最初期のナショナリズム運動参加者の多様性はその後継承されていたのか、また、アメリカを行き来した徐載弼の思想はナショナリズムの枠組を超越していた可能性もあるのではないかと尋ねた。土屋氏の発表に対しては、小新聞の流れを色濃く残し文芸に強かった『都新聞』や、早くから家庭欄に力を入れていた『報知新聞』のような新聞を新聞史にどう位置づけるかを問うた。さらに、対象読者層と内容に幅のある戦間期日本の女性雑誌の例をあげ、文芸の公共性をはじめとする西洋の公共圏概念を援用して論じることの妥当性と難しさについて問題提起した。

続いてホルカ氏は、梁氏が示す『絵本通俗三国志』の様々な版と、読者層の違い・変遷の関わりについて質問した。趙氏の発表については、韓国の言説における日本のナショナル・シンボルや国民意識の位置づけに関心を寄せた。最後に、土屋氏が大正期の新聞・雑誌それぞれの公共性を論じていた点に着目し、双方が互いに影響を及ぼした可能性について尋ねた。

前島・ホルカ両氏のコメントを受けて梁氏は、石版導入後の中国では出版社間の競争激化とそれに伴う経営不振・倒産の増加が見られたと説明し、様々な体裁での『絵本通俗三国志』から、各出版社の想定読者層の違いや経営事情が浮き彫りになると回答した。趙氏は、初期のナショナリズムのもっていた多様性の残滓として、1945-50年に無党派層が多様

な活動を展開した点や、徐載弼自身も党派や思想の違いを越えた合意形成の可能性を模索していたことに言及し、趙氏自身も徐載弼の思想を手がかりに、今日の国家間の対立や韓国内部の地域対立を乗り越えられる思想的な枠組を追究してゆきたいと語った。土屋氏は、大正期には大新聞・小新聞に基づく区別は既になく、『都新聞』や『報知新聞』も独自に大衆化したと考えるのが妥当であるとした。また日本の文芸の公共性をめぐる課題は、明治期における文学的伝統の断絶をいかに評価するかにあるのでは、と述べた。雑誌と出版の相互関係については、大正期に朝日新聞社と毎日新聞社から週刊誌が創刊されたことは、新聞社が出版局を持つ契機となり、『アサヒグラフ』などのグラフ雑誌の出版にも繋がったと指摘した。前島・ホルカ両氏と発表者との活発なやりとりを経て、フロアからも質問が途切れることなく続いた。中国の石版印刷普及の背景や、徐載弼のアメリカでの生活や交友関係が彼の思想形成に与えた影響、永代の『新聞及新聞記者』での理念の戦後への継承などの観点から質問が寄せられ、各発表者から回答がなされた。

比較文学、思想史、メディア史など異なる学問領域で、異なる地域を研究対象とする参加者がオンライン上で一堂に会した本会は、まさに国際ワークショップと呼ぶにふさわしい開かれた議論の場となった。国際的な移動がままならないなか、国境や時代さえも横断した討論ができたことの意義は大きい。

報告者:永嶋宗(東京大学大学院博士課程)
尾崎永奈(東京大学大学院博士課程)

第1回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年9月25日

2020年9月25日、2020年度のAセメスター授業開講のこの日、東京大学と北京大学による合同授業「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。本授業は東京大学側では「東アジア教養学特殊講義(2)」として開講され、北京大学でも対応科目が開講される。さらに東京大学、北京大学、カリフォルニア大学バークレー校、ケンブリッジ大学ほか11大学が結成する国際研究型大学連合(IARU)、およびソウル大学から聴講生を迎え入れて実施される。

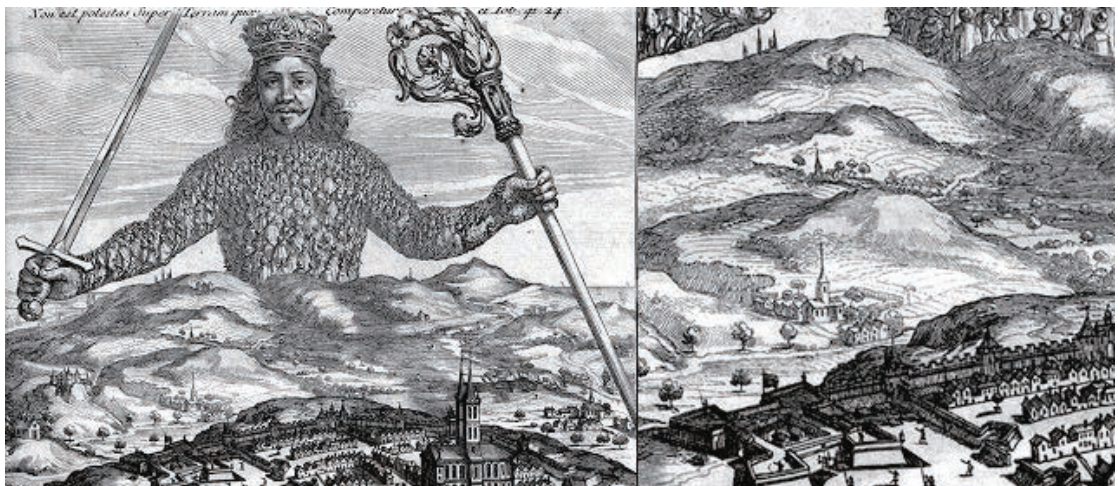
初回講義は講義を共通してモデレートする石井剛氏(EAA副院長)・王欽氏(EAA特任講師)の授業ガイダンス(introduction)であった。今年度の授業テーマは“East Asia and the world under the pandemic—What should we learn from the current pandemic of COVID-19?”である。この副題へ現れている通り昨年末以来拡大を続ける新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行状況を念頭におき、公共衛生、国際政治、歴史学、哲学、比較文学ほか多領域の研究に従事する東京大学・北京大学両校の教員陣が世界の「いま」について論じ、学生たちとの経験・思索を共有することをめざす。

今年度の授業テーマについて、石井氏はホブズ

『リヴィアサン』の著名な挿画を題材に語り始めた。現在のCOVID-19をめぐる状況下で、人々の生へ直接介入する「国家」が非常に前面へ現れている。

「国家」を前に人々は相互に孤立し、あたかも「まなざし」へ個別的にさらされているかのようである。本講義では「今なにを経験しているのか」の経験と思索の共有を介し、切り離されてある状況から新しい知的交流の場(プラットフォーム)を作り出すことがめざされている。なお、本講義は下記の開講日程で開催される。

- | | |
|--------|--|
| 9月25日 | 石井剛(EAA副院長)・王欽(EAA特任講師) |
| | Introduction |
| 10月9日 | 橋本英樹(東京大学) |
| | Public Health 1 |
| 10月16日 | 藤原帰一(東京大学) |
| | War and Memory: International Politics 1 |
| 10月23日 | 藤原帰一(東京大学) |
| | War and Memory: International Politics 2 |
| 10月30日 | 欧陽哲生(北京大学) |
| | Modern Chinese Intellectual History: On |



Yan Fu's "Theory of Evolution"
 11月6日 欧陽哲生 (北京大学)
 Cai Yuanpei's Imagination of the New Culture and Its Contemporary Significance
 11月13日 楊立華 (北京大学)
 Zhang Taiyan's "On the Theory of Equalization": A Philosophical Enterprise under the Theory of Civilization 1
 11月27日 橋爪真弘 (東京大学)
 Public Health 2
 12月4日 楊立華 (北京大学)
 Zhang Taiyan's "On the Theory of Equalization": A Philosophical Enterprise under the Theory of Civilization 2
 12月11日 章永樂 (北京大学)
 The Epochal Transformation:
 Rereading Liang Qichao's "Impressions of the Travel to Europe" 1

12月18日 章永樂 (北京大学)
 The Epochal Transformation:
 Rereading Liang Qichao's "Impressions of the Travel to Europe" 2
 12月25日 前島志保 (東京大学)
 Pandemic and Japan's Pre-WWII History 1
 1月8日 清水剛 (東京大学)
 Pandemic and Japan's Pre-WWII History 2

講義はオンラインで行われ（講義言語は英語）、ZoomとTenセントミーティングを用いたリアルタイム双方向授業、および動画教材共有プラットフォームPANOPTOでのオンデマンド教材配信を併用した「反転講義」形式で実施の予定である。初回ガイダンス（introduction）へ出席した各地域の学生たちも多様な学問的バックグラウンドを持っており、今後各教員陣とともに異なる視点の交錯するコラボレーションが見られることであろう。

報告者:前野清太郎(EAA特任助教)

第7回 石牟礼道子を読む会

2020年9月28日

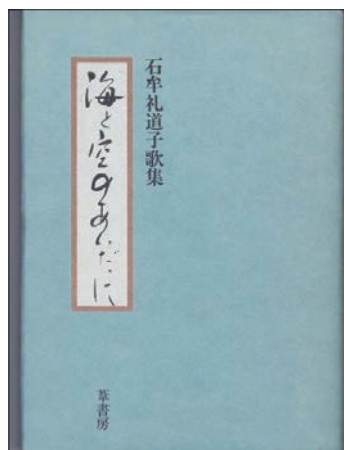
2020年9月28日、Zoomにて第7回「石牟礼道子を読む会」が開催された。参加者は、鈴木将久氏（東京大学）、前島志保氏（東京大学）、山田悠介氏（大東文化大学）、佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）、高山花子氏（EAA特任研究員）、宮田晃碩氏（東京大学大学院博士課程）、建部良平氏（EAAリサーチ・アシスタント）、そして報告者の宇野瑞木（EAA特任研究員）の8名であった。今回は発表を報告者が担当した。

『苦海浄土』第2部（神々の村）を読む最後の回であったため、本発表では、石牟礼の多様な作家活動における創作の黎明期といえる短歌時代から第2部執筆までの流れを、特に石牟礼のテキストで反復される思念の場所ともいべき「海と空のあいだ」のイメージの変遷に着目しながら整理することを試みた。今回

参照軸に据えられたサブテキストは、下記の2本の論文である。

- ・井上洋子「『ゆき女きき書』成立考——石牟礼道子とフェミニズム」（佐藤泰至編『フェミニズムあるいはフェミニズム以後』笠間書院、1991年）
- ・岩淵宏子「表象としての〈水俣病〉——石牟礼道子の世界」『社会文学』15号、2001年）

両論考ともに石牟礼の短歌時代から『苦海浄土』第1部執筆までのプロセスを丁寧に追ったものであるが、特に前者は谷川から認識のための方法論（詩人の原点である「暗闇のみちる」「万有の母」の場所に下降する）を得、さらに高群逸枝の女性史観から影響を受けたことで、石牟礼の中に『苦海浄土』執筆



石牟礼道子
『石牟礼道子歌集
海と空のあいだに
(葦書房、1989年)
の表紙

のための思想と文体の土台が築かれたことを指摘するものである。後者は、さらに幼少期を題材とした『樁の海の記』における近代化によって損なわれる前の「命の源」たる水俣のイメージをも介して、『苦海浄土』第1部を近代産業の病根を独特の詩的感性で抉った作品として評価した。

発表者（宇野）は、2つの論考を踏まえた上で、とくに「海と空のあいだに」という言葉に着目した。石牟礼は『苦海浄土』第1部の原題（『熊本風土記』1965-66年に連載）になる前に、12首の短歌の題（『サークル村』1959年4月）としてもこの言葉を掲げており、さらに1989年には、10代からの未発表の短歌や詩を含む詩集にも『石牟礼道子歌集 海と空のあいだに』（葦書房）という題を付けているように、石牟礼にとって自身の詩作がこの言葉に象徴されるものであることが窺える。そこで、この「海と空のあいだ」というイメージを石牟礼が谷川や高群と出会う前から持っていた思念の場所であったと想定し、それが石牟礼のテキストでいかに変容しながらも反復されていくかを追うことが本発表の主旨であった。

まず発表者は、12首の短歌の時点で、「海と空のあいだに」という題のもとにいかなるイメージが詠みだされているかを確認した。すなわち、もともと石牟礼の短歌の主題であった「私の血の色」としての身内の苦しみや狂気の場所が、ここでは「母たちの海」という主体の複数性を獲得しており、それによって水

俣病患者の世界へと通じる回路を開いていることを指摘した。

それと同時に、短歌から散文への過渡期を考える上で、同年に発表されたエッセイ「詠嘆へのわかれ」（『南風』）の中で短歌的な「詠嘆」への訣別を宣言している点に注目した。そこでは「日本の底辺」の「暗黒」に降りること、自身のももとの主題であった「愛」を再発見し、さらに高群に由来すると思われる母なる「古代」「原始」社会へと向かう道筋が示されている。発表者は、石牟礼自身が短歌で思念の場所としてきた水俣の「海と空のあいだ」の水平的世界に、谷川の示した最下層へ「下降」という垂直のイメージが結びついたことで、短歌的な詠嘆としての「近代的なナルシズム」とは異なる、最下層に存在する原始的詩性（それは古代から連綿と続く妣たちの言葉）をとり出すという明確なイメージを掴んだと指摘した。

さらに、『苦海浄土——わが水俣病』（1969年）出版の際に、そこに自身の原体験の中にあつた、文字を持たない祖母や母たちが生きていた仏教世界の声を導入し（「苦海」「浄土」、エビグラムの弘法大師和讃）、それによって作品世界はさらに重層的な響きを帯びることとなったことを述べた。

発表者は、以上のように第1部刊行時点までの「海と空のあいだ」のイメージの変遷を整理・確認した上で、さらに第2部で「海」「空」のイメージがどう表れ、変容しているかを考察した。すなわち第2部において、一度も歴史の表舞台に出てきたことのない最下層の人々の「〈言霊〉のるつぼ」の静かに湧く場所こそが「海と空のあいだの透明さ」であると明らかにされる。その一方で、第1部においては水俣の風土・自然と決して交わることのない異物として描かれていた新日窒水俣工場による汚染が、第2部に至って、汚染された歴史も溶け込み暴力的なまでに風土となりつつある場所へと変容していることを指摘した。

以上の発表に対して、質疑ではさまざまな方向から議論がなされた。まず短歌から散文へのプロセスが問題となった。特に「詠嘆へのわかれ」で宣言されたのは、「詠嘆」との訣別であって「短歌」との別れではないことが指摘され、その切り捨てようとした「詠

嘆」とは何だったのかということが改めて問われた。また「散文」と一口に言っても、「散文」の中の詩的な反復やレトリックの問題を含め、その性質を考えるべきという意見が出た。さらにこれに関連して中世以来の語り物に近い語り方について、型や詩的反復を残している一方で、短歌や詩との決定的な違いとして、時間をかけて長い語り物を共有する「時間の長さ」が指摘された。

哲学的見地からは、プラトンの洞窟の譬喩のように、暗闇まで行った人が戻ってきて啓蒙するような在り方と石牟礼の底辺の暗闇で何かを発見してから文学として書き出す構造の類比から、石牟礼は『苦海浄土』を書くということで、結局何をしているのか、という問いかけがあった。そして、その構造の中で救いというものがいかに可能となっているのか、フィクションという方法、詩的言語の問題がどうかかわっているのか、

といった点が議論された。

この他にも、石牟礼の短歌創作の時代について1950年代の短歌を取り巻く日本の状況を考慮すべき点や短歌と散文の間の石牟礼の詩作についても見る必要性が改めて認識された。

以上のように、石牟礼の文学的出発点といえる短歌時代から『苦海浄土』第2部までを見通せたことで、一貫したテーマと共にその認識方法と表現形態・文体、語彙の取捨選択の過程もある程度把握できたが、一方で『苦海浄土』で石牟礼がしていることは何なのか、という問いは、さらに深まることにもなった。さらに次回研究会からの第3部においてもこの問題を引き続き考えたい。

報告者:宇野瑞木(EAA特任研究員)

2020年度活動報告



秋●10月～12月

人文-社会科学の アカデミックフィールドを体験する

セッション1

2020年10月2日・9日

2020年A SemesterにはEAAより新たな3つの講義が開講された。このうち講義「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」は、教養学部前期課程の「全学自由研究ゼミナール」として開講された授業である。この授業は、報告者の前野清太郎（EAA 特任助教）と中村長史氏（教養教育高度化機構）が新しい形式の授業をめぐって行ったディスカッションから構想がすすめられ立ち上げられた。何度かの打ち合わせのなかで、中村氏のアクティブラーニング型授業の実践歴と前野の大学院ゼミでの経験をミックスしながら、いくつかの授業アイデアが練られた。その主なものを挙げると、

1. オムニバス形式をとりつつも、講師からのレクチャーに対する学生からの応答としてのディスカッション時間をとるため、2週セットの「セッション」を組む。
2. 「ゼミ」的な議論空間で、研究がつくれる現場（フィールド）を専門課程への進学前の学部1～2年生の学生に体験してもらう。
3. ディスカッションで受講者間の相互の議論を促すため、受講学生が自ら司会進行兼議論の交通整理役（ファシリテーター）となって、「ゼミ」を擬似的に動かすファシリテーターシステムをとる。

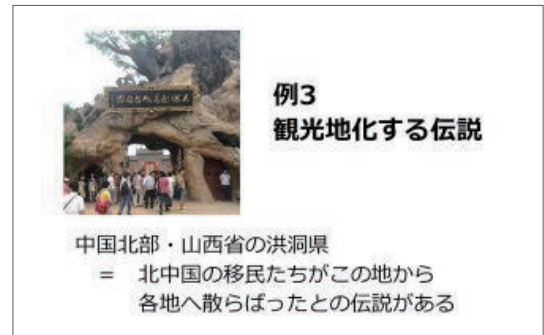
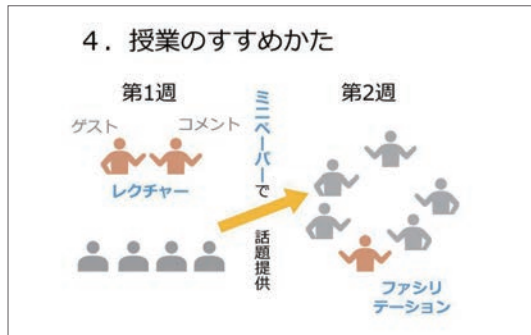
というような着想であった。以上の工夫を授業構成へ取り入れて、受講者に「ゼミ」で議論を行う本質的な楽しさを知ってもらうことをこの授業は最終的にめざしている。

今年度は6つの人文-社会科学のトピックそれぞれについて大学院生・ポストドクのゲストを迎えた6つのセッションを1 Semesterで実施の予定である。最初

のセッション（10/2と10/9）は前野がレクチャーを担当した。

第1セッションのトピックは「大伝統と小伝統」である。レクチャーからは現代の国際社会にあつて問題化しつつある文化とその継承の問題について、受講生それぞれがもつ具体例に即して議論してもらうことを試みた。前野が農村社会学の研究者としてこれまで行ってきた台湾・中国でのフィールドワークの事例を随時引きながら、社会科学的研究への「伝統」概念の導入について解説した。孤立社会、「未開」が残ったヒトビトの文化をとらえようとしてきた古典的人類学研究が、1950年代ころよりインド・中国・中南米諸国の「発展した」社会でヒトビトの生をとらえようとするようになった。この潮流のもとで出現してきたのが、エリートの・文字的・広域的な「大伝統（grand tradition）」と民衆的・口承的・地域的な「小伝統（little tradition）」の枠組みで文化の構造をとらえようとするアプローチであった。これに対して、ローカルが急速にグローバルへつながりはじめた1980年代以降「伝統とされるもの」の批判として出現してきたのが「創られた伝統」や「真正性」（authenticity）にまつわる議論であった。社会科学的概念展開と背景をふまえたうえで、レクチャーの最後に受講者の一同へ問題提起を行った。ある文化あるいは伝統へ、それらを保持するヒトビトの外側からの存在の研究者がいかに向き合うべきか——研究者がそれらを記述することが時に「文化」や「伝統」を作り出してしまう——について、分析しつつ対話をつづけるアプローチを示してレクチャーを終えた。

各セッションの第1週目は講師役のゲストのレクチャーに続けて、前野または中村氏がディスカッション役となってコンビを組み、異なる学問領域を専門と



する研究者の間の「ズレ」と「ズレ」から生じる対話を見てもう構成をとった。今回の第1セッションは講師役の前野とディスカッサント役の中村氏の間で応答を行った。中村氏が専門とする国際政治学において近年問題化されることの多い文化や価値、あるいは「文化触変」(acculturation)といった概念について、異なる学問間の用法をめぐって議論が行われた。これらの議論のうち、とくに文化・価値の部分については翌週の第2週目のディスカッションへ議論が持ち越されることになった。

第2週目は、第1週目のレクチャー・応答を受けて、受講生が追加的に議論を行いたいと考える問題をGoogleフォームで提出してもらった。各受講生からの問題提起を一覧に整理して、それをたたき台にファシリテーターのリードのもとディスカッションが展開された。今回がこの講義のはじめてのディスカッションパートであったため、受講生にも緊張がみられたようであったが、適宜適宜に概念説明のサポートを入れつつ(とくに理系科類所属の受講生もあったため、今後のセッ

ションの土台となる知識共有に配慮した)、第1週レクチャーへの質疑からはじめて、徐々により広いテーマのディスカッションへ展開していった。ディスカッションでは青木保『異文化理解』(岩波書店、2001年)や橋本毅彦・栗山茂久編『遅刻の誕生』(三元社、2001年)を引いて時間の流れ方・記し方と近代という時代、「よい伝統」と「悪い伝統」の対立の問題、他者との出会いのなかでウチとソト、そして「文化」「伝統」が形作られることなどへの意見が交わされた。徐々にはあったが、受講生のみなさんが自らの読書の経験やこれまで考えてきたことを派生的に広げてくれるようになり、講師役の2名とゲスト陣にとっても新しく学ばされることが多かった。次回以降、レクチャーとディスカッションを組み合わせせたセッションが5回続くこととなるが、受講生、ゲスト、そして講師役2人がどのように成長していくか順次報告をしてゆきたい。

報告者:前野清太郎(EAA特任助教)

許紀霖『普遍的価値を求めると中国現代思想の新潮流』書評会

2020年10月4日

2020年10月4日、許紀霖氏(華東師範大学)をお招きし、氏の日本語による初の単著となる『普遍的価値を求めると中国現代思想の新潮流』(法政大学出版社、2020年)の書評会を開催した。著者で

ある許紀霖氏(華東師範大学)、監訳者である中島隆博氏(EAA院長)と王前氏(東京大学)のほか、石井剛氏(EAA副院長)をはじめ、許氏に縁を持つ諸氏が集った。評者として村田雄二郎氏(同志社大



著者と書影



許紀霖氏
(華東師範大学)



村田雄二郎氏
(同志社大学)



星野太氏
(早稲田大学)

学)、星野太氏(早稲田大学)が、本書に対するコメントを寄せた。

書評会では、本書のタイトルにも示されている「普遍的価値」をめぐる、自由闊達な議論が展開された。許氏が言う「普遍的価値」には、昨今勢を増すナショナリズム、そしてポピュリズムに対する痛烈な批判意識が込められている。しかしこれは、静的なもの、固定的なものとして理解されるべきではない。異なる価値を持つ者同士が、衝突を繰り返しながら共に練り上げ構想するもの、言い換えれば、本書巻末の対談でも触れられているように、「普遍化する」という動的なイメージによって捉えられるべきものだろう。評者によるコメント、それに対する著者からの応

答ののち行われた全体討論では、忌憚なき意見が飛び交った。許氏が総括したように、このような議論を行うこと、そしてこのような議論が可能となるような場を求め続けることが、「普遍的価値を求める」ことにはかならない。

本書は法政大学出版局の「叢書ユニベルシタス」から刊行された。奇しくも、ラテン語で「普遍」を意味する「ユニベルシタス」シリーズから本書が刊行されたことの意義を、参加者誰もが深く受け止めたことともに、未完のプロジェクトである「普遍」に関することの重要性を確認したひとときであった。

報告者：崎濱紗奈(EAA特任研究員)

オンラインカンファレンス参加報告

感染症に覆われた世界と18世紀研究の今

(International Online Conference “Distance 2020”)

2020年10月6日

「密集を避け、距離を保って!」というメッセージは、この半年で生活のさまざまな場面に登場し、我々の意識や行動に深く浸透することとなった。感染症の世界的な流行によって、日々の振る舞いのみならず、言葉や出来事に対する感受性そのものが大きく揺さぶられ、現在も日々変化している。「密」という言葉は、災禍を想起させる不穏な響きを持つようになり、デスタンスという単語が、街のあちこちで見られるようになって

た。数年前のドラマやトーク番組を見ると、喋っている内容よりも、映っている人々の間隔、あるいは数の多さにビックリする自分がある。もちろん病気そのものの治療は医学や薬学の課題であり、感染症対策に関わる政策立案・評価は社会科学分野のフィールドである。しかし、歴史学は言うに及ばず、文学や思想といった学問領域もまた、言葉の世界を介して感染症と格闘している。感染症をめぐる混乱やうねりは、言



カンファレンス用特設サイト（現在は閉鎖）よりスクリーンショット

葉の世界をグラグラ揺さぶる。また、スローガンやメッセージ、パスワードといった形で、言葉は感染症に揺れる世界へと介入する。感染症に揺れる世界と言葉、この両者の双方向的な応答が焦点である。

この数か月「自粛」をはじめとして、いくつかの言葉がメディアで脚光を浴び、政策立案や現状分析をする上でのキーワードになったり、人々の行動を規定・変容させる役割を果たしたりした。言葉はウイルス自体には無力だが、感染症に揺さぶられる人間に対しては、さまざまな影響を及ぼす。感染症そのものだけでなく、感染症によって変化する社会生活や日々の経験について、どのようなワードを設定すればそれを上手く捉える／表現することができるのか？ 感染症と連動して出現した新たなパワーワードたちは、私たち個人や社会全体をどこに向かわせるのか？ こうした問いは、他領域と協働しながら、人文諸学が取り組むべき課題でもある。

私は18世紀研究をホームとしているが、現在の感染症への応答（を研究主題に取り込む動き）が、ここでも活発に行われている。日本ではNHKがデフォー『ペストの記憶』（1722年）を特集していたのが記憶に新しい。伊集院光が18世紀英文学を語っている、そんな光景がまさかテレビで見られるとは！ 英語圏では、『18世紀：理論と解釈』（*The Eighteenth Century: Theory and Interpretation*）というアカデミック・ジャーナルが、「危機の時代における学問」（Scholarship in a Time of Crisis）というオンライン特集を組んでいる。この夏、ヨーク大学18世紀研究センターでは、メルボルン大学のリサーチユニットと協働し、博士課程の学

生が運営主体となって、オンラインカンファレンスが開催された。国境を越えて大学院生がオンライン上に集まり、「距離」を主題として18世紀の世界を論じた。ウェブ上では、事前録画された個人々の研究発表が配信され、リアルタイムでの討議や参加者同士の懇親会も行われた。すべてオンラインで行われたイベントであるが、その交流形式を複層化し、新鮮なライブ感、少し立ち止まってじっくり考える要素、異なる地域から時差を超えてアクセスできる利便性のバランスを取ったようである。イギリスとオーストラリアをつなぎ、学生が研究交流の主体となるという点で、これまでなかなか見られなかった壮大なスケールの企画となった。この半年間、多かれ少なかれどの場所でも感染症対策の関係上、対面で集まらない状況が続いている。それならいつそのこと、地域や国をまたいでオンラインで交流してしまおうという、現在の状況を逆手にとった発想である。

カンファレンスは主に院生を参加対象としていたのだが、国際的な研究協働のモデルとして参考になるため、ポスドク研究員である私も主催者に許可をもらい、サイト内を探検させてもらった。基調講演は2つ行われ、開会時にヨーク大側の教員が、閉会時にメルボルン大学側の教員がレクチャーを担当した。前者では、フランス革命前後の電信技術がフォーカスされ、コミュニケーションとテクノロジーの関係が考察された。後者では18世紀のカリブ海地域について、現地の白人女性が奴隷制の運営維持で果たした役割が論じられたようである。（私自身は開会時の基調講演のみ聴講した。）院生が行った個人発表では、例えば「隔たった過去と想像された世界たち」、「想像された風景たち」、「移動と家庭空間」、「知のネットワーク」、「引き裂かれた家族たち」といったセッション・タイトルがつけられていた。距離の実感・体感を主題とするうえで、「想像力」をキーとするものが複数見られた。教員によるワークショップも開催され、1760年代から1830年代にかけての「交通革命」を扱ったものの、ヴァーチャル・リアリティの文化史を主題としたものが見られた。参加登録時に配布されたパンフレットでは、5つのタイム・ゾーンが設定され、時差を超えて各地の院生・若手研究者をつなごうとする、主催

者たちの意気込みが感じられた。

本カンファレンスは、そのフォーマットにおいて新たな可能性を提示したと言える。このモデルを参照点として、新たなオンライン・イベントが企画されることも今後増えていくだろう。他方で「距離」というテーマ設定では、18世紀と現代の結び付け方について、どこかモヤモヤ感が残るところもあった。確かに現代の我々にとっても、18世紀世界を語る上でも「距離」はキーワードである。しかし、その意味するものは大きく異なる。現代の我々はウイルスの蔓延と感染症対策の中で、物理的な移動空間（＝身体世界）の縮小に戸惑い、その距離（感）を埋めるとされるオンライン空間について、助けられつつもどこか物足りなさを感じている。テクノロジーを介して接続しているものの、身体が机や部屋で硬直しているという事態は、「距離」というキーワードを用いることで、何かしら18世紀の世界へとつながっていくのだろうか？

カンファレンスで読まれたペーパーを見る限り、そこで考察対象となっているのは、想像力と協働して拡張を続ける物理的なネットワークである。世界中とつながっているけど、身体の移動範囲は限りなく制限されているという、我々が抱えるパラドックスについて、それと響きあう18世紀の何か、「距離」というキーワードによって、積極的にあぶりだされているとは感じられなかった。もちろん、現代への示唆を求めずに（現代のキーワードを用いて）18世紀を論じる、という立場もあり得る。しかし、それであれば「距離」をテーマとした18世紀研究は、パンデミック以前にも存在した。18世紀の歴史記述を分析し、過去と現在という「時間的距離」を焦点としたもの。あるいは、帝国史やグローバル・ヒストリーから、「距離（感）」の収縮について論じたものなど。こうした先行研究に対して、パンデミック下の問題意識を反映した本カンファレン

スが、どこまでその先に行けたかという点については、批判的な応答や省察が必要だと思われる。これまで18世紀研究は、変転する「現在と過去の相互応答」に立脚しつつ、新たな問いや視座を生み出してきた。21世紀世紀初頭に起こった「グローバルな18世紀」への注目も、その一例と言える。今回のパンデミックは、我々に新たな生活体験をもたらした。限りなく狭い空間で世界中とバーチャルに接続するのも、その一つである。こうした経験、そこから生まれた言葉、さらに言葉にならないモヤモヤ感など、こうした現代世界のざわめきから、18世紀世界の新たな様相が現れてくるのではないかと考えている。パンデミック以後の世界と18世紀を結ぶ新たな「言葉」を創出せねばならない。

本カンファレンスはオンラインでの協働性を模索した点、地域を超えた連携を目指した点、運営の主体が院生であった点、この3点が有機的に連動して成功を収めた。その先駆性は高く評価されるべきだし、翻ってそれが完成形ではないことも意識する必要がある。イギリスとオーストラリアを結ぶ際、不可避に想起されるのはコモンウェルスのつながりである。国境を越えて学問的対話をする際、こうした（歴史的に規定された）既存の枠組みとは異なる「接続」の仕方はないものだろうか？日本で英語圏との研究連携を模索する際、繰り返し浮かび上がってくるのは上記の問いである。東京大学東アジア藝文書院でも、オーストラリア国立大学とのパートナーシップを深化させている過程である。オーストラリアと日本を結ぶ線をどう構築するのか、そこで何をどう問うのか、この線がその外にあるネットワークをどう（あるいはどの程度）変容させられるのか、可能性のフロンティアは大きく広がっている。

報告者：若澤佑典（EAA特任研究員）

IAGS・EAA共催セミナー

コロナ危機と自民党政権

2020年10月6日

2020年10月6日、IAGS・EAA共催セミナー「コロナ危機と自民党政権」がZoomにて開催された。本セミナーは2019年7月に開催されたIAGS・EAA共催セミナー「自民党政権の現在と今後」の続編として、コロナ危機の中、自民党政権の対応と変容について検討することを目的として企画された。今回は昨年のメンバーであったパク・チョルヒ氏（ソウル国立大学）と内山融氏（東京大学）に加え、中島隆博氏（EAA院長）をモデレーターとしてお招きし、三者のケミストリーが期待される場であった。登壇者に合わせた日程調整となったが、その間政局はガラッと変わり、期せずして実にタイムリーなセミナーとなった。

中島氏は、この間の安倍首相の辞任と菅政権の誕生を振り返って、「安倍一強」と呼ばれる2010年代の自民党政権への評価について問いかけ、議論の糸口を示した。まずパク氏からは、「安倍一強」は55年体制との類似性と相違性の両方が存在している点、また既存の議論の枠組みを超える特徴として技術発達によるtribal communicationの深化に基づいている点が指摘された。すなわち、mass communicationに依存してきた既存の方法ではなく、自らの政治勢力の支持者だけに向かって発信するtribal communicationが主流になったことを意味する。そこでfake newsが流される場合、問題はさらに悪化する。従来の政治

学では各党は「中位投票者 median voter」（中間的な有権者）の支持を取り付けようとする論じられてきたが、この理論に当てはまらない現在の状況は、分極化（polarization）を加速化させ、民主主義の根幹を損ねる結果へとつながっていると述べた。

この指摘を受け、中島氏は、日本だけではなく世界各国で政治家のtribal communicationへの依存が見られるとした。中島氏はその理由として、今はかつてなく中間層が弱くなり、政治家にとってその必要性が薄くなったがゆえに起こっている現象であるだろうとした。興味深い一例として、ドイツの哲学者マルクス・ガブリエル氏との対談を取り上げ、その中でガブリエル氏が「自分はradical centerである」と話したことを紹介した。radical leftやradical rightについての議論は進んでいるが、radical centerの概念は目新しい。この概念は、政治的分極化の深化によって希薄化した健全な中間層を強化しようとの狙いを持つものである。

続けて、内山氏は安倍政権下における55年体制と異なった特徴として、「自民党の均質化」を指摘した。かつて自民党が派閥の連合体と呼ばれ、派閥間の競争が疑似政権交代の効果をもたらしていた55年体制と比べると、2010年代の自民党では「政党内競争 intra-party competition」のみならず「政党間競争 inter-party competition」の両方の力学が失われており、それが「一強体制」を作ることを可能にしたという。パク氏も、かつては自民党内の派閥がそれぞれのカラーを出しながら競争し、政党内の力学を作り出していたが、それはもはや政党間の力学に変換されたと付け加えた。すなわち党内に、例えばリベラル派としての宏池会と右派としての清和会、主流派としての経世会があって、その力学が働いていたが、今はそれらの勢力が党の外に存在し、リベラル派としての公明党と右派としての日本維新の会が位置することで、自民党の均質化を加速化させているとした。議論が続く



中島隆博氏
(EAA 院長)



パク・チョルヒ氏
(ソウル国立大学)



内山融氏（東京大学）

なかで、中島氏の民主主義への含意についての質問と絡めて、内山氏は政治における競争がなくなることは民主主義を「自由民主主義 liberal democracy」から「非自由民主主義 illiberal democracy」に移行させる危険性があることも指摘した。これはさらに「法の支配 rule of law」の弱体化や check and balance の機能の低下を招きかねないことも指摘された。可能性と難題の両者をもたらさうるコロナ危機に直面した菅新政

権の発足を受け、今後の自民党はまさに岐路に立たされている重要な局面であるとの見解がまとめられた。

セミナーの終盤には、Zoom の参加者からも様々な角度から貴重な質問が相次いだ。Median voters を取り戻すための策や、野党の立ち位置、米中緊張関係のなかの日中関係、政治学者の政策提言のあり方、学問と政治の関係などが議論された。多岐にわたる論点を取り上げられ、今日の日本政治やそれを取り巻く環境の厳しさが浮き彫りになったが、一方で、そこから日本あるいは日本政治が発するビジョンを考えさせられる有益な時間であった。イベント後に3者のケミストリーに魅了された参加者たちからこの座談会の定例化を求められる反応もいただき、企画に携わった報告者としても大変うれしく、やり甲斐が感じられたイベントとなった。

報告者：具裕珍 (EAA特任助教)

第2回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年10月9日

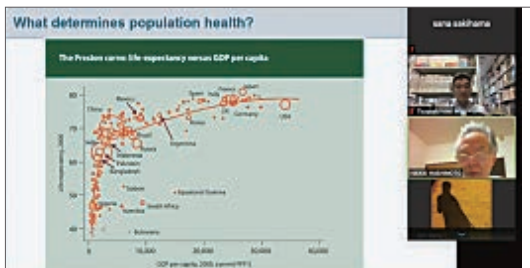
2020年10月9日、第2回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。第1回講義の報告にもあるように、東京大学と北京大学が協働して開講することの授業には、両大学のほか、カリフォルニア大学バークレー校、ケンブリッジ大学ほか11大学が結成する国際研究型大学連合 (IARU)、およびソウル大学といった世界各地の大学から参加者が集っている。

この日は、公衆衛生学がご専門の橋本英樹氏（医学系研究科）を講師としてお迎えした。具体的な距

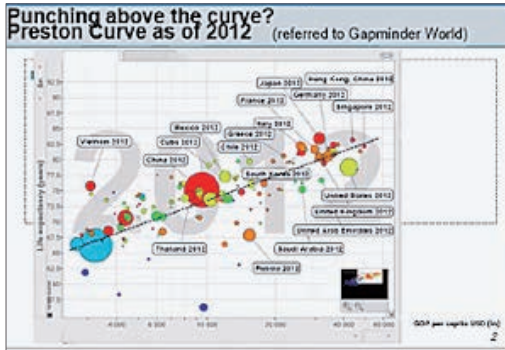
離に加えて、参加者の間に大きく横たわっているのは時差の問題である。この困難を解消し、毎回異なる講師を迎えてディスカッションを行うための工夫として、本講義では、動画教材共有プラットフォーム PANOPTO を活用している。この日も、PANOPTO を通じて配信されたオンデマンド教材を視聴した学生たちから、バラエティに富んだ質問・コメントが寄せられた。

冒頭で橋本氏は、公衆衛生 (Public Health) を考える上で重要な観点として、“Social Determinant of Health” — わたしたちの「健康」が、社会的要素によっていかに決定され得るか — に言及した。ここで社会的要素とは、政治・経済・文化といった多岐にわたる領域から構成されるものである。この観点は、COVID-19 をめぐる昨今の状況を考える上でも不可欠である。

参加者からは、経済格差と平均寿命の関係性、あ



平均寿命とGDPの関係性を表した “the Preston Curve”



2012年のPreston Curve：
GDPと平均寿命の関係性は年々変化している

るいは、国家の政治体制やそれを支えるイデオロギーが公衆衛生をめぐる政策に与える影響、といったことに関する質問等が寄せられた。いずれの質問も、公衆衛生をめぐる普遍的な問いと、参加者各自が持つバックボーンとが交錯することによって生まれたものだったと言えよう。異なる文脈の中で構築された知的



講義で紹介された、「Institute of Health Metrics and Evaluation (ワシントン大学の保健指数評価研究所)」のウェブサイト：<http://www.healthdata.org>

体系の出会いが、化学反応をもたらし、相互変容が促されるという、EAA設立に込められた期待が、橋本氏と学生諸氏との交流によって実現された、貴重なひとときであった。

報告者：崎濱紗奈 (EAA特任研究員)

第8回 石牟礼道子を読む会

2020年10月12日

2020年10月12日、Zoom上にて第8回「石牟礼道子を読む会」が開催された。参加者は、鈴木将久氏（人文社会研究科）、前島志保氏（総合文化研究科）、張政遠氏（総合文化研究科）、宇野瑞木氏（EAA特任研究員）、佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）、宮田晃碩氏（総合文化研究科博士課程）、建部良平氏（EAAリサーチ・アシスタント）、田中雄大氏（人文社会系研究科博士課程）、それから報告者の高山花子（EAA特任研究員）の9名であった。発表は高山が担当した。今回は、『苦海浄土』第3部「天の魚」を読む初回で、サブテキストは以下を選んだ。

- ・石牟礼道子、黒井千次「都市の襲を這うもの——『天の魚』をめぐる」、『展望』1975年4月号、筑摩書房、1975年4月、53-71頁。
- ・Paul Jobin, « La maladie de Minamata et le conflit

pour la reconnaissance », *Ebisu Etudes Japonaises*, 2003, no. 31, p. 27-56.

- ・石牟礼道子「祖様でございますぞ」、『思想』908号、岩波書店、2000年1月、2-4頁。

これまで第1部、第2部をさまざまな角度から読んできたが、第2部の最後に大阪チッソ株主総会での「狂い」の場面が描かれているように、やはり、とりわけ1970年以降に劇的に展開してゆく水俣病事件とテキストそのものの連関は重要であると思われる。そこで、今回の発表では、まず第3部が筑摩書房の雑誌『展望』の1972年3月号から1973年12月号に連載されていた状況を確認した。当時の『展望』に石牟礼が連載「天の魚」以外の寄稿をしていることや、同誌掲載の土本典昭による海外での上映報告文、さらには「水俣病センター」設立をめぐる座談会記事をみていった。また、黒井千次との対談では、石牟



土本典昭『水俣——患者さんとその世界』
(1971年) DVDのジャケット

礼が積極的に「フィクション」と「ドキュメント」の双方をあわせもった文学を目指していることが明言され、また方言表現を詩語に昇華しようとする思惑も明かされていることを確認した。

その上で、第3部のテキストと当時の具体的な出来事との関係の例として、土本典昭監督の記録映画『水俣——患者さんとその世界』（1971年3月12日公開）について書かれた部分を抜粋した。具体的には、チッソ東京本社前での座り込み、映画『水俣』に細川一博士と石牟礼の対面を撮影する企画があったこと、および同時期に石牟礼が詩経を描き始めたことを確認した。第3部においても舟がキーワードとなっており、海と空のイメージが引き継がれているが、この場合は東京の空の美しさが、水俣の海と空と繋げられる形で

強調され、それが「天の海」とも表現されている。

議論となったのは、東京の空が「美しい」とは書かれるものの、そこにはまた大気汚染をはじめとする都市の汚濁もまた描かれている点をどうみるのか、ということであった。水俣から東京を訪れた人たちの感性の特徴や、石牟礼による独特の「流民」のイメージ、さらには1970年代の石油危機やロッキード事件といった情勢、地方と東京の関係も検討する必要性が浮上した。また、当時のリアリズム写真やドキュメンタリー映画について石牟礼自身がどのような態度を持っていたのか、という質問もあがった。さらに、水俣病センターという具体的な「場所」を志向していた石牟礼の共同体像の観念的な部分を、西田幾多郎の「場所」についての思考とともに考えられるのではないかと、いう示唆もあった。最後に Paul Jobin の論文でも概観したように、水俣病事件は当時の公害問題をめぐる議論に影響を与えていただけでなく、1990年代以降の表象不可能性や許しをめぐる議論にも通じている。以前に話題にあがった神話の問題を掘り下げられなかったことは悔やまれるが、仏教だけでなく、キリスト教の信仰の問題が、天草という土地と結びつく形で現れることを確認できたことは、次回以降の議論にもつながると思われる。引き続き、テキストを丁寧に読みつけてゆきたい。

報告者：高山花子(EAA特任研究員)

第1回 EAAブックトーク

2020年10月14日

2020年10月14日、研究員・RAによるはじめてのEAAブックトークが実施された。EAAスタッフによる研究活動の一環として多言語ブックレビューのコーナーを立ち上げるに先立ち、全体的なレビューの方向性と企画への期待をシェアする機会として設けた集まりである。当日の参加者は、高山花子(EAA特任研究員)、若澤佑典(EAA特任研究員)、建部良平(EAAリサーチ・アシスタント)、張瀛子(EAAリサーチ・ア

シスタント)、そして本報告執筆者の前野清太郎(EAA特任助教)である。集まった企画者たちがこれからレビューを通じて展開することを望むリベラルでオープンな学術空間を象徴する場所として旧制第一高等学校寄宿寮(駒場寮)跡をえらび、その前での「青空トーク」をセッティングした。

ブックトークを企画するにあたって、5名の参加者であらかじめ申し合わせてそれぞれが「読みどころ」



をアピールしたい数冊の本を持ち寄ってもらった。持ち寄せられた本は下記の通り（紹介順）。

- ・ アンダーソン, B. (著)、加藤剛 (訳) (2009) 『ヤシガラ椀の外へ』 NTT 出版
- ・ 阿辻哲次 (1985) 『漢字学——『説文解字』の世界』 東海大学出版会
- ・ 大江健三郎 (2013) 『晩年様式集——イン・レイト・スタイル』 講談社
- ・ 熊代亨 (2020) 『健康的で清潔で、道徳的な秩序ある社会の不自由さについて』 イースト・プレス
- ・ 王甫昌 (著)、松葉隼・洪郁如 (訳) (2014) 『族群——現代台湾のエスニック・イマジネーション』 東方書店
- ・ 長谷川まゆ帆 (2004) 『お産椅子への旅——ものと身体の歴史人類学』 岩波書店
- ・ 五来重 (1976) 『仏教と民俗 仏教民俗学入門』 角川書店
- ・ Blanchot, M. (1971) *L'Amitié*. Gallimard.
- ・ 箭内匡 (2017) 『イメージの人類学』 せりか書房
- ・ クローチェ, B. (著)、上村忠男 (訳) (1988) 『思考としての歴史と行動としての歴史』 未来社
- ・ カー, E.H. (著)、清水幾太郎 (訳) (1962) 『歴史とは何か』 岩波書店
- ・ デュモン, F. (著)、伊達聖伸 (訳) (2016) 『記憶の未来 伝統の解体と再生』 白水社
- ・ Lowenthal, D. (1985) *The Past is a Foreign Country*. Cambridge University Press.

本を持ってこようとしたは申し合わせていたが、ど

ういった本を各自持ってくるかは当日まで調整はしていなかった。しかし期せずして関心のクロスする本を持ち寄ることになった。もっとも「関心のクロス」を見いだせたのは、ネゴシエーティブに互いの関心を探り合うブックトークならではの成果であったかもしれない。各々持ち時間 15 分で持ち寄せた本の「読みどころ」を語り、それに続けて他のメンバーが話を展開していったのであったが、紹介される本が積み重なるにつれて、先の話題とのつながりが広がって新しい視角が生まれる経験は非常に心地よいものであった。

個別の本についての「読みどころ」の紹介は今後のレビューに期待するものとして、その代わりに各々の本をきっかけに広がった話題についていささか触れておきたい。報告者のみどころ概ね 2 つのテーマについて話題が広がりを見たように思う。1 つには学問する人の自己認識の問題、もう 1 つには過去について「書くこと」をめぐる問題であった。もっとも参加したスタッフはいずれも学問しかつ書く人間であるから、この 2 つも煎じ詰めれば自分たちの現在をそれぞれ解釈したいとの根本の動機に発したものであったかもしれない。

前者は B・アンダーソン『ヤシガラ椀の外へ』、箭内匡『イメージの人類学』、それから大江健三郎『晩年様式集——イン・レイト・スタイル』へ触れる中で出てきた話題である。ある学問への「外からの期待」と「中での議論の流れ」がしばしば一致しないなかでいかに学際的に生きていくか、アンダーソンが経験したような「梁山泊」的な空間がもつ可能性、あるいは絶えざる「晩年」のなかで自己をつねに再確定していく生き方について意見を交わした。

後者はとくに 18 世紀を研究フィールドとする 3 名(若澤・建部・張)が集っていたので、中華-西欧の学問的バックグラウンドをふまえた意見交換となった。人類学・民俗学・社会史に関するブックレビューも踏まえながら、「経」と「史」、「いにしえ」と「history」の間にあるずれと対立、中華的な枠組みと西欧由来の枠組みの不一致と齟齬に分析を広げる可能性に話が広がった。

インドネシアに「ヤシガラ椀の下のカエル」なる言い回しがあるという。あたたかい椀の中の心地よさに



やがてそこを世界の全てと思ひ込むようになる、との「井の中の蛙」に似た意味のことわざである。しかし「ヤシガラ椀から出る」ことはたして辛いことなのであろうか？ そして一旦そこを出たら戻ってきてはいけぬのか？ 決してそのようなことはないはずである。知を持ち寄って対話し、知をおのおのの「ヤシガラ椀」へ持ち帰る、そうした対話のハブ (hub) としての、心地よい「ヤシガラ椀の外」としての役割が「書院」的な場所がもつ知の可能性であると考えている。

報告者: 前野清太郎 (EAA特任助教)

第3回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年10月16日

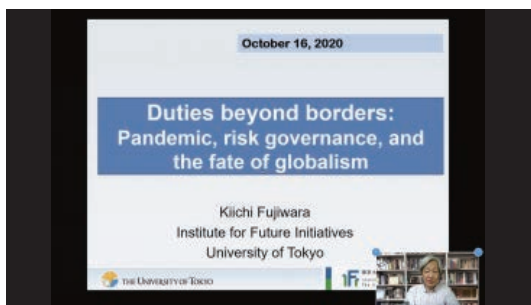
2020年10月16日、第3回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。今回は次回(第4回)との2回構成で、国際政治を専門とする藤原帰一氏(法学政治学研究科)を講師にお迎えした。

まず、藤原氏はCOVID-19の世界的流行を通して、国境を越える責任、またグローバル規模の危機に対するリスク・ガバナンスの再考について問題提起した。氏は、COVID-19の流行に対する各国首脳の反応、特にポピュリズム傾向を持った政治的指導者らの動向に注目した。例えば、アメリカ、イギリス、ブラジルである。これらの国では、権威主義的な姿勢で専門家の提言に耳を貸さず、また、国際機関や地域組織との協力・連携を軽視する、といった共通点が見られる。アメリカはパリ協定やWHOを離脱しており、イギリスのEU脱退、いわゆる「ブレグジット」

は記憶に新しい。

このようにナショナリズムの傾向が強まる中で、COVID-19が突きつけた課題とは、まさに今後の国際社会におけるリスク・ガバナンスであった、と藤原氏は強調した。これは東日本大震災と福島第一原発事故、9・11などのテロ、山火事や台風、ハリケーンといった自然災害や気候変動、移民・難民問題などにも当てはまる、という。こうした国境を超えて生起する現代の国際問題は、グローバルな連携によってのみ解決可能であり、それゆえに国際機関や地域組織の役割が以前にまして求められるだろう、と締め括った。参加した学生との討議では、特に「COVID-19の世界的流行において、ローカル・コミュニティとグローバルな連携との関係性をいかに捉えるか」を切り口に、アメリカや中国を例にとりつつ、活発な意見が交わされた。藤原氏と学生とのやりとりにより、ローカル・ガバナンスの重要性、同時に、ローカル・コミュニティが持つ経済的限界、政治的な限界が再確認された。また、COVID-19の流行と気候変動の例との比較も検討された。次回も引き続き藤原氏を講師に迎え、ポピュリズムについて議論がなされる予定である。

報告者: 二井彬緒 (EAAリサーチ・アシスタント)



成功人文講座 「東アジア儒学の近代的転換」シンポジウム

2020年10月16日・17日

2020年10月16日から17日にかけて、台南市の国立成功大学文学院にて「東アジア儒学の近代的転換」と題するシンポジウムが開催された。「成功」とは、明代末期から清代初期に活躍した鄭成功に因んだ名称である。明王朝に忠誠を尽くして、清が政権を樹立したあとにも南明政権を支えると共に、オランダ統治下の台湾を攻略し、かの地に漢人政権を打ち立てた人物だ。近松門左衛門の人形浄瑠璃『国性爺合戦』の「国性爺」とは鄭成功その人であり、母が日本人であったこともおそらくは関係して、江戸時代には歌舞伎としても上演されて人気を博した。鄭成功がオランダ東インド会社の支配する台湾島を攻撃して最初に上陸したのが、現在、成功大学がある台南であった。成功大学は日本植民統治時代の1931年に台南高等工業学校として創立され、中華民国に復帰したあとには国立（当初は台湾省立）の工業専科学校として歴史を歩んだが、1956年に成功大学と名称を改めるとともに総合大学化され、今日に至っている。

成功人文講座は、東アジア人文学コミュニティの相互交流を目的とするプラットフォームとして今回初めて開催されたものだという。ホームページの紹介によると、4年後の2024年にはオランダ人によって台南に初めて街が造られて400周年を迎えるとのことで、東アジアと西洋との複雑な歴史の結節点としての当地か

ら人文学を問うことを目指しているのだそう。会議に集まったのは、台湾から楊儒賓氏（国立清華大学）、林遠澤氏（国立政治大学）、藍弘岳氏（中央研究院）、香港から馮耀明氏（現在は東海大学）、中国大陸から賀照田氏（中国社会科学院）、そして日本からわたしの合計6名、世代と分野を超えてぜひいたくなメンバーがそろった。わたしは残念ながら、賀氏と共にオンラインによる参加である。会議のようすについては、YouTubeにてすべて公開されているのでご関心のある方にはぜひのぞいてみてほしい。

2日間たっぷりのプログラムでは、発表者1名あたり110分の時間が与えられたほか、ラウンドテーブル・ディスカッションにも90分の時間が割かれたが、閉会式に至ってもまだ議論が続き、参加者の一人一人に尽きせぬ余韻を残しながら終会するという、実に熱い会議であった。その背景には当然のことながら、人文学という優れて実践的な学問の、肌をジリジリと焦がすような熱が作用していたことは言うまでもない。その焼けるような切迫感は同時に学問に志す人びとの共感に基礎を与える。それを感じた瞬間、オンラインの阻隔は乗り越えられたとわたしは信じている。

報告者：石井剛（EAA副院長）



人文-社会科学の アカデミックフィールドを体験する

セッション2

2020年10月16日・23日

2020年10月16日および10月23日、全学自由研究ゼミ「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」の第2セッションが開講された。今回のセッションを担当するのは陳昭氏（総合文化研究科博士課程）である。文化人類学を専攻する同氏は、公園デザイン等を請け負う中国のデザイン事務所のなかで「デザインがつくられる現場」を記述する現代的エスノグラフィーへ取り組んできた。今回の第1週目のレクチャーでは同氏の調査（フィールドワーク）経験へ、調査「外」の経験を交えつつ、社会・文化が「社会的・文化的なもの」となるインターフェイスとしてのデザイン、とりわけ「パブリック・デザイン」に焦点をあてて話をしてもらった。

レクチャーは受講生への問いかけから始められた。スライドで提示された6枚の写真——ガラスコップ、義足、レジ袋の有料化表示、戸建て住宅、渋谷の宮下公園——について、それぞれが「パブリック・デザイン」と考えるものについて挙手を行ってもらった。答えはしばし保留しつつ、前半は陳氏が調査のなかでみたデザインをめぐる事例の紹介からはじめられた。

陳氏が調べたデザイン事務所は中国南部の都市で循環浄化型のエコロジカルな水辺を備えた公園（と付属のマンション群）のデザインを請負っていた。冠

水対策のための公園整備をすすめる自治体、デザインによって高騰する不動産価値、それを購入しうる外部の住民、取り壊しが進む中でも居住を続ける出稼ぎ労働者たちの多様なステークホルダーを紹介しながら「パブリック」はどこにあるのか、をめぐる問いかけが行われた。後半は参加者が通う駒場キャンパスへほど近い場所の事例をめぐる「パブリック」の問題へ入り込んでいった。例として挙げられたのは井の頭線沿いの坂道の景観であった。陳氏自身のほど近くに住まう坂道の、何気なく通っていた景観に、ある日突然線路沿いの防風柵が設置されたことで「景観が崩れた」と感じたパーソナルな経験から、「住民」とは誰か、「景観への権利」はあるのかの問題提起がなされた。

中国と日本の事例を見たうえで、レクチャーはふたたび「パブリック・デザイン」をめぐる問いかけへ戻った。権利の範囲を定めることの困難さをふまつつも、「問題によって構成されるもの」としての「パブリック」との視点をふまえたうえで、かかわりのなかで生成される「パブリック」性をもったデザインとして上記の6つの写真の例——ガラスコップ、義足、レジ袋の有料化表示、戸建て住宅、渋谷の宮下公園——がいずれも「パブリック・デザイン」でありうるとの指摘がなされた。



第2週目は以上の陳氏のレクチャーをふまえながら受講生からの話題提供（Google フォームで提出）をスプレッドシートに整理してディスカッションを実施した。「パブリック」とデザインをめぐる難しい議論ではあったが、受講生がみずからファシリテーターとなつてうまく議論の割り振り・交通整理を行いながらディスカッションを行ってくれた。今回取り上げた中国の事例も日本の事例も「当事者」、「受益圏・受苦圏」、「ランドスケープ」といった概念のもとで議論が展開されてきたテーマであるが、ダム建設や街並み保存といった具体例を引きながら「パブリック」はどこまでひろがりうるか、憲法に象徴されるような「公」といかに私たちがそれらと調和をとれるのかをめぐって各自が考えを述べてくれた。とくに投票へ行ってはいるも

の、日々の関わりにあつて「いろいろ面倒だからやめとく」があるのではないかと、との自省をこめたコメントへは講師役の報告者自身も心を衝かれた。これとは別に「パブリック・デザイン」であることと「バリアフリー・デザイン」であること、「ユニバーサル・デザイン」であることは調和がとれるものなのか、との指摘も非常に示唆に富んだ意見であった。

今後のセッションでも「パブリック」や私たち自身の社会へのかかわりのテーマが繰り返し形と視点を変えて登場する予定である。各セッションの積み重ねの中から、受講生がそれぞれの「視点」をつくってくれば何よりも嬉しく思う。

報告者：前野清太郎（EAA特任助教）

第5回「文学と共同体の思想」読書会

2020年10月17日

2020年10月17日、読書会「文学と共同体の思想」の第5回がZOOM上で開催された。当日の参加者は、王欽氏（EAA特任講師）、佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）、青馨（Qing Xin）氏（学部生・EAAユース）、及び本報告執筆者（ニコロヴァ・ヴィクトリヤ、総合文化研究科修士課程）の4名であった。今回は、フランス哲学者ジャン＝リュック・ナンシー（Jean-Luc Nancy）の著作、*The Inoperative Community*（英語版、Minn: University of Minnesota, 1991；フランス語原版は、*La communauté désœuvrée*. Paris: Christian Bourgois, 1990；日本語版は、『無為の共同体』以文社、2001年）を取り上げた。発表は王氏が担当し、序論に注目しながら本書が書かれた背景やナンシーの主張について全面的に紹介した。

まず、本書が書かれた背景としてEUの成立が指摘された。まだ冷戦が続く当時であったが、ナンシーは新しい経済的・政治的・文化的共同体＝EUの可能性を念頭に、あるべき共同体とは何か、という大きな問題意識の下で執筆を始めたと思われる。しかし、彼の議論は「政治的」でありながら、実際の「政治

を扱うわけではない。また、カール・シュミットが語るような力の関係或いは対立関係に基づく共同体と区別をつけ、別の意味での共同体に着目する。

ここで、ナショナリズムを共同体の一種として語ったもう1つの著作、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を王氏はとりあげた。共同体とは「われわれ意識」を持ったあまたの個人によって想像されるものだという本書の主張から、アンダーソンの議論の出発点は絶対的な存在としての個人であることが分かる。それと比べて、ナンシーの捉え方は逆である。ナンシーは、アンダーソンの議論の基盤となる伝統的リベラル思想を批判する形で、先に個人が存在しその上で共同体が成立するのではなく、先に共同体がありそこから個人がやつと生まれるとする。言い換えれば、アンダーソンにとって共同体とは言語を共にする個人たちの想像によってはじめて成立するのであるが、ナンシーにとっては言語を共にしていること自体が、すでに共同性の成立していることを示している。つまり、ナンシーはアンダーソンと全く逆で、共同体こそを議論の出発点とする。

さて、ナンシーの想定する共同体とは、いったいどのようなものなのだろうか。結論から言えば、それは実体 (entity) でもなければ本質 (essence) でもなく、あくまでも共に存在するという過程 (process) なのである。また、共通的存在 (common being) ではなく、共同での存在 (being-in-common) である。共通的存在というのは、共通のかつ本質的なアイデンティティ (substantial identity) のもとで成立し、理念や民衆やリーダーなどの一体化した実体、つまりナチ思想や保守的ナショナリズムのようなものを指す。一方で、共同での存在の場合は、本質的なものの不在と、共通のアイデンティティの無さを共有することが共同体の基盤となる。また、この共通のアイデンティティの無さが共有されることによって、共同体の有限性 (finitude) も明らかになる。しかし、元々有限的だった共同体が、やがて共通のアイデンティティを創り上げたりリーダーを生み出したり、同一性に向かうことで、有限性と共同での存在を失っていく。この変化は共同体自体の“work”の為に起こるものとナンシーが指摘するが、その具体的なメカニズムや歴史的解釈については言及がない。なぜなら、ナンシーの関心はそこにはなく、むしろいかに一体性を引き除き元々の共同体へ後退 (retreat) するのか、という点にあるからである。

目的も一体性もない、しかしだからこそ創造力に満ちる、いつまでも続く共同での存在という過程。このような共同体の回復を求めたナンシーは、最終的に「革命」と「文学」の力を再考することに至る。実は、本読書会の名前「文学と共同体の思想」もまさにここからインスピレーションを受けていると、王氏は説明してくれた。

議論において報告者はいくつかの疑問を提起した。即ち、ナンシーの想定する共同体の具体的な事例とは何なのか、過程としての共同体の「境目」がどこにあるのか、そして共同体と主体性の問題をどう考えればいいのか、という3点であった。以上の質問を受けて、王氏は、共同体の具体的な事例をあえて示さないというナンシーの議論の特徴を改めて指摘した。そして、1つの連想として、柄谷行人が提起するような“nomadism”について述べた。また、共同体と

主体性をどう考えるかという問題については、例えば友人や恋人同士の間における共同性、つまり一体性のない、自由な存在の共有 (sharing of life itself) が1つのヒントになるかもしれないと論じた。

続いて青氏は、ナンシーの議論の理論性を認めた上で、過程としての共同体は具体的な実体として存在しないながらも、それでも人に具体的な影響や悩みをもたらすことができると、ある種のリアルな側面を指摘した。これに対して、王氏はジョルジュ・バタイユの共同体論に触れながら、共同体の実践というリアルな難しさを再確認した。

佐藤氏は、共同体の1つの事例として大学を取り上げ、自身の経験について共有した。不満を感じさせる大学ではあるが、その一員であり続けたいと思えるのは何故だろうか。決して理想的でない大学ではあるが、私たちに希望をもたらすことができるのはどうしてだろうか。いずれも考えさせる質問で、答えが1つあるわけでは当然ないが、おそらく大事なキーワードの1つは「共有」であろうと、参加者の間で確認した。また、別の視点として、再び柄谷行人が想起された。柄谷は、特に所属を求めず、一生我が道を独り歩きしてきた思想家だと思われる。もしこのような柄谷の姿勢には一定の「強さ」があるのだとすれば、所属を求める私たちには、そして共同体にこだわるナンシーには、もしかして一定の「弱さ」があるかもしれないと、佐藤氏は投げかけた。これを受けて、王氏は、柄谷とナンシーはそれぞれ関心と課題が違うのは、2人は元々違う主義に立っているからであろうと、解釈を付け加えた。

他に、竹内好の「遊び」と魯迅の「孤独」、共感という概念、ナンシーによる「左派的」の再検討、等等、参加者は共同体を巡る様々な問題提起のもとで意見を交わした。まだまだ話が弾みそうであったが、2時間半以上にわたった今回の読書会は、次回への期待を込めて幕を閉じた。

報告者：ニコロヴァ・ヴィクトリア
(東京大学大学院修士課程)

第4回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年10月23日



Social origins of populism	
(1) Anti-elitism	Confronting the establishment 'Hick' and 'Rednecks'
(2) Nativism	Rebellion of the majority Exclusion of minority preference
(3) Illiberalism	Extra judiciary delegation of executive power
(4) Anti-globalism	Liberal internationalism as elitism Pull out from alliance & trade regimes
(5) Trump	Politics as a 24/7 reality show Global impact of Trumpism

2020年10月23日、第4回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。前回（第3回）に引き続き、国際政治を専門とする藤原一氏（法学政治学研究所）を講師にお迎えした。

藤原氏は、前回の講義に引き続き、グローバルな危機を前に、国際秩序が衰退しつつあると指摘した。その原因の1つとして、特に近年の各国におけるポピュリズムの台頭に注目し、米大統領ドナルド・トランプを例に、ポピュリズムの特徴を示した。これまでトランプ氏は一貫して、指導層として国家を動かしてきたエリートを排し（反エリート主義）、同時に移民に対しても厳しい政策をとってきた（排外主義）。また、トランプ氏は国内市場を優先し TPP や NAFTA など市場の自由化に反対してきた（反リベラリズム）。さらには国際政治における協調をも拒んできた（反グローバリズム）。

こうした米大統領のポピュリズム的な姿勢は、国際経済の縮小などの形でグローバル社会にも影響を及ぼ

している。また、アメリカが世界的な覇権という立ち位置から外れてきている。藤原氏は、これらのグローバルな変化が、COVID-19の流行でさらに加速していると強調した。

学生との議論では、アメリカにおける自由民主主義の今後についての意見が多く、自由民主主義と資本主義・官僚制との関係性、反エリート主義と反知性主義の融合、来月予定されているアメリカ大統領選の行方について、意見が交わされた。ほかには、学生からの意見として、アジアにおける排外主義や、国際司法裁判所など国際組織の影響力の低下が指摘された。前回のレクチャーに引き続いて、アメリカをはじめイギリス、インド、シンガポール、トルコ、中国など、様々な国を例にさらに深い意見交換が展開された、有意義な時間となった。

報告者：二井彬緒 (EAAリサーチ・アシスタント)

Look 東大・EAAデー

第1回参加記

2020年10月26日

ダイキン-東大産学協創のもとで進められてきた「Look 東大」プロジェクトが、このたび EAA にやってきた。理系研究者のラボラトリーをダイキン社員が

訪問して共同開発の種子を探すという趣旨で昨年来進められてきた試みが、フェーズを変えて「人文学」にも広がったのだ。EAA が北京大学とのジョイントプ

ログラムとして始まったのは、ダイキンの寛大なるご理解と多大なるご支援があったからにはかならない。だから、この企画はわたしたちにとっても願ってもいない喜ばしいものであった。しかも、駒場の人文学を代表するに最も相応しい3名（伊達聖伸さん、國分功一郎さん、武田将明さん）が、企画の提案後すぐさま協力してくれることになり、喜びはさらに大きなものとなった。國分さんからは「ことばを通じて人と触れ合う」という統一テーマも提案してもらった。わたし自身は、企画の趣旨を次のように記した。長くなるがすべて引用しよう。

このたび、Look 東大・人文系企画として、東アジア藝文書院がご協力させていただくことになり、たいへん光栄で、そしてうれしく存じます。

EAAは御社のご支援のもと、本学と北京大学とのジョイントプログラムとして、「東アジア発のリベラルアーツ」を目指した研究と教育を行っています。主に哲学や歴史学、文学などの人文系学問の研究者が集まっています。ダイキンと東大の産学協創は、産学連携の斬新なかたちを社会に向かって実践的に示す、絶好の機会だとわたしたちは思っています。この試みの目指すところは、この協創に関わる人びとが、触れ合いを通じて共に変化しながら成長し、そのことによって、世界と地球をよりよきものにするべき想像力と行動力を磨くことであると思います。そして、人と人が共に変化し成長していくことこそは、人文学がソクラテスや孔子の昔からずっと実践してきた学問のかたちそのものです。

わたしたちは、その「共に変化し成長する学問」としての人文学をダイキンの皆さまと共に楽しみたいと思います。わたしたちが用いるのは「ことば」です。そこで、今回の企画を「ことばを通じて人と触れ合う」と名づけました。オンラインコミュニケーションで、直に人と触れ合う機会は減ってしまいました。それでもわたしたちは、「ことば」を通じて、人と触れ合い、その喜びを分かちあいたい。なぜなら、それが人だからです。わたしたちは皆さんといつしょにそのための場を作っていきたいと思います。

この場は、EAAで学ぶ学生にも開かれることに

なっています。社会の第一線で活躍なさる皆さんと、未熟だが多感な学生との交流によって、相互に心地よい刺激が生まれることでしょう。

共に何かをするには、ちょっと汗をかかねばならないかもしれません。でも、汗をかいたあとの喜びはひとしおです。「学んで時にこれを習う、また悦ばしからずや。友あり遠方より来たる、また楽しからずや」——学問を通じた友情の喜びと楽しみこそが人を成長させる。この機会を利用して、そんな体験を得たいという皆さまのご参加を心から歓迎いたします。（ダイキン社内広報パンフからの抜粋）

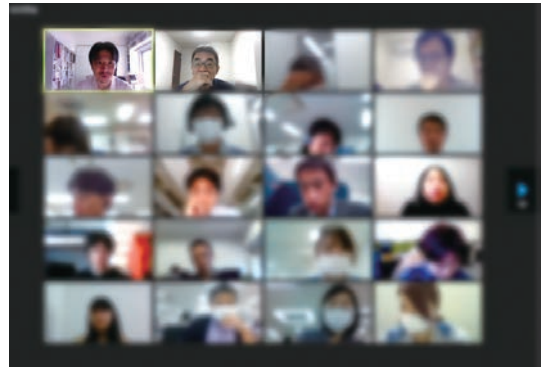
この企画を始めるに当たって、わたしたちがだいにしようと思ったのは、人文学を「共に変化し成長する」プロセスそのものであるとらえ、そのプロセスそのものを協働によって実践することだった。「変化し成長する」というのはもとより息の長いプロセスである。わたしたちの企画は毎回90分しかない。だから、わたしたちはこの短い90分を、長い人生のプロセスの中に一瞬つくられる「ポケット」として使い、変化の駆動をもたらす集団的なパフォーマンスを「ことば」によって試してみることにした。

10月26日に行われた3回シリーズの第1回は、伊達聖伸さんがファシリテーターとなり、ご自身が翻訳した戯曲、フランソワ・オスト『ヴェールを被ったアンティゴネー』（伊達聖伸訳、小鳥遊書房、2019年）を題材にして、この中から抜粋した台本を参加者に朗読して演じてもらった。伊達さんはさらに工夫を凝らし、そもそもソフォクレスの悲劇からの翻案として成立した同書をヒントに、さらなるアダプテーションを施した台本も用意した。それらは、学生が日本で実際にあった事例をもとに翻案したものであり、ライシテ理念とムスリムの摩擦は、職場における出産と育児という問題に置き換えられて、日本からは一見遠いと思われる問題が実はかたちこそ違えど共通して存在していることをじゅうぶんに示すこととなった。

このイベントのポイントは言うまでもなく、「演じる」ことである。台本を渡されてそれを咀嚼し、とにかく演じてみる。うまく演じようとする努力は大切だがうまくいかどうかは問題ではない。自分なりに、なり切ってみる

という姿勢だけがだいじである。「演じる＝play」とは、日常繰り返される為されるべきルーティーンからは逸脱した「遊び」でもあり、したがって、それは日常の中に一瞬うまれる「ポケット」となる。この「ポケット」の中で、参加者は、日ごろの自分とは異なる役回りを「演じる」ことを求められる。そのことは翻って、自らの日常に対する異なった視点を与えるだろう。30人を超える盛況の中で90分という時間はたしかにもの足りないものであったが、しかし、その一方で、「演じる」ことに興じたことを通じて、あるいは、この90分という「ポケット」の中に身を置くことを通じて、いつもとちがう何かを感じることはできただろう。それは、つまり、いつもの自分とは少し異なった視点から世界を見てみるという経験だ。そしてそれは、自分とほかの人の関係を見なおすよい機会になるはずだ。正解を求めることは、この試みの目指すところではない。たった90分で得られるような正解は、わたしたちのこの不可解な人生にはほとんどないだろう。そのようなものは、慰みにはなるかも知れないが、「共に変化し成長する」ための糧にはなりそうもない。それよりも、「演じる」ことで感じた「いつもとのちがいがい」のおぼろげな感覚の源を問いつづけることが、長い長いプロセスの中で変化するためのきっかけになる。『ヴェールを被ったアンティゴネー』の末尾には、「あなたの問いは何だったのかと訊かれるときが必ず来るはず」とある。だが、実は、もう問いは開かれているのだ。そして、問いこそが新しいものを到来させる鍵となる。

さて、いちおう今回のテーマ「ダイバーシティ」に関して私見を最後に述べよう。テキストは政教分離の学校現場におけるムスリムの信仰のあり方を問題提起



全国各地の社員の参加を得ることができたので、Zoomもにぎやかになった。写真はその一部。

するものであると一般には思われている。しかし、問題の核心はそれではない。愛する兄弟の死を悼むこと、愛するわが子の生を育むことは、時として学校や職場のルールに抵触する。しかし、死を悼むこと、子を産み育てることは、すぐれて社会的な行為であるはずだ。「愛」は愛し合う者同士の中だけで自足するのではなく、その周りの人びとの承認と共同において初めて表現される。それが社会の中でどこまで共有されるのかという問題は、わたしたちが人としていかなる生を生きて行くのかという問題そのものであり、わたしたちは「ダイバーシティ」を問いながら、実は、「愛」を社会的に支えるための条件を探っているのである。愛なき社会が長く持続するとは思えない。

きっと今後予定されている2回においては、トピックもやり方も異なりこそすれ、この同じ問いが繰り返されることになるだろう。

報告者：石井剛(EAA副院長)

第9回 石牟礼道子を読む会

2020年10月26日

2020年10月26日、Zoom上にて第9回「石牟礼道子を読む会」が開催された。参加者は、鈴木将久氏(人文社会系研究科)、張政遠氏(総合文化研究科)、佐藤麻貴氏(ヒューマニティーズセンター)、

高山花子氏(EAA特任研究員)、宮田晃碩氏(総合文化研究科博士課程)、建部良平氏(EAAリサーチ・アシスタント)、そして報告者の宇野瑞木(EAA特任研究員)の7名であった。発表は佐藤麻貴氏が担当

水俣病の教訓と日本の水銀対策



環境省

『水俣病の教訓と日本の水銀対策』（環境省環境保健部発行、2013年）

した。今回は、『苦海浄土』第3部「天の魚」を読む第2回目にあたる。サブテキストは、以下の通りである。

- ・ 宇井純 『公害原論』（亜紀書房、2006年）
- ・ Jean-Luc Nancy, *The Inoperative Community* (University of Minnesota Press, 1991)
- ・ 山脇直司 『公共哲学とは何か』（ちくま新書、2004年）
- ・ 環境省資料及び年表

今回の発表は、佐藤氏自身の専門とする環境哲学の立場から、石牟礼の「視点」に寄り添いつつも、その外側の水俣病や公害をめぐる研究の蓄積や環境省資料などの公的資料における理解を広く視野に収めた上で、改めて石牟礼のテキストの意味を問うものであった。

最初に、佐藤氏は、『苦海浄土』を読むにあたっての方針を以下の3点にまとめて示した。第1に『苦海浄土』に書かれたことをありのままに受け入れること、その上で第2に、あくまでも石牟礼の視点に立った患者のチツとの闘争描写であるという点を踏まえて公的資料を含めて事実確認する必要があること、第3に、環境哲学の視点を導入しながら、石牟礼と患者の個別具体的関係や当時の特殊事情にもとづく『苦海浄土』から、いかに普遍的なものを導き出すことができるかが読解における目標であること、である。

以上の方針のもとに、佐藤氏が『苦海浄土』第3部において特に着目したのは、あらゆるレベルにおける分断・闘争そして階層化の様相が描き出されている点であった。すなわち、第1部においてはチツ对患者という単純な二項対立構造であったのに対し、第3部に至ると、患者内部や患者を支える運動内部においても複雑な分断・対立が見られるようになる。また石牟礼の患者や運動内部の人々への筆致自体も屈折や距離感を見せるような側面が見られるという。

さらにこうした闘争・分断の構造が、そもそも命と尊厳という戻らないものへの憧憬に根差しており補償や金銭によって解決できるものではないこと、チツ・医師・行政と患者との対話不可能性と利己主義による公の領域の消滅との関係、「悲しみや怒り」と「憐憫と共感」の違いといった問題を、テキストにそって提起していった。

佐藤氏はこのような救いのない人間のありように対し、キリスト教や仏教などの宗教にまつわるフレーズが挿入されることの意味を検討した上で、そうした宗教的真理やある明示的な理想・思想を共有するのは別の「コミュニティ」の在り方としてジャン=リュック・ナンシーの『無為の共同体』を参照した。佐藤氏によれば、「無為の共同体」とは、ある真理が崩れた時に、共にあって再定義をしていこうとする最中に現われ得るもので、対チツのような思想を共有するのではない「共にある」という在り方と石牟礼の思い描く共同体との関わりを示唆した。

最後に、宇井純の『公害原論』（2006年）を参照しながら、公害問題の諸相と教訓、また原則として被害発生後に「原因究明→原因の判明→反論→中和」の起承転結の段階を踏むことなどが示された上で、佐藤氏自身の考える対処法が具体的に述べられた。それは公害をそもそも起こさないようにする予防策の徹底、情報の透明性の担保、公平な対処（公共空間の再構築）、幾種かの対話、善く生きるための知恵（カリタス、フィリア、ケア、仁）などであった。

質疑においては、ナンシーの「無為の共同体」の在り方において、コミュニケーションや対話が成立するためには、1つの理念などを共有しているのではなく分かれたれていることが大事であり、それは石牟礼の

求める共同体と通じる側面があるのではないか、という意見があった。さらに、そこで共有され得る「悲しみ」という契機（悲しみをはかるものさしはなく、ただ分かり合えないという悲しみは共有され得る）が石牟礼の分断的なテキストの特徴と響き合う点が見出された。

一方で、公害問題や環境問題といった知識が、石牟礼のテキストを読む行為を阻害する可能性も指摘された。これに関連して、対話をすることができない死者、或いは患者といった存在をどう考えるのか、という問題と石牟礼のテキストは関わっており、公的資料には掬い取られない物語が必要となる側面が改めて議論された。

また個別具体性から普遍性へと開く、という時の「普遍性」とは何か、という質問もあがった。これに対し、

佐藤氏は具体的に実用可能な最善の解決を考えることであるとし、What から How へのシフトを訴え、哲学や学問というものに携わる者としての在り方そのものを問う形で会は閉じられた。

今回、石牟礼の外部の水俣病や公害に関するコンテキストが提示されたことで、石牟礼のテキストの文体・思考と共に「漂浪（され）き」、「経巡る」ことでどのような経験に開かれるのか改めて考える契機を得たように思う。テキストを通じて、それぞれが分かれたながら共にあるという私たちの研究会の在り方についても、続けて考えていきたい。

報告者：宇野瑞木(EAA特任研究員)

第1回『天下的当代性』を読む会

2020年10月28日

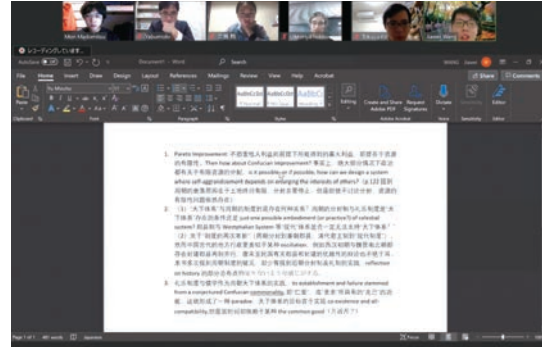
2020年10月28日、第1回『天下的当代性』を読む会がZoom上で開催された。これはEAAの「東アジア教養学」に集う学生が中心となって企画した読書会であり、当日は、ヴィクトリア・ニコロヴァ氏（総合文化研究科修士課程）、孔徳湧氏、藪本器氏、王嘉蔚氏、熊文茜氏、報告者の円光門の計6名（いずれも学部生・EAAコース）が参加した。

『天下的当代性——世界秩序の実践与想像』（中信出版集団、2016年）は中国社会科学院哲学研究所研究員の趙汀陽氏による政治哲学の著作である。今日の国際社会を支配するとされているリアルポリティックスの代替案として古来より中国哲学において醸成されてきた「天下」という概念を軸とした新たな世界秩序が提唱され、グローバルプレーヤーとしての現代中国の行動原理についても垣間見ることができる、単なる政治学上、哲学上の意義に留まらない1冊だ。

読書会の進行としては、各参加者があらかじめ割り振られた範囲のテキスト要約を担当し、王氏が全体の議論に関する疑問を提起するという方法をとった。今回主に扱ったのは、序章と第1章（1～130ページ）

である。王氏はまず、筆者が「パレート改善」のより良き代替案として「孔子改善」を掲げている点に言及し、前者は資源の希少性を前提としているのに対し、なぜ後者においてはそのような前提は不要なのかと尋ねた。熊氏はこれについて、経済学的に考えると、長期的には全ての財の供給量は変動可能になると述べ、現時点の状況をもとに判断する「パレート改善」に比べて「孔子改善」はかなり先の未来までを想定するため、資源の希少性の問題も解決され得るのではないかと回答した。次に王氏は、「天下体系」は一切を排除せずに全てを内部化する秩序であると筆者は主張するが、秩序構造が「共通善」という1つの価値に依拠している点でその主張は矛盾をはらむものにはならないかと指摘した。これに対し藪本氏は、筆者は「共通善」をあくまで「天下体系」を実現する過程での手段と見なしているのであり、それ自体を目的視しているのではないと解釈すれば、矛盾は回避することはできるのではないかとの見解を示した。

その他にも、参加者から多くの重要な疑問が提起された。ニコロヴァ氏は、著者が費孝通『郷土中国』



の引用のもと、家庭における仁愛は国家や天下における普遍的な仁愛を保証しないと述べている点に着目し、費孝通の『郷土中国』はあくまで中国社会の日常性に着目した民俗学的な著作であるから、それを本書の議論で引用することは文脈を無視することにつながるのかとの懸念を示した。孔氏からは、筆者が言う人民の「利益」とはそもそも何を指すのか——それは精神的な利益を含むのか、それとも物質的あるいは功利主義的な利益に限られるのか——という疑問が提起された。また、円光は、ホブズなどの西洋政治哲学が「衝突」や「排除」を基調としているのに対し中国哲学は「協働」や「包摂」を前提としているのだとする筆者の議論の枠組みは、ホブズの一面的な解釈に与するものであり、さらにアリストテレスやプーフエンドルフといった個人間の「協働」を重視

した議論を捨象することにはならないかと述べた。いずれもすぐには答えを出し得ない疑問であり、今後さらなる議論が期待された。

全体として特筆すべきは、6名の参加者の専攻が思想史や東洋史から経済学、政治学に至るまで実に多様であり、1つのテキストを前に各参加者がそれぞれ持つ知識や問題意識に基づいた多角的な議論が展開されたことだ。上述のように本書が扱う問題は政治学や哲学に留まらない領域横断的なものであるから、参加者のこのような顔ぶれは本書を読解する上で大変適していると考えられる。次回の『天下の当代性』を読む会は11月下旬の開催を予定している。

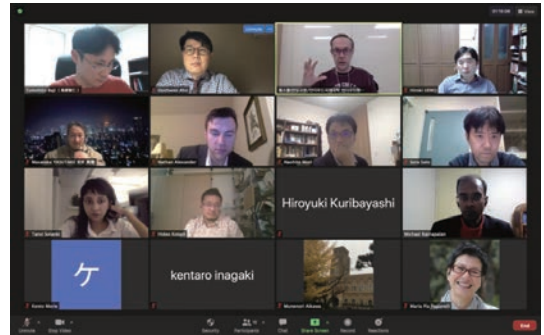
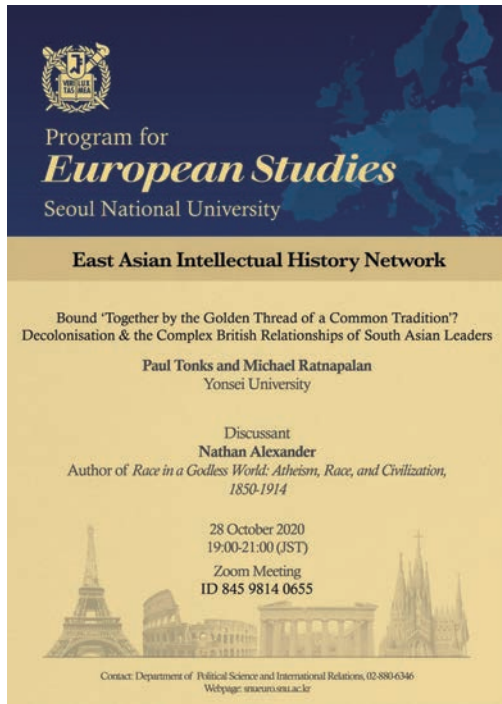
報告者：円光門(学部生・EAAユース)

EAIHN Online Seminar Series (1)

2020年10月28日

On 28 October 2020, the East Asian Intellectual History Network, through the auspices of Seoul National University's Program for European Studies, hosted a talk by Paul Tonks and Michael Ratnapalan (Yonsei University) entitled 'Bound "Together by the Golden Thread of a Common Tradition"? Decolonisation and the Complex British Relationships of South Asian Leaders'. After gracious opening remarks by the organizer, Doohwan Ahn (Seoul National University), Michael Ratna-

palan sketched out the primary literature on which the paper depended as well as its broad contours, such as its chronological shape and its focus on the postwar British Commonwealth. Paul Tonks then expanded on the varieties of secondary literature with which the presenters sought to engage, particularly as they related to themes of British identity that would have been familiar to conference participants. In his formal response, Nathan Alexander offered a number of insightful comments about



empire and its legacies and he also raised valuable questions concerning the scope and methodology of the research. Conference participants developed these and other themes in the ensuing lively wider discussion.

Reported by Paul Tonks and Michael Ratnapalan
(Yonei University)

第5回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年10月30日

2020年10月30日、第5回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。次回（第6回）との2回構成で、中国近代思想史を専門とする欧陽哲生氏（北京大学）を講師にお迎えした。主題となったのは近代中国の思想家で、トマス・ハクスリーの『進化と倫理』や、アダム・スミスの『諸国民の富』を翻訳した人物として有名な嚴復（1854年-1921年）である。

学生の質問は嚴復の進化論への理解に関するものが多く、彼の翻訳によってハクスリーの社会進化主義が如何に当時の中国で受容されたのか、形を変えながら繰り返し問われた。欧陽氏の応答によれば、嚴復は必ずしも社会進化論を積極的に提唱していたわけではない。伝統的な学問が崩れ、国際情勢も刻一刻と変化している中で、如何に新しい形の社会倫理を構想するかということが、彼の喫緊の課題であった。嚴復は翻訳を通して如何に当時の世界に適合してい

こうとしたのか。翻訳に桐城派古文を用いたことも含めて、嚴復のテキストを読解する必要があると欧陽氏は主張した。

また質問では、日本の福沢諭吉との比較可能性に言及したのもあった。近代期における東アジアの知識人の活動として比較できる点が多く、既に多くの論考がこれを論じているが、いずれにせよ当時の様々な



嚴復（1854年-1921年）

試みを現在の文脈で再読することの必要性が説かれた。

今回の講義では、厳復よりも少し後に活躍した蔡元培 (1868年-1940年) が取り扱われる。現在の北京大

学の基礎を作った人物が如何に解釈され、学生たちはどのような質問をぶつけるのか。非常に楽しみである。

報告者: 建部良平 (EAAリサーチ・アシスタント)

「空間プロジェクト」キックオフ座談会

2020年10月30日

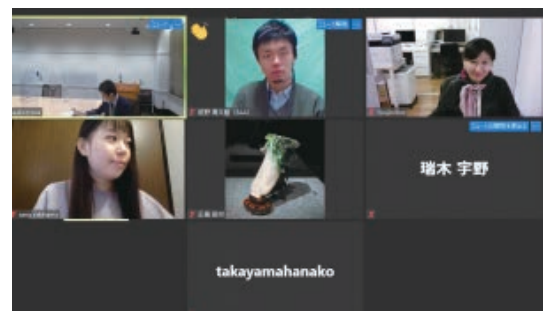
2020年10月30日、EAAスタッフが企画する新しいプロジェクト「空間プロジェクト」のスターターイベントとして「キックオフ座談会」が行われた。昨2019年末に始まったCOVID-19の流行は半年を経ずして全世界へ広がった。現在、この報告を記している今も世界の全ての (pan) 人々 (demos) が常ならぬ状況を現在進行形で経験しているが、それは病のもたらず巨大な死や恐怖でもあるが、より共通項的に言えば社会的な・空間的な断絶であるように思われる。社会的に隔てられて (socially-distanced)、身体的に隔てられて (physically-distanced) 私たちが感じている空ろな間 (空間) が持つ意味について、いまこの時をきっかけに考え直してみたい。

文学・哲学・社会学・政治学・歴史学に基盤をもつEAAスタッフがそれぞれの経験と視点から何が見えてくるのか、その下作業として今回の「キックオフ座談会」は実施された。当日の参加者は、田村正資氏 (EAA 特任研究員)、宇野瑞木氏 (EAA 特任研究員)、崎濱紗奈氏 (EAA 特任研究員)、高山花子氏 (EAA 特任研究員)、若澤佑典氏 (EAA 特任研究員)、具裕珍氏 (EAA 特任助教) そして報告者の前

野清太朗 (EAA 特任助教) の7名であった。

今回「空間」ということをキーワードにEAAの若手スタッフが集まったのは、やはり上記のような現在の課題意識を共有できたことにあった。同時に、各人それぞれの異なる研究領域から「とっかかり」を見出しやすい共通のキーワードとして「空間」なるものがあるということに事前のささやかな対話からスタッフが気付いたこともある。今回の座談会はその「とっかかり」を各自出し合って方向性を示すブレインストーミングのイベントでもあった。

当日は各自がA4で2枚程度の簡単なレジュメを用意して質疑、議論、総合討論を行う形ですすめられた (若澤氏は学外講義のため最後の総合討論にのみ出席)。トップバッターは具裕珍氏である。政治学を専門とする具氏からは、政治的行為の空間 (space) 的分布と政治的行為が展開される場あるいは圏 (sphere) にいて問題提起がなされた。地理情報システム (GIS) を使って「数」を空間的にマッピングすることによって見えるようになる構造の問題、あるいはデータセットに表れにくい広場での活動の問題 (国会前は「政治的広場」として機能してきたか?)、または広場のよう



な可視的公共圏とSNSに代表されるような潜在的公共圏の問題について議論がなされた。

続いたのはフランスの哲学者メルロ＝ポンティを主な研究対象とする田村正資氏であった。田村氏からはメルロ＝ポンティの議論をきっかけに、彼が言及をおこないつつも十分に論じつづかなかった「空間」の問題について論を展開しうるいくつかの方向性が提示された。世界に対する私たちの根源的な姿勢であるところの知覚が、現在の分断された状況によっていかに変容し、私たちが空間へ立ち向かう姿勢をつくっているのか。あるいはポストモダンの理論においてしばしば論じられてきた没場所性 (placelessness) ということが、むしろ現代においては没場所的などところに根付くこと、それによって獲得される固有の空間経験というものを考えることができるのではないか。またやはり分断のもとで見直される「空間をともにする」ことの間 - 身体的な意味といったことが論の方向性として提示された。

3番手は報告者 (前野) であった。前野からは、自身の農村研究者としての研究経験をふまえつつも、プロジェクトの立案者の1人として、とくに社会科学の各学問についてこれまでの「空間」論の俯瞰図を示した。都市フィールドワークによって発見された空間的な権力関係の批判から現在まで続く空間的な「抵抗」の議論をふまえつつ「空間」論が示した空間 - 社会関係の闇の面 (空間からの関係の拘束 / 社会からの空間分断) と光の面 (空間が関係をつくる / 社会からの空間創造) の2側面について指摘を行った。俯瞰に基づきつつ、権力と設計が生み出す分断 (division / segregation) への批判は確かにその通りなのだが、同時に区切る (framing / curving) することで生まれる「むれ」 (group) について光を当てた議論が分断の深まる現在にあって可能性を持っているのではないかとの問題提起をおこなった。

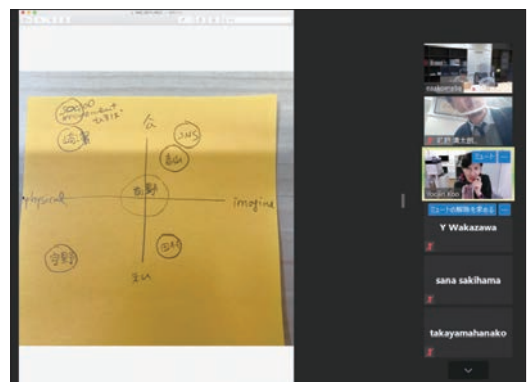
4番手の崎濱氏からは自身の過去の「沖縄」を対象とした研究をふまえながら、アジアの都市論への展開可能性について議論のたたき台が提示された。歴史性と社会性が交錯し反映する場所としての「沖縄」論を念頭にしながら、同様に歴史性と社会性が交錯する場所として諸都市をとらえることはできないか。それは近代性・資本主義・空間変容の都市への反映

をとらえることでもあるが、しばしばオリエンタルなまなざしのもとに、叢生する自己増殖的な場所として語られてきたアジアの都市についての新たな論の展開が可能なのではないかと問いかけが行われた。

5番手の高山氏は、フランスの文芸批評家ブランシヨの文芸評論集『文学空間』(1955年)を引きながら、そこに現れる現代空間論について議論を展開した。1つの議論の切り口として取り上げられたのが、私たちの内なる空間と、私たちが接しえない外部の空間の間の隔たり・距離を象徴するものとしての街路 (la rue) であった。誰のものでもない「誰か」の日常空間である街路と私たちは隔たりながらも常に関係をもっている。ここから、私のものではない空間とわたしのものである空間が通じてしまっていることによることからの、隔たることでの「共同体論」がブランシヨの思想をめぐって議論された。

報告の最後となった宇野氏は、東アジアの説話と図像学の研究を専門としている。宇野氏は自身のこれまでの研究において取り上げてきた説話を対象に、説話を「空間」を通じて相互に関係しあい生成・構造化される諸現象 (文字テキスト、イメージ、音声、儀礼空間、身振り) として捉える枠組みが提示された。すなわち説話の現れとして墓 (陰宅)、家屋 (陽宅)、寺社をとらえ、人々によっていわば「生きられた説話」の実践される場として空間を分析の主軸へ据えることで広がる可能性が示された。

EAA スタッフはこれまで各自異なる専門から研究を行ってきたが、今回「空間」という「お題」のもとに相互の研究を改めて知る貴重な機会ともなった。総



合討論では各自の研究的バックグラウンドと現在の世界をとりまく状況をふまえ、論の可能性を広げる議論が展開された。政治的な影響力と物理的な「肉」（身体）の圧力の問題、東アジア「外」に発するポストモダン空間論が東アジア的な「空間」概念に乗って展開されてきたなかでいかに普遍的なレスポンスとしてそれを返すか、「孝」における肉体の忌避、路地・ストリート・土間におけるパブリックとプライベートの問題、などなど議論は非常に多岐に及んだ。

ただしやはり今後のプロジェクト展開についてはまだまだ課題も少なくない。これも総合討論において議論された事柄であるが、領域横断的なプロジェクトがしばしば直面する「空中分解」を避けるための軸の設定は切実な問題である（報告者自身はいくつかのブランチへの議論の派生を歓迎している）。また現在の「空間」をめぐる議論のベースを構成しているハーバースマスやアンリ・ルフェーヴルの議論が提示されて

より半世紀前後を経過しているが、これを「超える」新たなフレームが提示できるかもプロジェクト上の大きな課題である。

以上の通り「キックオフ座談会」では多くの可能性と課題が示された。報告者（前野）自身は、COVID-19をきっかけとした社会的な・空間的な断絶を、オンタイムな経験として同時代的に残すこともプロジェクトの一意義であるように考えている。人間は存外に高いレジリエンス（抵抗力）を備えた生物である。それがゆえに私たちは辛い経験を克服することもできるのだが、それはともすれば得られたはずの教訓を忘れてしまうことにもつながる。少なくとも本プロジェクトが5年、10年を経て経験を回顧する「とっかかり」となるものとしていきたい。

報告者：前野清太郎（EAA特任助教）

全学自由研究ゼミ

人文-社会科学の アカデミックフィールドを体験する

セッション3

2020年10月30日・11月6日

2020年10月30日と11月6日、全学自由研究ゼミ「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」の第3セッションが開講された。今回のセッション「貧困に対するまなざし」を担当するのは宮川慎司氏（総合文化研究科博士課程）である。宮川氏はフィリピン都市部のスラムを対象に、スラムへ生きる人々の「戦略」と公的機関との関係性について、掘り下げた（in-depth）聞き取りのデータ、質問紙による俯瞰のデータ、そしてスラム外の新聞や議事録といった史資料のデータを駆使した研究を行ってきた。Week 1のレクチャーではスラムにおける「盗電」現象について、スラムの内なる「社会規範」をテーマに、インフォーマリティ/フォーマリティ/リーガリティ/イリーガリティ

の4象限の枠組みを使って授業を行ってもらった。

社会規範（social norm）は社会学、とくに小規模集団を対象にした社会学が扱ってきた伝統的なテーマである。価値に対する認識の問題や視点の転換を背



景に、この伝統的テーマが、経済、法、政治、社会をまたいだ社会科学の諸領域で現在広く論じられつつある。とくにスラムという空間は、それ自体がいわゆる「不法居住」により形成された場所であり、公的な法制度の規定する違法＝イリーガルな対象である。しかしスラムへ住まう当の人々がその空間で展開する日常の行為は、すべて違法／合法に2分割されて行われているわけではない。「違法ではあるが正当」であると認識される領域（許容されるインフォーマリティ）がそこへはモザイク状に入り混じって存在している。スラムでの「盗電」という行為はかつて「違法ではあるが正当な」行為とみなされていたが、近年のEMCs（高所集合メーター）導入といった技術的变化やドゥテルテ政権によるフィクサー（行政との私的パイプをもつ有力者）排除の影響を受けて、その行為を「正当化する論理」と「批判する論理」のバランスが変わりつつある。

現代の私たちも、程度の差はあれ大小サイズを異にする集団やコミュニティのなかに生きている。そしてそれらの集団やコミュニティには内輪のルールとしての「社会規範」をもっている。スラムという現代日本から遠く隔たれた場所のように思われるが「社会規範」という概念を通じて私たちの日常を見つめ直す「まな

ざし」をふりかえる授業であった。

Week 2は、宮川氏から受講生へのそもそも「許容されること」（許容度）をいかにいかにできるか、との問いかけからディスカッションがすすんだ。これは調査論の一種でもあるのだが、そもそも「何かが許容されること」へ尺度をつけられるのか、質問の発話者によって尋ねられた相手のリアクションが変わることもありうるのではないかと、といった議論が交わされた。また「貧困」「法」「まなざし」などのキーワードから「貧困バッシング」がなぜ許容されてしまうのか？ 規定される法そのものの「暴力」をいかに考えるべきか？ などよりメタな・より広い文脈の議論が展開された。

今回からレクチャーとディスカッションの内容から派生した「Further Readings」を講義後メールで受講生へシェアするようにした。講師・ゲスト陣ともに多様な研究バックグラウンドをもっているため、その研究歴と読書歴を活かしつつテーマを深める・広げる書籍の情報をシェアする試みである。紹介された書籍が、受講生の今後の進路選択やとりくむ「学び」に対していささかでも益することがあればと願う。

報告者：前野清太郎（EAA特任助教）

第3回 日中韓オンライン朱子学読書会

2020年10月31日

2020年10月31日、日本時間16時より第3回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。これまで同様、EAAのほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心、科研費基盤研究（B）「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」との共催である。

今回は田中有紀（東京大学）が司会を務め、中嶋諒氏（明海大学）が2014年10月に出版した『陸九淵と陳亮——朱熹論敵の思想研究』（早稲田大学出版部）の第2部『象山先生文集』の諸本についてをとりあげ、報告を行なった。

一般的に、陸九淵（1139年-1192年）は王守仁の先駆とされ、「陸王心学」と呼ばれる。しかし現存する陸九淵の文集（『象山先生文集』）には、王守仁あるいはその周囲の人物が意識的に改変した痕跡が見受けられるが、これまで陸九淵の文集に対し文献学的な考察はあまり行われてこなかった。

『象山先生文集』の諸本は、陸持之編纂本の系統に属するもの（明の陸時寿刊本、陸和刊本を経て、現在、中華書局の『陸九淵集』に収録）がその主流を占めていたが、明の正徳年間に王守仁の意向を反映したと思われる李茂元刊本（清・四庫全書『象山集』



に収録) が刊行された。陸持之の編纂本系統の文集では、基本的には書簡を年代順に並べるが、邵叔誼や朱熹への書簡は巻一、巻二に移動されており、これらの内容については、陸九淵が自らの自信作であると述べている。一方、李茂元刊本には、「聖人之学、心学也」という一句で始まる王守仁の序文があり、李茂元が王守仁に序文の執筆を依頼した経緯についても記されている。書簡の配列については、「心即理」の句が唯一見える「与李宰」二が、陸持之の編纂本系統では、巻十一に収められていたにもかかわらず、李茂元刊本では巻二に収められている。

「心即理」は、王守仁とその後継たちが好んで用いた句である。また、無極太極論争を主題とする書簡群を収める「与李元晦」一～三を、巻十二に紛れ込ませている。これは朱陸の異同をいうことに消極的だった王守仁の意向を反映している可能性がある。陸九淵がそれほど哲学的な意味を帯びさせずに用いた

「心即理」の一句は、王守仁以降の時代になると突如注目されるようになり、陸九淵があたかも「陸王心学」の開祖のように認識されていくのは、王守仁が活躍する正徳年間以降に、人々が作り出した虚像だといえるのではないかと。

以上の報告に対し、参加者からは多数の質問が寄せられた。たとえば、李茂元刊本の影響はあるのか、陸九淵自身は本当に心学を意識していなかったのか、王陽明とは異なるが「心」について考察していたのではないか、朱熹の「心」の理解との違いは何か、さらには、「性即理」の朱子学と「心即理」の陽明学という構図に対して、報告者はどのような立場をとるのか等、議論は中国思想研究における様々な重要テーマに及び、大変有意義なものとなった。

報告者：田中有紀(東洋文化研究所)

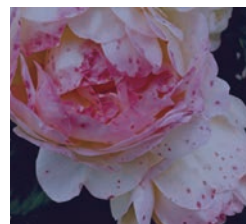
話す／離す／花す(1)

思考のスペースを開ける

中島隆博 (EAA院長)

2020年11月3日

EAAの新しい試みとして、EAAメンバーがリレー式でエクリチュールを届け合うことにいたしました。「話に花が咲く」と言いますが、単なる情報伝達ではない表現が重要です。宮本久雄先生が「喩え話というのは半分できた話で、あとの半分は聞いている人が作る」とよくおっしゃっていました。これは聖書のエクリ



チュールだけの特徴ではないはずです。話は、その人単独で完成することはありません。それを聞いた人が、話し直して、より花が咲くように語り、書くことが求められているのです。

EAAでは様々な活動を同時多発的に行っています。それは決してツリー状に整頓されたものではありません。

せん。逆に、リズムのように次々に別のものと繋がり、たえず姿を変えていくイメージです。ですので、全体を見渡したとしても、その全体は変容し続けるものでしかありません。それは全体なるものを逃れると言った方がよいかと思います。それでも、メンバーのひとりひとりがどのようなアスペクトで、自分たちの活動を見ているのかを表現することは重要です。その表現自体が、EAAの活動に折り返されるからです。

「離す」は考えさせられる言葉です。所有を中心とする価値観において、何かを離すのは容易ではありません。しかも、この新型コロナ禍においては、強制的に離されることも経験しているので、なおさら考えさせられます。それでもエクリチュールがそうであるように、自分の手を離れ、旅することが必要な場合もあり

ます。言葉を読むことや書くことは、実は大変な行為です。読むことによって頭があらぬ方向に持っていかれたり、また書くことによってまったく新しい次元に踏み入ったりすることはよくあることです。それは一種の危機なのですが、どこかで自分を突き離すことによって、距離を取ることができれば、危機を転機に変えることもできるはずです。自分の手から離すこと、自分を突き離すこと、あえて離れることが、何らかのスペースを作り上げるのでしょう。それを思考のスペースにすることをEAAは実践してみたいと思います。

今後のEAAのエクリチュールのリレーがそのような思考のスペースを開けることを念じております。

写真撮影：高山花子（EAA特任助教）

第6回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年11月6日

2020年11月6日、第6回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。前回に続き欧陽哲生氏（北京大学）を講師にお迎えした。主題となったのは近代中国の思想家であり、南京臨時政府の初代教育総長や、北京大学の学長などを歴任した蔡元培（1868年-1940年）である。

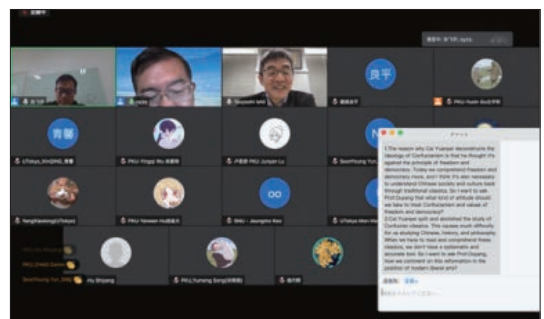
北京大学の歴史は1898年に京師大学堂が設立されたことで始まるが、「兼容并包」などを理念として掲げる現在の北京大学は、蔡元培によって行われた大学改革に端を発している。蔡元培は当時の新文化運動の潮流の中で、中国の学問状況を大きく転換

させた人物であると考えられており、現在でも中国の学問を牽引する大学の1つである北京大学にとって、蔡元培は常に立ち返るべき偉人として存在感を放っている。

その影響もあり、学生からの質問は北京大学や学問のあり方についてのものが多く見られた。大学運営の独立性、教授が果たすべき役割、大学教育における経学の位置付け、儒学倫理の重要性、美学と宗教の関係。いずれも蔡元培が持ち続けた問題意識に関係するものであり、欧陽氏は北京大学の現役の教授として、そして中国近代の研究者として、学生の質問



蔡元培（1868年-1940年）



に真摯に答えた。その内容を簡潔にまとめるならば、世界情勢と大学の関係という点に収束させることができる。蔡元培が当時の情勢の中で大学を考えた様に、今日においても様々な世界情勢への対応（対応の拒否も含む）が求められ、蔡元培の理念と現在の状況の狭間で柔軟に思考を展開しなければならない。蔡元培が伝統的な学問体系に反対の立場をとりつつも、

同時に儒学の人文主義の可能性も信じていたように、彼もまた新旧の狭間で思考と実践を展開していたのである。蔡元培の実践を尊重しながら為された質疑応答によって、今後の大学のあり方を考える上で非常に示唆的な講義となった。

報告者: 建部良平 (EAAリサーチ・アシスタント)

Look 東大・EAAデー

第2回参加記

2020年11月9日

先日報告したように、ダイキン-東大産学協創プロジェクトの一つとして推進されている「Look 東大」がEAAとの協働で行われることになりました。全3回シリーズの2回目は11月5日に行われました。今回は、國分功一郎さんがジョルジオ・アガンベンという著名な哲学者の短いエッセイを題材に進めてくださることになりました。このエッセイは2020年4月13日という、今となってはCOVID-19のパンデミックが始まったばかりと言える時期にイタリア語で発表されたエッセイです。英語版は4月15日に公開されています。それは「1つの問い」というシンプルなタイトルの短い文章ですが、その中でアガンベンは、新型コロナウイルス感染症流行から防衛するために世界中で行われている人びとの隔離やロックダウンなどの政策にきびしく異議を唱えています。参加者の皆さんは、國分さんがご自身で行った翻訳（國分さん、お忙しいなかありがとうございます!）をあらかじめ読んでおいた上で議論することを求められていました。

アガンベンの異議はおよそ3点にまとめられます。1) 感染症によって亡くなる人を看取することも葬儀することもできないのはおかしい；2) 人びとの移動の自由が奪われたことはおかしい；3) 生きることの意味から感情を持つ文化的な生き方が切り捨てられ、単に生物学的で植物のような生の維持だけが問題となっていることはおかしい。これらは、人間の尊厳を揺るがす根本的な問題であり、非常事態だからという特別な理由

であるとしても許されるべきではないと彼は言います。なぜなら、これらの例外を認めることは、あたかも「善を守るために善を諦め」、「自由を守るために自由を諦め」ようにすることと変わらないからというのです。

さて、こうした議論に対してエッセイの読者はどのように反応するでしょうか。そして、参加者の皆さんはどのように反応したでしょうか。

今回もまた、前回と同様、多くの参加者を得ることができました。ダイキン社員の皆さまが大きな期待を寄せくださっていると感じ、この上なくありがたく、また身が引き締まります。しかし、時間はやはり限られています。その限られた時間のなかでなるべく皆さんが相互に意見交換ができるように、今回は Zoom Meeting に具わっているブレイクアウトセッションという機能を利用しました。國分さんのアイデアでグループの人数は3名に制限されました。『論語』にも「3人いればその中には先生がいる」と言われます。「3」という数字は自分にとっては思いがけない視点を他の人から得るためのラッキーナンバーなのです。

短いグループ討論の前後には、國分さんから巧みな解説が加わります。その度ごとに新たな視点が提供され、おそらく参加者は共通して、エッセイへの理解が深まったと感じたにちがいません。

「こんなに深くは読めなかったので感心しました。」

「当初よりも深く内容を理解することができました。」

こんな感想が口々に発せられていきました。「深さ」に気づいたことは、アガンベンの挑発的ではあるけれど哲学的な議論への理解や、人文学的思考への理解が深まったということで、この企画に参加することで有意義な「学び」を得たことになると言えます。しかし、わたしはここでちょっと立ち止まってみたいと思います。

こうした感想が寄せられた一方では、次のような疑問もちらほらと上がってきました。

「葬儀ができないということにそこまでこだわる必要がなぜあるのかわかりません。」

「これほど葬儀にこだわらなければならないのはイタリア人独特の感性かも知れないと思いました。」

「正直、わたしの感じ方とはちがっていて共感するところはありませんでした。」

もしかすると、こうした感想は初めてこのエッセイを読んだときから漠然と感じられていたのかもしれませんが。議論を経てもその感覚が揺らぐことはなかったのですから、初志が貫徹されたのです。でもそのことは、「学び」を得られなかったことを意味しているのでしょうか？

実は、國分さんは、最初から「学びを得る」ことを参加者には期待していなかったとわたしは思います（確認したわけではないのですが、きっとそうです）。くり返しくり返し、このエッセイが世界中で多くの非議を呼んだ（いわゆる「炎上」を起こした）問題作であることを指摘し、アガンベンの議論に共感を示せるよう努力するつもりは全くないと強調していたのです。注意深い方であればその点にお気づきだったでしょう。しかし、國分さん自身の鮮やかな解説は、幾重にも折り重なったことばの襞を一枚一枚丁寧に進んでいきます。それに魅せられて、多くの人がエッセイに込められた「深い」哲学的問題提起に気づいていきました。それはこれまで気づかなかったことに気づく、だいじなプロセスであったと言ってよいでしょう。そして、それこそはわたしたちが「共に変化し共に成長する」ためのプロセスこそが人文学であるとする、この

シリーズ企画の醍醐味である、のかもかもしれません。

「しかし」と、この企画を終えてもう一度そのときのようすを味わってみたいと思ってこのページを訪ねてくださった参加者の皆さんに対して、わたしは敢えてこう問いかけてみたいのです。

皆さんは本当に納得したのですか？

アガンベンは、人間の尊厳の問題であると言います。人間の尊厳を見守るべき教会も法律家も、あっさりとは非常事態における喪の機会喪失と、立法手続きを経ない政令による緊急事態措置を受け入れてしまったこと、そのことに対して、彼は断固反対するのです。でも、「人間の尊厳」とはいったい何なのでしょう。そして、仮に彼の意味する「人間の尊厳」に同意するとして、わたしたちはそれをどこまで教会と法律家に委ねているのでしょうか。たしかに民主主義社会において議会（立法府）の役割はその根幹を成すのだから、議会での議論を経ずに政府が独自で政令を出すのは民主主義の精神に悖るでしょう。そこにはおそらく全体主義に道を開く危険が潜んでいるだろうということも、わたしたちは理屈として知っています。でも、議会で議論をしている間に事態はみるみる悪化していくのだから、非常事態においては政府に権限を委譲することも限定的に許されるのではないのでしょうか。まして、わたしたちの日本での生活には教会は縁遠いものだから、やはりこれはイタリアの特殊な文化にのみ当てはまることなのではないのでしょうか。こうした考えや感想を克服できなかったことは、「浅い」ままで今回のイベントを終えてしまった残念な失敗例なのでしょうか？

わたしの答えは「否」です。断固として「否」です。

このシリーズ企画には「ことばを通じて人と触れ合う」という共通テーマが掲げられています。「ことば」はただそこにあるわけではありません。ことばを通じて人と人が触れ合うには、双方がことばに対して抱えている意味やイメージをお互いにチューニングすることが必要ですし、そうすることにこそ新たな発見はあはずです。例えば、「人間の尊厳」ということば。そう、わたしたち人間は尊厳ある生き物です。でも、「尊厳」とはそもそも何なのでしょう？ 葬儀へのこだわりは違和

LOOK東大 EAAデー【第2回／全3回シリーズ】
「コロナ禍で変わってしまったこと、
変わってほならないこと」

●11月5日(木) 13:00～14:30
●國分 功一郎 准教授

「生きること」が人間として生きることに必ずしもつながってはいない。「生きること」が「死ぬこと」からこそ、「人間らしい生き方」は始まる。立ち止まって考えることがとても重要である。と哲学者である國分先生は言っています。今回は、コロナ禍で変わってしまったこと、「変わってほならないこと」が何か、そしてそれについてお話しします。90分程度に絞って前半のまとめ方、後半の方を考える良い機会になれば、と考えています。

【申し込みフォームへアクセスしてお申し込みください】
【申し込み期間】10/27～11/4

東大最新についての問い合わせ先 東大最新情報センター 企画担当 石井

ダイキン社内広報パンフから抜粋

感を感じた人は、そこに尊厳を見いだしてはいなかったのではないのでしょうか。そんなことよりも、健康に暮らしていた人が不条理なウイルスに冒されて、ふだんどおりの生活ができなくなり、生死の境をさまようことになりかねないことのほうが大きな脅威であり、その限りで、人間の尊厳は死んだあとの葬儀ではなく、まさにいま生きて活動していること——毎日の仕事、家族との休日、趣味の楽しみ等々——こそに見いだされるべきではないのでしょうか。尊厳を守るためにこそ進んで緊急事態を受け入れているのだと考えることは、まちがっているのでしょうか。

アガンベン単なる頑固な哲学老人ではありません。彼は言います、問題は、「限界点とは何なのかを、私たち自身がきちんと問うているかどうかである。」と。緊急的な政策が非人間的なものへと転化する限

界点は、あらかじめ与えられているわけではないのです。それは、わたしたちが問うことによっていくらでも変わりうるものです。だからこそアガンベンはわたしたちを挑発しながら、問いに誘っているのです。その問いの中心は、「人間の尊厳とは何か」にほかなりません。そして、こと問題が人間の人間らしさに関わるものである以上、わたしたちは、「浅さ」を「浅さ」のまま維持していくことこそが、実はいちばん大切なのではないのでしょうか。わたし自身の実感とは異なること、直観的に違和感を持つこと、それこそが問いの出発点になります。アガンベンが言うことは自分の生活実感とはちがうと感ずることなしに、哲学は始まらないでしょう。ですから、どうかそうやすやすとエライ哲学者の御説に納得しないでください。そして、自分の実感と直観を「浅い」ままにもっとつきつめてみてください。「深みにはご用心!」——どうぞ、呉々もお気をつけください。深みは人をずぶずぶと沈めていくばかりです。出口は1つ、「浅瀬にもどること」です。「学びを得」てはいけません。何かおかしいと思ってください。その問いだけが「3」という数字をラッキーナンバーに変えることができるでしょう。

次はいよいよ第3回。ラッキーナンバーです。また多くの方々とお会いできることを心から楽しみにしております。

報告者：石井剛 (EAA副院長)

第2回 EAAブック・トーク

2020年11月10日

2020年11月10日、第2回EAAブックトークが行われた。参加者は、第1回と同じく、前野清太郎氏 (EAA 特任助教)、若澤佑典氏 (EAA 特任研究員)、張瀛子氏 (EAA リサーチ・アシスタント)、建部良平氏 (EAA リサーチ・アシスタント)、それから報告者の高山花子 (EAA 特任研究員) の5名である。

前回は、期せずして、『ヤシガラ椀の外へ』の執筆者であるベネディクト・アンダーソン (1936年-2015

年) が、じつは滞在場所によって研究対象を変化させていたことへの言及をきっかけとして、レビュー企画の中心にいる若澤氏の専門とする18世紀イギリスの書物を媒介とした知的交流のテーマが、張氏と建部氏が研究する一見すると「思想」がないと言われる清代の考証学者たちの書き方の変遷への着目や、18世紀のカノン再読の機運をはじめとする問題系と同期していることがわかった。この前回の展開を受けて、第



2回の今回も、カジュアルなブックトークの形ではあったが、あらかじめ建部氏と張氏に関連する論文をシェアし、より具体的な人物の「書物」の例に踏み込んでトークがなされた。持ち寄られた本・論文は以下である。

【建部】

- ・井上進『中国出版文化史』名古屋大学出版会、2002年。
- ・建部良平「人情と科学の哲学者——耐震及びデヴィッド・ヒュームの比較可能性についての試（私）論」、『比較文学・文化論集』第37号、東京大学比較文学・文化研究会、2020年3月、23-43頁。
- ・建部良平「老いた人間は何処へ——段玉裁「四郊小学」説を読む」（近刊）

【張】

- ・大木康『明末のはぐれ知識人——馮夢龍と蘇州文化』講談社、1995年。
- ・酒井忠夫「明末清初の社会における大衆的読書人と善書・清言」、酒井忠夫編『道教の総合的研究』国書刊行会、1977年、370-393頁。
- ・鈴木正「明代山人考」、『清水博士追悼記念明代史論叢』大安社、1962年、357-388頁。

【若澤】

- ・Tim Milnes, *The Testimony of Sense: Empiricism and the Essay from Hume to Hazlitt*, Oxford University Press, 2019.
- ・長尾伸一『トマス・リード——実在論・幾何学・ユートピア』名古屋大学出版会、2004年。

【前野】

- ・ウルリヒ・イム・ホーフ『啓蒙のヨーロッパ』成瀬治訳、平凡社1998年。

- ・小島毅『中国近世における礼の言説』東京大学出版会、1996年。

【高山】

- ・ガートルード・スタイン『みんなの自伝』落石八日月訳、マガジンハウス、1993年。
- ・Ann Jefferson, *Biography and the Question of Literature in France*, Oxford University Press, 2007.

まず、若澤氏の司会によって、建部氏が戴震（1724年-1777年）とデヴィッド・ヒューム（1711年-1776年）の比較可能性について述べたあと、段玉裁（1735年-1815年）の文集『経韻楼集』に見られる晩年の自己批判をテキスト分析から示した。とりわけ後者については、「思想」がない、とされている清代文人のテキストが、どのように書かれているのか、そしてそのテキストをどのように建部氏本人が再記述するのか、に着目することで、「思想」と文体の関連を探る試みが展開されたと言える。若澤氏からは、スコットランドの哲学者トマス・リード（1710年-1796年）とその研究書を紹介するかたちで、思想家としての同時代性が参照項として促された。また、報告者は18世紀のジャン＝ジャック・ルソー（1712年-1778年）による自伝への関心から、自伝や書簡がどのような形で公表されていたのかを問うた。建部氏からは、中国での論文集という形での出版伝統について補足がなされ、張氏からは、『文選』に収録された三国時代の嵇康による「与山巨源絶交書」のように、私的な書簡が公的な性格を獲得する古来の例が示された。書くことで交流がなされていたことが確認された一方で、テキストをどう解釈するのが議論されるなか、張氏が紹介したのは、清代学術で「漢学」を開いた惠棟（1697年-1758年）と彼が身を置いた明末清初以来の蘇州の出版文化である。興味深いのは、惠棟が自分の学



問を文人であった祖父まで遡っていることだった。恵棟の祖父は「山人」と呼ばれる人たちの一員と思われ、彼らは経書に触発されて、学者ではないながらかなり自由な立場から書き物を残していたという。そして、啓蒙期をふくめ、いったいどのような時代精神が共有されていたのかが議論となり、共有されているそのコードのようなものが、果たしてイデオロギーと呼んでよいものなのか、コンベンションあるいは習俗なのか、話題は尽きなかった。

今回特筆すべきことに思われたのは、単に関連しそうな本を各自がばらばらに紹介するのではなく、むしろ、前回の話や他の人のテーマを踏まえて、それぞれが本を持参し、内容紹介が参加者への発展的な質問を含む形で用意され、その場で展開していったこと

である。これは、18世紀ヨーロッパにおいて興隆した雑誌制作と書評活動が、不特定多数の読者を獲得する以前に、目に見える、会って話せる友人知人の小さなネットワークを基盤としていたことを想起させるだろう。18世紀から現代に広がる形で、知的ネットワークの形成と、書物の「作者」の名前——「号」、あるいは注釈者の署名——の問題が次回の課題としてすでに上がっているが、21世紀も四半世紀をすぎた現在に書物を介してどのような「公共空間」が可能であるのかについても、とりわけ出版文化と知識人との関係に注意を払いつつ、問うてゆきたい。

報告者：高山花子（EAA特任研究員）
写真撮影：立石はな（EAA特任研究員）

話す／離す／花す（2）

行き違いを怖れずに

高山花子（EAA特任研究員）

2020年11月10日

モーリス・ブランショは、距離のある接触によってわたしたちにあたえられるものがイメージである、と書いている。けっして近づくことのできない、埋めがたい距離があるからこそその距離のあるつながり、関係なき関係を、不可能性によって支えられた共同体論として思考してゆくブランショは、物理的に離れ離れになっ

ている遠隔の現況以前に、対面でのコミュニケーションにおいてさえも、距離がある以上、わたしたちは事物に直接到達できず、それゆえにイメージに誘惑されつつけているのだと、何度でも突きつけてくるように思われる。そしてまた、声に出して話された言葉にせよ、文字として書かれた言葉にせよ、言葉はその本質とし



て、わたしから離れてゆくものであることに注意をうながしつつけているように思われる。言葉は空間を彷徨する。すでに発せられた言葉は、なんどもなんども繰り返された過去の言葉の反響の空間にわけり、こたまとなって彷徨し、ざわめきつづける。

COVID-19の感染が世界的に流行し、大学を取り巻く状況が「遠隔」をキーワードに造られ、語られ、そしてまた、駒場に即していえば、研究も教育も「対面」では感染の恐れがあるために、Zoomを使ったやりとりはいまも継続されている。他方、その裏ではオンラインの予定が乱立し、個々の予定のそれぞれに割ける時間はかぎられ、これまで以上に増えたさまざまな検討事項を、必要な人とじゅうぶんに話せる機会あまりにも足りない、そのような感覚がある。2月以来を振り返ると、数え切れないほどの電話、メール、Slackでのやりとりを経、行き違いが起りやすいためこそ言葉を尽くして幾方面からも往還を試み繰り返す大切さを感じる。と同時に、言葉はわたしを離れてゆくからこそ、その離れてゆく言葉が、それきり言い足すことも訂正することもできないまま、誰かに届き解釈されてゆく道筋に思いを馳せることが増えた。わたしから離れた言葉は、それでもなお誰かに届いてしまう可能性がある。だからこそ、言葉を離しているのだと言い聞かせて書く時間が前よりも増えたように思う。

そうして思い出すのは、むかし駒場で行われた講演が縁となり、パリでもお世話になったブリュノ・クレマン先生の編集した『行き違い——解釈学的身振りの系譜学』(*Le Malentendu : Généalogie du geste herméneutique*, 2003年)という本のことである。「誤解」

と訳されることの多いフランス語の *malentendu* は、コミュニケーションや相互のやりとりの障害、行き違いを指す。この論集は、出版当時の社会科学の側からの「誤解」への新たな着目にも目配せをしながら、文学における注釈や文献解釈と、一元論的ドクサ形成のエピステモロジーを踏まえて、「行き違い」を再考することを目的としている。寄稿しているジャック・ランシエールは、政治的な食い違いとおなじく、文学の行き違いもまた、言葉と物の隔たり、身体と意味作用の結びつけにかかわることを確認し、文学は辞書編纂では禁じられている行き違いを選び取ることを学ばせてくれるのだと結んでいる。そしてクレマン先生は、神託が伝達の過程で誤解を生み出すのではなく、行き違いこそが神託を形作るのだとして、古来、語りの本質がフィクションをつくりあげることにより、この *malentendu* がいまなお、言葉と思考の分かち難い関係を物語っていることに注意を促している。両者の論の底に流れるブランシヨの思考をいま再度くみとるならば、わたしから離れてゆく言葉の彷徨する「文学空間」は、かならずしも小説テキストにかぎられず、すぐそこにある、言葉の飛び交う日常の空間でもあるはずなのである。そうして開かれた思考の空間——スペースでは、単独の決定的な解釈は斥けられる——。だからこそ、これからもなんども、行き違いを怖れずに言葉を離してゆくことを試みる、そのようなプロセスそのものをここに創ってゆければと願う。

写真撮影：高山花子(EAA特任研究員)

第7回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年11月13日

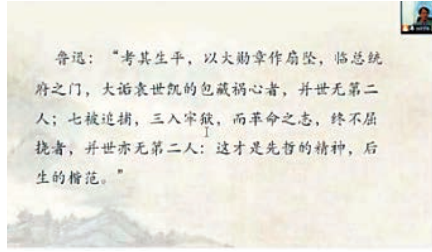
2020年11月13日、第7回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。第9回(12月4日)との2回構成で、中国哲学史、儒学、道家／道教などの分野の研究に力を入れている楊立華氏(北京大学)を講師に迎えた。講義では主に、中国近代において、

博識な学者・思想家であると同時に、孫文や同盟会と強く関わる革命家として知られる章炳麟(1869年-1936年)の著書『齊物論釈』が扱われた。

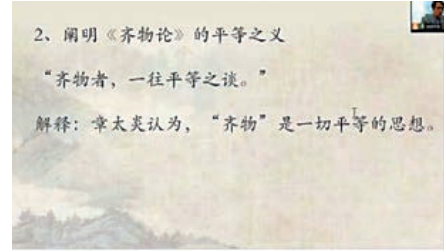
1908年から1911年にかけての日本滞在中に書かれた著作である『齊物論釈』は、中国が直面してい



章炳麟 (1869年-1936年)



鲁迅：“考其生平，以大勋章作扇坠，临总统府之门，大诟袁世凯的包藏祸心者，并世无第二人；七被追捕，三入牢狱，而革命之志，终不屈挠者，并世亦无第二人：这才是先哲的精神，后生的楷模。”



2、阐明《齐物论》的平等之义

“齐物者，一往平等之谈。”

解释：章太炎认为，“齐物”是一切平等的思想。

た窮地と、「文明」を格付けする文明論や進化論などの諸思潮への章炳麟の抵抗を背景としている。『文明論之概略』が提示した、西洋文明を文明の基準として、アジア諸国の文明が低くみなされるという構図に対し、中国の文明、及び他の非西洋文明がいかに自立できるかという問題を念頭に置きつつ、章炳麟はその答えを『斉物論釈』の議論に盛り込んだという。

章炳麟が考える「平等」はどのようなものだろうか。章は「兼愛」のような、形式上の絶対的「平等」を平等のあるべき姿ではないと考えたうえで、本物の「斉物」を「不斉之齐」だとする。章にとって、道德の是非を安易に表面的な判断をすることは危惧されるべきものであり、こうした世俗の意味での「平等」は皆のためになるようにみえるが、実際のところ、戦争や暴力の口実として用いられる一面を併せ持つ。

講義の後のディスカッションでは、次のような議論が行われた。紛争などが主観的論理の相違からくるも

のである一方、言語自体に内在するロジックに根本的な相違が存在することがあるのではないかという質問に対し、楊氏は次のように応答した。言語の問題も大事だが、あらゆる紛争は言語の問題からくるわけではないと指摘した上で、荘子も章炳麟も具体的な「知」の不確定性を強調しており、絶対唯一の真理が存在するとの主張（たとえば文明論的論調）には侵略と植民地主義の大義名分として利用される危険性が潜んでいると述べた。

今回は、最も優れた哲学的言語と章炳麟にみなされた唯識学、及び章に唯識学をもって解釈された荘子、そして時代のコンテクストにおける唯識学の諸相などに関して講義が展開される予定だが、難解なテキストにあっても学生の興味をそそり、受講者に深い思考を促す講義が期待できよう。

報告者：徐莎莎(EAAリサーチ・アシスタント)

Look 東大・EAAデー

第3回参加記

2020年11月13日

2020年11月13日午後1時から、ダイキンとのコラボレーション企画「Look 東大・EAAデー」の第3回が行われました。今回は英文学がご専門の武田将明さんが登壇し、ご自身が翻訳なさったダニエル・デフォーの『ペストの記憶』を題材にしたセミナーとなりました。この作品については武田さんが指南役となってNHKの「100分de名著」(Eテレ)でも取り上げられましたのでご存じの方も多いただろうと思います。

300ページを超えるこの物語を全篇読み通すのは、日ごろからお仕事や家事などでお忙しく過ごされている社会人の方々にとって容易なことではないでしょう。しかし、最初から最後まで読み通すことだけが作品を味わう唯一の方法ではないはずです。人生がそうであるのと同じように、読書という体験においてもシーンごとに心の持ちように波があるのは自然なことですし、そもそも自覚できるような明確な始まりと終わりは必要

不可欠ではないのかも知れません。ともかく、参加者は事前に74ページから79ページという全体から見ればほんのごくわずかな部分を読んでおくことがいちおう推奨されていました。

これまで2回と同様、オンライン形式で行われる武田さんの授業は、3つの問いから始まりました。

- Q1 「ぼく」は何度も危険を顧みずに死者を埋葬する穴を見に行きますが、その理由は？
- Q2 夜の墓地に入った後 (p.78-) のできごとは、誰の視点で書かれているのでしょうか。
- Q3 埋葬の実態を暴くことで、作者は何を訴えたかったのでしょうか。

これらの問いは、例えば受験で問われるようなものはちがいで、読者一人一人にそれぞれちがった答えがあり得るものばかりです。これまでの2回はブレイクアウト・セッションを設けてグループごとに議論したのですが、今回は Google スプレッドシートを用いて、全員が自分の回答を表上に記入するやりかたが取られました。クラウドで共有されているシートに皆が書きこむのですから、誰かが書きこんでいるようすが手に取るようにわかり、どんどんセルが埋まっていきました。そうして散りばめられた答えを武田さんが拾いながらコメントしていきます。「なるほどねえ」、「そうか、こういう見方もあるんですね」と、武田さんは穏やかな口調で肯きながら、気になった回答については直接回答者と議論し、皆さんが寄せた思いの感想に目を通していきます。そして、作品の背景や作者の生涯や時代に関する解説をささみ、また同じように問いが提供され、いくつかの答えをとりあげながら時に回答者と会話を交えつつ、予定されていた90分の時間はゆったりと、しかし、あっという間に過ぎていきました。

「ことばを通じて人と触れ合う」という統一テーマのもとで開催された3回のうち、過去2回において用いられた「ことば」はいずれも口から吐き出される音声を伴った話しことばでした。一方、今回はスプレッドシート方式（武田さんのすばらしいご発案!）ですから、皆さんはいったん「書きことば」で自分の考えを表現しました。その結果、やはり使われることばにも「話

しことば」とは異なる特徴が出てきたと思います。例えば、Q2の「誰の視点」という問いです。テキストは「ぼく」という語り手が語っているのですが、時々、「ぼく」が目撃してはいないはずの事実が具体的に記されているところが出てきます。そうすると、いったい「真の語り手」はいったい何者なのだろうという問いが浮かんでくるのですが、これに対する答えの中には「神?の視点」というようなものもありました。こんなことはなかなか話しことばでは口に出しにくい表現ですね。「神」などと口走るのはどこか照れくさく、むずがゆい感じがします。「書く」というのは不思議な行為です。「話す」という行為に比べて、ちょっと身体から距離をおいた感じがありますね。そこで思わず書き出されることばは、必ずしも自分が頭の中で曖昧に考えていたものとは同じでないかも知れません。もしかすると、書くことでことばは身体から引き剥がされ、そこで初めて、自分の考えは明確なかたちを持つのかも知れません。そう考えると、書いて記録することは、ただ見たことや聞いたことをそのまま表現するという行為ではないかも知れませんね。

さて、指定テキストで語られていたことの焦点は、紛れもなく「死者を埋葬する穴」でした。「巨大な穴」という小見出しがその中につけられています。急増する死体が感染源になることを防ぐためにロンドン市内には死者を埋葬する穴がいくつもつくられたのです。なかでも「ぼく」が見に行ったのは、本当に巨大なものです。テキストはこう記しています。

この目で判断したかぎりでは、長方形の穴の全長は約40フィート [約12.2メートル]、幅の方は約15から16フィート [約4.6から4.9メートル] あった。また最初に見物したときには、約9フィート [約2.7メートル] の深さだった。しかしどうやら、あとでその一画を20フィート [約6.1メートル] の深さまで掘り進めたという話だった。(74ページ)

それはいかにも「おぞましい穴」であったと「ぼく」は振り返っています。なぜなら、まともに葬儀もできないままに運び込まれ、棺桶に入れられることもなくただ無造作に打ち棄てられる大量の死体だけではなく、死

中国社会科学学会・EAA共催座談会

天災と人禍——思想と宗教、そして文学と歴史から考える

2020年11月14日

2020年11月14日、東京大学本郷キャンパス・国際学術総合研究棟の文学部3番大教室にて、「天災と人禍——思想と宗教、そして文学と歴史から考える」という座談会が開催された。この座談会は、『中国——社会と文化』小特集に向けて、中国社会科学学会と東京大学東アジア藝文書院（EAA）の共催という形で企画されたもので、コロナウイルス感染拡大防止のため、大教室には登壇者5名と10数名のオーディエンスのみが集まり、試験的にZoomともつなげる形での開催となった。

はじめに、司会の中島隆博氏（EAA 院長）から開催趣旨と経緯についての説明があった。今年度は、中国社会科学学会の大会シンポジウムを新型コロナウイルスの影響で見送らざるを得なくなったため、代替案として2つの座談会が企画されたという。第1回目の今回は、主として近代以前の中国と日本における災異をテーマとして、4名の専門家に議論していただく運びとなった旨が告げられた。その4名とは、本座談会の発案者の一人でもある中国歴史学の佐川英治氏（東京大学）、また中国思想史の渡邊義浩氏（早稲田大学）、中国文学の牧角悦子氏（二松学舎大学）、日本思想史の伊藤聡氏（茨城大学）である。

最初の発表は「災異説における宮室の問題について」と題された佐川英治氏による自身の都城研究の視座から漢代に生じた「災異」をめぐる考え方の変化を検討するものであった。

まず取り上げられたのは、『三国志』高堂隆伝に見える魏の崇華殿焼失をめぐる魏の明帝と高堂隆の議論である。この災厄を鎮めるのに、明帝は何らかの「咎」と受け止め壮麗な宮殿を建てるという厭勝を講じたのに対し、高堂隆は「災異」と受け止め皇帝の修徳の必要性を主張した。佐川氏は、この背景に漢の董仲舒が打ち立てた「災異説」があると指摘する。ここで重要なのは、この「災異説」には、陰陽の失調という自然的な天を前提とした「感應」と、警告・教諭を發する人間的な意志をもった天を前提とした「天譴」の二系統があった点である。特に、後者は天災と人為が明確な因果関係のもとに解釈され、修徳により解決可能と考えられるようになったことを意味し、次第に全ての「災異」は「天譴」へと取り込まれていくことになるという。

さらに興味深いのは、後者は建築にしか現れないと考えられた点である。これについて佐川氏は、『漢書』五行志で董仲舒が「天譴」と看做した『春秋』からの災異事例を検討し、その主要な場所が「宮」すなわち「宗廟」であることに着目した。「宗廟」とは古くは都城の核をなす施設であり、皇帝の正統性と関わるために秦漢時代においても重視され続けた。しかしその一方で、祖霊よりも天の祭祀を重視した董仲舒は、祖霊の意志を天の意志へと置き換え、その結果、本来の超越的な天に加え、人間的意志をもつ天が儒教の理論に加わることとなったのではないかと自身の見解を示した。この指摘は、その後の思想史の展開を考える上でも示唆的であろう。最後に氏は、以上を踏まえて、冒頭の崇華殿焼失の逸話に戻り、あくまでも「天譴」とみなさない明帝が、しかし何らかの「咎」

と題された佐川英治氏による自身の都城研究の視座から漢代に生じた「災異」をめぐる考え方の変化を検討するものであった。



趣旨説明をする司会の中島隆博氏

を意識し壮麗な宮を建てようとした背景に祖霊の祟りが想定されていた可能性を示唆し、天／祖霊の祭祀の問題でもあったと捉え直した。

2番目は、渡邊義浩氏による『漢書』五行志と王充の災異思想批判」と題された発表であった。本発表は、『漢書』五行志における「災異思想」を確認した上で、班固と同時代人の王充がその「災異思想」をいかに批判したか、その根底にある天の捉え方とはどのようなものであったかを検討するものであった。

まず班固による『漢書』五行志の「災異思想」では、すべての災異は人君の行為に間違いが生じたために、それに「応」じた天が「戒」として示した「象」「徴」として理解される。これに対し人君が修徳すれば解決するが、改善しなければ「咎」「禍」が起こるというのがその基本的な考え方である。これは『洪範五行伝』の、特に『春秋』の記事に基づき、董仲舒・劉向・劉歆の解釈を中心とするもので、これが後漢の思想の主流となっていたことが確認された。

その上で渡邊氏が着目したのが、班固の父に師事しながらも、その著作『論衡』において災異に対して班固と全く異なる立場をとった王充である。すなわち天が「自然」であり「無為」である以上、天から譴告が発せられることはない、とし、黄・老の説を評価したのである。但し、このような当時の主流の思想と全く異なる天観念を提示し、鋭利な批判を行った王充であっても、「同気共類」においては感応が起こるとする歯切れの悪さを残してもいた。この点について、渡邊氏は、王充はあくまでも儒家であり「六経」に「天人相関」の観念が明確に示される以上、根底から否

定はできなかったと見つても、王充は、天の心というものとは聖人の胸中にあり、天の警告は聖人の口から天に仮託して描かれたものとする解釈を試みていた点を評価した。

以上から、この時期の儒家には、天を無為・自然として見るもう1つの道筋も存在しており、それが後世の思想に重要な影響を与えていったとする。その一方で皇帝権力を正統化しながら、同時に皇帝権力を掣肘する「災異思想」も根強く残り続けたとして、その思想的なダイナミズムを示した。

続いては、牧角悦子氏の「災異を記録すること——『搜神記』を中心に」と題された発表で、異常な現象を人が「記録する」とはどういう行為なのか、という問いを立てた上で、『搜神記』に着目し、近代的概念である「歴史」「小説」「神話」と、現在では一般に志怪小説とみなされる『搜神記』がそれぞれどのように異質であるか分析することでそれに答えようとするものであった。

まず牧角氏は、「記録する」ことは客観的ではあり得ず、必ず「解釈」と「語り」が介在する点を強調した。それを知性のほうに落とし込み克服し、その智慧を継承するのが儒家の「著述」であり、『搜神記』はまさにそうした意識のもとに史官によって書かれたことを序文から確認した。そもそも『搜神記』は『隋書』経籍志では史記・雑伝に著録されていたが、『新唐書』藝文志に至り、子部・小説家類に移動させられている。これについて、牧角氏は、天人相関説が衰退したことで、変化の論理から収集された事例の面白さが着目され物語として読むような傾向が生まれたと指摘する。また、そもそも「記録」は人々の恐れと結びつくことで「想像空間」、いわば人の内面世界を表現する新しい創造へと繋がる側面を持っており、そこに志怪小説と見なされる契機もあった。

牧角氏はここでとりわけ重要な人物として魯迅を取り上げる。魯迅は『中国小説史略』において、儒教的価値を内包する古典を否定し、古代的怪異を語り記す「神話・伝説」を「小説」の起源と位置付けて小説史を再構築する中で「志怪」という視点を顕在化させた。無論「神話」は近代に西欧から輸入された概念であり、中国近代において儒教的価値から



佐川英治氏



渡邊義浩氏

開放されるために古代の混沌的世界に光が当てられる動きと魯迅も軌を一にしていた。また、「史」と記事と小説はもともと曖昧かつ重なりあっていたが、近代において「歴史」「小説」といった新しい概念で組み替えられることとなったと指摘する。

記録する行為は客観的では有り得ず、そこには幾重もの構造が生起しているが、とりわけ異常現象においては記録者の解釈が反映しやすく、記録者の目的と意識によって、勸戒を目的とすれば「史」へ、異世界への興味嗜好が先行すれば「小説」へ向かうと結論した。

最後は、「崇・天譴・怪異——日本における天災と信仰」と題された伊藤聡氏の発表であった。伊藤氏の発表は、これまでの3名とは打って変わって日本の古代・中世における災異に対する意識・解釈をめぐる問題を扱い、特に、日本の崇（タタリ）観が外来の祥瑞災異思想・天譴説といかに相克・融合し、変容を遂げたかを辿るものであった。

まず『古事記』の記事に基づき、上代日本におけるカミの崇（タタリ）が、カミの祭祀の要求であり、そこに倫理的含意がなかった点を確認した。そこに6世紀以降、仏教が伝来すると仏教はカミの「タタリ」への対抗呪術としての役割を担うようになり、他にも複数の呪術的な方式が中国朝鮮から齎され試されていった。さらに8世紀以降、神々自身が仏教へ自ら帰依できないことを苦しみ「タタリ」を起こしているというように仏教の在地化の論理として説かれるようになっていく。

一方、天人相関に基づく天譴説は律令制形成の一環として導入されたが、災異の原因を天皇の不徳に

帰し恩赦が行われながらも、神仏への祈願も盛んであった。伊藤氏は、この要因として、日本の律令体制では天命思想ではなく神孫が前提であるために、天譴説の論理が構造上徹底し得なかったと指摘する。また8世紀には、タタリを為す存在に「死霊」が加わり、慰撫して神格化する御霊信仰へと展開した。タタリの主体が多様化・複雑化するに伴い、それまで神祇官が担っていた占法に加え、9世紀以降に台頭するのが天体観測技術や式盤など新しい占法を用いる陰陽師で、彼らは「怪異」の原因を判定し対処法を講じる職務を担った。陰陽師の台頭によって後退したかに見える天譴説であるが、その後も、災異改元や民間において特定地域で出された「私年号」、あるいは災害や一族の危機を警告する霊廟・神社の鳴動といった形で、変容を遂げながらも残存していったことが指摘された。

全体討論は、最初に各発表者同士での質疑応答が交わされ、その後でフロアに開かれる形で行われた。最初の中国研究者の3名からの質問は、日本研究者である伊藤氏に対するものであった。まず佐川氏から天災や疫病に対する捉え方における日中の根本的な違いについて質問があった。すなわち中国では自分の内部に問題があって災害が起こると考えるのに対し、日本では外部から齎されるものと考えていたといえるか、またそのために責任という問題意識が希薄で天譴説が不徹底となった側面があるのではないか、というものである。これに対し、伊藤氏は、古代日本では疫神は外部からやってくるという発想があり、対処法としては疫神送りや道の遮断と祭祀などの防御が中心であったとして同意を示した。また渡邊氏からも仏教が在地化する過程で神のタタリを利用するような側面について日中両方に見られる側面も含めて質疑があった。また牧角氏は、中国では疫病対策などの対処法を文献から探るのは難しいが、日本にはかなり当時の具体的な対処法が残っている点などに言及された。一方、伊藤氏からは鳴動の事例や宗廟概念の違いについて佐川氏に質問があった。興味深かったのは、日本に宗廟がないという問題について、後に伊勢神宮など神社を天皇の宗廟にしようとする動きがあったという点である。但し、近代以前はそれほど宗



牧角悦子氏



伊藤聡氏

廟祭祀を重視していた事例はなく、中国的宗廟の在り方はむしろ近代以降に再定義されたという。

続いて、フロアに議論が開かれた。会場からは、中国において王権批判として奢侈がクローズアップされた事例の有無についての質問や、単線的には捉えられない残響・反動・反復といった複雑な展開を遂げる中国の思想史に関する問題提起、天人相関説に触れる機会もないような一般民衆が持っていた災害観について文学から探ることができる可能性についてなど、様々な方面からの質疑があがった。特に興味深かったのは、漢代の官僚がどれだけ天譴などの儒教の神秘性を信仰していたか、という質問に対し、渡邊氏が、製紙法が発達する前の時代においては、物理的にアクセスできる書物の量が思想を決定した、と応答した点で、王充が当時としては特異ともいえる思想を提示し得たのもそうした要因と結びつけて考えることが可能である、ということであった。

議論は尽きないが、最後に締めの言葉として、佐川氏から、今回のコロナという疫災によって引き起こされた現在の状況について、各地域における政治的対応と伝統的な災害観がいかなる関係にあるのか、という関心から発された企画であったことが共有された。また日本に関する議論で度々登場した「曖昧さ」という言葉、一方で中国の文字で書かれた議論の蓄積という特色も改めて認識する機会となったと述べられた。そして来月に控える第2回座談会への期待も示された形で閉会となった。

以上のように、本座談会は、日中の古代中世の研究者が中心であったが、そこに特化した議論というよりは、むしろそこを基盤として、より大きなパースペクティブが示される刺激的な会となった。

それは、それぞれが充実した資料とそこから得られた深い知見に裏付けられた発表であったことは勿論であるが、その上で、第1に、地域的な隔たりと繋がりを持つ中国と日本の専門家が一堂に会したこと、

第2に、専門が歴史・思想・文学のように関わり合いながらもずれていたためにアプローチや問題関心の在り方が重なりながらも異なる部分も多かったこと、第3に、時間軸も漢代や日本の上代から近現代の問題まで含む大きなパースペクティブが示されていたこと、そして第4に、やはりこのコロナ禍が齎した現状にたいする問題意識の共有という下地があったことによると思われた。

それを象徴するように、質疑においては、縦横無尽に時間軸が行き来し、さらに地域をまたぐことで生じた疑問も浮き彫りにされた。特に議論が集中したのが、「天」という概念の捉え方、そして祖霊やそれを祭る宗廟の問題である。日本において宗廟がなかったという点は「天」の概念の「曖昧さ」と繋がっている問題である一方で、佐川氏が最後に述べたように、日本において祖先崇拝がなかったのではなく、宗廟は同姓の親族を祭る施設であったという点も大きいのであろう。

地域的な広がりであれば、宗廟祭祀や天の概念、天譴思想や災異思想、古代の再評価や近代の問題は、冒頭で佐川氏が触れた朝鮮でも考えることができるであろう。さらにいえば、書物や技術、人、情報が同じく行き来していたベトナムや琉球などの地域に関してもおそらく同様の問題提起ができ、その際にはまた別のキーワードが飛び出してくるのではないかと想像され、今後の展開も非常に楽しみになった。何よりも、専門分野の異なる研究者が集まることで起こる化学反応、自身の分野への理解の深まりや新しい問題関心の発見をし合う濃密な場を共有できたのは貴重な体験であった。今回はコロナウイルスの影響により少人数での開催を余儀なくされたが、この議論は『中国——社会と文化』に掲載される予定ということで是非お読みいただきたいと思う。

報告者：宇野瑞木(EAA特任研究員)

EAAシンポジウム

東アジア音楽思想における和

2020年11月14日

2020年11月14日、オンラインにて、EAAシンポジウム「東アジア音楽思想における和」が開催された。対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された本シンポジウムは、儒学の中で「和」という概念がどのように捉えられてきたかについて再考することを目的とする。もし儒学で「和」という概念が論じられるならば、その議論を中心的に担ってきたのは礼楽思想ではないだろうか。本シンポジウムでは、日中の儒者たちが、どのような「和」を目指して礼楽を論じていたのか、その諸相を提示した。

開会に先立ち、報告者の田中有紀（東京大学）が趣旨説明を行った。続いて、荒木雪葉氏（福岡大学）が「論語における音楽思想と和」として報告を行った。「和」という字の発生から説き起こし、続いて『論語』の「詩に興り、礼に立ち、楽に成る」（泰伯第八）という語について分析した。基本的知識を身につけ（詩に興り）、それを実行するための応用力を得て実践するが（礼に立ち）、それまでの知識の継承だけでは、新しい段階への進化は望めないため、楽を学ぶことが必要となる（楽に成る）。楽を修めるためには、言葉・旋律・舞の三者に気を配り、それぞれの特性を伸ばし、互いに抑えあうことなく調和させなければならない。このような楽を学ぶことで、異なる要素を調和させて一つにする力（「和」の力）を体得できる。演奏を止めたらハーモニーが止まるように、調和の努力を止めたら調和しなくなる。すなわち、「和」とは変化し続けるものであり、動的なものである。神髄は受け継ぎつつ、

新しい要素を取り入れて、調和を求め続ける必要がある。

2番目に、榎木亨氏（南昌大学）が『律呂新書』における「和」——蔡元定の「数之自然」と中村楊斎の「人声之自然」として報告を行った。楽律論の観点から、『律呂新書』を著した南宋・蔡元定（1135年-1198年）及び『律呂新書』の基礎的な研究を行った江戸時代の中村楊斎（1629年-1702年）を取り上げることにより、楽に期待される「和」について検討を行なった。儒教では、正しい音楽を正しい音高で演奏することにより「和」を実現するために楽律研究が行われてきた。蔡元定は数の理論を用いることにより、十八律を定め、この十八律が「数之自然」に従った結果であると主張したが、中村楊斎は、「数之自然」ではなく「人声之自然」に従った結果であると述べている。両者の楽律論に対する視点の違いは、実際の音楽との距離感に起因するのではないか。すなわち、理論（楽論及び理学）を重視する立場（蔡元定）と実践（雅楽の探求と楽器演奏の習得）を重視する立場（中村楊斎）の違いである。

3番目に、中川優子氏（東京藝術大学大学院博士課程）が「日本近世前期の知識人における音楽思想と「和」——熊沢蕃山・貝原益軒を例に」として報告を行った。近世期の日本において、儒学者をはじめとする知識人たちはしばしば音楽に関心を向けた。本報告でとりあげた熊沢蕃山（1619年-1691年）と貝原益軒（1630年-1714年）は、ともに京都で雅楽を



学び、音楽に教育的価値を見出した人物である。その思想の基盤には、音楽のもつ「和」の効用が少なからずあるのではないか。熊沢蕃山は、聖人が礼楽を制定することで、その礼楽が人心を和し、その人心によって声が和し、天地の和も応じると考えた。音楽は社会的・政治的規範を帯び、楽の「和」を、異なる者による秩序をもった調和と捉えた。これに対し貝原益軒は、楽とは、天地自然の道理に基づき心(身)を和楽にするものであると考え、楽の「和」に対し、内面／身体への効用を期待した。このように、「和」の効用を、社会へ向けるか、内面に向けるかに差はあるものの、両者とも「和」を得るために、実際の音の動きや響きに通じること、詠歌舞踏・楽器の演奏といった実践を重視する姿勢が窺える。

4番目に、田中有紀が「中国における古琴文化と和」として報告を行った。古琴は、2003年にユネスコの無形文化遺産に登録されて以来、中国国内において、伝統文化の復興を求める声とともに、前近代の文人文化を象徴する存在として、高等教育の教養課程に組み入れようとするなど、様々な試みが展開されている。本報告では、儒教における琴の役割を論じるにあたり、歴代の図書目録や「孔子学鼓琴」説、宋代の楽器論などを参照し、どの演奏形態に着目するかによって、知識人の代表となるべき楽器の様相も変化すると分析した。そして北宋の朱長文(1039年-1098年)『琴史』をとりあげ、琴の儒教化・道德化が図られたこと、その中で「歌と合わせられる素朴

な演奏」が指向されたことを論じた。ところがこの素朴さという点から、複雑で技巧的な演奏法を取り入れた琴という楽器自体を批判する知識人も出現する。しかし、いずれの場合も、文人文化を代表する楽器には、ほかの楽器あるいは歌と調和しながら、人々に「和」をもたらす役割が期待されている。

4人の報告終了後、高欲生氏(日本古琴振興会)によるオンラインコンサートが行われた。曲目は、中国の聖人・堯が作り「和楽」を表現するとされる「神人暢」、高雅な曲として「和するものがすくない」とされる「白雪」、2台の古琴と高度な技巧を駆使した「もののけ姫」である。その後パネルディスカッションを行い、「礼楽思想の「和」は、儒学の中でどのような意味を持つか。中国思想史、日本思想史においてどのような影響を及ぼしたか」「なぜこの研究をしようと思ったのか」「現代で古琴や中国音楽を学ぶというのは何を意味するのだろうか。学ぼうとする人とは、どのような人なのか」「礼楽思想の「和」は現代社会において何らかの意味を持つか」などについて議論をした。

参加者は30名以上に及び、音楽学の専門家から、古琴など伝統音楽を実践している方まで、幅広い方にご参加頂いた。また、参加者それぞれの見地から数多くの質問を頂き、発表者の研究にとっても大変有意義な場となった。

報告者:田中有紀(東洋文化研究所)

EAAオンラインワークショップ

石牟礼道子と世界を漂浪く

2020年11月21日

2020年11月21日、EAA オンラインワークショップ「石牟礼道子と世界を漂浪(され)く」がZoomウェビナーを用いて開催された。EAAでは世界文学ユニットのメンバーを中心に、6月以来、石牟礼道子の作品を読む集まりをつづけている。今回のワークショップは、9月4日に行われたEAA オンラインワークショッ

プ「石牟礼道子の世界をひらく」につづき、この読書会の途中経過報告も兼ねた催しであった。

—第1部—

鈴木将久氏(人文社会系研究科)の司会進行で、まず本ブログ報告者である高山花子(EAA 特任研究員)



ウェビナー画面（1 段目左：宮田晃碩氏、右：高山花子氏／2 段目中央：佐藤麻貴氏、右：宮本久雄氏／3 段目左：建部良平氏、中央：宇野瑞木氏、右：張政遠氏／4 段目左：鈴木将久氏、右：石井剛氏）

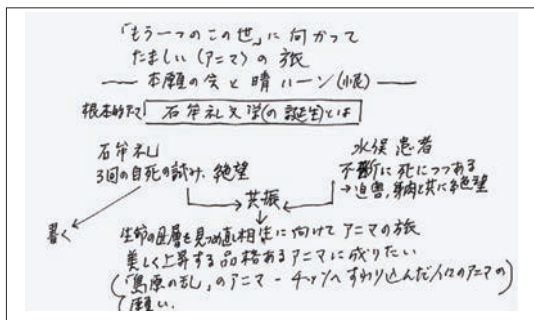
と宇野瑞木氏（EAA 特任研究員）より開会の挨拶がなされた。高山からは、第2部、第3部で、海と空のあいだのつねに流動する「あわい」のイメージが、独自の「高漂浪」、「漂浪く」という表現と共に現れていることを受け、身体の接触が避けられ、物理的な移動＝旅ができない現況をテキスト中の舟のイメージと重ねるように、思考の旅を石牟礼と共につづげられないか、という態度が示され、さらに石牟礼道子と旅のテーマが15年前にすでにUTCPで提起され実践されていたことが確認された。宇野氏からは、前回のワークショップで中島隆博氏（EAA 院長）から投げかけられた、「石牟礼道子の世界をひらく」ときのひらかれる世界とはいったいどのようなものなのか、という根源的な問いが、「魂」や「いのち」と関わるであろうことが述べられた。また、それは前回に張政遠氏（総合文化研究科）が示したように、「道」で他者と出会い「経巡る」経験、さらにはそこで花を見つけるような、根源的な感覚を磨く経験に通じているのではないか、という期待が今回の催しにあることが明かされた。

そのような問題意識から、今回、基調講演を行ったのは宮本久雄氏（東京大学名誉教授）である。「アニメへの旅——本願の会とハン（晴恨）」と題し、宮本氏はこれまでの石牟礼本人とのつきあいから湧き出てきたことを語った。

石牟礼自身の世界に対する絶望も指摘した上で、宮本氏は、石牟礼による「もう一つのこの世」にわたしたちがどのようにコミットできるのか、という問いを、水俣病患者との共振が「魂＝アニメ」、すなわち何

度も死ぬからこそ甦る根源を媒介に辿れるのではないか、という思考の道筋を示した。そして、祖母との関係から絶望を振り切って歌われた一首「狂へばかの祖母の如くに縁先よりけり落さるるならむかわれも」を、彼女の「アニメへの旅」の出発点と措定した。本願の会にも言及しながら、宮本氏自身がかつて韓国の作家らとの交流のなかで発表した、地獄であるハーンをハン（晴恨）の世界に転換してゆくための道として示されたのは、わたしたちもまた、花非人になり、この世に参加し、アニメの国の人になることであるという。石牟礼によって呼びかけられるそのような要請に対しては、魂の深みを見ることで、それが実現することが語られた。ほかにも、概念言語を越えてゆくための困難に際して、原田正純氏による物語論としての水俣学や、事件と共に生起する「事言葉」をめぐる思考も紡がれた。その途上では、視覚に頼りすぎ身体性が失われている現代において、声に出して語る経験、さらには「巡礼」が持つ意義が、自身の途中下車の経験と共に語られ、歩く旅によってはじめて時間と空間が変容し、自分の身体を生きる経験につながるのだと語られた。それが、石牟礼がそうしたように、存在の母層の言葉を聞くことであり、感性を養うことそれ自体が大きなアニメの旅の一里塚になるのである。そして、アニメの国へ参与してゆくことと言葉が関わっていることが指摘された。

質疑応答では、さまざまな文学ジャンルがあるなかで、石牟礼が、詩人ではなく、あえて作家として物語風の『苦海浄土』を書いたのはなぜだろうか、と



右：宮本久雄氏（オンラインで駒場祭が行われる駒場キャンパスにて）



いう問いかけがあり、それに対しては、詩に近いリズム感覚のなかにテキストが書かれていると応答された。つまり、テキストが語りであり、根本的な枠組みが歌なのではないか、ということである。また、許される側と許す側の構造にも目配せをする形で、戦争における許しの問題をどう受け止めればよいのか、という問いかけがなされた。それに対しては、倫理や規範を越えた見地の問題であり、自分の全存在を込めて相手を受け止めないと起こらない、といった困難さが、十字架も例にしながら、応答された。

すでにこの第1部で、答えが出ないままに、石牟礼とともにあることで浮上するさまざまな問いを問い続けてゆくことが「アニマの国」へのひとつの参与の仕方であることが体現されていたとも言えるだろう。

— 第2部 —

パネル発表の、最初の発表者は宮田晃碩氏（総合文化研究科博士課程）であった。宮田氏は「亀裂」としての言葉——『苦海浄土』と『椿の海の記』をめぐる言葉の主体性と共同性への問い」と題し、石牟礼とともに「言葉」を思考することを試みた。『苦海浄土』第1部の「ゆき女書き書」と「私たち」がどう関わることができるのか、これが「誰の語り」なのか、を問いながら、宮田氏は山田悠介氏の議論を引き継ぐ形で、詩的な言葉を互いに語りかわす人間のあり方を、ハイデガーの詩作と思索をめぐる議論に接続し、そのように語り続ける必要性の背後にある根源的な「隔たり」を指摘した。そして石牟礼の『椿の海の記』（1976年）のとりわけ第8章「雪河原」を例

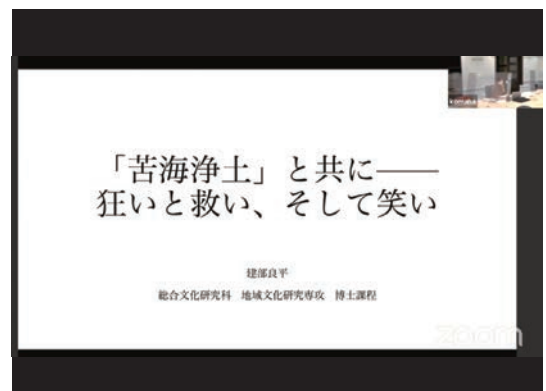
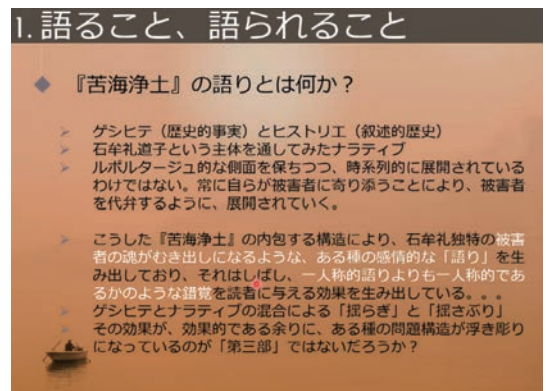
示し、人間同士の隔たりだけでなく、言葉以前の世界との隔たりをも石牟礼が描いていることを指摘し、そうした「亀裂」に対して、それでもなお、ときには祈るように、言葉によって、応答し、語らなければならないと結論した。

次の発表者の建部良平氏（EAAリサーチ・アシスタント）は、石牟礼が1988年の中村了権との対談で明かしている『苦海浄土』命名のエピソードを素材として、苦海の悲惨だけでなく浄土の美しさもまた、読者に訴えかけてくること、さらには、石牟礼がそうした「苦海浄土」と共にある感覚をたえず持ち続けていたことを確認した。その上で建部氏が具体的に挙げたのは、第2部『神々の村』第6章に描かれたチソ株主総会の場面である。そこに現れる「狂い」の背景には、御詠歌の練習を経ての文字と声と感情の融合があり、それが株主総会という舞台にて、虚しさの解放と「実」への変化、すなわち清々しく共に狂い共に救われる様に結実したのではないかと主張がされた。その上で、建部氏は、第2部第2章に描かれる山で狩りや養蜂をする田上義春氏が救いのように感じられている点に着目し、作中で石牟礼が、彼が「向こう側の世界」から「漂浪き」出てきているのではないかと思し、彼の笑顔が自然の神々のそれであるかのように書かれていることを分析し、「苦海浄土」を共にしたことによる微笑みと美しさもまた作品に現れていると指摘した。

最後の発表者の佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）は、「もの語るということ——主観と客観のはざま」と題し、石牟礼の『苦海浄土』を歴史的叙述

と捉えた上で、これが加害者でも被害者でもない立場から三人称的語り、一人称的な語りでもないにもかかわらず、被害者側に寄り添い、当事者に近づくことで一人称的な語り以上に読者を魅惑する力を備えている構造にどのようにアプローチできるのか、という問題意識を明確に示した。そして、環境問題の歴史の語り方のうち、第三者の共感を誘い、二度と環境問題を起こさないよう読者を啓発するスタイルが『苦海浄土』にもあることが指摘された。宇井純の『公害原論』（2006年）にも依拠しながら、佐藤氏は、公害問題では様々な立場があり、それぞれの語りがあることの困難に目を向けた上で、複雑な相違する立場の対立構造をとらえるために、アニメ映画『鬼滅の刃』（2020年）を例として取り上げた。ここで示されたのは、一度失われた人間の尊厳や命は、たとえ戦いに勝ったとしても、何があっても、二度と戻ってこない、という事実である。分断された被害者、加害者、加害者の闘争相手といった組織のそれぞれに存在する論理が交差する際に闘争が生じるという、パラレルな共存の叶わない人間の姿を概観した上で、佐藤氏は『鬼滅の刃』で悪の側の苦悩が描かれていることに着目し、良心と正義の問題に議論を接続した。

休憩を挟んで、質疑応答が行われた。まず、張政遠氏からは三者の発表から共通する問いとして「救済」が抽出され、「許し」をどのように考えるのかが問われた。すなわち、簡単には救済されず、自分だけではなく相手のある、乗り越えがたい隔たりのある問題をどのように乗り越えられるのか、そもそも乗り越えるべきなのか、という問いかけがなされた。つづいて、フロアからあがった、現在、石牟礼を読み意義について、宮本氏への質問が紹介され、応答がなされた。そこでは、水俣病の問題が金銭補償に還元してゆく流れを、現在の新型コロナウイルス感染症拡大と繋げる形で、社会制度や補償の中で救われない魂の問題があることを指摘された。魂の問題が現在の不幸な災厄の中で忘れられているというのである。そのために石牟礼を読み直すことが重要になってくるのではないか、と応答された。そして、魂の美しさが問われるべきであると応答がされた。宮本氏は、ニュッサのグレゴリウスが十字架のキリストに見出した愛の



美しさと、デフォルメされた水俣病患者が石牟礼文学に描かれていることに触れ、自分の姿を歪めてでも他者にコミットをしてゆく姿勢がコロナ禍で石牟礼を読む際に求められるのではないかと応答がなされた。

宮田氏からは「救われる」ことの背後にある何から救われるのか、という問いや、それでもなお「つながり」を求める人間同士の現世での希望がある可能性が答えとして述べられ、建部氏からは『苦海浄土』は毎行毎行違う態度で読んでゆかなければならないような



感覚から、狂い、救い、笑いという3つの観点から石牟礼文学が書こうとしたことに近づこうとした企てが明かされた。佐藤氏からは、人間である以上、金銭ではなく、世代を越えた、継続的な対話や和解、魂の寄り添い合うことが「救済」につながるのではないかと、という応答がなされた。そのあとも議論はひろがり、記憶の継承と水俣湾埋立地の石仏、『鬼滅の刃』ヒットの背景にある違う現実を重ね合わせる力、妖怪等を受け止める感受性や心性、『チェルノブイリの祈り』とのつながりなど、話題は尽きなかった。

最後、石井剛氏（EAA 副院長）は、15年という時間について話をした。すなわち、2005年のUTCPの石牟礼イベント以来、15年が経ち、それがどのような長さなのか、を考える際、昭和28年に水俣病が公式発表され、『苦海浄土』第1部の終わる昭和43年までの15年が想起される、というのである。また、議論の終盤で取り上げられた石牟礼のキーワード、渚という、和解し得ない山と海が交わる場所が汚染されたからこそ、水俣病は起こったのであり、汚染のフロンティアとしての渚から、「わたし」自身が、なにか歴史や加害を負ってしまっているのではないかと、という思いが述べられた。そして最後に、ワークショップ中に何度か現れた「甦る」に言葉をかけるかたちで、息遣い＝ブシュケーの込められた石牟礼のテキストを「読み帰る」ことが「甦る」ことにつながっているのでは

ないかと発言があり、テキストを「読み」、「甦らせる」場としての大学の意義が述べられた。

宮本氏も参加した2005年11月28日から30日まで、熊本で開催されたUTCPシンポジウム「天草プレアニズムと近代の超克——石牟礼文学から始める」の当時のポスターの趣旨文には、「具体的風土的な日本のアニメから世界史的な地平で各文化に生き抜いたアニメの思想に至る考究は、一方でこのシンポジウムの成果として刊行され、他方で国際的対話を拓ける契機となるであろう」とあった。歳月の隔たりを越えて、どうやって、新しくアニメについて、さらにはモラルについて考えてゆくことができるのか。早急に答えを求めることはせず、これからも時間をかけて、未来に向けて探りつづけることをそれぞれが確認する集まりになったと言えるだろう。なお、今回の開催は、感染状況の悪化から開催形態の変更を余儀なくされるなど、さまざまな困難があった。そうしたなかで、実現のために尽力してくれたすべての人に感謝したい。

報告者：高山花子（EAA特任研究員）
写真撮影：石井剛（EAA副院長）
具裕珍（EAA特任助教）
高山花子（EAA特任研究員）

EAA Online Workshop

Identity, History, and Legal Mobilization: Focusing on Japanese War Orphans from China

2020年11月24日

The EAA held the online workshop “Identity, History, and Legal Mobilization: Focusing on Japanese War Orphans from China” on November 24, 2020. The EAA is encouraging young scholars to present their own research and engage in fruitful, constructive, and open exchanges on their research, with the aim of searching for new liberal arts as looking ahead thirty years.

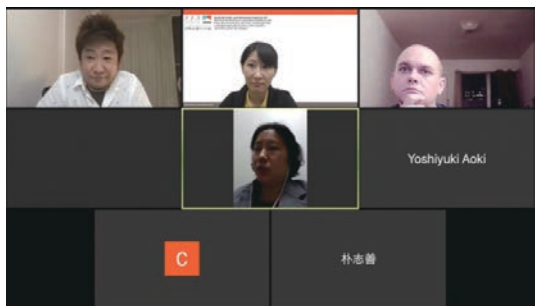
For this event, we were very delighted to have Dr. Hye-Won Um, who recently finished her dissertation and received her Ph.D. in Political Science from the University of Hawaii at Manoa, as a speaker and Takeshi Shirakawa, Ph.D. student at UH specializing in comparative political philosophy between the West and East Asia, as a discussant. Right before the COVID-19 pandemic began, Um and Shirakawa moved to Seoul and Hawaii respectively, and they have been stuck there ever since. Thus, we met each other through Zoom, connecting three distant places: Hawaii, Seoul, and Tokyo. (The COVID era unintentionally creates academic spaces where people on opposite sides of the world

can participate in workshops together despite spatial constraints.)

The workshop began with Um’s talk, raising the very sensitive and tangled case of Japanese war orphans. She analyzed why it took more than five decades to resolve the issues around the war orphans’ repatriation and settlement process, exploring the matters of defining Japanese-ness, recognizing state responsibility for civilian damages during the war, and examining peculiarity and universality of the war orphans’ case in the wider context of East Asian history. Debates about the core elements of being Japanese and the war orphans’ desperate struggles for official recognition as Japanese citizens reveal how the boundaries of the Japanese nation have been constantly reshaped through complex and intense negotiations among different social actors. The question “who is the truly Japanese?” is the political battlefield that the issue sheds light on.

Um also pointed out that public ignorance about the wartime history along with governmental reluctance to support the war orphans pushed them to begin legal mobilization as their last resort. The war orphans grew up in China, spoke Chinese, married a Chinese partner, and practiced Chinese customs. Due to their Chinese cultural traits, Japanese public often mistook them as poor Chinese migrant workers. Even when the public found out these Chinese-like people were Japanese, the majority did not understand the war orphans’ unusual situations and the cause for their political struggles. Thus, it was crucial for the war orphans to explain in Japa-





nese courts who they are and why they claimed for the governmental assistance in regard to protecting citizens' rights. It was also significant that legal recognition of their rights as Japanese citizens can motivate government officials and politicians to formulate new policies on the war orphans.

Despite their desperate activism, they lost all their lawsuits (except for one, a partial winning at Kobe court), as many cases asserting state responsibility for wartime wrongdoings in Japanese courts do. Nonetheless, they were finally able to receive full financial support from the government based on the special package bill under the Abe administration in 2007. It is still not clear why Abe suddenly announced the financial support for the war orphans. However, Um's analysis seems persuasive. Abe succeeded Koizumi's legacy on the Japanese victims abducted by North Korea providing them full support package including national pension, national health care, public housing, language education, etc. Abe's stance on state responsibility for protecting its cit-

izens in the case of these Japanese abductees pressured the government to provide the war orphans similar support package.

Following Um's talk, Shiraikawa's discussion penetrates into its relevance with regards to the applicability and comparability; the wavering response of Japanese government, embracing Okinawans and Ainu people as Japanese on the one hand, refusing war orphans as Japanese on the other hand, reflecting that the twisted development of modern nation-state Japan, entangled with territorial expansion schemes.

Participants were also actively engaged in the discussion, raising questions as post-activism after they obtained the so-called "success" in movements, whether they have solidarity networks with other relevant cause based civic activism across East Asia, why Japanese war orphans desperately clings to legal mobilization as a movement tactic, and whether the "Japanese-ness" identity in itself has been static or reconstructed, the possibility to see identity as a means rather than a cause or a goal, etc. As you may be aware, to exchange these inquiries back and forth the workshop time was not enough, was much over what we scheduled. It was indeed a thought-stimulating discussion, making us look forward to the next meeting.

Reported by Yoojin Koo
(EAA Project Assistant Professor)

第1回 101号館映像制作ワークショップ

2020年11月24日

このたび、EAAでは101号館の映像作品を創るプロジェクトを開始した。その第1回ワークショップが、2020年11月24日に101号館セミナー室で行われた。参加者は、高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）、

日隈脩一郎氏（EAAリサーチ・アシスタント）、小手川将氏（EAAリサーチ・アシスタント）、それから報告者の高山花子（EAA特任研究員）の4名である。それぞれの自己紹介のあと、まず高山が、今回のプロ



左より、高原智史氏、小手川将氏、日隈脩一郎氏

ジェクト立ち上げの経緯と趣旨の説明をした。EAAは、駒場オフィスの位置する101号館が、旧制第一高等学校時代、中国からの留学生のための課程である特設高等科の学び舎であったことを受け、駒場博物館や駒場図書館に所蔵される当時の留学生資料の調査を進めてきた（一高プロジェクト）。それと連動して、今年の2月7日より、「一高中国人留学生と101号館の歴史展」と題し、建物の設計図や留学生の写真を101号館エントランスに展示をしている。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の状況を受け、同年3月に予定していたシンポジウムと駒場図書館1階での展示は延期を余儀なくされ、エントランス展示そのものも多くの人の目を見ることは叶わなくなった。それを受け、展示の映像をオンラインで公開できないか、という話が浮上し、そこから発展して、関東大震災後のキャンパス計画を牽引した内田祥三（1885年-1972年）設計のこの建物そのものを、映像作品にするアイデアが生まれ、院生主体の制作企画が動き出すに至った。

その後、高原氏より、旧制第一高等学校の校長を務めた狩野亨吉（1865年-1942年）に関するアーカイブの整理をはじめ、これまでの一高プロジェクトについての説明がされた。それから、1935年9月に行われた本郷から駒場への一高移転の際の行軍の記録映像を視聴し、当時の渋谷周辺や駒場キャンパスの様子と、一瞬映っている建設途中の101号館を確認

した。また、最後、抜粋ではあるが、小津安二郎のモノクロサイレント『東京の合唱』（1931年）に映っている本郷時代の一高の体操風景や、第21回記念祭察歌《光まばゆき》が同窓会で歌われる様子を見、一高生の世間での印象や、あるいはそれ以降の小津映画のショットとの比較について、意見交換を行った。

高原氏は旧制第一高等学校で発行されていた『校友会雑誌』を手掛かりとして、近代日本の青年たちの思潮を、日隈氏は及川平治（1875年-1939年）を中心とする近代日本教育思想を、小手川氏はアンドレイ・タルコフスキー（1932年-1986年）をはじめ、映像にとどまらず、ロシア文化をひろく研究している。一高が駒場に移転した1935年は、満州事変を経て、日中関係が極めて緊張していた時期である。どうやって、歴史に対する批判的な眼差しを持ちつつも、建築として残存するこの101号館の記憶の手触りを形にできるのか。どのような作品を創ってゆくかについては、これからワークショップを重ねながら構想を具体化してゆく予定である。「感性」という概念そのものを絶えず問い直しながら、それでもなお感性を働かせて、これから作品を創ってゆくための記念すべき最初の集まりになったと思う。

報告者：高山花子（EAA特任研究員）

使用の手引き

石井剛 (EAA副院長)

2020年11月24日



EAAでは新しく「話す／離す／花す」というリレー式エクリチュールの試みを始めることにした。もともとの発案者は特任研究員の高山花子さんだ。院長や副院長の言葉をもっと直にウェブサイト上で発信すべきではないかというのである。わたしがすぐさま連想したのは、UTCPでかつて小林康夫さんが試みていた「哲学の樹」というプロジェクトである。これは、ひとまとまりのエッセイに対して誰かが自由にコメントを加えていくという斬新なアイデアであった。高山さんにして見れば、4月からの在宅中心の新しい勤務習慣に対する危惧もあったのだろう、「(昨今は)エクリチュールそのものがテレコミュニケーションであることを皆が忘れていた」と訴えてきたのだ。そして、「書くこと」は「おしゃべり」をいったん中断して「ことば」にすることであるはずだとも教えてくれた(この発想も小林さんからのギフトだそう。出典は『若い人のための10冊の本』)。なるほど、「話す」ことから「書く」ことへの昇華は、いったんことばが自らから切り離されることによって実現する、紛れもない冒険である。それによって、ことばは友情を育むことになるだろう。

ここ数年、わたしが好きでたまらなく感じるようになったのは、『老子道德経』の成立の由来を語ったベルトルト・ブレヒトの詩に対するヴァルター・ベンヤミンの批評だ。ベンヤミンは言う。

『道德経』の内容は友情である、と言うことが仮に不当なことだとしても、少なくとも、『道德経』は——この伝説によるならば——それが後世に伝えられたことを友情に負っている、と主張してもかまわないだろう。(ベンヤミン「ブレヒトの詩への註釈」、『ベンヤミン・コレクション 4』、517ページ)

わたしはこの2年間に何度授業でこれを引用したかわからないほどだ。ここでいう「友情」とは、端的

には老子と税関吏(尹喜)との間で、偶発的に、したがって運命的に生じた交感のことを指すが、わたしは「後世」に伝えられたことのすべてがそうした友情(偶発的であるがゆえに運命的な)に負っていると考え。それは、『老子』(『道德経』はその別名)というテキストが読み継がれてきたこと、そして「読み継がれ」の中でさまざまな注釈が生じ、それがテキストに新たないのちを吹き込んできたこと、という2つにして1つの事実によって証される。テキストはその生成からしてすでに友情による相互行為なのだ。

【進め方】

こうした縁起を踏まえた上で、「話す／離す／花す」の進め方を説き明かしたい。何よりも特徴的なのは、それぞれ独立したエッセイが、それが生まれる前にすでに存在していた別のエッセイ中のあることばに対する注釈の関係になっているということだ。だから、第n回のエッセイ中にあるハイパーリンクをクリックすると、第n+x回(x>0)のエッセイに飛べるようになっている(注釈方法①)。だから執筆者は、提出時にそのエッセイがどの回のどのことばに対する注釈として派生しているのかを担当者に伝えてほしい。もちろん、これとは逆に第n-x回へともどることも可能だ(注釈方法②)。時間の先後関係の秩序を越えて相互に注釈し合う奇妙な連環も歓迎したい。だが、もどって参照することはどこでも当たり前のように行われているし、わたしたちは古いテキストの中から新しいテキストが継起的に生成していくことによって、この場(サイト)がつねに生成と変容のフロンティアであり続けることにこそ積極的な意味を見いだしたいので、「注釈方法①」をエッセイ執筆における最低の要求としたい。いまわたしが書いているこのエッセイが過去2回のエッセイ(中島さんの回、高山さんの回)のうち、どの部分を注

釈しているのかは敢えて明かさないので、それぞれのページを見ていただきたい。

さて、ブレヒトの詩「老子の亡命途上での『道德経』の成立についての伝説」もまた、友情を繋ぐように広まった作品であることはハンナ・アレントが記しているとおりだ。実は、この詩はナチスから逃れるためにデンマークのスヴェンボルに亡命していたブレヒトを訪れたベンヤミンが持ち返ったことで、「ちょうど良い便りについてのうわさのように、こうした智慧が最も必要とされているところで——慰めと忍耐と持久力の源泉として——急速に口から口へと伝えられた」（ハンナ・アレント『暗い時代の人々』、378ページ）のだった。上述のようにわたしはこのものがたりについて何度も授業の中で言及してきたが、不幸なことに COVID-19 の流行という予期せぬ事態によって、わたしたちは急速に「暗い時代」に放り込まれようとしている。

先日、とある授業で啓蒙について講義をした。ジャック・デリダの『条件なき大学』から始めて、わたしなりに人文学の意味を問い直そうと試みた拙い授業だ。授業後にコメントを寄せた学生は、アウシュビッツのあとでなぜなおも啓蒙を信じ続けることができるのだろうかと問うてきた。その問いは痛切だった。なぜなら、その学生の周囲には新型コロナウイルスに感染した友人がおり、共同生活をしている（といっても同じ建物に住んでいるというだけで、自室から出てくることもはばかられ、ラップトップの前に座ってオンライン授業に出続けるだけの孤立した生活を強いられている）人々の中に、やり場のない不安が充満していた。その不安は、一連の防疫対策によって解消されるものでないばかりか、感染という現象を科学的、規律的に処理しようとする啓蒙的合理主義によって充進すらするものであるとこの学生は言う。合理主義的理性によって支配された社会は、パンデミックを前にしても、理性からこぼれ落ちる不安や恐怖や、社会システム自体が内に抱える不合理（ほんの一例だが、貧富の構造的格差は正義に反するがゆえに理性によって改善を目指されるべき不合理だとも言える）を等閑視したままで、既成

の秩序構造を守ろうとしているだけではないか。大学はそうした構造を支える学問の場として最も大きな責任を有しているにもかかわらず、その構造に加担していることに対する自覚と反省が今の大学には欠如しているところの学生はいう。そして、こう問う。そのような大学は、人文学の必要性を主張する資格を本当に有しているのか、と。

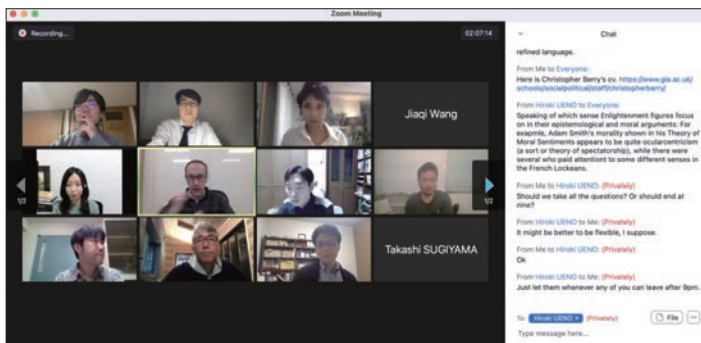
わたしたちはどうやってこの学生の問いかけに答えるだろうか。そう、たしかに啓蒙（enlightenment、光を与えること）の理想は啓蒙自身の内側から野蛮に転じた。わたしたちはそのあとの時代を生きている。しかしそれでもなお、わたしたちは光を求め続けるべきなのではないか。アレントは言う、「最も暗い時代においてさえ、人は何かしら光明を期待する権利を持つ」（『暗い時代の人々』、10ページ）のだと。わたしは、テキストを読むという行為の中に、弱いかも知れないが一抹の光明を見いだすことはつねに可能であると信じるし、それは実際、ナチス・ドイツの支配下においてブレヒトとベンヤミンから「柔かい水が勝つのだ」という老子の教えを知らされ、そこに光明を見いだそうとした人々の間を繋ぐエクリチュールの友情となって、アレントの心を動かしたのだった。そして大学は、光の灯る方向を示す存在であり、光を求める人々の友情が交わされる場ではないだろうか。少なくとも EAA が目指すべき新しい学問とはそのようなものとして大学を作り直していくものであるはずだ。わたしたちが「30年後の世界へ」を学生の皆さんとともに構想しようとしてきたことの根底には、こういう願いが確固として存在している。

ところで、「話す／離す／花す」の3つ目の「ハナス」は奇妙なことばである。これは、最近、中島さんが強調している「花する」というキーワード（詳細は EAA Booklet 7『世界人間学宣言』、43ページ）から取ったものだ。このプロジェクトがこれに関与する人々一人一人（書く人も読む人も）が「花する」ことに寄与するものであってほしいと願っている。

写真撮影：高山花子（EAA特任助教）

EAIHN Online Seminar Series (2)

2020年11月25日



On 25th November 2020, the East Asian Intellectual History Network (EAIHN), through the auspices of Seoul National University's Program for European Studies, hosted a talk by Tanvi Solanki (Yonsei University). After kind opening remarks by the chair, Paul Tonks (Yonsei University), Tanvi Solanki articulated the main arguments of her paper, and then situated the paper in the context of her project on 'cultural acoustics,' explaining how her project developed over the last several years, beginning with a search for Herder's missing treatise on acoustics. In his thoughtful response, Hideo Kotani posed important questions regarding the

possibility of removing Kant's empirical arguments about racism from his critical writings regarding aesthetics, the relation between Herder's concepts of language, culture and nation, and the relevance of Herder's cultural acoustics to contemporary political issues. Yoko Ioku then presented a series of erudite questions concerning Herder and Kant on language, the former's concept of culture, and the distinction between Herder and other critics of Kant's writings on race. The audience then engaged with the speaker in a lively discussion on related issues such as Herder's notions of the senses besides sound, the *sensus communis*, and the Scottish Enlightenment's related and contrasting views of language.

Reported by Tanvi Solanki (Yonsei University)

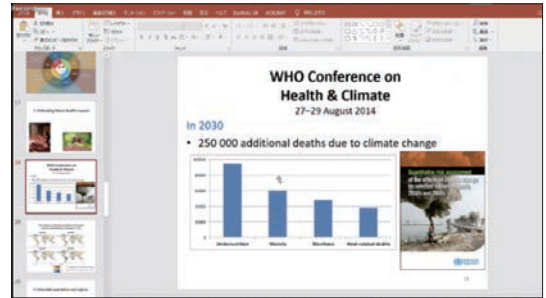
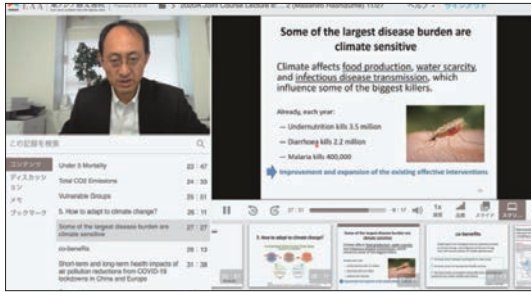
第8回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年11月27日

2020年11月27日、第8回「UTokyo-PKU Joint Course」が開催された。今回は橋爪真弘氏（医学系研究科）を講師に迎えた。主題は、現在世界的に最も注目されているトピックの1つである地球温暖化が、

人類の健康にもたらす影響である。同時に、公共衛生との繋がりから、目下流行中の新型コロナウイルスも議論に上がった。

事前に配布された授業コンテンツにおいて、橋爪



氏は、地球温暖化はもはや未来のことではなく、すでに進行中の事件だと述べる。そこで提示されたのが「mitigation（緩和）」と「adaptation（適応）」の対策であり、さらに、「co-benefits」という温暖化と公共衛生の双方を改善する政策アプローチがあることを紹介した。

印象深かったのは、温暖化がもたらすマラリアなどの疾病リスクの増加を被るのは、温室ガスの主な排出地域ではないアフリカなどの発展途上国家であることだ。南北の格差問題は解決されるどころか、より深刻化する傾向にあると言える。

ディスカッションでは、学生側から、データに反映されている数値の読み方、専門家と公衆とのコミュニケーションの困難、新型コロナウイルスによるドメスティック・ヴァイオレンスや自殺率の増加についてなど、様々な視座からの質問が挙がった。例えば、各国政府によるロックダウンは多くの人々の医療施設へのアクセスを切断してしまうという質問に対し、橋爪氏は、自分が現在関わっている日本における「excess

death（超過死亡）」の研究データを紹介して応じた。新型コロナウイルスのダメージは罹患者のみでなく、私たちの目に直接映らないところにも及ぶのである。世界中の医療関心が新型コロナウイルスに集中する中、本来マラリアに向けられていた注意力が以前と比較すると下がってしまっていると橋爪氏は指摘する。また、国によって様々なコロナ対策があるが、経済停滞は死亡率を増加させる原因の1つであるため、政治家は経済問題にも気をつかねばならないという現実には言及した。

地球温暖化、そして目下進行中のパンデミックは、グローバルレベルの挑戦である点で共通している。人間の活動は、疾病がもたらす負の影響にどう立ち向かうべきか？ポストコロナの時代を見据えつつ、講師と真剣に意見を交わす学生達の言葉が印象深い講義であった。

報告者：張瀛子(EAAリサーチ・アシスタント)

全学自由研究ゼミ

人文-社会科学の アカデミックフィールドを体験する

セッション4

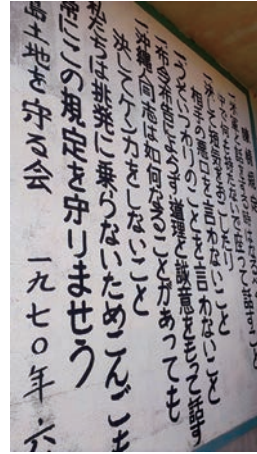
2020年11月27日・12月4日

今回のセッションは「ポスト植民地主義」というテーマで、本ブログの報告者である崎濱紗奈(EAA 特任研究員)が担当した。報告者は自身の研究において、「沖

縄近現代思想史」というフィールドに足場を置きつつ、帝国主義／植民地主義という文脈において長年議論されてきた「主体」概念について考察を行ってきた。



日本政府によって普天間基地移設予定地として選定されている辺野古にて。2014年報告者撮影。



伊江島にて。2014年報告者撮影。

沖縄国際大学よりのぞむ普天間基地。
2014年報告者撮影。

Week 1の講義では、インドやアフリカを震源地として展開されてきたポスト・コロニアリズムの諸理論を参照しつつ、大日本帝国の成立という具体例に則して次のように論じた。「日本」という「主体」は、決して「日本」それ自体として、自律的に成り立っているわけではない。人類学や言語学といった近代の学知を総動員し、観察・記述するという行為の只中において、「アイヌ」「沖縄」といった内なる・境界線上の「他者」、そして「朝鮮」「生蕃」「満蒙」といった周縁の「他者」が創出される。本来境界線が曖昧なところに線を引き、そこから逆照射される自己像が「日本」として中心化・主体化される。その上で、「中心」の内部に「他者」を（排除しながら）再包摂するというプロセスこそが、帝国主義／植民地主義である。植民地支配においてしばしば採用されてきた「同化主義」という方法は、こうしたプロセスの上に成り立つものである。一方、「同化主義」への批判として提起された「多文化主義」は、それぞれの「個性」を重視するという意味において一見リベラルな発想のようである。しかしそれはその実、帝国によって創出された「主体」を前提としており、さらには、それら

を包摂する「寛容な帝国」というイメージの演出に寄与するという限界を持つ。加えて、帝国主義／植民地主義による「主体」の創出とその活用は、資本主義の展開と密接な関係性を持つことも確認された。

「主体」はこのように、帝国によって創出されたという来歴を持つが、他方で、抵抗のための足場として活用されてきたという側面も持つ。例えば、脱植民地化を実現するために、多くの旧植民地では、ナショナリズムがその結集軸となった。Week 2では、こうした「主体」の両義性を見据えつつ、しかし、抵抗のためであったとしても、その「主体」にもまた排除と包摂という問題がつかまとうというアポリアをめぐる、参加者の間で議論がなされた。また、参加者からは、現代日本において「日本」という「主体」は、どのように想像／創造・再構築されているかという問いも提示された。これに関連して、先の大戦をめぐる「記憶」の再構成・創出が、「主体」の問題と深く関わっているのではないか、という意見が挙げられた。参加者の出身国・地域が様々に異なっていることから、互いの経験を参照しあいつつ、有意義な議論が展開された。

4回のセッションを経て、参加者の間に、自由闊達にディスカッションを楽しむという共通感覚が生まれてきたように思う。本ゼミナールの主宰者である前野清太郎氏（EAA 特任助教）と中村長史氏（教養教育高度化機構）は、誰もが自らの考えを自由に話し、そして、誰もが相手の発言にじっと耳を傾けるという safety な空間の重要性を、度々強調してきた。こうした空間を創

出ること、そしてこうした空間に惹かれて人が集まるという運動の中にこそ、「書院」の意義がある。参加者ひとりひとりの力によって、本ゼミナールが紛れもなくその端緒となっていることを確信した、貴重なひとときだった。

報告者：崎濱紗奈（EAA特任研究員）

第6回「文学と共同体の思想」読書会

2020年11月28日

2020年11月28日、第6回「文学と共同体の思想」読書会がZOOM上で開催された。当日の参加者は、王欽氏（EAA 特任講師）、佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）、角尾宣信氏（総合文化研究科博士課程）、建部良平氏（EAA リサーチ・アシスタント）、張瀛子氏（EAA リサーチ・アシスタント）および報告者の孔徳湧（学部生・EAA ユース）の6名であった。今回は、社会学者・宮台真司の著作『制服少女たちの選択』（講談社、1994年）を取り上げた。前半は王氏による発表が行われ、後半は参加者による自由闊達な議論が行われた。

（前半：王氏による発表）

王氏はまずなぜ文学をテーマとする読書会で社会学者の著作を取り上げたかについて説明した。王氏は文学的なものとは何かについて突き詰めて考えた結果、文学的なものを考える上で日常生活において一般的には当たり前とされるルールや基準から外れた怪しい現象をとりあげることに意味があるという考えにたどり着いたという。そして、まさに怪しい現象にあたる90年代に社会で論争を呼んだ女子高生の援助交際ブーム・ブルセラブームを取り扱った本書に至ったのである。

本書は90年代の現象を扱ったものであるため、古臭く見えるが、実は2010年代に秋葉原を中心にJK散歩というサービスが流行ったようである。このサービスは女子高生が客と一緒に散歩し、カラオケに行っ

たり、食事に行ったりなど擬似デートするものであるが、中には性的なサービスの提供が一部であったともいう。本現象は仁藤夢乃氏の『女子高生の裏社会「関係性の貧困」に生きる少女たち』（光文社、2014年）で取り上げられており、本読書会で王氏は繰り返し宮台氏と仁藤氏の著作を比較した。

仁藤氏はその著作でJK散歩を始めとするJKビジネスのサービスが存在する世界を「裏社会」と呼んだが、果たして「表社会」とは何か、「裏社会」とは何か、と王氏は問う。そして、仁藤氏の考え方は「表社会」と「裏社会」の境目をあまりにもはっきりとしたものととらえ、本来は偶然的なものを必然的なものとみなしているため、その結果「表社会」が覆い隠す真実や問題を見過ごしている和王氏は論じる。仁藤氏の著作は31名の女子高生へのインタビューをもとに行なったものだが、インタビューの項目で、家族についての項目では親からの虐待経験についての質問、学校生活についての項目ではいじめ経験、頼りにできる人はいるかどうかなどについての質問、これまでの経験についての項目では売春の経験、自殺の経験などについての質問が目立った。おそらく仁藤氏はこれらのマイナスの経験によって女子高生がなぜJK散歩に関わったかを説明できると考えていたであろう。そして、仁藤氏の本にメイドカフェや夜の仕事に足を踏み入れた結果、AVや風俗の世界に流れ着いた人に関する記述が登場するが、おそらく仁藤にとってみればメイドカフェなどのサービスはすべて風俗であり、メイドカ

フェに踏み入ると必ず売春やAVの世界にも入るのである。つまり、仁藤は一度裏社会に足を踏み入れてしまおうと売春やAVへのさらなる墮落が待ち受けていると考へ、その過程を偶然的なものではなく、必然的なものとして捉えている。

ここで王氏は再び、表社会とは何か、裏社会とは何かという問いに立ち戻る。果たして表社会と裏社会の境はそんなにはっきりしたものか。なぜスターバックスでのバイトは表社会で、メイドカフェでバイトすると裏社会になるだろうか。仁藤氏のこの問いに対する答えは、男たちが最初から下心を持ち彼女たちとセックスすることを望んでいるからである。しかし、これはあまりにも単純で、実態とずれがある。例えば、インタビューした女の子たちのうち実際に男性と関係を持ったのはわずか1-2人でしかない。しかし、それでもそれらのケースは仁藤の本の中で重要な位置を占めていた。逆に言えば、ほとんどの女の子はただお客さんと食事したり、カラオケで遊んだりしただけである。仁藤氏にとってみればすべての男性は犯罪予備軍であり、犯罪予備軍の男たちとナイーブな少女たちというナイーブすぎる二項対立でJKビジネスという現象を描いている。

ここで真に問うべきは、JK散歩やメイドカフェを通じて女の子たちと触れあおうとする男たちが何を求めているかである。著作のタイトルにもなっている「関係性の貧困」について実は仁藤氏は詳しく定義していない。そして、この「関係性の貧困」は表社会でも起きているのではないかと王氏は問う。つまり、虐待やいじめなどの逸脱的な現象にJKビジネスの原因を還元できず、表社会の日常生活がたえず関係性の貧困や社会関係の貧困を生み出しているのではないか。その結果としての、JKビジネスが現れているのではないか。

男性客の中には、体を求める客もいれば、ただ女の子と遊ぶことだけを求める客もいる。前者は確かに犯罪予備軍かもしれないが、表社会ではっきりした地位や立ち位置をもっているからこそこのような行動に出るのではないか、逆に後者は表社会じゃ理解できないような行動に出る時点で、表社会のルールに従っておらず、表社会に回収しきれないような裏社会のルー

ルに生きているのではないか。人々の欲望がうずまく裏社会という空間は、表社会のルールや文法が隠蔽しようとしている真実が現れているという意味で、表社会の写し鏡でもあるのではないかと王氏は問う。

そして、これが宮台氏の『制服少女たちの選択』を理解する上での鍵となる。

宮台氏はその著作において、ブルセラショップや援助交際といった逸脱的な行為自体ではなく、その成立を可能とした社会的条件や歴史的な条件を明かすことに重点を置いている。そして、その条件とは大きく分けて2つあり、1つは当時の女子高生の親のほとんどを占めていた団塊世代の親たちの失敗、もう1つはコミュニケーションを支える共通前提の消失である。

宮台氏によれば、団塊世代の親たちは二重の意味で絶対性の伝達者として力不足だったという。60年代の地域共同体の崩壊を背景にしながら、団塊世代はもともと旧来の道徳や価値観に反抗していた世代だったが、社会に出た後の彼らは社会にも、会社にも、家庭にも倫理や道徳的なものを見いだせなくなった。そして、そんな彼ら自身が信じきれない道徳を子どもに伝えられるわけがない。70年代以降「友達親子」という言葉が流行ったが、これは上記の現象がもたらした家庭関係の空疎という結果でしかない。そして、それは子どもには親子のふりをするというロールプレイングとして受け取られた。

後者の要因については、それを代表する現象として女子高生の間に見られた「かわいいコミュニケーション」を宮台氏はあげる。宮台氏によれば、女子高生の間で「かわいいコミュニケーション」は70年代以降流行ったが、80年代後半に適用範囲が無限に拡大された結果、それは問題の「無害化ツール」となってしまう、女子高生たちはあらゆる問題を無害化されるようになった。ここからみえることは、自分たちで線引きを行い、その線の内側にいさえすれば自分は「めっちゃくちゃではない」という感覚を保てるという女子高生の作法である。ここで、宮台氏は内的な確かさに基づく「倫理」と世間的なものに支えられる「道徳」を対比させ、日本は近代以降あくまで自分と周囲が違わないこと、つまり世間的な道徳と自分がずれていないことによる安心をコミュニケーションの支えにしてき

たという（「共同体的作法」）。そして、70年代の共同体の崩壊と消費社会の到来によって、社会は「島宇宙化」し、道徳が消滅したという。その中で若者たちは内的な倫理にも世間的な道徳にも基づかず、自分たちの勝手に行った線引きの中で自己評価やコミュニケーションを行うようになったという。このような若者たちのコミュニケーション作法を宮台氏は「相手の正体や内面を不問に付したまま、ノリの同じさをあてにして永遠に戯れる」「共振的コミュニケーション」とよび、これを親しい者同士のわかりあいをもとにした「人格的なコミュニケーション」とも、（店員や客のような）役割に対する制度的な信頼をもとにした「非人格的コミュニケーション」とも区別する。

王氏はここで、みなさんが普段黙認している基準や価値観とはどういうものか、それらの基準の偶然性は覆い隠されているのではないかと問う。つまり、自分たちの行っている線引きは本来勝手に行ったもので偶然的なものではないのに、表社会で必然的なものとして扱われているのではないかと問う。例えば、果たして本当にスタバでバイトしている人は優秀もしくは普通で、JK散歩でバイトしている人はやばいのか。他にも、王氏は、仁藤氏は男性客をみなきもおじさんとして単一的な存在とみなしたのに対し、宮台氏は客についての言及が皆無であることを指摘した。客がいなければビジネスは成立しないため、客の需要についての分析は必須であり、そして上記で述べたようにそれは生物学的な欲求だけではないはずであると王氏は指摘する。

最後に、王氏は90年代にはまだ「島宇宙」がお互いみえていて（例えば、オタクはエヴァンゲリオンが好き）、境を超えた移動ができる時代だったが、現在はSNSなどの発達によって人々は自分が見たいものしかみないことが可能となった。つまり、自分の「島宇宙」のみをみるのが可能になったと指摘する。そのため、宮台氏が指摘するノリに基づく〈共振的コミュニケーション〉は今日でも続いており、このような社会の中で表社会や裏社会の境目を必然的なものとみなすべきではなく、表社会の「関係性の貧困」がJK散歩のようないわゆる「裏社会」の形成を促しているのではないかと絶えず問う必要があると指摘して発表

を締めくくった。

〈後半：参加者間の議論〉

次に、参加者間で自由活発な議論が行われた。建部氏は、TwitterなどのSNSで近年パパ活や売春が行われている事例があることをあげ、裏社会がどんどんアンダーグラウンド化していくことを指摘した。そして、インターネットの発達によって、裏社会的なものがますます管理不可能になっていくのではないかと問うた。また、レンタル彼氏・彼女の例をあげ、かつては裏社会とされていたものが表社会に出始めているのではないかと指摘した。

張氏によれば、中国でも似たようなサービスがあり、親戚への挨拶で追求を避けるためにそういったサービスを使う人が多く、日本ではまだまだこのようなサービスに抵抗感があるのに、中国では比較的受け入れられている。本読書会では中国在住もしくは留学経験をもっている人が多かったこともあり、中国と日本の違いについてかなり盛り上がった。日本人が宮台氏も指摘したように世間的な建前に依拠することが多いのに、中国では比較してそういったことは少なく、あくまで合理性に依拠して行動する人が多いのではないかと意見が上がり、またその背景についても様々な意見が挙がった。その他にも、中国と日本における「文明」という言葉の使い方・扱われ方の違い、両国の近代化の違いなどについても様々な観点から論じられた。

角尾氏は、やはりおじさんはなぜ少女たちとJKビジネスを通じてふれあおうとするのかについてももっとしっかり分析すべきではないかと指摘した。この点に関して佐藤氏は、宮台氏も言及した失われた父性が背景にある、つまり家庭で満たされない感覚を少女たちとの触れ合いを通じて満たしているのではないかと指摘した。角尾氏はこの点に関して日本の家族構造と象徴天皇制の相似性から、独自の分析を加えた。孔氏は、満たされないおじさんの事例として風俗嬢やキャバクラ嬢に説教する男性客がいることをあげた。また、報告者（孔）はすべての者に共有されているわけではない性を巡る道徳観を他者に向けているという点で、仁藤氏と説教するおじさんは同じなのではないかと

と問うた。この点に関して、張氏は中国で代理出産が論争をよんでいることを例としてあげながら、人間にはどこかお金で買えないものの存在を求める性質があるのではないかと指摘した。他にもここに書ききれないくらい多くの点について白熱した議論が交わされた。

〈結び〉

本読書会において様々な議論が交わされたが、共通の前提がない現代社会において、自らが必然的なものもしくは前提とみなすものを安易に他者に当てはめてはならず、共通の前提がない中でいかに他者とコミュニケーションをとるか、どのような社会を作るべきかを我々は考えなくてはならないと感じた。

宮台氏がその著書で述べたように、逸脱をする個人が悪いのではなく、一見逸脱にみえることは社会システムの変容の中で個人が最適戦略をとった結果にすぎないということをまずは認識する必要があるのではないか。その認識に立った上で、対話と議論を重ねるべきではないか。各人が内的な倫理を立ち上げるにせよ、世間的な道徳を回復させるにせよ、島宇宙化した社会を許容するにせよ、もしくは他の手段を考えるにせよ、まずは上記の認識をもつことが出発点となる。本読書会が行ったことはまさにこの出発点に立つことであり、参加者同士の白熱した議論を通じてその先には数多の論点があることを痛感させられた。

報告者：孔徳湧(学部生・EAAユース)

第2回 『天下的当代性』を読む会

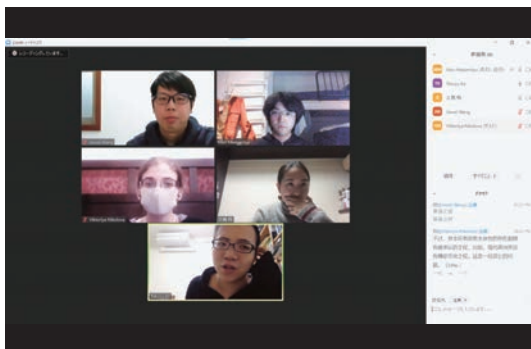
2020年11月29日

2020年11月29日、第2回『天下的当代性』を読む会がZoom上で開催された。当日の参加者は、ヴィクトリア・ニコロヴァ氏(総合文化研究科修士課程)、および孔徳湧氏、王嘉蔚氏、熊文茜氏、報告者の円光門の計5名(いずれも学部生・EAAユース)である。藪本器氏(学部生・EAAユース)はレジュメ提出のみの参加となった。

第2回となる今回は、趙汀陽著『天下的当代性——世界秩序の實踐与想像』(中信出版集団、2016年)の第2章と第3章(133-281ページ)を扱った。第1

回にも増して多くの論点が提示されたが、それらを包括的に記すことは困難なため、本稿では「民族」と「ゲーム理論」という2つのトピックに絞り、それぞれの議論を報告したい。

「民族」について。藪本氏は、「中国は民族国家ではない」という筆者の主張は近代以降の中国が「中華民族」概念の創造などを通じて現代国家へと変貌を遂げてきた事実と矛盾するのではないかという疑問をレジュメ上で提示した。これに対して熊氏は、本書において中国とは「中原逐鹿」と呼ばれる権力闘



争に参加した人たちが協働してつくり上げてきた国であるとしており、地理的な境界を問わずこれまで「中原逐鹿」に参加した人々は全て「中華民族」に含まれるという点で、中国は民族国家と性質を異にすると考えられるのではないかと応答した。また、中国出身の両親を持つという孔氏は、日本の政治家が「日本国民の皆さん」と呼びかけるのを聞いても何とも思わないのに対し、仮に「大和民族の皆さん」と呼びかけるのであれば自分は疎外感を覚えるだろうと述べ、「民族」という語にはどうしても排他的な響きを感じざるをえないと話した。この点を受けてヴィクトリア氏は「民族」という漢語の曖昧さを指摘し、「中華民族」の「民族」は ethnicity ではなく nation と訳した方が適切であると考えられるため、「大和民族」とは違うニュアンスを持つであろうと補足した。

「ゲーム理論」について。熊氏は、筆者が天下体系を説明する際に頻繁にゲーム理論を援用する点を問題視した。熊氏いわく、ゲーム理論をはじめとする経済学的な枠組みは、資源の希少性という前提の下に人々の欲望を満たすための分析手法であるから、時空間の有限性を想定しない天下体系を記述するという本書の意図に適さないはずである。王氏もこれに同意し、ゲーム理論は本来天下体系のアンチテーゼであるべきだと述べ、孔氏もまた、ゲーム理論は軍拡のジレンマなどといった安全保障政策を説明するため

の道具立てであるから、筆者の主張する天下体系よりも現実の主権国家体系により親和的なものであると述べた。これらの問題についてヴィクトリア氏は、ゲーム理論という実証的な枠組みを導入することで、筆者は自身の哲学理論が実証研究でも有効であると示したかったことが原因だったのではないかと推測した。

この他にも、華夷思想には異民族包括主義的な「華夷之変」と異民族排斥主義的な「華夷之辨」の両側面が実際存在していたにもかかわらず、筆者は前者ばかりを強調しすぎているのではないかという指摘が王氏からなされ、支配者と被支配者の二項対立が固定化されることなく、両者が流動的に絶えず入れ替わっていくという「中原逐鹿」のあり方は、今日のアイデンティティ・ポリティクスが抱える問題を打開する要素を秘めているのではないかという意見が円光から提示されるなど、論点は多領域に及び、活発な議論が2時間以上に渡って展開された。

今回を以て本書を一通り読み終えたわけであるが、今回は石井剛氏（EAA 副院長）をお招きし、これまでの議論で解決しきれなかった疑問についてご教示いただく機会を設定したい。開催は今月下旬を予定している。

報告者：円光門(学部生・EAAユース)

Look 東大・EAAデー

ラップアップセッション

2020年12月1日

10月26日、11月5日、11月13日とおよそ2週間の間に3回行われたシリーズ企画「Look 東大・EAAデー」で、それぞれ伊達聖伸さん、國分功一郎さん、武田将明さんが毎回どのように趣向を凝らしたのかについては、すでにこのブログで報告したとおりです。12月1日には、この3回が参加者の皆さんにとってどのような時間であったのかを振り返るために、当初は予定になかったラップアップの場が設けられまし

た。日ごろの業務も相当お忙しいと思うのですが、その中から2時間という短くはない貴重なお時間を割いて、ダイキン社員12名の方がお集まりくださいました。また、EAAからも学部生向け教育プログラム「東アジア教養学」のプログラム生が1名参加しました。

このラップアップセッションだけではなく、各回の講義は、登壇者がただ話題を提供して参加者がそれを聴くというものではありませんでした。それは「講義」

という名には似つかわしくはない協働であり、参加者と登壇者が共に織り上げた作品でした。3回のイベントに先んじて行われた中島さん主宰の『全体主義の克服』を読む会では、会の最後に中島さんから参加者に不思議なリクエストが出されました。それは、「あとがきを書いてください」というものです。参加の感想を書くのではなく「あとがき」を書くというその発想はとても魅力的なものです。本の作者にのみ許された「あとがき」を、講義を聴いたひとりひとりが書く。それは、その場が「語る者」と「聞く者」によってではなく、「共に織り成す者」によって構成されていたということ、議論を共にした経験そのものが、そこにいた人すべてにとっての協働の作品であったということを示すからです。したがって、Look 東大の3回ではいずれの回にも必ず「あとがき」を皆さんにお願いしました。ロールプレイ、3人1組のディスカッション、スプレッドシートの共有など、いずれにおいても、わたしたちは皆で、頭と口と目と手を動かしながら共にその回を造り上げてきたと言えるでしょう。だから、この3回（中島さんの回を含めて4回）は、たしかに「講義」ではなく、文字通りの協働だったのです。

もともとこの企画は「人文系」の試みという位置づけで始まりました。「わたしたち技術者は工学の知識だけで働いているわけでは無い。人文科学・社会科学の知を活かせばもっと大きな成果が得られただろう仕事場面はこれまでに何度もあったはずだし、今後もあるはずだ。人文科学の可能性を掴みたい。」と、エアコン製造メーカーの技術者らしく、小林直人さんはこのように人文学に対する期待の声を寄せてくださいました。しかし、結局のところ「人文系」、「人文科学」、「人文学」とは何なのでしょう。それは企画全体を貫く問いであったように思います。「人文学の先生は言葉・文章に対する読込む力や自分の考えを発信する力が磨かれていて、Look 東大での対話の上手さに驚いた。」「哲学や人文学といった、これまでに積極的に取り組んでこなかったものも、食わず嫌いせずに取り組んで、新たな気づき、知を得る。」というように、参加者の中にはこの企画を通じて、これまでとはどこか違った世界の様相があり得ることに気づき、そこに人文学の魅力を感じてくださった方もいま

た。

一方で、自分が知らない世界を、自分の生活とはちがう別種の世界ではなく、自分の世界としてとらえることはいかにして可能になるでしょうか。それは、言い換えれば、自分自身が変化するというところにほかなりません。

「自分の世界をどんなものにしていきたいかは自分次第。自分が作った世界に責任を持って生きたいと思う」と力強く言った人は、「自分の世界は自分が意識して認識して取り込んだものでできている。ゴミの話も貧困の話にしても知らなかったら“ない”世界だが、知ったら自分の世界の一部になる。」とも言います。しかしまた別の人は、「日ごろから読書はしているが、これまで自分がしてきた読書は、ただ活字を読んでいたにすぎないことを思い知らされた」と吐露していますので、「意識して認識する」ためにはそれなりの工夫やしかけが必要なのかもしれません。「今日の前で起きていることを真っ白な目で見つめ」たいと稲田幸博さんは言いますが、半田陽一さんはそれに対して「自分の意見を相手に押し付けてしま」うことがあると反省気味に語っていますので、なおのこと、「意識すること」「真っ白」に見ようとする姿勢は大事そうではありますが、そう簡単なことでもなさそうです。

わたしたちの議論は、マイケル・ピュエットの「かのようにの礼」にも及びました。この風変わりだが斬新な切り口で中国哲学に新風を吹き込む哲学者はこう言います。

自分を変える力にするためには、通常のあり方を離れることが、自分のさまざまな面を育てることにつながると気づかなければならない。(マイケル・ピュエット&クリスティーン・グロス＝ロー『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』、51ページ)

そのための方法は、しかし、とてもシンプルです。ピュエットは孔子こそは「礼」を通じて日常のパターンを打破し、自分を変える力を得ることができているをよく知っていた哲学者だと言います。そして、日常の何気ないあいさつの中にこそ、その「礼」は含まれているというのです。

わたしたちは真実というものを重んじるが、実際は、親しい者同士は、しょっちゅう罪のないウソをつけて新しい現実を築いている。〔中略〕なかでもよく使われるのは、「愛してる」だ。口癖のようにこの台詞を交わしているカップルも、おそらく年がら年じゅう心からの愛を感じているわけではない。〔中略〕しかし、「愛してる」と口にする礼によって、現実から離脱してどの瞬間も互いに心から愛し合っているかのようにいられる空間へ行き、二人の関係をはぐむことには大義名分がある。カップルが（かのように）の愛を口にする瞬間、二人は本当に相手を愛しているのだ。（同上、61 ページ）

もしかすると、世界の認識を変えるためにどこか遠くの別世界を知ろうと努力するのと同じぐらい、いや、それ以上に、日常の中にこういう「瞬間」を作り出すことの方に、わたしたちが自分を変えるための力は蓄えられるのかも知れません。庄司健太さんは実際に家に帰ってやってみよう。「言葉を発する前の逡巡、発した後の羞恥、そして（予期された）冷やかな反応。煩雑でしがらみの多い日常の中で私情を“エポケー”し、周囲に pleasant に振る舞うことは容易でないと実感した」と感想を寄せてくれています。「真白」になることは難しくても、このように、相手との関係のなかでその役割を敢えて演じてみることは、「意識」を喚び起こすためのきっかけになる、そうピュエットは説いているのです。参加者からの鋭い意見として、「礼」の実践にもまた「自分の存在を確認」する瞬間は含まれている、というものがありません。そしてこの瞬間は「「問うこと」の始まり」であるとその人は述べていました。

思うに、人文学、いや、人文的な態度というのは、わたしたちの日常を編み上げているひとつひとつの所作や、ひとと言ひと言発せられることばの断続的な連なりそれ自体なのかも知れません。工学的な知識であれば、なぜそのように作用するのかを知らずとも、例えばスイッチを押すことによってエアコンが動くという具体的な事実によってその有用性が示されます。しかし、例えば、デフォーの『ペストの記憶』がどんな作品なのかを知ろうと思えば、その本を読んでみる以外に

方法はありません。「色んな古文を読みたい」という欲望を示してくれた人は、きっと、読むことだけが作品を知ることだと身体で理解しているのでしょう。身体を使って動くというプロセスそのものが、作品への唯一のアプローチなのです。そう考えると、エアコンが動く仕組みを知るために、ゼロからそれを製作するプロセスをやってみることは、実は、まさに最も正しい意味において人文的な営みであると言えるかもしれないのです。今回わかったことは、例えば同じアガンベンのテキストを読んでも、感じ方は千差万別であり、決して1つの一致した答えにはたどり着かないということです。同じ人が同じ部品を使って何かを製作しても、できふできは人によってばらつきがあります。それと同じように、読み方は読む人の数だけあるのです。しかし、人文学とは人の営みのプロセスそのものなのだと思います。読解の多様性もまた自然な結果であることがわかるでしょう。人文系と理系（もしくは工学系）が別個にあるのではなく、後者の知恵が生成し、練り上げられ、説明され、利用されるプロセスのすべては人文的なものであり、そもそも両者は不可分に結びついて、プロセスのどこを切り取るかによって異なったカテゴリーに分けられているだけなのです。

「全力で丁寧生きる、感じる、伝える、伝える」という元気な声もありました。いつも全力でいることは現実には難しいでしょう。しかし、生きて、感じて、伝えるという、わたしたちの日常そのものの動きが、自分



マイケル・ピュエット、クリスティーナ・グロス＝ロー『ハーバードの人生が変わる東洋哲学——悩めるエリートを熱狂させた超人気講義』（熊谷淳子訳、早川書房、2018年）

をつねに変化させ、それに応じて世界を変容させていくのだとしたら、「変革を駆動する力」は、他でもない、わたしたちの人間としての生そのものの中にこそ潜んでいるにちがいないのです。人文学とは人間の生そのものだと言ってもいいでしょう。

このような結論（暫定的ですが）を得られたことは、わたし自身にとってもたいへん貴重な収穫でした。

EAAとダイキンとの協働はこれをきっかけに、次のフェーズを目指したいと思います。ご参加くださったすべての方々、イベントの企画と運営に奔走してくださった皆さま、そして、登壇者の3名の先生方、皆さまに心からの感謝を申し上げます。

報告者：石井剛 (EAA副院長)

話す／離す／花す (4)

「人間は知性を従えた意志である」

石井剛 (EAA副院長)

2020年12月1日



今年の年始め、『教養学部報』にEAAを紹介する記事を書かせてもらった(第615号、2020年1月7日)。その冒頭では「大学の教員たる者、自分が知らないことを学生に教えなければならない」と書いてみたのだが、あっさり白状すると、このことばは小林康夫さんからの受け売りである。そして、小林さんがこういう考え方をどこから得たのか、わたしは尋ねてみたことがない。明らかに正しいことに典拠があるのかどうか聞くのは野暮である以上に愚かだからだ。しかし、その後わたしはジャック・ランシエールに『無知な教師 知性の解放について』という著作があることを知り、その中でも「知らないことを教える」ことがいかに可能であるかがくり返し説かれていることを知る。

だが、ランシエールが説いているのは「知らないことを教える」ことのできる条件であって、彼はただ単に大学の教員が自分の知らないことを教えればいいと主張しているのではない。端的に言って、「知らないことを教える」ことが可能であるために、まず何よりも学ぶ者たちの知性が解放されていなければならない。解放された知性に相対するときにおいてこそ、それは可能となるというのである。知性が解放されるために必要なことはシンプルだ。それは、「すべての者が意志する人間として同類であり、したがってその限りにおいて平等である」という前提に立って人に向き合うことにほかならない。同時にこのことは、人間が誰で

も平等にことばの本来の意味での philologist であることを意味しているはずだ。ここでわたしは18世紀の文献学者アウグスト・ベークが、文献学(フィロロギー)とは、「認識されたものを認識すること」を旨とする学問であると定義していることに倣っている。ランシエールは、人間とは「見るものを吟味する存在」(55ページ)であると定義している。「意志」というのは、見ること、手で探ること、そしてそれらが感じ取ったものを比較することであり、それがすべての知性の始まりであり、しかもそれこそは、今日「文献学」と呼ばれている学問の原初をかたちづくっていた。同時に「意志」は、「望む」(これもまたEAAの目指す新しい学問を支えるキーワードだ!)という人間の人間たる所以を保障する能力であると言い換えることも可能な概念である。

唐突だが、『論語』のなかで孔子は「上智と下愚とは移らず」と述べている(『論語』陽貨)。このことばはあたかも、どんな環境でも立派になる最も賢い人間と、どんな環境でも学ぶことのない最も愚かな人間の2種類がいると断定して、エリートと愚者とを分け隔てる選民思想を反映しているかのように思えるかも知れない。しかし、18世紀の戴震は別の見方をしている。すなわち、孔子は「移らず」と言っているだけで「移せず」とは言っていないのだから、同じ人間である以上、学ぶことができないはずはないのだ、と述べている(詳しくは、拙著「中国における感情の哲学」、『世

界哲学史 6』を参照してほしい)。ランシエールと同じように、戴震もまた、意志の問題を問うことで、人間の平等であることをとことん考えようとしたのだと言えるかもしれない。

しかるに、翻ってわたしたちの社会を見ればどうだろう。知識を他の人々よりも多く占有している者がしたり顔で教師となって他の人々に対する説明者となることで、知的に無能な者の再生産に努めているのが、わたしたちが今いる世の中ではないだろうか。そこでは、知性の根本が「意志」と「望み」であることをとうの昔に忘れてしまった人間たちが、あたかも自分だけが解放者であるかのように振る舞いながら、実際は人々を支配と従属の道へと導いているだけではないだろうか。ランシエールはこうした問いを厳しくわたしたちに突きつけている。もしもそうだとすれば、解放されるべきなのはまちががなく、「意志」も「望み」も忘却してしまっているにもかかわらず、知の創造に従事できると盲信してしまっているわたしたち自身である。「知らないことを教える」ということばの持つ正し

い意味を、わたしたちひとりひとりの「望み」において問い直し、咀嚼し直すこと。そこからしか「新しい学問」は生まれないだろう。

さて、このエッセイを締めくくるに当たって、ランシエールもやはり「離す」ことの意味を深く理解している哲学者であることを示す箇所を『無知な教師』から引用しておきたい。

人間が結びついているのは人間だから、つまり隔たりあう存在だからである。言語は人間を一つにまとめはしない。それどころか、言語の恣意性こそが、人間に翻訳することを強い、互いの努力を伝え合うようにさせる——そしてまた共通の知性を行使させる——のだ。人間というものは、話をしているものが自分で何を言っているのか分かっていないときには、とてもよくわかる存在なのだ。(87 ページ)

写真撮影：高山花子(EAA特任助教)

EAA Review-01

Gorai Shigeru, *Buddhism and Folklore: An Introduction to Buddhist Folklore*

2020年12月2日

— Introduction —

We have just launched the multi-language book review corner of our EAA website. This is aimed at offering and exchanging information regarding academic books from and about East Asia. Reviews will be written in languages which are different from the book is written. The number of articles will increase from now on.

Yusuke Wakazawa (EAA Project Research Fellow)
Hanako Takayama (EAA Project Assistant Professor)
Seitaro Maeno (EAA Project Assistant Professor)

— EAA Review-01 —

Reviewer: Seitaro Maeno
(EAA Project Assistant Professor)

Academic journals are not the only forum for scholars to publish and contribute to their fields. Intriguingly, writing published in more popular media can sometimes be more revealing than regular academic papers. This book is a collection of short essays written by the Japanese folklorist Gorai Shigeru (五来重, 1908–1993). Some of the essays were written for folk studies journals or as visitor



Book Information:
Gorai Shigeru,
*Buddhism and Folklore:
An Introduction to
Buddhist Folklore.*
Tokyo: Kadokawa
Shoten, 1976 (reprinted
in: Tokyo: Kadokawa
Gakugei Shuppan,
2010) 五來重『仏教と
民俗 仏教民俗学入
門』角川書店、1976
年(角川学芸出版より
2010年に再刊)

explanations for art exhibitions, but most were contributed to local newspapers as articles intended for non-academic readers.

The collection is divided into six sections. I'd like to especially recommend three sections in this book: the second, "Annual Events and Folklore"; the third, "Ancestral Worship and Folklore"; and the fourth, "Popular Religion and Folklore." These key sections tell us about the appeal of "Buddhist folklore," which Gorai pioneered. Ogres (鬼 *oni*), chanting dances (踊念仏 *odori-nembutsu*), Buddhist altars (仏壇 / 壇 *butsudan*), ancestral tablets (位牌 *ihai*), stone field sculptures (石仏 *sekibutsu*), wandering monks (遊行 *yugyo*)—these elements frequently appear in Japanese "Buddhist" practices. People can describe what they are, but are unable to relate them to particular Buddhist scriptures. When Gorai began his folklore studies, Buddhist scholars ignored these folk elements because they have little or no basis on scriptures. Outside of academia, priests also considered the folk elements as "degraded subcultures" far removed from true piety. Gorai challenged the mainstream of "Buddhism" and took a different approach. He instead attempted to grasp Buddhist practices as they were

conducted or told in each local context. What had been regarded as peripheral, derivative, or even degraded was re-envisioned by him as the core aspect of the popular religious world.

It was Yanagita Kunio (柳田國男, 1875-1962) who first explored the difference between Japanese *bukkyo* (仏教) and "Buddhism," not seeing the former as just a derivation from "Buddhism." He asked a quite simple but difficult question: Why did the Japanese call the Buddha "Hotoke" (仏), even though there is another possible reading, "Budda" (仏陀), of the Chinese characters? (See *About Our Ancestors*, 1946.) As a young Buddhist scholar, Gorai was then exploring a foundational Sanskrit text, *The Fundamental Wisdom of the Middle Way*, by Nagarjuna. However, Yanagita's question shocked him, and drastically changed his academic path. He began to visit many local areas on foot to observe what is practiced and recounted there. A young philologist had transformed into a folklorist who behaved almost like a wandering monk of the past. This process is detailed in the first section of the collection of essays.

I have so far described Gorai's work in favorable terms. Unfortunately, his "Buddhist folklore" can also be criticized as a kind of nationalistic folklore or ethnology, in the same way as other folklore studies are now problematized. No matter how empirical his research was, the underlying logic is ultimately a very localized Japanese ethnicity. Needless to say, we cannot absolve Gorai of this and should accordingly keep it in mind when we read this book. Though there are certain problems, I do still think his work has potential value for broader academic contexts. We should consider the fact that he worked in an era dominated by several grand theories, not least social evolutionism, materialism, and functionalism. He persisted in simply observing what is practiced and narrated by ordinary people,

instead of using these theories in his work. To frame Gorai's contribution in a broader sense, he seemed to stand at a crossroads—what in the parlance of contemporary academic discourse we would call the practical turn or linguistic turn. Though he chose a

path different from the one we might, we can nonetheless take away much of value from his book.

Seitaro Maeno (EAA Project Assistant Professor)

第2回 101号館映像制作ワークショップ

2020年12月4日

2020年12月4日、第2回の101号館映像制作WSが開催された（第1回の報告はこちらを参照）。出席者は石井剛氏（EAA 副院長）、アドバイザーとして折茂克哉氏（東京大学駒場博物館）及び星野太氏（早稲田大学）（当日は欠席だったが、総合文化研究科の田村隆氏もアドバイザーに名を連ねている）、映像制作のサポートとしてSETENV社の入江拓也氏、WSのコーディネーターとして高山花子氏（EAA 特任助教）、担当RAとして日隈脩一郎氏（EAA リサーチ・アシスタント）、小手川将氏（EAA リサーチ・アシスタント）、報告者の高原智史（EAA リサーチ・アシスタント）であった。

最初に自己紹介をした後、星野氏の提案で、WSと同じ時間帯にweb配信されていた、シンガポールのアーティスト、ホー・ツーニェンの「旅館アポリア」という作品に関する講演を視聴した。それは第二次大戦末期には、特攻隊の隊員が最後の宴会をしにくる

という旅館を舞台にして、特攻隊そのものや京都学派を、イメージの連鎖によって結びつける展示であって、場の記憶を保存する試みとして参考になるだろうとされた。

次いで石井氏から、改めてEAAというプロジェクトの趣旨、101号館について、田村氏が主に進めている一高校長狩野亨吉（1865年-1942年）に関する調査や展示についても触れつつ、EAAの一高プロジェクトについて概要が話された。続けて、このコロナ禍でオンライン化が次々と進む中で、大学で学び、研究し、生活するというものの空気感、手触り、におい、というようなものを大事にしたいとした。また、101号館が出来たのが1935年ということを見ると、すでに満州事変は起きており、戦争ということ意識する必要があるとした。そのことから目を背けず、乗り越えたうえで、学問を通じた友情、それを通じた平和への貢献がEAAとしての目標であるとした。



Ho Tzu Nyen, Hotel Aporia (2019) Site specific installation at the Kiraku-Tei, Toyota City, Aichi Triennale (2019) 6 channel video projection, 24 channel sound, automated fans, lights, transducers and show control system Commissioned by the Aichi Triennale, courtesy of the artist and Edouard Malingue Gallery Photograph by Hiroshi Tanigawa



1935年10月30日の第一高等学校特設高等科全景（東京大学総合研究博物館小石川分館所蔵）

続いて折茂氏が話し、アーキヴィストの立場からすれば、いつだって記録は不十分だが、それでも、できる範囲で記録を残しておくのは大事とし、また、今回のプロジェクトはむしろ学術的に、ドキュメンタリーとしてではなく（それなら別に論文を書けばよい）、アーティスティックに作るべきだとした。2020年の東大生が、戦前の一高生の思いの丈を読んで、その思いの丈を映せばよいのではないかとした。星野氏は、ここ20年で駒場から古い建物がどんどんなくなっていると言いき、また自身が学生時代、旧物理倉庫という名前だけ残ってサークルの部室になっていたあたりにつき、今回、101号館エントランスの展示で戦前のキャンパス配置図で、物理学、化学、生物学、特別教室となっているのを見て、やはり当時は物理の教室がそこにあっただけという気づきを披露した。石井氏は、人文系の研究においては、みんなで1つのもの、作品をつくるということ自体が、新しい取り組みであると



特設高等科写真（田村隆氏提供）

した。日隈氏は、今ではコムシーが建っているところが、自身の入学時はまだ建設途中だったことに触れ、また、コロナ禍の現在、コミュニティを新たに作るということについて話した。小手川氏は、距離のあるものにどう接近することができるかについて考える必要があるとし、例えば101号館だけでも、世代によって関わり方が異なり、名称も異なることに触れた。そこで、田村氏がすでに示されていた1950年の101号館の写真について、書き込みから特設高等科の建物として、101号館が当時「特高館」と呼ばれていたことを石井氏が示した。

このあたりで時間が尽き、次回WSへと話は移り、今度は折茂氏が、自身でよく案内をされているところの、キャンパスツアーを皆で試してみることが結着し、今回のWSは終了した。

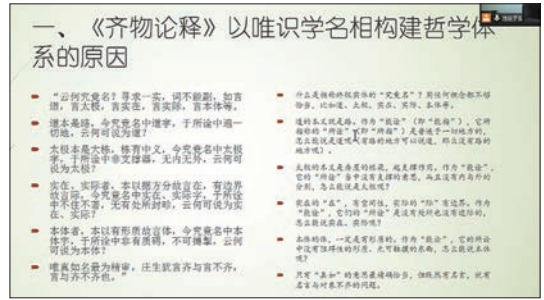
報告者：高原智史（EAAリサーチ・アシスタント）

第9回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年12月4日

2020年12月4日、第9回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。第7回との2回構成で、講師の楊立華氏（北京大学）は引き続き、中国近代において学者・思想家・革命家として知られる章炳麟（1869年-1936年）の著書『斉物論釈』をめぐる講義を展開した。

事前配信講義で楊氏は主に、章炳麟がなぜ唯識学をもって独自の哲学システムを構成しようとしたのかについて議論をすすめた。講義当日は、章の哲学システムを「唯識一元論」として扱い、あらゆる客観的・主観的主体が「識」の異なる形態に過ぎないという主張が『斉物論釈』において貫かれていると強調した。



楊氏によれば、システムとして成立できる哲学は一元論でなければならないが、それは、「多元」を排除し、均質的で無差別に世界を認識することを意味するわけではない。いわば、哲学の要務とは目まぐるしく移り変わる世界において真なる確定性を模索することであるなら、こうした観点より、唯識一元論を樹立しつつも、差異性を強調する章の思想的意義が見出されるということである。

扱われたテキスト自体が非常に難解であったにもかかわらず、講義の後に興味深い質問が複数提示された。例えば、『純粹理性批判』におけるカントの「変」と「不変」との関係性について、『齊物論釈』に関

連する議論があるかという質問が挙がった。これに対して楊氏は、ヘーゲルとシェリングによるカント批判と比較しつつ、章炳麟がカントの「カテゴリー論」に困惑した一方で、「カテゴリー」を参照しつつ阿頼耶識の「種子」を論じた、との見解を述べた。また楊氏は、東アジアに位置しながらも、西洋的知識枠組みを用いて世界を認識しようとする我々が、如何にすれば、西洋一辺倒ではなく、東アジアという文脈の中から独自の思考様式を掘り起こし、編み上げていくことができるかという問題に、聴講者たちを導こうと試みた。

報告者：徐莎莎(EAAリサーチ・アシスタント)

第4回 日中韓オンライン朱子学読書会

2020年12月5日

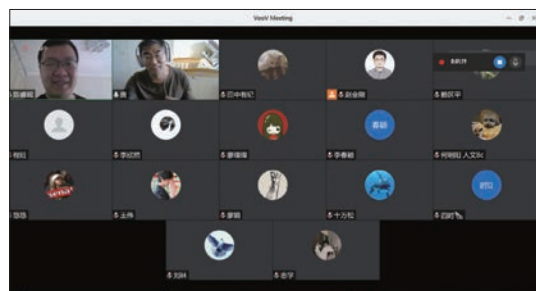
2020年12月5日、日本時間16時より第4回日中韓オンライン朱子学読書会が開催された。これまで同様、EAAのほか、清華大学哲学系、北京大学礼学研究中心、科研費基盤研究(B)「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」との共催である。

今回は陳叡超氏(首都師範大学)が司会を務め、唐紀宇氏(国際関係学院)が2016年12月に出版した『程頤『周易程氏伝』研究』(人民出版社)について報告を行った。

唐氏は2011年に北京大学で哲学博士を取得した。張学智教授や楊立華教授に師事し、宋明理学を専攻、程頤の思想を専門的に研究することを決めたという。中国哲学研究においては、ある思想家の哲学を

論じる際、その語録等が中心的に取り上げられることが多い。しかし、語録はその思想家自身が執筆したものではない場合が多く、その弟子等が中心となつてまとめられたものである。思想家が自らの学問の集大成として取り組むものは経学である場合が多い。とりわけ程頤については、その易学著作である『周易程氏伝』は、彼が唯一、自らの手で書き上げたものである。程頤とまとめられて語られがちな程頤の思想の、ありのままの様子を窺える重要な著作である。

唐氏の著作は、解釈学研究と、哲学研究の2部分に分かれている。今回の読書会では、解釈学研究の部分のみ取り上げた。まずは程頤が注釈を完成させた後に書いたといわれる「易伝序」を読み解き、彼が「易」に対してどのような認識を持っているのかを



明らかにした。また、「易」を最も正しく解釈した人物として孔子を高く評価した上で、改めて「易」を純粹な儒家經典によって系統的に解釈しようとしたという。次に、「象」（ここでは卦辭と象伝を含む）にみられる、様々な解釈学の概念について詳細に説明がなされた。解釈学のうち重要な要素を占める「爻」や、哲学研究について時間が足りず説明を聞けなかったのは残念であったが、質疑応答は、易の学派の分類

として定着している「義理派」と「象数派」という区分形式についてどう考えるかということや、本書が解釈学研究と哲学研究に分けて論じたのはなぜかという問題が挙げられ、また、解釈学の深い部分にまで踏み込んだ討論がなされ、大変充実したものとなった。

報告者：田中有紀（東洋文化研究所）

インターネット学術対談

サイノフォン文学からサイノフォン哲学へ

2020年12月5日

2020年12月5日、マレーシアのスルタン・イドリス教育大学の中国思想史学研究者魏月萍さんの招きで、オンライン対談に参加してきました。対談のお相手は高嘉謙さん。ハーヴァード大学のDavid Der-wei Wang（王德威）さんといっしょにサイノフォン文学のアンソロジー『華夷風』を編集した台湾大学の文学研究者です。この対談が実現したのは、魏月萍さんが創刊した*Erudite: Journal of Chinese Studies and Education*というオンライン雑誌の第1号に拙稿「华语語系哲学作为世界哲学——方法论刍议」（世界哲学としてのサイノフォン哲学：方法论刍議）を掲載してもらったことです。この論文は2019年3月に北京大学でEAAのキックオフ・ミーティングを開催したときに行った発表に基づいて書き直したものでした。サイノフォン Sinophone というのは、Anglophone や Francophone という言い方を範として中国語のグローバルな広がりをとらえるために造られた方法論的術語で

す。そこでは、故土（それは必ずしも海外移民にとっての中国だけではありません。広い領域を持つ中国には、同じ「中国語」と見なされる言語があまりにも多様な音声で話されています。）から離れて、自らが使っている言語とアイデンティティの脱領域化の経験が文学的想像力を触発していきます。それらはいずれも、漢字という同じ書きことばを共有しつつも、声の経験としては多様であり、そうした声の多様さゆえの摩擦や不安、そして、声を発する主体と発せられた声の間の疎隔が主題化されていくことになります。

マレーシアには、華人系のエスニック・グループが人口の4分の1ぐらいの割合で生活しています。わたしは恥ずかしながら彼らの歴史に対する基本的な知識を欠いたままこのたびの対談に参加しました。せいぜいわかったのは、彼らがマレーシア社会におけるマイノリティとして、サイノフォンという概念自体に対して、アンビバレントな感情を持っているということ

す。Sinophone Studiesの首唱者である史書美(Shu-mei Shih, UCLA)はサイノフォンの担い手のひとつとして東南アジアに広がるsettler colonialismの末裔たちを挙げています。しかし、こうしたとりあげ方は、当事者たちの当惑と反感をもたらすものとならざるを得ません。マレーシアのみならず、シンガポールにおいても複雑な感情をもって迎えられているようです。そこでは現在の中国との経済関係を緊密に発展させる一方で、英語中心のグローバリズムに積極的に加担することで、華語話者の周縁化が急速に進んでいると言えます。

わたしが提出したのは、サイノフォン文学とは異なるサイノフォン哲学の可能性に関する議論でした。サイノフォンという媒介を通じて、相異なる多様な声それぞれが持つ単独性に気づききっかけを得ると同時に、それらの単独の存在が「哲学する」という共通の人間の性質に基づいて、普遍を目指すことができるのではないか。漢字の共通性が代表するなにかの文化中心に向かうのではなく、漢字の共通性によってはじめて明らかになる、字と概念に対する理解と内部翻訳の多様な豊かさに着目することで、近代的に構築されてきたのとは異なる普遍へのアプローチを発見するのではないかと、そういう趣旨でした。それでわたしは空海の例を挙げました。コスモポリタニズムを体現していた唐の都長安で仏教を学んだ空海の生きた姿はとてもサイノフォニックです。もちろん、ここでサイノフォンは話者のアイデンティティとは切り離れた言語実践です。わたしはサイノフォンをアイデンティティの政治から切り離したいと考えて、この議論を試みたのでした。

しかし、この対談に集まった方々とのディスカッションを通じて気づかされたのは、彼らにとって、相変わらず重要なのはアイデンティティの問題であるということです。世界哲学にせよ世界文学にせよ、各地の多様な哲学言説や文学作品をアイデンティティ(とりわけナショナル・アイデンティティ)の磁場から切り離すこと

を目指しているはずですが。しかし、彼らにとってより差し迫った問題は、彼らのアイデンティティを代表する言語や文学、そして哲学を確立することの(不)可能性なのです。

さて、この立場性のちがいをいったいどうすればいいのでしょうか。とくにシンガポールのような経済と科学技術が高度に発達した社会では、言語と文化の問題は、技術と身体の問題へとすぐさま転化します。言語の喪失に対する不安は、そのまま身体性の危機につながってしまうのです。イベントでは、そのことに対する焦燥感がディスカッションの中でも直接間接に露呈しました。もちろんわたしなりの応答ははっきりしています。それは、サイノフォンをプラットフォームにして、自らの身体の外からもう一度世界を構想することしかないのではないかということです。

日本語に関しても、水村美苗氏が述べるように(『日本語が亡びるとき』)、グローバル化のもとで危機に瀕しているのかも知れません。これはきわめてアクチュアルな課題です。そして、この危機は、実はサイノフォン内部にも存在していると言ってよいでしょう。中国語でサイノフォンは「華語語系」と訳されますが、ある論者は華語は華語であり、そこに「語系」を追加するのは蛇足であると批判します。しかし、「華語語系」は「華語」内部とその周辺の声の多様性を示すものですから、この批判自体が、サイノフォン話者における声と身体が多様性が失われつつある現実をなぞっているものだと言えます。わたしはだからこそ、サイノフォンの言説空間に積極的に入りていきたいと希望しています。同時にそのことは、わたしの参与する日本語の世界を豊かにすることにきつとながらうでしょう。

まだ訪れたことのない東南アジア。これを機にまた自分の足でかの地を訪れ、そこでの人々の生活に触れることができるのを楽しみに待つことにします。

報告者:石井剛(EAA副院長)

中国の近代と疫病

2020年12月7日

2020年12月7日、座談会「中国の近代と疫病」が開催された。本座談会は、去る11月14日に開催された座談会「天災と人禍——思想と宗教、そして文学と歴史から考える」の連続企画である。新型コロナウイルス感染者増加にともない、残念ながら対面式での実施は叶わず、オンライン開催となった。

冒頭、中島隆博氏（EAA 院長）が説明したように、今回は「疫病という観点から近代を問い直す」をテーマとして、3名の登壇者（飯島渉氏（青山学院大学）、坂元ひろ子氏（一橋大学名誉教授）、下出鉄男氏（東京女子大学））より幅広い話題提供が行われた。

はじめの発表では、飯島氏が、中国社会におけるCOVID-19対策の一連の経緯を様々な角度から検討した。中国における医療社会史を専門とする飯島氏がとりわけ注目するのは、「社区」と呼ばれるコミュニティが果たした役割である。2003年におけるSARS流行と比較してみた場合、その差は歴然たるものである、と飯島氏は指摘した。改革開放に伴い、医療制度も大きく改変され、SARS流行当時は保険制度が未整備だったことから、深刻な状況が出来た。しかしその後医療衛生改革が行われたことにより、「社区」ごとに「衛生服務站」（保健サービスセンター）が設置され、今回の新型コロナウイルスの流行に際しては、徹底した悉皆検査の拠点となるなど、重要な役割を果たした。また、医療面のみならず、独居老人に対するケアや食糧購入、ドメスティック・ヴァイオレンス対策についても、その対応の拠点として社区が果たした役割は大きかった。

続く坂元氏の発表では、近代中国を代表する思想家である章炳麟のテキスト「菌説」（1899年）を題材として、この度のコロナ禍に際して「近代」という概念そのものを問い直すことの重要性が提起された。ここで章炳麟は、同時代のパスツールやコッホらによる細菌研究を念頭に置きつつ、『莊子』齊物論をはじめとする古典を参照しながら、万物は「虚」より出で

「菌」となる——万物は上帝（神）によって創造されるのではなく、集散を繰り返しながら「自造」する——という自説を展開している。坂元氏は、こうした章炳麟の主張の中に、「殺菌」「滅菌」を是とする近代医療を根底から批判する可能性を見出した。また、物自体が自造するという発想の背景には、帝国主義的侵略を正当化する社会進化論や、文明／野蛮という二項対立への痛烈な批判意識があることについても指摘された。

3番目の登壇者である下出氏は、この度のパンデミックという事態が、どのように語られてきた／いるかについて、複数のテキストを渉猟しつつ種々の角度から光を当てた。とりわけスラヴォイ・ジジェク『パンデミック』、方方『武漢日記』によって提起された重要な問題——公衆衛生上必要とされる「統治」「管理」と、これを実行する権力への監視・批判をめぐり、複雑な関係性——は、会場全体から大きな関心を集め、全体討論における議題とされた。下出氏が強調したのは、初めに武漢で行われ、その後イタリアをはじめとするヨーロッパ諸国においても実施された「ロックダウン」という事態の複雑さである。多くの知識人が懸念したように、ロックダウンは、あらゆる統治技術を総動員しながら全体主義へと至る道を用意し得る、という側面を持つ。それゆえ、権力の暴走を防ぐためには、これを監視し批判する目を光らせておく必要がある。一方で、こうした措置は、公衆衛生学的見地から見れば、感染を抑えるために必要とされるものであることも確かだ。

このようなせめぎ合いは、統治する国家と、従順に統治される国民、もしくは唯々諾々と統治されることに対抗する国民、という図式に単純化することはできない。同じように、中国が防疫に成功したのは、中国政府が他の政府と異なり強権的な実行力を行使し得たからだ、と短絡的な結論を出すことも妥当ではない。確かに、中国における情報通信技術の発展と、その



座談会で言及された方方『武漢日記』（日本語版）。画像は河出書房新社ウェブサイトより。http://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309208008/



座談会で言及された郭晶『武漢封鎖日記』（日本語版）。画像は潮出版社ウェブサイトより。https://www.usio.co.jp/books/paperback/21135

統治への活用は、目を見張るものがある。こうした技術を総動員した統治体制に対して、批判的視線が向けられるべきであることは言うまでもない。だが、繰り返すが、ここで問われているのは、国民を統治する国家権力と、統治対象とされる国民（そしてそこに抗する国民）、という単純な図式ではないのだ。

こうした複雑さは、方方『武漢日記』をいかに読むか、ということにも関わってくる。ロックダウン下の武漢の様子を克明に綴ったこの日記は、政府の初動対応への忌憚なき批判が含まれていたことから、中国国内で大きな反響を呼び起こした。そこには、筆者に対するバッシングも多く含まれていた。だが、この対立についても、単純化して考えることは留保すべきである。司会・ディスカッサントを務めた石井剛氏（EAA 副院長）は、鈴木将久氏（東京大学）による同書の書評（ウェブサイト『論座』に掲載）を参照しつつ、次のように指摘した。これは、真実を訴えた人／政権寄りの人、という対立と見るべきではなく、むしろ、それぞれの立たされた場所から見える複数の現実が、結果として対立してしまう、ということの方に問題の本

質がある。COVID-19という状況によって、もはや従来の「主体（subject）」が成立し得ず、すべてが「対象（object）」化されるという前代未聞の事態をいかに思考するか、ということこそが、今問われている。また、全体討論では、こうした状況を、香港やウイグルにおいて進行している事態と併せて検討することの是非も議論された。

「近代」という大きな物語を作り上げた「人間」という従来の「主体」のあり方が、根底から揺さぶりをかけられている今、現代思想という文脈では「人新世」あるいは「ポスト・ヒューマン」「ノン・ヒューマン」といった概念が盛んに議論されている。章炳麟の議論を、こうした潮流に棹差すものとして読解することも可能であろう。「中国」を固定された枠組みとしてではなく、共通の参照項とすることによって、そこから浮かび上がるものを抽象化・概念化し、記述することの意義が確認された。

報告者：崎濱紗奈（EAA特任研究員）

Hiroshi Watanabe, *A History of Japanese Political Thought 1600-1901*

2020年12月9日

Reviewer: Yusuke Wakazawa
(EAA Project Research Fellow)

Hiroshi Watanabe's book explores Japanese political thought from the seventeenth century to the nineteenth century, a period corresponding to the rule of the Tokugawa shogunate during which Japan enjoyed an era of relative peace under a unified and stable political order, and experienced the gradual emergence of a market economy and urban culture. Watanabe particularly emphasizes the rise of print culture, which was enabled by the high rate of literacy across social and regional boundaries in early modern Japan. For instance, Ando Shoeki (1703-62), a medical practitioner who lived in a provincial town at the edge of the main island, was able to publish his political discourse in Kyoto despite his being located more than 700 kilometers distant from the city (8). This publication network promot-

ed a vast exchange of knowledge entailing various reviews and debates (8). The Japanese people read a wide range of genres including historical, religious and medical books. Manuals, instructive books, playful literature known as "gesaku", and erotica attracted the attention of merchants and craftsmen. As a historian of political thought, Watanabe examines the daily practices of early modern people and their socio-political agency, in addition to tracing the production and circulation of influential texts. His history of Japanese political thought deftly incorporates the social, cultural and literary history of early modern Japan.

To highlight the uniqueness of early modern Japanese thought, Watanabe points to the social status of scholars and learning during this period (93). Wealthy merchants and landowners sometimes studied Confucianism for entertainment, an activity called "yūgei", rather than for strictly practical purposes. They saw learning as a playful (and sometimes sociable) activity equivalent to enjoying Haiku, playing musical instruments and performing tea ceremonies. Ito Jinsai (1627-1705), one of early modern Japan's distinctive scholars, was born the son of a wealthy merchant in Kyoto, and encountered Confucianism as he sought amusement in reading Japanese poetry ("waka") and Chinese classics (135). Of course, this unique feature of learning in early modern Japan does not mean that scholars thought and presented political ideas in a playful manner. Even though they may have begun their learning as a source of entertainment, choosing their professions as scholars reflected their ambition



Book Information:
Hiroshi Watanabe, *A History of Japanese Political Thought 1600-1901*. Tokyo: Tokyo University Press, 2010
渡辺浩『日本政治思想史：17～19世紀』（東京：東京大学出版会、2010年）

to analyze and change the political order underlain by the rise of the market economy. Unlike early modern China, where the imperial examination required prospective bureaucrats to study political discourse, the Japanese scholars of Confucianism had few opportunities to become political advisors for the ruling class. The lives of these scholars were precarious unless they were able to gain a number of students; running small private schools was their primary source of livelihood. This instability and marginality ironically secured, to a certain degree, relative freedom for their intellectual inquiry and expressions (97). This point, the way in which these scholars negotiated and sometimes challenged the political order of the Tokugawa shogunate, offers a unique insight into intellectual history, even for those who are unfamiliar with Japanese studies or the history of political thought.

Watanabe's work also interrogates the process through which Japanese people relocated, and therefore re-imagined, their own socio-political

space in the wider world. Despite its isolation from the rest of the world, the “closed country” policy, early modern Japan had sporadic encounters with Europe. In Chapter 8, Watanabe focuses on the conversation between Arai Hakuseki (1657-1725) and Giovanni Battista Sidotti (1668-1714) in 1709, which produced *Seiyō Kibun*, Hakuseki's geographical study of Europe. Chapter 15 also points to the circulation of European maps among Japanese intellectuals as objects, which transformed their geographical imagination (301-2). The wide network of publishing and readership underlay the changing idea of the “world” in which Japan was located. Chapter 17 further illustrates the way in which objects, such as telescopes, clocks and visual materials from Europe, shaped Japanese understanding of the West (347). The conditions and consequences of this object-oriented communication between Japan and Europe would offer a notable case study for intellectual history in global contexts.

第10回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年12月11日

2020年12月11日、第10回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。今回の講師は章永楽氏（北京大学）が務めた。講義の内容は近代中国のジャーナリスト梁啓超（1873年-1929年）が第一次世界大戦後、ヨーロッパ視察へ赴いた際の旅行記『欧遊心影録』である。

章永楽氏は事前配布の教材で、主に政治的側面から『欧遊心影録』を紹介した。大戦後のパリ講和会議などで決められた新しい政治的局面を目にした梁啓超の記録とそこから生まれた思想的変化を、国家間関係と変化、新しい国家構想、立憲制度の作成との3つのテーマから説明した。最後に章氏は梁啓超のテキストから離れ、現在の国際関係に関する2つの

問題を提起した。それは、国民国家以上の政治的実体（political entity）を作るトレンドは今の世界に存在するのか、そしてCOVID-19の世界的大流行がどのように冷戦後の国際秩序へ影響を及ぼしたのか、との問題である。



梁啓超（1873年-1929年）

討論パートでは、まず梁啓超の国家概念の変遷から、西洋の概念のローカライゼーション（土着化）、そして「世界主義国家」という梁啓超の概念を、英語をはじめとする多言語にどのように翻訳すべきかをめぐって議論が展開した。現在の我々が直面する状況は1920年代の人々と同じ、つまり人と人、国と国とのコネクションをどう再建するかにあるとの指摘がなされるとともに、そこから国民国家を越える政治的主体という構想自体が楽観的すぎるのではないかの質問が出た。ついで国際関係の中の暴力性、今後の国際関係への展望、世界中の主導的役割が存在する意義へと様々な議論が交わされた。

梁啓超が考えた「世界主義的国家」とそれに基づく国際関係においても暴力性が含まれる可能性は否定できないと章氏は学生の質問を認めながら、当時の

国際情勢に戻って彼の真意を考察する必要性を説いた。梁啓超が探求していたのは、西欧主導の国際秩序における暴力性に対する抵抗の可能性であった。これこそが梁啓超の思想がもつ批判力ともいえる。現在の国際関係をみても、COVID-19は既存の国際組織がもつ欠陥を露呈させはしたが、国際社会が連携を行うこと自体は否定すべきものではない。これをうけて章氏は理想的国際秩序へ求められる要素として、平等、多元そして結束力の3つの要素を提示した。バイデン氏の当選が確実となり、アメリカのグローバル政策の再転換を迎える未来の世界において、世界の分断を防ぐための日本と中国の役割を期待すると述べて講義は締めくくられた。

報告者：胡藤（EAAリサーチ・アシスタント）

国際シンポジウム

ライシテから「分離主義」へ

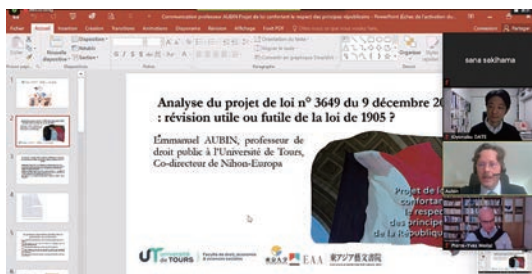
1905年12月9日法問題からみるフランス社会と共和主義

2020年12月11日

2020年12月11日、国際シンポジウム「ライシテから「分離主義」へ——1905年12月9日法問題からみるフランス社会と共和主義」がオンラインで開催された。本シンポジウムでは、伊達聖伸氏（東京大学）、エマニュエル・オーバン氏（ポワティエ大学）がパネリストとして登壇し、ピエール＝イヴ・モンジャール氏（トゥール大学）が司会、金塚彩乃氏（弁護士、慶應義塾大学非常勤講師）が通訳兼解説を務めた。なお、

オーバン氏を招いたEAAでの学術企画は今回で2度目となる。2019年12月の1度目の様子については、白尾安紗美氏による「EAAセミナー『フランスの公共空間における宗教的中立性の拡大——新しいライシテに向かって?』報告」を参照されたい。

本企画の趣旨は、2020年12月9日にフランスで閣議提案された「共和国原理強化」法案に、宗教学と公法学の観点から分析を加えることにあった。フランスでは1905年12月9日に「政教分離法」が成立し、共和国は以後「ライシテ」を国是に掲げてきた。特に1990年代以降、ムスリムの社会統合が課題になるにつれ、ライシテは共和国の原理として一層強く意識されるようになっていく。だが近年では、フランスがテロの標的となり「過激派」の台頭が問題視されるなか、共和国の原理や統合が「分離主義」に脅かされているという見方が広がっている。そこで、マクロ



ン大統領は2020年10月2日、政教分離法が制定された12月9日に新しい法律を提案すると発表し、今回の閣議提案に至ったのである。

シンポジウムでは、宗教学者の伊達氏が最初に登壇し、「1905年12月9日法——フランスのライシテの功罪」と題した報告を行なった。この報告の目的は、1905年法と2020年法案の文脈と特徴を比較することにある。第1に、伊達氏は1905年当時と2020年現在では、ライシテの課題が変化していると指摘した。1905年当時のライシテは、私的領域での宗教の自由の保障を重視していたが、20世紀後半以降は、むしろ公的領域での宗教の役割の承認に焦点が移動している。また、1905年当時にはカトリズムとの関係が争点だったが、今日のライシテはイスラームとの関係において語られている。さらに、1905年当時のライシテは左派の原理だったが、1990年代以降は右派の原理としても機能しているという。

伊達氏は第2に、最近のライシテは、20世紀初頭の政治家コンブの戦闘的なライシテに近似しているのではないかと指摘した。10月16日の教師斬首事件の後、ダルマナン内相は「分離主義」の温床とされる施設や団体に閉鎖や解散を命じたが、コンブも1902年から1904年、修道会を「共和国の敵」として、大規模な修道会の解散や修道士の追放を行った。宗教施設の閉鎖という国内政策に加え、置かれた外交状況においても政教分離法制定当時と現在には類似点が見られるという。実際、コンブは司教任命権と「ローマ問題」をめぐる教皇庁と対立し、1904年には外交関係を断絶しているが、マクロン大統領も近年、イスラーム保守層を支持基盤とするトルコのエルドアン大統領と対立を深めている。

最後に、伊達氏はマクロン大統領のライシテの二面性を指摘した。たしかに、マクロン大統領のライシテには「自由」を尊重するところがある。例えば、フランスでは従来、特殊な共同体への帰属は共和国の普遍主義と相容れない「共同体主義」として批判されてきたが、マクロン大統領は特殊な共同体への帰属意識と共和国への帰属意識は両立可能としている。しかし、マクロン大統領のライシテには「管理」を重視するところもある。実際、マクロン大統領は「共同体

主義」に代えて「分離主義」を敵と名指し、共和国の統合を目指して教育への公的管理を強めようとしているし、国内における外国のイスラーム指導者の影響力が懸念されるなか、「フランスの」イスラーム指導者を養成しようとしている。

次に登壇した公法学者のオーバン氏は、「2020年12月9日法案の分析——1905年法の改良か改悪か」と題した報告を行った。この報告の目的は、2020年法案の内容と成立過程の検討にある。オーバン氏は第1に、2020年法案が近年の共和国原理の問い直しの延長線にあることを指摘した。フランスでは2000年代以降、特に「過激派」に対する危機意識の高まりとともに、共和国原理の再認識が生じている。例えば、2003年の「スタジ委員会」ではすでに、「共同体主義」により個人の自由や男女平等が侵害されているという認識が示されている。この文脈の延長で、現在では「分離主義」が共和国の脅威として名指されているのであり、ライシテを権利だけでなく義務も与える共和国原理とする見方も広がっている。

オーバン氏は第2に、2020年法案の内容を紹介した。まず、この法案自体には「分離主義」や「イスラーム主義」の文言が含まれていないことが指摘された。ただし、法案に添えられた事前評価書にはこれらの文言が含まれている。次に、この法案ではライシテに関連する既存の法律が修正されていることが指摘された。例えば、法案の第30条では1901年の結社法、1905年の政教分離法、1907年1月2日法に修正が加えられているし、宗教社団の地位を定めた1905年法の第19条は、法案の第35条などにより大幅に書き換えられることになる。これらの修正では、宗教団体の財源の透明性を高め、国外からの不透明な資金流入を防ぐなどして、国家による宗教団体の管理を強化することが目指されているという。

最後に、オーバン氏は2020年法案の成立過程における国務院の役割を強調した。2020年法案はたしかに、戦闘的なライシテを掲げる政治の主導で作成されたが、その成立過程では国務院という法の機関が介入しており、法案の当初の戦闘的性格を幾分か和らげる役割を果たしている。例えば、当初の法案では犯罪の「教唆」や「人の尊厳」の侵害に対する

罰則が定められていたが、国務院はこれらの曖昧な概念を刑罰の法的根拠とするのは不適当と判断して修正を求めている。また、当初の法案は在宅教育（ホームスクール）を「分離主義」の温床として禁止しようとしていたが、国務院はこれを教育の自由という憲法原理に反すると判断し、法案では最終的に特定の理由があれば在宅教育を認めるとしている。

伊達氏とオーバン氏の報告には、共通点と差異の両方を見ることが出来る。まず、2020年法案の分析を同じ目的に掲げながらも、伊達氏が1905年当時と2020年現在を比較し、政治の次元での言説や政策を分析したのに対して、オーバン氏は2020年現在に焦点を絞り、法の次元での法案解釈や法案成立過程の分析を行った。次に、この観点の違いに加えて、強調点の置きどころにも違いが見られた。実際、マクロン大統領のライシテは「戦闘的なライシテ」に近づいており、そこでは「自由」と「管理」のうち後者が前景化していることを強調した伊達氏に対して、オーバン氏はむしろ、政治の掲げた「戦闘的なライシテ」

が、国務院の冷静な法的判断により穏健化するかたちで法案にまとめられていることを強調した。

登壇者の報告後には、フロアからいくつかのコメントや質問が寄せられた。例えば、増田一夫氏（東京大学名誉教授）は、フランスは普遍主義的な「国民」概念を、ドイツは特殊で民族的な「国民」概念を伝統的に掲げてきたが、現在の移民政策や社会統合の様子をみると、逆説的にもドイツのほうが多宗派共存に成功しているように見えると指摘した。さらに、10月時点で複数の施設を閉鎖し、団体を解散することができたのに、2020年法案でそのような可能性を一層強化する必要はあったのか、2020年法案は欧州レベルの法規定においてどのように位置づけられるのかという質問を投げかけた。以上、2020年12月11日に開催された本シンポジウムでは、2020年12月9日法案というフランスのライシテに関わる最新の問題がいち早く議論された。

報告者：田中浩喜（東京大学大学院博士課程）

全学自由研究ゼミ

人文-社会科学の アカデミックフィールドを体験する

セッション5

2020年12月11日・18日

2020年12月11日および12月18日、全学自由研究ゼミナール「人文-社会科学のアカデミックフィールドを体験する」の第5セッションが開講された。今回のセッションは「バイナショナリズム bi-nation-ism —アレント思想から見る「共生」の論理」というテーマで、二井彬緒氏（EAAリサーチ・アシスタント）が担当した。二井氏は自身の研究において、ハンナ・アレント（1906年-1975年）の思想、とりわけ、彼女が提唱した「バイナショナリズム」という概念に焦点を当てて読解を行なっている。

Week1の講義では、『全体主義の起源』（1951年）、

『人間の条件』（1958年）、『エルサレムのアイヒマン』（1963年）といった代表的著作を手がかりとして、アレントにおける「共生」の論理について議論が展開された。この中で二井氏は、アレントの提唱した3つの概念「labor（労働）」「work（仕事）」「act（活動）」の内容を紹介しつつ、これらの概念が創出された背景には、「ショア（Shoah）」、すなわちナチス政権下におけるユダヤ人の大量虐殺という事実があることが強調された（アレント自身、「ユダヤ人」にルーツを持っている）。上記の3つの概念のうち、アレントが最も重視するのは「act（活動）」である。な



ハンナ・アーレント
(1906年-1975年)



ぜなら「act (活動)」には、公的領域、そして自らと異なる存在である「他者」が必要とされるからである。これは、「他者」を排除・抹殺し、一切を平準化・同一化しようと試みるファシズムへの痛烈な批判である。今現在、アーレントのテキストを再読する際、そこには限界（例えば「公共」空間を強調するあまり、そこに参与できない人々を排除してしまう危険性が伴う、等々）がつきまとうことも事実であるが、一方で、アーレントにとっての切迫性を意識しながら読解を行うことの重要性を、二井氏は指摘した。

また、二井氏は、アーレントの「共生」の論理を窺い知るための具体的な切り口として、「バイナショナリズム」という概念を紹介した。この概念は、端的に言えばイスラエル・ユダヤ人とパレスチナ・アラブ人の共生・共存を目指すものである。「シヨア (Shoah)」という迫害経験を経て、自らの安住の地を創出するために建国された「ユダヤ人」国家イスラエルと、イスラエルが建国された地にもともと居住していた「パレスチナ人」の共生はいかにして可能か。二井氏は、「バイナショナリズム」とは、「2つのナショナリズム」という意味として解釈すべきではない、と強調する。なぜなら、アーレントが重要視しているのは「イスラエル（あるいはユダヤ）」と「パレスチナ」という「2つのネイション (nation)」を議論の大前提とする態度だからである。二井氏はこれを「bi-nation-ism」と表

現した。

Week2のディスカッションでは、Week1の講義を受けて、次のような根源的な問いが複数提起された。「共生」の思想は、「共生」を拒否する人をどのように扱うべきか？「人は差異を持って生まれてくる点で平等である」ことを強調したアーレントの「共生」思想と、ユダヤ人の大量虐殺に関与したアイヒマンに死刑を求めたアーレントの立場を、どのように解釈すべきか？アーレントの言う「公共」空間は、コロナ禍において普及したオンラインという空間において実現し得るものであるか？SNSを通して触れ合う世界——各人の嗜好に沿った情報ばかりがアルゴリズムによって自動的に表示される世界——は、果たして「公共」空間に接続可能なのか？もしそうでないならば、現在、アーレントがいうような「act (活動)」が可能となるような空間は、どのように創出し得るのか？

ほかにも、アーレントの議論を、(時間的にも空間的にも)遠く離れた場所において論じられたものとしてではなく、いま・ここにおいて生起している状況を、そこに連なるものとして思考することの重要性が指摘された。オンライン授業の難しさを実感しつつも、同時に、オンライン空間を「公的」なものとして機能させる可能性を、参加者皆で創出する貴重なひとときとなった。

報告者：崎濱紗奈(EAA特任研究員)

宇野瑞木「『嶺南摭怪』と洞天思想 ——北ベトナムの山岳信仰の変遷」

説話文学会シンポジウム「ベトナムの漢文説話を読む
——『嶺南摭怪列伝』を中心に」

2020年12月12日

2020年12月12日にオンラインで開催された「説話文学会2020年度12月例会」のシンポジウム「ベトナムの漢文説話を読む——『嶺南摭怪列伝』を中心に」において、EAA特任研究員の宇野瑞木が研究発表を行いました。以下、そのシンポジウムの概要と宇野の発表について紹介いたします。

1962年に設立された「説話文学会」のシンポジウムのメインテーマとして、ベトナムの説話が掲げられたのは、今回が初めてのことである。この開催の経緯と趣旨について、本シンポジウムの企画者である小峯和明氏（立教大学名誉教授）は、以下のように述べられた。

近年、人文社会科学の分野において東アジア研究が活発化する中、ベトナムが東アジア研究のフィールドの視野に入ってきた。ベトナムは地域的な東南アジアに属するが、歴史的には特に北部を中心に中国との関わりが深く、「越南」「安南」と呼ばれ、いわゆる〈漢字・漢文文化圏〉の南限に相当する。さらに、仏教の北伝と南伝の交差する地域であり、また儒教や道教も深く浸透しており、中国の漢文文化の圧倒的な影響下にあった。その意味で、まさに「中国化と脱中国化」の相克を見せてきた歴史がある。以上を受け、小峯氏は、文学研究においても、ベトナム古典を「東アジア」の〈漢字・漢文文化圏〉の一環とみなすことにより、従来の中国、日本、韓国を中心とした地域のみならず、ベトナムも含む説話研究が可能となること、そしてそうした視点が今後必須となることを呼びかけた。そして、本シンポジウムは、7年前に小峯氏及び川口健一氏（東京外国語大学名誉教授）を中心として始まった「ベトナム漢文を読む会」において、ベトナムの神話伝説を集めた『嶺南摭怪列伝』を読

んできた経緯から、そのメンバーによる研究発表会を行うという意図のもとに企画されたものである。

さて、本シンポジウムは、司会の河野貴美子氏（早稲田大学）の進行のもと、基調講演と研究発表「『嶺南摭怪列伝』を読む」の2部立てで行われた。まず基調講演では、「『嶺南摭怪』から見たベトナムの信仰と宗教」と題し大西和彦氏（アジア国際交流奨学財団）が、『嶺南摭怪』が15世紀までのベトナムのアニミズムや外来の信仰・宗教文化受容の様態を知る上で欠かせない書であることを、現地での豊富な経験と多くの資料を踏まえた上で示した。

続く研究発表の部では、小峯氏による上記の趣旨説明があった上で、ベトナム文学及び漢文説話を専門とする以下の3名による充実した発表がなされた。

- ・川口健一氏（東京外国語大学名誉教授）「『嶺南摭怪列伝』各種写本をめぐって」
- ・佐野愛子氏（進和外語アカデミー非常勤講師）「『越井伝』——裴綱『伝奇』『崔煒』と比較して」
- ・金英順氏（立教大学兼任講師）「『金亀伝』にみる王女の愛と反逆をめぐって」

3名の発表の後、報告者の宇野が「『嶺南摭怪』と洞天思想——北ベトナムの山岳信仰の変遷」と題して、以下の構成で発表を行った。『嶺南摭怪列伝』は、古代の北部ベトナムの民間に流伝した帝王将相・英雄・山川精霊の神々に関する神話伝説を集めた書である。その話の原型は李朝期（1009年-1225年）から陳朝期（1225年-1400年）にかけて出現したと考えられ、15世紀末以降、修訂増補が繰り返された。ベトナムでは、ドンソン文化（前1000年-後2、3世



紀頃)から東南アジア的な山岳優位の信仰基盤があったとされ、『嶺南摭怪列伝』にも、山の精が水の精に勝利する「傘円山伝」をはじめ、山に関わる説話が多く収められている。

本発表では『嶺南摭怪列伝』の山地に関わる語りに着目し、特にハノイの約50キロ西に位置し、紅河デルタの西氾濫原に接する「傘円山」の信仰を中心に、山の洞穴を降りていく「越井伝」や山中の洞穴で尸解を遂げる「徐道行」なども含めて検討し、中華世界の支配を経て唐の滅亡と共に北部ベトナムが「独立」をしていく10世紀から、説話がまとめられていく14、15世紀にかけて、具体的な山地に対する語りが、いかに変遷・変容していったか、という点について検討した。その上で、ベトナムの山岳信仰と中国由来の風水や道教とりわけ洞天思想との関係についても考察を行った。

質疑では、高津茂氏(東洋大学)から北ベトナムの山岳信仰に関して論じるにあたって、歴史学や考古学の成果の活用とともに、実地的な態度も重要であ

ることが指摘された。またグエン・ティ・オワイン氏(タンロン大学)からも書誌的な問題が提起されると共に、今後このような日越の研究交流・共同研究がますます進められるべきであることが告げられた。

最後に、説話文学会長の佐伯真一氏(青山学院大学)より、ベトナム漢文説話の世界を知ることが、日本の説話世界のより深い理解をも促すことが確認されたとして、ベトナムを含む東アジアの視座をもつ意義が共有された形で閉会となった。

この度のシンポジウム開催にあたっては、新型コロナウイルスの感染拡大という不測の事態の中で、通常とは異なる方法を採らざるを得ず、試行錯誤の繰り返しであったと拝察する。そうした中、事前の万全な準備によって、無事盛会に終えられたことに感謝申し上げたい。結果、オンライン開催となったがベトナムの専門家からの貴重なコメントも寄せられ、より意義深い会となったと感じた。

今回、このような説話文学会の画期となる記念すべき場で、「ベトナム漢文を読む会」のメンバーの1人として発表する機会を得られたことは、大変光栄なことであった。また、この発表の準備中から感じていたことであるが、書物をもとにした考察だけではなく、実際に現地で山地や洞窟などに足を運ばねばわからないことが多いだろうということを改めて痛感した。そして、そのためにはベトナムの専門家の方々との共同研究が欠かせないということも強く感じた。COVID-19が収まったら、是非、またベトナムを訪れたい。

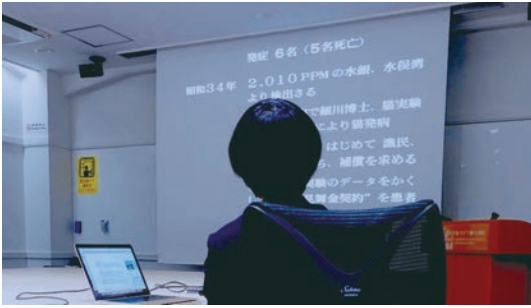
報告者:宇野瑞木(EAA特任研究員)

第10回 石牟礼道子を読む会

2020年12月14日

2020年12月14日、第10回「石牟礼道子を読む会」が開かれた。今回は、『苦海浄土』の第3部に『天の魚』に撮影の経緯が記されている土本典昭監督の記録映画『水俣——患者さんとその世界』(1971年公開)の鑑賞会を101号館11号室で行った。参加

者は、鈴木将久氏(人文社会系研究科)、張政遠氏(総合文化研究科)、それから報告者の高山花子(EAA特任助教)の3名であった。第3部には、第1章「死都の雪」にチツ東京本社前での座り込みに上野英信や原田奈翁雄も参加していたことが書かれているよ



うに、1970年以降の出来事が多く書かれている。そして、映画『水俣』の未編集のフィルムを1970年9月13日に石牟礼たちが観ていたことも書かれている。そこに描かれているのは、細川一博士と石牟礼の話す場面を撮影する案があったものの、石牟礼が拒絶し、また細川博士が亡くなったことでそれが実現しなかった、という経緯であった。そうしたこともあり、実際の映像を見たい、というメンバー間の前からの願いがかなって実現した集まりだった。

土本典昭の『水俣』は、患者家庭29世帯へのインタビューを中心に構成されたものである。2時間に編集した短縮版もあるが、今回は2時間45分の完全版を視聴した。熊本大学医学部の残した患者映像、大阪のチッソ株主総会の実際の場面や、石牟礼道子自身が御詠歌「ひとのこの世は永くして」の練習場面に映り込んでいることを確認した。

長時間に及んだため、議論の時間はもたなかったが、張氏からは、漁師たちの姿が、3.11後の福島県を舞台に撮られた山田徹監督のドキュメンタリー映画『新地町の漁師たち』（2017年公開）と重なるという意見が出た。鈴木氏は、メジロの競鳴に興じる人の

ような、その地の日常生活の細部が撮られていることにも言及した上で、患者自身が相当クローズアップで撮られていることから、撮影者と被写体といった単純な二分はそこにはなく、両者が接近して作られた映像である点を確認した。株主総会で御詠歌を歌う発案が出た集まりや、当日大阪に向かうまでの新幹線にも撮影班が同行しているように、一緒に映像を作っている様子が伝わってくるものだったということである。また、石牟礼の『苦海浄土』と重なる要素もあると同時に、一株運動をめぐるやりとりをはじめ、『苦海浄土』には書かれていないものも多く見られる時間だった。この作品は、熊本県水俣市ではなく、鹿児島県出水市の海の映像からはじまっており、東京以外の各地に水俣病を告発する会のメンバーがめぐってゆく場面も映っていることが印象に残った。来週に開催される第11回でも別メンバーが同じ映像を見る予定であるため、来年の集まりで、このドキュメンタリーをめぐる議論することが楽しみである。

報告者：高山花子（EAA特任助教）
写真撮影：立石はな（EAA特任研究員）

ヒューム『自然宗教をめぐる対話』（1779） 新訳刊行記念ワークショップ

18世紀の対話篇を読む／論じる／翻訳する

2020年12月16日

2020年12月16日、ヒューム『自然宗教をめぐる対話』（1779年）の新訳刊行を記念して、オンライン・

ワークショップ「18世紀の対話篇を読む／論じる／翻訳する」が開かれた。EAA特任研究員の若澤佑典

が企画運営を行い、政治思想史分野より訳者の犬塚元氏（法政大学）、社会思想史分野より壽里竜氏（慶應義塾大学）が登壇した。事前準備および当日の進行に際して、武田将明氏（東京大学）、伊野恭子氏（EAA 学術支援職員）、田村正資氏（EAA 特任研究員）の助力を得た。感謝申し上げる。本イベントの目的は、「本書がとにかく面白い対話篇なので、その魅力を縦横無尽に語ってみたい!」というシンプルなものである。ヒュームの知的探求は認識論や倫理学に始まり、政治学や文芸論など、幅広い主題を領域横断的にカヴァーしている。また、文筆家としての活躍が示すように、「何を論じるか」だけでなく「どう語るか」という点でも、卓越したものがある。18世紀の読者たちは、ヒュームが書くエッセイや歴史書の語りに魅了されていた。こうした背景から、現代の研究者が多領域で協働して、あるいはアカデミアの外部も巻き込んで一緒に論じることで、見えてくるヒュームの世界がある。今回はとりわけ、人文学諸領域と社会科学諸領域の接点を意識しながら、3人のヒューム研究者が集い、『対話』についての対話を行った。

本イベントは開催前日に、事前登録者数が149人に達し、当日の来場者も100人を超える大盛況であった。ウェビナー形式のオンライン開催ということで、登壇者とオーディエンスのやり取りはテキストベースであったものの、閉会ギリギリまで英文学・哲学・政治理論・経済思想史など、さまざまな分野からの質問が飛び交い、熱気に満ちた2時間となった。学部学生（しかも東大に限定されない）の方で、イベント参加をしてくれた方も複数見られた。思っていた以上に、ヒューム研究の未来は明るく広がっているのかもしれない。運営スタッフも、登壇者の3人も多方面からの反響に驚きつつ、「ヒュームってとても面白い!自分の興味関心とは接点がない思っている人にこそ、本書を手にとってほしい」というメッセージが響いたようで安堵している。

ワークショップの進行に関しては、まず企画者の若澤が趣旨説明を行い、英文学研究から『対話』へのアプローチを論じた。続いて、犬塚氏が政治思想史の観点から、そして壽里氏が社会思想史の観点から本書を論じ、鼎談へと移った。三者の立ち位置は異

なるものの、1.対話篇というジャンルの内的多様性を強調し、「対話の美化/理想化」に警鐘を鳴らす点、2.『対話』内で各思想的立場が（コミカルに）キャラクター化されていることへの注目、3.『対話』冒頭に置かれた「パンフィルスよりヘルミッパスへ」の機能を検討する点、4.登場人物の1人であるデメアの退出を取り上げる点など、複数のポイントでオーバーラップが見られた。『対話』についての対話を行う中で、登壇者3人のキャラクター性も浮き彫りになり、あたかも3人がフィロやクレアンテス、デメアのようにワイワイやり取りしているように感じられる一時であった。

— 犬塚元氏報告 —

犬塚氏の報告は、現代世界に遍在する対話（篇）への関心、その指摘から始まった。知的探求が専門化・細分化されていくなかで、対話篇は知の断片化に抗う「オルタナティブ」な思考様式・表現形式として、称揚される流れがあるという。ここでは、理論ではなく活動としての哲学へ、自己省察から他者に開かれた語りへ、文脈の消去ではなく回復を、といった転回が、知の全体性の回復と連動している。ヒュームの『自然宗教をめぐる対話』が、専門領域を超えて幅広く読まれる可能性も、上のような希求が切り開いていると言える。

ただし、知のオルタナティブとして対話篇を位置付ける際、単純な理想化は危険である。対話篇と一口にいっても、いろんなタイプの作品がある。まずは、その（ジャンル内における）多様性を理解し、適切な分類枠組みの下で、ヒュームの『対話』について精査することが必要なのだ。犬塚氏はアルバート・ウィリアム・レヴィ（「文学としての哲学：対話篇」、1976年）に依拠し、「不平等な対話篇」と「平等な対話篇」というタイポロジーを提示する。「不平等な対話篇」というのは、登場人物たちの間にヒエラルキーがあり、一方が他方を教え諭す構造を持っている。執筆者の思想を体現した教師が、何も知らない生徒に対して、教育や説得のための対話を行う、というストーリーになりやすい。マキャヴェリの『戦争の技術』やホブズの『コモン・ローをめぐる対話』が（犬塚氏による）例として挙げられた。レヴィの論考では、ア

ウグスティヌスの『自由意志論』やマールブランシュの『形而上学と宗教についての対話』が事例となっている。これに対して「平等な対話篇」とは、異なった思想的立場がそれぞれ人格化され、複数の見解が競合するものを指す。ヒュームの『自然宗教をめぐる対話』は、この一例として理解できる。

ヒュームの『対話』においては、クレアンテスが経験的な自然神学を、デメアが論証的な自然神学を、フィロが懐疑派の立場を代表している。対話の過程で自然神学の難点が明らかにされていくが、そこから先の議論の勝ち負けについては、(パンフィルスの裁定が最後に置かれているものの) オープンになっている。ヒュームが描く対話の構造は複雑である。決して、ヒュームの代弁者となる特定のキャラクターが、他のキャラクター(=思想的立場)をなぎ倒していくような、単純なストーリーにはなっていない。ヒュームの書簡(1751年3月)を見ても、自身の敵対者を愚かなものとして、あるいは弱い存在として描くことに否定的である。このように、本書が「どのような対話篇なのか?」という問い、その構造的複雑さへの注目が伴って、はじめて「この対話篇でヒュームはどこにいるのか?」や「ヒュームはなぜ対話篇という形式を採用したのか?」という問いが意味を持つようになる。登場人物の誰か1人が作者の立場を代弁するのではなく、3人の登場人物それぞれに、ヒュームの声が分有されていると言える。『対話』冒頭に置かれた「パンフィルスよりヘルミツプスへ」は、どのような対話が語られるべきかという、ヒュームによる対話篇のメタ記述として、読み解くこともできる。

本書の特徴は「ヒュームの声が各登場人物に分有されていること」、「どういった対話篇が望ましいかの(自己言及的)メタ記述が冒頭に置かれていること」とどまらない。3人の対話という構図そのものが、対話の進行に伴って揺らぎ変化していくのである。対話の始まりと共に、フィロとデメアは(偽りの協力であったことが、のちに明らかになるものの)連合して、クレアンテスへと挑戦する。神と人間の非類似性をめぐって、正統派と懐疑派は連帯するのである。これは3人での対話というより、2つの立場の応酬という表現がより近い。さらに、対話に立ち会っている、パンフィ

ルス存在も忘れてはならない。彼は3人のやり取りを観察し、その優劣もあれこれ考えている。これを受けて、対話者が3人から4人になっている(ポイントもある)と言えるかもしれない。あるいはフィロの立場の一貫性に疑義を挟み、フィロがフィロ自身の意見を言っているところと、ヒュームがフィロの口を借りてあれこれ議論に介入している場面を、区分することも可能そうだ。第11章でのフィロの変化(著者の介入?)や、第12章での立場転換(フィロが「不規則的な」議論に屈して自然宗教を受け入れたか、非難をさけるためのヒュームのごまかしか?)などは看過できない。フィロの分裂に、作者ヒュームの影を見るのであれば、3人とパンフィルスに加えてヒュームもあわせ、5人で対話しているとみることもできる。さらにさらに、デメアが対話の場を去ったのち、フィロとクレアンテスの間には、コンセンサスのようなものが生まれている(ように見える)。クレアンテスはすべての論点に反撃しているわけではない。フィロが指摘する迷信の害悪について、クレアンテスは反論しない。こういったシーンでは2人の対話というより、むしろ1人のモノローグが展開している。対話の枠組み自体がずらされ、対立や応酬のかたちそのものが変化していくのが、『対話』の特徴なのである。

本書の動的な対話構造を精査した後、犬塚氏の報告は、ヒューム思想全体における『対話』の位置づけを扱った。現代の読者にとって、ヒュームは観念連合や因果関係を論じた人、とイメージされがちである。こうした理解に基づけば、自然宗教を検討する『対話』は、ヒューム思想のコア・テーマから隔たった、マイナー作品であるという印象を持たれやすい。しかし、印象や観念といった、『人間本性論』で展開される知覚モデルは、実のところバークリやマールブランシュからの流用である。ヒューム思想の独自性は、既存の語彙や理論の「組み換え」、そして「読み替え」にあるのであって、知覚モデルそのものにユニークさはない。重要なのは、こうした既存のアイデアを使って、ヒュームがいったい何をやろうとしたかである。ヒュームは認識論を出発点として、マールブランシュに代表されるデカルト主義の神学(=「神がすべての原因」と主張)や、クラークに見られる(ニュートン主

義に基づいた) 論証的自然宗教を論駁の対象とした。さらに、神なき世界に置かれた人間の在り方や社会規範の理解をめぐる、情念論・道徳論の領域へと進んでいく。『人間本性論』から始まるヒュームの知的探求、そしてヒューム思想の「ヒュームらしさ」を形作るのは、懐疑(不可知論)にもとづく脱宗教のプロジェクトなのである。ヒュームの著作群を「ポスト宗教対立の思想」として理解すれば、『対話』がそのセンターに位置する作品であり、ヒューム思想の全体像を理解する上で、格好の入門書であることが明らかとなる。邦訳の解説で強調されているように、「ここには、ヒューム思想のエッセンスが集約的に表現されているばかりか、彼の思想の実践的目的もはっきり示されている。対話形式で、ほかの作品より格段に読みやすいこともふまれば、この作品は、ヒュームの思想に親しむために、最初に読むべき入門書としても相応しい」のである(『対話』236頁)。

『対話』の登場人物たちが、複雑な応答関係の中で議論を戦わせていたように、ヒュームが何とどう戦っていたのか、という構造も複雑さを持っている。それは、「サイエンスに象徴される啓蒙」サイドが、「宗教という無知蒙昧」なものを打ち倒す、という単純化されたストーリーではない。ヒューム、あるいは『対話』が批判的に吟味するのは、サイエンスによってアップデートされた宗教である。『対話』の中で、登場人物たちが連携したり、ぶつかったりしているように、ヒューム自身が身を置いた18世紀の社会／知的空間も、啓蒙、サイエンス、宗教の多様な組み合わせによって成立していた。動的な対話構造への着目は、こうした動的な18世紀の思想空間の構造把握へと結びつくのである。

— 壽里竜氏報告 —

壽里氏の報告は、ヒューム『道徳原理研究』(1751年)の引用から始まった。「会話において、対話の生き生きとした熱気は心地のよいものである。対話に参加している者だけでなく、その様子を外から眺めている者にとっても愉快なものだ」(『道徳原理研究』8.5)。このフレーズから示唆されるように、ヒュームの会話に対する主題的関心は、『対話』以外の著作に

も見られる。また『対話』冒頭では、近代世界における対話篇(というジャンル／表現形式)の衰退が語られているが、これを字義通り受け止めてはいけない。マイケル・プリンスが『ブリテン啓蒙における哲学的対話篇』(1996年)で指摘するように、18世紀イギリスの文芸空間において、対話形式はむしろ盛んに用いられていた。したがって、『対話』をヒュームの諸著作との関わりにおいて、さらには18世紀の出版文化の中で位置づけていくことが重要である。

ヒュームの『道徳原理研究』には「対話一篇」が付されており、こちらは(登場人物の一人が解説者の役回りを担う)弁証法的対話の色彩が見られる。また、明確な対話形式ではないが『道徳政治論集』(1741年～42年)の「幸福四論文」では、ヒュームが古代哲学の各派(エピクロス主義者／ストア主義者／プラトン主義者／懐疑主義者)になりきって、それぞれの声をエッセイ上で再現している。競合する思想的立場について、それぞれの視点や声に同化し、1つのテキスト上で再現・併記するというのは、ヒュームの得意とするところである。『イングランド史』(1754年～62年)では、議会派と王党派の政治立場・心情を両論併記する形で表れている。こうした併記スタイルでは、思想的立場の優劣判定が留保されるため、(弁証法的対話に対して)懐疑主義的対話と言い表せるかもしれない。結論や裁定を読者に委ねるという点は、エッセイや小説といった、同時代の文芸ジャンルとの連続性を示唆させる。犬塚氏は「平等／不平等な対話」というタイポロジーを用いていたが、弁証法的対話／懐疑主義的対話という構図で見ると、ヒュームの執筆活動においても、著作間に多様性を確認できる。

ヒュームの文筆活動における対話形式の採用は、18世紀に起こった「出版文化の隆盛」と軌を一にしている。定期刊行物が数多く出版され、都市に住まう新興の中産階級がこれを愛読した。出版を介した新たなコミュニケーション空間が現出する中で、文筆家たちは読者に応答していくこととなった。出版物が両者の想像的／創造的なインターフェイスとなったのである。あるいはコーヒー・ハウスのような場で、読者同士が実際に感想を言い合うという機会もあった。出版物を介して会話の世界が拡張する、そんな社会・

文化状況を受けて、対話篇のリバイバルが発生する。ヒューム自身は、キリスト教を信じる読者に向けて、懐疑主義的視座を投げかけていたようである。古代世界でキケロ（の対話篇）が行った営為を、出版文化の隆盛する近代世界において、アップデートしつつ反復する行為と言える。キケロとヒュームの連続性については、ティム・スチュアート＝バトル『道徳神学から道徳哲学へ』（2019年）に詳しい。

出版物の増加という量的変化は、筆者／読者の質的变化を伴ったことに留意したい。読者たちは書物を介して、書き手のパーソナリティや背景にも興味を持った。アントワヌ・リルティの指摘を援用すれば、文筆家ヒュームは皆の注目する「セレブ」となったのである。ヒュームその人も「セレブ」としての自己を強く意識しており、自著の出版タイミングやその社会的影響を計算していた様子がかがえる。とりわけ『対話』に関しては、自らの死で世間が騒いでいるうちに、鮮烈な形で死後出版を行いたい、という意図が明確に感じられる。こうしたプロモーションの一環として、晩年のヒュームは死の床にあっても、平静を保った無神論者としてふるまっていたという。誰の目もないところでは苦しみに打ち震えていた、という召使の証言も残っているようだ。

現代の我々が『対話』を読んでいると、結局「ヒュー

ムはどこにいるのか」と考えることになるし、諸著作から浮かびあがってくるヒューム像も、読み手によって多種多様である。書き手・語り手としてのヒュームは、どこか「とらえどころがない」。各テキストにおける筆者のペルソナは、ヒュームが巧みに構築した虚構（＝ヴァーチャルなもの）であると言える。テキストを介して、「なまの作者」（＝生きているヒュームその人）と出会っているという想定は危うい。こうした巧みさの一方、読者との仮想的なコミュニケーションを、ヒュームが完全に制御していたわけではない。ルソーとの喧嘩別れで見られたように、セレブに対する関心は、ヒュームの知らないところで増殖し、意図しない反発や風評を読んだ。ヒュームは出版物を通じて、ヴァーチャルな（セレブとしての）自己像を確立すると共に、こうしたメディア空間に振り回され、圧倒されてもいたのである。『対話』の中で見られる、絶妙なタイミングでのデメアの退席、読みやすい文章でありつつ読者の理解を突き放すような怒涛のストーリー展開（＝議論の応酬）も、エネルギーに満ちた（時に荒れ狂った）18世紀のメディア空間、そのうねりが背後に透けて見える。

報告者：若澤佑典（EAA特任研究員）

EAIHN Online Seminar Series (3)

2020年12月16日

報告（1） On 16th December 2020, the East Asian Intellectual History Network (EAIHN), through the auspices of Seoul National University's Program for European Studies, hosted a talk by Joshua Ehrlich (University of Macau) entitled "The East India Company and the Late Enlightenment." After opening remarks by the chair, Alvin Chen (Academica Sinica), Ehrlich introduced his paper, discussed its main points, and situated it in the larger context of his current book

project. He focused on one particular ideological point of connection between the Company and (the) Enlightenment: the Company's idea of "conciliating" political classes in Britain and India via scholarly patronage. He then traced how this idea was developed, criticized, and reformulated by Company figures and their interlocutors in the late eighteenth century. In their responses, Sora Sato (Tokyo University) and Doohwan Ahn (Seoul National University) raised a number of incisive points

for further consideration, touching on Edmund Burke, Istvan Hont's "jealousy of trade," and much else besides. Finally, the audience engaged Ehrlich in a stimulating discussion of further topics, including the drawing of comparisons between the British and other European "East India" companies.

Reported by Joshua Ehrlich
(University of Macau)

報告 (2) 東アジア思想史ネットワーク (EAIHN) 第3回オンラインセミナーが、ソウル国立大学・ヨーロッパ研究プログラムの財政支援を得て、2020年12月16日に開催された。なお、日本18世紀学会より後援を受けた。マカオ大学のJoshua Ehrlich氏が“The East India Company and the Late Enlightenment”という演題で報告を行い、その後討論者である東洋大学の佐藤空氏、ソウル国立大学のAhn Doohwan氏によるコメントと質問、さらに報告者による応答が続いた。参加者との討論の時間も50分ほど確保することができた。報告内容に加え、講演者が準備中の単著や研究計画をめぐっても以下のような活発な議論が展開された。後期啓蒙思想におけるアジアおよびインド理解の内実、特に大英帝国を中心としたヨーロッパ諸国の両インド会社による植民や帝国主義的統治が拡大するなかで、大航海時代以降のオリエンタリズムやアジア

表象にどのような変化がもたらされたのか、ヘースティングズに代表される東インド会社幹部が（宣教活動ではなく）学術的な実地調査を行なう学者を支援することで本国政府や世論に対して自らの活動をどのように正当化しようとしたのか、また従属領 (dependencies) の宗教・文化に対する実証的研究の深まりがヒュームのいう「文明的君主政」概念のアジアへの適用可能性を拡大した点とそのコロニアルな限界——こうした論点について、知（識）が流通し解釈され変容していく動的な過程に注目する history of knowledge の観点から議論された。さらに啓蒙期の「商業」観をめぐっては、文明化作用をもたらす「穏和さ」のイメージで商業をとらえるモンテスキュー的な理解に対して、むしろ警戒心ないし嫉妬を激化させかねない国際貿易の作用を強調するヒューム的な見方 (jealousy of trade) の重要性が Doohwan 氏によって指摘された。とりわけアダム・スミスに代表される一部啓蒙思想家の重商主義ないし商業システムへの批判的言説を勘案するならば、貿易独占権を付与された勅許会社をめぐる本国および植民地での知的かつ実践的な論争においては、commerce の語自体が帯びる両義的なニュアンスにも着目しつつ、テキストとコンテクストに内在した研究をさらに進めていく必要が確認された。

報告者：上野大樹（一橋大学）

話す／離す／花す (5)

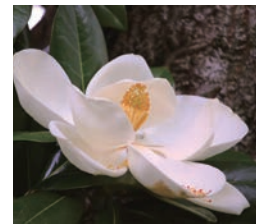
道ゆきてまろべる石のさみしければ

前野清太郎 (EAA特任助教)

2020年12月17日

日本の中世に流行した文芸に連歌なるものがある。趣味人の集った1人が五七五の句をよみ、座に連なる別の1人が続く七七の句を付け、その句へまた五七五を、さらにまた七七を…と句をよみ継ぎながら「うた」をつくる文芸である。よみ人のよみ継いで文字通り1巻の「うた」をつくることは「連歌を巻く」と

いわれた。いくつか守られるべき接続の規則はあったが、複数人で句をリレーするゆえ、往々に継がれた句と句は予想外に「巻かれた」制作物を生み出す。戦乱のうち続く中世にあって人々はこの同人を巻き・巻き込んで千変万化する創作へののしみを見出していたのである。



伝統的な連歌そのものは近代に至りすっかり衰微してしまっただけでも、個を超えて集団でものさされる創作、即興意外性の美なる性質は、しばしば現代の創作者をとらえてきた。詩人の大岡信もそのひとりで、『連詩の愉しみ』（岩波書店、1991年）ほかの著作をものして連歌・連「詩」の試みとそこで出くわした難しさ・可能性について書いている。大岡とその同人たちが経験したところでは、詩界俳壇にあってソフィスティケートされた詩人・俳人であるほど、他からつないで他へとつなぐ創作をする連「詩」・連歌へなじむのに苦難を感じていたという。つまり1作1句で完成して鑑賞されうる詩なり句なりを作ることに慣れているゆえに、つい自らの作に鋭さをこめてしまって、先の詩句を受けてよみ、それを後の詩句へよみ繋げる「スキ」が消えてしまうのだと。

もとより人文学・社会科学のいとなみは、無から有を創造するいとなみではない。みな何かしら扱い分析する対象をもっている。「うた」に例えるならばみな本歌なり先行する句なりを持っていて、本歌を取って、あるいは2の句3の句を継いだものが自らの作(work)になる。古い西洋の言い回しに「巨人の肩に乗って」とはいうが、学者(scholar)のいとなみは本来的に連作的だ。それゆえ1作1句の完成と繋ぎ繋がる「スキ」の関係に似通った対立が、連歌・連「詩」の試みと同じようにしばしば生まれてくる。

学者は「孤独に書く」ことを要する。これは文書の海にもぐるような研究であろうと、数字の山の解析へとくりくむ研究であろうと、あるいは文字通りの海山を駆ける研究であろうとも同じことで、最後は「孤独に書く」ことへ向き合う。ならば「孤独に書いて」どうするかといえば、1つには学術誌に論文として成果を寄せるということがある。寄せた論文は審査(査読 peer-review)を経て、たいてい幾度かの修正のうえに掲載(公刊 publish)される。一連のプロセスはたしかに多くの人々の目と手の介在を経ているけれども、大抵の場合「スキ」はあまり歓迎されない。

辛いことに、いまのところ連ね繋げる「スキ」の

活きる領域はなお少なからず存在している。たとえば「孤独に書く」いたものは、学術誌のほか「学会」での口頭発表となることもある。とはいえ聴衆の多さと限られた応答の時間ゆえに、論を受けて繋いで、を延々と続けるのは難しい。ここから当代の「学会」の無益を指摘するのはたやすいけれど、存外にそうでもないのだ。報告を終えて一息つくロビーの何気ない雑談からつい時を忘れることもあれば、「学会」終了後に設けられた一席が「三席」「四席」となって気付けば延々と学術論を交わしていることもある。そうした「不測」「脱線」の出会いから生まれる新しい展開はたしかにあって、それが今なお「学会」へ生身で出席する魅力であったのだ。

オンライン学会の試みは実に多くのことを可能にしてくれた。望みさえすれば地球の裏側とも討論ができる。出張や旅装の煩わしさもない。ネットワーク技術の力がなければ、黒死病のさなか山深い修道院にこもった中世の隠士のごとく「孤独に書く」ことへ没頭していたであろう。ことによるとそのまま中世の世界に入っていたかもわからない。技術の偉大さに敬意を表しつつ、私はオンラインで設けられた場に「不測」の少ないことを惜しんでもいる。Zoomで設定されたミーティングは、接続を切れればそれで終わり。それまでの豊かな対話の空間は立ち消えて、孤独に部屋でパソコンの画面と向き合っていた事実だけが残る。一息ついた孤独な報告者へ声をかける見知らぬ人はいない。もちろん、いずれ新しいメディアツールがこの「不測」を補完してくれることはありうる。むしろいつか終わる今の状況のあとに、私たちがなおも「不測」や「スキ」を愛でられる心のありようを持ち続けていられるかについて、私は非常に気に病んでいる。

転がる石に苔は生えぬが、みなみな転がる石となれば、その通る道は荒れ果ててしまう。ローリング・ストーンよ、願わくはなお、巻けよ巻かれようき世の伴に。

写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

第3回 101号館映像制作ワークショップ

2020年12月18日

2020年12月18日に行われた第3回101号館映像制作ワークショップは、本プロジェクトのアドバイザーである折茂克哉氏（東京大学駒場博物館）による駒場キャンパスツアーに始まった。ツアー参加者は、高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）、日隈脩一郎氏（EAAリサーチ・アシスタント）、報告者の小手川将（EAAリサーチ・アシスタント）、前野清太郎氏（EAA特任助教）の4名である。正門前に集まった私たちにまず折茂氏が駒場地区の案内図を指して説明してくれたのは、駒場農学校から旧制第一高等学校を経て現在の東京大学駒場キャンパスとなるまでの校地の歴史的な変遷だった。そうした歴史をふまえたうえで、1号館（旧一高本館）、900番教室（旧一高講堂）、駒場農学碑、ファカルティハウス（旧一高同窓会洋館）、駒場図書館前（旧一高寄宿寮跡）、そして101号館（特高館）と周り、大学という場に堆積された時間を各々感じる事ができた。

一高時代、中国人留学生のための課程「特設高等科」の専用教室として造られた建物である101号館をもとに映像作品を制作するにあたって、駒場キャン

パス全体の辿った歴史を知ることは欠かせない作業である。そのために歴史資料を繙くことが重要なのは言うまでもなく、みずからの身体をもって駒場の歴史を経験し、立体的に感じることの重要性を知るのが今回のワークショップの目的だったと言って良いだろう。

たとえば駒場キャンパスには農学校時代や一高時代のマンホールがいくつか取り除かれずに残存している。また、駒場農学碑は今では背の高い草木に囲まれており、意識しなければ気づかず通り過ぎてしまうような目立たない場所に建てられている。折茂氏によれば、駒場農学碑は以前には藪の中にすっかり埋れていて、もしも新校舎の建造が計画されたら人知れず取り壊されていた可能性があったという。このように細部に注目する視線と歴史を保存しようとする態度は本プロジェクトにとっても重要で、共有しなければならないものであることは間違いない。

また、折茂氏の導きにより時計塔の1号館の、ふだんは閉じられている屋上部に登ることができた。18号館が建てられる前では駒場キャンパスでもっとも高





醸成し教育していたという。そのようなエリート意識を備えた愛国的な気風のなかでの日中学生の交流の場として 101 号館を捉える必要性が示された。また、高原氏がかかわりを持っている詠帰会とコンタクトをとったり 駒場博物館に所蔵されている寮日誌

い場所だった地点からの眺望は広く開かれていた。かつて職員室や校長室も置かれていた旧制一高時代の本館の最上階には当時の学生たちも訪れていたようで、塗装の剥がれた壁面には 1948 年 8 月 30 日という具体的な日付などの雑多な落書きが見え隠れしている。残存する建築に刻み込まれた歴史を生々しく感じる 1 つの瞬間だった。

キャンパスツアーを終え、それからリサーチ・アシスタントの 3 名は、これからどのような映像作品を創ってゆくのかを具体的に構想するためにフィードバックを行った。話し合いのなかで、すでに取り壊された第一高等学校寄宿寮などを念頭におきながら日隈氏から示された「共同体 community」という語を中心に作品のテーマを考える方針に結実した。東大駒場キャンパスにおいていかなる共同体が形成されていたのかという問題について、たとえば現 900 番教室は一高時代には倫理講堂と呼ばれており、日本独自の倫理を

を調査したりするなど、一高時代の学校生活を詳細に知るための方法が提起された。年末年始には資料調査を行い、次回のワークショップでは具体的に制作スケジュールを立て、映像の構成などを設計する予定である。

また、高山花子氏 (EAA 特任助教) の発案により、本プロジェクトで制作された映像作品を何らかの映画祭に応募することになった。どの映画祭に出品するかは検討中だが、いずれにしても、高い水準の映像作品を創ろうと私たちを奮い立たせる目標の 1 つとなるだろう。

報告者: 小手川将 (EAA リサーチ・アシスタント)

写真撮影: 小手川将 (EAA リサーチ・アシスタント)

日隈脩一郎 (EAA リサーチ・アシスタント)

高山花子 (EAA 特任助教)

第11回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

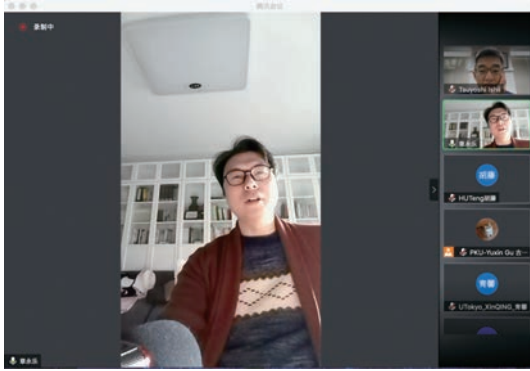
2020年12月18日

2020 年 12 月 18 日、第 11 回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講され、第 10 回に引き続き章永樂氏 (北京大学) が講師を務めた。今回も旅行記『欧遊心影録』を取り扱い、梁啓超のヨーロッパの学問、社会主義運動と東西洋文明に関する観察について講義、議論した。

第 1 次世界大戦の影響として、「科学万能主義」の破綻や、社会主義運動の勃興と東洋文明の再発見などの思潮が生まれた。梁啓超は西洋が直面していた窮境をふまえて、未来の東西洋文明の総合的発展

に対する展望を述べた。章永樂氏は事前配布の教材で「社会主義は 20 世紀最大の社会運動という梁啓超の予言は実現したと言えるのか」、そして「現在の世界において科学の位置とは何か」との問いを提示した。

章氏の示した問いを受けて、討論パートでは国家と階級との関係、「科学精神」と科学自体との違いなど幅広く議論が展開され、中国のギグエコノミー (Gig Economy) や COVID-19 対策における「科学」の位置などについても議論された。ただ同時に、梁啓超



学生諸氏と議論する章永楽氏

のみた政治・経済情勢とその論点が現在のわれわれにとってどういうヒントを与えているのか、という問題は1時間の授業のあいだ参加者の間で常に共有され

ていた問題であった。議論の終盤、インターナショナルリズムとトランスナショナルリズムとの違いから、未来の国際社会にとって必要な「普遍的な想像」(universal ideal)の可能性が言及され、ここで梁啓超や中国の知恵が必要だと章永楽氏は述べ、議論を締めくくった。

2回にわたる梁啓超をめぐる討論は、参加者たちが現在の世界情勢を念頭において、歴史と現実とが行き交うなか、人間社会や世界のあり方について思考するものであった。100年前のテキストを読んでも、現在と未来を考えることができたという意味で、多数の人が一緒にテキストを「会読」する価値をよく表した授業であった。

報告者: 胡藤 (EAAリサーチ・アシスタント)

EAA Review-03

Tadashi Yanai, *An Anthropology of Images*

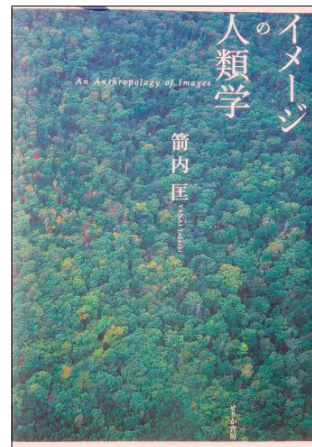
2020年12月19日

Reviewer: Hanako Takayama
(EAA Project Assistant Professor)

“To re-imagine the whole of anthropology based on the concept of images,” this is the aim of *An Anthropology of Images* by Tadashi Yanai. His basic problematics consist of thinking through the transition from culture to image and practicing not only an anthropology about images but also an anthropology by images. His writing style, floating between anthropology and philosophy, seems to be featured in order to overcome previous discussions and chaotic situations around anthropology in the 1990s. Through beginning with a rereading of Ruth Benedict’s *Patterns of Culture* (1934) and landing upon a 2010s reconsideration of modernity in the tension between sociology and anthropology, Yanai

tries to open up this discipline for the 21st century in this book. I would like to highlight two chapters to be read this time.

Chapter 3, entitled “Ethnographic Fieldwork



Book Information:
Tadashi Yanai, *An Anthropology of Images*.
Tokyo: Serika, 2018.
箭内匡『イメージの人類学』(せりか書房、2018年)

(2): An example of a turning point,” introduces the author’s own fieldwork experience among the Mapuche group in Chile from 1989 to 1992. What characterizes the Mapuche’s traditional knowledge is their specific ritual dialogues — according to Yanai, it is a highly conventional form of conversation, clearly different from ordinary conversation even though the starting point of this kind of dialogue is often ordinary gossip. Mapuche intellectuals exchange their narration based on verbal tradition one after another. Yanai points out that this activity is similar to getting information via books and yet there is : they consider the sequence of images in their minds, not the words, as speech. This case is connected to the idea of “image-thinkers,” the expression given to those who enjoy reciting and listening to Homer’s epic by Eric Havelock. Regarding these “image-thinkers,” Yanai shows an example of image-memory narrated by a Mapuche man who remembered the image of verbal tradition from a dream.

The latter part of Chapter 9, entitled “Toward the present of nature and body,” is a kind of book guide. Books referred to, including recent ethnographies, are as follows: Robert Murphy’s *The Body Si-*

lent: The Different World of the Disabled, John Hull’s *Touching the Rock: An Experience of Blindness*, Tim Ingold’s “Stop, look and listen,” Oliver Sacks’s *Seeing Voices: A Journey into the World of the Deaf* (1989), Anthony Oliver-Smith’s *The Martyred City: Death and Rebirth in the Andes* (1986), Marisol de la Caderea’s *Earth Beings: Ecologies of Practice across Andean Worlds* (2015), Penny Harvey and Hannah Knox’s *Roads: An Anthropology of Infrastructure and Expertise* (2015), Françoise Zonabend’s *La presqu’île au nucléaire* (1989), Tom Boellstorff’s *Coming of Age in Second Life: An Anthropologist Explores the Virtually Human* (2008), Stefan Helmreich’s *Alien Ocean: Anthropological Voyages in Microbial Seas* (2009), and Philippe Vannini and Jonathan Taggart’s *Off the Grid: Re-assembling domestic life* (2015). Oliver-Smith (1986) and Boellstorff (2008) in particular are suggestive under this COVID-19 situation regarding how to record virtual ethnography using the Internet. Yanai’s idea about the body developed through the concept of social body and the belief that the philosophy of images would motivate readers to see humans as environmental beings, even if, borrowing Malinowski’s words, images before language.

GSIキャラバン研究プロジェクト公開シンポジウム

Questioning the Idea of a “Small Nation” in East Asian Contexts

東アジアの文脈において「小国」概念を問い直す

2020年12月20日

2020年12月20日、公開シンポジウム“Questioning the Idea of a ‘Small Nation’ in East Asian Contexts”（「東アジアの文脈において「小国」概念を問い直す」）がオンラインで開催された。本シンポジウムでは、土屋和代氏（東京大学）による司会のもと、伊達聖伸氏（東京大学）、張政遠氏（東京大学）、スティーブ

ン・ナギ氏（国際基督教大学）がパネリストとして登壇し、傅凱儀氏（専修大学）、張彧啓氏（立命館大学）、サウリウス・ゲニューシャス氏（香港中文大学）がコメントーターを務めた。以下では本シンポジウムの概要を簡潔に紹介する。

本シンポジウムは、東京大学グローバル・スタディー

ズ・イニシアティブ（GSI）のキャラバン研究プロジェクト「小国」の経験から普遍を問いなおすの企画である。本プロジェクトは、これまでのグローバル・スタディーズは「大国」の観点から自明視し、西洋近代的な「普遍」を前提としていたのではないかという問題意識をもち、「小国」の観点から「普遍」を問いなおすことを目的としている。本プロジェクトは伊達氏を代表に、張氏、土屋氏のほか、鶴見太郎氏（東京大学）と小川浩之氏（東京大学）も参加している。今回は地域的に東アジアに焦点を当てるということで、EAAとの共同開催となった。

本シンポジウムでは伊達氏が最初に登壇し、「大國志向を持つ小国——日本における世俗的なものと宗教的なもののダイナミクス」と題した報告を行った。この報告の目的は、前近代から現代までの日本の自己認識の変遷を「小国」と「大國」の観点から大局的に描き出すと同時に、その過程で「世俗」と「宗教」の境界がいかに変化したのかを考察することであった。伊達氏によると、日本の自己認識は「小国」と「大國」の狭間を揺れ動いてきた。戦前戦後を通じて、大國化志向が主流であるなか、石橋湛山による「大日本主義の幻想」など、小國主義の立場からの批判の系譜も存在してきた。

また、「世俗」と「宗教」の境界も歴史とともに変化してきた。伊達氏が強調したのは儒教の位置づけの変化である。実際、江戸期に「三教」と言えば、神道、仏教、儒教を指したが、明治後期にはこの言葉は神道、仏教、キリスト教を指すことになった。これは、儒教が近代化とともに「世俗」に取り込まれたことを示唆している。近年の日本研究では近代日本の世俗性を「神道の世俗」（ジェイソン・ジョセフソン氏）とする見方が示されているが、伊達氏は小島毅氏や與那覇潤氏の研究に言及しながら、儒教の位置づけの変化をみると日本の近代化は「儒教化」あるいは「中国化」とも言えるという見通しを示した。

2番目に登壇した張氏は、「1949年以後の香港哲学——唐君毅、勞思光、張燦輝」と題した報告を行った。この報告の目的は、戦後の香港を代表する3人の哲学者を取り上げ、それぞれの思想は同時代の社会状況に対する実存的問題意識に支えられている事

実を示すことにあった。報告の起点となる1949年は、中華人民共和国が成立し、数多くの中国人が香港に亡命した年である。唐氏と勞氏は1949年に本土から亡命し、後の香港哲学を牽引した人物であり、1949年生まれで張氏は、香港で生まれ育った哲学者の第1世代にあたる（以下では混同を避けるため、張政遠氏に言及する場合は「登壇者の張氏」、張燦輝氏に言及する場合はたんに「張氏」と表記する）。

唐の思想を支えたのは、中国文化の伝統をいかに保持するかという問題意識である。唐氏によれば、本土で失われた中国文化は、周縁部の香港でこそ再び開花しうる。近代化と伝統の両立を目指す唐氏は、日本の近代化にモデルを見出していた。勞氏が目指したのは、伝統主義と反伝統主義の対立を克服しながら「文化哲学」を構築することである。勞氏は、客観的な「文化現象」と実存的な「文化精神」を区別したほか、西洋化の時代に中国精神を保持するには革新的な「創生」モデルではなく日本流の「模倣」モデルが相応しいと考えていた。

唐氏と勞氏の哲学が文化を焦点化したのに対して、張氏の哲学は生、死、愛、欲望に広がっており、香港に関する思想はユートピアの問題系で展開されている。登壇者の張氏が強調したのは、張氏の思想が理論だけでなく実践の射程も有していることである。実際、張氏は民主派の論客として2014年の雨傘運動にユートピアを見出したが、2019年以後の現状については香港の実存的危機として警鐘を鳴らしている。登壇者の張氏によれば、香港哲学はこのように「生きるか死ぬか、それが問題だ」という実存的問題意識に支えられてきたという。

最後に登壇したナギ氏は、「日本の香港問題、香港の未来、「中国の夢」と題した報告を行った。この報告の目的は、近年の中国による香港への積極的な介入政策が日本にもたらす影響を明らかにすることであった。ナギ氏によると、香港は多くの在留日本人や日系企業を抱え、日本と中国本土の架け橋として機能してきた。それゆえ香港情勢の不安定化は、中国との国交面だけでなく経済面でも日本に影響を及ぼす可能性がある。また、香港を逃れた在留日本人や香港人の急激な受け入れは、日本の教育や福祉を圧迫

しかねないという。

また、中国は香港の民主化運動に関する誤情報を国内で流通させて香港のイメージを低下させている。中国人観光客を減少させ、香港経済に打撃を与えるためである。ナギ氏によると、同様の情報操作の矛先が日本に向かない保証はない。近年、中国人は訪日観光客の多くを占めるが、日中関係が悪化すれば、中国は同様の情報操作を日本に関しても行い、日本の観光業に打撃を与えようとする可能性がある。香港は中国の拡張的な対外政策の最初の犠牲者、「炭鉱のカナリア」の役目を押し付けられているという見方をナギ氏は示した。

登壇者らの報告後には、フロアからコメントや質問

が寄せられた。例えば、イギリスの国際関係史を専門とする小川氏は、西洋諸国と中国の関係が悪化するなか、西洋諸国と比較的良好な関係にある香港の国際的存在感はどのように変化しているのかという質問を投げかけた。また、ロシアのユダヤ史を専門とする鶴見氏は、「ディアスポラ」の観点からは、香港人の状況はユダヤ人だけでなくパレスチナ人の状況とも比較して考えられるのではいかと指摘した。以上、2020年12月20日のシンポジウムでは、「小国」と「大国」という観点から、日本と香港の歴史、宗教、哲学、国際関係が幅広く議論された。

報告者：田中浩喜（東京大学大学院博士課程）

EAA・華東師範大学批評理論中心共催シンポジウム

歴史、社会、文学批評： 中国現代文学研究の方法及び射程

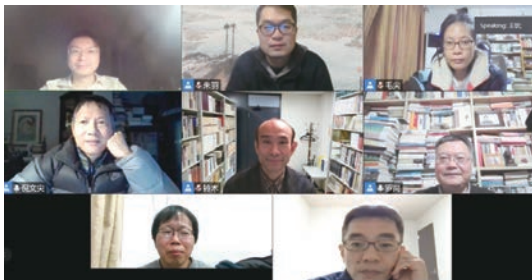
2020年12月21日

2020年12月21日、東京大学東アジア藝文書院（EAA）と華東師範大学批評理論中心（ICCT-ECNU）の共催による学術シンポジウム「歴史、社会、文学批評：中国現代文学研究の方法及び射程」が開催された。司会は報告者の王欽（EAA 特任講師）が担当した。

最初の議論はEAA副院長の石井剛氏による報告「現代「科学」観念の復古と革新——章太炎の中国医学論による啓示を兼ねて」によって始められた。章太炎の中国医学に関する議論を通じて、中国の近

代化プロセス及び難関を論じようと試みた。中国が百年の間強調してきた「科学」の精神を出発点とし、石井氏は「科学」言説の主導性の背後には、科学のレベルを上回る精神性の志向が実際に潜んでいることを指摘する。西洋医学が全面的に尊崇された20世紀初頭において、章太炎の中国医学への関心は反時代的だったかもしれない。彼は「細菌」と「疾病」の必然関係を取り消そうとし、「菌」は「草木」と同じだと理解していた。従って、彼にとって重要なのは原因としての物質ではなく、症状の具体的な変化である。章太炎の自然への観察は、彼の「斉物」哲学と密接な関係を持つ。章太炎にとって、普遍性の追求は特殊性の探求によってのみ達成されるのだと、石井氏は結論を提示した。

石井氏に続いて発言したのは鈴木将久氏（東京大学）であった。報告テーマは「現代文学における「感情」の問題」であり、史学研究における「感情史」を手がかりとし、『方方日記』などのテキストを借りて



文学の「情緒を表現する」技術を議論する。「感情を煽る」技術は敵対を生む。それは、私たちが身を置いている世界が私たちの情緒を非常に脆くさせている今、二元対立を導き出してしまいがち。従って、「情緒」の問題にどう対処するのかが非常に喫緊であるのだ。鈴木氏が述べるに、『方方日記』をめぐる現在の一連の論争は、1970年代末の「傷痕文学」の内容と問題意識とほとんど違い無い。それは「文革の傷痕」問題が依然と解決されていないことを意味する。感情と理性、個別と普遍などの対立をどう考えるかは、以上の問題を考えるための重要な手がかりであると、鈴木氏は結論を示した。

第3の報告者は朱羽氏（上海大学）であった。「文学批評は如何に「直言」するのか?」をテーマとし、現代文学の「有力/無力」を問題意識の切り口に、次のような問題を提示した。今、私たちは現代文学をどう教えるべきなのか? 朱氏によれば、文学批評はそれ自身に備わっている「直言」の機能を発揮し、「文」として文学と社会、文学と歴史の媒介者となるべきである。文学作品の形式を批評し、識別し、しっかり把握し、それをより確かな歴史文脈の中において評価する。朱氏は、今の文学批評の力は「批評できないものはない」現状にあると述べる。同時に、批評はそれ自身の歴史における方法と位置を反省すべきで、従って「この時/目下」こそが批評の真の源であり、全ての矛盾の集中点であると論じる。

続いて倪文尖氏（華東師範大学）は「テキスト及び精読の潜在的可能性と限度」を報告テーマに、たとえ文学が現実に参加する方法であるとしても、文学者が成したあらゆるものを「文学」と称することはできないと論じた。テキストの精読は新批評的な「掘字眼」（字句を細かく詮索すること）ではない。広い問題意識と全体性がなければテキストに入ることはできない。これらの指摘をした後、倪氏はいくつかの仮説を提示して見せる。1. 文学批評の核心要素としての作品。2. 作品を生んだ作者は読者より立ち位置が高い。3. たとえその表現が支離滅裂であったり、非理性的であったり、分裂していても、テキストは有機的な全体である。4. テキストの文脈に限度はない。しかしテキスト自身がテキストの第一の文脈を構成し

ている。5. テキストの内容はテキストの形式に等しい。

毛尖氏（華東師範大学）は、「現代文学における「善良」及びその結果」をテーマに、なぜ中国の昨今の映像作品に「善良な」人物が大量に登場するのかを問題意識とした。一方、中国古代文学には「美を尽くす、情を尽くす」（尽美、尽情）と「美と不善」の伝統が存在していたが、現代文学において「善良」は往々に「保守」と何らかの関係を持っている。他方、「善良」は香港や台湾文学の中では儒教文化の代名詞となっているが、1949年後の大陸文学では労働言語と革命言語が多く恋愛言語に取って代わっている。「傷痕文学」において、「善良」は再び美德として現れるも、善良な人物は同時に労働の品性を引き継いでいる。これらの結合は1980年代中期に徐々に後退してゆき、「共和国女性」が「新時代女性」が取り替えられたことが象徴的である。現在における「空虚」な「善良言語」の登場は、革命・労働・公式言語の重層的な失敗を表しているのだと、毛氏は論じた。

続いて朱康氏（華東師範大学）が「現代文学と文体批評」をテーマに報告をした。フレデリック・ジェイムソンの『政治的無意識』で論じられた文体構造と歴史の間にある関係を通じて、文体はそのものが形式として内容の表現であることを指摘する。文体の形式としての持続性は、テキストに異なる時代の要素が存在している現象をもたらす。中国文学芸術工作者第3次代表大会における周揚の発言をもとに、朱氏はそこには多様な文体の重層が含まれていると論じる。たとえその中のいくつかの文体はすでに歴史的内容を表現する力を失っているとしても、社会主義文学の内部には複数の文体が持続している。社会主義時代においては、1つの膨大な総合的文体体系を確立しようとする試みが展開され、当時の文体批評は皆文体と社会生産との間の内在関係に触れていた。同時に、この体系の中では時空感覚の違いのため、ある特定の文体すなわち社会主義生産のスピードに対応した短く迅速な文体に優先地位が与えられたのであった。

最後に、羅崗氏（華東師範大学）は「現代文学」の「極限」と「下限」をテーマに、全体的な意味のレベルから現代文学の自己拡張の限度を反省した。

羅氏は「現代文学」に関するいくつかの規定を明瞭に整理し、王暁明の論述を借りて現代文学の転向はメディア状況の変化がもたらした結果であると指摘する。一連の歴史構造によって規定される「現代文学」は新しいテクノロジー生産の条件のもとで挑戦に晒されている。目下のデジタル資本主義はあらゆる方面において深刻な変化を引き起こしており、このような変化に答えた最初の学術言説は、東浩紀の所謂「ゲー

ムのリアリズム」だったと羅氏は述べる。『繁花』、『三体』、『大国重工』、『臨高啓明』など現代中国の4つの小説を挙げ、羅氏は上述した深刻な変化に対する「現代文学」の反応方法及びその結果を議論した。

報告者：王欽(EAA特任講師)

日本語訳：張瀛子(EAAリサーチ・アシスタント)

第11回 石牟礼道子を読む会

2020年12月21日

2020年12月21日、第11回「石牟礼道子を読む会」が開かれた。今回も前回に引き続いて土本典昭監督の記録映画『水俣——患者さんとその世界』（1971年公開）の鑑賞会を101号館11号室のスクリーンに映して実施した。COVID-19対策として、2回に分けた上映会の第2弾となる今回の参加者は、宮田晃碩氏（総合文化研究科博士課程）、建部良平氏（EAAリサーチアシスタント）、そして報告者の宇野瑞木（EAA特任研究員）の3名であった。全員の希望により、今回も2時間45分の完全版を視聴した。

本読書会では、6月より『苦海浄土』3部作を読み進め議論を重ねてきたが、水俣病に関する映像作品を視聴するのは初めてである。本作は1969年のチツンに対する裁判に参加した患者家族29世帯を中心としたインタビューと株主総会の様子がメインとなっている。映像作品として水俣病を扱った本作を観ると

いう体験はどのようなものか、それが『苦海浄土』を読む体験といかに異なるのか、ということに関心があった。結論として、登場する人々や扱われた水俣病に関わる運動や出来事において、かなり小説と連動性がある作品であったと同時に、当然ながら映像ならではの部分も多くあった。白黒の映像は、光、形、動き、そして音声に対し注意を向けさせる。株主総会における白装束や黒地の旗に白抜きされた「怨」の文字、穏やかな不知火海の波間の光の揺らめき、そこに浮かぶ漁船のシルエット、その上を鳴きながら滑空する鳶、屈強な漁師の肉体、胎児性の子供の表情や特徴のある動きなどが特に印象に残った。

そして、2時間45分の間、わたしたちはほとんど言葉を発することなく、音に集中していた。インタビューされていた水俣病患者のいる家族の方言による会話や水俣病患者の途切れ途切れの独特の発話が、なかなか聞き取れないために、耳を傾ける必要があったからである。特に症状が重い胎児性水俣病患者の発話は、唸り声が混じり、途切れ途切れで殆ど聞き取れないものであった。その中でも胎児性の少年が「うみはひろいな、おおきいな」と途切れながらも歌っていた場面はとても印象に残った。その他にも、映画の中では、デモの声、株主総会での地響きのような怒号、その中で静かに響く患者家族たちが歌う御詠歌の声、そして映画の至るところで聞こえてきた不知火海の静かな波の音など、普段耳にしない実に多様な音声が





記録されていた。

見終わった後、ぼつりぼつりと感想を交わし始めた。わたしたちが共通して意外性を感じた点は、水俣病患者と家族のコミュニケーションの場面であった。胎児性水俣病の子供は殆ど発話ができないが、その代わりに、まわりの家族がたくさん言葉を補いながらコミュニケーションを成立させようとしていた。『苦海浄土』第1部の最初に登場する野球の練習をする胎児性水俣病患者と思われる少年と母親のやり取りでは、目が見えない少年が棒で石を打つぎこちない動きに対し、母親は世話を焼くのではなく、側で見守りながら饒舌に実況をするのである。小説には石と棒に集中する子供だけの世界が切り取られていたが、映像では、目が見えない胎児性の子供の世界を言葉で補い、共に創造していくようなコミュニケーションの在り方が映し出されていた。こうしたコミュニケーションの在り方は、石牟礼道子の幼少期における盲目で狂女と呼ばれた祖母「おもかさま」との関係性を思わせる、という意見もあり、石牟礼が水俣病患者の世界へどのように引き込まれていったのか、ということについて話し合った。また複数の人々が同時に会話を交わしているような場の雰囲気は、小説とは少し異なるものであった。例えば家族や患者たちの集まっている場面は、思った以上に賑いがあり、苦労や悲しみの中でも日常における笑顔や安らぎも見て取れた。これは小説という言葉による表現が、1人の視点からの語りというものから構造上逃れられない側面と関係しているように思われた。

一方で、映画と小説の表現方法における親和性というものも感じられたのは意外であった。たとえば、小説で語り手が顔を出すように、時折画面の脇に土本監督が映り混み、患者の家族にマイクを向け、相槌を打ち、質問をしたり、必要最低限のナレーションを自身の声で入れたりするのである。殆ど黒子のような振舞い方をしながらも、登場人物と会話を交わし、また地の語りをする態度は、石牟礼の小説における「わたくし」としての態度と似ており、記録映画という方法と小説との関係も考えさせられた。御詠歌の練習の場では、患者と一緒に練習に参加しながら微笑む石牟礼の姿も映っており、2人の記録者は同時進行で同じ場に居合わせて患者と関わってきたことが伺える。そこで2人が見ていた世界、見ようとした世界がどのように違うのか、そしてどのように共通しているのか、その表現形式の違いや影響関係も含めて考えてみたいと感じた。また、こうした映像による記録・表現というものを議論する中で、石牟礼がメモも取らずに佇んでいたと証言されることを思い起こしていた。たとえテープレコーダーで録音したとしても到底再現できるような世界ではないことは明らかで、これだけの出来事を水俣の風土と人々の営みも含めて言葉だけで描き切ろうとした石牟礼の凄みを再確認したのであった。

今回の上映会は、3名だけではあったが、大きなスクリーンで共に鑑賞し、議論することができて大変有り難かった。DVDを提供してくださったEAA特任助教の高山花子さんには心よりお礼申し上げたい。年明けの1月の読書会で、2回に分けた上映会の参加者たち全員で議論することになっている。そこで、さらにどのような議論が展開するか、今から大変楽しみである。

報告者：宇野瑞木 (EAA特任研究員)
写真撮影：立石はな (EAA特任研究員)

張政遠氏×石井剛氏

2020年12月22日

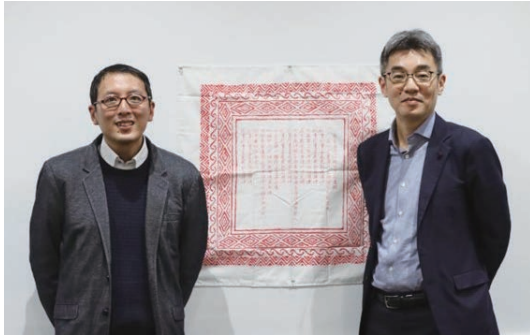
2020年12月22日、101号館11号室にて張政遠氏（総合文化研究科）と石井剛氏（EAA 副院長）のEAA ダイアログが行われた。久しぶりのEAA ダイアログであり、初めての駒場でのダイアログ開催であった。今年の5月1日に着任した張氏は、10月1日に日本に入学するまでは、香港からZoom 越しで授業等に参加していた。EAA の要である両者がはじめて時間をかけて言葉を交わす貴重な機会がようやく実現したと言えるだろう。

最初に確認されたのは、いまを遡ること12年前、2人がUTCPですでに出会っていたことである。中島隆博氏の西田幾多郎論をきっかけに、当時香港中文大学に勤めていた張氏は日本哲学をめぐる対話を求めて、駒場を訪問したという。それから、石井氏は張氏に、現在の研究に至るまでの道りを尋ねた。そして張氏の応答から明らかになったのは、実存的不安とも呼べる危機が生じるたびに、選択を決断し、紆余曲折を経て、独自の「道」の哲学を描いてきた彼の動線である。張氏は、高校までは理数系だったが、1995年に香港中文大学の哲学科に入学し、ハイデガーで卒論を書いたのち、修士課程ではマックス・シェラーの人間と人格の問題を論じた。そして、博士課程からの海外留学を検討していた際に、偶然、日本が選択肢として浮上し、当時、現象学会の事務局のあった東北大学に問い合わせをしたのち、野家啓一氏が受け入れ教員となり、2回目の修士課程で

は西田を論じ、果たして博士論文を書き上げるに至るまでの流れは、聞いていてスリングであった。ポストドク後に、最初に得た職が広東語を教える仕事であったり、講師職を得た後も、一般教養で愛の哲学や映画の哲学など、さまざまな授業を担当したりした経験が、現在の張氏の石牟礼道子を読み解く姿勢にも通じる重層的な関心の礎になっていることが解き明かされた。また、西田だけでなく、和辻哲郎や、さらには坂部恵の影響も少なくないことが石井氏とのやりとりのなかで明らかになった。

その後、石井氏が問いかけたのは、張氏が提示する「巡礼」の哲学と、香港というトポスの関係である。そして、福島への「巡礼」をはじめ、こうした忘却をめぐる主題に実地に赴いてゆく哲学の方途が、暴力的にも捉えられるいっぽうで、物語れないものにアプローチする可能性をめぐって応酬がなされた。また、文学部のなかに哲学科が位置づけられているようなファカルティ的な構造にはとどまらない意味で、文学の中に、エクリチュールの中に哲学があることが示唆されたのちに、話題は1949年創立の香港中文大学新亜書院に移り、教育のための適正な規模について、現在のEAAのあり方とともに意見交換がなされた。そこで張氏が述べたのは、EAAには1本ではない、いくつもの道から色々なものが入ってくるのではないか、ということである。それは花道ではない、泥道であるだろうが、そこにこそ野家氏の言葉を借りるならば「無根拠





からの出発」に重なる道への希望があることが確認されて、2時間超に渡るダイアログは終わった。今後、張氏がEAAで、そして駒場で、どのように道なき道を切り開いてゆくのか、注目されたい。

報告者：高山花子（EAA特任助教）
写真撮影：立石はな（EAA特任研究員）

第3回 EAAブックトーク

2020年12月22日

2020年12月22日、落ち葉の積もった冬の駒場キャンパスにて、月例の野外ブックトークが開催された。前野清太郎氏（EAA特任助教）、若澤佑典氏（EAA特任研究員）、張瀛子氏（EAAリサーチ・アシスタント）、建部良平氏（EAAリサーチ・アシスタント）の4人に加え、今回から沖縄研究・思想史を専門とする崎濱紗奈氏（EAA特任研究員）が参加し、会話の輪を広げてくれた。崎濱氏のアクティヴな応答に感謝する。トーク中に張政遠氏が通りかかって、みんなで手を振ったり、立石はな氏が熱気ある現場をファインダーに収めようと活躍してくれたり、キャンパスが「遭遇の場」であることを実感した2時間となった。大学での知的交流・協働において、偶然「バッタリ」誰かと路上で出会うことは、しばしば新たな研究の始まりにつながる。キャンパスに集まり、野外で語らう本企画は、こうした「偶然／遭遇の空間」に支えられた研究の感覚を甦らせてくれる。

12月のテーマは張瀛子氏の提題によって、「注釈／コメンタリー」とあらかじめ決まっていた。11月の第2回ブックトーク時、地域を横断して18世紀の思想を眺めた際、戴震や段玉裁など、清代考証学の人々は「注釈」という形をとって、思考を展開していった。彼らは古典に注をつけることで、自らを密かに語る。注釈者の意図や状況によって、先行テキストの文言は時に読み替えられる。さらに、場合によっては文献そのものが捏造されることもあった。注釈は個別具体的な学術作業であると同時に、「いかに考えるか／語るか」という思考そのもののスタイル、そして知を「どうやって共有するか」規定する根源的な枠組みでもある。注釈行為では、厳密さ・正確さ・誠実さといった広義の倫理性が問われる一方で、先行テキストが持つ権威とどう対峙するか・利用するかといった政治性も主題となる。また、意図的誤読やテキストの偽造に見られるように、古典テキストと注釈者の関係（パワー





バランス)も一筋縄ではいかない。知の粹組みを追っていく上で、各時代/地域/言語文化/個人に見られる注釈の理論と実践を見ていくことは、実に面白く奥深い。

上記のことを念頭に置きながら、司会担当の若澤からは『ユリイカ』2020年12月号特集「偽書の世界:ディオニュシオス文書、ヴォイニッチ写本から神代文字、椿井文書まで」を簡単に紹介した。また、注釈という形式はアイロニーやウィットを込めて、「遊ぶ」ことも可能だ。18世紀イギリスにおいて、ギリシャ・ラテンの古典世界と軽やかに格闘し、翻訳・創作活動を行ったアレクサンダー・ポープの『ダンシアッド』に言及した。当該書ではページをめくると詩の本文に加えて、パロディー化した注が、作者のポープによって付されている。注釈が潜在的に持つ転覆的な力、厳粛さの背後に隠れた創造性・遊び心を考える上で、面白い作品と言える。創造的誤読を考える際には、山内志朗『誤読の哲学——ドゥルーズ、フーコーから中世哲学へ』(青土社、2013年)も参考になりそうだ。

参加メンバーによる書籍紹介は、木下鉄矢『清代学術と言語学——古音学の思想と系譜』(勉誠出版、2016年)と村井則夫『ニーチェ——仮象の文献学』(知泉書館、2014年)の2冊を持参した建部氏から始めてもらった。後者はニーチェが「ニーチェらしいニーチェ」となる以前の文献学者としての彼へ焦点を当てた著作である。ニーチェは文献学から出発し、彼独自の哲学を展開するに至る。建部氏はこの迂遠/迂回にも映るプロセスに着目し、魯迅の知的彷徨を重ね合わせる。20世紀初頭の中国知識人たちは、文献学的な知をふまえつつも、ひたすらに「速く/急ぐ」。迂回して急ぐ、注釈することで自己確立す

る、建部氏はこうした自家撞着に着目した。注釈というどこか「古臭い」もの、現代に生きる我々の思考形態と相反するもの、としてイメージされがちだが、我々の自己省察や個に根差した思考スタイルの中にも、注釈的思考との連続性を見て取ることはできないだろうか。

続く張氏は John B. Henderson, *Scripture, Canon and Commentary*. (Princeton University Press, 2014) を紹介した。同書は儒教の経典注釈と西洋における古典注釈——ホメロス、タルムード、聖書解釈学など——を大胆に比較し「注釈すること」の背景にある人々の心性を描き出す。張氏は同書を援用しつつ、古典世界とモダンな知的空間の境界を検討した。「テキスト内部の整合性」が前提となったパラダイムを超えて、テキストがもつ矛盾を「矛盾のままに受け入れる態度」が、近代の心性なのではないかと張氏は指摘する。同じ視点から、別の議論も可能である。テキストの矛盾を受け入れる態度は、「科学的な客観性」という矛盾の包含枠を、近代世界が手に入れた帰結なのではないか、という解釈である。これを受けて、前野氏は大岡信『連詩の愉しみ』(岩波書店、1991年)とウルリッヒ・ベックほか著、松尾精文ほか訳『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』(而立書房、1997年)の2冊を紹介した。前者の紹介では、先人への注釈に内在する「自己の固有性を獲得したい」という意思、その実現に向けた戦略的な側面について触れた。後者の紹介では、ギデンズの提起する「再帰性」(reflexibility)を議論の手がかりとした。注釈行為には(注釈者の連鎖で生じる)自己参照の要素が見られつつも、自己参照の繰り返しが生む(個人を超えた)生成/創造/変化のダイナミズムがある

のではないだろうか。こうした自己注釈の営みについて、崎濱氏からは「日本らしさ」を追い求めた18世紀の薩摩藩、そしてその琉球社会とのかかわりが、ケースタディとして提起された。

ブックトークの参加メンバーは皆、分野は違えど、日々リサーチを行う研究者である。「どう注をつけるのか?」というのは、切実さを伴ったテクニカルな問題であると同時に、「なぜ書くのか/誰に向かって書いているのか?」という根本的な部分と接続している。こうした研究者の実存性をガソリンにしつつ、トークは

大いに盛り上がった。注釈性が形作る共同性が、会の終わりでフォーカスされた。これを受けて、「経済(エコノミー)と経世(けいせい)」が次回のテーマとして設定された。首都圏の感染動向を踏まえつつ、年度内での開催を準備している。

報告者:若澤佑典(EAA特任研究員)

前野清太郎(EAA特任助教)

写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

東京大学経済学部資料室 アダム・スミス文庫見学会

2020年12月22日

クリスマス間近の2020年12月22日、EAAスタッフ4名(石井剛氏、田村正資氏、伊野恭子氏、若澤佑典氏)は、本郷キャンパス内にある東京大学経済学部資料室を訪れた。野原慎司氏(経済学研究科)および小島浩之氏(経済学研究科)コーディネートのもとの、アダム・スミス文庫はじめ経済学部資料室の蔵書見学が目的である。経済学部が所蔵する史料は、ウィリアム・ホガース版画コレクションやイギリス鉄道関係資料、東アジアを中心とする古貨幣コレクション、新渡戸稲造旧蔵書など、多岐に渡っている。その広い射程は、経済史・経済思想史を専門としない者にとっても、ドキドキ・ワクワクを感じるたいへん魅力的なものだ。

本見学会の目玉である「アダム・スミス文庫」は、近代経済学の祖と呼ばれるアダム・スミス(1723年-1790年)が、生前所蔵していた書籍のコレクションを指す。晩年のスミスはおおよそ2300冊の書籍を所有していたとされるが、20世紀初頭、そのうちの約300冊が新渡戸稲造(1862年-1933年)によって購入され、東京大学経済学部へ寄贈された。これが「アダム・スミス文庫」成立の経緯である。1923年の関東大震災では、火災の中から蔵書が救出されたり、

第2次世界大戦中は焼失を防ぐため、書籍が山梨県立図書館に疎開させられたりと、文庫に携わる人々の涙ぐましい努力と燃え上がる熱意によって、コレクションが保存・継承されてきた。

スミス文庫の学術的価値は、複層的な広がりを持っている。第1に、コレクションを通じて、スミスの知的形成や思想上の影響関係が浮かび上がってくる。いったいスミスは、どんな書物を読んでいたのか。個々の書籍はいつ・どこで出版された、どのヴァージョンのものなのか。見学会では野原氏が所蔵品のなかから、トマス・ホブズの『リヴァイアサン』などを具体例に取り上げ、解説を行ってくれた。また、文庫内の書物を実際に開くと、所々に書き込みが見られる。スミス自身の書き込みが含まれている可能性もあるが、スミスの死没後、後代の所蔵者の筆によるものも多い。この書き込みを確認するため、国外から研究者が訪れることもある(一例を挙げるとスミス伝の執筆者であるニコラス・フィリップソン氏が、イギリスから東大へと調査に来ている)。野原氏によれば、筆跡鑑定の専門家による書き込みの分析も、現在準備中とのことである。

さらにスミスの死後、彼の蔵書がたどった経緯、そ



の継承・売買・移動の顛末は、広大なスケールで知の世界の変転を物語ってくれる。18世紀に花開いたスコットランド啓蒙、その担い手であったスミスゆかりの品が、ヨーロッパでも英語圏でもない日本で保存されている。これは驚くべきことであろう。東大のスミス文庫誕生には、国際協調に尽力した新渡戸稲造が携わっている。スミス自身の知的格闘や18世紀ヨーロッパの思想世界に加え、地域や国境を越えたアイデア／モノの伝播、20世紀の人々の足跡が、文庫をめぐるヒストリーから浮かび上がってくる。スミス研究や啓蒙思想史に限定されない、知のグローバル・ヒストリーに向かう視座が、文庫の学術的価値を構成する第2のポイントである。

新渡戸稲造による蔵書購入と経済学部への寄贈経緯は、有江大介氏（経済学研究科）から解説をいただいた。まず1919年7月から1920年11月にかけての、新渡戸のロンドン滞在に焦点が当てられる。当時、国際連盟事務局は（ジュネーブ本部設置までの仮措置として）ロンドンに置かれていた。国連事務次長であった彼は、その任をロンドンで果たしつつ、愛書家・集書家として、現地の古本屋巡りを楽しんでいた。その際、古書店のカatalogで発見したのが、売りに出されていたスミスの蔵書300余冊である。新渡戸は東大の同僚である山崎覚次郎に手紙を送り、蔵書購入と東京帝国大学へ1919年に新設された経済学部への寄贈意思を伝えている。有江氏によれば、新渡戸は蔵書をまとめて即決購入したが、各書籍を仔細に読みこんだ形跡は見られないという。実務家として各地を飛び回っていた新渡戸には、自分が寄贈した東大のスミス文庫を、じっくり閲覧する機会がなかったのである。スミスの「蔵書」は未読である一方、新

渡戸がスミスの「著作」に触れていたことも、有江氏から指摘があった。新渡戸はスミス死後出版された抄録版『国富論』（Select Chapters and Passages from the *Wealth of Nations*, 1905）を渡英以前に読んでいたようであり、いわゆる経済学の「理論」的関心ではなく、「植民政策」に関わる具体的・実務的マニュアルとして接していたようである。20世紀の政治経済・社会政策において、アダム・スミスは思想内容だけでなく、その存在そのものがアイコンとして用いられてきたが、新渡戸にとってのアダム・スミス／スミス文庫も、そうした地平を考える一例となるだろう。

スミス文庫に触れる第3のポイントとして、その物理的側面、「モノとしての書籍」が挙げられる。これまでの100年間、東大で蔵書がどう維持管理されてきたのか、貴重書の継承・活用をめぐる理念と実践について、小島氏より詳細な説明をいただいた。先述したように、スミス文庫は震災や戦禍といった危機に際して、書物に携わる人々の創意と機知を以って、散逸や焼失を回避してきた。終戦後は書籍の劣化に注意が向けられ、1955年から修繕事業が開始された。震災時の消火活動で水をかぶった本があったり、戦時中に行った貴重書の疎開時、運搬作業でダメージを負った本があったりと、メンテナンスの重要性が一段と高まっていた。この一大プロジェクトを担ったのが、専門技術者の服部政祐であり、彼の修復作業からは、明治以降発展・継承されてきた洋式製本技術の粋が見て取れる。またこの修繕作業でとられた「原型保持」の方針は、戦後日本における史料保存・アーカイブ運営の先駆的事例となっている。文庫は（1）文字情報の集合体＝「テキスト」であり、（2）所有や移動など文庫に関わる環境・プロセスが歴史を読



み解く「コンテキスト」となるほか、(3) 紙や糸といった「モノ」の総体でもある。この紙や糸もまた、過去と向き合う人々の理念や実践を示している。まさに、「モノは語る」のだ。

18世紀の書物をリサーチすることは、過ぎ去った世界への探検であると同時に、現在との格闘でもある。21世紀に入ると、デジタル・ヒューマニティーズの隆盛に伴い、文庫へのアクセスが新たな焦点となった。それまでの文庫運営では、貴重書の十全な「保管」を目指しており、損壊や破損のリスクを避けるため、蔵書へのアクセスは制限される傾向にあった。デジタル・アーカイヴの登場に伴って、貴重書をどう「保存」するだけでなく、いかに「公開」するかという視座も、注目されるようになる。西洋古典籍デジタル・アーカイヴのプロジェクトが立ち上がり、スミス文庫はデジタル文献学のフロンティア／実験場となった。今回の見学で遭遇した史料も、東京大学 OPAC を経由して、ウェブ上で閲覧することが可能である。スミス文庫という知的空間は、過去を扱うけれども新しい、古いも

のを突き詰めるがゆえに新しい、過去と現在が糸を成して未来を創出する場となっている。

貴重書室では史料と閲覧者の出会いから、新たな知の平面が創出されていく。スミス文庫の書物たちも、個々の研究者が探求するテーマによって、その可能性や領域を拡張・変容させていく。われわれが「スミス文庫の書物をどう活用しようか」と思いめぐらせている時、それはとても創造的な瞬間である。18世紀のスコットランドで、スミス自身が道徳哲学や法学、修辞学といった分野を織り合わせる中、経済の学という新たな知的空間を切り開いたように、我々もまた、18世紀の書物と対話する中で、新たな知のかたちを模索することになる。世界哲学やグローバルな思想史について構想する EAA スタッフにとっても、スミス文庫は研究を育む対話の場となることだろう。野原氏、小島氏、有江氏の学問的情熱に感謝する。また、本報告書の執筆に際して、経済学部資料室の年報や有江氏の講演要旨などを、多岐に渡って参照した。これらも経済学部が育んできた知的遺産である。我々がどのような平面をスミス文庫、そして経済学部の遺産と取り結べるのか、協働と検討を続けていきたい。東アジア発のリベラル・アーツ構想とアダム・スミスの世界、この2つは親和性がありそうだ。今回の訪問は EAA メンバーにとって、大きなクリスマスプレゼントとなった。

報告者：若澤佑典 (EAA 特任研究員)

第12回 UTokyo-PKU Joint Course 講義

2020年12月25日

2020年12月25日、第12回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。講師は比較出版史を専門とする前島志保氏（総合文化研究科）であった。講義では、およそ100年前に、今次のコロナと同様、世界中で流行した「スペイン風邪」について、日本の新聞や雑誌といったメディアがどのように報じたかが扱

われた。事前のビデオ教材では、当時の乳幼児死亡率の高さや、国民病といわれた結核、さらには花柳病のことが扱われ、スペイン風邪流行以前にも、日本は伝染病に見舞われた経験があったことが触れられた。

当日のレクチャーでは、メディアのありようについて



スペイン風邪流行時の東京の女性たち。

力点が置かれ、議論が展開された。天災やスキャンダル、ゴシップを伝えるものとして起った読売やかわら版から始まり、少年雑誌や女性雑誌も含めた雑誌について言及された。

講義を受けて、4、5人のグループに分かれて、ディスカッションがなされた。メディアが感染症について、何をどのようなスタイルで報じているか。そこからどのような印象を受けるか、利点や弱点はなにか。感染の記事そのものから他の情報を得ることができるか。こうした問いをめぐって、新聞、総合雑誌、そして女性雑誌について、各5分から7分程度ディスカッションが行われた。新聞については、科学的なアドバイスが目立つという意見が出た。総合雑誌については、新聞同様、科学的で、アカデミック、国際的な比較もなされているとの指摘が挙げられた。一方、女性雑誌

については、エモーショナルな記事が目立つとの意見が出された。これらの議論を受けて、前島氏は、各々の印刷媒体が、異なる目的において展開していると指摘した。

次いで、当時の雑誌にかかわることとして、読者投稿や通販記事が取り上げられた。これらの記事を通して、より広い範囲での情報収集やコミュニケーションを行う手立てが人々によって学ばれたと前島氏は述べた。このようなメディア体験は、戦間期の日本人にとってどのようなものであり、現代における示唆はなんであるか、という問いが投げかけられ、今回の講義は閉じられた。

今回扱われた時代から100年を隔てた現在、状況はどのように変化しただろうか。今回の講義で触れられたように、すでに100年前から、国際的な情報はメディアで取り扱われていたが、今日は、情報通信技術の発展によって、その気になれば一個人が地球の裏側の情報もすぐ得られる時代である。しかし問題は、人間の側が技術に合わせて変わったかどうかである。メディアの側は、技術革新と共にどんどん変わっていく。その変化の目覚ましさに陰で、意外と考えられていないのは、人間の側の態度かもしれない。コロナ禍のこれを機に、いろいろな場で考えていかなければ問題だろう。

報告者：高原智史(EAAリサーチ・アシスタント)

全学自由研究ゼミ

人文-社会科学の アカデミックフィールドを体験する

セッション6

2020年12月25日・1月8日

2020年12月25日および2020年1月8日、全学自由研究ゼミ「人文—社会科学のアカデミックフィールドを体験する」の第6セッションが開講された。今回のセッション（Week1のレクチャーとWeek2のディス

カッション）は「語り継ぐ／継承する」とのテーマで、川松あかり氏（総合文化研究科博士課程）がレクチャーを担当した。6つのアカデミックピックについての全6回のセッションからなる本授業もこのセッションで最



後である。

川松氏は福岡県の筑豊旧産炭地エリアを舞台にフィールドワークを行ってきた、総合文化研究科の「文化人類学研究室」所属の民俗学者である。Week 1のレクチャーでは、同じフィールド研究として混同されがちな文化人類学と民俗学の差異についての説明も交えながら、記憶を語り・語り継ぐこととそれに対するスタンスについて話してもらった。

川松氏がこの分野の研究に入ったきっかけは、伝えたいことを伝えられない、「しゃべれない」自分について自問自答するなかで、「自分が話をできないとは相手のことを聞くことができないということではないか」との気付きへたどり着いたことであったという。「語り」を「聞く」ことを行う学問は民俗学に限らない。古文書や書簡のような「書かれたもの」を対象とするイメージの強い歴史学においても、オーラルヒストリーやその他のアプローチのもとで「聞く」ことが行われている。

自己紹介に続いて、「語られたこと」への向き合い方として、3つのスタンスが紹介された。第1の立場は、語り手が語る言葉を、文字にされていない客観的事実として取り扱うスタンスである。古典的なオーラルヒストリーは主にこの立場に立つ。第2の立場は、語り手が語る物語を、語り手がみている（主観的な）現実としてとらえるスタンスである。これは構築主義的な言説分析がしばしばとる立場である。そして第3の立場が、川松氏が民俗学的な立場とするところの、語り手が語る出来事を受け止めようとするスタンスである。語り手から語られたことを、聞き手が「まさしくあつ

たること」として受け取る第3の立場は、一見、第2の立場と近く思える。しかしその本質は、語り手と聞き手がコミュニケーションしながら自省・自己変容をすすめることにある。

異なる語り手が語る内容はしばしば相互に食い違っている。かつて小規模経営の炭田が川筋に展開してきた筑豊エリアの暮らしは、現在さまざまに語られる。そこは近代化のための栄光の場所であり、同時に人々がただ食いつなぐために集った場所である。そこは異なる背景の人々を受け入れる共同体であり、同時に人を囲い込んで外をはねつける共同体である。そこは温かに懐かしい生活の場であり、同時に映画『万引き家族』へ例えられるような地を這う暮らしの場である。前述の3スタンスへ見られるように、矛盾した語りや表象を切り分けて1つの筋を作ることも1つの選択である。だが、川松氏は筑豊で聞いた「私たちを研究対象として喋らないでください」、「体の中を一回くぐらせてから語ってください」との言葉に応え寄り添うことに自らの学問の存在意義を見出しているという。

Week2は主観的な「心」へ着目することには危険さもあるのではないかと、とのWeek1レクチャーに対するやや挑戦的な質問からはじめられた。集団で記憶を持ち寄ることは近年の「パブリック・ヒストリー」をめぐる議論にもつながるが、同時に集合的な反知性主義を生み出す危険とも紙一重である。語られた「心」から聞く自らをつねに見つめ返す学問として、民俗学的な学問の立場に意義があるのではないかととの応答があった。

次いで、個人的な実感として聞き継いだことに共感を覚えられない、との意見から「聞く」ことをめぐる議論へと展開した。これに対しては語り手と完全に同じ意図・感情を聞き手が再現することは困難であって、むしろ「聞くこと」そのものが持つ意味と、「聞く」ことによって何かしらのリアクションを生み出す効果こそがより重要なのではないかと意見が出された。（戦争・災害といった）過ちの繰り返し防ぎ知識を超えたものがあるのではないかと、との議論も出された。

また「忘れたい」と願う人々に対して「語り継ぐ」ことの意義をいかに説くのか、とのコメントが出された。これについてはセッション5で触れたような虐殺にお



撮影：長野聡史氏

いてはしばしば語る人さえ残らず、仮に生き残る人があったとしても、その人々へ語らせることが時に暴力にすらなるとのリアクションがあった。一方で、たとえ沈黙を守ったとしても「沈黙せざるをえなかった」人々がいたことが記憶にとどめられるべきではないかともいう。関連して「語り継がなければならない」ことが不可侵のモラルとなり、「なぜ」を問わないまま「聞く」という行為を行うべきではないと指摘もなされた。

受講生・ゲストともにまだまだ語りつくさない話題もあったものの、川松氏が Week1 のレクチャーで取り上げた記憶を語り・語り継ぐことから、今後の各自の思索へと広がりがあるようなディスカッションとなった。専門を異にする者が集まり、学問領域間の「ズレ」を楽しみつつ対話することを初回より目指してきたが、

最終回のディスカッションは、まさしくそのようなものであった。

今回をもって全授業を締めくくるにあたって、講師役・ゲスト・受講生がそれぞれ簡単な感想を述べた。1 セメスターにわたる本授業は、受講生にとってはゼミ形式で自由に発言し議論をリードする経験に、博士課程・ポスドクのゲストにとっては 60 分の講義設計をする機会に、そして講師役 2 人にとっては演習形式の授業をスーパーバイザーとしての立場から見つめる経験となった。改めて各方面のみなさま方に御礼を申し上げたい。

本学は、1～2 年次の前期課程において横断的な科目を履修して学び、3～4 年次からは後期課程で各学部・専攻に応じたカリキュラムのもとに学ぶことを特色としている。受講生のみなさんが、演習（ゼミ）形式の授業において議論を整理・調整する（ファシリテーション）経験、論の飛び交う中に飛び込んでやり取りを行う経験、自身の考える意見を安全かつ自由に展開する楽しさの経験、といった本授業での「フィールド」体験を後期課程での学びに活用していつてくれることを願っている。

報告者：前野清太郎（EAA 特任助教）

中村長史（教養教育高度化機構）

EAA オンラインワークショップ

感染症——歴史と物語とのはざままで

2020年12月26日

2020 年 12 月 26 日、EAA オンラインワークショップ「感染症——歴史と物語とのはざままで」が ZOOM ウェビナーにより開催された。

中島隆博氏（EAA 院長）からの開会挨拶に続いて、野家啓一氏（東北大学名誉教授）による基調講演「コロナ時代における〈生政治〉の行方」が行われた。野家氏は作家・瀬名秀明氏の『ウイルス VS 人類』（文芸春秋、2020 年）より引用を行って、現在の状況はパンデミックとの闘いなのではなく現代社会（でいま

で隠蔽されていた問題）との闘いなのではないか、と述べる。COVID-19 は、科学的合理性を欠いた政治決断や医療におけるリスクの不正な配分などの形を通して、科学コミュニケーション、リスク社会、社会的分断といったこれまで「学問」が論じてきたテーマを可視的に私たちへ示している（例えば、科学的合理性を欠く決断をした当人は、優先的な医療資源の分配を受けリスクを低減させうる立場にある、など）。現在のこれらの状況に対し、野家氏は倫理と身体性



の回復からの再起を論じる。前者は共感 (sym-pathy) から能動的な感情移入 (em-pathy = feeling into) を發揮していく倫理への転換である。後者は、单子 (モノ) たる個がつながる「窓」として、具体的な「身体 (からだ)」を通し人々がいかにつながりを回復するかである。しかし身体による接触が目下に困難な以上、野家氏は私たちへ残された想像力の力を通した社会的結合の回復が選択肢となりうるとする。具体的には芸術がもつ社会的な回復の力、身体へつながった声を通じた働きかけ (それらはリモートでも構わない) によって結合を回復していくことを選択できるのではないか、と講演は結ばれた。

基調講演に続き、報告者 (前野清太郎、EAA 特任助教) による報告「災害「のあと」の歴史——現代台湾の地域的記憶と歴史記述」が行われた。報告では、いずれは私たちが迎えるだろう「災害のあと」をみすえ何がなされるべきかについて、前野がフィールドワークを通し探索してきた台湾での過去の「災害後」の事例を引きながら議論が展開された。1940年代以降の権威主義体制のもと、台湾における「歴史の物語」はその記述のあり方を限定されてきた。1980年代末以降の民主化の過程において、それまで非公式な「歴史の物語」として提示されてきた反体制史観がメディアに広がるようになるが、そこには体制・反体制の「ナショナルヒストリー」の衝突という側面があった。「ナショナルヒストリー」をめぐる対立に変化をもたらしたのが、2000年の震災と2008年の水災であった。災害復興の過程で広まった記憶の発掘の試みは復興を超えて各地へと拡大し「民族史」へと回収しがたい多元的な小さな地域史が各地で記述されるようになった。2010年代の後半以降、小さな地域史によって描かれた多元主義的な歴史は、「ナ



ショナルヒストリー」のレベルへと引き上げられようとしている。しかし一方で体制化した「ナショナルヒストリー」より外れた、場合によっては正しくない、倫理的でないものを含む「記憶」は那邊へよりどこをみつければよいのか。「災害のあと」をみすえ、作られるべきは「物語」よりも経験・記憶・物語の交錯する場ではないか、との指摘をして報告を締めくくった。

続く報告は高山花子氏 (EAA 特任助教) による報告「噂、あるいは終わらなき曖昧な物語——ブランショとカプフェレから COVID-19 を考える」であった。「物語」と通常訳されるフランス語「recit」を軸に、非連続的で非論証的な「信じてよいのか定まらない語り」についての議論がなされた。WHO が「神話バスターズ (mythbusters)」のページを設置していることへ代表されるように、「有害なデマ」の流布 (pandemic にともなう info-demic) への対応について議論が広がっている。一方、フランスの社会学者・カプフェレ (Jean-Noël Kapferer) の『うわさ——もつとも古いメディア』 (原著: *Rumeurs—le plus vieux media du monde*, 1987年) が議論するように、「うわさ」には真偽よりも非公式な起源にその特徴があり、松田美佐が指摘するように、社交性・関係性づくりのメディアとしての性格がある。フランスの批評家ブランショ (M. Blanchot) は『文学空間』 (原著: *L'espace littéraire*, 1955年) において言語というものがもとよりも彷徨うメディアとしての性質、目指すところに到達することができない反響を続ける空間を論じている。白黒つけられない言説が流布する中で、終わらなき曖昧な物語の運動にいかに分け入っていくかが問われている。高山氏は、曖昧な物語の運動へいかに入っていくかの姿勢、こそが必要であると結んだ。質疑では野家氏から京都学派の哲学者・高坂正顕 (高坂正堯の父)

による歴史の始まりとしての「うわさ」の議論について言及があった。すなわち真偽定かでないからこそ「うわさ」は広がりうるが、その一方で「うわさ」の振幅の広さをつなげるのが難しく、いかにそれを「歴史」へとつなげていくかの指摘がなされた、

最後に張氏からは「天災と人禍を忘れないために」と題して報告がなされた。2020年度のEAAは、「感染症」をテーマに各種の公開イベントを実施してきた。張氏はこれらのイベントを念頭に、哲学・歴史・記憶と文学・物語・忘却の2つの山のあいだに橋をかける作法をいかにすべきか、について論をすすめた。柳田國男の議論へみられるように、自己語りには、「私はこんな風に生きてきた」ことを語ることで他者から承認をえる性質、それらを通じて「歴史」を形作る相互再生産のプロセスをもつ。一方で、同じ柳田が明治三陸津波の記念碑の前に立って「恨み綿々など書いた碑文も漢語で、もはやその前に立つ人もない」（二十五箇年後『雪国の春』岡書院、1928年）、と記したように、「歴史」の記憶装置しばしば機能不全をおこす。もとより人は「忘れない」存在であり、「忘れる」ことには「思い出したくない」ものを「成仏させる・奉納する」ことによって日常へ回帰する復元装置としての性格がある。歴史の記憶装置と日常の復

元装置の間に、個人とは別の記憶復元装置が補完作用を発揮する必要もあるのではないか、とも思われる。仙台メディアテークが開く「3がつ11にちをわすれないためにセンター」(<https://recorder311.smt.jp/>)は、市民参加型で記憶を寄せるアーカイブである。これに倣って張氏による「コロナの記憶——天災と人禍を忘れないために」との公開アーカイブの試みが紹介された。このWEBサイトでは写真・記録のみにとどまらず、詩や劇本のような文学創作等までを含めて「寄せる」ことがめざされている。「共に物語る」ことを通じて個別的な体験を普遍的な経験・コミュニティの記憶へ残していくことへの希望を示し、報告は締めくくられた。

最後に石井剛（EAA 副院長）からの閉会挨拶がなされた。石井氏は「時間をかけてください、しかし、急いでそうしてください」とのデリダの一節を引きつつ、現在の状況が「ことば」をどうやって・誰に向かって語るべきであるかが厳しく問われている状況であると指摘した。そして哲学・歴史・文学の人文諸学がその役目を問われていると結び、本ワークショップが締めくくられた。

報告者：前野清太郎（EAA特任助教）

EAA Review-04

Riko Imahashi, *Japanese Bird-and-Flower Paintings: The Intersection between Natural History and Visual Culture in the Edo Period*

2020年12月28日

Reviewer: Yusuke Wakazawa
(EAA Project Research Fellow)

Since ancient times, Japanese people have cultivated an aesthetic sensitivity in their relationship to

the natural world. To portray the varied aspects of nature, diverse representations of plants and animals emerged in literature, performing arts and visual culture. Since its introduction from China, probably in the fourteenth century, “bird-and-flower



Riko Imahashi, *Japanese Bird-and-Flower Paintings: The Intersection between Natural History and Visual Culture in the Edo Period*. Tokyo: Kodansha, 2017. 今橋理子『江戸の花鳥画：博物学をめぐる文化とその表象』（東京：講談社学術文庫、2017年）

painting” (Kachōga) has been a common genre in Japanese art, depicting myriad aspects of the natural world. Yet, belying the literal meaning of its name, “bird-and-flower painting” features a broad variety of subjects including animals other than birds and plants other than flowers, as well as insects and natural landscapes. In fact, anything related to the natural world is a potential object for visual representation.

Riko Imahashi explores Japanese bird-and-flower paintings in the eighteenth and nineteenth centuries to examine the intersection between natural history and visual culture during the Edo period. In addition to professional artists, samurai (including feudal lords) sometimes became amateur artists, sketching and copying bird-and-flower paintings. In urban areas, there were also several shows featuring exotic animals such as parrots that attracted local merchants and craftsmen. This widespread presence of bird-and-flower painting acts as a clue to understand how Japanese people during this period both grasped and represented the natural world. Similar to the pioneering natural historians in eighteenth-century Britain, who depicted and collected natural drawings in an effort to understand plants and animals, these people in Japan also inquired in-

to and attempted to represent the natural world.

This synchronicity, the nearly contemporaneous rise of natural history and its aesthetic representations in two distant regions, is not entirely a coincidence. Some Japanese artists including Odano Naotake (1749-80) encountered European books and objects, which transformed their understanding and way of visual representation. Imahashi’s study of various bird-and-flower paintings reveals the existence of a wide circulation of knowledge and materials connecting Europe and Asia at the time, and that the interaction between different intellectual traditions promoted the formation of new understandings and representations of the natural world during the Edo period. Odano was one of the pioneering figures in the history of Japanese art who aimed to merge the East Asian tradition of visual arts and European thinking on natural philosophy. The visual culture of eighteenth-century Japan shows that Japanese people had some channels for intellectual exchange and intercultural experience beyond their own country, yet these encounters were indirect and mediated by objects.

There were also remarkable Japanese artists who developed their own ideas and representations of the natural world based solely on the Japanese intellectual tradition, without knowledge of European arts and learning. Itō Jakuchū (1716-1800), whose “Colorful Realms of Living Beings” is a masterpiece of Japanese bird-and-flower painting, chose roosters and hens as his favorite visual motif. Thanks to the “Colorful Realm: Japanese Bird-and-Flower Paintings by Itō Jakuchū” exhibition (2012) at the National Gallery of Art in Washington D.C., his name and works have become more well-known in the Anglophone world. His “White Cockatoo” (circa 1755) is available to the public via the online collection of Yale University’s Art Gallery.

The final part of Imahashi’s monograph focuses

on bird-and-flower painting in ukiyo-e and includes the works of Suzuki Harunobu (circa 1725-70), Kitagawa Utamaro (1753-1806) and Utagawa Hiroshige (1797-1858). This intellectual exploration shows the process through which Japanese thought on natural history was incorporated into the popular culture of the Edo period. These ukiyo-e artists carefully observed the natural world and developed their own individual ways of visual representation through interacting with other forms of knowledge and expression including botanical studies and herbal medicine (“honzō-gaku”) represented by Kaibara Ekiken (1630-1714), as well as Japanese literature and East Asian classics. For instance, Haiku poets employed animals and plants as favored motifs and sometimes added illustrations to their literary work, leading to a series of remarkable collaborations between literary expression and visual

representation through which the portrayal of animals and plants became a distinct motif in ukiyo-e.

Imahashi highlights the crucial function of visual culture in the rise of natural history during the Edo period. She details this process by focusing on the intellectual curiosity of Japanese artists who incorporated various forms of knowledge and representation to depict the natural world in distinctive ways. In reading her monograph, we are also invited to think about the rise of natural history in Europe from a comparative perspective. Her study will benefit those who are interested in the use of visual materials in their interdisciplinary approach to eighteenth and nineteenth century studies, as well as those who aim to explore any global aspect of visual culture or intellectual history. Her discussion will attract readers who may have little knowledge of Japanese art, or even Japan in general.

話す／離す／花す (6)

未来へのリンク

高山花子 (EAA特任助教)

2020年12月30日



過去のテキストのある言葉に対して未来のテキストから注釈を施すことをミナマル要件として課す——「話す／離す／花す」の使用の手引きを読んで、このリレー形式のエッセイが、単なるリレー連載ではなく、なにかしらのルールを持つ言語遊戯の性格を帯びていること、それも複数人で創り上げる共同制作の側面を有していることを、印象として受け取った人々がいるようだ。上の句と下の句を異なる人たちが次々と歌い繋げてゆくことで出来上がる連歌、複数人が互いの手を見ずにそれぞれ作った詩行あるいは絵画があとから繋がった形で表れ、1つの作品を創り出すシュルレアリスムの甘美な死骸 (le cadavre exquis)、いっそう身近な言葉遊戯としては、まえの人の言った単語の最後の文字からはじまる単語を言ってゆく word chain、

しりとりが、ルールによって言葉の繋がりを担保しながら複数人で言葉を紡ぐ例として挙げられるだろう。書くときは1人きりなのに、自分から切り離された言葉が思いがけない形で他者の言葉と繋がることを、わずかでも確かめながら、あるいは、未来へのリンクがこのテキスト上に生まれるかもしれない、と考えながら、氾濫する言葉の喧しさと、思うようにコミュニケーションの図れない隔たりの中で、思考を書き残し、パスしてゆく契機となるささやかな〈場〉になれば、と願っている。

4月以降をふりかえって、もっとも心に残っている言葉のひとつは、オンラインワークショップ「石牟礼道子と世界を漂浪く」の基調講演で、宮本久雄氏が芭蕉の『野ざらし紀行』の中の1句「山路きて何やらゆ

かしすみれ草」をめぐって述べた言葉である。氏は、宇宙のはじまりから、現在に至るまでの時間とエネルギーのすべてがあって始めてこの1本のすみれ草の命が咲いた、そのエネルギーを読み取って芭蕉は俳句にしたのだ、と述べた。事件が起こるとき、すなわち実際の出会いが起こるときに、出会った相手との対話によって生じる「事言葉」を説明するものだった。命の懸かった状況で、目の前の、離れた人の無事を切に願いながら、言葉を飲み込むことも少なくない1

年だった。まだしばらくはつづくこの混沌の中で、ともすればゼロになり、あるいは見逃されてしまう出会いと、それに伴い生まれる言葉の行き交いを、それでもなお、絶やさずにいたい。絶やさずにいるための方途をひとつひとつ、探ってゆきたい。未来へのリンクを貼ることはそのひとつであると思っている。

写真撮影：高山花子(EAA特任助教)

2020年度活動報告



冬●1月~3月

連歌の道と人倫の道

張政遠（総合文化研究科）

2021年1月4日



新年明けましておめでとうございます。前々回、前野さんが連歌を紹介しましたので、それについてリレーしようと思います。

日本では「講書始の儀」という行事がありますが、和辻哲郎（1889年-1960年）が進講者として招かれたのは1943年でした。太平洋戦争という時勢の中、和辻は西洋哲学ではなく、敢えて「心敬の連歌論について」と題して講義したのです。連歌について和辻はその本質を「個人の制作にあらずして、「連衆」すなわち団体の共同制作たること」としました。古代ギリシャの叙事詩は「長年月にわたり幾人かの吟唱詩人の手の加われるものも、二千年にわたり一人の詩人の作」であることに對し、連歌は共同制作だから「他者に対する尊敬、理解、同情、これ前句に対する態度」が求められると論じていました。例を挙げておきましょう。

霜のふるまがひに露や消えぬらん 忍誓
はま風さむしすみの江の月 心敬

前句（忍誓の歌）に「霜」という表現があり、これは寒い気候を意味します。「前句に心をくだぐべきこと」ということで、後句には「寒い浜風」が詠まれました。連歌になった時点で、2つの歌が纏まったのみならず、2人の歌人が結ばれたと言えましょう。換言すれば、連歌は単なる歌の創作ではなく、人間関係の実現です。和辻が引用した心敬の言葉は次のとおりです。

「前句と我句との間に、句の寄持、作者の粉骨はあらはれ侍るべし」
「連歌は前句をきかでは、いかばかりの玄妙の句所詮なくや」
「わが句を面白くつくるよりは、他人の句をあきらめ侍るは、はるかにいたりがたし」

連歌を作るには、自我の心を抑圧する必要があります。また人間としては、無私であることが必要です。無私とは単に自己を否定し、他方を完全に受け入れるものではありません。和辻によれば、自分を捨てることは自分の性格を否定することではなく、個性を生かす技法です。ただ「付和雷同」だけでは、よい連歌にはなりません。例えば、梅や桜という前句に花を関連付けることは「満座同心」（全員が賛同する）になりますが、無知蒙昧です。

さらに、心敬は「親句」と「疎句」について論じましたが、和辻はこう述べています。

親句とは、前句とわが句との句境互いに親縁を有し、その連絡明白なるをいう。疎句はこれに反し前句とわが句と無縁なるがごとく相離れ、句境おのおの独立せるも、その間深く心を通じ、微妙に連絡せるをいう。心敬はこの疎句を「あらぬさまに継、ぎたるもの」と呼び、これを親句よりも重んず。『ささめこと』においては両者を比較して、「親句は教、疎句は禪。親句は有相、疎句は無相。」「有相親句の歌道は無相法身疎句の歌の応用なるべし」など言えり。

ここで重要なのは、私たちが自分自身に執着し、他者との一体性を忘れてはならないということです。しかし、私たちは他者に付和し、私たち自身の性格と創造性を失うべきではありません。連歌のやり方は自己の克服であり、心無所着です。心敬が『ささめこと』の中で『論語』を引用した箇所にはこうあります。

君子周而不比、小人比而不周（君子は周して比せず、小人は比して周せず）

「連歌の道はすなわち人倫の道なり」と論じた和辻は、「わが国の芸術のきわめて特殊なる一面を闡明し

得ること」「芸術の理論に新生面を開き得ること」「人倫の道の考察に際し有力なる実証を提供し得ること」という3つの方向に新しき道を開こうとしました。

私は歌人ではありませんが、人倫の道を歩む者とし

て連歌論を吟味したいと思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

写真撮影：立石はな (EAA特任研究員)

話す／離す／花す (8)

書物との出会い方、そして離れ方

若澤佑典 (EAA特任研究員)

2021年1月5日



人の数だけ出会いと別れがあり、その形も多種多様だとするならば、私たちと書物とのかかわりにも、同じことが言えないだろうか。本文を読む前から、背表紙のタイトルをただで見てビビッときました本がある。まったく理解できず数年間放置していたのに、ある日思いがけず扉を開き、「こんな本だったんだ!」と飛び上がってしまう本もある。大学時代は愛読していたのに、最近読み返してみると「うわっ、なんだこれ」と嫌いになってしまった本もあった。インターネット以前の世界を(わずかながら)生きた身として、洋書との遭遇はとりわけ鮮烈な体験だった。(アマゾンがなかった時代) 田舎に住んでいると、そもそも英語で書かれた本を見つけることが難しかった。中学生の時、初めて買ったシャーロック・ホームズの本からは、異国の(ような)香りがした。目の前のアルファベットと香りの先に、イギリスという遠く離れた世界が感じられた。なんだかよく分からない高揚感から、浜辺で海の向こうに叫んでみたが、帰り道で「イギリスはそっちの方向じゃない」ことに気づいてなんだかガッカリした。ともあれそんなこんなで東京見物に出かけ、都会の本屋では洋書(英語だけでなく、フランス語も!)が置かれているのを発見し、腰を抜かしそうになった。上野の美術館では西洋絵画を見て感動したが、画集を買うには旅費が足りなかった。東京の大学に進学すれば、巨大な本屋と美術館に通えることが分かり、頑張って勉強した。気がつけばオッサンと呼ばれて久しい年代になったが、本に囲まれた人生を選ぶことができ安堵している。体は老化しているが、気持ちは(浜

辺で叫んでいた) 12歳の時からそんなに変わっていない。いまだに洋書が届くとウキウキするし、その表紙に触れると気持ちが高揚する。

私たちの体が「今まで食べてきた物」から出来ているように、研究者の内的世界は「これまで遭遇した書物たち」との対話経験から成っている。折に触れて思い出すのは、大学院時代にリチャード・ローティの『偶然性・アイロニー・連帯』を読んだ時のこと。もちろん錯覚ではあるのだけど、「この本は私(ような者)のために書かれたものなんじゃないか」と感じてしまうような衝撃があった。「みんなはこういう風に哲学をやれって言うけど、実は別のやり方もあるんだよ」と、誰かが私に向けて言ってほしかったメッセージが、そこに書かれているような気がした。世界のどこにもないと思っていたけれど、自分が考えていたこと、求めていたことが書かれた本が目の前にある、「存在している!」、この本があれば私は何かを諦めなくていいんだ、孤独ではないんだと思わせてくれる本だった。研究者を志す自分にとって、出発点を与えてくれた本であると同時に、「離し方／話し方」を学んだテキストにもなった。上に書いたような高揚感を伴った錯覚(?)は、テキストを読み進める中で誤解であったことに気づく。当たり前ではあるけれど、ローティが言おうとしていることと、私が言いたいことは違うのだ。こうやって落ち着いてみると、本の中に書いてあること(とりわけ真ん中のあたり)が、実のところ込み入っていてよく分からないことに気づいた。ここにいたるまでに2年ぐらいいが経っていた。テキストを理解・解釈するにせよ、

自身の論を構築するにせよ、どこかで読み手は書物から「離れ」なければいけない。以前、ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』が世間の話題になっていたけれど、こうした「書物からの離れ方」について書いた本なのかなと、(当該書を読んだことのない)私はなんとなく想像している。読んだことがないバイヤールさんの本について語るのはさておき、いつ・どうやって目の前の書物から離れるのか、その離れ方の体験が地層のように積み重なって、「書く」自分を形作っている。

思い出すままに、書物との離れ方を語ってきたわけだが、最近の私は書物との「出会い損ね」を体験してワタワタしている。何度か周囲から「読んでみなよ!」とすすめられ、本屋の棚の前で買おうかどうか迷い、レジに運ぼうと思って「やっぱり、また今度にしよう」

を繰り返した本をようやく購入した。実に8年越しのイベントで、それまでの経緯をストーリー化すれば大河ドラマ(の枠で水滴のような内容を語ること)になりそうなスケールである。その本とはバーナード・ウィリアムズ『倫理(学)と哲学の諸限界』であるのだが、ページをめくってもその全貌はおろか手掛かりすら見えず、「離れる」前に、いまだこの本とすれ違いを繰り返している。真ん中の部分を読んでいると、現時点ではうまく要約できないのだが、とにかくこの本は私にとって重要(そう)な本だということは分かった。書物と出会うためには「確信」がいる。私の手元にはすでに「信」があるのだから、当該書と出会うまであとちょっと(なのかもしれない)だ!

写真撮影:立石はな(EAA特任研究員)

第13回 UTokyo-PKU Joint Course講義

2021年1月8日

2021年1月8日、第13回「UTokyo-PKU Joint Course」が開講された。講師は経営学を専門とする清水剛氏(総合文化研究科)であった。

前回の前島氏と同様、清水氏は、第2次大戦以前、日本は様々な感染症に見舞われていたことに触れ、それが医療技術の革新等により改善されてきたと述べた。例えば結核は、BCGやストレプトマイシンにより1950年代に一気に改善され、平均寿命も伸びた

という。その後、新型コロナウイルスの流行に至るまで、人々は感染症をあまり気にせずに暮らしてきた。

コロナウイルスは、命、健康、金銭を失うリスクとなり、結果として将来の予測可能性が低下する。そうした中で、雇用者や消費者はどのような行動を取るか、取るべきかが論じられた。昨年4月頃、労働者の多くが在宅勤務となったが、政府からの雇用調整助成金もあり、正規労働者の雇用は守られた反面、非正規労働者の多くが失業したといわれる。清水氏は、第二次大戦以前の繊維産業について触れ、当時、労働者の健康に配慮せずかれらを使い潰す経営から、労働者へのケアをする方向への移行があったと指摘した。例として、鐘淵紡績と武藤山治(1867年-1934年)、倉敷紡績と大原孫三郎(1880年-1943年)が挙げられた。例えば、寄宿舎の改良や、教育プログラムの導入が行われた。産業の総合的な状況、工場法の制定についても話が及んだ。

ディスカッションでは、コロナ禍で、企業は十分手

DISCUSSION(1)

- Under the influence of COVID-19, do you think companies are actually caring about their employees enough?
 - For regular employees
 - For non-regular employees
- Do you think companies should take care of their employees, or companies do not have to take care of them?
 - For regular employees
 - For non-regular employees
- What do you think companies have to do for their employees?

厚い労働者ケアを行っているか、手厚い保護をすべきか、その必要はないか、企業はなにをすべきだと思うか、ということについて、正規労働者、非正規労働者に分けて、課題が設定された。そこで石井剛氏（EAA 副院長）から、正規労働者と非正規労働者という分け方は、海外からの学生には分かりにくいのではと指摘があり、正規労働者には保険は年金といった社会保障があるなど、清水氏が補足をした。企業ではなく、政府が支援をなすべきではとの意見に対して、ある程度は企業から出すべきと清水氏は自説を述べた。

その後、消費者の行動に話は移り、将来予測が困難になる中で、消費を控えるあるいは拡大する行動について論じられた。いずれの場合でも、詐欺を防ぐこ

とが重要とされた。詐欺を防ぐ「技術」としてデパートの正札、現金、陳列販売や、雑誌による通信販売、生協が紹介された。さらにインターネットを介した詐欺をどう防ぐかに話は及んだ。消費者による評価システムというのがインターネット上では盛んだが、機能するかが問題とされた。いずれにせよ、評判とネットワークの構築とが詐欺を防ぐために有効であろうとされた。

最終回でもあり、最後に石井氏から挨拶があった。東大と北京大とが、このようにオンラインでつながることの重要さが強調された。併せて氏は、そのつながりを今後も大事にしてほしいとの思いを述べ、講義全体を締めくくった。

報告者：高原智史（EAAリサーチ・アシスタント）

EAA連続ワークショップ

「中国近代文学の方法および射程」第1回

王璞氏講演会「団結於遠方——革命世紀和中国作家的旅行書写」

2021年1月9日

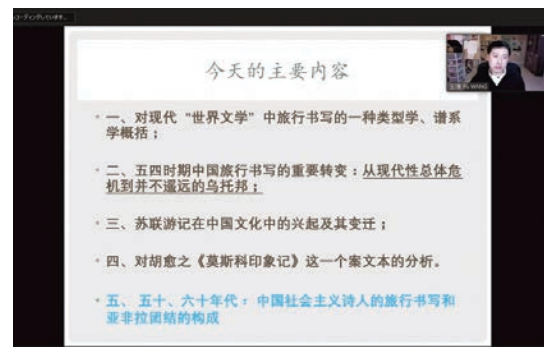
2021年1月9日、講演者として中国文学・文化を専門とする王璞氏（ブランドイース大学）を迎え、「団結於遠方——革命世紀和中国作家的旅行書写」（遠方において団結する——革命の世紀と中国作家の旅行記）とのタイトルで、EAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」の第1回オンライン講演が行われた。

講演では、旅行記の世界文学における特殊な位置を確認した上で、革命の世紀における中国作家の旅行記を通じて、20世紀の中国文学がいかに「異なった人々」、「異なった世界」を求め、ユートピアの場所を生み出し論議を展開したか、さらに「遠方において団結する」文化の政治を生み出したかを分析した。

グローバル化が危機に瀕し、コロナ禍のもと無期限の一時停止ボタンが押されている現在、旅行に何を求めるべきなのか、空間の移動をどう意味付けるのか、私達はいかにして、道の中で果てない遠方と無数の



王璞氏（ブランドイース大学中国文学文化研究専攻・准教授）



人々と結びついていくのか。文学を通じて、70名を超える参加者とともに歴史と現在について考えさせられる充実した講演となった。

報告者：王柳（東京大学大学院博士課程）

第8回「痛みの研究会」

2021年1月10日

2021年1月10日、「痛みの研究会」第8回研究会がオンラインで開催された。「痛みの研究会」は2017年に発足した研究会であり、小川公代氏（上智大学）、伊東剛史氏（東京外国語大学）、南谷奉良（報告者：日本工業大学）、田中浩喜（報告者：東京大学大学院博士課程）をコアメンバーとして活動している。本研究会の目的は、依然として人文学のなかで十分な研究量を欠いている「痛み」という対象に注目し、文学、歴史学、宗教学などの人文知を用いて多角的にアプローチすることにある。本研究会はこれまで主に西洋地域に焦点を当ててきたが、東アジアにも視座を広げることを目指しており、今回EAAと初めて共催して研究会を企画する運びとなった。

研究会は南谷を司会に、前半の合評会と後半の研究報告の2部構成で進められた。前半部では、サンダー・ギルマン『肥満男子の身体表象——アウグスティヌスからベーブ・ルースまで』（小川公代・小澤央訳、法政大学出版局、2020年）の合評会が行われた。同書の訳者には本研究会の小川氏が名を連ねていることから、本研究会で「痛み」の観点から同書を合評することとなった。後半部では、貝原伴寛氏（社会科学高等研究院（EHESS）博士課程）による研究報告が行われた。貝原氏は現在、近世フランスにおける猫の歴史をテーマに博士論文を準備しており、その成果の一部を「痛み」に関連させて報告していたこととなった。

前半の合評会では、まず小川氏が「肥満のスティグマを覆そうとするギルマンの試み」という発題を行った。その目的は、理性と非理性の対立という観点から、ギルマンの『肥満男子の身体表象』を読み返すことにあった。小川氏によると、西洋では18世紀以降、

神経医学の発達とともに理性と非理性を対立させる言説が発達し、肥満には非理性的な身体というスティグマが与えられてきた。ただし、ギルマンは肥満のスティグマの例外となる事例を多数取り上げている。実際、18世紀の医師ジョージ・チェイニー（1672年-1743年）や、「腹で思考する肥満探偵」の表象の系譜は、理性と非理性、痩身と肥満の近代的対立を相対化している。ここには、肥満のスティグマを覆そうとするギルマンの試みをみることができるといふ。

小川氏の発題に続いて、研究会メンバーから『肥満男子の身体表象』へのコメントがなされた。南谷は、肥満が、ギリシャ世界以来の〈訓練〉(askesis)を土台とした、健康で理想的な男性の身体と対照を成す形で、悪徳や醜悪さと結び付けられてきたというギルマンの指摘を取り上げた上で、肥満表象には、痩身／非肥満との対照が分ちがたく関連していることに注目した。この主題を掘り上げるため、続けて、クリント・イーストウッド監督の映画『リチャード・ジュエル』（2019年）を取り上げ、英雄や主人公というステータスが顕在している間は肥満という身体は前景化しないことを指摘し、「肥満に意味を与えることによって醜くしている」というギルマンの議論を応用した。

報告者（田中）は、痛みと肥満の表象の歴史的展開の類似性を指摘した。肥満の表象はともに近代化による医療化と世俗化を経験している。肥満の場合、前近代には神聖な靈魂の墮落の象徴とみなされたが、近代になると神聖な身体の管理不足の象徴とみなされるようになる。痛みの場合、前近代には救済をもたらすものとして積極的な宗教的意味が与えられたが、近代になると除去すべきものとして否定的な医学的意味が与えられるようになる。さらに、20世紀後半以降、

肥満と痛みの表象はともに脱医療化を経験している。医療に独占されていた痛みと肥満の表象は、医療制度批判の高まりとともに人文学にも対象化されるようになった。肥満の表象の脱医療化は、ファット・アクセプタンス運動の高まりにもみることができる。

村上克尚氏（東京大学）は、日本文学の観点から『肥満男子の身体表象』にコメントした。リアリズム的傾向の強い日本文学では戯画的な肥満表象が忌避されてきたのではないかとの見解を示したあと、村上氏は大江健三郎の『父よ、あなたはどこへ行くのか』（1968年）を取り上げた。この小説では、大江自身を思わせる肥満した主人公が、同じく肥満した父の伝記を書けず煩悶している。この肥満した父は戦時中の食糧難にあっても食欲旺盛で、周囲から狂人とみなされていた。ここには、ギルマンの示した狂気と肥満の表象上の繋がりを見ることができるといふ。村上氏はさらに、肥満した身体を志向する大江と、強靱な身体を志向する同時代人の三島由紀夫の間には、身体表象の対称性がみられることを指摘した。

後半の研究報告では、貝原氏が「痛みをもって痛みを制する——18世紀フランスの医療における薬物としての犬と猫」と題した発表を行った。この発表の目的は、薬物としての犬と猫の利用が19世紀初頭に放棄されるに至る過程を、歴史学的に解明することにあった。貝原氏によると、近代以前のフランスでは、犬や猫が薬物の材料として用いられてきた。例えば、17世紀の薬師レムリ（1645年-1715年）は、仔犬か

ら抽出したオイルが神経痛に効くと述べている。猫の場合、17世紀の医師リヴィエール（1589年-1655年）は、猫の耳にひょう疽の患部を挿し込むと痛みが取れると主張しているほか、ルイ14世時代の医師エルヴェシウス（1661年-1727年）は、生きたまま切り裂いた猫の体をあてると腹部の痛みにも効くと主張している。

しかし、犬と猫の薬物利用は19世紀以降の正統医学に批判されるようになる。実際、19世紀初頭の医学教授クロケ（1787年-1940年）は、犬と猫の薬物利用は残酷な民間療法であるとして、その効果を全面的に否定している。貝原氏によると、犬と猫の薬物利用が忌避されたことには3つの背景がある。まずは「薬学革命」である。薬学は革命を経て中央集権化され、近代的な医学と前近代的な医療の区別が強調されてゆく。次に「嗅覚革命」がある。臭いは瘴気論などと結びついて近代以降に忌避の対象になるが、犬と猫の薬物利用は臭いへの忌避感と結びついて、正統医療でも忌避されるようになった。最後に「感情革命」がある。18世紀後半以降、動物には痛覚があるという言説が広がり、犬や猫の薬物利用が「残酷な」（cruel）、「痛ましい」（pitoyable）行為として批判されるようになるという。

貝原氏の報告のコメントーターを務めたのは、動物史を専門とする伊東氏である。伊東氏は、近年の動物研究の動向に貝原氏の研究を位置づけた。伊東氏によれば、およそ1980年代以降、キース・トマスの『人間と自然界——近代イギリスにおける自然観の変遷』（1983年）など、動物を歴史叙述に組み込む研究が蓄積されてきた。しかし近年では、人間による動物表象の歴史ではなく、動物の視点からみた人間世界、あるいは動物の行為主体性に着目する研究がなされるようになってきているという。この「動物論的転回」（animal turn）は日本でも人類学などの分野で次第に注目を集めているが、歴史学ではまだ研究蓄積が少ない。それゆえ、貝原氏の研究は「動物論的転回」を踏まえた日本人による歴史研究として、大きな研究史上の意義を有していると伊東氏は指摘した。

合評会と研究報告後には、フロアとの質疑応答を通じて活発な議論が行われた。例えば、合評会後の質疑応答では伊達聖伸氏（東京大学）が、フランスで



サンダー・ギルマン『肥満男子の身体表象—アウグスティヌスからベーブ・ルースまで』小川公代・小澤央訳、法政大学出版局、2020年

は聖職者が「肥満男子」として表象されるケースが多いが他国ではどうなのか、大柄な男性の表象には近代批判（ガルガンチュアの巨人）と医療化（肥満）という2つの契機があるのではないかと、という問いを投げかけた。また、研究報告後の質疑応答では坂本葵氏（作家）が、近代以降に犬と猫の品種改良がなされるようになったことに触れながら、犬と猫の薬物利用の歴史は品種改良の歴史とどのように関連しているのかという問いを投げかけた。

南谷が冒頭の挨拶でも述べたように、2020年には国際疼痛学会（International Association for the Study of Pain）によって「痛み」の定義が41年ぶりに更新さ

れた。新定義において、1979年時の定義にあった「このような損傷を表わす言葉を使って述べられる」という文言が取り払われたのは、不快な情動経験そのものに重きを置き、苦痛を訴えることのできない患者や、人間の言語では語らない動物の痛みを取り込む目的であったが、第8回研究会ではこの「痛み」という主題の裾野の広さと個々の事象の複雑さを確認することができた。

報告者：田中浩喜（東京大学大学院博士課程）
南谷奉良（日本工業大学）

話す／離す／花す（9）

Space to Allow Change

石井剛（EAA副院長）

2021年1月12日

2018年のクリスマスのころ、わたしは奇妙な出会いの場で試されていた。いや、あれは「出会い」ではなかったのかも知れない。なぜならその後、彼との間には、少なくとも今までのところ何の関係も生じていないからだ。別れと出会いがセットになっているのだとすれば、別れるまでに関係を共にする歳月を経ている以上、それは出会いとは呼べない、若澤さんのことばを借りれば、「出会い損ね」なのであろう。

奇妙だと言ったのは、その彼がわたしに求めたのは、「君自身の哲学について話してほしい」という問いだったからだ。なんとかわたしがひねり出したのは、変化を可能にする仕組みとしての哲学を構想しなければならないという、およそ答えになっているとは思えないようなしどろもどろの答えで、彼は追い打ちをかけるように、「What kind of space can allow people to change the world without violence?」と聞いてきた。わたしはそこで「文」について、とくに「文」をある種の関係概念としてとらえることについて、どうにかこうにか話したが、とても要領を得ていたとは思えない。いまでも思い出すたびに脇の下をいくすじもの冷たい汗が

伝っていくような緊張感を覚える。

だが、いま改めて思い出してみると、わたしは彼の問いに対する自分なりの答えを探すかのように、その後の2年間を過ごしてきたらしい。そして、そのようなスペースがもしあるとしたら、それは大学しかないという思いがEAAと共に生きる中でほとんど確信にまで高まっている。そのような場として大学とそこで行われる学問はあり、そこで学問とは「文」にほかならない。そして、大学は「文」としての学問の場において、そこに集う人々に学問する人としてふるまわせている。

ところで、建築家の原広司はいう。

はじめに、閉じた空間があった——と私は発想する。この閉じた空間に孔をうがつこと、それが即ち生であり、即ち建築することである。閉じた空間は、死の空間であって、世界とのいかなる交換もなく、なにもものをも媒介しない。境界は絶対的に強く、私は偶然にもほんの瞬時、境界を破ることが許された。（原広司『空間〈機能から様相へ〉』、岩波現代文庫164頁）



はじめに何もない絶対的な開放があるのではなく、わたしたちの世界は閉じた空間によって始まっていると原は言う。つまり、外の光や風を感じ、人々と交わることを可能にしているのは、絶対的な開放ゆえではなく、空間が境界を有していることによって隔たりが存在しているからなのだ。そうするとわたしたちは、COVID-19 パンデミック下での息が詰まるような閉塞した社会との隔絶に関する理解を逆転させる必要があるのかもしれない。テレワークやオンライン授業という社交距離の確保が最優先される「新しい生活様式」の中で、わたしたちが晒されている危機は、社会からの隔絶ではなく、むしろそれとは逆の、絶対的な開放なのではないだろうか。いま社交距離確保の名目で導入されている技術は「部分なき空間、ファシズムの風景」（同書、202 ページ）と原が形容した現代の超高層建築の論理を無限に拡張しようとするものにすぎないのではないか。そうであれば、わたしたちは、こういう理不尽な生活様式を迫られているからこそ、「つながる」のではなく、「離す」ことによって、始原にある閉じた空間についても一度思い出さなければならない。そこにおいて初めて、「境界を破る」瞬間を手にするチャンスは再び訪れるだろう。

だから、わたしは敢えていま、離すことの意味をとらえ直し、そこから希望をやり直したいと考えている。つながるのではなく、敢えて境界を引き受けること（原広司も「境界は倫理である」と言う）、それは同時に高い密度を求めることでもある。わたしたちは、そうして生まれる密度のなかで変化を促すスペースを駆動させる必要があるのだ。そのようなスペースとしての大学は、シームレスな社会との関係を機能において追求する存在になるのではなく、そこから隔絶すべき境界を確保することによって、外の現実に対する〈反転〉的身振りを獲得する場であるだろう。だからこそ、大学は徹底して、ひたすら知的な場であり続けなければならない。知的な場であるということは、そこに集う者たちがよりよき知性を欲することを祝福されているということだ。

わたしの手元にはいま、『東京大学 現状と課題』、通称「東大白書」の第3号があるのだが、そのなか

で、当時の蓮實重彦総長がこのように述べている。

何かを専門的に学ぶという行動の基礎を提供するのは、専門の基礎的な「知識」ではなく、専門的に学ぶという行動へと若者を駆り立てる「知性」でなければなりません。（『東京大学 現状と課題3』、東京大学出版社、2001年、19頁）

大学における専門教育といわれる「教養教育」のちがいについて敢えてここでは触れない。しかし、大学が知的な場として〈反転〉的身振りを実践する場であるとすれば、それは、このような「知性」がそこにおいて育まれているからにはかならない。他のことばを使って言い換えれば、哲学こそが大学というスペースの使命であると言ってもよい。蓮實氏のために補足すると、「知性」へと駆り立てられるのは何も若者だけではないと氏は別のところで強調している。わたしたちは、境界の中に多くの人を招き入れるべきだろう。年齢、性別、国籍、信条のちがいがすべて許容されることはもとより言うまでもなく、あらゆる身分の人に開かれているべきだ。例えば、社会人もまた、いや、社会人こそ、大学というスペースに参画することが必要であると言ってもよい。大学と社会との協働が叫ばれている今だからこそ、大学は己の本来奉仕すべき役割を再度想起すべきであり、その役割とはまさに「知識」ではなく「知性」の涵養にはかならない。社会人であるとか学生であるとかいう社会上の身分の違いとは無関係に、そうした「知性」を求める人々にとっての歓待の場として大学があることは、そうした協働の呼び声に対する最も責任ある応答であると思う。くり返しになるが、ここで知性とは哲学にかかわる。知性を磨くことは「哲学する」ことであると、哲学という営みに人間の人間たる所以を見いだしたヤスパースならきつと言うだろう。

2021年、EAAは3年目を迎える。変化を可能にするスペースとしての大学の姿をここから示していきたいと思う。

写真撮影：立石はな (EAA特任研究員)

第4回 101号館映像制作ワークショップ

2021年1月13日

101号館映像制作WSの第4回にして新年初回が、2021年1月13日に開催された。石井剛氏（EAA 副院長）、WSのコーディネーター・高山花子氏（EAA 特任助教）をはじめ担当RAの小手川将氏（EAA リサーチ・アシスタント）、高原智史氏（EAA リサーチ・アシスタント）、そして報告者の日隈脩一郎（EAA リサーチ・アシスタント）が出席したのにくわえ、今回は近代日本思想史の枠組みの下、沖縄の主体化の問題に取り組んでいる崎濱紗奈氏（EAA 特任研究員）を新たな参加者として迎えた。

前回の駒場キャンパスツアーを受けて、本映像作品のモチーフとしてどのようなことを描けるかが、RAよりコンセプトベースで提示された。旧制一高生が抱いていたナショナリスティックなエリート主義的気質およびそれと裏返しの外排性、寮を抱えるキャンパスの共同体的性格は、どれも101号館を擁する空間を特徴付けるものだろう。

また、RAによる駒場博物館での史料調査から、具体的に映像作品にいかなる素材が盛り込めそうかということについても検討がなされた。当時の一高寄宿寮委員記録（寮日誌）には、一高生を戯画的に描いた映画『乾杯!学生諸君』（重宗務監督、1935年）が当事者である一高生の響嚙を買っていたこと、1935年開催の夏の恒例行事・対（旧制）三高戦における流血事件および同戦廃止論争、同年初開催の寮歌祭の盛況ぶりなど、学生の生活や関心をうかがえる事例

が仔細に記述されている。

くわえて、第2回WSで浮かび上がった駒場キャンパスの時代的多層性をいかに表現するかという観点から、駒場における60年代の学生運動を収めた映像や90年代のいわゆる駒場寮寮問題にまつわる映像の調査の必要性が認識された。引き続き史料調査が進められる中で新たに発見されるであろう事実を含め、素材の取捨選択や有機的連関実現の方途については今後も検討が重ねられるだろう。

以上の情報共有に対して、石井氏からは一高出身の医学者・作家の加藤周一による往時の回想録『羊の歌』（岩波書店、1968年）の記述が紹介され、映像や史料のみならず、文学作品等も参照しながら視界を拓ける必要性が示されたように思われる。崎濱氏からは、映像作家・高嶺剛氏の沖縄をテーマとした作品群が、本プロジェクトで目指されている作品のイメージとして近いのではないかという意見が寄せられた。とりわけ氏の『ウンタマギルー』（1989年）は、ドキュメンタリー的な性格と幻想性とを併せもつ作品であるとのことで、単なる資料にとどまらない映像としての強度をもった作品づくりに際して大いに参照できそうである。また、小手川氏がかねてより、アメリカの映像作家ジョナス・メカスを本プロジェクトにとってのひとつの参照軸として示していたが、メカスの影響下にドキュメンタリストとして出発したという高嶺氏の経歴は、思わぬ符合でもあった。



最後に、カメラマンの委嘱や機材の確保など、役割分担や暫定的なスケジュールの確保などプロジェクトを具体化させつつ、諸種の資料を通じてお互いのイメージの語彙をすり合わせていく必要性があるとの

認識で、改めて一致した。

報告者：日隈脩一郎(EAAリサーチ・アシスタント)

写真撮影：崎濱紗奈(EAA特任研究員)

第12回 石牟礼道子を読む会

2021年1月18日

2021年1月18日、本年最初の石牟礼道子を読む会が開催された。第12回となる今回は、昨年末にCOVID-19対策のため2回に分けて鑑賞した土本典昭監督の記録映画『水俣——患者さんとその世界』(1971年公開)をめぐって、読書会全体で議論をした。参加者は、鈴木将久氏(人文社会系研究科)、張政遠氏(総合文化研究科)、佐藤麻貴氏(ヒューマニティーズセンター)、高山花子氏(EAA特任助教)、宮田晃碩氏(総合文化研究科博士課程)、建部良平氏(EAAリサーチ・アシスタント)、そして報告者の宇野瑞木(EAA特任研究員)の7名であった。既に各鑑賞会において議論されたことがブログ報告(第10回、第11回)にて共有されており、それを踏まえた上で、各自改めて映画を思い出しながら印象的なシーンや気が付いたことなどを述べていった。

映画の前半部分では、水俣病を患いながらも、或いは水俣病患者を家族に抱えながら生活をする複数の患者家族の日常が映し出されていく。家族で食卓を囲んで話をする風景、胎児性水俣病患者が海辺や家の内外で遊ぶ様子、漁やボラ釣りの餌を作る場面など生業にかかわるシーンが中心である。その今は穏やかに見える日常の端々に、漁師の家の男たちの屈強な肉体と細く歪んでいる子供たちの肉体の差に、かつてあった活気ある生活が忍ばれ、絶望や重苦しさというものを引きずりながら日常があることの重さが感じられた。

その中でも「食」というモチーフが多かった点が議論された。重度の胎児性水俣患者の子供は話すことも聞くこともできないが、家族の食卓でともに食することで、同じ生きている存在であることを証明しており、

さらには魚・生き物の命をもらって生きる、そうした循環する世界をも感じさせるものがあったという意見があった。一方で、ボラ釣りの餌を作る場面では、味噌などのほかに動物性の豚の脂やバターを入れるシーンがあり、水生動物の餌に陸上動物の加工品を用いる点について、漁師の家々がそれぞれ工夫を凝らし競争した状況や、当時高価であったバターを入れる発想から魚への敬意や人間への近さ、さらには海の汚染の有無や里海の環境ということまで話題になった。同じ世界にいる、ということの意味を考えさせられるシーンとして議論されたのは、耳の聞こえない胎児性水俣病患者の弟が、耳の聞こえる兄と一緒にスピーカーに手を当てて音楽を楽しんでいた場面である。兄弟間のコミュニケーションを通して、不思議な共有の感覚というものが感じられ印象的であった。

また、被写体との距離感の近さや寄り添い方について議論される中で、土本監督が2004年に北京で受けたインタビューが参照された。土本氏が患者家族を撮影する際に困難を感じた点として、信頼関係を築くのが前提であるのは勿論だが、患者家族自身が水俣病について語ることを恥ずかしがったり、憚ったりする傾向があり、通常のドキュメンタリーのように主人公を決めることができなかつた点であるという。その結果、多くの人たちを差異を感じさせないように撮る方法を採らざるを得なかつた。こういった側面からは、土地独特の人間関係・社会や時代性、さらには男女観や儒教的な観念なども切り離せない要素であることが伺われた。また九州地方が中国大陸や朝鮮半島との風俗や信仰の共通性を持っている可能性についても議論が及んだ。



後半を中心とした具体的な運動に関わる映像から読み取られたのは、『苦海浄土』の外部、とりわけ「世間」や「世論」といった面であった。例えば、街頭で水俣病犠牲者の被害を訴える患者たちに対する世間の無関心さ、冷たさというものが映し出されていたのは印象的であった。「公害戦争」という言葉とともに「高度経済成長」の裏側を糾弾する患者の叫び声は、世間一般の一丸となって発展していくという希望に満ちた時代の空気と完全に乖離していた。別の場面では「苦海浄土基金」という言葉も患者の口から飛び出し、小説が齎した現実的な影響をも生々しく伝えていた。映画の中では、患者たちへの対話、衢の言説、メディアが広める言説、そして法的な言説など、様々な言説レベルの乖離、ズレ、ねじれといった問題が随所に感じ取られ、またそれが水俣病事件に限らない現代にも続く問題であることが議論された。

その他、水俣病が熊本県のみならず鹿児島県に跨って生じていた点や、広島原爆ドームでの巡礼など、外部の空間・問題とのつながりを考えさせられるシーンが目立った。

外部という点では、脳性まひなどの症状として扱われることもあったという胎児性水俣病患者について、そ

うした他の病気を抱えた子供のいる家族の在り方とかなり似通う部分があるのではないかと指摘もあった。水俣病を外文脈へと広げていく可能性と、またそうした問題に踏み込むことの難しさについても色々と考えさせられた。さらに患者の氏名（固有名詞）が複数の作品で繰り返し出てくることで、水俣病事件のなかで何名かの患者が神聖化していくような現象が起きているのではないかと、といった点も指摘された。

今回、議論を始めた時点では、映像について言葉で語る、という行為は、小説について読後に感想を述べ合うよりも記憶が言語と直結していないため案外難しいということを感じていた。しかし終えてみると、結局予定していた時間を大幅に超過した形となった。同じ映画を見ても、それぞれが抱く印象や注目点が異なっており、指摘されることで、そのシーンを思い出し、改めて新たな解釈を見出すような興味深い場となったと思う。土本監督には、その後の水俣病患者に関する映像作品も多数あるので、今後もこのような鑑賞会を実施して感想を述べ合うような場を持ちたいと感じた。

報告者：宇野瑞木（EAA特任研究員）

EAA連続ワークショップ

「中国近代文学の方法および射程」 第2回

姜涛氏講演会「“新的抒情”——何其芳『夜歌』中的“心境”与“工作”」

2021年1月20日

2021年1月20日、姜涛氏（北京大学）による講演「“新的抒情”——何其芳『夜歌』中的“心境”与“工作”」（「新たな抒情」——何其芳『夜歌』における「心境」と「仕事」）がオンラインで行われた。同講演はEAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」の第2回目に当たり、今回は50名の参加があった。

何其芳（1912年-1977年）は、繊細な表現による初期の詩作から明朗な調子をもつ延安時期の創作への変化によって知られており、その転換は「何其芳現象」とも呼ばれ、これまで議論の対象となってきた。今回取り上げる『夜歌』はその転換の過程を示す重要なテキストであり、1930年代の何の「抒情」の延長線上にあると同時に、魯迅芸術学院を含めた延安における集団的な環境の影響も見られる。

『夜歌』には、「快活」という表現が散見される。『夜歌』の自由で伸び伸びとした文体は子どもの発話のような活力を帯びており、それは当時の何其芳の思想的な「成長」と関連したものだった。初期の詩作を特徴づける「寂寞」というテーマは、ここに至って延安の共同生活の中で生み出される情熱へと変化し、更に革命同志の間で交わされる同志愛の表明へと繋がっていった。こうした明朗さや情熱は中国の新詩の系譜において全く新しいものであり、「新たな抒情

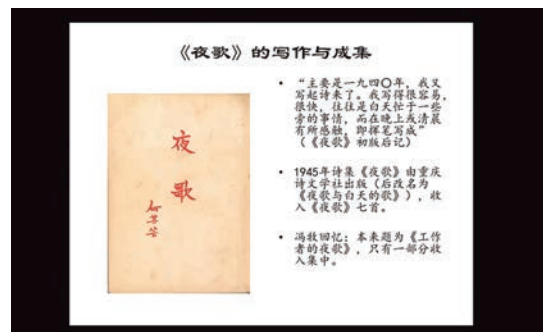
とでも呼ぶべきものである。

「抒情」は中国の新詩にとって極めて重要な用語であり、初期の新詩の理論的な起点でもあった。そこでは詩歌はある抒情主体の表現であると見做され、「抒情」は主体の内面や自我を造り上げる一方で、社会を動かす「情動」でもあると理解された。日中戦争以降も、徐遲の提唱する「抒情の放逐」に対して穆旦が「新たな抒情」を主張するなど、新詩における「抒情」の系譜が継承されていった。但し穆旦の主張は「新たな抒情」と銘打っているものの、実際には自我と自然・社会・国家とを対峙するものとして捉える二元的な「旧い抒情」の原型を留めており、また当時の延安における詩作もそうした「旧い抒情」の面影を残していた。しかし何其芳の詩作においては、そうした二元的な抒情の代わりに革命同志間の親密な人間関係が描かれており、この点は魯藜や艾青など同時代の詩人とは異なる何其芳独特の「新たな抒情」であったと言える。

このような「新たな抒情」の傾向は、何が自身の「心境」を整理した結果でもあった。何が後に『夜歌』の標題を『夜歌と昼間の歌』と改名したことに明らかのように、当時の何は夜と昼、新たな自我と古い自我、寂寞と情熱、個人と集団、仕事と文学といった「心境」上の数々の矛盾を抱えており、『夜歌』にはそうした



姜涛氏
（北京大学中文系准教授）



相反する「心境」の襞が書き込まれていた。そして当時の知識人の思想上の動揺や矛盾が描かれた『夜歌』のテキストは、延安の革命従事者に自身の「心境」を整理するべく促すことで、彼らの日常的な「仕事」や生活において意義を獲得していった。

革命に従事する「仕事」と詩人という身分との矛盾もまた、当時の何其芳が抱えていた矛盾の1つである。魯迅芸術学院で働いていた何は、弁の立つ優れた教師というよりも、とにかく「仕事」熱心な人間として人々に記憶されていたようである。そして『夜歌』で描かれる数々のもまた、そうした「仕事」の現場で起こった出来事に他ならない。その意味においては、実際の「仕事」は文芸創作に対立するものというより、寧ろ何の創作を刺激する存在であったと言える。『夜歌』で示された「新たな抒情」は、そうした「新た

な仕事」の倫理において次第に広がっていったのである。

「新たな抒情」というキーワードに導かれつつ、何其芳の延安時期のテキストがもつ独自性に焦点を当てた本講演の内容は、以上のように多岐にわたるものであった。講演後に設けられた質疑応答の時間では、王徳威・陳国球による「抒情」論や伝統中国における「情」との関連性、国統区の「抒情」と解放区の「抒情」の差異、更には近年研究上の流行となっている「社会史的視野」の議論との接続性など、さまざまな問いかけがオーディエンスから提出され、講演は盛況のうちに幕を閉じた。

報告: 田中雄大(東京大学大学院博士課程)

話す／離す／花す (10)

弔う、別れる、集う

田中有紀(東洋文化研究所)

2021年1月26日

7月頃だっただろうか、週に1、2回、私も職場に通勤することになった。

私は4月から、東大本郷キャンパスにある東洋文化研究所に勤務しているが、コロナのこともあり、地下鉄を使わずなるべく自転車で通っている。

本駒込から本郷の間には多くの寺院があり、そこから漂うお線香や花の匂いが昔から好きだった。今はマスクをして自転車に乗っているから、匂いはほとんど感じ取れない。また、この期間、寺院を訪れる人もあまりいないのだろう。だいたいいつも静かであった。

ある日、寺院に併設されている小さい祭儀場で、葬儀が行われているのに気がついた。亡くなった方のお名前を看板で確認し、ご冥福をお祈りした後、不謹慎極まりないが、私は何だか生き生きとした気持ちの底から湧き上がってくるのを感じた。「もうお葬式を行っても良くなったのだな。この方は、最期を弔ってもらえるのだな」と考えながら、しばらく葬儀が始まる前の様

子を見ていたのである。

感染拡大初期の頃、確か葬儀でクラスターが発生したとかで、昨年は葬儀や法事を控える人が多かったと聞く。かくいう私も、父を亡くし、昨年は一周忌であったが、緊急事態宣言中だったため何も行えなかった。

その時は、「それでいい」「仕方ない」と思っていたが、後になって、だんだんと、小さなストレスが溜まり続けてきたのに気がつく。お墓参りにも行っておらず、父は今どう思っているだろうか、何を考えながら眠っているのだろうか。やっぱり「それでは良くなかった」のかもしれない。

「それでは良くなかった」ことでもう1つ引きずっているのが、卒業式である。私は前任校を昨年3月で退職しているが、受け持っていたゼミ生の卒業式は中止となった。その時は「それでいい」「仕方ない」と思い、できる限りの手段を使って、彼らにお祝いの言葉をかけた。しかしその後、たった半年で、思いもしない悲しい



ことが起こった。私はあの時、無理矢理にでも学生たち全員と、最後に会っておけばよかったと、とても後悔することになる。私には人を変えるような力はないと自覚しているが、それでも会って、卒業式という1つの節目に、何か一言残しておけば、彼らが困難にぶつかった時、数多くの言葉の中で、ふっと浮かび上がり、救えるということもあったのではないか。

中止になったものは他にもある。私自身の送別会だ。「こんな時期にやってくれなくて構わない」とその時は本当に思ったけれど、これから先、何か後悔する時が来るかもしれない。あの時、無理矢理にでも集っておけばよかったと考えるようになるかもしれない。

コロナ禍で「省略」されたもの、「不要不急」と判断されたものの中で、儀礼的なものはとても多い。お葬式、卒業式、送別会など、重要であるはずなのに、重要ではない。私はこのジレンマに、1年間悩み続けたといっても良い。

寺院での葬儀を見てほっとしたのは、私の中にある、儀礼を省略したことによって未だ消化しきれていない「別れ」の悲しみを、癒してくれるようなきっかけを見出せたからなのかもしれない。

私はオンライン推奨派である。職場の会議もオンラインとなり、オンラインで出来ないことはほとんどないと思う。また、みんなで協力して何かを進めるというよりは、1人で黙々と作業するのが好きなタイプだ。

しかし、オンライン環境で唯一完遂できないのは、儀礼的なものである。オンライン会議では礼の要素がほとんど失われた。また、私のような「黙々」タイプにとって、ある意味強制的に設けられた儀礼の場は、人と集い、生き生きとした関係を自分の中にチャージして、また明日へと向かっていくための欠かせない場であった。それゆえ、私は敢えて日常の中に儀礼の場を作ろうとしてきた。

儀礼の効用は、その場ではすぐにわからない。しかし、ある程度人生を過ごしてくると、その儀礼の意味が後々よくわかっていくことがある。儀礼の意味は、色々あるのだと思うが、私にとっては「集う」ことが何より重要

な要素だ。あの時、あの場で、あの人に会っておいて良かったと思えることが多々ある。その時はわからない、しかし後になって、何か心に響いてくるものがある。儀礼もある意味、未来への注釈と言えよう。

「集う」ことが何より重要と言ったが、儀礼を行うには、ある程度の「型」が必要だ。「型」がなければ、人は集えない。孔子は「礼楽といっても玉帛や鐘鼓のことをいうのだろうか」といい、礼楽の精神性を重んじた。しかし南宋の朱熹は、当時の知識人について、礼楽の精神性を追求するばかりで「鐘や太鼓の基本的な技術すら理解していない」と嘆いた。古代の思想家である荀子は、礼の根本にあるのは、人々の欲望であるといっている。人間が、綺麗な衣装や美しい音楽、美味しい食べ物好み、これらを欲して人々が集うからこそ、礼は成立するのである。つまり、礼楽には、人々の欲望に根ざした「型」が必要だ。コロナ禍はこのような「型」を持つ儀礼を根本から軽視し、失わせようとする。

私は儀礼の中でも音楽、音楽の中でも音律という、「型」そのものの研究をしている。この企画で儀礼のことを書こうと思った以上、お正月期間、終始、本やパソコンに向かい仕事しているのでは説得力がない。

感染拡大の年末年始。初めて実家に帰らず、自力で過ごしたお正月であった。「自力で」といったのは、恥ずかしながら、私は1人でお節を作ったこともなく、門松やしめ縄を自分で買ったりしたこともない。お屠蘇の作り方も分からなかった。一通り準備してみた後に、そもそも重箱がないこと、お屠蘇を入れる器もないことに気がついた。

「型」を完璧にするのはなかなか困難なようだ。しかし、まずは「型」を、と思うその心を、小さな家の中で実践していくことこそが、コロナ禍に抵抗し、儀礼を取り戻すためのきっかけなのだ自分に言い聞かせることにした。タッパーに詰めたお節も、徳利に入れたお屠蘇も、朱熹からは文句を言われるかもしれないが、孔子ならきっと、許してくれるかもしれない。

写真撮影：立石はな(EAA特任研究員)

「中国近代文学の方法および射程」 第3回

倪文尖氏講演会「風格・文気・体式——如何着手研読散文」

2021年1月29日

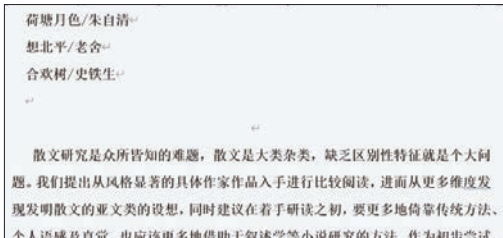
2021年1月29日、EAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」の第3回目として、倪文尖氏（華東師範大学）による講演「風格・文気・体式——如何着手研読散文」（風格・文気・体式——如何に散文を読むのか）がオンラインで行われた。今回は70名の参加があった。

講演では散文研究に対する新たな方法の提起がなされた。それは顕著な「風格」を持つ具体的な作家の作品を手掛かりに比較・読解し、散文のサブジャンルというべきものを多角的な角度から見出すという方法である。それにはさらにテキストの形式を通じ、テ

クストの思想内容、及びそこに隠されている作者の独特な経験を読み取ることが要求される。そのために散文研究の最初の段階においては、伝統的な方法、つまり個人の語感や直感を重視すべきであり、ナラトロジーなど小説研究の方法を使用すべきであるという。

倪文尖氏は張愛玲「公寓生活記趣」、余秋雨「道士塔」、郁達夫「故都の秋」、老舍「想北平」、史鉄生「合歡樹」という5つのテキストを対象に、繊細な分析と比較を行い、新たな散文研究の方法を実際に提示してみせた。散文研究の困難さは現在よく知られているところであるが、この新たな方法は、散文研究の新たな道を開きつつ、私たちが読解や習作を行う中で新たな思考を生み出す導きとなるものであろう。講演は盛況のうちに幕を閉じ、全3回の連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」も無事に終了した。

報告者：冉念周（一橋大学大学院博士課程）



第13回 石牟礼道子を読む会

2021年2月1日

2021年2月1日、第13回「石牟礼道子を読む会」が開催された。張政遠氏（総合文化研究科）、佐藤麻貴氏（ヒューマニティーズセンター）、宇野瑞木氏（EAA 特任研究員）、宮田晃碩氏（総合文化研究科博士課程）、建部良平氏（EAA リサーチ・アシスタント）、それから報告者の高山花子（EAA 特任助教）の6名が参加した。

今回から、当初、『苦海浄土』第4部として構想されていた『流民の都』（1973年）の読解に入った。

これは、主に1970年に各種媒体に発表された40本の短いテキストが収録された3部からなる本である。

発表担当者は宮田氏で、主に取り上げられた収録テキストは、「海から来る客人」（初出1970年）、「流民の都1」（初出1972年）、「流民の都2」（初出1971年）、「流民の都3」（初出1972年）、「自分を焚く」（初出1971年）である。サブテキストとしては、石牟礼道子・藤原新也『なみだふるはな』（河出書房新社、2012年）が選ばれた。

まず確認されたのは、土本典昭監督の記録映画『水俣——患者さんとその世界』（1971年公開）に関する記述である。映画に現れる胎児性水俣病患者の上村智子の一家の食卓のシーンや、ボラ漁のための餌作り、資金節約のために古典音楽が使われた経緯が記されており、また、土本監督が「人々の大群像」を映像にしようとしていたその意図を石牟礼が汲もうしていた様子が確認された。次に、宮田氏は、完成までにもっとも時間を要した『苦海浄土』第2部が雑誌『辺境』に連載されていた際に、『流民の都』が、「すでに書き終わっている第4部」と書かれていた点を振り返った。『流民の都』に収録されている「自分を焚く」が雑誌『展望』に第2部執筆と重なる時期に掲載されていたことも確認した上で、1970年代後半から2000年代にかけて、石牟礼が『流民の都』に自己言及している箇所をピックアップし、2001年度に朝日賞を受賞した際には、『苦海浄土』3部作の後には患者について書き継がなければならない、と述べていたことから、『流民の都』が第4部とはみなされなくなった流れが浮かび上がった。東日本大震災後の藤原新也との対談でも、石牟礼が「まだ命があって、第4部を書くなれば、胎児性患者の方々の現在を書きたいと思います」と言っていることから、『流民の都』ではない別の書物の構想が彼女の中にはあったのである。とはいえ、『流民の都』自体にも、胎児性の患者たちについての記述があり、また特徴として、長崎や新潟、朝鮮など、水俣以外の場所が描かれる点があると明らかにした上で、最後に宮田氏が指摘したのは、夢みられる「まぼろし」としての「みやこ」が、帰るべき故郷を喪失した人々にとっては、辿り着くべき場所としても存在しえず、人々が永遠に流浪せざるを得なくなった状況と重なっていることだった。

議論では、この「流民」がどのような人たちであり、この「都」が単なる東京のような都市名に帰着するものではないのではないか、という点について、時間をかけて意見交換がなされた。帰る場所があるという考えそのものが共同幻想にすぎないのではないか、「流民」が現代の難民にも重なり、東京という「みやこ」



石牟礼道子『流民の都』
（大和書房、1973年）
扉絵

が「港」でもあるのではないかと、といった問いかけがなされた。また、断片的に思われるテキスト群ではあるが、時代を遡る形で時系列になっているのではないかと、という指摘もなされた。また1960年代の東京への地方からの人口移入といった、「流民」という語の選ばれた時代的背景も勘案する必要性が指摘された。

宮田氏の報告でとくに印象に残ったことのひとつは、対談で藤原新也が述べた、人間の命が「悪の鎌^{やすり}」によって研ぎ澄まされてゆく、という考えと石牟礼が共鳴する部分をもっていたことである。もうひとつは、『流民の都』には、『苦海浄土』第3部『天の魚』のはじめに書かれている「序詞」が変奏された形で2度挿入されているが、その「序詞」には「生類のみやこはいずくなりや／（…）／生類の邑はすでになし」という章句があると指摘されたことである。このことで、今回の終盤でも議論の俎上に載せられた、孤独や共同体をめぐる石牟礼の模索に対して、決して美しい場であるとはかぎらず、むしろ禍々しい空虚ささえも含みもつような「みやこ」という言葉から近づいてゆくきっかけが与えられたように思う。引き続き、石牟礼自身の思い描いていた「もうひとつのこの世」に迫ることも念頭に、テキストを読み、思考したい。

報告：高山花子（EAA特任助教）

第5回 101号館映像制作ワークショップ

2021年2月5日

去る2021年2月5日、第5回101号館映像制作ワークショップが行われた。COVID-19の感染拡大の状況に鑑みてWeb会議サービス「Zoom」を使用したオンラインでの実施となった。石井剛氏（EAA 副院長）と高山花子氏（EAA 特任助教）、一高プロジェクト担当のリサーチ・アシスタント3名——高原智史氏、日隈脩一郎氏、報告者・小手川将に加えて、折茂克哉氏（東京大学）、星野太氏（早稲田大学）、田村隆氏（東京大学）、崎濱紗奈氏（EAA 特任研究員）がアドバイザーとして参加した。

最初に田村氏から、「一高」を主題にして映像作品を制作するに際して2つの軸を立てることができるのではないか、という提言がなされた。ひとつには官立東京英語学校にまで遡ることのできる組織の沿革があり、もうひとつには駒場というトポスに折り重なるさまざまな時代の面影があり、それら両軸をおさえることが重要である、と。

第3回ワークショップにおいてわれわれも確認した駒場キャンパスに遺る農学部時代や一高時代の名残

のほか、田村氏は駒場の植生についても触れ、特高館（現101号館）が建てられたころには梅や金木犀、メタセコイヤが生えていなかったことが当時の写真とともに示された。また、第2回ワークショップでの星野氏の発言に応えるかたちで、駒場の「物理倉庫」について言及されている記事を紹介した。

田村氏の発表はかくして、駒場という場に降り積もり、経験的には容易に判別しがたいほどに混合した歴史の層を実証史的な側面から腑分けしてみせ、同じ空間に流れる質の異なる時間を認識するための視座を与えてくれた。

一高が駒場に移るまでの前史を考慮に入れること、同時に、駒場キャンパスと周辺の地域性との関係に注意を払うこと。田村氏の示した思考の軸線は、われわれが理解しようとしている30年代の一高生の実態を推し量るためにきわめて重要だと思われた。というのも、寮日誌などの資料を読んでも駒場移転後の一高生は少なからず周辺地域の人々から顰蹙を買っており、しかしながら他方で、くだんの「一高文化」は



二つの軸線

1. 教養学部史・一高史（「前身」に着目）
 官立東京英語学校（明7）→東京大学予備門（明10）→
 一中（明19）→一高（明27）→教養学部（昭24）
 一ツ橋・本郷（明22）の一高史（明19～昭10）を含む。
 昭和10年に農学部とキャンパスを交換。「新向陵」へ。
 狩野亨吉研究=本郷時代の一高（校長在任：明31～39）
 清国留学生受入（明32～）
2. 「駒場」というトポス（駒場史）
 【一高の面影】（昭10）
 教養学部前期課程・人事・建物・正門位置・寮・マンホール
 【農学部の面影】駒場農学校（明11）
 キャンパス計画・マンホール・農場・ハチ公
 【江戸・明治初期の面影】
 武蔵野の緑・鶯狩・練兵場

石井氏や折茂氏によれば本郷時代にはむしろ歓迎されていたようだからである。移転後の不和を示す物証として、たとえば渋谷の住民と一高生の折り合いが悪いと書かれた新聞記事や第4回ワークショップでも触れた映画『乾杯!学生諸君』などがあるのだが、重んずるべきは、それらを当の一高生が寮日誌内で取りあげてかなり激しく反発している点であろう。このとき彼らのアイデンティティに何らかの危機が生じていたのではないか？

一高生としての矜持に駒場というトポスはどれほどの影響を及ぼしたのだろうか。この問題を考えるためのヒントは、たとえば本郷時代から受け継がれた生徒による寮の自治制度と皆寄宿制度に探ることができるかもしれない。キャンパスという仕切られた土地に根差した「一高生」という同質性への執心と、その裏面である排外性。この意識はそのまま当時の中国人留学生にも向けられていた。1936年11月に行われた棣華会（留学生と日本本科生との親睦融和を目的とした会）秋季大会の議事録には留学生は「一高化」しなければならないという旨の発言が散見されるし、同年、特設高等科を通学制にすることに対して学内では強く反対の声が上がっていた（ところで「棣華」とは庭梅、つまりウメの花のことである）。一高史にあって「籠城主義」と称される精神がどのように駒場に受け継がれたのか——この関心は、かつて駒場キャンパスにおいて特高館が有していた印象を問うことにつながるだろう。

史料調査などを通じて得た知見をもとにしてリサーチ・アシスタントが上記のように発言すると、石井氏

や折茂氏から、その頃と同じような帰属意識や排他性がいまの東大にも見られるかもしれないと切り返される。現在の留学生やPEAK生の置かれている環境と、どこか構造的に似てはいないだろうか。かつての入寮式と「オリ合宿」とは一脈相通ずるところがないか。「一高生」を回顧する「われわれ」の意識の裡にも鋭く反省のまなざしを向けなければならない、そのような当然持つべきはずの態度をあらためて思い出させる意見である。

また、星野氏が、十数年前、詩人の吉増剛造氏とともに駒場周辺を歩いた思い出を語った。1977年から数年間、井の頭線沿線に住んでいた吉増氏がかつての記憶を滔々と話すのを聞いて、同じ空間を共有していながらも語りのなかで時間のずれが浮き彫りになっていく奇妙な経験をした、と。ナラティブと映像の乖離。そうした手法が使えるかもしれないというアドバイスだった。つまり、声とイメージの二重性によって駒場を特異な多重露光の時空間に変えることだろうか、と思い巡らしながら報告者である私はマルグリッド・デュラスの映像作品を想起し、また、いまは閉鎖されている駒場キャンパスの地下通路のことを考えつつ、一高生が、ひいてはさまざまな時代の「駒場生」が日常的に歩いていた駒場の地形を辿りなおす必要があるだろうと思い至る。アドバイザーを交えることで、さまざまな思考の機会を与えられる刺激的なワークショップとなった。

報告者：小手川将(EAAリサーチ・アシスタント)

朱子学の過去と未来

2020年2月6日

2021年2月6日、国際シンポジウム「朱子学の過去と未来」が開催された。本シンポジウムは、日中韓オンライン朱子学読書会のメンバーを中心に、前近代東アジアにおいて一定程度の普遍性を有していた朱子学をとりあげ、最新の研究をもとに、過去においてどのような役割を果たしていたか、さらには現在、未来の東アジアにおいて何らかの役割を果たしうののかを検討するものである。

本シンポジウムは石井剛氏（EAA 副院長）の挨拶より始まった。30代、40代を中心とする新世代の朱子学研究者が議論する場として、本読書会及び本シンポジウムは大変貴重である。今回この場で検討される、朱子学を新しく解釈し発展させようとする試みは、これまでに存在してきた近代化の文脈で朱子学を捉える研究とはまた別のものであり、良いところは引き継ぎつつ、いま新境地を開き再び人々の心を動かす時期も来ている。コロナ禍でオンラインに頼らざるを得ず交流を始めたということも歴史上なかったことである。対面での交流が可能になった暁には、東アジア各地のいずれかで直接交流することを期待する、と述べた。続いて、司会の趙金剛氏（清華大学）より、本シンポジウムの各発表について簡単な紹介があった。

最初の報告者は唐文明氏（清華大学）である（題目「氣化、形化、徳化」）。報告では、『周易』『太

極図説』『通書』や、朱熹『太極解義』を用いて、太極図を新しく解釈し直した。太極図における1番目の円は太極本体を、2番目の円は「氣化」を、3番目の円は「形化」を表現し、4番目の円は人間社会の「徳化」、5番目の円は万物の「徳化」、宇宙の「徳化」を表している。報告者は普段、朱熹の解釈を通して太極図を理解するのみだったが、「氣化」「形化」「徳化」の概念で解釈してみると、より体系的に中国古代思想の中の宇宙観を理解できる可能性があるだろう。

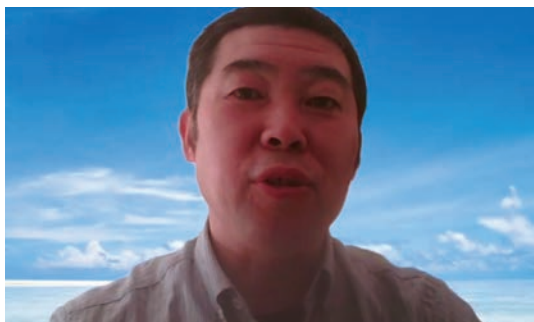
中嶋諒氏（明海大学）（題目「朱熹、陳亮及葉適——三者の歴史観の差異」）は、陳亮と葉適がともに事功学派に属しながらも異なる歴史認識を持っていることを明らかにした。いつの時代にも道は失われることなく、漢唐の統治者にも内在していると考えた陳亮に対し、朱熹は理論上、道が継承されていく可能性は否定しないが、現実を見れば漢唐は道統を継承していないと考えた。葉適はむしろ朱熹の考え方に近い。そのため葉適は漢唐の統治者に対し、己の栄華富貴のために戦争を行った点で桀紂と区別はないと厳しい評価を与えるが、金を打ち負かすという短期的目標のためには十分参照する価値はあると考えた。現代社会もまた道を失った時代だとすれば、我々はどの時代を模範とすればよいのか、南宋の思想家の歴史



石井剛氏（EAA 副院長）



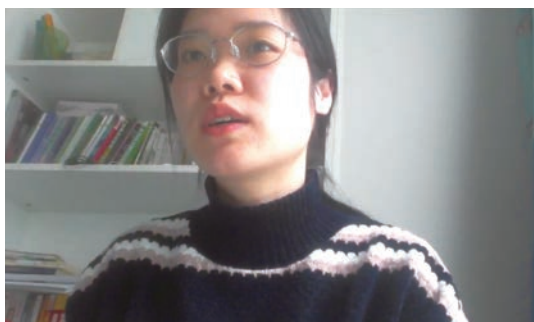
趙金剛氏（清華大学）



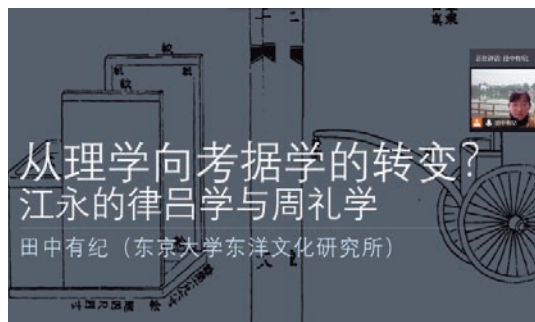
唐文明氏（清華大学）



中嶋諒氏（明海大学）



廖娟氏（南開大学）



報告者（田中）による報告スライド

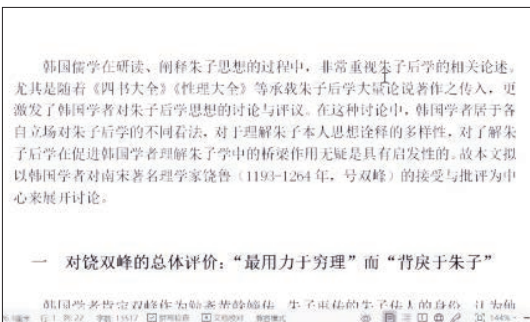
観の中にそのヒントがあるのかもしれない。

廖娟氏（南開大学）（題目「日本における經典辨偽——大田錦城の方法と立場」）は、儒学の歴史において經典辨偽は度々大きな文化思潮を形成してきた、という。経の権威が確立していた中国と異なり、科挙など外在的制度の保証がない日本において、儒者たちはいかにして経に向き合ったのか、そして知識と道に対してどのような関心を抱いたのか。報告では大田錦城の『尚書』『詩経』『大学』などに対する辨偽の実践を分析した。彼の経に対する考証の目的は経と経の知識そのものにあり、この点において朱子学者や考証学者たちとの差はない。経のテキストは道と知識を求める人々に普遍的な思惟空間を提供するのだ。社会状況が大きく異なる東アジアの思想家たちが、正しい道や知識とは何かを模索する際、経というテキストの分析を通じた共通する思想空間を形成していたという指摘は、報告者にとって大変興味深かった。

田中有紀（東京大学）の報告（題目「朱子学から考証学への転換?——江永の律呂学と周礼学」）にお

いても、経は重要な意味を持つ。清の江永は、三分損益律から十二平均律を支持するに至り、あるいは『周礼』考工記の注釈において鄭注を重視したが、これらの事実のみから、彼の学術が朱子学から考証学へと転換したとはいえない。ただし、古制の中の様々な矛盾について、朱熹が聖人や周公が注意しなかった部分として保留し、現在の制度に適用するなら「変通」する必要があるとしたのに対し、江永は「変通」することなく、過去の制度は現在にも適用できると考えた。江永は過去の制度を無理に現代に適用するのではなく、最新の理論を古制の中に読み込んだのである。聖人と聖人の書は、「徳」以外にも「知」の領域においても完全で一切を見通している。江永は、自らの朱子学理解に基づき、聖人の把握する範囲を「徳」から「知」全体へと拡大し、経書の中に過去・現在・未来に通ずる「知」を発見しようとした思想家といえるだろう。

許家星氏（北京師範大学）（題目「朱子後学の韓国儒学への影響について——饒双峰の『大学』を中心



許家星氏（北京師範大学）による報告スライド



姜智恩氏（台湾大学）

として) は、韓国儒学に大きな影響を与えた饒双峰をとりあげた。韓国儒学は朱子の思想を分析する中で、『四書大全』『性理大全』等に大量に引用される朱子後学の論説を深く読み込み、豊富な議論を展開した。南宋の饒双峰もそのような朱子後学の1人である。彼の学問は総じて窮理に力を入れる一方、より重要な実践躬行の学を重視せず、朱子の意図に反しているという評価を受けた。報告では、饒双峰が朱子の『大学章句』に対して行った解釈が、韓国の学者たちに様々な議論を引き起こした事実を紹介した。双峰の注釈は非常に精密であり、韓国の学者たちは双峰の興味を自分たちの問題意識へとひきつけ、中国の学者とは異なる視点を持つに至った。その一方で、中韓の学者に共通する問題意識も存在しており、特に、双峰の思想のうち朱子の思想とそぐわない部分については、朱熹に忠実な思想家に対し、地域を越えて共通する興味を引き起こした。このように朱熹の思想は、その後学の思想を通してさらに詳細に検討され、中韓双方の学者にとって自らの問題意識を明らかにし、共通の問題を、時間・場所を越えてともに議論させるような架け橋となった。

最後に、姜智恩氏（台湾大学）（題目「韓日経学史と『古文』」）である。ウェーバーのいうように西洋近代学術の目標は先人の仕事を越えることであるが、東アジア経学史においてはそうではない。また、梁啓超は譚嗣同の学術が稚拙だとする一方、その懷疑精神や思想解放の勇気を称賛したが、東アジアの経学の価値はこのような点にあるのだろうか。経学の基本

的性格は何よりも解釈学であり、中国経学史において何かを創造する際には「古」の伝統にのつる必要がある。17世紀の韓国・日本では、許穆や荻生徂徠が「古文」を追求したが、彼らは無条件に「古」に追随したり、「古」の権威を借りて学術的権威すなわち朱子学に立ち向かったりしたわけでもない。なぜなら東アジア経学史はそもそも、「古」を根拠に、「古」義を追求するという発展過程を辿るからである。

本シンポジウムを通して気がつくのは、研究者それぞれが、研究対象とする思想家が見ていた風景と、できるだけ同じ風景を見ようとしている、ということである。そして、思想家の説の新しさだけを評価するのではなく、例えば太極図をどう解釈するのか、模範とすべき統治者とはどのような存在なのか、あるいは正しい「経」とは何か等の問いに対し、彼ら自身が設定した学問の枠組みの中で、どのようにして自分の理論の説得力を高めようとしていたのか、その試みそのものに注目した上で、彼らの学術が東アジア思想の中でどのように位置付けられるかに注目している。報告者のみるところ、朱子学は、「古」「道」「経」という概念が普遍的であると信じる者たちにとって、それを明らかにするための手段のひとつでしかない。ただし朱子学は、この手段として、東アジア思想史の中で非常に豊富で有機的な役割を果たし、後の学者たちに影響を与え続けた存在であったのは間違いないだろう。

報告者：田中有紀（東洋文化研究所）

EAA Art History Seminar in English

2021年2月8日

2021年2月8日、Cisco Webexを利用して、EAA Art History Seminar in Englishが開催された。東アジア藝文書院（EAA）には世界美術ユニットはないが、哲学や歴史、文学の各方面での議論を重ねるうちに、視覚芸術やイメージ研究にまたがる問い、とりわけ「かたち」をめぐる探求が、メンバー間での議論を通して数多く生まれていた。そうしたなか、世界哲学ユニットの若澤佑典氏（EAA 特任研究員）が、イタリア・ルネサンス研究を専門とする趙可卿氏（中山大学）との協同の可能性を提起したことで、ユニットの枠を飛び越えた今回の企画がはじまった。同じくイタリア・ルネサンス研究を専門とし、東京大学大学院経済学研究科で「歴史家ワークショップ」の運営を担う古川萌氏（東京大学）にお声かけをしたところ、登壇に快諾いただき、15-16世紀フィレンツェにおけるアートと社会・政治の関わりについての2本立ての講演企画が実現する運びとなった。

現在、台湾では大学を含む公的な機関でのZOOM利用が認められていない。そこで台湾研究者の前野清太郎氏（EAA 特任助教）とともに準備を進め、ZOOMと代替可能な会議プラットフォームであり、なおかつ中国等からアクセス制限のないプラットフォームとして試験的にCisco Webexを用いてセミナーを開催することにした。報告者である高山花子（EAA 特任助教）は美術史の専門外であるが、長らく北京出身のフランスの画家ザオ・ウーキーと、詩人アンリ・ミショーらの交遊に関心を持っており、絵画と詩、文学、哲

学の交差点という視点から、レスポンドを務めることになった。

最初の講演者である趙可卿氏は、“The Hidden Renaissance: Arts or Political Discourse?”（「隠されたルネサンス——芸術、あるいは政治的言説?」）と題し、1970年代以降の社会的背景を解きほぐす新しい美術史の研究動向を踏まえて、自身が専門とする15世紀フィレンツェについて、歴史的な流れを丁寧に踏まえて発表を行った。趙氏は、当時のダヴィデ像の制作の変遷が、ミラノ公国との戦いを意識してフィレンツェ市民を鼓舞する目的とかかわり、小国フィレンツェそのものの成熟と連動している点、それから、フィレンツェのアイデンティティ形成のために聖ゼノビウスのイメージが利用されている点を読み解き、作品制作の背景にどのような政治的イデオロギーが機能していたのかの1例を提示した。

2人目の講演者である古川萌氏は、“Commemorating Great Artists in Their Native Land: Tombs and Epitaphs for Artists in 16th-century Florence”（「故郷の偉大な芸術家を顕彰する——16世紀フィレンツェにおける芸術家のための墓とエピタフ」）と題して、謎解きのようにスリリングな発表を行った。ジョルジョ・ヴァザーリの『列伝』に収録された芸術家の伝記それぞれにエピタフが付されている点が、当時の埋葬で墓に紙のエピタフをつける慣習と重なると指摘した上で、メディチ家による新たな芸術家へのパトロネージの形態として、彼らの偉業を記憶に残してゆくことが、ヴァザーリの助



力で初めて実現したダイナミズムを描き出した。

報告者（高山）はレスポンドントとして、現在と異なる当時の芸術の定義、芸術家支援、それから中世とは異なるかたちで宗教的な要素が作用していた政治状況を確認した上で、趙氏に対しては、ダヴィデ像を見ていた人たちが誰であったのか“citizen”の定義への関心から質問した。古川氏に対しては、ヴァザーリの『列伝』の具体的な読者層がどのような人たちであり、また記憶されるべき芸術家の選別にも政治的意図が働いていたのか、質問をした。聖書解釈をはじめとする専門知や、初期ルネサンスの人文主義者の影響についても言及した。

パネリスト間の議論では、まず趙氏から、中世との相違点の1つは、絵画をはじめとする作品を実際に見られる鑑賞者の幅が圧倒的に広がり、広場といった公共の場には旅行者さえも訪れていた点や、ダヴィデ像のレプリカが製造され、イメージの流布に繋がっていた当時の様子が補足説明され、メディチ家をはじめとする貴族のメンバーと選挙制度の関係が議論された。古川氏からは、当時の知識人が、小さなパンフレットを自作して、それによって情報を人々に伝達していたエピソードが紹介された。また、当時の日記の記述から、こうした政治的イデオロギーの込められた芸術作品の受容についてはある程度知ることができると明らかにした。これらは、イタリア

半島内部での政治的な対立があったにもかかわらず、人の移動や人的交遊が比較的行われていた特異性とその重要性を浮き彫りにする点でも有益な議論であった。

時間が限られていたことが惜まれるが、フロアからも、当時の墓の装飾レリーフや、エピタフを文学ジャンルの系列とともに読解する可能性について、チャット欄を利用して、質問が寄せられた。総括すると、いまから500年、600年以上前の人々の様子については、いまだわからない点が多い中で、残された痕跡をもとに、おそらくはルネサンス期の人々自身も正確には理解していなかったと思われるパラダイムシフト期の全体像に、リアルに切り込み迫ろうとする2人の資料探査と読解の豊かさが、ひたすら贅沢であったと言えるだろう。オンラインで制約のある中、充実の議論を用意してくれた2人には改めて感謝したい。これを機会に、美術をキーワードに若手研究者で国際連携をするきっかけができるのではないかと思う。今回Cisco Webexの使用に伴う音声トラブルが深刻であったため、この課題を改善し、次回に向けて、オンラインでの集まりのためのよりよいプラットフォーム創りを進めてゆきたい。

報告者：高山花子（EAA特任助教）

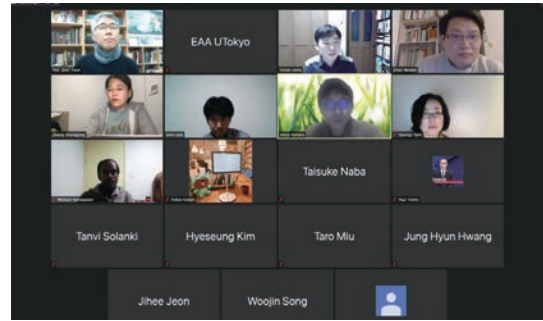
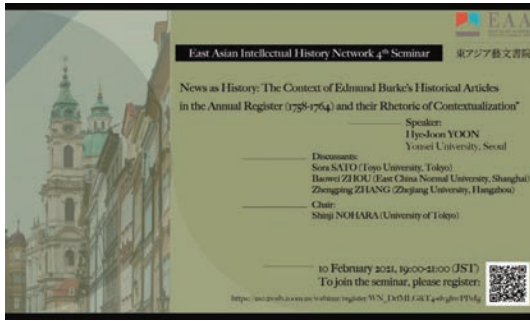
EAIHN Online Seminar Series (4)

2021年2月10日

On 10th February 2021, the East Asian Intellectual History Network (EAIHN), through the auspices of the EAA (East Asian Academy) at the University of Tokyo, hosted a talk by Hye-Joon Yoon (Yonsei University) entitled “News as History: The Context of Edmund Burke’s Historical Articles in The Annual Register (1758-1764) and their Rhetoric of Contextualization.” After opening remarks by the chair, Shinji Nohara (University of Tokyo),

Professor Yoon introduced his paper, discussing its main points. His talk was followed by three discussants’ comments and questions, Yoon’s response to them, and a lively discussion among the conference participants. The abstract of the paper is as follows:

Edmund Burke, a relatively unknown young man of letters from Dublin, signed a contract in 1758 with Robert Dodsley, one of the leading London publishers of the age, to edit Dodsley’s new peri-



odical called *The Annual Register*. The financial attraction to the young writer—still in his twenties but newly burdened with wife and son—of securing a “modest but regular” income (in E. P. Lock’s expression) would have been strong indeed. But the contract would have other salutary consequences, as his editorial duties compelled Burke to develop and refine his capacity to anatomize and contextualize current affairs. Although never acknowledged openly by Burke himself, and generally given only a marginal recognition in scholarly studies of the great “philosopher in action” (as Burke defined the ideal role of a parliamentarian), before he came to be a prominent orator in the House of Commons, Burke was heavily involved in editing the magazine and in writing for it. Being a yearly periodical, the scope of *The Annual Register* was broader than monthlies or weeklies, and its style was similarly more comprehensive than what was typical of the journalistic prose of the century. Given Burke’s keen sense of the importance of history in politics and society, which came to play such a potent role in his indictment of Warren Hastings and in his castigation of the French Revolution later in his career, framing the contemporary events, such as the Seven Years’ War (1756-1763), in the context of historical causality and geographical constraints was what gave *The Annual Register* a distinctive com-

petitive edge over other periodical essays. As the title of the main article of *The Annual Register*’s first issue “The History of the Present War” indicates, Dodsley’s magazine proposed to offer a historical contextualization of the “Present” moment, gathering diverse incidents “into one connected narrative,” as the “Preface” to the first number promised, to furnish the reader with a balanced picture of the tide of history flowing from the past through the present to the likely future. Current affairs and past events were blended through this bold endeavour to uplift print journalism onto a philosophy or “science” of society. This paper samples some rhetorical devices used to harmonize historical contextualization with reportage of contingent incidents—such as juxtaposing one geographical locality with another (e.g. North America with Bengal), dramatizing the character of the main actors (e.g. Frederick II), and assessing the strength or weakness of geographical locality (e.g. French Atlantic coast)—which merits to be appreciated in the company, on the one hand, of the celebrated eighteenth-century historical narratives produced by David Hume, Edward Gibbon, or William Robertson, and on the other, of the war journalism of the next century represented by William Russell of *The Times*.

Reported by Hiroki Ueno (Hitotsubashi University)

RA任期を終えて

高原智史 (EAAリサーチ・アシスタント)

2021年2月14日



東京大学教養学部の前身・第一高等学校で発行されていた『校友会雑誌』を繙きながら、近代日本思想史、特に明治期の煩悶青年について考える修士論文を執筆して博士課程へ進学しようとしていた2019年3月、発足間もないEAAから、「101号館の歴史」プロジェクトにRAとして関わらないかとお声掛けをいただいた。現在、駒場に101号館としてある建物は、一高時代には、中国人留学生のための課程である特設高等科用の建物であり、特高館とも呼ばれていた。そこにオフィスを構えたEAAは、一高時代の101号館について掘り起こしをするらしい。一高の中国人留学生というのは、自分の研究関心ど真ん中ではないものの(その実、この時点ではほとんど何も知らなかった)、一高ということでは重なるし、「101号館の歴史」プロジェクト以外にも、広がりをもって色々やらせてもらえそうであったので、応募することにした。

RAに採用していただき、EAAのRAとして活動させてもらったことは、事前感じていた「広がり」をはるかに上回るものだった。その中には、自分1人でいただけでは、決してやらなかったであろうことが含まれる。「本業」の「101号館の歴史」に関しては、駒場博物館の所蔵資料をよく調べに行くことになった。修士論文執筆に当たって、研究対象の『校友会雑誌』が、PDFデータ化されていてアクセスが容易だったため、それに頼り切りになり、駒場博物館所蔵の一高資料へのアクセスの必要は感じていながら、手が出せていなかった。RAとして「101号館の歴史」プロジェクトに携わることで、自身の一高研究についても、より立体感を持たせられるようになったと思う。

さらには新出の「藤木文書」の資料整理の経験を持つこともできた。「藤木文書」とは、一高、東大教養学部に勤務された藤木邦彦氏がお持ちであったと

みられる文書群で、一高時代の資料を多く含む。文書整理という点では素人ながら、保存用の中性紙の箱や封筒を用意するところから始めて、仮の文書リストを作成した。戦時中の資料も多くあり、紙質の悪い資料を多く取り扱う中で、現代の紙にコピーされた『校友会雑誌』を読み込むのに比べて、歴史研究をしている「感じ」が強くなったのを覚えている。

2019年夏の北京行や、現在なお進行中である「一高中国人留学生と101号館の歴史展」の話もしたいけれども、EAAのRAとしてやったことの挙示はこの辺で止めておいて、少し抽象的な話をさせていただきたい。EAAは正式名を東アジア藝文書院という。ここでは「書院」ということにフォーカスして進めていきたい。「書院」とは何かを問い始めれば、中国、東アジア思想上の大きな問題となってしまうだろうが、さしあたり、それは、人の集まりであり、また具体的な場所でもあろう。EAAは、101号館という具体的な場所にオフィスやセミナールームを構える組織であり、またそこに集う様々な人々の組織である。場所性と人的組織というのは、おそらくどちらも重要である。一高時代のことを言えば、一高生はよく「校風」ということを論じた。校舎などの建物がそれ自体として重要なわけではなく、そこで培われる、人々の間での感化力が重要なのであって、しかも、学校にいる間だけでなく、将来にわたって感化されていることが重要である、というような。しかし、そのように言う一高生にとっても、一高という具体的な場がなお重要であった。一高が駒場に移転してくる前、本郷の帝国大学の隣、向ヶ丘にあった頃、それにちなんで一高は、「向陵」と誇り高く呼ばれた。そうして、その向陵に籠城して、身を固めるべしとの「籠城主義」も唱えられていた。向陵という場所へのこだわりも強かったのである。結

局、場所性と人的つながりというのは、相互に他方の基礎となるということなのだろう。具体的な場所に集うことで人的つながりができ、そうした人的つながりが、物理的な場所に、場所性を付与するというように。

そのように考えると、EAAは色々な意味で、場所性と人的つながりの重要性を考えさせてくれる場であった。人的なつながりということから言えば、EAAに関わることで、普段、自分の研究室にいただけでは関わりがなかったような人たちともつながりができ、それは、EAA内、さらには学内だけにとどまらず、種々のプロジェクトを通して学外、国外にも及んだ。場所性としては、そもそも自分が一高を研究対象にしたのは、駒場の大学院に進学したこと、自分の足元のところの研究をしようという趣旨であったが、そうした場所性、あるいは現物性とでもいったことを、駒場博

物館の資料や「藤木文書」に触れていくことで深めることができた。

2020年初頭からのコロナ禍で、具体的な場所に集まるのが困難となる中、他方、オンラインで人や物に触れることが一躍容易になる中で、場所の意義については、いっそう考えさせられる状況となっている。人々の集まり方や関係性は、今次、よりいっそうのヴァーチャル化が進むことは避けられないだろう。そのような中で、EAAが「書院」として、人々の集まりの場としてよくあり続け、さらには、新しく、よりよい形での、集いの形を提言できるような組織であることを願って、擱筆したい。

写真撮影：高山花子(EAA特任助教)

鵬程万里 02

RA任期を終えて

胡藤 (EAAリサーチ・アシスタント)

2021年2月14日



「北の果ての海に大きな魚がいて、これを鯤と言う。その魚が変身すると、鵬という鳥になる。鵬も体が大きく、飛び立つとき、その翼は空を覆うほどだ。この鳥は海の変化に従って南の果ての海、天池に移る。」

——『莊子』内篇・逍遙遊篇

石井先生から「鵬程万里」というエッセイタイトルをいただいた時、頭に浮かび上がったのはこの『莊子』の冒頭の文言だった。鵬という鳥は一体どのようなものだろう。鯤とは魚卵のことを指し、ごく微小なものなのに、ここでは大きい魚の名前として使われている。それにしても鵬という巨大な鳥になって天がけるとは、なんと奇妙なことだろう。また、「海が変化する」時とはいったいどういう状況なのか、『莊子』にははっ

きり記されていないし、歴代の注釈者の間にも定説がないようだ。季節風が吹き、大きな嵐が現れた可能性もあるだろう。地殻の変動で滄海が変じて桑田になった可能性もあるだろう。とりあえず楽な変化ではなさそうだ。それでは、天池も楽に生きることができる場所なのだろうか。

中学生のとき『莊子』に出会ってすぐこの物語に魅了され、一時期は自分のネットでのニックネームを「海運」（海の変化）にしたことさえある。『莊子』のこの文を借りて「海の運うごくとき將うつに東瀛とうように徙うつらんとす」といった希望を持って日本に留学に来たとも言える。ところが留学にあたっての一番の困難は、大きく予想を超えたものだった。それは言語でもなく、人間関係でもなく、学問のかたちという問題だった。中国において「中国哲学・中国思想」とはあまりにも自明

なもので、これを研究することに意味があり、必要でもあるということは誰もが認めている。しかし日本来てからは事情が変わった。「中国人が日本にきて中国のことを研究するって、意味あるの?」と聞かれて呆然とした経験も少なくない。中国人という身分、日本という場所、そして中国思想という学問の分野の3者が共存することは不可能なのか。EAAの先生と学生の皆さんとはじめて出会ったのはちょうどこの問題について一番悩んでいた時期だった。そしてこの2年間を経て、EAAの「個人の知性を養うための人文学」の理念を受け入れ、今の私はこう確信している。

私は古代の中国に何か理想的なものが存在すると思ってこの道を選んだわけではない。ただ『莊子』をはじめ、数多くの古代の思想家たちの作品との出会いに「面白さ」を感じて、この面白さを他の人に共有したい、これだけに過ぎないのだ。

同時にこの2年間はEAAの(広義の)哲学者たちが世界を変えようとする行動を目にし、かつ自らも微力ながらそれに貢献しようとした2年間でもあった。私は自分のことを理想主義者ではなく現実主義者だ

と自認している。ただ現実主義のかたちに関しては、誤った認識を持っていたかもしれない。政治・権力に機敏に対応することはリアリズムとは言えない。むしろ我々の生活を、人文学、つまり人間そのものに対する理解に根ざしたものにしてこそ、政治的な結果を自ずから導き出すことができる。世界を根本的に変えられる力はまさに人文学にあると改めて確認した。

『莊子』の注釈者として有名な郭慶藩は冒頭の文章について少し異なる解釈をしている。すなわち、鵬の動きは北の果ての海に留まることはできない。必ず飛び出して天池に行かなければならない。離れることも大事なのだ。そしてこれからも海は依然として変化し続けるだろう。彼はこのような解釈を行っている。千里の道を飛んで天池へ向かう鵬は、3ヶ月かけて糧を集めて出発すると『莊子』にある。この2年間に何を得たのか、これから常に自分を叱咤しつつ進んでいきたいと思う。

写真撮影:高山花子(EAA特任助教)

鵬程万里 03

RA任期を終えて

張瀛子 (EAAリサーチ・アシスタント)

2021年2月14日

「東アジア藝文書院」がその名にちなんでいる『漢書』「藝文志」は、私の研究分野にあって必ず参照される基本文献の1つです。その知的意味は言うまでもないほど重要でしたが、それはあくまで学術的な専門内部の話でした。古典用語である「藝文」へ知的活動における現在の新しい意味を与えていく東アジア藝文書院の活動へ、成立初期から幸いにも参加させて頂き、非常に充実した2年を過ごすことができました。「卒業」を迎えた今、何よりもまず、東京大学・北京大学はじめ全ての先生の方々、スタッフとプログ

ラム生の皆様に感謝を申し上げます。

2年間に起こった印象的な事は枚挙に遑がなく、その中からどれを取り上げて記念エッセイに記すのかは非常に悩ましい課題でした。最終的に私は、学術フロンティア講義「30年後の世界へ」で1人の生徒から聞いた次の質問を選ぶことにしました。

「どうして私たちは古典を読むのか?
昔の人は今の人より優れているのか?」



非常に素朴であり、同時に核心に迫るこの問いは、若い学生ならではの率直・誠実さに溢れており、古典学の根幹をなす「過去は今にとって意味がある」という前提を揺さぶるものです。象牙の塔へ生きる者へのこうした刺激は、私にとって、東アジア藝文書院のプログラムが与えてくれた最大の贈り物でした。それは社会と学術をつなごうとする貴重な思考の機会を与えてくれるものでした。そしてこの問いは、新型コロナウイルス感染症が私たちの世界を目に見える形で変えてしまった今、より大きな意味を持つようになってきていると思います。

インターネットに代表される現代メディアは、秒毎の情報更新により、昨日の事すら古く感じさせてしまいます。コロナという歴史的な事件が加わったことで、2020年以前の世界は、今やすでにツヴァイクが描く「昨日の世界」のような別世界となってしまいました。従来の「普通」が消え「新しい日常」が急激に始まる中、これまでの自分の生活は何だったのか、これから何が起るのかについて知りたい時、インターネット上であつという間に流れ去る「リアルタイム」を見続けても、答えは出て来ないでしょう。そこには思考する余裕がほとんど無く、反省抜き「現在」しか表象されないからです。従って、過去と対置されてから始めて「今」は理解可能となることを、私たちは身をもって経験したのではないのでしょうか？

東アジア藝文書院では、プラトンの『饗宴』や中国の『莊子』など千年以上昔のテキストだけでなく、福沢諭吉の『文明論之概略』のような近代の著作も多く講読に用いられます。伝統的な古典学、あるいは特定の文化における古典でなく、「世界」を念頭に多様な時代のテキストを取り上げられているのです。これからの時代に向けての新しい過去への理解、教養としての古典学の再構築だと言ってもよいでしょう。

共同でのテキスト講読のなかで、私が特に印象的だったのは、学生達がどのような文化的背景のテキストも、言語の壁を乗り越えて、決して他者的なものとして扱ってはいなかったことです。学生たちはそれらのテキストを、自分の経験と引き合わせ、自分たちの現在と未来を構想する糧としていました。彼らのビビッドな思索から、私は学問の本来の意味とパワーを感じていました。

古代中国の思想家・荀子は、「古代のことを語ることに長けた人は、必ず現在にその証を確かめている。天について語ることに長けた人は、必ず人の間にその証を確かめているのだ。」（故善言古者、必有節於今。善言天者、必有徵於人。（『荀子』性悪篇）と述べました。これに対し、19世紀フランスの思想家トクヴィルは、進行中の革命がもたらしている前代未聞の変化を論じる中、過去がもはや人類にとって参照すべき価値が無くなったことを、次のように表現しています。「過去はもはや未来を照らさず、精神は闇のなかを歩んでいる。」（トクヴィル『アメリカのデモクラシー』）過去を切り離したいとの欲望は近代に顕著な傾向であり、私たちにとっては荀子よりトクヴィルの言葉の方に真実味を感じるかもしれません。しかし私は、コロナ下の閉鎖的な環境において、古典を読み天（自然）と人間について深く思索する東アジア藝文書院の活動へ、未来を照らす光を確かに感じています。

2年間、自分の未熟さを含め、たくさんの人々に多くの事を教えてもらいました。この経験を今後につなげていけば、すぐにまた皆様とお会いできると信じています。東アジア藝文書院の活動の一層の発展を心から祈っております。

写真撮影：高山花子(EAA特任助教)

RA任期を終えて

建部良平 (EAAリサーチ・アシスタント)

2021年2月14日



RAを始める少し前、『日本を解き放つ』（小林康夫・中島隆博著、東京大学出版会、2019年）という本が出版されました。修士論文を提出し、この先どのような研究をしていくか、悶々としていた時期だったのを覚えています。2人の哲学者が何やら面白そうなことをやっているようだ。書中には色々な議論や概念が出てくるわけですが、その辺りはあまり気にせず、楽しそうにしている感じを眺めていました。自由とは何かを論じるつもりはありませんが、この本を読んで感じたことを敢えて言葉にするなら、それは自由でした。こんな風に言葉を発せるようになりたい。自分が面白いと思える研究や言葉を、自由に発し続けていきたい。そんな思いを抱きながら日々を過ごしていました。そして、東アジア藝文書院（EAA）での活動は、そんな思いに応えるようなものでありました。

以下、任期中に書いた4篇の論文を通して、自身の宣伝も兼ねながら、この2年間の活動を振り返りたいと思います。これらはいずれもEAAに関わる中で、明に暗に影響を受けながら書いたもので、自由に言葉を発したいという思いを受けての、自分なりの実践でもありました。この2年間の活動の「あとがき」の様なものとして読んで頂けると幸いです。

①「人情と科学の哲学者：戴震及びデイヴィッド・ヒュームの比較可能性についての試（私）論」『比較文学・文化論集』第37号、東京大学比較文学・文化研究会、2020年

この論文は2019年の9月に書かれたもので、同じくRAをしていた高原智史さんの所属専攻の同人誌に掲載させて頂きました。2019年度前期のEAAでの活動を終え、9月に行われた北京大学での集中講

義に補佐として同行していた頃のことです。前期に学部生向けに開講された「学術フロンティア講義」や、東京大学・北京大学の学生に啓発を受けながら、そして冒頭に挙げた『日本を解き放つ』の興奮が冷めない中、とりあえず修士論文でも扱った戴震（1724年-1777年）を扱って何か書いてみようと思ったのが、大きな理由でありました。また現在特任研究員に就いておられる若澤佑典さんのワークショップにて、デイヴィッド・ヒューム（1711年-1776年）について話したことも契機となっています。出来としてはあまり十分なものではないですが、とりあえず何か描きたいという感情をぶつけた、思い出深い論文です。

②「他者をその他在において理解する：丸山政治学の現代的読解と「弱い主体」」『思想史研究』第27号、日本思想史・思想論研究会、2020年

2019年の11月から2020年の1月にかけて書いたものです。この論文を書くにあたっては、特任講師の王欽先生との関わりが非常に大きかったです。王先生は2019年の後期よりEAAに加わり、早速「文学と共同体の思想」という読書会を開かれました。今まで親しみのなかった分野のテキストについて議論できる貴重な場であり、丸山真男の福沢諭吉に関するテキストに基づいて発表する機会も頂きました。このテキストへの関心は、上に述べた北京大学での集中講義から出ており、読書会での発表、そして2020年1月にニューヨーク大学で行われた「Winter Institute」でも発表を試みました。発表した内容と、最終的にまとまった論文の内容とは異なる点も多いですが、これら得難い機会を通して自身の文を著せたことは、とても幸運でした。簡単に国境を飛びなくなってしまった

現在から振り返ると、尚更その思いが強まります。

③「老いた人間は何処へ——段玉裁「四郊小学」説を読む」『中国哲学研究』第31号、中国哲学研究会、近刊

2020年の7月から11月頃に執筆した論文です。本論文の契機も、6月に開かれた王欽先生の読書会での発表にありました。テキストとして提案した吉川幸次郎の『読書の学』（筑摩書房、1975年）を語る中で、段玉裁（1735年-1815年）に関心を抱き、段玉裁の読解を通して見出したものを、論文としてまとめたものです。自粛要請によって人との交流が制限される中で、オンラインではありますが自身の研究をめぐって議論を交わせたのは、大きな励みになりました。また原稿を書き終えた後ではありますが、同年10月より研究員の前野清太朗さん・高山花子さん・若澤佑典さんの発案で始まったEAAブックトークにて、貴重なフィードバックを得ることも出来ました。本論文を通して、博士論文の像が少しずつ捉えられるようになったのは、非常に大きな成果でした。段玉裁については、今後も幾つか書いてみようと考えています。

④「「苦海浄土」と共に——狂いと救い、そして笑い」『石牟礼道子を読む——世界をひらく／漂浪く』（EAA Booklet）、東アジア藝文書院、2021年2月

石牟礼道子について書くことになるとは、当初は全

く思っていませんでした。特任研究員の宇野瑞木さん・高山花子さんを中心に、2020年6月より始まった「石牟礼道子を読む会」に途中から参加。11月に開催されたワークショップでは発表の機会を頂き、論文としてまとめることが出来ました。思いがけず始まったことではあったのですが、石牟礼道子の世界に触れることで自分の世界が大きく広がり、実りある試みでありました。今後ともこの読書会には関わり続けたいと思っております。

以上、簡単に振り返っただけでもEAAの活動を通して、様々な思考を展開できたことが分かります。恐らくこれら全ては、わたし1人だけでは考え付かなかったことだと思います。RAになる以上は、活用できる資源は存分に活用させて頂こう。このような打算も当然あったのですが、その打算を大きく超えるものがありました。2年前に、今後の研究について悶々としながら、そして『日本を解き放つ』に心躍りながら過ごしていた自分では、想像もつかなかったことが起きたと言っても過言ではありません。もちろん、ここに書ききれなかったことや、まだ上手く言葉に出来ない感覚なども、多々残っています。それについては、今後の研究活動を通して示していければと思っております。

最後になりますが、関わった全ての方々に感謝申し上げます。2年間大変お世話になりました。EAAの更なる展開を心より楽しみにしております。

写真撮影：高山花子（EAA特任助教）

EAAオンラインワークショップ

コロナ危機と規制・財政政策

2021年2月15日

2021年2月15日、EAA オンラインワークショップ「コロナ危機と規制・財政政策」が開催された。EAAでは若手研究者の研究交流を積極的に支援しており、2020年度にはコロナ危機と未来社会に関わる意思決定過程を中心に検討してきた（「コロナ危機と医療・

介護政策」を参照、関連するテーマで「コロナ危機と自民党政権」も開催）。今回は第3弾として早川有紀氏（関西学院大学）と田中雅子氏（東京大学）をお招きし、変異ウイルスが確認される中、不確実性を一層高める今般のコロナ危機において、規制政策と財



問1 対決か協調か？ 危機に対する政党政治の対応

	選挙近い	選挙遠い
政権基盤 強い	野党が政権批判し対決 (4b)	野党が妥協し協調(4a)
政権基盤 弱い	野党が対案提示し対決 (2)(4b?)	与党が妥協し協調(1)(3)

(1) 1997年金融危機
(2) 2008年リーマンショック
(3) 2011年東日本大震災
(4a) 2020年コロナ危機 (4b) 2021年コロナ危機

政政策のあり方を探り、今後をとともに展望する機会をもった。

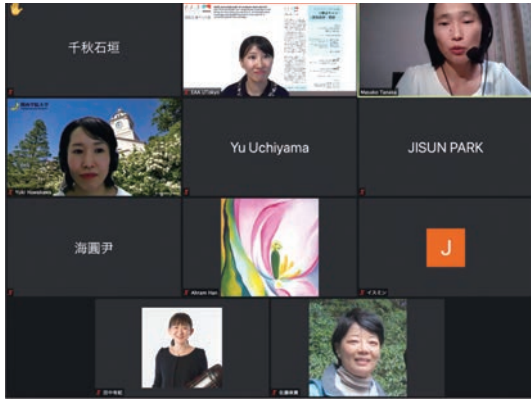
まず、早川氏はコロナ危機を受けて先進諸国で行われてきた都市封鎖や休業命令のような経済活動への介入やワクチンのような医薬品への許可・承認など、命令・禁止・許可を伴う規制政策に注目を払い、こうした規制政策の決定が不確実性の高い状況の中で行われることを問題提起した。日本でも飲食店の営業短縮など経済活動への自粛要請、市民に対する行動変容への協力要請がとられ、規制措置の決定をめぐる議論が活発になっている。

早川氏は、新型コロナウイルス感染症に対する日本政府の規制政策過程を検討する際に、現在のパンデミックが (本イベントのタイトルからもわかるように) 「危機」として受け止められているために、「危機管理 (crisis management)」と「リスク管理 (risk management)」の観点からのアプローチが肝心であると指摘する。興味深いのは一般に両者が混在して使われているのに対して、早川氏はそれを分離し、事前・事後といった時間軸を持って連続的に捉えることが重要であると主張した。つまり、クライシスが発生しないように予防と抑止といった事前の対策をリスク管理とし、クライシスが発生し、緊急事態への対処やその復旧・復興といった事後の対策を危機管理として区分し、お互いが影響を及ぼしあう循環性を重視する。こうした区分が重要なのは、危機前後によって政府がとる対応と政策手段が異なるからである、と早川氏は説明する。こうした枠組みをもって、早川氏はコロナ危機の中での経済活動に対する規制と医薬品関連の規制を事例とし、今回の規制政策にはリスク管理の側

面で多々な課題を残しているとした。

続けて、田中氏によるコロナ危機と財政政策についての報告がなされた。コロナ危機下でも見られたように、経済活動への規制はそれに応じた業者への給付金など、財政出動を伴う。田中氏は、こうした危機を受けての財政出動が政党政治とどのような関係があるのか、換言すれば、危機に直面した政党間競争が、対決型となるのか、それとも協調型となるのか、それを導く条件は何であるのか、そして、政党政治の危機対応に何らかの法則性を見出すことができるのかを問いかけた。それを検証するために、田中氏は日本における近年の危機と対応を通時比較し、諸外国との共時比較も行う。

まず、危機を目前として、ときには対決型に、ときには協調型になる政党間競争の条件を規定するものとして、政治的基盤の強弱と衆議院総選挙の遠近の二軸から検討する。1990年代以降の主な4つの危機 (1997年金融危機、2008年リーマンショック、2011年東日本大震災、2020-2021年コロナ危機) を分析した結果、次の傾向を導きだす。まず、政権基盤が強い場合で、選挙が近い時には野党が政権を批判し対決型に、選挙が遠い時には野党が妥協し協調型になる。反対に政権基盤が弱い場合で、選挙が近いときには野党が代案を持って対決型に、選挙が遠い時には与党が妥協し協調型になるパターンが見られると、田中氏は説明する。こうした政党間競争の結果、実行された日本の財政出動は、すでに悪化の一途をたどる日本の財政赤字に、さらなる悪影響をもたらしている。田中氏は、コロナ危機に直面して行われた財政政策を国際比較し、日本は先進諸国の平均より高い水準



の財政支出を行いながら、財源確保の努力がなされていないと指摘する。

以上の議論をまとめながら、田中氏は、危機を受けて行われる財政出動の政党間競争のパターンを理解することを通じて、今後の危機対応への手掛かりを見出すことを期待すると述べた。政党間競争のなかに財源をめぐる議論が欠けていて「財政民主主義」が損なわれている点や、未来世代に直結する問題として、現在の政策決定過程の中に、例えば30年後の未来

世代の立場から発言する人を入れる「フューチャー・デザイン」の試みもつ可能性についても取り上げられ、危機をめぐる政策の多面性が浮き彫りになる印象深い報告となった。

両氏の報告後には残り短い時間であったが、参加者からの質問で活発な議論ができた。リスク管理の中で産業育成の現状やリスク・アナリシスにおけるリスク評価の問題、財政政策決定過程に影響を及ぼす他の変数、財政出動で恩恵を受ける範囲（特殊企業か一般市民か）と政党政治の関係などが、さらに取り上げられ、充実した、密度の高い議論が繰りひろげられた。このコロナ危機と意思決定過程をめぐるこれまでの議論は、今後EAAブックレット『コロナ危機と未来社会』にまとめる予定である。未曾有のコロナ危機の中、若手研究者がそれぞれの専門性を持ち寄って集い、活発に議論を行ったことは、後世に残す意義ある試みであったと秘かに期待するものである。

報告者：具裕珍(EAA特任助教)

第14回 石牟礼道子を読む会

2021年2月15日

2021年2月15日、第14回「石牟礼道子を読む会」が開催された。発表担当者は高山花子氏（EAA特任助教）で、このほかに、張政遠氏（東京大学）、山田悠介氏（大東文化大学）、佐藤麻貴氏（東京大学）、宮田晃碩氏（東京大学大学院博士課程）、建部良平氏（EAAリサーチ・アシスタント）、そして報告者の宇野瑞木（EAA特任研究員）の7名が参加した。

本読書会では、昨年6月から『苦海浄土』3部作を読んできたが、その後にメインテキストに据えたのが、前回から読んでいる『流民の都』（1973年）である。『流民の都』は、石牟礼がある時点まで『苦海浄土』の第4部にすることを想定していたことがわかっている。今回は『苦海浄土』を共同で読んでき

た今年度の締めくくりの会となることもあって、高山氏の発表は、『流民の都』から浮かび上がってきた「みやこ／都」「流民」という新たな視点をもって、『苦海浄土』3部作を振り返るといふ総まとめ的な内容となった。今回、メインテキストに選ばれたのは、『流民の都』（大和書房、1973年）の中でも特に、下記の2篇である。

1. 「流民の都1」（初出『現代の眼』1972年4月号）
2. 「もうひとつのこの世へ」（初出『告発』第13号、1970年6月、『人間として』第3号、1970年9月、原題「断章苦海浄土」）

またサブテキストは、以下の通り。

1. 水溜真由美「石牟礼道子と「流民」」、『現代思想』
2018年5月臨時増刊号（186-193頁）

2. 宮本久雄『旅人の脱在論——自・他相生の思想と物語りの展開』（創文社、2011年）より第2部第8章抜粋（253-260頁）

まず、高山氏は「流民の都1」について論じられた水溜論文を参照しながら、石牟礼のいう「流民」の背景として、石牟礼が育った水俣の村周辺では、石牟礼の家を含め天草や薩摩から流れてきた人たちが多かったこと、また彼らは学歴のないために周縁的な労働者にしかなれなかったにもかかわらず、会社（＝チツ）の発展を喜び「都人」としての幻想を抱く人々であったことが確認された。さらには、貧困ゆえにマレーシアなどへ売られていった天草の女性たちや、南米・南洋への移住を試みた後に戻ってきて水俣に住みついた天草出身者たちをもごく身近に感じていたこと等が指摘された。

以上を踏まえて、「流民」「都」、また「故郷」がいかなる意味をもたされていたか、3部作において改めて確認する作業がなされた。第1部においては、ゆき女などの主要な登場人物が天草流れであると自ら語っていること、このときの「都」は会社（＝チツ）のできた水俣という流れ者からなる村のイメージが強かったことが確認された。これに対して、第2部では、新たに出郷した者も故郷に留まった者も行き場がなく、石牟礼自身も故郷にしながら「もうひとつのこ

の世」を希求する状況が描き出されるようになる。また「みやこ」として京都や大阪、さらに東京が語られるようになるが、東京は風土や季節と切り離された「造花」のイメージであると共に、かつての「みやこ」は「長崎」であったことが注目された。さらに東京のチツ本社前に座り込みをする場面から始まる第3部では、「都／みやこ」は明確に東京を表す言葉となり、天皇のいる場で、自然との乖離や無名性といった特徴が示されていた点が確認された。また、一貫して「流れ」という言葉には「舟」や「流木」のような海を漂流するイメージがあることも明らかになった。

その上で、もうひとつのサブテキストである宮本論文「たましい（魂・anima）への旅」において、「苦海浄土」の「浄土」が存在の母層すなわちアニマの母層であり、その場所では「国家」の「国」ではない「くに」へ繋がっていくものであるとする議論が参照され、この「アニマ」の「くに」と石牟礼の希求する「もうひとつのこの世」との関係が検討された。最後に、故郷にいながらにして故郷を喪失するような時代への眼差しが、胎児性水俣病患者の逃げ場のなさや重ねられながら、まぼろしのみやこではなく、国家や行政区区分とも別の場を求め動きへと向かったとし、「相思社」という具体的な活動の場を実現した点に着目を促して発表を終える形となった。

質疑では、「流民」「流れ」というキーワードについて、現代にまで続く差別の構造、移民・難民の問題、また石牟礼が傾倒した高群逸枝の女性史観と絡めて近代以前の日本社会における女性の地位や宗教的呪術的な面における特権的な在り方、さらには天草や長崎の遊女の問題など、さまざまな方向から議論がなされた。また長崎という天皇制とは直接関係しない、中国やオランダと結びついたかつての都の影響下にあった天草・水俣あたりの土地では、国家の境界を越える海によって繋がる圏域・海路のイメージをもっていたこと、さらにそうした海からみた圏域では、女性が執り行う祭祀が残る南島の習俗や航海を見守る媽祖などの女神信仰に近いものを感じていたののではないかと、といった点も指摘された。

さらに「流れ」という流動性が、『苦海浄土』では常に陸上の移動ではなく海上で潮に流されるイメー



石牟礼道子『流民の都』（大和書房、1973年）。表紙は水俣で石牟礼と親交のあった銅版画家・秀島由己男の作品。

ジであることに着目し、かつては流刑が死刑に次ぐ重刑であったように縁なき土地に流され帰る場所を失うことの耐えがたさ・苦しみへの注意が促された。その一方で、小説において「海」から陸を眺める眼差しを様々なレベルで内包していることの意味が示唆され、例えば漁師は「海の上」というもうひとつの場所から陸地すなわち日常・現実を眺めることのできる浄土性・異界性を享受したといえるのではないかと、いった指摘もなされた。

現実と異なる位相に漂わせてくれる海上という両義的な場は、石牟礼の短歌時代から一貫して思念の場であった（そしてそれは家や結婚に拘束される身から魂が漂浪きだす場でもあったであろう）「空と海のあいだ」のイメージにも通じているように思われる。そして、海を介して繋がるのは空間だけではなく、『苦海浄土』に生命の源の破壊の上に現われた「竜宮」、あるいは失われた「生類のみやこ」というまぼろしの古代の時間でもあったのだろう。もちろん、こうした超地上性への希求や甘美なノスタルジーが生命の病の上に現われるものであるとも言及されていたことに注意しなければならない。そして、一方では高山氏が述べたように現実世界にもうひとつの共同体を具体的に現出させようと動いていたことも注目される。その内実について

は今後の課題であるだろう。

以上のように、『苦海浄土』第4部となるのが当初は想定されていた『流民の都』のテーマである「流民」「都」といったテーマから、もう一度3部作を眺めたことで、その視点が、水俣の風土を決定づける重要な意味を持ち続けたと同時に、石牟礼自身が移動や親交の範囲を拡げていくなかで、3部作を通じてかなり意味が変化・拡大していったことも明らかになった。また、これまでの読みでは、「漂浪き」といった言葉を旅、巡礼などと結びつけて考えてきたが、そこには舟で潮にのって流れていくような陸上の移動とは異なるイメージがあることが新たに確認されたことで、海からの視点という「私」「わたくし」とは別の、あるいは分離した視点からの読みがより可能になったように思われる。

宮本久雄氏は、石牟礼のその後の作品は『苦海浄土』の注釈であると述べているが、そうした問題意識にも触発されながら、石牟礼の残した多様な作品において、その世界がどこに向かっていくのか、その行方について共に議論して行きたいと改めて感じた。

報告者：宇野瑞木(EAA特任研究員)

第4回 EAAブックトーク

2021年2月17日

2021年2月17日、第4回のEAAブックトークが実施された。緊急事態宣言下の状況を踏まえ、これまでの屋外集合・対面形式は見送り、初のオンライン開催を実験的に行った。これまでの参加者6名（前野清太郎・高山花子・崎濱紗奈・張瀛子・建部良平・若澤佑典）に加え、田中有紀氏（東洋文化研究所）が対話の列に加わってくれた。まずは第4回のお題である「経済と経世」について前野氏から説明が行われた。第3回の「注釈／コメントリー」の討議では、解釈行為を通じて近世の人々が共鳴・結束する「文に媒介された共同性」が焦点となった。18世紀

の世界各地を眺めてみると、こうした「文の共同体」は市場原理・商業世界とせめぎ合いながら、自己了解や変容を進めていることが分かる。例えば清代考証学の人々にとって、商業社会の成立に伴う出版業の隆盛は、彼らの思索を広める場を提供した。文の共同体は経済活動のエネルギーに支えられ、その圏域を広めていく。他方、出版の世界における購買活動は、文や共同性そのものを商品化し、知の探究活動を空洞化する危険もはらんでいた。18世紀の中国のみならず、同時代のイギリスやフランスでも、文筆家の人々は自らが市場原理に呑み込まれること、マーケ



ティング活動の中で哲学的思索が融解していく事態にアンビバレントな心情を抱いている。

「文に媒介された共同性」をさらに考えていく上で、近世の知的空間を呑み込もうとするエコノミーなるものの、翻ってこのエコノミーなる怪物を分析理解しようとする知的営みが、「解釈／コメンタリー」以後のブックトークで争点となりうる。さらに経済活動に対する知的介入・反省の枠組みは1つではない。この多名性をハイライトする上で、「経済と経世」という併記が、導きの糸になりうるだろう。以上のような経緯で、第4回のテーマが定まった。こうした前野氏の問題提起を聞いていると、第2回ブックトークで言及された、井上進『中国出版文化史——書物世界と知の風景』（名古屋大学出版会、2002年）が想起される。また昨年12月のヒューム・ワークショップ（「18世紀の対話篇を読む／論じる／翻訳する」）で参照された、アントワヌ・リルティ『セレブの誕生——「著名人」の出現と近代社会』（名古屋大学出版会、2018年）のルソー解釈も手掛かりになりそうだ。前野氏自身は、関川夏央『白樺たちの大正』（文藝春秋、2005年）を脇において今回の構想を練ったという。その書名が示すように、あるいはこれまでのブックトークがそうであったように、参加メンバーの参照点は必ずしも18世紀に

限定されていない。前野氏の提起を引き受ける形で崎濱氏からは向井清史『沖繩近代経済史——資本主義の発達と辺境地農業』（日本経済評論社、1988年）の紹介があった。崎濱氏は博論執筆時に、概念自体が流通・媒介・作用する過程を追うため、思想史と経済史・経済思想史の接点に関心を持ったそうである。思想が経済の中に呑み込まれつつ、経済を問いの対象として飼いならす両義性が、ここでも焦点となっている。

エコノミーをめぐる「多名性」について、前野氏は「資生学」や「家政学」といった事例に言及する。「経世済民の学＝経済学」という枠組みでは、政治政策と連動したトップダウン的な視点が強調されるが、資生や家政という言葉になると、もっとプラクティカルで日常生活に即した響きがある。こうした多名性は、経済学が生まれた（とされる）英語圏の言語空間にも例が見いだせるかもしれない。若澤からは経済思想史の入門書として知られるロバート・L・ハイルブローナーの『世俗の思想家たち』（原題 The Worldly Philosophers、ちくま学芸文庫、2001年）と『私は、経済学をどう読んできたか』（原題 Teachings from the Worldly Philosophy、ちくま学芸文庫、2003年）を紹介した。これらの書物においても、経済思想ないし経済学は「世俗の哲学」としてパラフレーズされている。EAAのプロジェクト研究では「世界」(world)が大きなキーワードであるが、言葉の響きが「浮世の」(worldly)という言葉につながると、どこかクスッと笑えてくる。高山氏は2冊のフランス語辞書を持参・参照し、「オイコノミア」というワードが持つ歴史的広がりを語ってくれた。高山氏が提起した「翻訳」から「経済と経世」テーマへのアプローチは、参加メンバーを大きく刺激したようである。田中氏は前任校の経済学部で中国語や思想文化を教えていた経験を振り返りつつ、近代東アジアにおける翻訳実践へフォーカスした。田中氏はJ. C. ヘボン編『和英語林集成』を教材に「経世」を扱ったオープンキャンパスの授業を例示しながら、初期の「経済」訳語について説明を行ってくれた。国際貿易の空間拡張に伴ったヨーロッパとアジアの遭遇は、漢字とアルファベットの相互交渉も媒介した。これについて、前野氏は齋藤希史『漢文脈と近代日

本』（角川学芸出版、2014年）を紹介して応答した。建部氏は、翻訳実践と近代文学の世界から吉川幸次郎と大山定一の『洛中書問』（筑摩書房、1974年）に言及した。本書で展開される応答は日本における翻訳論を考える際のキーテキストの1つである。

今回のブックトークでは、エコノミーの「多名性」が翻訳論へと変奏される一方で、「モノ」から思想史を考える視座も狙上にあがった。張氏は明末清初を出発点として、商業世界の勃興に居合わせた中国知識人たちが、日用品への関心を生活美学として昇華させたり、骨董愛好へと向かったりしたことに着目する。交易が盛んな空間には、モノがあふれている。書物や知識すらも商品となる世界で、「過去」はどう扱われるのだろうか。一方、時間はモノの価値を左右する重要なファクターである。時間の経過は単なるモノを、歴史的価値が堆積した骨董品へと変性させる。他方で、時間そのものは売り買いできない。万金を積んでも、目の前の新しい物品に由来や故事を付加することはできない。近世以降の社会における市場原理と過去に対する関心は、不思議な形で相互干渉しているように見える。張氏は巫仁恕『品味奢華——明的消費社會與士大夫』（聯經出版、2019年）

と大木康編『原文で楽しむ明清文人の小品世界』（集古舎、2006年）を参照しつつ、モノがあふれる世界で読み・書き・思考した、近世の人々の足跡をたどった。また、モノに囲まれ（時に圧倒され）る世界を特徴づけるのは、既存の政治秩序からはみ出しつつ、生活には困窮していない「ヒマな人々」の存在である。勤勉に労働する人々を脇目にブラブラしている人たちが生み出す「文」の場も忘れてはならない。市場原理で出版の世界が駆動する一方、そこに片足を突っ込みつつ、はみ出している者たちもいるようなのだ。趣味や暇、骨董と目利きといった言葉は、（中国以外の地域をフィールドとする）18世紀研究者にとっても興味を惹かれるものである。回を重ねるごとにメンバー間で共有された問いの平面が明らかとなり、その輪郭もハッキリしてきた。ブックトークの各回のみならず他のリサーチイベントとの接点も見えてきて、知を「連環」させる場としてブックトークが存分に機能を果たしている。そんな勢いを実感した第4回の討議であった。次回の第5回は2020年度ブックトーク企画の最終回になる予定である。

報告者：若澤佑典（EAA特任研究員）

EAAシンポジウム

哲学としての書院

2021年2月20日

2020年2月20日、ワークショップ「哲学としての書院」（書院作為哲学）が開催された。本ワークショップ開催の趣旨は清華大学、北京大学、そして東京大学における「書院」という組織、教育のあり方、およびこれまでの経験についての知見の交換にあった。ワークショップでは既存の大学制度を残しつつ、未来に向けた新たな発展をめざした多様な議論が交わされた。以下、発表順に各々の発表者の議論の概要を記していきたい。

1人目の発表者は清華大学「新雅書院」運営に携わる甘陽氏（清華大学）である。甘氏は中国におけ

るここ数年の「書院」教育の拡大に触れながら、新雅書院が目指す三位一体的な教育体制——専門的な知識の伝達、に加えて、人間性と価値観の涵養、学問的探究以外の多様な能力の育成——について述べた。そして清華大学という理工系の強い大学において、文系の学問、とりわけ古典読解のプログラムの広がりやいかに確保するかが現在甘氏の取り組んでいる課題であるという。甘氏は理科教育・先進技術教育の重要性は否定しないが、将来的に科学研究者が古典に対して思い入れをもちながら成長していつてくれることを望んでいると述べた。



甘陽氏（清華大学）



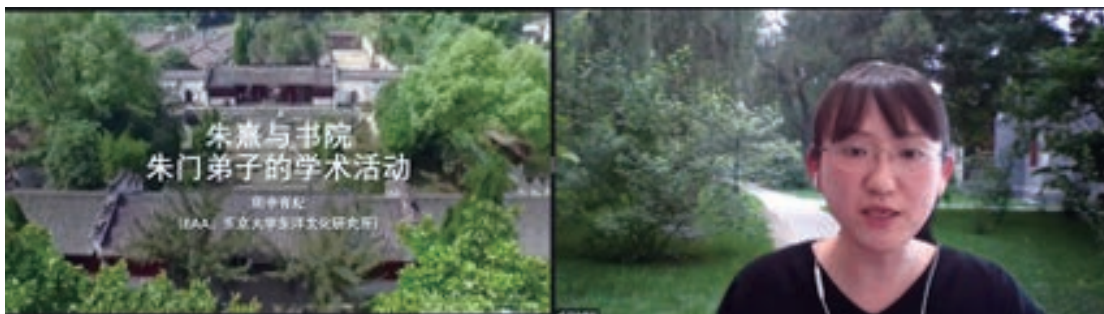
李猛氏（北京大学）



石井剛氏（EAA 副院長）

甘陽氏に続き李猛氏（北京大学）によって北京大学「元培学院」における実践の状況が報告された。元培学院は「自然を貴び個性を伸ばし、孤独を転じて共同となす」（尚自然展個性、化孤独為共同）を掲げながら、知識を授ける教育にとどまらず、衣食住の生活や課外活動を通じたより広義的な教育を展開している。その背景には、中国の大学における競争的な教育の激化がある。競争的システムは優秀な学生を生み出す一方で、点数面で十分な評価を出せない学生を生み出してしまい、そしてそれら学生へのフォローが手薄になってしまうという問題がある。李猛氏は「書院」教育の方向性としては、学業面において自信を失ってしまいがちな学生に、競争の外にある価値観への眼を養うことが重要だと指摘した。

3人目の発表者は東京大学の石井剛氏（EAA 副院長）である。石井氏は現在の世界で「人間」を考えると、そしてそれが「書院」教育や古典を読むことと如何に関わるのかについて自身の思索を示した。石井氏の主張の背景となっているのは、ヨーロッパ哲学がある種の限界を迎えているという点である。これからの哲学や人間を考えるに際しては、ヨーロッパに止まらない世界を舞台に思索を展開していかねばならない。石井氏は2020年に筑摩書房から刊行された叢書『世界哲学史』シリーズ（ちくま文庫、全8巻・別巻）と、カール・ヤスパースが「軸の時代」と述べた状況を重ね合わせながら、古典を現在の状況において読みながら未来を構想することの意義を説い



田中有紀氏（東京大学）



孫飛宇氏（北京大学）

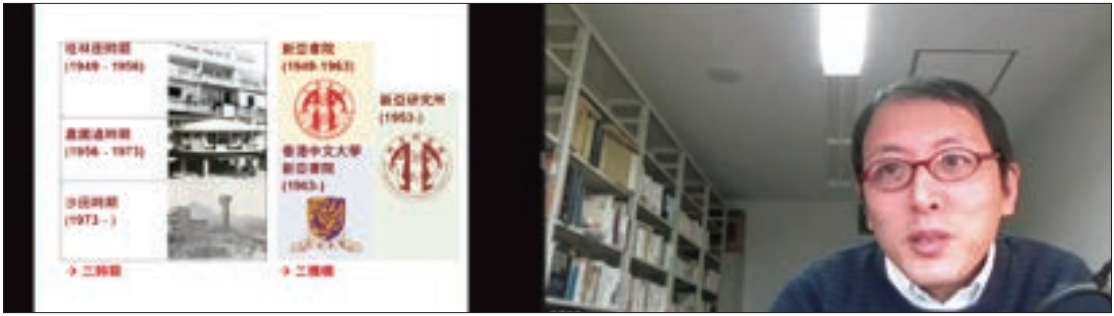
た。そして石井氏の専門領域の1つである清代学術上の問題とも関連付けて、人・世界・古典・文献学・翻訳といったことが「書院」教育のキーワードとなるであろうことを述べた。

休憩を挟んだ後、4人目の発表者として田中有紀氏（東京大学）が発表した。田中氏は朱熹と「書院」という観点から、当時において「書院」という場所が果たした機能について具体的な考察を述べた。朱熹は「書院」においてしばしば弟子と問答を繰り返しており、そこで弟子たちの意見を参照したり、また自身の思想を伝える機会としていたりしていた。田中氏はそのような交流を通して朱熹が自身の思想を見つめ直し、それを広めていったと考え、彼の思想において「書院」の果たした役割を強調した。

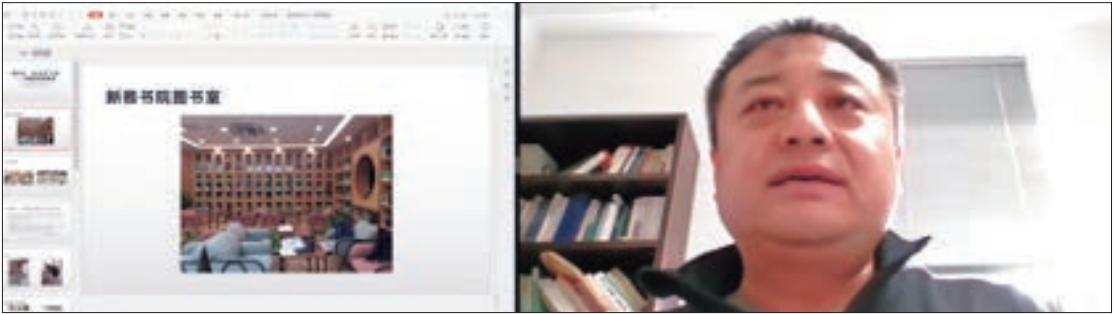
孫飛宇氏（北京大学）の発表は「位育としての通識教育（潘光旦の土着化した視点）」と題し、近代中国社会学の先駆者・潘光旦の通識教育（注：general education、一般教育）に対する思想を通して、彼が行った教育改革の背後にある理論的構造を考察するものであった。潘光旦はハーバード大学の「General Education in a Free Society」報告書に先んじて、伝統中国の教育理念に基づく通識教育の理論を作り上げ

たのだと孫氏は指摘した。その核心的な概念は儒教古典『中庸』に由来する「位育」であり、人間がその社会にあつてふさわしい役割に応じた教育を受けるという発想である。潘光旦は近代の専門教育が「人間としての人」を無視したと批判し、大学教育の一番の目的は通識教育を通して学生に「人間そのもの」を認識させ、その基礎の上に専門教育へとすすませることにある、と主張する。このことと対応し、知識以外の学生の「情」と「志」に対する教育も不可欠だと潘光旦は言い、3者が揃うことでその社会的役割に相応しい人格を形成するのだと主張する。潘光旦の伝統教育における「人間の道」を重要視する姿勢を取り出し、近代教育制度の知識重視の傾向を矯正しようとする思想は、彼がかつて試みた教育改革において実現はされなかったものの、今日の教育現場にとっても良い参考になると孫氏は指摘した。

張政遠氏（東京大学）の発表テーマは「唐君毅と新亜書院——私学と官学の三部曲」である。香港新亜書院の中心的人物である唐君毅は書院の設立と改組において尽力し「書院」という学問伝授の場に関する思考を重ね、独自の教育思想を形成した。新亜書院・新亜研究所は香港で伝統中国文化の保存の



張政遠氏（東京大学）



趙曉力氏（清華大学）

ために設立され、はじめは民間の学校だったが、のちに政府が新設した香港中文大学に参加して同大学の一部となった経緯がある。唐君毅はこれを「私学」から「官学」になるプロセスとみなした。官学化した新亞書院は持続的資金源を得たが、版面教育における自主権を失った。一方、私学のまま存続した新亞研究所は経営困難に陥った。唐君毅はこの観察から私学と官学を区別しつつ、社会一般の需要に応える私学と政府統治の需要に応える官学という定義を行った。そしてこの点を踏まえたうえで、学問の伝承は私学においてこそ長く続けられるのだと唐君毅は結論づけた。また張氏はさらに香港中文大学に加入した新亞書院が官学化の弊害を回避するために行った取り組みを紹介した。新亞書院の、教師と学生との日常的コミュニケーションを重視する姿勢や人物理解を中心とする人文学教育の方針は、現代の大学システム下での「書院」のあり方を提示してくれたのだと張氏はまとめた。

趙曉力氏（清華大学）の報告は教育現場に起こったある問題——共有スペースの管理——から出発し「書院」教育のなかの労働に関する教育の意義を論じた。「書院」は学生が共に学ぶ空間であるのみならず、学生が生活を共にする空間でもある。ゆえに「書

院」は知性を育む教育のみでなく、労働に関する教育もその責務としている。しかし過去の教育現場において行われてきた清掃活動などの労働に関する教育の方式がもはやそのままでは援用できないのも事実であり、新雅書院では労働の人間に対する意義を再考しながら、その教育内容を再設計したという。趙曉力氏は、労働とは知識、慣行、資本といったものから身体と精神が自由を得る道筋の1つでもあるのだと述べた。

最後のラウンドテーブルでは、参加者たちが「書院」という学問・教育のかたちに関して議論を交わした。甘陽氏は、「書院」が学問の共同体となるだけでなく感情（友愛）の共同体にもなるべきであると指摘した。この意味で、労働に関する教育をも含む「書院」での学生・教師間の人と人の付き合いは、知識の伝承よりも重要な役割を果たしているとも言える。またこうした手段を通して、大学を知識中心、エリート中心の現状から解放することもできるだろうという。石井氏は朱熹などが重要視している「書院」での教育活動は一種の儀礼の空間でもあると述べた。つまり「書院」という儀礼の形式あってこそ、新しい学問の変化を起こすことができるのである。張政遠氏は現在の日本の



大学の私立化と唐君毅の「私学」観を踏まえながら、未来の大学と「書院」はより開放的で、すべての人に開かれたものになるべきだと力説した。最後は今回のテーマ「哲学としての書院」に呼応するように、李猛氏が東アジアから哲学を考える際に、東アジア独自の経験が西洋主導の世界哲学に対して貢献し得る一方で、具体的な経験を欠いたままステレオタイプ化を

生み出してしまう危険性にも言及した。ゆえに「書院」が示す個人の実在的な生の経験から出発し、現実根差した思考をすすめるあり方は、新しい哲学の原動力を生む契機になることができるであろう。

報告者：建部良平 (EAAリサーチ・アシスタント)
胡藤 (EAAリサーチ・アシスタント)

文運日新 01

離任にあたって

連なる想いを編む こまばの森で過ごした1年間

若澤佑典 (EAA特任研究員)

2021年2月22日



2020年4月から始まった研究員生活は、激しく、そして鮮やかなものでした。思いを巡らすと、色づいた銀杏の木々、駒場の森のざわめきと共に、この1年間の軌跡がよみがえってきます。このポスドク生活を始めるにあたって、中島隆博先生と短い問答を交わし

ました。私はこれまでの研究で、「徹底的な学術探求が、知の自己解体ではなく、会話の世界へと向かう経路」を18世紀の知的空間に見出し、ヒューム解釈のなかで「穏やかさ」を主題としてきた、と説明いたしました。中島先生からは「穏やかなヒュームを見つ

けた、ということですが、猛り狂ったヒュームというのも、どこかにいるのでしょうか?」と、コメントが返ってきました。「激しいヒューム」というフレーズは、どこか不思議な存在感を伴って、1年の間、頭の中で残響を続けました。「激しさ」と「穏やかさ」の同居は、東アジア藝文書院で「どんな人たちが」「いかに学を問おう」としていたのかを、簡潔に表現しているように思われます。石井剛先生とはプロジェクトメンバーとして、あるいは同じ18世紀研究の徒として、徹底的かつ実存的な知的応酬を交わしました。「文体の選択は、学派の選択でもあるんです。どうやって書くかという問題は、どういった知的系譜の中に自分自身を位置付けるか、という模索でもあります」とか、「図像はさまざまなものを明らかにします。でも、その過程で何が隠されているか、一緒に考える必要がありますね」など、石井先生の言葉を手掛かりにしつつ（あるいは、時に抗いながら）、18世紀の世界を縦横無尽に駆け巡りました。研究協働の在り方について話し合った際、「この1年間で、今までにやってみたいと思っていたことを全部やりましょう!!」と石井先生がにこやかに笑って、研究室へ戻っていった場面が印象に残っています。創造に向かうとは猛り挑むことであり、その激しさが相手への信に根差している、そんなことを感じた瞬間でした。創造とは激しく、しかし穏やかに想うことなのでしょう。

駒場に着任するにあたって、どこか予感めいたものがありました。これまで7年間半過ごしてきた英語圏の研究世界と、これから始まるプロジェクトの場がきちんと地続きである、つながっている、という感触です。勤務初日の英語座談会で、井上彰先生と質疑応答をした際、自然とヒュームの話題になったことが、上記の予感を実感に変えました。また、秋になると経済学部資料室との連携が始まり、アダム・スミス文庫を訪問することもできました。前野清太郎さん・高山花子さんと一緒に立ち上げた野外ブックトーク企画では、建部良平さん・張瀛子さん2人の交わす対話が、私を18世紀中国思想の世界へと誘ってくれました。清代考証学が文人たちの「群像」劇であること、その賑やかな会話の世界を感じることができました。18世紀のヨーロッパで道徳感情論が構想され、古への関

心が発掘や骨董収集という形で花開き、さらには事典・辞書が編纂されている時、同時代の中国や日本においても、情と人間本性をめぐる問いが提起され、知の再編成が起り、文人たちが書画に情熱を傾けたこと、この「共時性」が私のなかでずっと気にかかっていました。宇野瑞木さんとのやり取りでは、伊藤若冲や丸山応挙、池大雅らがのびやかに活躍する、18世紀の京都が焦点となりました。書物や図版の流通・循環を考えるようになったのも、こうした研究員同士の交流がきっかけです。前野さんや高山さんと相談していく中で、こうした1つ1つの閃きが企画として展開していきました。上記のお2人や立石はなさんと一緒に過ごした駒場オフィスには、どこか中学高校時代のホーム・ルームに似た愛着を感じます。

崎濱紗奈さん、そして田中有紀先生とは「思想史っぽさ」とは何か、モノや部屋、群島といった主題から、和やかな場で一緒にお話しさせていただきました。三者三様の研究分野を持っていますが、一般的にイメージされる思想史とはちよつと違った思想史、「思想史らしからぬ思想史」を語っている点で、どこか相通じるものがありました。私自身が持つ思想史の原風景・原体験には、「どうも世界を見渡すと、自分が思い悩んでいることを、違った時代や地域の人が同じように考え、しかし違った形で語っている」という驚き、そして自分は1人ではないんだという安堵感があります。私は思想史という営みが、今まで知らなかった人々、会ったことも話したこともない人たちの「想い」に遭遇すること、各人の「思い」を編んで1つの面を作ることに、自分もまた「想い」の列に連なること、こうした一連のプロセスだと理解しています。この1年間の軌跡は、この「連なる想いを編む」という言葉で表現できそうです。

「編む」という行為は、活動を共にすることで成立するものです。具裕珍さんと伊野恭子さんには、本郷と駒場という地理的制約を超え、さまざまな協働を行う上でお世話になりました。チームの一体感を保ちつつ、積み重なった既存のルールに押しつぶされない軽やかさ、突貫の手立てを2人から学びました。オンラインの場では、メルロ・ポンティ研究者の田村正資さんが、自らの身体の如く電子機器を操作していただきまし

た。共に英語で考える・書くための場づくりでは、立石さんの経験や判断にたくさん助けられました。フランス研究の高山さん・台湾研究の前野さんが、英語で話すことや書くことを「面白い!」と乗ってくれたおかげで、英語関係の企画をチームで行うことができました。英文校閲の指針をめぐって、週末に電話でやり取りをしたり、メールの文面を一緒に練ったことも思い出されます。オフィスでは多言語が飛び交うこともしばしば。マーク・ロバーツさんを交えて、定期的な英語ミーティングがありました。王欽先生とはプラグマティズムから日本のゆるキャラにいたるまで、英語でいろんなことをお話ししました。張政遠先生と前野さんの会話では、「懐かしい土の匂い」というフレーズが出てきて、フィールドを駆けながら言葉を形作る研究者の姿を垣間見ました。

修士時代、武田将明先生から「今、若澤さんがやろうとしていることは、形になるまで10年くらいかかります。時間はかかりますが、意味のある事なので大切に育ててください」というメッセージをいただきました。その時から数えて、おおよそ10年が経ちました。ヒューム・トリオで18世紀の対話篇を読むこと、共時性から18世紀の世界を横断することは、私なりの中間総括になります。激しく鮮やかだったこの1年間について、言葉は山ほど湧いてきますが語り尽くせません。その一瞬一瞬は、未だ過去ではなく現在です。あるいはその断片が、現在のみならず「これからの私」を構成する1部、であるようにも感じます。共時性を問い、そして共時性を生きた2020年度となりました。書院という場を共にしたすべての方にお礼申し上げます。さて、来年度は一緒にどんなことをしましょうか。

第6回 101号館映像制作ワークショップ

2021年2月26日

2021年2月26日、第6回101号館映像制作ワークショップが開催された。緊急事態宣言発令中のため、前回（第5回）同様、今回もオンラインでの開催となった。リサーチ・アシスタント3名（高原智史氏、日隈脩一郎氏、小手川将氏）による報告に対し、高山花子氏（EAA 特任助教）と崎濱紗奈（報告者：EAA 特任研究員）がコメントする形で会は進行した。

高原氏からは、当時の寮日誌に関する報告がなされた。氏は、とりわけ「茶話会」に関する記事に注目することで、留学生自身の声を浮かび上がらせることを企図している。高原氏によれば、1930（昭和5）年や1935（昭和10）年頃の資料からは、特設高等科への要求を伝える記事などを通して、留学生側からの反応を窺い知ることができる。

続いて小手川氏からは、氏が撮影した、駒場キャンパス内の梅や金木犀の映像が共有された。以前のワークショップで、石井剛氏（EAA 副院長）から、101号館の前にも植えられている「梅」は、「牡丹」と並んで中華文化圏において極めて重要な意味を持



駒場キャンパスの梅（撮影：小手川将氏）

つ花であるという指摘がなされた。これを受けて小手川氏は、今まさに咲き誇る梅の花をカメラに収めてくれた。

日隈氏は、1887年に刊行が開始された雑誌『哲学雑誌』を読み進めていると報告した。日隈氏が着目したのは、当時、一高と東京帝大の教員を兼任していた桑木巖翼（1874年-1946年）の存在である。特設高等科に関する直接的な関わりを洗い出すというよりは、当該雑誌に掲載されている論文・授業報告



1942（昭和17）年には留学生課長に就任した藤木氏は、日中戦争・太平洋戦争の開戦から日本の敗戦という激動の時代の一高に居合わせた人物である。興味深いことに、上に引用した短い文章には、1945年から学制改革までのわずか数年のうちには、朝鮮半島出身の学生も「留学生」として特設高等科に在籍していた事実が触れられている。植民地支配からの「解放」期、朝鮮戦争前夜の半島からやってきた学生が「朝鮮人留学生」としてここに姿を現している。前回のワークショップでは、朝鮮半島や台湾出身の学生——1945年以前、「植民地」であったがために、制度上「留学生」としては扱われてこなかったであろう学生——の存在を念頭に置くことの重要性も指摘されたが、この短い一文から、こうした問題系につながる手がかりを得ることができた。

藤木が「善隣友好」の「記念碑」と呼んだ特高館＝101号館に、現在東アジア藝文書院がオフィスを構えていることは、石井氏がつとに指摘してきたように、得難い良縁であると言える。しかし一方で、スタッフ間で議論されてきたように、その時代背景には、日本の帝国主義と、それへの抵抗運動としての抗日愛国運動といったように、両者の間には緊迫した関係性があったことも、同時に忘却されてはならない。抗日という思想的態度と、日常生活における日本人学生との交流・友情との間で、引き裂かれる思いを抱えて当時を過ごした留学生や植民地出身の学生も数多くいたであろう（そして、「沖縄」や「アイヌ」といった出自を持つ、「辺境」という立場に立たされた学生もいた

『教養学部報』28号（1954年2月）

等を通して、一高をめぐる当時の雰囲気を知ることが目的である、と氏は述べた。

3名の報告のあと、高山氏からは、1954年2月の『教養学部報』（1951年創刊）が紹介された。ここには、藤木邦彦（1907年-1993年）の筆による101号館（当時の通称は「特高館」であったらしい）にまつわる記事が掲載されている。藤木邦彦が遺した貴重な文書＝「藤木文書」の整理は、宇野瑞木氏（EAA 特任研究員）と高原氏を中心に昨年度より進められてきた一高プロジェクトの主要な活動の1つとして取り組まれてきた。

今回高山氏が紹介した記事からは、藤木が一高、とりわけ特設高等科に特別な思いを寄せていた様子を窺い知ることができた。以下の文章を引用したい——「特設高等科は、昭和24年の学制改革で、一高とともにその姿を消したが、その間通計200余名の優秀な中国人（戦後はさらに朝鮮人も）留学生を教育した。彼らは日常駒場寮で日本人学生と同居して、交情まことにこまやかであったし、今日なおその友情が続いている事例を私はいくつも知っている。特高館こそは、善隣友好の精神を象徴する、ひとつのささやかな記念碑ともいい得る。

1932（昭和7）年に講師として一高に着任し、

であろう)。

資(史)料的制約はあるものの、幸い今回の映像制作には、完全なるドキュメンタリーではない、ある種の「文学」的語りを導入する余地が含まれている。一枚岩では語りきれない間^{あわい}をどのように表現するか、今後の焦点になりそうである。最後に、小手川氏から、男子学生のためのホモソーシャルな空間から、学制改

革により男女共学となったことがもたらした(あるいは、もたらされなかった)ドラスティックな変化についても着目し、必ずしも滑らかな連続性を持たない、一高と現在の教養学部を繋ぐ凸凹な歴史を念頭に置く必要性が指摘されたことを付言しておく。

報告者: 崎濱紗奈 (EAA特任研究員)

連続シンポジウム

「世界哲学・世界哲学史を再考する」第1回

世界哲学史の可能性——中国とヨーロッパを付き合わせる

2021年3月9日

2021年3月9日、「世界哲学・世界哲学史を再考する」と題した連続シンポジウムの第1回「世界哲学史の可能性——中国とヨーロッパを付き合わせる」がZoomにて開催された。この連続シンポジウムは、2020年にちくま新書から全8巻および別巻が刊行された『世界哲学史』シリーズの編者である納富信留氏(総合文化研究科)をオーガナイザーとして迎え、「世界哲学(史)」というコンセプトのさらなる可能性を探究する試みの一環である。

第1回となる今回のシンポジウムには、オーガナイザーの納富氏に加えて、編者を務めた中島隆博氏(EAA院長)、論考を寄稿した石井剛氏(EAA副院長)が参加して、それぞれの発表者が「中国」と「ヨーロッパ」の関係を「世界哲学史」的な射程で捉えなおすためのアイデアを持ち寄った。議論の糸口を提供するため、崎濱紗奈氏(EAA特任研究員)と本報告の執筆者である田村正資(EAA特任研究員)が加わり、それぞれの観点からコメントを行った。

納富氏は、この連続シンポジウムの趣旨説明に続けて「世界哲学史の軸としての中国とヨーロッパ」と題する報告を行った。報告では図式化の弊害にも目配りを行いつつ、「世界哲学(史)」を構想する際のひとつの基軸として「ヨーロッパと中国」というテーマがありうると指摘がなされた。ヨーロッパから中国への影響だけではなく、中国がヨーロッパに与えた影響や、

西洋を相対化する視点として中国を研究することの意義を説いたうえで、そのテーマに関する日本独自の業績があることも紹介がなされた。

続いて中島氏は「中国古代からの視点」という題で報告を行った。ある概念はしばしば翻訳されて変容し、またもとの地域に逆輸入されていく。世界的な枠組みで哲学を考えるときには、このような概念の遍歴を問うべきではないかと中島氏は問題提起をした。中国にはヨーロッパの「神」よりも古い歴史があり、「古代中国」への独特な視線がある。また、中国には世界の成り立ちを論じる複数の経書が存在し、テキストの複数性がそのまま世界の複数性と向きあう態度を醸成してきた。場としての中国をめぐる哲学的な概念の変遷を問うこともあるいは可能であるだろう。

石井氏は「中国近代からの視点」という題で報告を行った。報告では中国における哲学的言説のあり方について近代中国で展開された議論が紹介された。とりわけ戴震をめぐる中国哲学構築の試みに触れて、中国においてはつねに、ヨーロッパ発祥の「哲学」を問うことが自らのアイデンティティを問い直す契機になってきたと指摘した。加えて石井氏は、清代考証学を例に挙げて、中国思想において文献研究が重視されてきた歴史にも触れた。中国思想の文献学的な特徴は、ヨーロッパの哲学的な伝統とも重なり、その意味でも「中国とヨーロッパを付き合わせる」際のひ



『世界哲学史』（全8巻＋別巻、ちくま新書）

とつの視点となりうるだろう。

3人の報告の後、まずは田村が「哲学の普遍性と言語」という観点から、崎濱氏は「世界 - 哲学 - 史」という複合語と「他者」「周縁」の関係を問いなおす観点からそれぞれコメントを行った。田村は『世界哲学史』第5巻に収録された新居洋子氏の論文「イエズス会とキリシタン」の内容を紹介し、「世界哲学」なるものがあるとすれば、それは言語的な隔たりを乗り越える営みであることを存在の条件とする必要があるのではないかと問題提起を行った。崎濱氏は伊波普猷をめぐった沖縄思想史を専門としている。同氏は、沖縄という日本を経由して近代が流入してくる場から見たとき、「世界哲学（史）」的なコンセプトについてどのようなことが言えるか、という視点からコメントを行った。

総合討論では、研究員のコメントに対して各報告者が応答し、そこにまた研究員が問いを重ねていくかたちで議論が展開された。「世界哲学史」という主題は、「世界」という言葉の拡がりによって様々なバックグラウンドを持つ人々の参加を促しつつも、「哲学（史）」という言葉の歴史的な負荷を避けられない。それゆえに「世界哲学史」とは、つねにジレンマをはらむ概念であると言える。議論のなかで、自らの状況に向き合う人々の「アイデンティティ」と、そ

の思考のなかで呼び求められる概念の「普遍性」の関係が話題になった。自らのおかれた立場や考えを他者と分かち合い、問題を解決していくためには一定の普遍的な枠組みがなければならないが、その言葉はつねに特定の人間の喉から絞り出されてくるのでなければならない。普遍的な言葉を希う個人こいねがの思考を、私たちがいかに拾い上げてきた／いくのか。その探究の営みとして「世界哲学史」を考えることもできるのではないかと、登壇者のひとりとして感じた。私たちは「世界哲学史」にどんな言葉を希うのか、今後のシンポジウムの展開が楽しみになる幕開けであった。

— シンポジウム参加者からの質問・コメント —

第1回シンポジウムの参加者からいただいたご質問・コメントの一部を紹介させていただきます。それぞれの回答はシンポジウム発表者個人の意見です

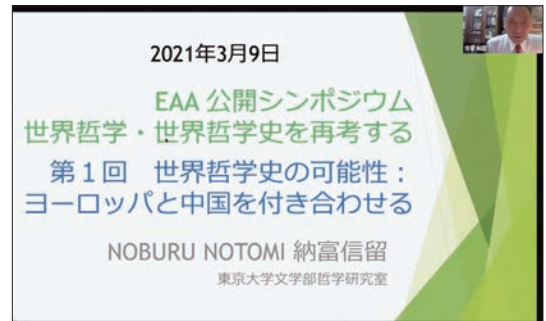
Q1 world philosophy の語にはいわば「多様ななかの統一」(worldliness?)という含意が込められていて、その点で「画一性」を示唆しかねない“global” philosophy を採らなかったというお話でした。他方、歴史学のほうでみると、宗教的普遍主義を含意する universal history、脱キリスト教的普遍性を含意するであろう world history、これに対して西洋中心主義

を批判し多元性を重視する“global” history という流れがあるようにも感じます。その点では、両分野で“global”という語の受け止め方が異なる部分があるのではないのでしょうか？さらに“world”概念への眼差しが歴史学ではより批判的だということはないのでしょうか？もしあるとすれば、哲学の側でそれにどう応答するかも問われるかもしれないと思われます。

納富： ご指摘ありがとうございます。world、global、universalといった言葉の使い方と概念には分野ごとの歴史と微妙な違いがあるようで興味深いところです。例えば哲学に関して universal philosophy という表現は見たことがありません。哲学はその存立自体が普遍性にあるからでしょう。私自身は、普遍性は多元的に追求できると考えています。ただ、タイトルにそれほどこだわつつもりはありませんので、global philosophy といった表現を使う海外の研究グループとも協調していきます。

中島： ご指摘のように world、global、universal の概念的な働き方は分野によっても違いがあり、それをどう考えるかが重要です。カント的な意味での普遍史 universal history は明らかに西洋中心主義的で、東洋はいわばアネクドートのような扱いでした。京都学派が受容した当時のヘーゲル的な世界史 world history にも西洋と東洋のヒエラルキーが厳然としてあり、その上での転倒を試みたのだと思います。それに対して、近年の global history はそれらの限界を超えていこうとする試みだと思います。それは従来の歴史の主体を批判する意義を有していると思いますが、主体をずらしたり消したりするだけでは、多元性が担保できない可能性は残ります。世界哲学 world philosophy とあえて使ってみるのは、世界という概念を鍛え直しながら、哲学における普遍性を問い直したいという思いがあります。

Q2 世界哲学という概念の提起は結局どんな問題を解決したいですか？この言い方自体はどんな目的と意義がありますか？世界史とのつながりはどんなことですか？



納富： 世界哲学は具体的な問題解決を目指すプロジェクトというより、哲学のあり方を再検討することで本来の哲学の営みを取り戻し、そこで現実の諸問題に対していく共同作業の場です。それを通じて、地球環境や文化対立や格差などの問題にも新たな視野が期待されます。また、世界哲学史は世界史（歴史分野）ともより綿密な連携をもって議論していきたいと思っています。

Q3 概念の世界的循環と概念の再発見というお話は興味深かったです。ですが他方で、概念の世界的循環で言われているところの「世界」が（抽象的な議論が交わされる）学問の世界に強く制約されすぎていないか心配になりました。こちら辺のことはどうお考えになるのか興味をもちました。

中島： 世界は学問的な抽象には取まらない具体的な現実にも関わっていると思います。悩ましいのは、その現実が成立するのもにも諸々の概念が深く関与していることです。そのダイナミックな構造を理解するためにも、概念の世界的循環を見ていくことができればと思っています。

納富： 哲学や哲学史の議論を進めていくのが研究・教育の場であるため、どうしても学問的な抽象性を帯びてしまうのは仕方ないかもしれません。ただ、「世界」が学問の領域を超えた現実を指す以上、より広い範囲の人々との連携を図っていくべきでしょう。その際の語り方が難解で専門的にならないような配慮が必要と

なります。

Q4 よく「世界の解像度を上げていく」というようなことが言われますが、人間の成長と呼ばれる過程が正にそれであるとすると、認識に枠組みを付与していく過程に於いて付与される枠組みというのは、その人が生きる社会に依拠したもものになってしまうのでは、と思い、究極の「普遍性」は生と死のその一瞬にしかないのでは、ということは今までは考えていました。しかし、本日のシンポジウムを経て、個々の集合体としての社会、として捉えたと、確かに普遍性を見つける事も出来る……しかし、その個々でさえも社会によって形成されたものだとする……という循環が生じるようにも思え、先生方はその循環のどこに、何を基準にして切り口を見つけるのだろうか、ということが気になりました。

納富： 私たち一人ひとり自身の視点や背景をもち、経験や他者との関わりをつうじてそれらを変容させています。その中で人々とともに語り考える可能性を模索する場が「普遍性」でしょう。普遍性はすでに持っている特性ではなく、議論や対話をつうじて確認され共有されていくべきもので、その限りで批判的な考察の対象でありかつそれを成立させる背景です。

Q5 崎濱さんが述べられたように、当事者性（「わたし」の特殊性）には、知の営みの普遍性を覆い隠してしまう側面があります。これに対して、中島先生の「自分は距離をとってAとBを比較する」方法に対する批判は、当事者性が（問う人に属する問題意識の次元のみならず）普遍性を確保するうえで必要であることを示唆しているように感じました。「普遍性の確保」という視点から、われわれが概念の循環に参加してゆくことの意味を語ることはできるでしょうか。

納富： それぞれの「わたし」は実は単一の固定された視点や主体ではなく、その内に多様な視点や

考えを持ち葛藤をかかえた複雑な存在です。さらに、他者との関わりにおいて視点を移動させていくことも重要です。それが哲学に参画するという営みです。概念はそういったダイナミズムにおいて自然に循環するはずだと期待しています。

中島： 当事者という概念は翻訳しづらい概念です。だからこそ、それは「わたし」というあり方を鍛え直してくれると思います。それは、従来の主体と客体といった対立を問い直し、「わたし」がより複雑に世界に関与していること、他者と関わっていることを考えさせてくれるのではないのでしょうか。

Q6. ヨーロッパ思想史と中国思想史は世界の歴史において2つのメインの思想史だと言えると思われませんが、最近（とくにアメリカなどで）80年代からのヨーロッパ中心主義批判に続き、「中国中心主義」も注目されるようになってきました。中国思想は西洋思想の「対等と言える他者」としてヨーロッパ中心主義批判には使われるのですが、最近になってこの「ヨーロッパと中国」というペアリング自体が「書記言語中心的、歴史意識中心的、文献学的、どちらもドミナント・カルチャーである」、哲学の枠を広げるにはヨーロッパ中心主義（西洋）の他者（東洋）ではあるがそれは「同類の他者」であり、「他の他者」ではない、という批判的になってきているのですが、このような指摘（批判）に対してどうお考えでしょうか。

ちなみに、このような批判は、アメリカでは「比較哲学における中国哲学の中心性」、その政治性の欠陥、と言った形で、主にデコロニアル哲学派（アフリカ、ラテンアメリカ、その他のクリティカル政治哲学）から出ているものです。批判の要は、「ヨーロッパ、アメリカ、中国」哲学という枠はそれぞれ「哲学脱植民地化」（decolonizing philosophy）を目標とするアフリカ、ラテンアメリカなどの批判哲学との対話を避け、新しい「東西世界優位」を成立するものであり、「南北問題」を問題化していないが、「世界」

を語る現在最も必要な課題は（思想においても）ドミネーションをテーマとする「南北問題」なのであり「東西」ではない、という点です。（アメリカ、特に今中国が経済的にトップにでた世界経済事情から出て来ている背景が比較哲学の分野にも影響し、それに対する批判が哲学内で起こっている、ということです。）

納富： 貴重なご指摘をありがとうございます。「東・西」や「ヨーロッパ・中国」という対立軸が周辺や他文化を見えなくしてしまう恐れはつねに心しておくべき点です。世界哲学はどのような仕方のもので「～中心主義」と呼ばれる偏向を排除する試みです。他方で、世界哲学史では、おそらくその二つの哲学伝統が大きな役割を果たしてきたことを認めて、それを権威化することなく批判的に見ていく必要があるはずです。シンポジウムで指摘したように、哲学営為の連続性と伝統、その展開の範囲と文字資料の伝承という点でこの2つの伝統は突出しているからです。その遺産をどう活かしつつ乗り越えて新たな哲学を構築するかが現代の課題であり、そのためには両伝統に深く関わる日本という視点は有効だと感じています。

Q7. 「哲学」という枠組み自体の変化への質問です。今までの「西洋哲学」を超える捉え方、という点は共通していると思いますが、言語、特に「書かれた言語」を超えた「哲学」を考えることは可能だとお考えでしょうか。もしもそうだとすると、それはどのようなところまで広げることが可能だとお考えでしょうか。

例えば、もう議論はされているかと思いますが、世界という場所を考えた場合、アフリカや中南米やアボリジニーその他の口承文化にみられるコスモロジーや信仰や世界像や人間像に「哲学」という表現は使えるか、踊りや武芸など言語でない表現に対して「哲学」は使えるか、また、もう少し広げると、漫画、お笑い、フィルム、SNSなどの最近の媒体には使えるか、その「哲学という表現を使うか」と問うのは誰で（私達哲学者ですが）、その思想的根拠や

軸となる概念などは決めることができるか、それともそれ自体対話者や研究対象やテーマにより根本的に動くものだとし、その都度考察されるべきなのか、というような質問です。

納富： 哲学が「言葉」を離れて成り立つか、その「言葉」において語りと書くこととの違いはどうなるのかという点は、古代以来の問題です。古代ギリシアでは書き物を残さなかった哲学者が多いますし（ソクラテス、ピュタゴラス、シノベのディオゲネス、ピュロン、エピクテトス）、インド哲学・仏教の伝統では言葉を語らないという哲学の方途もあります。しかしこの点は西洋の神秘主義でも同様で、かならずしも「東洋」の特徴ではありません。

現代で哲学という思考・議論を遂行するのは学問が培ってきた言葉ですが、哲学的に考察される対象は、日常の言葉や各種の文化活動や非言語的営為も含まれます。それを、身体や絵画や音楽などで表現するのではなく、言葉で論理的に遂行するのが哲学の共通手段だと思います。どのような「哲学の言葉」が可能か、ふさわしいかは、世界哲学がこれから考えるべき基本問題です。

Q8. 議論の最後の方に石井先生が取り上げてくださったインペアメントの視点が特に示唆に富んでいると思いました。インペアメントというのは、実際のところアイデンティティを成している「一部」のはずですが、「一部」だけによってこそつなげたり議論をしたりすることで、アイデンティティそのものの解放が初めて可能になるかもしれません。また、このような解放の前提として、「全部」を以って「一部」を切り離す生成があるのだとすれば、それは自覚を必然とする営みでなければならないはずでしょう。言い換えれば、学問／友情という生成ほど主体的でなければならない営みがないでしょう。しかし、自覚であれ主体性であれ、実践とかかわる問題としてその難しさを考えた場合、当事者問題と同様に、そして中心と周辺の問題と同様に、極めて慎重な態度を取る必要があると感

懐きました。「世界哲学」はこの難しさとのよ
うに向き合い、どのような方法論を提唱するの
かは、「世界」に一番期待されているところな
のではないかと理解しています。

石井： たいへん鋭い指摘であると思いますし、わ
たしもお意見に共感します。アイデンティティは人が生
きていくために大切な立脚点であると同時に、それが
時に人を生きづらくしてしまう現実もあります。それを
乗り越えていくためには、何らかの共感に頼る必要が
あると思います。Chinese philosophy を中国哲学から

中国語哲学へと読み替える運動について紹介しまし
たが、わたしはさらに中国語内部の多様性と非中心性
に注目するために Sinophone philosophy へと進む必要
があると考えています。Sinophone（中国語系言語の総
称）の領域では、多様なバックグラウンドを有し、「中
国」という包括的なアイデンティティには到底収まらな
いような人々による「世界」の分節が絶え間なくくりか
えされていると思います。

報告者：田村正資（EAA特任研究員）

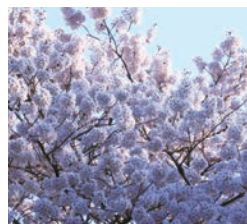
話す／離す／花す（11）

物語りのほとりて

死に対して花を添えること

宇野瑞木（EAA特任研究員）

2021年3月9日



「大往生を遂げたひとりの老婆の話である。彼女は、
幼なかつた少年の心を二度大きく動揺させた。一
度目は、「お前はお前のお祖父さんである」と告げる
ことによって。その後、しばらく、少年は見たこともな
い夢を見続けた。二度目は、彼女の死の直前である。
「わたしはお前を見守り続けるから」。この慰められ
ることのない慰めの言葉を、少年はいまだに忘れた
ことがない。」

——中島隆博「精神」『事典・哲学の木』

ちいさな子供は、道端でいろいろなものを見つける
ものである。子育てをするなかで、道の上をつぶさ
に眺めることを再びするようになった。路の上、土の
上には、いかに情報が満載であることか。歩くためだ
けの道となってしまう道は、小さな子供の目から
見ると非日常に溢れている。大雨のあと、道の端
に側溝に向かって流れる小さな川ができてのを見
つけ、光が差し込む水中や水面に木の葉や虫の死骸
や花びらや木の葉がどろどろ流されていくのを、じっと

しゃがんで眺めたり、キラキラと光るものが道を横断し
ていくのを見つけて、そのシロテンハナムグリの緑の
宝石のような美しさに感動したり、カエルや虫の死骸
を見つけては、その体を拾い集めて庭に持ち帰って
お墓を作ったりもした。

とにかく、お墓を庭に沢山作ってきた。虫が好きな
息子は、幼稚園に入った頃からカブトムシやクワガタ
を飼うようになった。卵が孵ると幼虫のまま冬を越し、
夏に成虫となり、卵を産んでから秋口に死んでしま
うと、息子と娘と庭にお墓を作った。お墓をつくる時
には、庭中の花をあつめてきて、花がないときは色づ
いた紅葉やねこじやしなどあつめてきて、石を円形
に並べて標とし、手を合わせた。そのような時、幼
園年少の頃の息子は、お墓にむかって「次の夏には
また会おうね」と声をかけていた。次の年に成虫に
なるカブトムシの個体は、このカブトムシと違う、と
いうことは思わないのが不思議だった。あるいは親子の
命の連続性をもって言っていたのかもしれないが、私
はその意味について聞くことはしなかった。

そして、気が付くとお墓はどこにあったかわからなくなっていた。人間とはじつに勝手なものである。こうした行為をするたびに、何をしているのだろうか、と思う。なぜ石を並べ花を添えているのか、そして掌を合わせるといって、言葉をかけるのだろうか。たまたま摘み取られた花もすぐに枯れてしまう。そして、このようなことをしても、生き物を飼うという行為に対するなんともいえない後ろめたさや罪の意識は拭ききれぬものではない——そのような思いも去来するのである。

昨年の晩秋に、近所の方から頂いたチューリップの球根を植えようと庭の土を掘っていた時、ぎょつとした出来事があった。おとしの秋に埋めたカブトムシの角の部分が出てきたのである。カブトムシの甲殻は丈夫で、2年くらいでは土にならずにしっかり形をとどめていることがある。わたしたちは、球根と一緒に角も埋めて、掌を合わせ、もう1度、弔うときの言葉を捧げた。ふさわしい言葉が見つからなかったが、それでも死者に何かの言葉をかけるという儀礼を省略すべきではないと思った。それはもう、「次の夏に会おうね」という言葉ではなかった。

「飛花落葉」という言葉が昔からある。花は風に散り、葉も風に落ちてしまうように、いつまでも変わらないものはない。人は死への向き合い方をどのように覚えるのか。2人の子供は、不思議なことに、幼稚園の時に「無常」というものを悟った。毎晩、わたしに聞いては泣くのである。「ああちゃん（おばあちゃん）は死んでしまうんでしょう?」「おかあさんは死なない?」と。

年長になった頃から、息子は寝る前に自分が死ぬということについても口にするようになった。驚いたのは、「大好きな人たちが死ぬのを見たくないから、自分が先に死ぬ」という言葉を発したことだ。大事な人たちの死は、彼にとってそれほど切実な問題なのである。上の子がそうであったように、気が付いたら、このような繊細な時期は過ぎ去ると思う。私たちはこのよ

うな思いを抱き続けながら日々を送れないのだから。でも、このコロナ禍で、彼はおばあちゃんとおじいちゃんが自分より死に近い存在であるということを強く感じ取り、そうしたことが影響して、このような言葉となったのかもしれないと思う。

こうした変化は、彼の中で虫の心を慮ることにつながっていったのだろうか。その夏の初めに、「虫かごで飼うということは虫にとって本当に幸せなのか」という問いに対して、彼のなかで明確な答えが出た。そうして息子は、カブトムシが自生するコナラなどの木々が森のようにになっているところがある大きな公園に持って行って、全てを手放すという一大決心をした。

わたしたちは、樹液が垂れている古いコナラの木を探し出した。そして、土からでてきて1週間もたたないカブトムシたちを虫かごから取り出して、1匹ずつ幹に放し、上へと登って確認できなくなるまで、その光る丸みを帯びた立派な姿を見ていた。はじめて幹に足をかけたときは戸惑っているような様子を見せていたが、そのうち自力でどんどん登っていった。風や光、世界というものはじめて体感していると私も息子も感じていた。この心はわたしの勝手な思いこみに過ぎないのかもしれない。人間とは自分勝手な存在だ。それでも、虫の心というものを、わたしたちは感じている気持ちになっていた。

翌日、大雨が降った。私はずっとあの幹にしがみついているであろうカブトムシたちのことを思っていた。もしかしたら、死んでしまったのではないか。それでも、自然の中に命をまっとうしたら幸せなのだ、と思いついてしまった。それから、時々私たちは、あのカブトムシたちはどうしているだろうね、と話し合った。

いまでも、ふとあの光と風のなかの木の場所に思いを馳せることがある。

写真撮影：立石はな (EAA特任研究員)

ソウル大学日本研究所セミナーに参加して

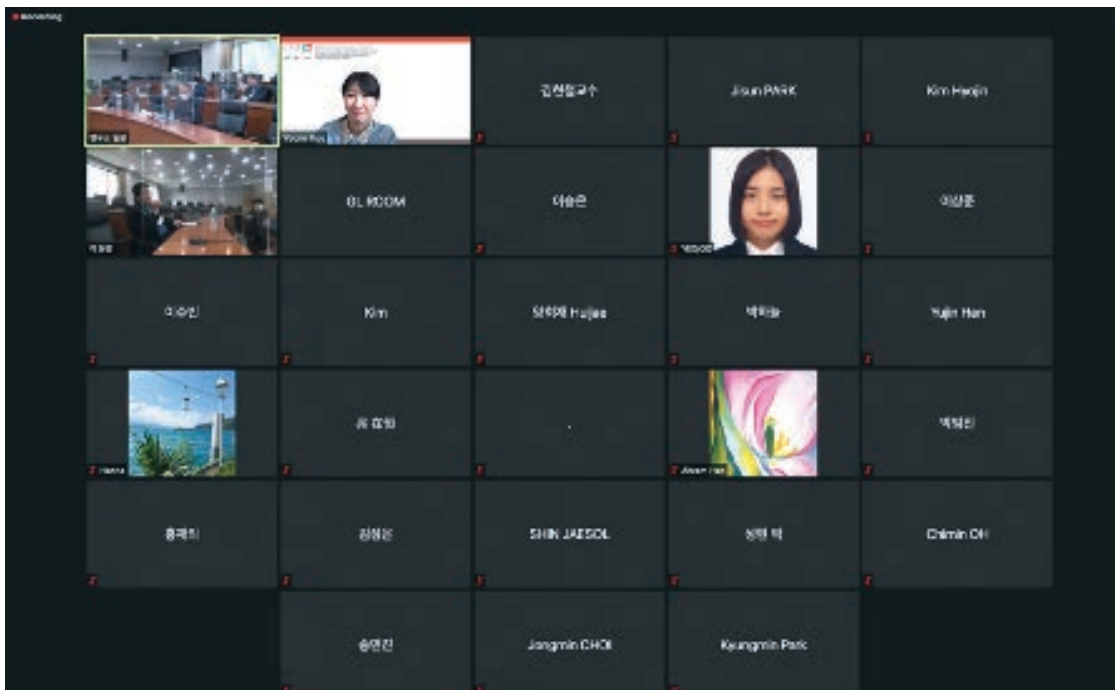
2021年3月9日

2021年3月9日にソウル大学日本研究所の「日本専門家招聘セミナー」に招かれる貴重な機会を得て、報告者は研究発表を行った。本セミナーは国内外の日本専門家を招き、最先端の研究動向を交換することを目的として、合計247回を数える長い期間開催されてきた。報告者もかつて大学院生として本セミナーを準備・補助・運営する立場だったが、こうして研究発表ができるようになったことが感慨深かった。韓国では3月に春学期が始まっており、忙しいなか先生方や学生さんたちが多く参加してくれた。参加者の中には2019年に日本に滞在してEAAにも縁があるパク・チョルヒ氏（ソウル大学）もいらっしやり、紹介を兼ねてEAAの話をすることもできた。ソウル大学日本研究所は人文学を中心に日本について多角的に研究・発信しているので、今後EAAとの交流が期待される。

さて、本セミナーで報告者は『東洋文化研究所紀要』第179冊に投稿した論文「日本政治における保守の変容への一考察——1990年以降の「保守市民

社会」の台頭に着目して」について報告した。冷戦終了から30年を経た日本と世界に共通する現象として取り上げられるものに、歴史修正主義や極端なナショナリズムを強調する政治・社会勢力（集団）の台頭がある（そこからいわゆる右傾化の議論が生まれたともいえる）。本論文では、こうした新しい政治・社会現象をどのように呼ぶべきか、という用語（概念）問題を切り口に日本政治・社会研究における用語のぶれを欧米の研究と比較し検討した。

保守か、右翼か、右派か、革新か、リベラルか、といったイデオロギーは、有権者にとって複雑な政策や政党の位置を理解し要約する手がかりとなる。またそれらは有権者と政治エリートとのコミュニケーションの体系でもある。その重要性を考えると、1990年代以降、日本の政治社会に台頭した右傾化勢力をどのように呼ぶべきかという議論は重要であろう。しかし、いわゆる極右政党が躍進している欧州で、「extreme right」や「radical right」といった用語の議論が活発



제247회 일본전문가 초청세미나

**일본정치에 있어서 보수의 변용에 대한 고찰
: 1990년 이후 “보수시민사회” 등장을 중심으로**

강사 **구유진(具裕珍)** 도쿄대학 동아시아어문서원 특임조교

시간 **2021. 3. 9. (화)12:30-14:00**

장소 **온라인(ZOOM을 이용한 Webinar)**

언어 **한국어**

코로나19 확산 방지를 위한 사회적 거리두기를 지향하고자 온라인으로만 진행합니다.
사전신청 없이 누구나 참여 가능하여 참가 링크는 홈페이지 등을 참조해 주시기 바랍니다.

 서울대학교 日本研究所
Institute for Japanese Studies 문의 : 880-8503, ip@su.ac.kr



EAA 東京大学東アジア藝文書院
EAST ASIAN ACADEMY FOR NEW LIBERAL STUDIES

ABOUT EVENTS BLOG PROJECTS 内輪SCAFFOLD

EAAダイアログ1
Cheol-Hee Park x Takahiro Nakajima
[박·철호 x 中島隆博]

EAA다이얼로그1을 주최합니다.
EAA다이얼로그1을 주최합니다.



になっていることに比べ、日本政治研究においてこうした用語・概念の問題はあまり議論されてこなかった。報告者は、右傾化勢力が既存保守政党の自民党に収斂される点と、自民党と連携してアドボカシー活動を行う点に着目して、「保守市民社会」という用語を提案している。「保守」と「市民社会」はそれぞれ長らく非常に複雑な議論を踏まえて成り立ってきた用語であるから、この用語は自ずと緊張を内包している（「市民社会」は長らく左派勢力を形容する際に用いられてきた）。しかし EAA 院長の中島隆博氏が提唱しているように、「複合語としての可能性」の角度から新たな用語で社会現象を理解してみることに価値があるのではないか。また「保守市民社会」という用語を通して、いわゆる右傾化を支える社会集団と自民党の連携を理

解し、その過程で日本政治における保守の内容に変容が生じたことが理解できるのではないかと報告者は主張した。

参加者の先生方からも、この緊張関係を内包した用語や日韓関係における市民社会の役割、日本の右傾化が海外や韓国でどのように理解されてきたかという点について貴重かつ真摯な質問やコメントをいただいた。久々に韓国国内での日本への理解と研究に接して交流を行うことができ、報告者にとっては感謝の念に堪えない非常に有意義な時間であった。こうした機会を設けてくださったソウル大学日本研究所と EAA に改めてお礼を申し上げます。

報告者：具裕珍(EAA特任助教)

EAAオンラインシンポジウム

30年後の被災地

2021年3月10日

2021年3月10日、EAA オンラインシンポジウム「30年後の被災地」が開催された。高橋哲哉氏（総合文化研究科）による基調講演「3.11に何を問うのか——パンデミックのただ中で」、および「30年後の被災地」をテーマとした座談会の2部構成で会は進行した。座談会には高橋氏のほか、中島隆博氏（EAA 院長）、石井剛氏（EAA 副院長）、國分功一郎氏（総合文化研究科）、王欽氏（EAA 特任講師）、そして

本シンポジウムの企画者である張政遠氏（総合文化研究科）が登場した。当初はオンラインと対面を組み合わせたハイブリッド方式での開催が予定されていたが、緊急事態宣言の延長に伴い、完全オンラインでの開催（Zoom ウェビナー）となった。限られた告知期間だったにも関わらず、当日は80名を超える参加者にお集まり頂いた。

張氏が指摘したように、国と東京電力は遅くとも「30



年後」の2051年までに、福島第1原子力発電所の廃炉を済ませると表明しているが、廃炉への道は依然として険しい。また、「30年後の被災地」というとき、「被災地」とは一体どこなのか。自分自身は「被災地」について何を、どこまで知っているのか。そこに住み、暮らしている人々、あるいは「(強制/自主)避難」によってそこを離れざるを得なかった人々の苦渋を想像することが、どのように可能なのか。このように前置きした上で、高橋氏は、自身が生まれ育った福島——故郷であると同時に、現在は住んではいないという自身の位置(position)を確かめつつ——について、「4つの犠牲」に焦点を当て、議論を展開した。「4つの犠牲」とは、過酷事故による犠牲、原発内部での被爆労働による犠牲、ウランの採掘現場での犠牲、放射性廃棄物から生じる犠牲、である。

「過酷事故による犠牲」を考える上で、数字上に

現れた犠牲(避難を余儀なくされた人々の数、帰宅困難区域の面積)については、言うまでもなく「倫理的な傷」(渡部純「失われた宝を名づけること」『現代思想』2021年3月号特集=東日本大震災10年)にも目を向ける必要がある。例えば「避難」という事態には、強制的に「避難」させられた人たち、「避難」したくてもできなかった人たち、あるいは、苦渋の上に故郷を去る/残ることを選択した人たち、といった複雑な位相が幾つも含み込まれている。自身の生の根幹をなしてきた価値観・倫理が根底から崩れる中、究極的な選択を迫られ、引き裂かれる。こうして刻み込まれる「倫理的な傷」は、現在進行形で続いている。

原発内部での労働者の犠牲という問題も深刻である。事故の収束作業のために、1日4000人という膨大な数の作業員が必要とされる。廃炉のためには、これを最低でもあと30年続けていく必要がある。高橋氏は、ある原発作業員の方の声を紹介した——「デモで廃炉、廃炉と掛け声がありますが、あれほど恐ろしいものはない」。ここには、現場で働く人の、反・脱原発運動に対する複雑な思いが込められている。実際の廃炉作業に関わる労働者は多くの場合、デモ行進に参加している人ではなく、様々な事情を抱えてそこへ辿り着かざるを得なかった「下層」の人々なのである。反原発・脱原発という理念を掲げ運動をすること自体が「悪」なのではない(むしろ、こうした理念を表明することは重要であろう)。しかし、そ



の掛け声の先には、廃炉までの長い道のりと、構造格差によって「プレカリアート (precariat: precarious proletariat)」という位置に追い込まれた人々に負われる犠牲が、確実に存在している。

さらに、忘れられがちな問題として、ウランの採掘現場での被曝の犠牲がある。ウランはカナダ、オーストラリア、ニジェールといった国々の、多くは先住民の生活空間であったところで採掘される。こうした場所は同時に、廃棄物の投棄場所になっているところもある。例えばアメリカでは、南西部を中心としてウラン鉱山が開発されてきたが、先住民の生活空間を汚染し尽くしたのち「国家犠牲区域 (national sacrifice zone)」と呼んで放棄してきた (参考: 石山徳子『犠牲区域のアメリカ核開発と先住民民族』岩波書店、2020年)。双葉町・大熊町の間接貯蔵施設が、日本最初の本格的な国家犠牲区域となるのではないかと高橋氏は懸念を示した。

言うまでもなく、これは4つ目の犠牲、放射性廃棄物の犠牲に深く関わる問題である。いわゆる「核のゴミ」である高レベル放射性廃棄物は、深地層処分という方法で処理するしかない。しかし、廃棄物が無害化されるまでには10万年以上の途方もない時間がかかる。ここでは、世代間倫理という問題が極限的な形で問われている。高橋氏は具体例として、フィンランドの放射性廃棄物最終処分場「オンカロ」や、アメリカのニューメキシコ州カールズバット近郊にある核廃棄物隔離試験施設に言及した。10万年・100万年という途方もない時を超えたコミュニケーションの不／可能性は、哲学者ジャック・デリダが提起した問い——「発信者の意図が裏切られる可能性がなければコミュニケーションは成立しない」——と通底している。

後半の座談会では、高橋氏の講演への質疑応答を交えつつ、多岐にわたる議論が展開された。とりわけ、座談会冒頭で繰り返された中島氏と高橋氏の「主権」をめぐる問題についてのスリングな応酬は聴衆を惹きつけた。また、中島氏が提起した、社会的想像力の「工学化」という問題は、石井氏が指摘した「システム」への疑義や、國分氏が抉出した「責任」をめぐる三つの概念——責任 (responsibility)・帰責性 (imputability)・自己責任 (at your own risk)

——へとリンクしながら、今日の膠着した状況を出来させている要因を炙り出した。わたしたちは現在、神話化された「科学」のもと、あらゆる領域が工学的発想のもと設計・評価される巨大なシステムの中を生きている。この巨大なシステムを稼働させているのは、紛れもなく、わたしたち一人一人である。しかし同時にこのシステムは、わたしたち一人一人がそれに対してどのように関与しているのかを、非常に見えづらくする。また、王欽氏が的確に捉えたように、システムは、既存の政治制度を脅かすはずの偶然的なものを、制度を強化するものとして必然化する。3.11や、今回のCOVID-19は、果たして日本社会の現状 (status quo) を一掃し得たのか。それとも、システムを長らえさせる「様々な意匠」を生み出したただけであろうか。もはやその全体像を捉えることが困難なほどの巨大なシステムの中で客体化されているわたしたちには、もはや為す術はないのだろうか。

ここで改めて「主権」について考えてみたい。高橋氏はジャック・デリダの主権論に触れつつ、「主権」とは「主権なるもの」という静的・本質的な概念として捉えるべきものではないと述べた。「主権」とは、さまざまな力が絡み合う中で生じてくる現象のことであり、それを言語化することによって概念化されるものである。そうであるならば、システムを一時停止させ、切れ込みを刻み、これを変化させるためには、さまざまな力を結集させ、「主権」的なる現象を生じさせる必要がある。「主権」は、それが無いと思っただけ無ければ無いし、具体化させようとするればそこに現れるものであるのだ (座談会で張氏や高橋氏、中島氏が繰り返し指摘したように、このことは、福島に限らず、沖縄、そして香港という問題系についても、同じく問われている)。

したがって、もはや為す術はないのだろうか、という先の問いに対しては、さしあたって次のように答えることができるだろう。為す術はある、しかしそれは、「主権」的なる現象を生じさせようと思志し、欲するか、それ次第である、と。そのためには、どのような世界を欲するか、その想像力を鍛え上げることが不可欠である。もし大学に意味があるとすれば、それは、システムを効率的に稼働させるために分業化された学知を競うためではなく、このようにあれかし、と世界を欲す

るための想像力を、あの手この手で構想するために存在していると言わなければならない。「学問」とは、このような行為に与えられた名前である。そのあり方を示して下さった登壇者の先生方、そして、長時間にも

かかわらず忍耐強く耳を傾け、質問を投げかけて下さった参加者の皆さま全てに感謝申し上げたい。

報告者: 崎濱紗奈 (EAA特任研究員)

第7回 101号館映像制作ワークショップ

2021年3月12日

2021年3月12日、第7回101号館映像制作ワークショップがZoomを用いて開催された。石井剛氏 (EAA 副院長)、WSのコーディネーターの高山花子氏 (EAA 特任助教) をはじめ担当RAの小手川将氏 (EAA リサーチ・アシスタント)、高原智史氏 (EAA リサーチ・アシスタント)、そして報告者の日隈 (EAA リサーチ・アシスタント)、さらにアドバイザーの田村隆氏 (東京大学)、星野太氏 (早稲田大学)、崎濱紗奈氏 (EAA 特任研究員)、映像制作に関するアドバイザーとして入江拓也氏 (SETENV) が参加者に名を連ねた。

まず高原氏より、中国人留学生を交えた旧制一高の茶話会・支那留学生茶話会の記録 (1930)、旧制一高の校長を務めた森卷吉 (1877年-1939年) が読んだ入学生式辞 (1935年) などの資料紹介が行われた。森は、一高が本郷から駒場に移転した1935年を挟んで、1929年から1937年まで校長として在任、この間、1932年には特設高等科が設置されている。一高の寄宿寮記録に残された茶話会の記録からは、一高生として、あるいは寮生として、留学生が「一高的なるもの」の下で分け隔てなく接せられていた事実が浮かび上がってくる。しかし、そうした「一高的なるもの」は、その概念としての空虚さこそが問題にされ得るという指摘が高原氏自身によりなされ、また石井氏からは、そうした空虚な概念が関与的に作られるものとして、留学生はどのようなポジションから関与できたのか、という疑問が呈された。この問いは、本プロジェクトにとって根本的な問いであろう。小手川氏からは、1935年に映画化され一高生の響きを買ったという中野実の戯曲『乾杯・学生諸君!』の内容

に関して発表があった。戯曲自体は滑稽みを抑えたものだったというが、現存しない映画版がどのように一高生を描いていたのかについて、想像がふくらむ。

プロジェクトの方向性を考える素材として高山氏や石井氏からは、1930年代を中心に日本と中国、朝鮮半島の関係を考えさせるような人々の名前が挙げられた。一高の予科に学び後に九州帝国大学医学部に入學、文学者・歴史学者として知られるようになる郭沫若 (1892年-1978年)、朝鮮半島が日本の統治下にあった1936年のベルリンオリンピック・マラソンで金メダルを取った孫基禎 (1912年-2002年) などである。「現在の視点から判断を下すのではなく、当時の生態系を踏まえた上で、この時代のことを考えることが必要」との石井氏からの助言は、一高における中国人留学生という特殊な立場の人々の視点を「^{ぬす}まない」ためにも不可欠な視角だと思われる。田村氏からは、映像化にあたって一高と101号館をどう描き分けるかというお題が出され、入江氏からは、最近ベルリン国際映画祭で銀熊賞を受賞した東大出身の映画監督・濱口竜介氏の作品に触れつつ、映像における「ことば」の機能と重要性について示唆を受けた。

「企画として離陸したのではないか」(星野氏)との言もあったように、今後は担当RAの映像化に向けた準備を中心としながら、まずは4月上旬にも撮影スタッフとの会合を設けるなど、具体的な作業にも進んでいきそうだ。コロナ禍の収束が未だ見通せないながらも、今後の報告を期待されたい。

報告者: 日隈脩一郎 (EAAリサーチ・アシスタント)

第5回「ジャーナリズム研究会」公開研究会

2021年3月14日

2021年3月14日、第5回「ジャーナリズム研究会」公開研究会が、40名の参加者を迎えて開催された。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、Zoomミーティングを使いオンラインで行われた。登壇者は巽由樹子氏（東京外国語大学）と前島志保氏（東京大学）である。司会は高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）が担当した。研究会は、本会を主宰する前島氏の挨拶と研究会の趣旨説明から始まった。出版・ジャーナリズムが急速に拡大した近代における各国、各言語の現象の解明や、領域横断的な研究の進展に期待を示した。その後、高原氏による発表者各氏の紹介に続いて行われた発表内容は、本会の関心事「東アジアと世界におけるジャーナリズムの創造と展開」にかかわり、各氏が現在取り組む新たな研究であった。

最初の発表は、巽氏による「帝政期ロシアのジャーナリズム——媒体と担い手の特性について」である。本発表ではこれまで皇帝の専制政治や検閲による抑圧、市民社会の脆弱性から未発達というイメージを持たれがちであった19世紀ロシアのジャーナリズムの特性が、媒体と担い手の側面から再検討された。巽氏によれば、19世紀ロシアのジャーナリズムは固有の特性をもって展開しており、リベラリズムや自由を是とする見地から離れて評価した方がよいという。巽氏は、帝政期ロシアジャーナリズムの源流である17世紀末から18世紀末までのロシア皇帝が主導した近代的出

版の起源を紐解いた。特に1783年の私人による印刷所・出版社開設と地方印刷所設置の許可が知識人階級の文筆活動を活発化させた点が重要であるという。

つぎに巽氏は、帝政期ロシアのジャーナリズムの特徴として皇帝や科学アカデミーなどの「官」の強い関与と、ドイツ系に代表される非ロシア系人材の多さを指摘した。前者について、先行研究ではゲルツェンなど革命派インテリゲンツィヤの出版活動が目される傾向があり、文人官僚のジャーナリズムはあまり検討されていないという。巽氏はプーシキンやゴロヴニン、ゼレノイの事例を挙げて、彼らが「厚い雑誌」と呼ばれる月刊誌を発行し、政治や行政の改革を唱えた点を示した。1860年代の農奴解放に伴う「大改革」期のジャーナリズムにおいては文人官僚らと革命派インテリゲンツィヤの間に出版・思想上の交流があったなど、文人官僚の出版活動が与えたインパクトは無視できないと巽氏は強調した。

後者については、マルクス社をはじめとするドイツ系書店とライプツィヒなど西欧の書籍取引の拠点都市とのつながりや、エフロンやヴォルフソンなどユダヤ系出版社とロシア帝国内のユダヤ系ロシア人の拠点都市との結びつきの重要性を示した。巽氏は、これらは近世以来のディアスポラでもたらされた国際商業ネットワークの残存であり、ロシアの出版の一翼を包摂したのではないかと推察した。

最後に巽氏は「官」との近さや非ロシア系人材の関与を改めて強調したうえで、第1次世界大戦時のロシアの報道や出版の研究にもつながる展望を述べた。マルクス社の絵入り週刊誌『ニーヴァ』に見る国民意識の複雑さや、週刊の準官製誌『戦争の記録』の一般社会への影響を例に挙げて、発表を締めくくった。

質疑応答では、ロシアのジャーナリズムの「官」と「民」を相互的に見る重要性を指摘した点に対して、フロアから好意的なコメントが出されるなど活発な議論がなされた。ロシア本国における近代ロシアジャーナ





リズム研究の動向に関する質問には、ロシア国立図書館での堅実な研究蓄積があるが、書物流通の研究は手薄で、民族的ネットワークへの注目や国境・分野をまたぐ視点が乏しいとの回答があった。非ロシア系人材の関与が印刷出版を容易にした可能性やその背景を問う発言には、検閲を避けるためにロシア国外で出版したり、新規雑誌の発行が難しいなか、既存の出版社が持つ雑誌発行権を賃借して雑誌を創刊したりする事例が見られたと説明し、19世紀後半に出版制限が一時的に緩和された可能性もであると述べた。巽氏の発表は、19世紀ロシアのジャーナリズムの知られざる特徴を、貴重な図版資料とともに、媒体と担い手という2つの側面から考察する大変充実したものであった。

5分間の休憩を挟み、会は後半に移った。司会による簡単な紹介の後、前島志保氏による発表「座談会というスキャンダル——談話的公共圏の成立」が行われた。現在の日本のあらゆる文字媒体に広く見られる座談会形式記事の歴史や社会的評価・役割の変遷から、このスタイルがいかなる言説空間の構築に寄与したかを明らかにするものである。

前島氏は最初に、これまで文芸誌・総合雑誌を中心に研究されてきた、昭和初期における座談会形式記事の流行についての定説を再検討する必要性を指摘。会話形式の記事としては文学誌では合評会記事があったが、様々な話題に関するものとしては婦人雑誌と当時呼ばれていた女性向け雑誌が取り入れ始め流行し、その後『文藝春秋』が「座談会」という名前を付け広めたということを示した。座談会記事形式はコストパフォーマンスに優れた編集手法として広

まっていたが、婦人雑誌では積極的に使われたのに対し、総合雑誌では取り入れが遅れ、使用範囲も限定的だったという。発表では、この差の背景を文体・記事形式自体の内在的要因に求める見方が採られた。

この時期の座談会形式記事のテキストで採用された文体は口語敬体だったが、この文体の定着にも歴史的な文脈がある。口語体は明治20年代に口語敬体と口語常体の2つに収斂し、第1次国定教科書で採用されて以降、雑誌の主要な文体になっていく。その過程で、次第に口語敬体は子ども・女性の文体として、口語常体よりも一段低く位置付けられていった。また、談話体の記事は明治期にも存在していたが、このスタイルもまたジャーナリズムのヒエラルキーの中で低位に置かれるようになった。婦人雑誌は「女性的」とみなされるようになった文体と内容、記事形式を引き受けることで、女性向けの媒体としての性格を強めていった。

次いで「透明な文体」の成立として、文体と事実との緊張関係が目玉された。使用されている文体の如何にかかわらず、初期の談話形式記事には談話であることが明示されていたが、1910年代にはそうした注記が消滅した。同時に口語敬体が談話体であるという認識も広まっていた。つまり文体の媒介性が後退し、「表象するもの」と「表象されるもの」の転倒が生じるようになったのだ。「談話形式で書かれたことは全て話された事実である」と無意識に受け取れるような状態になったことと関連し、様々な批判も受けるようになっていった。

口語体の定着以降、総じて談話形式の記事は、文



体・内容ともに周縁的、「女性的」、異端の文体による記事であった。しかしその文体はやがて広がりを見せ、男性を婦人雑誌の読者として呼び戻し、座談会が流行した頃には「男性的」とみなされていた『改造』、『中央公論』などの総合雑誌をも侵食することにもなった。その意味で婦人雑誌における談話形式の記事（特に座談会形式の記事）は、編集や参加者の選別などにおいて限界はあったものの、性差・年齢・地域・階層の差を越え様々な人々を言論の空間に巻き込む、一見「民主的」な場を提示していた、と結論付けられた。

フロアからは、談話体形式の記事が「女性化」したという内容について、より詳細な説明を求める質問があった。議論はその後の懇談会でも続き、明治期の座談形式の記事と昭和期の座談会記事との違い、座談会記事形式の世界的な広がり、日本語の言文一致運動とロシアにおける近代的文体の成立との比較、

ロシアとヨーロッパおよび北米の出版界のつながり、さらには、それぞれの地域における近代的な出版・報道文化および印刷文化の展開を世界史的な視野から考え直す必要性などが、活発に話しあわれた。

3回目のリモート開催となった今回の研究会は、ロシアの事例を介して、東アジアと欧米のジャーナリズムの展開を横断的に考察する視野を拓く契機となった。また、前回に引き続き、京都、北海道、韓国、ドイツといった遠方からの参加者も増え、オンラインによる開催の強みが活かされた。同時に、対面開催による自由闊達な議論と交流の再開を望む声も出た。両方を活かした形で、今後も研究会と議論を重ねていければと思う。

報告者:松枝佳奈(東アジアリベラルアーツイニシアティブ)
永嶋宗(東京大学大学院博士課程)

第1回 EAA修了式

2021年3月16日

2021年3月16日14時より、駒場キャンパス101号館セミナー室でEAAが開講する教育プログラム「東アジア教養学」第1回修了式が挙行された。首都圏ではいまだに緊急事態宣言が発令中であったため、オンライン中継を併用したハイブリッド方式で式を開催した。修了式では、まず中島隆博EAA院長より祝辞が述べられた。中島氏は、東アジア発の新しい学問

をめざす志に改めて触れるとともに、困難なパンデミック下の1年でEAAの学生たちがみせた若い「知性の輝き」を言祝いだ。祝辞に続き、中島氏から初の修了生である孔徳湧氏に修了証が授与された。第1期生、第2期生、EAAスタッフ、ならびにオンライン参加の来賓に囲まれ、セミナー室にはひととき大きな拍手が響き渡った。



修了証の授与



籾本器氏による送辞



101号館前での集合写真

その後、在校生を代表して、籾本器氏から孔氏に向けて送辞が述べられた。籾本氏は、入学以来の先輩である孔氏とのエピソードを回顧するとともに、プログラム開講後まもなく始まった「コロナ下」の学生生活で、孔氏の積極的な活動が他の学生にとって導きであったと述べた。

この送辞に応え、修了生の孔氏が答辞を述べた。孔氏は自身のEAAでの経験について、穏やかでは

あるが、熱を帯びた調子で語った。孔氏がプログラムで学んだ大きな事柄は「揺れ動く」大切さであったという。孔氏は自身のあり方をめぐり葛藤し、かつ何かを成し遂げることを渴望するなかで「東アジア教養学」プログラムに出会った。プログラムの必修授業「東アジア教養学理論」、「東アジア教養学演習」で古典のテキストを読み、孔氏は古典の先人たちが葛藤や渴望に対して鮮やかな答えを示してくれたように



孔徳湧氏による答辞

感じたという。しかしそれと同時に先人たちにも少なからぬ矛盾や「過ち」があったことを踏まえ、悩み続けながら「揺れ動き」「学問する」ことが重要であると

実感を得た。孔氏は不確定な現実の不安に対して「揺れ動き」つつも、私たちはそれに向き合う作法を会得していく必要があるだろうと述べた。最後に「パンとバラ」のたとえを取り上げ、孔氏は卒業後もふたたび新しい不安に自身は「揺れ動く」であろうが、生きるための「パン」のみならず、人生に深い感動を添える「バラ」を引き続き追い求めていきたいと答辞を結んだ。

修了式の最後には参会者一同で集合写真を撮影した。この日はプログラムへ新たに加入した第2期生が第1期生と顔合わせする最初の機会でもあったため、修了式後も学生たちは名残惜しそうに相互に長い議論を交わしていた。「commencement」（始まり、卒業式）の語が示す通り、終わりはまた始まりでもあることに深い感銘を受けたひとときであった。

報告者：具裕珍(EAA特任助教)

高山花子(EAA特任助教)

前野清太朗(EAA特任助教)

EAA国際オンラインシンポジウム

一高中国人留学生と101号館の歴史

2021年3月17日

2021年3月17日、Zoom ウェビナーにてEAA 国際オンラインシンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」が開催された。本シンポジウムは、教養学部創立70周年の一環としてEAAで企画された同名の展示会を記念して2020年3月21日に開催が予定されていた。しかしCOVID-19の流行拡大によって延期となり、このたび1年越しでシンポジウム開催に漕ぎつけることができた。完全オンラインでの開催となったが、多くの方から関心を寄せていただき、日中両国を中心に参加者100名を超える盛会となった。

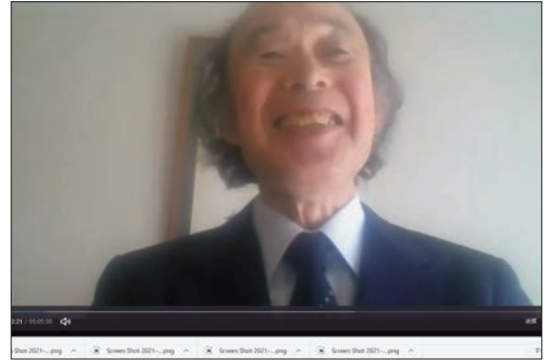
まず石井剛氏（EAA 副院長）司会のもと、太田邦史氏（東京大学）が総合文化研究科長・教養学部長として開会の辞を述べた。太田氏は、旧制第一高

等学校（以下「一高」）における教養教育が、現在の東京大学教養学部における教育の礎となっていることを指摘しつつ、個人的な明察（駒場寮のなかの一棟）の思い出なども含めながら開会の辞を締めくくった。

中島隆博氏（EAA 院長）による挨拶の後、報告者の宇野瑞木（EAA 特任研究員）が開催趣旨を説明した。EAA 駒場オフィスがある101号館は、一高時代、中国人留学生に向けて教育が行われた「特設高等科」の講義棟であった。EAAでは101号館の歴史をふまえて、2019年3月に「一高プロジェクト」を立ち上げた。そして「藤本文書」（1943年-1945年頃の一高留学生に関わる未整理の資料群）の整理、101号館エントランスでの展示企画を経て、COVID-19の



太田邦史氏（東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長）



大里浩秋氏（神奈川大学名誉教授）

影響下、2020年度はWEBサイト上でのコンテンツ公開を進めていった経緯を述べた。

その後、1990年代後半より日本において中国人留学生史研究を牽引してきた大里浩秋氏（神奈川大学）が最初の基調講演「中国人日本留学の歴史に思うこと」を行った。大里氏は、まず1960年代の自身の教養学部における学生生活で101号館や明察に出入りしていた記憶、そして魯迅『藤野先生』をきっかけにこの分野の研究に入ったいきさつを披露した。今回の報告のために大里氏が依拠した資料は、東京大学文書館に保存されている『支那留学関係』、『留学生関係』、『留学生関係書類』である。1920年代より「対支文化事業」の一環として東京帝国大学は中国人留学生受入を行っていた。受入に際した東京帝国大学と外務省・文部省とのやりとり、1938年まで留学生向け「内地」修学旅行・研修旅行が実施されていた事実、満洲事変以後に「満洲国」留学生と「中華民国」留学生の待遇の乖離が拡大した様子を

説明していった。以上の資料的事実の紹介に合わせて当時の学生についての大学側の調査記録も紹介された。大里氏の講演は、講演東京帝国大学との関係が不可分であった当時の一高の状況を解明するに際して、貴重な視座を与える内容であった。

2人目の基調講演者である汪婉氏（北京大学／東京大学）は「駒場での留学体験——東大は開かれている」と題して、1989年から1996年まで、総合文化研究科で学んだ体験を語った。中国史研究の並木頼寿氏のゼミに参加した思い出や、駒場が各国の留学生・研究生の割合の多い国際色豊かな雰囲気だったことが紹介された。そして汪氏は、駒場の学問の特徴が国際的・総合的・学際的であると述べたあと、留学生の人格形成に駒場の教員とのコミュニケーションが大きな影響を与えていたと、ご自身の体験にもとづいて指摘した。汪氏は修士論文で、京師大学堂の「師範館」における服部宇之吉らの教育活動について論じたのち、博士論文の成果を『清末中国対日教



宇野瑞木氏（EAA 特任研究員）



汪婉氏（北京大学国際戦略研究院理事／東京大学グローバル・アドバイザー・ボード委員）

育視察の研究』（汲古書院、1998年）として上梓した。以後は、中国における教育改革の内実や「国民教育」を目指して実施された学制の地方浸透などについて研究を行ってきたことを述べた。研究のバックグラウンドを示した後で、汪氏は、中国から日本への留学派遣・受入の意味が時代ごとに大きく異なってきたこと、中日両国の相互理解・相互尊重のために相互派遣が果たす現代的な役割、そして東京大学が今後、アジアにどのように向き合っていくかを提示することの重要性について問題提起を行った。質疑応答では、今日の国際語としての英語の運用について質問が上がり、留学先の言語を学ぶことの意義が議論されるなど、大学の国際化の未来像を思考する契機になる基調講演であった。

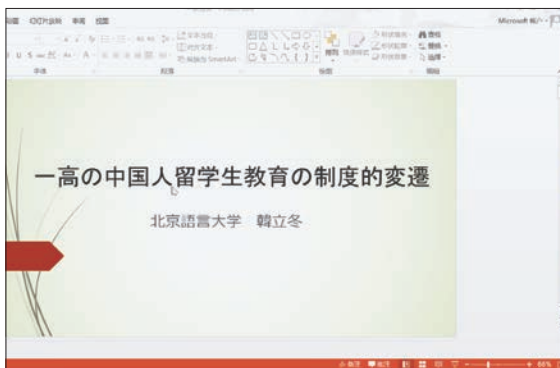
その後、休憩をはさんでパネル「特設予科・特設高等科及び当時の中国人留学生について」に移った。

最初に、韓立冬氏（北京語言大学）による「一高の中国人留学生教育の制度的変遷」と題された特別



田村隆氏（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

講演が行われた。「一高プロジェクト」では、「一高中国人留学生と101号館の歴史展」を開催するにあたって、韓氏の著書『近代日本の中国留学生予備教育』（北京語言大学出版社、2015年）に大きく依拠しており、パネルの最初に一高特設予科・高等科の沿革についてお話しいただいた。韓氏は、一高における留学生受け入れの歴史を、(1) 特設予科成立以前の中国人留学生受け入れ（1899年-1921年）、(2) 「五校特約」下の特設予科（1908年-1922年）、(3) 「対支文化事業」に組み込まれた特設予科（1923年-1932年）、(4) 「対支文化事業」下の特設高等科（1932年-1945年）の4段階に分け、その上で各時期の日中の情勢や制度的変遷の影響下での志願者や入学者の増減、質の変化などについて検討を行った。質疑では、日本人学生と独立したクラスで3年間学ぶこととなった特設高等科において、日中学生の交流が課外活動など場でどの程度なされたのか、といったことが議論された。



韓立冬氏（北京語言大学漢語国際学部教師）



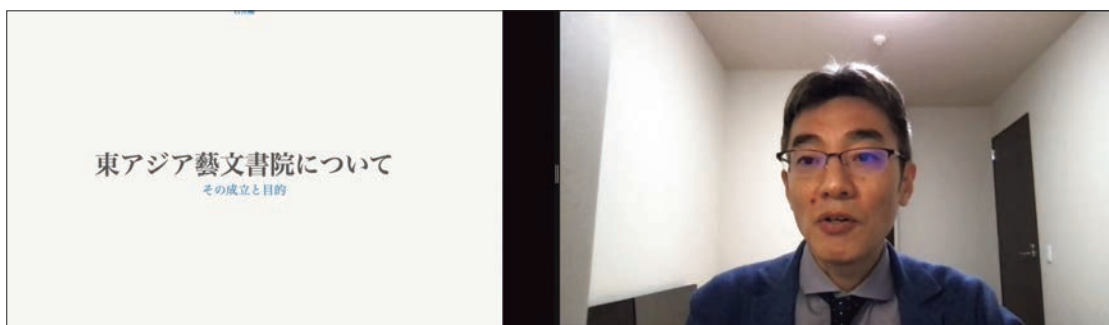


薩日娜氏（上海交通大学科学史与科学文化研究院教授）

続いて、4名が研究発表を行った。最初は田村隆氏（東京大学）の「狩野亨吉文書の清国留学生資料」と題した発表であった。「狩野亨吉文書」とは、明治31年から39年まで一高の校長を務めた狩野亨吉（1865年-1942年）が残した校務文書、書簡、日記、授業ノートなどからなる資料で、現在駒場博物館に所蔵されている。田村氏は、この「狩野亨吉文書」の調査に、2017年以来、科学研究費補助金を活用したプロジェクトにおいて継続的に取り組んできた。その成果が、昨秋に東京大学デジタルアーカイブズ構築事業の一環としてデジタル公開された「第一高等学校関係文書」と「清国留学生関係文書」である。その上で、とくに「清国留学生関係文書」を取り上げて資料の活用例を示した。注目されるのは、狩野亨吉が一高における中国人留学生の最初の受入（1899年）時の校長である点である。初めて浙江省から留学生8名を聴講生として一高に迎えた際の入学式辞草稿には「尤モ注意シテ善隣ノ道ヲ欠クコトナカラントヲ務メヨ」といった文言が見える。この

他にも、英語の試験監督を夏目金之助（漱石）が担当していたこと、同僚には『吾輩は猫である』の「津木ピン助」のモデルとなった杉敏介がいたこと、当時の授業の時間割及び担当教員表、新築された「衆寮」が谷崎潤一郎の小説に出てくるなどの事例を紹介し、多様な同時代資料を繋ぐことによる文学研究等への活用の可能性を提示した。

2番目の発表は、薩日娜氏（上海交通大学）の「服部宇之吉と京師大学堂の留学生派遣事業」であった。同氏は、日清戦争の敗北と洋務運動への反省から「日本の教育」が清末中国の教育モデルとなったこと、そして京師大学堂が創設されるに至った経緯が説明された。京師大学堂が軌道に乗り出した1902年に「総教習」として招聘されたのが服部宇之吉（1867年-1939年）であった。薩日娜氏は、東京大学駒場図書館に現存する一部未公開の服部関係資料と北京大学所蔵資料を対照しながら、服部が京師大学堂で授業を担当しちち師範館正教習および総教習として師範館の管理運営全般に指導者として関わったことを明ら



石井剛氏（EAA 副院長）



高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）

かにした。さらに京師大学堂の留学生派遣事業を通じて日本に派遣された留学生が、帰国後に20世紀初頭の中国における理科教育の近代化に貢献したことを明らかにした。数学という学問分野の近代化について、日中両国をまたぎ双方の資料を突き合わせて明らかにする手法は、他の学術分野の近代化プロセスの解明においても応用可能であろう。また元留日学生が中心となり設立した中国数学会が、中国における欧米の科学用語の訳語を定めていたことは、欧米の思想・学問の翻訳と循環を具体的に示す事例として注目されよう。

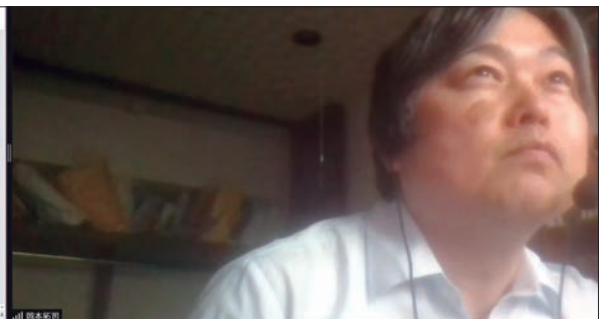
3番目の発表者である高原智史氏（EAAリサーチ・アシスタント）は、「森巻吉と中国人留学生」と題し、特設高等科設立（1932年）と一高の駒場移転（1935年）の時に一高校長であった森巻吉（在任1929年-1937年）とその時代の日中学生の交流に着目した発表を行った。森と中国人留学生との関わりは古く、1904年の森の大学卒業直後にまで遡る。森は清国官費留学生の英語授業の担当として、一高での教歴を



孫安石氏（神奈川大学外国語学部教授）

スタートさせた。その後1908年には一高の講師、翌年に教授となり、留学生の英語教育を引き続いて担当した。以上を確認した上で、高原氏は留学生教育に多大な関心を有していた森校長の入学式式辞の草稿や、当時の茶話会に関する寮日誌の記録などから一高内部の言説を取り上げ紹介した。高原氏によれば、これらの言説からは一高生にとって何より重要視されていた寮生活の共同を通じて日中融和が可能となることの認識が見て取れるという。一方、こうした籠城主義ともいわれるような寮生活至上主義はあくまでも日本側の価値観を提示しているに過ぎず、留学生に必ずしも共有される価値観ではなかった。さらに言えば一高内の言説と世論との乖離が当時生じつつあった点についても高原氏は指摘した。最後に、こうした問題を通し、エリート養成校である一高において、中国人留学生という他者を制度的に抱えたことからくる軋轢を明らかにしていくことは、近代日本における青年の思想動向を知る上でも重要な問題提起となりうると述べた。

最後の発表者である孫安石氏（神奈川大学）は、「清



岡本拓司氏（東京大学大学院総合文化研究科教授）



上段左側から、石井剛氏、宇野瑞木、岡本拓司氏。中段右側から、薩日娜氏、田村隆氏、汪婉氏。
下段右側から、孫安石氏、高原智史氏、大里浩秋氏。

末から民国時期の日本留学案内書の系譜——章宗祥『日本遊学指南』を中心に」と題して発表を行った。孫氏は、中国からの日本留学がピークを迎えた20世紀の初頭に、留学生たちが参考にした留学案内書に着目した。中でも広く読まれた章宗祥編の『日本遊学指南』を取り上げ、実はその内容の多くが明治期に発行された日本国内の東京上京者への案内書『東京遊学案内』に拠っていたという興味深い事実を明らかにした。その上で章宗祥編の『日本遊学指南』の内容を紹介し、さらに他の崇文書局編『日本留学指掌』（崇文書局、1905年）や木川加一・田中亀治編『東瀛遊学指南』（日華堂、1906年）等との比較を行い、中国人留学生史研究の先駆者・実藤恵秀が扱っていなかった資料も視野にいれながら、新たな知見を示した。以上の豊富な資料に基づく分析に加え、留学において人とのめぐりあわせが大事であると孫氏自身が実感されているというお話と、同じ資料でも世代が代わることで資料の見方も変わるとして新しい世代の研究への期待を示された点も印象深かった。

以上の特別講演及び4名の研究発表を受け、ディ

スカサントの石井剛氏（EAA 副院長）、岡本拓司氏（東京大学）から、それぞれ重なりながらも、別の角度からの問題提起をもって応答がなされた。

石井氏は、まずEAAロゴマークのモチーフにおける含意を解説しながらEAAの成立と目的について述べた。ロゴに使われた赤系統と青系統の色は北京大学と東京大学のシンボルカラーであるのみならず、中国神話における陰陽・水火といった相反するものの循環運動としての世界把握を示している。またロゴの形状は漢字文化圏の書物を象徴する意匠としての「魚尾」と、やはり漢字文化圏における学びのトポスたる書院を示していると述べた。石井氏は、これらのデザインには東アジアから新たにリベラルアーツを発信する意図が込められていると説明した。その上でEAA自体も「時代性」と共に立ち上がったことを自覚し、一高が駒場移転後に日中戦争へと突き進んでいった「時代性」と、一高の教養教育・学問との関係を「重い遺産」としてふまえながら、歴史に学んでいく必要があることを語った。

岡本氏は、森巻吉の後に一高校長となった医学者

の橋田邦彦を取り上げ、彼の「科学」と「日本の把握」「東洋的精神」を結びつける言説が当時の「時代性」に歓迎されたことを指摘した。橋田校長の言動に対して当時の一高生は懐疑的な反応を示した一方で、彼らのエリート意識は中国人留学生に対する排外的な眼差しを露わにするような側面を有していた。また一高の教員たちが掲げた「善隣」「友邦」という融和を促す言葉の響きには、先進国が後進国を先導するという意識があったことも鋭く指摘して、パネル発表者への応答を行った。

質疑では、科学的精神の日本的把握が戦後どのようになっていったのか、また一高における明治大正昭和を通した「科学」という用語の意味変遷について議論が行われた。さらに、当時の留学生史を考えるにあたって、従来の日中関係史という枠組みからのみならず、双方が近代的学問の手本としていた欧米を視野に入れて把握していく必要があるという認識が共有された。また「中国人留学生」といった時の「中国」の内容も時期によって多様かつ複雑であること、

「時代性」と一高教育の関係を常に批判的に検討していく視点が不可欠であることが確認された。また会場からもZoomのQ&Aに多くの質疑や資料に関する情報が寄せられ、一高のみならず、国内外の資料の広がりを感じた。

議論はつきなかつたが、石井氏より最後の締め言葉として、このシンポジウム、ひいてはEAAの一高プロジェクトが、これまで多くの方々との出会いと協力があったからこそ可能になったものであることを振り返り、改めて感謝の意が表され、閉会となった。

本シンポジウムの開催により、EAAが初年度から取り組んできた一高プロジェクトは1つの区切りを得た。今後ここで共有された新たな問題意識と人とのつながりを糧とし、駒場に眠る一高留学生資料の整理・公開を進めながら、より一層の共同研究の展開をめざしていきたい。

報告者：高山花子(EAA特任助教)
宇野瑞木(EAA特任研究員)



2020年度活動報告

資料編

2020年度EAA開講科目リスト

2020年度「東アジア教養学」プログラム生リスト

2020年度EAAメンバーおよび連携教員リスト

EAA刊行物リスト

EAAラジオリスト

EAAメディア関連リスト

RESEARCH UNIT別INDEX

TOPIC別INDEX

2020年度EAA開講科目リスト

開講	開講科目名	講義題目	担当講師
S1	東アジア教養学演習I (1)	近代の古典を読む	王欽
S1	東アジア教養学演習II (1)	近代の古典を読む (TA Session)	王欽
S1	東アジア教養学理論I (1)	来るべき普遍的なものへ	王欽
S1	東アジア教養学理論II (1)	来るべき普遍的なものへ (TA Session)	王欽
A1	東アジア教養学演習I (2)	東アジア教養学を読む	張政遠
A1	東アジア教養学演習II (2)	東アジア教養学を読む (TA Session)	張政遠
A1	東アジア教養学理論I (2)	東アジア教養学概論	張政遠
A1	東アジア教養学理論II (2)	東アジア教養学概論 (TA Session)	張政遠
A1A2	世界哲学と東アジアII (2)	東西文明学II (思想と批評2)	王前
A1A2	世界哲学と東アジアIII (2)	西田哲学を理解する: 「場所」論文を中心に	朝倉友海
S1S2	世界歴史と東アジアI (1)	Media and modernity in Japan	前島志保
A1A2	世界歴史と東アジアI (2)	Critical approaches to East Asia	ジョシュア・バクスター
S1S2	世界歴史と東アジアI (3)	The politics of space: An urban history of Tokyo	ジョシュア・バクスター
S1S2	世界歴史と東アジアII (1)	東西文明学	李彦銘
S1S2	世界歴史と東アジアIII (1)		伊達聖伸
S1S2	世界文学と東アジアI (1)	Modern Japanese literature and literary theories	イリナ・ホルカ
A1A2	世界文学と東アジアI (2)	愛と死: 二十世紀中国文学と社会	王欽
A1A2	世界文学と東アジアI (4)	Language, power, and identity in contemporary Japanese literature	イリナ・ホルカ
S1S2	世界文学と東アジアII (1)	文学で知る中国の古典と現在	鄧芳
S1S2	世界文学と東アジアIII (1)	中国現代文学史論	鈴木将久
A1A2	世界文学と東アジアIII (2)	批評について考える	武田将明
A1A2	社会・環境・健康と東アジアI (2)	East Asian and transnational cinemas	マーク・ロバーツ
集中	社会・環境・健康と東アジアII (1)	東西文明学II (言語と歴史3)	白春花
A1A2	社会・環境・健康と東アジアII (2)	東西文明学II (国際社会科学2)	菊池真純
A1A2	社会・環境・健康と東アジアII (4)	ライフストーリーから読み解く戦後台湾都市生活史	白佐立
A1A2	社会・環境・健康と東アジアIII (2)	アガンベン『カルマン』を読み、意志と行為と罪について考える	國分功一郎
A1A2	東アジア教養学特殊講義 (2)	UTokyo-PKU joint course “East Asia and the world under the pandemic”	王欽
集中	東アジア教養学特殊演習		開講せず
集中	東アジア教養学実習 (2)	Summer institute 2020 “Personal thoughts and experience under the pandemic”	王欽
集中	インターンシップ		石井剛

任意科目

S1S2	高度教養特殊講義 (東アジア教養学)	30年後の世界へ—— 「世界」と「人間」の未来を共に考える	石井剛
------	-----------------------	----------------------------------	-----

2020年度「東アジア教養学」プログラム生リスト

氏名	所属	学年
杜之韵 (DU Zhiyun)	PEAK国際日本研究コース	4年
金楨峻 (KIM Jeongjun)	文学部人文学科社会学専修	4年
金城恒 (KINJO Hisashi)	教養学部教養学科地域文化研究分科 アジア日本研究コース	3年
孔德湧 (KOU Tokuyu)	経済学部経済学科 2020年度「東アジア教養学」プログラム修了	4年
熊文茜 (KUMA Akane)	経済学部経営学科	3年
円光門 (MADOMITSU Mon)	法学部第3類 (政治コース)	3年
三船大制 (MIFUNE Taisei)	PEAK国際日本研究コース	4年
豊元慶太郎 (TOYOMOTO Keitaro)	教養学部教養学科地域文化研究分科 アジア日本研究コース	4年
王嘉蔚 (WANG Jiawei)	文学部人文学科東洋史学専修	4年
籾本器 (YABUMOTO Utsuwa)	教養学部教養学科総合社会科学分科 国際関係論コース	4年



2020年度 EAAメンバーおよび連携教員リスト

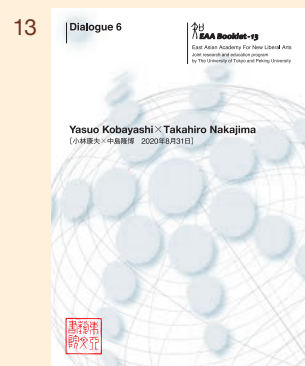
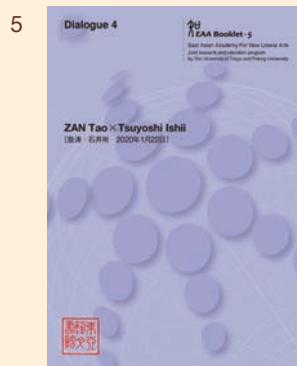
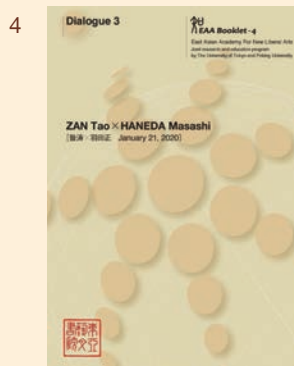
氏名	所属・職名	リサーチ・ユニット
朝倉友海 (ASAKURA Tomomi)	総合文化研究科・准教授	RU-P
張政遠 (CHEUNG Ching-yuen)	総合文化研究科・准教授	RU-P
伊達聖伸 (DATE Kiyonobu)	総合文化研究科・准教授	RU-H
二井彬緒 (FUTAI Akiwo)	EAAリサーチ・アシスタント	
羽田正 (HANEDA Masashi)	EAA学術顧問／東京大学副学長	RU-H
橋本英樹 (HASHIMOTO Hideki)	医学系研究科・教授	RU-S
日隈脩一郎 (HIGUMA Shuichiro)	EAAリサーチ・アシスタント	
胡藤 (HU Teng)	EAAリサーチ・アシスタント	
伊野恭子 (INO Kyōko)	EAA学術支援職員 (東洋文化研究所)	
犬塚悠 (INUTSUKA Yū)	EAA フェロー	
石井剛 (ISHII Tsuyoshi)	EAA副院長／総合文化研究科・教授	RU-P
國分功一郎 (KOKUBUN Koichiro)	総合文化研究科・准教授	RU-S
具裕珍 (KOO Yoojin)	EAA特任助教 (東洋文化研究所)	RU-S
小手川将 (KOTEGAWA Sho)	EAAリサーチ・アシスタント	
前野清太郎 (MAENO Seitaro)	EAA特任助教 (総合文化研究科)	RU-H
前島志保 (MAESHIMA Shiho)	総合文化研究科・准教授	RU-L
森貴志 (MORI Takashi)	EAA フェロー	
中島隆博 (NAKAJIMA Takahiro)	EAA院長／東洋文化研究所・教授	RU-P
野原慎司 (NOHARA Shinji)	経済学研究科・准教授	RU-S
納富信留 (NOTOMI Noburu)	人文社会系研究科・教授	RU-P
マーク・ロバーツ (Mark ROBERTS)	EAA特任研究員 (総合文化研究科)	
崎濱紗奈 (SAKIHAMA Sana)	EAA特任研究員 (東洋文化研究所)	RU-H
鈴木将久 (SUZUKI Masahisa)	人文社会系研究科・教授	RU-L
高田康成 (TAKADA Yasunari)	EAAシニアフェロー	
高原智史 (TAKAHARA Satoshi)	EAAリサーチ・アシスタント	
高山花子 (TAKAYAMA Hanako)	EAA特任助教 (総合文化研究科)	RU-L
武田将明 (TAKEDA Masaaki)	総合文化研究科・准教授	RU-L
田村正資 (TAMURA Tadashi)	EAA特任研究員 (東洋文化研究所)	RU-P
田村隆 (TAMURA Takashi)	総合文化研究科・准教授	RU-L
田辺明生 (TANABE Akio)	総合文化研究科・教授	RU-H
田中有紀 (TANAKA Yuki)	東洋文化研究所・准教授	RU-P
建部良平 (TATEBE Ryōhei)	EAAリサーチ・アシスタント	
立石はな (TATEISHI Hana)	EAA特任研究員 (総合文化研究科)	
宇野瑞木 (UNO Mizuki)	EAA特任研究員 (東洋文化研究所)	RU-L
若澤佑典 (WAKAZAWA Yusuke)	EAA特任研究員 (総合文化研究科)	RU-P
王欽 (WANG Qin)	EAA特任講師 (総合文化研究科)	RU-P
徐莎莎 (XU Shasha)	EAAリサーチ・アシスタント	
八幡さくら (YAHATA Sakura)	EAA フェロー	
張瀛子 (ZHANG Yingzi)	EAAリサーチ・アシスタント	
趙齊 (ZHAO Qi)	EAA フェロー	

RU-P: 世界哲学と東アジア/RU-H: 世界史と東アジア/RU-L: 世界文学と東アジア/RU-S: 未来社会と環境・健康

EAA刊行物リスト

下記のサイトにて全ページ閲覧可能になっています。
<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/publications/>

	タイトル	内容	ISSN	刊行日
1	EAA Booklet 1 EAA Forum 1	Recent Past & Remote Past	2435-7863	2020.6.10
2	EAA Booklet 2 EAA Dialogue 1	Cheol-Hee Park × Takahiro Nakajima		2020.6.11
3	EAA Booklet 3 EAA Dialogue 2	Bret W.Davis × Takahiro Nakajima		2020.6.18
4	EAA Booklet 4 EAA Dialogue 3	ZAN Tao × HANEDA Masashi		2020.6.20
5	EAA Booklet 5 EAA Dialogue 4	ZAN Tao × Tsuyoshi Ishii		2020.6.30
6	EAA Booklet 6 EAA Dialogue 5	Eddy Dufourmont × Takahiro Nakajima		2020.7.01
7	EAA Booklet 7 EAA Forum 2	座談会●1 世界人間学宣言		2020.8.31
8	EAA Booklet 8 EAA Forum 3	World Kyōyō-Gaku and Future Liberal Arts		2021.3
9	EAA Booklet 9 EAA Forum 4	感染症の哲学		近日発刊予定
10	EAA Booklet 10 EAA Forum 5	座談会●3 アーツの再定義		近日発刊予定
11	EAA Booklet 11 EAA Forum 6	座談会●4 テクノロジー時代における人間の学問		近日発刊予定
12	EAA Booklet 12 EAA Forum 7	感染症と文学		刊行時期未定
13	EAA Booklet 13 EAA Dialogue 6	Yasuo Kobayashi × Takahiro Nakajima		2021.2.01
14	EAA Booklet 14 EAA Forum 8	東アジア音楽思想における和		刊行時期未定
15	EAA Booklet 15 EAA Forum 9	石牟礼道子を読む——世界をひらく／漂浪く		2021.2.25
16	2019年度報告書 のぞみを耕す			2020.6.01
17	EAA Summer Institute 2020 Student Report			2021.1



EAAラジオリスト

<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/media-library/category/radio/>

	放送内容	日付
第1回	ラジオ開始の経緯、余白、荘子の天籟、生命の雑音	2020.5.13
第2回	賈樟柯の映画、川中子先生のバッハの授業	2020.5.20
第3回	『日本を解き放つ』、料理、プリオッシュ	2020.5.27
第4回	自己紹介、神馬征峰先生、国際保健学	2020.6.03
第5回	イーディス・ウォートンのThe Mount	2020.6.10
第6回	『世界哲学史』シリーズ感想、楽な料理	2020.6.17
第7回	ビー・ガン『凱里ブルース』、ミシェル・セール	2020.6.24
第8回	田村さんのクイズ論文、AI、現象学、「星めぐりの歌」	2020.7.01
第9回	年次報告書『のぞみを耕す』、笹	2020.7.08
第10回	文系・理系、東大の男女比、高校の時の話	2020.7.15
第11回	Voicy、少女漫画、日吉で迷子になった話、怖い話	2020.7.22
第12回	海と『辺境』（フロンティア）	2020.7.29
第13回	酷暑、蟬の声、古い『暮らしの手帖』、ピランデルロ	2020.8.05
第14回	酷暑、北欧音楽、クラウディオ・アラウ、家庭教師、雑誌	2020.8.19
第15回	ムー、横浜天文研究会、手紙の速度、駒場の虫の音	2020.8.26
第16回	Forestおじさんの投稿、中国語クラス三斗小屋温泉合宿	2020.9.02
第17回	中島先生も奥那須三斗小屋温泉に参加していた話	2020.9.09
第18回	駒場の少人数授業、フランスの田舎の静けさ	2020.9.16
第19回	ゲスト若澤さんによる「タブッキとオムレツ」回	2020.9.23
第20回	ポストガール料理、リスボン、白菜鍋ビェンロー	2020.9.30
第21回	室蘭やきとり、知里真志保	2020.10.07
第22回	アイスの美しき手仕事展、花見、ロシア	2020.10.14
第23回	ブックトーク、前野さん登場、携帯故障	2020.10.21
第24回	空間、空気、希少価値、1号館の工事、飛行機遅延	2020.10.28
第25回	10分になった経緯、空気はヴァーチャルになるのか	2020.11.04
第26回	舘野泉コンサート、「苦海浄土に寄せる」	2020.11.11
第27回	ウェブサイトリニューアル、村井純、電子メール	2020.11.18
第28回	駒場祭古典ラボ、EAAフランス語表記、中世の自由七学科	2020.11.25
第29回	一高寮歌「藝文の花」、人工知能と文学と言語遊戯	2020.12.02
第30回	101号館映像ワークショップ開始、ホー・ツーニェン	2020.12.09
第31回	世界哲学、学部間の緊張関係、概念の旅	2020.12.16
第32回	年内最終回、一年を振り返って、四月の不思議な桜の話	2020.12.23
第33回	東アジア教養学プログラム生募集、西田幾多郎座談会	2021.1.06
第34回	餃子の話、植物と人間の違い、道元の山水経	2021.1.13
第35回	駒場の木、鳥の声、ジム・ホール、シヤマユエのピアノ	2021.1.20
第36回	ジャズ喫茶、キース・ジャレットの「My Back Pages」	2021.1.27
第37回	ママからの電話、大学のジャズコンサート、コルトレーン	2021.2.03
第38回	桜の開花予想、研究者の国際交流	2021.2.10
第39回	オンライン飲み会、駒場の猫、猫の名前	2021.2.17
第40回	藤木文書、駒場寮食堂外食・定食問題	2021.2.24

EAAメディア関連リスト

<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/media-library/>

日付	内容
2020.4.04	Promotion Clip for EAA, University of Tokyo
2020.4.07	中島隆博先生よりEAA新院長就任にあたって
2020.4.10	第1回 学術フロンティア講義 ガイダンス (石井剛)
2020.4.24	第3回 学術フロンティア講義 人新時代の人間を問う——滅びゆく世界で生きるということ (田辺明生)
2020.5.01	第4回 学術フロンティア講義 世界哲学と東アジア (中島隆博)
2020.5.08	第5回 学術フロンティア講義 小説と人間——Gulliver's Travelsを読む (武田将明)
2020.5.22	第6回 学術フロンティア講義 30年後のための世界史 (羽田正)
2020.5.29	第7回 学術フロンティア講義 脳科学の過去・現在・未来 (四本裕子)
2020.6.05	第8回 学術フロンティア講義 30年後の被災地、そして香港 (張政遠)
2020.6.12	第9回 学術フロンティア講義 医療・介護の未来 (橋本英樹)
2020.6.19	第10回 学術フロンティア講義 宗教的／世俗的ディストピアとユマニズム (伊達聖伸)
2020.6.26	第11回 学術フロンティア講義 「中国」と「世界」：どこにあるのか? (石井剛)
2020.7.03	第12回 学術フロンティア講義 Potentiality and Literature in the Era of Artificial Intelligence (王欽)
2020.7.10	第13回 学術フロンティア講義 中動態と当事者研究：仲間と責任の哲学 (國分功一郎、熊谷晋一郎)
2020.11.14	EAAシンポジウム「東アジア音楽思想における和」 高欲生さんに古琴コンサート・伝帝堯作「神人暢」
2020.12.22	学融合プログラム「東アジア教養学」 【録画】プログラム説明会：2021年度「東アジア教養学」学生募集
2020.12.24	The Telos Press Podcast Qin Wang on the Postwar Japanese Constitution
2021.1.05	The Telos Press Podcast Takahiro Nakajima on Constitutional Problems in Japan
2021.1.09	第1回 EAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」 「遠方において団結する——革命の世紀と中国作家の旅行記」 王璞氏 (米国・ブランドイス大学中国文学文化研究専攻・准教授)
2021.1.20	第2回 EAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」 「新たな抒情」——何其芳『夜歌』における「心境」と「仕事」 姜涛氏 (北京大学中文系准教授)
2021.1.29	第3回 EAA連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」 「風格・文気・体式——如何に散文を読むのか」 倪文尖氏 (華東師範大学中文系准教授)
2021.2.02	EAA YouTube企画 インタビュー・石井剛EAA副院長「コロナ以降のキャンパスのあり方を考える」

RESEARCH UNIT別INDEX

該当頁 活動内容

日付

RU-P: 世界哲学と東アジア World Philosophy from East Asian Perspectives		
103	東京学派ワークショップ 「江湖・無縁・アゴラ——松方冬子『普遍、アゴラ、グローバル・ヒストリー』によせて、もういちど『自由』の在処を探す」	2020.7.15
114	第1回 日中韓オンライン朱子学読書会	2020.8.15
120	EAAオンラインワークショップ「感染症と文学」	2020.8.26
124	羽根次郎『物的中国論』合評会	2020.9.03
137	第1回「東アジア音楽思想と術数」研究会	2020.9.14
140	第2回 日中韓オンライン朱子学読書会	2020.9.19
151	許紀霖『普遍的価値を求め——中国現代思想の新潮流』書評会	2020.10.04
175	第3回 日中韓オンライン朱子学読書会	2020.10.31
191	シンポジウム「東アジア音楽思想における和」	2020.11.14
217	第4回 日中韓オンライン朱子学読書会	2020.12.05
230	ヒューム『自然宗教をめぐる対話』（1779）新訳刊行記念ワークショップ 「18世紀の対話篇を読む／論じる／翻訳する」	2020.12.16
280	国際シンポジウム「朱子学の過去と未来」	2021.2.06
283	EAA Art History Seminar in English	2021.2.08
297	EAAシンポジウム「哲学としての書院」	2021.2.20
305	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第1回 世界哲学史の可能性：中国とヨーロッパを付き合わせる	2021.3.09
313	EAAオンラインシンポジウム「30年後の被災地」	2021.3.10
	第5回 日中韓オンライン朱子学読書会	2021.3.20
	連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」 第2回 世界における日本哲学を再考する	2021.3.25

RU-H: 世界史と東アジア World History from East Asian Perspectives		
224	国際シンポジウム「ライシテから「分離主義」へ——1905年12月9日法問題からみるフランス社会と共和主義」	2020.12.11
240	GSIキャラバン研究プロジェクト公開シンポジウム “Questioning the Idea of a “Small Nation” in East Asian Contexts”	2020.12.20
266	第8回「痛みの研究会」	2021.1.10
	第9回「痛みの研究会」	2021.3.21

該当頁 活動内容 日付

RU-L: 世界文学と東アジア World Literature from East Asian Perspectives		
58	第6回 中国近現代文学研究会	2020.5.02
107	第3回「ジャーナリズム研究会」公開研究会	2020.7.26
141	第4回「ジャーナリズム研究会」公開研究会／国際ワークショップ	2020.9.20
265	連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」 第1回王璞氏講演会「団結於遠方——革命世紀和中国作家的旅行書写」	2021.1.09
273	連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」 第2回 姜涛氏講演会「“新的抒情”——何其芳『夜歌』中的“心境”与“工作”」	2021.1.20
276	連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」 第3回 倪文尖氏講演会「風格・文気・体式——如何着手研読散文」	2021.1.29
317	第5回「ジャーナリズム研究会」公開研究会	2021.3.14

RU-S: 未来社会と環境・健康 East Asian Initiative for Future Society and Health Sciences		
110	EAAウェビナー「コロナ危機と医療・介護政策過程」	2020.7.30
155	IAGS・EAA共催セミナー「コロナ危機と自民党政権」	2020.10.06
170	EAIHN Online Seminar Series (1)	2020.10.28
197	EAA Online Workshop “Identity, History, and Legal Mobilization: Focusing on Japanese War Orphans from China”	2020.11.24
202	EAIHN Online Seminar Series (2)	2020.11.25
234	EAIHN Online Seminar Series (3)	2020.12.16
284	EAIHN Online Seminar Series (4)	2021.2.10
291	EAAオンラインワークショップ「コロナ危機と規制・財政政策」	2021.2.15
	EAA Online Workshop “Identity and Movements”	2021.3.22
	EAIHN Online Seminar Series (5)	2021.3.31

TOPIC別INDEX

該当頁	活動内容	日付
EAA Summer Institute 2020		
130	EAA Summer Institute 2020 Ice-breaking Session	2020.9.06
131	EAA Summer Institute 2020 (Day 1)	2020.9.07
133	EAA Summer Institute 2020 (Day 2)	2020.9.08
EAA 座談会		
36	EAA座談会「World Kyōyō-gaku (世界教養学) and Future Liberal Arts」	2020.4.01
62	EAA座談会「アーツの再定義」	2020.5.15
100	EAA座談会「テクノロジーの時代における人間の学問」	2020.7.14
EAA ブックトーク		
158	第1回 EAAブックトーク	2020.10.14
180	第2回 EAAブックトーク	2020.11.10
247	第3回 EAAブックトーク	2020.12.22
295	第4回 EAAブックトーク	2021.2.17
	第5回 EAAブックトーク	2021.3.24
石牟礼道子		
85	第1回 石牟礼道子を読む会	2020.6.22
95	第2回 石牟礼道子を読む会	2020.7.06
106	第3回 石牟礼道子を読む会	2020.7.20
112	第4回 石牟礼道子を読む会	2020.8.03
115	第5回 石牟礼道子を読む会	2020.8.17
125	EAAオンラインワークショップ「石牟礼道子の世界をひらく」	2020.9.04
138	第6回 石牟礼道子を読む会	2020.9.14
146	第7回 石牟礼道子を読む会	2020.9.28
157	第8回 石牟礼道子を読む会	2020.10.12
167	第9回 石牟礼道子を読む会	2020.10.26
192	EAAオンラインワークショップ「石牟礼道子と世界を漂浪(されく)」	2020.11.21
229	第10回 石牟礼道子を読む会	2020.12.14
244	第11回 石牟礼道子を読む会	2020.12.21
271	第12回 石牟礼道子を読む会	2021.1.18
276	第13回 石牟礼道子を読む会	2021.2.01
293	第14回 石牟礼道子を読む会	2021.2.15

該当頁 活動内容

日付

101号館		
198	第1回 101号館映像制作ワークショップ	2020.11.24
215	第2回 101号館映像制作ワークショップ	2020.12.04
237	第3回 101号館映像制作ワークショップ	2020.12.18
270	第4回 101号館映像制作ワークショップ	2021.1.13
278	第5回 101号館映像制作ワークショップ	2021.2.05
303	第6回 101号館映像制作ワークショップ	2021.2.26
316	第7回 101号館映像制作ワークショップ	2021.3.12
	EAA国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」事前勉強会	2021.2.19
	EAA国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」事前勉強会	2021.3.05
321	EAA国際シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」	2021.3.17
学術フロンティア講義「30年後の世界へ——「世界」と「人間」の未来を共に考える」		
39	第1回 学術フロンティア講義	2020.4.10
41	第2回 学術フロンティア講義	2020.4.17
51	第3回 学術フロンティア講義	2020.4.24
54	第4回 学術フロンティア講義	2020.5.01
59	第5回 学術フロンティア講義	2020.5.08
67	第6回 学術フロンティア講義	2020.5.22
73	第7回 学術フロンティア講義	2020.5.29
75	第8回 学術フロンティア講義	2020.6.05
79	第9回 学術フロンティア講義	2020.6.12
82	第10回 学術フロンティア講義	2020.6.19
86	第11回 学術フロンティア講義	2020.6.26
92	第12回 学術フロンティア講義	2020.7.03
96	第13回 学術フロンティア講義	2020.7.10
華東師範大学批評理論中心 (ICCT-ECNU) との共催		
70	オンラインワークショップ「伝染病と危機時代の文学と思想」	2020.5.25
242	学術シンポジウム「歴史、社会、文学批評：中国現代文学研究の方法及び射程」	2020.12.21
感染症		
43	EAAオンラインワークショップ「感染症の哲学」	2020.4.22
120	EAAオンラインワークショップ「感染症と文学」	2020.8.26
254	EAAオンラインワークショップ「感染症——歴史と物語とのはざままで」	2020.12.26

連続ワークショップ「中国近代文学の方法および射程」		
265	第1回 王璞氏講演会「団結於遠方——革命世紀和中国作家的旅行書写」	2021.1.09
273	第2回 姜涛氏講演会「“新的抒情”——何其芳『夜歌』中的“心境”与“工作”」	2021.1.20
276	第3回 倪文尖氏講演会「風格・文気・体式——如何着手研読散文」	2021.1.29
日中韓オンライン朱子学読書会		
114	第1回 日中韓オンライン朱子学読書会	2020.8.15
140	第2回 日中韓オンライン朱子学読書会	2020.9.19
175	第3回 日中韓オンライン朱子学読書会	2020.10.31
217	第4回 日中韓オンライン朱子学読書会	2020.12.05
280	国際シンポジウム「朱子学の過去と未来」	2021.2.06
	第5回 日中韓オンライン朱子学読書会	2021.3.20
Look東大・EAAデー		
117	「哲学する」ためのレッスン：ダイキンの皆さんと試みる協働ことはじめ	2020.8.26
165	「Look東大・EAAデー」第1回参加記	2020.10.26
178	「Look東大・EAAデー」第2回参加記	2020.11.09
184	「Look東大・EAAデー」第3回参加記	2020.11.13
209	「Look東大・EAAデー」ラップアップセッション	2020.12.01
UTokyo-PKU Joint Course講義		
145	第1回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.9.25
156	第2回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.10.09
160	第3回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.10.16
165	第4回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.10.23
171	第5回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.10.30
177	第6回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.11.06
183	第7回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.11.13
202	第8回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.11.27
216	第9回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.12.04
223	第10回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.12.11
238	第11回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.12.18
251	第12回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2020.12.25
264	第13回 UTokyo-PKU Joint Course 講義	2021.1.08

編集後記

・東京大学東アジア藝文書院（EAA）の2020年度報告書『のぞみを灯す』をここにお届けいたします。暗澹たる COVID-19 パンデミック下で、EAA が、いかにして新しい学問の光を灯そうとしてきたのか。この年次報告書が、わたしたちの試行錯誤をささやかにでも照らす痕跡になっていることを希望いたします。EAA の根っこのアイデアにご関心のある方は、巻頭の座談会からどうぞお読みください。スタッフ総出でこの一年を振り返っております。表紙のイラストは張政遠先生のご縁で山口潔子先生にお願いしたものです。2020 年度から本格始動した教育プログラムの拠点、駒場オフィスの入居する 101 号館を淡く優しい水彩画に仕上げていただきました。このイラストと連動するように、立石はなさん撮影の駒場の自然の写真を随所に取り込みました。果たして、どのように、先の見えない世界で既成の概念にとらわれず、しかし、それでもなお、古きものを尊びながら、新しく自由に思考してゆけるのか。今後、わたしたちの「のぞみ」がどのように開花してゆくのか、みなさんの「のぞみ」とどのように同期してゆくのか、一年後を愉しみにお待ちしております。厳しい時代に、東アジアから新しいリベラル・アーツを構築しようとチャレンジしつづけるわたしたちを惜しみなく支援くださっているダイキン工業の皆さまに心から感謝いたします。（花）

・この報告書に使われている素材写真のほとんどは、駒場キャンパスで撮影されたものです。駒場で秋を過ごしたことがある方であれば、银杏の写真にはあの「匂い」が感じられるのではないのでしょうか。昨年度は、対面で行われる活動が制限され、報告書に掲載される活動写真も Zoom 画面のスクショ画像が多くなる中、デザインフォリオの佐々木由美さんが駒場の四季で報告書を彩ってくださいました。また、石井剛先生によって「歳時記」という、年次報告書にはあまり使われることのない名がつけられました。この一年は、どなたにとっても「旅」から遠ざかることを余儀なくされた年であったと思いますが、私が個人的に撮りためていた駒場の四季の写真たちは、思いがけずこのようなカタチで陽の目を見ることになりました。そして今、私の手元を離れ、この報告書を読んでくださる方のもとに旅立とうとしています。この報告書が新たな出逢いと旅が始まるご縁になりますように。私たちが試行錯誤しながら過ごした一年を追体験していただきながら、楽しいひとときを過ごしていただければ幸いです。来年度は追体験ではなく、共時体験する仲間になってくださることを心から願っております。最後になりましたが、「やりすぎ」、「凝りすぎ」と言いながらも、自由に編集を任せてくださった石井先生。座談会をはじめ、わくわくするアイデアをたくさん授けてくださり、どうもありがとうございました。（はな）

編集委員 高山花子（主幹） 立石はな（主幹）

石井剛 張政遠 田中有紀 具裕珍 前野清太郎

編集協力 宇野瑞木 崎濱紗奈 田村正資 建部良平 二井彬緒 胡藤 徐莎莎

表紙イラスト 山口潔子

のぞみを灯す

—東京大学東アジア藝文書院 2020 年度報告書

発行日 2021 年 4 月 26 日
発行者 東京大学東アジア藝文書院
制作協力 一般財団法人東京大学出版会
デザイン 株式会社 designfolio
印刷・製本 株式会社真興社

東京大学東アジア
藝文書院